

桃陰ラガー半世紀の記





汗と涙の栄光

桃陰ラガージャージー



天中・天高ジャージー

桃陰ラグークラブの50年史発刊を祝う

人格練成への道程

桃陰ラグークラブ

会 長 阿 部 幸 作



英国でラグビーが生まれて、それが現在のよう形に制定されたのが1850年ごろであるといわれているから、わが桃陰ラグーも世界のラグビー史と共に約その半分以上を過ごして来たということになる。

若き日の理想は、常に高く、潔く、美しい。しかも年久しくこれを抱いてなお離れざる者こそ、わが桃陰ラグー達でなければならぬ。ラグビーは、主義や思想の上に育つものではない。ラグビーは訓練と反省とたゆまざる不屈の精神によって培われる悟道である。

従ってわが桃陰ラグーは、治世から乱世、末世の様相をすら呈するようなこの50年を生きて来た。またこれからいよいよこの道を極めるためにも前進を続けなければならぬ。

今の世の中は、主義や思想や多数を為して行われることならば如何なる事にもあれ、それは善事美事なるかの如く認容される傾きがあるが、ラグビーの精神はそれ等とは本質的に異なる。人類歴史ありてこの方、その進歩発展向上に益したる程の者にして、一の些々たる主義に^{きよくせき}跼蹐したる者の有る例を私は聞かぬ。

よってラグビーはあくまでも、もっと高い見地から天に憑って判下する底の人格練成の基盤となさねばならぬ。この小冊子が出来上がったのも、その一つの道標をなすものとして慶賀に堪えぬ。

50年史発刊に寄せて

日本ラグビーフットボール協会

会 長 椎 名 時四郎

大阪府立天王寺中学校がラグビー部を創設せられて50余年になります。その間、全国中等学校大会、高等学校大会に度々参加して輝かしい戦績を残されたことに對し深甚なる敬意を表します。

貴校は我が国ラグビー界に多数の名プレーヤーのみならず協会役員、監督、コーチとして一流の人材を多く輩出せられ日本ラグビーの発展のために多大の貢献をされたことに對し協会として感謝の意を表するものであります。

とりわけ昭和20年9月23日、京都において戦後最初のラグビー試合を敢行し、我国戦後ラグビーの発展の端緒を開くに当たって、貴校OBが中心として活躍されたことを高く評価したいと存じます。

近年の天王寺高等学校の現役チームは必しも赫々たる戦果を示しておられませんが、遠からず往年の名声に負けない好チームを再現されるものと期待しております。貴校OB、現役におかれては、なお一層相協力して正しい良いラグビーによって、日本ラグビー界の発展に貢献されることを望んでやみません。

桃陰ラガーの伝統

関西ラグビーフットボール協会

会 長 進 藤 次 郎

桃陰ラガー50周年を迎えられましたことを心からお慶^{よろこ}び申し上げます。私も青春をラグビーに賭けたことから、桃陰の先輩各位の中に数多くの友人を得ることができましたことを、人生の幸せと考えている一人であります。天王寺中学にラグビー部が誕生したのは大正11年とうかがっておりますが、当時、阿部幸作さんあたりが、何でもサッカーの好きな連中との間でラグビー部を「つくる」「つくらせない」で大いにやりあわれたあげくラグビー部創立の成否をサッカーの試合にかけて一戦の結果、見事にサッカー派を破ったのが

始まりとか。現在、白髪温顔の阿部会長さんの往時がしのばれて愉快至極であります。

いらい星移り、歳月を重ねて幾多の名プレーヤーを輩出され、3度^にわたる全国制覇の偉業を果たされ、天王寺において日本のジュニアラグビーを語り得ないまでの発展を遂げられました。

このような伝統と偉業は、よき先輩と真摯な後輩との変わらない結び付きがあってはじめて成就するものと、うらやましくも敬服の外はありません。

今後とも隆盛発展の途を進まれますようお祈り申し上げます。

大阪の誇り

大阪府ラグビーフットボール協会
副会長 中 島 直 己

天王寺高等学校ラグビー部創設50年を記念し、当校の輝かしい活躍の跡を記録にとどめる記念史を発刊されますことは、誠に時宜を得たことでありますと共に、この記録は単に当校の糧であるのみならず日本ラグビーの一断面を描くものになるであろうと思います。

本校のラグビーの始まりは大正11年ということですが、現大阪府ラグビー協会の会長であります阿部幸作氏を中心に、幾多のエピソードのうちに生まれたと聞いております。当時中学校では大学の影響などがあって京都で一部の学校がやっていた位で大阪では皆無の状態でありました。そのような中であの楯門に魅せられ、持って走れる、タックルができるという当時としては相当乱暴とも思われたであろうラグビーにいち早く食いついた根性……これこそ桃陰全体にめんめんと続いて今なお残る魂ではないかと思います。

以来50年、半世紀の長きにわたって現役、OB一体となって真摯な努力を重ねられ、戦前、戦後を通じ幾多の大会に輝かしい歴史を残され、名実共に名門として今日までたゆまぬ活躍を続けられておりますことは、大阪におけるラグビーの大きな誇りであります。これら現役の活躍もさることながら、ラグビー界にとって特筆すべきはOBの皆さんの活躍でありましょう。大学あるいは社会人チーム

のプレーヤーとして、更に全日本級の名プレーヤーとして数多くの方々が活躍され日本ラグビーの技と力の発展の中心的役割を果たしてこられましたことは、ただただ感嘆のほかありません。更にこのことのみならず日本ラグビー界の発展に寄与された大きな力がありました。

今日、日本のラグビーも世界的水準に近づきつつありますが、日本のラグビーに今日をもたらした力の大きな部分の中に当校OBの数多くの方々の身をしていて日本ラグビー発展のための運営に傾注された姿があったことであります。文字通り、名を連ねるにいとまのない位の方々が大阪の、関西の、日本のラグビーのリーダーとして尽力されたことであります。本校の活躍の歴史をつづることは即日本ラグビー発展の縮図であるといえるのでありまして、誠に意義深いと思います。

本校のラグビーのもう一つの特色は中学校、高等学校におけるスポーツのあり方に真面目を保ってきておられるということでもあります。すなわち学習とスポーツの両立という最も望ましい姿を見事果たしてこられたことであり、これが本校のラグビーをして今日あらしめたのだと思います。

本校のラグビーが今後とも高等学校における正しいスポーツ活動のよき規範として、ますます発展されますことを願うものです。

古豪・天王寺の栄光

大阪府ラグビーフットボール協会

副会長 長谷川 茂 雄

名門天王寺高校ラグビー部は創設50年になるとのこと、誠にめでたい事とお喜び申し上げます。

そもそも小生が天王寺という名称を意識したのは昭和4年、小生が徳島県の片田舎にある脇町中学校でラグビーを始めたころからであります。その後、脇町中学校は昭和8年から四国代表として、南甲子園あるいは西宮における全国大会に度々出場して天理高校、神戸高校とはよく対戦しましたが、ついにその間天王寺とは一度も対

戦の機会がありませんでした。

続いて小生の事ばかりのべて失礼ですが、昭和17年、小生は日本ラグビー史（協会編）の中の脇町物語に書いてある通りの理由で、淀川工業高校に転任して参りました。もちろん淀川工高にはラグビー部はありませんでした。終戦後、早速ラグビー部を設立しました。当時、やはり夢は大阪代表となって全国大会に出場する事でありました。そのためには名門北野高、天王寺高に勝つ事でありました。しかし新興チームが古豪に追いつくことは容易なことではありません。

ところが案外早くその機会がやって来ました。それはご承知のように戦争のため球技全般一時中止のやむなきに至っていました。

従って終戦後、各チームが練習を開始した時には、この戦争の空白により古きも新しきも皆同じ条件のもとに同時に同じ一線から出発する結果になったからであります。しかもまだ食糧事情の悪かった当時、比較的食糧に恵まれた四条畷高、淀川工高は有利な立場にありました。たちまち上位に浮かび上がったのであります。しかし優勝となると、その壁は厚く、決勝戦となると天王寺に敗れ、あるいは四条畷にたたかれ、なかなか優勝出来なかったのであります。7年目にしてやっと初優勝できたのであります。このころから天王寺高、四条畷高、淀川工高の三つどもえ戦が始まったのであります。

それから約30年、時代の波は避けがたくお互に強い年もあれば弱い年もありました。多少の浮き沈みは致し方がないと思います。しかし栄枯盛衰は世のならいとはいっても、かつての優秀チームが今はみじめな弱小チームに脱落してしまったものも数あります。その中であって天王寺高は依然としてA級にとどまり、しかも数えてみると大阪地区において終戦後だけでも最多出場校であります。更にその間に全国制覇の偉業を成し遂げられた事、これはひとえに部員のたゆまぬ努力、先輩の熱意ある指導、学校の声援、父兄の理解、これらの結集の結果と思います。いわゆる、これが天王寺の栄えある伝統だと思います。おわりに、この伝統をたたえると共に、ますますご発展あらんことを祈ります。

ラグビーの記念塔に

大阪府高等学校体育連盟

ラグビー専門委員長 土 岐 一 郎

大阪府立天王寺高校ラグビー部が創部50周年の記念事業の一つとして記念史を発刊されることは誠に意義深いことであり、心よりお慶び申し上げます。

貴部が大阪府下旧制中学校に初めてラグビーフットボール競技の門戸を開いて以来、半世紀にわたる長い歴史の中で常に好成績を収められ、ラグビー技術のみならずラグビーマナーが府下中学校、高校の範として活動されたことは、われわれラグビー関係者の認知するところであります。また貴部卒業の先輩各位が全国的に活躍され、ラグビーフットボール競技の普及、振興に大いに貢献されていることは全国のラグビーファンの知るところであります。

記念誌には創部以来50年の歴史の中に輝かしい勝利の戦跡や選手諸君の名前、活躍ぶり、また笑いや悲しみに富んだエピソードなどが盛り込まれると思います。その立派な記録の陰に貴部を熱心に指導されて来られた学校の歴代の部長、顧問の先生方、いついかなる時も指導後援体制を確立されて応援されてこられた諸先輩の方々、また戦前から現在まで学業とラグビー活動の両立に理解を示され、子弟を励ましてこられたPTAの父母の方々など銘記してもらいたいと思います。貴部の記念史を大阪府下中学校、高校のラグビーフットボール競技の指導者が、古い記録をたどり今後のラグビーフットボール競技発展の資料とされることを望み、大阪府立天王寺高校ラグビー部が更に飛躍されんことを希望します。

第1回定期戦に思う

六稜ラグークラブ

副会長 伊 藤 次 郎

すでに古稀に近くなった私が、今もなお元気で若いものに負けないファイトを燃やして社会の第一線で活躍できるのは、若い時代に

ラグビーを通してひたすら心身を練磨し、大学を出てからも35歳まで全関東OB代表としてゲームに出場したり、その後はレフェリーとして数多くのゲームに笛を吹いたりなどして、ラグビーに精進した結果、いわゆるラグビー精神を身をもって会得できたことと、同時にがん健な体軀の持ち主となったお陰と、心からラグビーに感謝して生きている一人であり、現在でもだれにも負けない情熱をもって、ラグビーの正しい発展に努力しているものであります。

北野のラグビー部創設に加わったものとして、懐かしく思い出されるのは、50数年前の天王寺と北野の第1回定期戦であります。

当時は部員も少なく、練習よりもむしろ部員を集めるのに苦心したのでありますが、それでもラグビーをやってみたいというものだけの集まりだったので、現在、国鉄大阪駅の貨物操車場に変わりはてしているコンクリートのように硬かった母校のグラウンドで、生傷にもひるまず夕方遅くまで練習に励み、雨が降れば屋内の柔道部の畳を利用して、サーカス（当時のユニホームは赤と白のダンダラでした）とひやかされながらも、フッキング、パス、ドリブル、タックル、セービングなどの基礎的な練習をコツコツと続けたものです。

そのころ大阪府下でラグビー部のあった上級学校としては、強すぎて相手にはしてもらえなかった大阪高商の他は、北畠にあった大阪高等学校と創設したばかりで、失礼ないい方ですが、恰好の相手だった関西大学だけでした。

北野が上級学校の胸を借りて練習ゲームをやったのは、なんとしても宿敵天王寺をやっつけたい一心からで、負けるのを覚悟でしばしば挑戦したものです。

忘れもしない大正13年1月19日に、北野のグラウンドにおいて、真島さんのレフェリーのもとに開かれた第1回の天王寺と北野のラグビー定期戦は最初から最後まで天王寺が優勢で、北野は終始防戦に追われ、ついに14対3のスコアで敗北に終わってしまいました。

このゲームに出場した北野のメンバーの大半はすでに物故し、私の知っているかぎり現在では岡田、横山（水谷と改姓）住井、佐多と私の5人という寂しい姿になってしまったことも、50年という歳

月が流れたことを物語っているといえるでしょう。

北野としては第1回の定期戦に備えて部員全員があらゆる障害を乗り越えてチーム作りに専念し、待ちに待った定期戦には全員が一丸となってベストを尽くして戦ったという満足感があり、敗れたことは、確かにくやしかったのですが、顧りみていささかも悔いるところのないゲーム内容だったことが思い出されます。

こうして50数年前の大正時代に発足した天王寺と北野のラグビー定期戦が現在もなお続けられ、大阪府下における最古の定期戦として両校の生徒が全校をあげて声援をおくっているということを知り、当時の私たちラグビー愛好者の小さな努力が立派に実ったのだと思うと、私にとってはこの上ない喜びであります。同時にすでに創立50周年を迎えた天王寺と北野の両校の歴史あるラグビー定期戦が今後とも末長く続けられるよう陰ながら祈るものであります。

全校あげての応援合戦

天理高等学校ラグビーOB

会 長 杉 山 善 清

天王寺高等学校ラグビー部50年史を発行されるに当たり天理高等学校ラグビー部と致しまして衷心よりお祝とお礼を申し上げたいと存じます。

天理ラグビー創草期時代に天王寺中学校は北野中学校、同志社中学校と並び中学ラグビー界の重鎮として君臨し、我々天理は最大目標を置いて今日の天理ラグビーが誕生したのであります。終戦後はともかく天理ラグビーが大正14年（1925年）に二代真柱の御声がかかりで創設せられてよりの10年間の記録を調べてみますと、

大正14年10月、天王寺中学2部対天理中学は6対3で天理が敗れているのが最初で、その年12月全国ラグビー蹴球大会大阪予選大会では36対0で大敗している記録が残っております。その後の10年間天王寺中学と天理中学とは昭和10年までは天王寺7勝、天理5勝1引き分けの記録です。天王寺の記録と違っていたらお許し願います。

特筆すべきは昭和5、6年ごろより両校のラグビー戦は全校あげ

ての応援で花園ラグビー場において球場を二分して勝っても敗れても華々しく応援合戦を繰り広げ、当時の在校生であった者は応援歌の練習をして花園ラグビー場に出かけたものです。その応援にまつわる天理の話をちょっと書いてみますと、当時天理の応援歌（現在の天理ラグビー部々歌）が出来ておりまして、天理でもこんな部歌を持っているのはラグビー部だけではありますが、天理が初めて甲子園の全国ラグビー蹴球選手権大会に出場して以後、増野、土佐両先輩により作詞されたその原歌の一節に「若き血燃ゆる男児天中ラグビー」という部分がありました。ところが当時の天王寺中学との試合ごとに応援合戦をしていますと、両校とも天中ががんばれの声援が飛び出し具合が悪い。そこで天理では昭和8年以降に天中ラグビーを天理ラグビーに改正して歌っていたようです。

この事を知っている人も今は少ないのでありますが、天王寺といわれますと、すぐ私の脳裏にこの事が浮かんでまいりまして、いかに当時天王寺中学が強力であり、天理のよきライバルであったかがわかります。

天王寺50年史を発行されるに当たり、天王寺中学時代の古い先輩は一人残らず思い出される事でしょう。なお今日のラグビー隆盛をきたすまでには多くの先輩諸氏の努力があってこそその賜と存じ、天王寺高等学校ラグビー部のますますのご発展をお祈り致し天王寺先輩諸氏に心よりお祝いとお礼を申し上げます。

伝統の力ひしひし

関西学院大学OB

砂 原 義 彦

創立50周年おめでとうございます。半世紀にわたりラグビー界に数々の功績を残されました事は草分け時代の超OBを始め、諸先輩並びに現役諸君のいつに変わらぬ一致団結のご努力の賜と存じ上げます。また50周年史発刊に対して巻頭辞の依頼を受けました事、非常な喜びと思っております。早いもので昭和30年4月天王寺高卒の田中(啓)、福本、白神兄と関西学院大学ラグビー部に新入部員とし

て同じカマの飯を食べてより20年の歳月が過ぎました。

故青井（阪大）宝田（早大）奥村（府大）小西（市大）ら，全国大会に出場された同学年の諸兄とも久しく知人になり得たのも上記三兄とのつながりからくるもので，現役時代には天王寺高のグラウンドにも出かけ川口（慶大）黒野（早大）田中宏（関学）らの諸兄ともよくラグビーを致しました。

関学大時代は33年，34年と西村祐一氏（天王寺，関学）の監督のもとでラグビーを教えられましたのも，ひと昔もふた昔も前の事になりました。卒業後 K・Y・R・C に入り関学卒業の桃陰ラガーの人たちはいうに及ばず，岡氏（前全日本監督）ら，他大学の桃陰ラガーの人々との交際は広くなり，関学高等部（小生卒業）にはない伝統の力をひしひしと身を感じた次第であります。

その時期に関学高の監督になり部員の強化には何がよい？ 技術並びに精神をとり入れるためにも是非とも天王寺高との合同練習，合同合宿をと考え，宇野監督にご無理をお願いして昭和40年8月，矢野主将（のちの関学大マネジャー）の時代に菅平にて天王寺高・徳島市高・高等部と3校で7日間の合宿を致しました。その成果は如実に表れ，その年の12月全国大会兵庫予選で宿敵報徳学園に6対5と劇的な勝利で全国大会初出場の栄誉を勝ちとる事が出来ましたのは，合宿において学校を超えてご指導下さいました諸先輩のご協力によるものであると存じます。

翌年は徳島市高，そして昭和42年には得能（慶大）前田（京大）君を擁した天王寺高が全国大会出場と，3年連続合同合宿をしたチームが全国大会に出場するという事実は，非常に有意義な合宿であったと思っております。翌年より徳島市高は参加せず，天王寺高・高等部の合同合宿は続き，その間，天王寺高は榎谷君（現慶大）の主将時に全国大会出場を果たされましたが，反面，昭和48年，松野君の事故で中断という事態が起きましたことは非常に残念に思うと共に，反省しなければならない点が多々あるように思います。

あの折，いろいろお世話下さいました村田先生，関係諸氏にあらためてお礼申し上げる次第です。現在，巖杯，阿部杯と桃陰ラガー

ゴルフには準会員として参加させていただいており桃陰の皆様との縁は続いておりますが、まだまだ若輩者であります。今後ともよろしくご指導，ご友好の程をお願い申し上げます。最後に桃陰ラグー・天王寺高のますますのご発展をお祈り致します。

好 敵 手

大阪府教育委員会

林 田 和 喜

四条畷高校に新米教師でやって来たのが昭和29年4月，1年勤めてまた上京するつものの腰掛け気分からラグビーに熱中して，いつの間にか20年以上になってしまった。そして四条畷高校を転勤（昭和47年）した今も相変わらずラグビーとは縁が切れないどころか，ますます深みにはまろうとしている。今さら不満をいってはいけないし，むしろ多くの知人を得たことに感謝しなければならない。

ところでなぜ私がこれほどラグビーに打ち込むようになったのか（自分では打ち込んでいるつもりなので）よく考えてみると，どうも天王寺高校ラグビー部の影響も大きいようだ。

このたび天王寺高校ラグビー部創立50周年の記念史発行に際して，私の尊敬する村田大先輩から「お前いいたいことがあるなら一言いってみろ」とのありがたいご指名があったので，貴重な紙面を汚させていただき，タイガーユニホームに対する怨しゅうを克服して，祝辞にさせていただきたい。

それは今も忘れない昭和29年の就職したシーズンだった。わが畷は，少ないメンバーではあったが良くがんばった。しかし，結果は国体・全国大会とも予選で天王寺高校に敗れた。天高にはたしか宝田君，青井君がハーフ団だったと記憶している。天高の速いバックラインのパスに振り回されて，2ゴールぐらいの差で負けた（全国大会予選決勝）。もう少し差があればあきらめられたし，また，天高が全国大会であっさり敗れた（2回戦？）のも面白くなかった。

「オレならもう少し」の生意気な気持ちが出てきて，もう1年畷をみれば全国大会に行けるのではないかと，ずい分と思案したことが

あった（寒いとき夜行列車で上京して主任教授に相談したことがやけに記憶がある）.今考えてみると1年間語学（独語）を勉強する約束だったが、9月のシーズンから全然やっていなかったのが大きな理由なのに、どうもラグビーを利用した感もある。

そんなこんなで、2年目になったのだが、結局この年が私に対してラグビーに精魂を傾けさせる動機になったようだ。あの年の天高のキャプテンは、確か田中君だったと思う。暇はこの年も予選の決勝で、国体も全国大会も天高に同点引き分け抽選で敗れた。

ラグビーの約束事のことで、同点なのだから負けてはいないといっても、抽選の瞬間のいやな気分、負けた当事者の気持ちはあまりにも強烈だった。特に同一人物が1年間に2回、相手チームも同じであれば、2回とも決勝で第三者は「くじ運のないやつさ」で済まされても、その日のために努力した選手たちの事を思うと、若い私は泣けて仕方なかった。あれ以来どこのチームの試合でも何とか抽選にならないよう気になって仕方ない。暇の当時の主将谷口君は、あのくやしさを暇を強くする事で晴らすべく、その後永年にわたって現役の指導に尽力し、昭和33年～40年ごろの暇のチームの隆盛に大きな功績を残している。

あれ以来、私も一心不乱といえばオーバーな表現だが、何とか天王寺を破りたい一念でがんばったものだ。しかし31年まで3年間、1回も勝てなかった。控え目に見ても天王寺高に勝てると思われたチームも負けた。ジnkスというのか、淀川工には暇は勝てるのに天高には負ける。その淀川が天高には勝つ。何か伝統の重みを感じたものだった。今反省すると、戦法的にミスもあったが……。

とにかく天王寺を破るために利用出来るよい事は最大限利用した。生徒会に働きかけて応援団をくり出し、天高戦にはバスを4～5台動員して花園のスタンドを埋めた事もなつかしい。天高も負けじと応援団を繰り出したが、応援は暇が勝っていたと自負している。32年度は幸いにも大阪代表が2チームとなり、天高とサイドが分かれた事もあり、暇としては9年振りに3回目の全国大会出場が成った。あの年、暇は全国大会準決勝まで勝ち進んだ。しかも33年

度には天王寺高を決勝戦で破ることができ、天王寺コンプレックスもなくなり、以来在職中計7回の全国大会出場（1回戦敗退は2回のみ、ほとんどベスト4や8になっているはず）5回の国体出場ができた。

しかし、いつの間にか天王寺高が弱くなり、暇も他校に問題にされなくなって来た。寂しい限りだ。

47年に暇を去り、仕事上、現在チームは持っていないが、あの激しい闘志、研究心、努力、あれがお互のチーム力を向上させ、よきラガーを育てたのではないか。

現在、暇はさっぱりだが、天王寺は相変わらず伝統のプレーが残っている。天高生になった以上、天高の伝統は受けつぎ、生かさなければならぬ。多くの立派なOBを持ち、日本のラグビーの指導者を生んでいる天高ラグビーの生徒諸君の一層の努力と精進を心から期待すると共に、桃陰ラガーのますますのご隆盛を心から祈願いたす次第である。

100年目の栄光へ

初代会長 故井上二郎夫人

井 上 芳 子

主人が亡くなりましてはや26年の歳月がたちました。今年は天王寺高校ラグビー部の創立50年のおめでたい年をお迎えになられましたよし、心よりお祝い申し上げます。

天王寺高校ラグビー部も50年の間には、太平洋戦争もあり、戦前戦後の変遷を経られ、学校も中学が高校となりますなど、皆々様のなみなみならぬご苦勞のすえ50年のお祝いを遊ばされましたこと、亡き主人も彼岸にて旧天王寺中学の先輩の方々と、どんなにか喜んでおります事かと、私までうれしく衷心よりお祝い申し上げます。何か逸話でもとの仰せではございますが、古い古い昔の事にて思い出も日増しに薄らいでまいりました。いつごろでしたか、拙宅で何かの映画を写され、ラグビー部の生徒さんたちがカバンをかけて多勢いらして下さいました事とか、また寒い寒いグラウンドで「井上

二郎盃」をお渡し致しました事など、ふと思い出したり致します。

とにかく主人は、一生ほんとうに亡くなります寸前まで、土曜日ともなりますと、まるで小学生が遠足に行く前日の様にクツをカバンにつめまして上ぎげんでおりました。本当にラグビーに生きた人だったと思っております。余談ですが亡くなります前、昭和23、24年ごろでございましょうか、ラグビーを小学生の方々にもやって頂きたいと申しまして、天中ラグビー部の後輩に当たられる中川一三様にお力添え頂き、私どもの子供が通っておりました近くの帝塚山学院の小学生の方々と、自分も一緒になって走っておりました。ユニホームを着て、小さい方たちに「ラグビーのおじさん」といわれ得意になっておりました。

亡くなりましたころ小学生同士の試合も出来るようになられ、まだまだ日の浅い学院小学部ラグビー部が、ドンドン勝ち抜いて主人の初7日、27日と1週間ごとに仏前にお花を供えられ、報告に皆様そろってお立ち寄り頂きましたこと、忘れられない思い出でございます。

せっかく何か書くようにと仰せ頂きましたのに、とりとめのない事で申しわけございません。どうぞ50年はおろか100年も200年も榮譽ある天王寺高校ラグビー部のお栄えを心より祈っております。

輝く歴史を後輩に

大阪府立天王寺高等学校

校長 明石立身

桃陰ラグークラブの50周年記念史編纂計画を心よりお喜び申し上げます。天中、天高の歴史の中に、また卒業生の魂の中にラグビーというものがいかに多く融け込んでいるかは世人が天中といえばラグビーというイメージを持っていたことや、全国どこへ行ってもラグビーの出来る卒業生がいたように思えることから明らかなですが、特に全国優勝を始めとしその時期、時期に数々の成果を挙げられ現にこのラグークラブに属しておられる諸氏には昔活躍されたラグビー部のことが懐かしいことでしょうし、天高ラグビー部の

ことも気になることでありましょう。

私も高校時代にラグビーの選手生活を送った者だけに、桃陰会館に足を運ぶごとに、あの陳列品の中のラグビーに関する数多くのものが特に私の目をひき、青春時代が彷彿^{ほうふつ}としてよみがえり血の沸き立つ思いがするのであります。今、記念史が桃陰ラグー諸氏の手に持たれるとき、このような記事や写真は直接自分達が経験された歴史の記録だけに、私が間接的に感激することとは比較にならない測り知れない意義があろうかと存じます。

ラグビーの歴史は1823年11月のある日、ラグビー校の生徒ウィリアム・エリス少年が校内で行われたフットボール試合で、突然ボールを抱えて相手側のゴール目がけて走り出したのがラグビーの起源である、といわれております。エリス少年のプレーはルールに反してはいましたが、思わずボールを手にして疾走した彼の敢闘精神が高く評価され、このひとりの少年の偶然のプレーが多くの人びとの共感を呼び語り草になりました。それから次第にラグビーのルールが確立されただけに、ラグビーの中には、献身、奉仕、忍耐、執念等いろいろの美德が含まれてはおりますが、私には何ととっても男の闘争本能をかき立てるこのスポーツに魅せられました。またそれによって培われた体力とファイトと瞬間、瞬間での決断力は人生経験のうえに何かと役立って来たように思われます。

一方、近々 150 年のラグビーの歴史ですら、ボールが楕円型になったのはいつからか、またどういう理由によったのかは現在でも定説がないと聞きます。本校のラグビー部も50年以上の歴史を経たことになる、今にしてははっきりと銘記して後に伝えねば将来に悔いを残すことになりましょうし、この輝く歴史、血と汗の歴史が後輩に受け継がれる意味からも、この記念史が同窓会館のどこかに所在されることは、学校としても誠に有り難いのであります。時節がら限定された部数の記念史編纂は経費その他の点で想像以上のご苦勞がおありであったかと存じますが、ここにあらためて感謝の意を表し、ごあいさつといたします。

目 次

桃陰ラグークラブの50年史発刊を祝う

人格練成への道程 桃陰ラグークラブ会長 阿部 幸作
50年史発刊に寄せて 日本ラグビーフットボール協会会長 椎名 時四郎
桃陰ラグーの伝統 関西ラグビーフットボール協会会長 進藤 次郎
大阪の誇り 大阪府ラグビーフットボール協会会長 中島 直己
古豪・天王寺の栄光 大阪府ラグビーフットボール協会副会長 長谷川 茂雄
ラグビーの記念塔に 大阪府高等学校体育連盟ラグビー専門委員長 土岐 一郎
第1回定期戦に思う 六稜ラグークラブ副会長 伊藤 次郎
全校あげての応援合戦 天理高等学校ラグビーOB会長 杉山 善清
伝統の力ひしひし 関西学院大学OB 砂原 義彦
好敵手 大阪府教育委員会 林田 昭喜
100年目の栄光へ 初代会長故井上二郎夫人 井上 芳子
輝く歴史を後輩に 大阪府立天王寺高等学校校長 明石 立身

桃陰ラグー半世紀 ————— 1

部誌にみる桃陰ラグークラブの生い立ち ————— 19

桃陰50年のわだち —年度別写真記録— 99

憶い出の記 ————— 197

西野 綱三(23).....	199	杉本 彰(28).....	211
阿部 幸作(25).....	200	足立 卓夫(28).....	214
松川 秀男(25).....	207	奥田 致一(31).....	217
谷口 敏夫(26).....	209	山東(荒賀)喜樹(31).....	227

神阪 健夫(31).....	228	宇野 憲治(46).....	291
藤野 重郎(31).....	228	入貝 五郎(47).....	300
石田謙次郎(31).....	231	谷沢 龍一(47).....	301
田中 健三(32).....	231	田中 宏(47).....	302
正野 虎雄(33).....	233	古沢 啓三(48).....	307
浜口 隆(33).....	234	岡 仁詩(49).....	308
中川 一三(33).....	235	西川 義行(49).....	310
北條 誠司(34).....	239	高岡 昭(50・高1).....	312
加藤 清(35).....	242	高岡 昭(50・高1).....	317
棗田 信夫(35).....	247	野尻 庄蔵(50・高1).....	318
竹内 弘(36).....	248	和田 良二(50・高1).....	321
大橋 甫清(良太郎)(37).....	249	片上 逸麿(高2).....	321
高井 正一(38).....	250	岩田 由雄(高2).....	323
小西 信二(39).....	252	青井 達也(高3).....	324
田中 進(39).....	254	竹尾 靖造(高3).....	328
西原 篤介(40).....	255	竹尾 靖造(高3).....	329
中西 一雄(41).....	256	久保 正治(高3).....	330
鹿子木 聡(41).....	259	真鍋 正稔(高5).....	333
武田 基(41).....	261	米沢(吉村)弓雄(高6).....	334
柴垣 志郎(42).....	262	松村 竜男(高6).....	335
村田 保男(42).....	263	松宮 侑(高6).....	335
由利 和久(42).....	266	田中 啓一(高7).....	338
大国 文夫(43).....	269	川口 治雄(高8).....	340
白江甲子夫(44).....	274	阿部 浩三(高8).....	342
柴垣 復生(45).....	275	大脇 成裕(高8).....	343
若山 克己(45).....	277	黒野 暁祥(高9).....	345
浅岡 隆(45).....	282	松岡 賢治(高9).....	347
伊藤 康夫(45).....	284	田中 宏二(高10).....	348
伊藤 寿夫(46).....	287	三島 忠一(高10).....	348
三宅(北江)哲夫(46).....	289	松下 忠男(高11).....	350
野口 治郎(46).....	290	伊藤 和夫(高12).....	351

清水 則行(高12).....	354	吉村 公男(高19).....	359
松井淳太郎(高13).....	356	辻野 雅三(高20).....	360
石田 恒彦(高14).....	356	吉川 史彦(高22).....	362
佐々木慎太郎(高15).....	357	柴垣元太郎(高23).....	364
堺 徹夫(高17).....	358	榊谷 博明(高24).....	366
橋本 優也(高18).....	358	吉岡 則行(高27).....	368

50年の足跡	369
年度別戦績記録	371
桃陰ラガーの年表	434
校歌・部歌・応援歌	446

■中扉イラスト 長友啓典(高10) ■文中イラスト 大国丈夫(43)

●桃陰ラガー半世紀



部誌にみる桃陰ラグークラブの生い立ち

天中ラグビー部から桃陰クラブ誕生に至る歴史の流れと経緯を、昭和6年から昭和10年にかけて発刊された「ラグビー部誌」などを抜粋しご紹介します。当時の状況や時代の背景、そして寄稿者のニュアンスを損わないため、原文のまま掲載します。なお出典は文の最初に記してあります。

天中ラグビー部誌——創刊号

序にかへて

平井 宏

ラグビー界の権威井上、巖、三好、氏等の天中先輩の賛同を得まして、新らしく生まれました天中O・Bクラブの主旨とでも云ふべきものをも一度会員諸兄に詳しくこの部誌を通じて申して見ませう。

ラグビーを一度でもやつた人は必ずも一度やつて見たいと云ふ氣と天中を卒業して、も一度天中時代の友達と会つて一緒に愉快に遊んで見たいと云ふ點が天中O・Bの出来上つた原因であります。従つて主旨なるものも天中卒業生又は天中にとても好意のある人同志で共にラグビーに親しむと云ふのが主旨でありましてそれより天中現役軍の後援、ラグビー界への貢献等が生れ出て来るのであります。ラグビーによつての友誼を主として居ります故に私等の行く末は出来るだけの多くの会員を持ち、クラブハウスの一軒も持つて益々その友誼を深くしたい考へなのです。第一回の会員募集に六十名の多くの会員諸兄を持ち得まして私等はこのクラブの将来あるを信じて居ります。今後共諸兄の友にラグビーをやつて見たいと云はれる御方がありましたらごん御勧誘の程御願ひ致します。この部誌は創刊号としましては内容が至つて貧弱で御氣の毒ですが次号よりは諸兄が大いに御投稿下さらん事



昭和6年12月発行

をお願い致します。クラブ誌ですから決してラグビーに関した事ばかりでなくても詩でも俳句でも随筆でも何でも大歓迎なので難かしく御考へにならずに所謂ざつくばらんに御投稿の程御願ひ致します。

ファストロー及びセカンドローに就いて

三島 實

次の短文が天中現役ラグビーに何か益する処があれば幸ひである。ファストロー及びセカンドローは十五人よりなるチームの第一線である。第一線の元氣潑潑たる事は見て居ても愉快である。やれたら尚愉快であることは言を待たぬ。先づスクラムである。スクラムで押される程悲惨なものはない、その代りワツシヨイワツシヨイと押す程嬉しい事はない。この押す要領が難かしい。先づ一番大切な事で一番忘れられているのはバックを強くする事である。次にハーフが来て「誰々サイドボールイン」で押しては何の役にも立たぬ。ハーフが来て「誰々……」と言ひかけたらヨイシヨと押し出すのである。もつとも声を出す必要はないが、此処の辺はバックローとハーフが常に共同で研究せねばならぬ。次に密集である。フロントロー及びセカンドローに取つては密集は得意の壇上である。縦横無尽に暴れ廻る程良いのである。密集中でフラフラしてゐるのはフロントロー、セカンドローの面白さを知らぬ訳である。大いに奮闘すべきである。万一相手の密集を破って割つて出る事が出来れば尚更偉い。どんどん割つて出るが良い。但しヒヨロヒヨロ割つて出てはならぬ。相手のハーフ、スリーコーター連を顔負けさす位の勢ひで突進せねばならぬ。次にラインアウトがある。ラインアウトでは兎に角取れない様なボールでも猛烈に飛び上るのである。取つたら、その勢ひで相手側へグツと飛び込むのである。抜ければ一番愉快だ。ハーフを突きとばしてドンドン走るのだ。ハーフにタックルされる時には味方の誰かにパスする。この場

合敵のフォワードにパスする人が多いがそれが間違いである事は子供でも知つてゐる。

フロントロー、セカンドローはラインアウトに於てボールを手にする機会が多い。自分がボールを手にして走り出した場合、走力に自信のない場合にはなるべく早くキックの戦法に出られん事を希望す。そして懸命にフォローしてドリブルで進むのである。キックとドリブルならば相手のバックスの堅陣を楽々と突破する事が出来るのである。ドリブルの話が出た序に少し述べて見やう。現今日本ラグビーの欠点はドリブルの下手な事と凄味のない事である。今後日本のラグーたる諸兄はドリブルが出来なければ何日までたつても先輩の後塵を拝する丈である。ランニングのスタートでもやる調子でドリブルの練習をやつて欲しい。手を大きく振つて。次に大切なのはヒールアウトである。どういふ場合にヒールアウトするか、仲々判断が難かしい、通常ハーフかバックローセクターからサインが出る筈である。だからそれに応じて直ちに強くハツキリと出すのである。兎の糞みたいにとヒョロヒョロしたヒールアウトはハーフを泣かす丈である。尚注意したいのはルーズなり、ラインアウトなりからヒールアウトする場合最近の大抵のチームは先づ五六人でスクラムの形を取つてから悠々ヒールアウトする練習をやつてゐる様であるがあれはヒールアウトの練習としてあまり役に立たぬ。十ヤードも十五ヤードもルーズスクラムで敵を押し進むのがあの練習の第一の目的である。若し進行が止つた場合は直ちにヒールアウトするのであるが初めにボールを取つた瞬間ヒールアウトした方が都合良いと思つたら一人でも良いから早く強くヒールした方がチーム全体を活かす訳である。

次にバックアップである。フロントロー、セカンドローはスクラム及ルーズで暴れ廻るのであるから、バックアップは自然遅れ勝ちである。此処ではバックローが飛鳥の如く馳せ廻つてゐる筈である。諸君はしかしボンヤリそれを見物して

ゐてはいけない。先づ第一にルーズ及ルーズ附近の攻防には責任を以て働くと共に各自の体力に応じて出来る丈大きく速くバックアップするのである。京大の青木君明大の知葉君等はルーズで暴れるのは勿論敵のウイングスリーコーターやフルバックをまでタックルに出かけたものである。

最後に一言述べ度い。注意すべきはラグビーで身体を痛める人が多い。要するに過労である。諸君は勉強で相当忙しい筈である。その中で暇をつくつてはラグビーを楽しんで居られる事と思ふ。諸君の生活はそれ丈で充分である。それ以外の事まで色々経験仕様とすれば無理である。無理が重なれば病気になるのはきまった事である。ラグビーは節制が第一だ。練習が済んで家へ帰れば多分日は暮れてゐるだらふ。夕食を終ればもう眠いだらふ。二時間位本を読んで九時頃にはグッスリ寝込んで又翌日元気にボールを蹴る習慣を養はれん事を祈る。

祝詞にかへて

糸岡 康博

祝創刊!!!

先づ御祝ひ申し上げ候 愈々O・B会誌発行さるゝと聞き何物かを物し早速投稿せんと存じ居候ひしが何分拙字の小生適當なる題材見当らず御祝の一言までに取あへず御送り申候

この次こそ小生必ず一生の勇を奮ひ一大論文を提出する考へに御座候間何卒それまで御待ち被下度候 去年の九月対同志社戦を拝見仕り小生等の鬱憤を御晴らし下されし喜びも束の間再び今日同志社に破れ候事無念に存候なれど天中も進歩見るべきもの有之そぞろに小生等存校中の事ども思ひ起され平井氏富田氏の両キャップテンに率ひられ甲子園に進み京一商に破れ南満に恨みを吞みし事等当事の意気に今の天中程の技術を持ち合せなば必ずや等と思ひ尽きぬもの有之候小生がキャップテンの年は幸か不幸か天皇陛下御不例の折とて華ば

なしき戦跡無之然れども尚京一商に三十六対〇のスコアを有し候勿論負けたのにて候小生元来あまり勝つ経験無之殊にボートに至つては對外レースには負け通しにて小生ボートを漕ぐ間は商大勝てずと存じ遂に退部仕候 この頃はひたすら勉学にいそしみ余暇を以てラグビーに親しみ居るものに御座候なれどラグビーは良きものにて勉学の労れを医やす最適のものと思はれつい機会ある毎に出かけ多分これからはシーズン中はラグビーの疲労を勉学にておぎなふが如き状態となす事ならんと思はれ候何にても近頃小生は良き学生たらん事をモットーとし又事実それに進みつゝある現状に御座候間何卒よろしく御指導下され度候。

回 顧

伊藤 泰運

光輝ある蹴球部の十週年記念にあたり私は主将をして居た関係上筆を取ります。私が第九回の主将と命名されたのは昭和五年であります定められた其の事は私にとつてはあまりにも重い荷でした。

しかし決定してしまつた以上は古い歴史を有する蹴球部を益々発展させようと決心致しました事は云ふまでもありません。其の夏平井、斎藤、田中、及び諸先輩の御尽力に依つて蹴球部創立以来行つた事の無い夏の合宿練習を仁川の関西学院で行ひました。其の理由は九月の劈頭に当る対同志社戦に大勝を得る為でした。初めての夏季合宿練習でしたが部員の者は大多数参加して八月十日から向ふ一週間猛練習を開始致しました。其の間小野木、斎藤、田中及び諸先輩の熱心な御指導を仰いだ事は勿論です。

その結果九月廿九日の対同志社戦に二十三対三のスコアを以て大勝致しました。これまで諸先輩が血と涙を以て戦つて勝つ事の出来なかつたあの強敵同志社を破つたのです。私達選手は勿論諸先輩も涙を流して喜びました。しかしその私

達の喜びの涙の取れ切れない中に私の監督の悪るかつたためか部内にインケン分子が存在したのです五年の一名四年の一名の者に依つて蹴球部はメチャメチャに乱され私達二三の者はその様な事件が起つて居る事を全然知らず小火が大火になつて始めて知つたのです。

大火となつてしまつては取返しがつきませんあらゆる努力を尽したのですがもう駄目でした。

それが原因したのか対天理戦にあの様な敗北をしたのです。私一人の愚呑さで光輝ある蹴球部に汚点を付けた事を此の書を以て諸兄に深くおわびします。

紹介のページ

会員諸兄を私の知つてゐる範囲でぞつくばらんに紹介させて戴きます何とぞ悪しからず

井上二郎氏（元名平賀）天中第十七回卒業天中時代は野球慶大ラグビー黄金時代のキャプテン今は関西ユニオン理事長可愛い御子さん達の良いお父うさん慥に自動車番号は大五六六と心得て居ます

巖 栄一氏 通称ガンサン同じガンサンでも宇野のガンサンとはとても似つかぬ好男子、三高ラグビー黄金時代三好氏と共に日本一と云はれた名ハーフ今猶強豪神戸ラグビーの重鎮日本電力の重役の卵ノキヤップの元祖とも云へるでせう

三好深平氏 巖氏と学校就職先までを共にされ人の目も羨ましい親友の間柄十一月六日目出度結婚式を挙げられたとの事O・Bからお喜び申し上げます

寺戸猛郎氏 天中時代庭球部の御大今日の栄ある神商大庭球部を築き上げられた人近頃は牛の様によく太られ体重正に二十数貫といふ所十人並以上の方を只今物色中との由

糸岡健司氏 今大阪商大の前身大阪高商ラグビーの創立当初

に活躍された人、今は洋服地の良い御商人はん天中O・B
会員には何割かの割引があるとの由

上田直造氏 通称ウェッツアン寺戸氏次年の庭球部のキャッ
プテン京大でラグビーに憧れを持たれ今は火災保険保険と
いふと勧誘員と相像するがどう致しまして高級なるサラリ
ーマン

前川 博氏 往年のマニラの極東オリンピックに日本代表の
名ハードラーとして活躍された方今ちや現場監督即ち百姓
でなく土方の親方

松川秀男氏 通称マツチャン天中大阪外語ラグビーの創設者
心ブラ礼讀者巖氏三好氏寺戸氏と共に日電党一年程前から
お嫁をもらつたとかもらはぬとかで只今猶不明

雀部尚宜氏 甲南高校ラグビー当初の名ハーフ今は大同電力
の猛者但し御本人は順なしの構へ類に属する美男子

村山 仁氏 通称仁さん剣道の達人野球の名投手の経歴を経
てラグビーに精進され京大が慶大を破つて天下に覇を唱へ
た時の名スタンドオフハーフ今は京大農学部栄養化学研究
室で顕微鏡とにらめつこその内に不老不死の栄養剤を発見
天中O・B会員のみ御分譲下さる由

天野 亮氏 通称リョウヤン天中時代に庭球部の御大寺戸、
上田、天野氏と庭球部の三大将が揃つたのも不思議の縁関
学ラグビーを今日あらしめた恩人今は丸石会社へ御出勤

谷口敏夫氏 今の通称ローソク人は彼は白く細いからと思は
れるだらうが筆者はローソクには芯がある即ち彼は細く白
いが芯ある大丈夫なる事を意味すると解してゐる天中時代
は剣道の猛者京大で今シーズンの活躍を期待されてゐる人
の一人

棗田芳春氏 天中プール建設の大的後援者通称トマト大のト
マト礼讀者ラグビーは大的愛好者

三島 實氏（元名足立）天中ラグビー創立当初のフルバッ
ク、フルバックが密集へ入つて行つて稗田コーチャーに叱

られてゐたその人は京大のキャプテン日本の三島となつたと思ふと何だかくすぐつたい気になる併し彼には此の如くなる原因がある外ではない彼の真面目さがかくならしめた事を信じてゐる、本シーズン君の統制よろしきを得て再び関西ではなく日本のナンバーワンに京大を置かれん事を切望してゐる

甘利幾雄氏 通称ビヤその由来を知らず天中時代剣道の達人
今は三越のショッブボーイ天中時代自慢の腕は今如何に
鹿島國夫氏（元名井坂）通称ホイッチョ庭球部の重鎮筆と声
の良い持主谷口三島両氏と親交の厚い人

竹束孟之祐（元名前田）通称ゲラ野球部の重鎮本年慶大法科
卒業御他聞に洩れず只今就職口物色中彼の如き人格者を雇
はない事を不思議に思つて居る

酒井文一郎氏 通称ボテハン竹束君の親友天中野球部の名サ
ード慶大本年卒業お家の仕事の御手伝との由

天野平八氏 通称ハチ天野亮ちやんの弟君英語の天才家往年
外語ラグビーの猛者只今は東邦貿易会社の社員さん

谷上滋昌氏 通称エル天中ラグビー創立当初の名ロック関大
ボールチャンパーとして名をなされたが病気になられ今で
もラグビーは見る程度の由それにも拘らず、天中O・Bに
入会された事を感謝する

富田孝夫君 通称ボンコ天中当初の黄金時代のキャプテン
今京大ラグビー重鎮今シーズンの活躍を期待して居たが指
を負傷され今期は駄目との事君のため又京大ラグビーのた
め惜しい事である

富久和太郎氏 天中籃球部を今日あらしめた唯一の人ラグビ
ーのとても好きな人富久商店の若だんなでおさまつてゐら
れる由

谷川伊三雄氏 今商大ラグビーの重鎮本シーズンの不振は何
とした事か

永井頼雄氏（元名宮城）通称デコ天中の富田主将時代のフラ

イングハーフ大高商の名ロック今は一年の兵隊さんの生活も済んだので御内の御手伝との由

足立卓夫君 三島氏の令弟天中時代は体小さくラグビーのラ字も出来兼ねた位今は押しも押されもせぬオール関西日本きつての名バックロー兄弟とも真に真面目な所がかくあらしめた点に今更乍ら敬意を表しておく

山田孝雄氏 足立君と共に京大サードローの重鎮だつた人今は農林科学研究中その内に天中O・Bにも博士が出来る事と期待して居る

小幡嘉生氏（元名荒賀）通称ラガで通つて居る高知高校ラグビーの創設者今シーズンは京大のサードローセンターの重任を負はれて居る君の活躍こそ日本独歩のセブンに対抗してのエイトの価値の有無を左右するこの点多大の興味がある断然奮闘を祈る

長沖 彰君 通称アマ天中当初の黄金時代のセンタースリー後慶大に入り一年生にして日本ラグビー界の王座慶大のレギュラーになつた天才児本年春以来兎角の噂があつたが重鎮藤井君の無き慶大のバックに依然光をなしてゐる事は喜びに堪へぬ

藤野隆三君 通称トンコ長沖の相手のセンタースリー野球も達者有名な自動車狂ひ学生にしてバツカード等の高級車を持ち自動車で日を送つてゐるとの事バツカードを買ふ金をO・Bにでも寄附して下さればトンコとは云はず藤野様で通れるのに

小島 稔氏 通称ネヂ山椒は小粒でもピリット辛いとは君の事大高商の名バックロー天中時代から僕は君がラグビーをやれば小粒なりに物になるとにらんでゐた

木村三郎氏 体をやせさせたいと云つて古市君と二人五年になつて手伝つてくれた変り種通称紳士否通称でなく彼は真の紳士である今は赤十字の薬剤師

糸岡康博氏 通称イト富田主将の後を受けて天中蹴球部を背

負つて立つた男今大阪商大を背負つて立つてゐる君に東京に早慶明の三巴ある如く関西に京同大の三巴をと望んで居つたが本年度の成績は何とした事か

上田敏夫君 五高ラグビーの創立者通称ギャン今京大に居ながらラグビーをやらないのは体のためか

山本善次郎氏 通称カバ三重高農黄金時代のバックローセクター今は和歌山の砲兵伍長今度朝鮮の方へ行かれる由

四方恒次氏 山本君と同じく三重高農ラグビーのキャプテン工兵伍長将来は南洋の椰子の葉蔭で暮す積りとの事

以下は次号に、大変失礼致しました。

御相談

会員の中に仲々御熱心な方がありまして次の様な御相談を受けて居りますが皆様の御考へは如何でせう

一、ユニフォームを作つてはと云はれて居ります

白地に天中は臥龍ヶ丘と名がついて居りますので、黒い龍の落とし子を図案化したものをマークに付けてはとのお話です。

一、会員章を作つてはとのお話も出ております。道で会つても一寸分るやうにとのお話でした。

一、マツチをもつと沢山やれとのお話も出ております。これは私等も考へて居りますが未だ創立当初でもあり、充実と云ふ所まで行き兼ねますので本年はマツチらしいマツチもせずに済んだ事はお詫び致します。何卒御通知致しましたら万障御繰合せの上御越し下さいませ通知さへ出せば皆様が来て戴けるだけの自信を私達に持たせて戴きたいと存じます。

一、本年度は天中蹴球部創立以来より丁度十週年に当たりますのでO・Bが主になつて何かやつてはとのお話も出て居ります具体案としては①十周年記念試合、②ラグビーに対す

る展覧会等であります

以上の御相談に御意見のある方はどしどし私なり松川氏、小野木氏、伊藤氏、又は巖氏、三島氏まで御申越し下さいませ。万一御申越しなき時は私等に御一任下さつたものとして処理致しますから左様御了解下さいませ。

天中十ヶ年間の主なる中学との勝負表

対同志社中	一勝七敗一引分	対慶普	一勝一敗
対京一商	五勝四敗	対京三中	一勝〇敗
対神戸一中	二勝一敗	対北野中	九勝〇敗
対天理中	五勝三敗一引分	対神戸二中	二勝〇敗

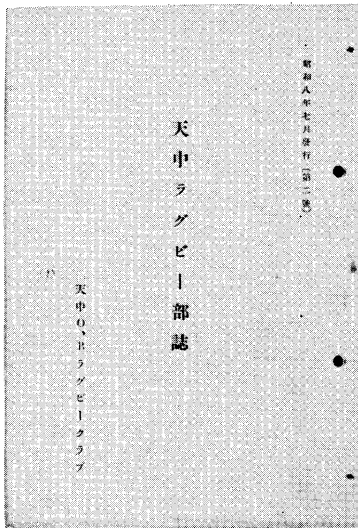
其の内 大正十三年（平井主将）優勝戦対京一商十二対〇負
大正十四年（富田主将）准優勝戦対南満工業 負
大正十五年（糸岡主将）大会中止
昭和二年（山田主将）優勝戦対同志社中 負
昭和三年（斎藤主将）准優勝戦対同志社中 負
昭和四年（田中主将）予選対天理中十六対五 負
昭和五年（伊藤主将）予選対天理中三十九対三負
昭和六年（北條主将）予選優勝大会 ？

天中ラグビー部誌——第二号

過去十年創業時代の回顧 松川 秀男

僕たちの五年生、それは蛮風を謳はれた天中黄金時代の末期、即ち今から十年前の話だ。

僕たちは赤旗を取つて群がる宿敵と戦ふ野球部のために、一千の友等と共に涙ぐましい迄に応援に声をからした、或時は暑い夏の合宿に自らフリーバッティングのピッチャーとして肩の碎ける迄に球を投げ心身共に、光榮ある天中のために活躍せる野球部に声援した、併し野球部も一階段以上には強



昭和8年7月発行

くならなかつた。東、松浦時代の華やかさを目の前に見て来た僕たちは是非とも今を昔に返して「天中軍強し」の声を聞きたかつた。柔道部には久島八郎。剣道部には西川繁と云ふ快物が居つたが矢張り野球部と運命を共にせざるを得なかつた。僅かに陸上部に中学界の不世出の名スプリンター忠田君を有し天中魂の存続を示し気を吐いたに止まつた。

全く僕たちの燃え易い熱情はいかに昔の天中、天中スピリットの存続を示すべきやに狂的に努力した我等が赤旗を取つて一千の健児と共に声涙共に下ると云つた激励も無惨遂に市岡中の野球試合に敗れた翌朝狭い教室に、むつゝりと顔をしかめて「オタン」の講義も耳に入らず考へ込んだ三人の天中生、それは不甲斐なき近時天中生を覚醒せしめんとする、阿部、三好、松川の面々である。

我等は断然立たざるべからずと同志集つたのが或は御承知かも知れないがマスカラブである、校風改革と天中魂の体得である。今で云へば硬派と云つた連中で、たしか野球部や水泳部や柔道剣道は学校の選手よりは強く、野球部が敗れた大高に挑戦。これを四対一で破つて気を吐いたのを覚えて居る。

然しこれでは未だものゝ数ではない。当時第三高校にあつて日本一のスクラーム、ハーフと謳はれた三好深平氏の令弟が即ち我等の三好君である。それで阿部、松川、三好の三人が是非天中にラグビーを輸入しようと阿部君の主唱で当時の正村先生に解いて和製のボール一個を買つて貰つた、当時満々たる闘志を持しつゝ柔道部陸上部水泳部野球部に活躍しつゝあつた連中と日々校庭や美章園で三好君のコーチで球を蹴つた、これが天中蹴球部の第一歩である、ここに一つの障害に直面したそれは従来から存立せるフ式蹴球部の存在であつた、こゝにその難題を解決すべく最も円満なる方法として我々同志軍とフ式蹴球部とラグビー戦を行つた、こゝに無事同志軍が六対零で勝ち、圧倒的にサッカー部は無条件に影を秘そめ、ラグビー部を認める至り、フ式主将杉村君も来つて我

等に投げここにメンバーを編成した。

井上	中田	谷上	松沢	藤沢	横田	杉村	阿部	三好	松川	宇治	小野	西村	前川	足立
FK				HB		TB			FB					

顔ぶれだけでも当時中学界の花形を集めたものである，中田西村は円盤投の中学界記録保持者，前川横田谷上小野のハードラーあり松沢の剣道初段．野球部の名捕手井上ありと云った風に多士済々．幾多後年の名選手を培つたのである，曰く足立君は京大主将三島君として余りに有名であり，中田前川君は関学時代極東大会にハードル槍の日本選手として出場するあり杉村君は早大ア式主将として令名あり，谷上君は関大にあつて名ボールジャンパー，或はT，Bとして謳れ小野君も大商大にその万能振りを発起する等全く中学時代の快物の集まりであつた。

負ける事の嫌いな連中一日美章園で球を蹴つて，スクラームを組むと，すつかり自信をつけて先づ大高へ勝敗を目的とせず挑戦した，当時の大高は梶川君を主将とし寺村，宮原，村山，榎原，山口，戸尾等の頑張りが居つたので，未熟の天中軍も涙をのんで十五対零で敗れた。

続いて三月三日外語に挑戦した，大高戦に自信を得た天中軍しばしばチャンスをつつたも物にし得ず零対零で引分に終つた．我等大阪に於ける最後の目的物たる，当時大阪に独歩の地位を誇りつつある大高商（現商大）に対すべく戦備おこたらなかつたが三好，松川，阿部，杉村，中田，小野，前川，松沢諸君が卒業を見るに至つた，我等第一回の勇士はその覇業成らずして校門を出ずべく余儀なくされた。

当時強猛所謂高校式の頑張りをもつた大高F，Wを圧して球を取つた天中F，Wの威力は大したものでそれが僅か一日のスクラームの練習のみとは驚くべきである十六貫平均のF，Wは正に中学界有数のもので，その有する猛烈なる闘志と共に同志社を破るものは恐らく天中ならんの声は既にこの

時からであつた。東西の大学専門学校からは有形無形の讃辭を受け全国の諸先輩からは身に余る祝辭を戴きこゝに、阿部、松川、三好の教室に於ける空想の十分の八、九は實現した。

十名の卒業部員を送つたが宇治君が新に主將となり大先輩稗田氏のコーチの下に松川阿部の前部員以下十八名大高に於て練習、来るべきシーズンに備えたが不幸同君渡南米の爲めあたら前半シーズンを無為に終るのみか部員四散して部の存続を疑わしめた。

僕たち五年生が卒業と入学試験の準備の多忙を犠牲にして作り上げたラグビー部も近々一年にして減るのかと思ふ予感が痛く僕の胸を打つた。併し幸なるかな当時慶応大学ラグビー部と共に西下せんとする慶応普通部はその敵を我天中に求めた。

東京時事が早くも西下のスケジュールを発表したとき十二月二十七日慶普対天中なる文字を見出したときの僕たちの氣持全くうれしくて今でも忘れられない、一方又一抹の淋みしさがこみ上げるのをどうする事も出来なかつた三好君と二人で今年卒業が遅かつたらと嘆息したのを覚えて居る。

併し天中軍の現状を見ると宇治君あらず横田君を主將として谷上井上西村は野球部陸上部にあるのみ足立君を加へて五人である。

僕は、止むを得ず折角の慶応の挑戦を無断にしてはと試験の今や始まらんとする十二月十日学校に行つて急遽メンバーの募集を命じて置いた幸ひにも年少氣鋭の下記諸君が馳せ集られた。

西村 足立 横田 谷上 平井 田中 富田 本坂 塚田
藤井 橋岡 河原 松山 小倉 長沖 宮城 糸岡

試験が終つた十二月二十日の午后から美章園で僕の單なる自己的研究であるコーチで猛烈極まる練習をやつた、意氣と熱とフェア、プレーを強調しつつ、ただ勝敗を云々する

よりも、いかにしてラグビースピリットを体得すべきやを教えた、学校が休みになつたので毎日練習をやつた当時雨が降つても誰も休むものはなくドロドロのグラウンドで頑張り続けた、気持の延び延びとしたいかにも中学生らしい、いい選手の集まりであつた、それなればこそ後年、有名なる京大の三島君、富田君、慶応の長沖君、三重高農の平井君、神高商船の藤井君、神商大本坂君、関大谷上大商大宮城糸岡君等の名選手を生むに至つたのである、対慶普戦迄余す所僅々一週間の猛練習に可成の自信を得たとは云へ未だ水平線上に漂つて居つた、二十八日対大高の練習マッチを試み先づ左記の陣容を組織した。

塚	藤	本	谷	平	横	田	橋	富	河	松	長	西	小	足
田	井	坂	上	井	田	中	岡	田	原	山	沖	村	倉	立
(3)	(3)	(3)	(4)	(4)	(5)	(3)	(3)	(3)	(3)	(3)	(3)	(5)	(3)	(5)

当時三年生を主力として多数新進を起用した為め茲に試合は或程度迄しかの活躍を期待出来なかつたが僕たちはこのいたいけなヒフティーンの活躍には痛く感じ入らざるを得なかつた、僅か十日僕と共に異心同体始めて球を蹴つた連中とは思へない程に上達した人達を見出したとき何だかうれしく涙がにじみ出る程だつた。

試合は猛烈なるFW戦で終始したが矢張りトレーニングの整然とした大高に及ぶべくもなく敗れたが当日大高コーチとして来場の巖、三好両先輩を感激せしめ今後両氏率先コーチに当られる事になり、後二日を残す対慶普戦迄に巖氏のコーチに益々その自信を固めるに至つた、この間慶応大学及普通部の合宿は宝塚に決定され西下中の試合全部宝塚に於て挙行する事を発表されたこゝに於て問題のうるさくならざるを得なかつた、文武両道正に六合に横被せし初期天中黄金時代より宝塚の風習我等天中生の容るべきものにあらず同方面出入は天中生の絶対に禁止されつゝしむべき問題とされて居る。

こゝに於て試合の中絶を怖れて、松川、阿部、は当時の校

長小林吉人氏をその私宅に訪問以て選手一同の行動には絶対信用されたく責任を以て嚴重取締る旨表示して校長の諒解を求めたるも当時鈴木校長時代の華々しき天中黄金時代の再建に努力せんとせる校長は、選手の問題は第二として、これが応援に行かんとする校友の問題に言及してこれを許さず校長の心中又諒とすべき点多々あり止むを得ず天中先輩にして塾往年の名主将たりし稗田氏を通じ試合場所を大高に変更ありたき旨交渉して戴き漸く塾の容るゝ所となり我部として記念すべき最初のビッグゲームは愈々挙行される運びに至つた。

午後二時キック、オフ、当時塾普通部には大学チームのTBとして活躍せる山口(享)を主将とし岸田志々目、若尾、矢飼等一流中の一流ありそのプレーの洗練さに至つては全く大学チーム以上のものであつた、我軍意気上ると雖も前述の如き状態にして未だ大試合の経験に乏しくラグビー、プレーの真髓の如何なるものなるやを考究しつゝある若きプレイヤーの集りで止むを得なかつた、試合は自ら勝敗決せる感はあるが天中軍の奮戦もののしく天中魂の存続こゝにあるを示して遺憾なかつた、陸上競技界の円盤投記録保持者西村の頑張りとその俊足、ハードラー横田、谷上其他足立、本坂、富田、平井、長沖、田中の奮戦ものすごく、我等をして快哉叫ばしめた。

当日観戦の慶応大学の主将大市氏を始め木下、山口六、宮地、岩下、北野の面々をして天中軍の将来恐るべしの感を強く印象せしめた。

試合は山口(享)、岸田、矢飼にかき廻されて二十一対零で敗れたがその記録たるや我が天中軍が記念すべきものにして後年天中ラグビーの全国的名声をかち得且幾多の大選手を輩出せしめた根定を作られたものであると云ふべきである。当時のメンバー

本坂	藤井	塚田	平井	谷上	橋岡	田中	横田	富田	河原	松山	長沖	西村	小倉	足立
FW							HB		TB			FB		

こゝに於て阿部、松川、三好の夢想は、実現し、今や美しい花を咲かしめんとする第一歩に至達し約十日間の速成チームでありながらその闘志技術精神に於て堂々東都の慶応軍と対抗して一步も譲らなかつた選手諸君、ただ単なる自己的研究しか持たない僕の言を信じて、真しぐらに僕と共に、天中魂の存続を示し且つ称覇の実をあげんと涙ぐましき練習に練習を以てし他日天中ラグビーの名声を全国に横被せしめたる根定を培れたる選手諸君にこゝに僕は万控の感謝と敬意を表すものである。

我等今こゝに過去の追懷にふけるとき当時のメンバー中より本坂、塚田、河原の三君中途にして病魔の為に倒れ後年華々しき名声をラグビー界に残さずして逝かる、一言こゝに衷悼の意を表さむ。

田中主将一身上の都合により学校を退かれ西村、足立、横田、谷上の諸君を送り新たに平井君を主将として愈々こゝに華々しき第一期天中ラグビー黄金時代の実現に努力するに至り、全国大会に大阪代表として駒を甲子園に進め優勝戦に望む等実に光榮に満てる歴史の一頁をこゝに刻むに至つた。

平井主将の翌年富田主将はさらに華かなりし平井時代に又新らしき戦勝と光輝ある歴史を作り全国大会に今一步同志社を破らんとして止むだが、天中のラグビー界に於ける地位を確立せしめ他運動部奮はざる中にあつて燦たる栄光を放ちつゝ天中未だ衰へずと叫びつゝ我等が天中のために万丈の気を吐くに至つたのである。その精神その技術共に賞すべく幾多の讃辭を受け、生気なき大阪中学生界に一脈の清涼剤を投じたる天中健児の奮闘や正に快なりと云ふべきである。

我等の夢想はこゝに華かなる花は咲き美はしき実を結ぶに至つたのである。

天中時代何等天中に残す事のなつた僕たちがこゝに天中ラグビーを創立しその基礎を培ひその名声を全国的たらしめ幾多後年名選手を出し日本ラグビー界に独歩の地位を確立する

に至つた事を思ふ時いさゝか淡い誇りを感じると共に十年の昔を回顧した涙ぐましい気持ちに引入られるのをどうする事も出来ない然しながらこの十年僕たちがボールを始めて天中の校庭で蹴つてから我等の為に精神的、物質的、技術的に後援して頂いた稗田、井上、奥村、村尾、巖、三好、の諸先輩の御好意は一生選手の頭からのかないだらう。僕たちのあぶない足なみを常に正しく清く、高く導いて頂いた前記先輩諸氏の御鞭達は天中ラグビーの大精神である。ただ十年の昔を回顧して創業時代所謂生みの悩みはいかなるものであつたを新進の諸君と共に昔を偲び同志と共に昔を回顧して淡い感激を残るかすでも味いたかつたのである、我等は常に天中ラグビーの動静を見守りつゝ常にその健かに正しく強からんことを切望せるものである。

今や十年の星霜を経、年ふり人変ると雖も綿々として尽きざる天中ラグビーの精神こそは、未来永却ラグビー界に燦然たる光を放つであらう。現役諸君の活躍を望んで止まず。

天中O、Bクラブ創立以来、平井君の努力により確たる歩みが続け本シーズン、全勝の栄光を得、あゝ偉なる哉天中ラグビー。

我等は益々精神に技術に洗練以てラグビー界に確たる歩み続けんとす。

天中O、Bに望む

小幡 嘉生

私は今天中O、Bクラブ部報創刊号にある平井兄の「序にかへて」の中にある天中O、B倶楽部の主旨たる会員相互の親睦天中現役軍の後援延いては一般ラグビー界への貢献等に関する私見を述べさせて戴かうと思ひます。第一には会員相互の親睦を図る総会を少くとも年一回開催する事を実現して戴きたい。勿論O、Bの一般ゲームの折にも親睦は図り得られますがもつと具体的に会員諸兄に万障繰合せて出席して戴

く日を定めて、現在学生の人からラグビーに耐えぬ老人に至るまで一堂に会して会食したり歓談したり出来たら随分愉快的な事だらうと思ひます。尚出来得可くんばその前に紅白のゲームでもやればより一層よい雰囲気に入る事が出来るでせう。斯の如き催しによつて天中O、B倶楽部なるものの輪廓も一層明瞭になりO、Bのゲームにも大勢の出席者を見る事になるのではないかと思ひます。

第二にO、Bの諸兄はゲームのある時には余暇のある限り出席して戴きたいと存じます。O、B会員中にも現在学校チームの現役で活躍されてゐる人達及び他の倶楽部チーム等に加入してゐる人等は試合が重つたりして實際的に見て天中O、Bの試合の方を欠席しなければならぬ様な場合があります。

又所用の為欠席の人或は老軀勞に耐へぬお偉い方等は止むを得ぬ事と思ひます。併し会員数の多い現在の天中O、Bチームで一チーム位の人員の出席出来ない事はない様に思はれますが之は私の当世所謂認識不足でせうか知ら。兎に角出席さへして戴けば出場人員は余つてもお互ひに譲り合つてうまくやつて行けると思ひます。扱右の如くきつちりと出席して戴ける様になつたら今度はスケジュールの方を断然履行する様にして相手方の棄権はとも角、こちらから棄権する事は天中O、Bの信用に関する事と思ひますから止めて戴きたい。

第三は時々O、Bの諸兄に御厄介を願ふ処の天中チームに対する寄附の事ですが大體之は天中が予選に優勝して全国大会に出場する時に合宿の費用を補ふ為に行つて居るものでそう頻繁に寄附を仰ぐ事は無い様に考へます。

今年のタツクル・マシンの如きは例外だと思ひます寄附は経済的後援だと思ひますから強制的にならぬ程度でO、B諸兄の厚意に俟つて寄附を仰ぐのは当然の事だと思ひます。概して天中O、Bの諸兄は他のO、Bに比し現役軍の後援に関しては多大の熱意を持つて居られる様に見受けまますから皆寄

附の意思はあるに違ひないと信じます 併しその手数を面倒がるのぢやないかと思ひますから寄附の際は募集案内状を出して会員の方々から諸否金額の多寡の返答を葉書でも戴いて幹事の方で受取りに行くか集金郵便でも集めればよいと考へますが如何、会員諸兄も挙に賛成せられたら葉書を書く位の手数はかけて各員余裕相当の寄附を出されたらよいと思ひます、無理なる多額の寄附も不必要だし、盲目的な寄附嫌疑症の方も困つたものだと思ひます。

第四に御願するのは、一番重要な事ぢやないかと考へますので皆さんも適当なよい方法を考へて戴きたいと存します。

O、Bの諸兄が親しく天中現役軍の練習に交つて指導される時に極一部の人に誤つた方法が取られてゐないだらうかと懸念してゐます、勿論天中現役軍の練習に出掛けられる様な人は現役軍後援の熱に於て誰にも劣らぬ人でしようが、余り高熱の為に却つて軌道から外れるのではないかと思ひます、大体此頃の天中現役軍の様子を見ると大抵一人の熱心なる専属(?)コーチ例へば島田君、小野木君の如き比較的天中の練習に加はり得る余暇のある温厚篤実なる方が居られるので非常に結構な事だと内心喜んでゐる次第です、尚その上O、B諸兄中に現役指導に熱心な方が非常に多く、天中現役軍は実に好先輩に恵まれてゐます。

併し此の現役指導の時に、先輩諸兄は彼等現役の中学生と立場を代へて一考して戴きたいと思ひます即ち多くの先輩が入れ代り、立ち代り来て下さつて、種々の注意或は指導をして呉れて有難いとは思つてゐるが、各先輩の言が一様でないから何れにす可きか、去就に迷ふ、へまをやると叱られる、我々にすれば一寸云つた事が彼等にとっては非常にきつく叱責された様に思ひ、去就に迷ふのと共に益々小さくいちけてしまふ、従つてプレイにも伸び伸びした所がなくなつて、小器用には動くが、思ひ切つたプレイが無く元氣のないチームになるのぢやないでせうか、又偶々練習にやつて来た先輩

(勿論この人も天中現役に対して無上の愛着を感じる故にではあるが)が専属コーチ或は現役主将等の方針も考へず勝手な練習をさせられる様な方がありはしないでせうか。こんな風では強くなる可きものでもないだらうと心配するのです。そこで小生はこう考へます。勿論先輩諸兄に出来るだけ現役の練習を見てやつて貰つて、出来たらユニフォームに着換えて一緒にやつて戴いたら現役一同の気分も緊張するでせう。そして現役主将又は専属コーチの練習方法に従つてそのプレイを見て悪い点を注意してやつて下さつたらよいと思ひます。而して練習方法等の事でこうする方がよい等の意見があつたら専属コーチ又は主将に一考を求める様にして戴きたいものです。各プレイに対しては親切丁寧に指導して下さい。人格を無視した叱り飛ばす態度を捨て、奮然として立たしめる様な激励の辞を与へてやつて下さい。

かく先輩間に相当連絡を取り終始一貫した合理的な指導方法を取られたら或はもつと天中が強くなるのぢやないかと思ひます。天中O、Bは現今迄に幾多の著名なラグビープレイヤーを輩出しました。今後も亦続出する事と思ひます。希くばそれ等の人々が一流ラグーマンとなられた時に矢張昔忘れず余暇には天中へ来て親切に後輩の指導に当つて戴き又どしどしチームに対する進言をして戴きたい。往々にして中学チームを蔑視して顧みない人があるが、私は非常に遺憾に思ひます。尚此処に御願ひしたい事は先輩諸兄がプレイ以外に於ても現役の人達を正しく指導し邪道へ陥れない事を希望します。

第五に、之は天中O、B会員の極少数の人か、或はO、B会員以外の人に希望する事かも知れませんが結局天中O、Bの威信を傷けると思ひますから一寸申し添えて置きます。

天中及び天中O、Bのゲームを観戦する毎に気の付く事です。が、(之は第三者否天中に意を寄する人からも時々聞いた事です)母校を愛する余りに相手に侮辱的言辭を弄したり、プ

レイヤーをして不法行為を為さしめる様な乱暴な云辭を吐いたりするのを実によく耳にするのです。興奮の極つい出るのでせうが感じの悪いものですから止める様に努めて戴きたいと思ひます。特にラグビーはプレイヤーが興奮し易い競技ですから余り猛烈な応援は禁ぜられてゐます。天中O、B諸兄はもう少し襟度を保つて冷静に観戦して戴く事を希望致します。

以上私が恰も天中現役の後見役の如き又協会の取締役の如き偉そうな勝手な熱を吹きましたが矢張単に天中O、Bの一員であつて、自分自身を省て、余りこんな大きな事の云へる柄ではありませんが、天中O、Bを熱愛するの余りに拙文をも顧慮せず暴言を弄したのですから、その点を諒とせられて之を読んで戴けば満足です。尚この私の考へは自分では善い積りですから間違つてゐたり倦き足らぬ点がございましたら諸兄の御教導を御願ひ致します。

昭和八年度の天中より

酒井 龍平

昭和七年度のラグビー界も終りを告げ、今將に昭和八年度ラグビー界の幕は切つて落され様として居ります。此の時に當つて、天中ラグビー界の活躍すべき時期が到来致しました。

顧ますれば、昨年十一月廿三日、花園原頭に於いて天理中学に惜敗して恨の涙を吞んでより、此の間数ヶ月、其の復讐に燃えた焰をたぎらせて私達は勇往邁進の賜が来年の全国大会の優勝への径路であると信じて進んで参りました。

実に今年度のチームに其の使命は下つたのであります。幾多の先輩の恨を抱いて、必ず甲子園原頭に優勝しなければならぬ時が参りました。私達には優勝の自信は充分にあります。今年こそ、ラグビー部創立以来、最も自信に満ちたチームであるとして間違はありません。私達は此の時に當つて、

堂々と全国大会に優勝する事を誓言致します。天理何ぞ、同志社何ぞ、恐るゝに足らんや、の意気込を持つて誓言致します。

チームには新人が約半数を占めては居りますが、其の危惧は少しもありません。反つて各人の気も良く合つて実に良く整練されたチームと言ふべきでありませう。

部内には活気の土が旺盛して、フォワードの健闘に次ぐに、バックの活躍があり、其のコンビネーションは日に日に高りつゝあります。然し私達はこれで満足すべきではありません。遙かに高い全国制覇の使命があるのです。これには団結の力が必要であります。

これこそ私達にとって必須の存在であります。団結の力と意気こそ私達を全国制覇に導いて呉れる唯一の良き指導者であります。然し之は単に部内のみの団結では尽くされません。必ず先輩諸氏との団結あつて始めて尽くされるのです。此の精神完成に何卒先輩諸氏の御来校を望んで止みません。少しの御暇でも見付き次第お越し下さつて思ふ存分御指導下さる様御願ひ致します。

昭和八年度ラグビーの始に当つて一言申し上げます。

左に今年度のメンバーを掲げて掲筆致します。

村 広 ^沖	虎 竹	竹 山	中 高	木 高	鍵 黒	中 上	酒
田 瀬 ^田	尾 内	島 脇	野 橋	塚 田	谷 田	村 田	井
F. W.				H. B.		T. B. F. B.	

創刊号発行後より今日まで 平井 宏

一、ユニホーム作成

創刊号にも御相談致しましたがユニホームは是非必要と思ひまして作成致しました。

随分上等ですが上等の方がかへつて丁寧に使ひ又持ちもよいと思ひましたので、色は単色で胸に太い黒線が一本あ

りマークは臥龍ヶ丘にちなんで龍の落とし子をつけました。
此のユニホームは未だ負けた味を知りません。お蔭で破損も致して居りません。

一試合毎に洗濯して居りますから衛生方面も満点です。どうぞ一度来て着て見て下さい。

二、タツクルマシーンの作成

天中現役のため谷口敏夫君の主唱でO、Bの名の元に天中同窓生諸君にタツクルマシーンの作成費を募集致しました。O、Bの方々には毎年お気の毒と思ひわざと募集致しませんでした。

何しろ御存知の通り天中のグラウンドは石の様に堅いのでどうしてもタツクルが下手になり勝ちなものですから是非必要と認めて作りました。

幸ひ同窓会の賛同を得ましてマシーンも完成、今盛んに現役が飛びこんで居ります。おそらく中学チームでマシーンをもつてゐるのは天中位いのものでせう。

三、試合成績及び本シーズンのスケジュール

O、Bは今日まで戦ふ事六度一度として敗をとらず全勝のベストスコアを残して居ります。

イ、試合成績

天中O、B軍

対大阪鉄道局	二四——	三	勝
大阪毎日	五一——	三	勝
大軌電車	九——	八	勝
神戸ラグビー	一五——	六	勝
関学O、B	二六——	六	勝
学士ラガー	一二——	一一	勝

天中現役軍

対大阪高校	六——	一九	負
同志社中	九——	三	勝
神二中	二九——	六	勝

八 尾 中	五四—— ○ 勝
神 一 中	一一—— 八 勝
天理中(大阪予選)	三—— 八 負

ロ、本年度のスケジュール

天中O, B軍(未印は未定のもの)

九 月 十 日	同 志 社 大 学(未)
九 月二十四日	天 理 外 語
十 月 一 日	三 井 ラ グ ビ ー
十五日	大 阪 鉄 道 局
十一月 三 日	日 本 大 学
十九日	阪 神 電 車
十二月 十七日	商 大 O, B
二十四日	神 戸 ラ グ ビ ー(未)
一 月 十四日	学 士 ラ ガ ー
二十一日	関 学 O, B(未)
二 月 四 日	京 一 商 O, B
十八日	神 戸 外 人(未)
三 月 四 日	奈 良 ラ グ ビ ー
十八日	神 戸 一 中 O, B, A
	神 戸 一 中 O, B
四 月 一 日	慶 応 O, B
十五日	大 軌 電 車

天中現役軍

九 月 三 日	大 阪 高 校
十 日	大 阪 商 大
十七日	神 戸 二 中
二十四日	同 志 社 中
十 月 一 日	京 三 中
八 日	神 一 中
十五日	京 一 商
二十二日	天 理 中

二十九日 北 野 中
十一月五日 京 一 中
十二日 大 阪 外 語

紹介のページ

又々ざつくばらんに御紹介申し上げます。

誌数によりまして二十九回までの先輩で前号に紹介せなかった方々のみを御紹介申し上げます。

十六回 奥村正也 天中後援会の建設者即ち天中O、Bの創設者と云へる人、同大ラグビー初期のホワード先年妻君を亡くされたとの事、哀悼の意を表す

十八回 村尾嘉政 同大ラグビー初期のスリーコーター奥村氏と共に天中時代は当時中学生に恐れをなされてゐたラツパ隊の一員、今はその名もやさしいプリムローズの洋服店主、

二十一回 谷口豊三郎 天中文化華やかなりし頃の秀才、三高東大を経て今は東洋紡の若手重役将来の社長級、東大ラグビーの名バツクローたりし人、

二十三回 西野綱三 早大陸上部を今日あらしめし人、早大ラグビーのスリーコーター卒業後関西での活躍を期待したが病を得られた由、今は朝日の運動記者、O、Bの勝つた時は特に願ひしますよ、

二十五回 阿部幸作 通称アカ、天中ラグビーの創設者謹厳そのものの如き人、今東京で弁護士をなされ法廷での弁護は実に堂々

たるものありとの噂,

二十六回 沢田捨次郎 関大へ好んで入学卒業後日本電力に行かれラグビーを始められた人, 本年始め結婚甲子園浜にスキートホームをお作りとの事,

二十六回 井上 進 通称メカ天中野球部の名捕手ラグビー部創設当初のホワード今朝鮮人相手の先生何卒鮮人の日本化に努力されん事を望む

二十六回 植田光治 外語ラグビーに籍をおかれし人今は印刷所に御出勤O, B会誌うんと安く出来ませんか,

二十六回 松尾善二郎 東京商大ラグビーを今日あらしめし人, 今野村ラグビーの重鎮,

二十六回 中村幸太郎 外語ラグビーの重鎮たりし人, 今は花恥しき乙女を相手の御商売うらやましき次第,

二十七回 長谷川恭治 高知高校を経て京大に入学ラグビーをやられし人, 本年度の活躍や如何に天中競技部のハードラーたりし人,

二十八回 筧 潔 通称タル, 天中黄金時代のホワード大工大ラグビーの重鎮たりし人
今工大治金料でボロもうけの口を研究中,

二十八回 浜田 豊 通称ヅボ, 天中富田主将時代のスリーコーターウイング, 早大を経て今はよい月給取り中々精勤な由,

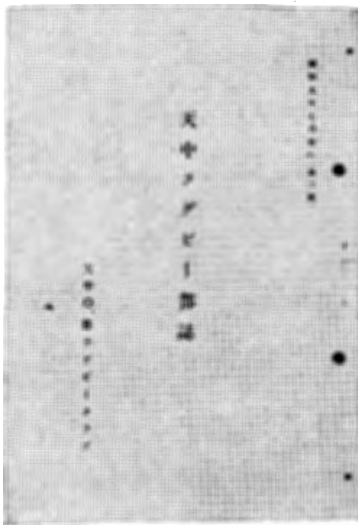
二十八回 中井次郎 天中時代今世界の庭球界に知られた布井のパートナー, 外語ラグビーのキャツプテンたりし人, 今阪和の車

掌ちやない社員さん

二十八回 山本嘉蔵 天中黄金時代のスリーコーター，今
京城大学で文学研究中との事，

二十八回 藤井三郎 通称オンテー，人も知る名ホワード
センター，神戸商船ラグビーの創設
者

二十八回 森好男 早大水泳部の重鎮たりし人，
天中時代はラグビーに水泳に活躍さ
れし人，何故か通称はボーズ



昭和9年7月発行

天中ラグビー部誌——第三号

ラグビー精神の検討

阿部 幸作

ラグビー精神とは換言すれば武士道的精神であり或る意味に於ての人生に対する一個の信念であると自分は解釈する。運動の中で精神の無い運動は一もない。然し無条件絶対的に精神第一を振り翳すものは少い。千八百二十三年ラグビースクールの運動場でウィリアム，ウェツプ，エリスと云ふ少年が始めて球を手に取りつて走つてから既に百年の星霜は流れた。今日では恐らく当時の人達が夢想だもしなかつたであらうやうな大発展を遂げてゐる。然れども之必ずしもウィリアム，ウェツプ，エリス少年が球を手に取りつて走つたが為にラグビー競技そのものに興味的な方面が増加した為でも何でもない。又エリス少年必ずしも単なる熱狂に因つて球を手にとつたのも何でもない。我々が世界歴史を播き近世史上に於ける英国の世界的発展に目を見張り当時の英国青年の脈間を波打つ澎湃たる新興精神に讃嘆するときラグビー競技の其の間に生れ出でたる誠に宜なるかなと感ぜざるを得ない。十八世紀の前半即ち仏蘭西革命の直前に於ては当時英国の人心の腐敗情落其の絶頂に達し世人皆利害に動きて理義の問題に耳を傾けず滔々として混濁汚流の下に沈みつつあつた際仏蘭西

に於ては遂に大革命を巻き起したが英国に於ては大政治家ピット父子が出現して革命的改革政治を行つたのである。歴史は英雄が作るものでありとすれば近世史上英国民の大活躍を為さしめたる精神的根源は大人格者ピット父子の影響を第一に数へ上ねばならないピット以後英国の青年は真に覚醒したブラッシーの野に大敵を取りトラファルガーに大勝を博し或は印度に或は南阿に当時勃興し来れる自由平等の思想と相待ち機械の発明に因る産業革命の波に乗つて世界に其の雄図を拡げたのである。総べて世界の歴史は遠くはローマ近くは英国に其の例を取り来つて考ふるも凡そ一国の盛衰は一に似て懸るに其の国の精神の興廢にある。実に当時の英国青年の精神力は正に衝天の慨があつたのである。私は世界歴史中当時の英国の大発展の原因を探究し近代社会の生れ出づるに至る経路を考へ乍ら此の箇所を耽読するのが一等好きである。実にラグビーの生れ来つた其の歴史的精神的理由は此処にある。此の氣力が偶々エリス少年の脈間を波打たせボールを手にとつて走るを余儀なくせしめたのであらう。物質的事業には失敗する事あらんも精神的事業に失敗はない。百年後の今日の盛大を見るは一にラグビーが斯くして生れ斯くして育てられ来つたからに過ぎない。然も今日ラグビーの本家の英国は別として世界各国中此の果敢なるプレイを最も愛好してゐるのは日本を置いて他にない。即ち我国今日の状態は些かラグビーの生れ出づる直前の英国と一脈似通つてゐる点があるからではあるまいかと私は考へるのである。今や日本は世界の有色人種を代表して世界に乗り出さんと氣構へてゐる。世界各国は目下の処日本の此の氣構へに些か征服された形である。有色人種が白色人種の間に堂々と進出したのは恐らく約七百年前に於ける成吉思汗のそれ以来今日で第二回目の出来事であらう。之即ち今日ラグビーが我が国に於て漸く盛大に赴かんとする或る意味に於ての歴史的精神的理由ではあるまいか。然るに今日の我が国のラグビー達は往々にして此の歴史

的精神的原因を究明する事なく単なる技術に精進せんとする之即ち他のスポーツに於ては知らざるもラグビーに於ては断じて看過す可らざる重大事である。智力無き腕力は匹夫の勇に惰すると全じくラグビー精神の真義を解せざる者の競技は単なる馬車馬の体力養成の手段に過ぎない。然らば世界的に現今日本が歴史的なる転換期に際会せる我々日本の青年達は丁度十八世紀後半に於ける当時の英国青年達と全様に此のラグビー精神の真義を如何に理解すべきであらうか即ち人生に対する信念を如何に把持すべきであらうか以下些か駄筆を揮つて之に論及したいと思ふ。

管子の曰く「一年の計は穀を樹るに如くは莫く、十年の計は木を樹るに如くは莫く、百年の計は人を樹るに如くは莫し、」と。球を持つて走つたり蹴つたりするラグビー競技そのものは実に其の当初より当時の青年達の心の中に樹つけられたるラグビー精神そのものに因つて即ち人を樹る事に因つて何人も不知の間に百年の計が建てられ来つたのである。従つて我が国ラグビー界を云々する迄もなく少くとも我が天中O、Bに付いて考ふれば年々愈々其の世帯の大となるに従い人を樹るの必要換言すれば我々が精神的なる人となるの必要益々急迫しつゝあるを感ずる。

ラグビー精神とは人生に対する一個の信念である。如何なる困難をも忍び如何なる障害をも突破してラグビーのもたらす真意義を理解するの精神である。プレイを熱心に研究する者につては如何なる場合にはキツクし如何なる場合にパスすべきかを体得する事はさして困難ではあるまい。然しプレイ其のものより否大きく云へばラグビーメンとしての生活其のものより一個の信念を把握する事はなかなか容易な事でないラグビーは百年前に於ける新興英国青年の気魄ある生活の中より生れた。私は少くとも我が天中のラグビーを我々の気魄ある生活の中から生み出して行きたいと思つてゐる。然らば気魄ある生活即ち真のラグビーを生み出す可き精神生活と

は如何.

時勢は愈々進展し社会の制度組織は愈々文化する. 然し如何に客観的な情勢が変化し種々のものの解釈が変らうともラグビーに於てアンフェアなプレイの許されないと同様に我々の精神生活にも厳然たる条理が無ければならない. 此の条理に対する明確なる認識を得んと追求する生活が即ち此処に云ふ精神生活である運動の中で精神の無い運動は一もない. 然し乍らプロフェッショナル運動家よりもアマチュア運動家の方がフェアなりとされ数多き運動の中でもラグビーを以て男性的とさるる所以は何故か. 之即ちラグビー競技そのものが最も条理の追求を要求するのみならず其の勃興せし当初より之を行ふラグー達に熱烈なる条理を追求し行く精神が燃え上つてゐたからである. さり乍ら斯る生活を持続しあく迄も自己の精神を鞭撻し人生途上燃ゆるが如き熱意を以て自己の良心を信じて進んで行くと云ふ事は非常に困難な事である. トルストイは「復活」の中でネフリュードフと云ふ青年が墮落した原因を次の如く述べて居る「此のやうな怖ろしい変化が来たのは全く彼が自己を信ずる事を止めて、他人を信じ世間の輩に盲従するやうになつて唯其の爲である. 然らば何故自己を信ずる事を止めて他人を信ずるやうになつたかと云ふにそれは自己を信じつゝ生活する事は甚だ困難であつたからである」と. 然り然れどもラグビーメンは決してネフリュードフではない. 少くとも我が天中O. Bの同志に於ては左様ありたいと思ふ. 即ち我々がラグビーを楽しむ時に於ては其の楽しみたるや近時世間一般の転落しつつあるとは反対に必ずしも技其のものよりももつと高い処でありたい. 前に走り横に拡がる事をばかり知つて我が天中ラグビーを益々卑く其の望む処を型のみにしてはならぬ. 奥に深く上に高く秀づる事を知らねばならない.

熱烈なるラグビー精神は人生に対する一個の信念である. 然し此の信念たるや死したる信念ではない死んでゐる信念に

は冷熱がない。肥瘠がない。動静の別がない。昇降の変化がない。されど活たる信念は時に昇る事あり、降ることあり、動くことあり、静かなる事あり、非常に肥ゆる事があれば又至つて瘠せる事があり昨日まで熱かつたものが今日急に冷めなくなる事もある。恰もラグビーのプレイ其のものが多種多様の変化に富んでゐるが如きである。故にあまり得意になつて威張つてはならぬ。さりとて失望して自暴自棄になつてはならぬ寧ろ之は活きた信念を持つてゐる証拠なりとして感謝し何処迄も不退不転人生に対するラグビー精神の真隨を極める為に気魄ある精神生活を続けねばならぬ。斯して行く事に因つて我々はラグビー精神が單なる人心改造論で終る可きものでない事を知るであらう。英国青年の社会に対する熱烈なる関心はラグビーを生んだ。ラグビー精神の期する処は窮極に於ては貧しき者に福音を伝へ庄へらるる者を放つの精神でなければならぬ。世の智識を有する者、財産を有する者の多く自己の天分を過当に価値づけ此等を有せざる者を過度に輕視し自らを順境に特權づけると同時に他人を逆境に宿命づける彼等は人心改造を唱へ道德宗教を説くそれは上品高尚ではあるけれどもかの食ふや食はずの境遇に浮沈し狭い家で疊数よりも多い家族が共棲してゐるやうな人達にとつては果して何の甲斐があらうぞ。どうして彼等に右の如き教くを聞くだけの余裕があらうぞ。ラグビー精神の目指す処は最後於ては之等の人々に迄及ばねばならぬ。

即ち眞のラグビー精神を把持せる者とは少くとも單に自己一身の精神的鍛練を爲すに止らず進んでは不幸なる弱者が無慈悲なる強者の為に無道の圧制に苦しむを見る時は憤然として己が面に唾せられたるが如くに嚇怒し彼一度正しきに服する時は敵と雖も欣然として之を迎ふる底のある人物でなければならぬ。

以上述べ来りたる処唯断片的片言に過ない。然も自分自身に於ては常に向上の一路を指すと雖も豈能く其の説く処を自

ら行ない得たりと云んやである。読者若し其人を以て其の言を棄てずんば我が本懐之に過ぐるものはない。

吉慶のページ

今後＝結婚される方は一応O、Bの方に御通知下さい。又結婚後御子達の出来た時も御一報下さい。このページに掲載して会員諸君と共に喜びを頒ちたいと考へます。

本年度既に結婚されし方……………松川秀男氏 斎藤権三氏
婚約中の方……………三島 實氏 谷口敏夫氏
物色中の方……………中井次郎氏 糸岡康博氏

この他で未だ有ると思ひますが私の知つてゐるだけを戴せましたのでどしどし御知らせ下さい。

濠洲チームに就て 慶大現選手 伊藤 英夫

二十数日間の日本滞在と四勝三敗の戦績を残して、波の彼方に去つて行つた濠洲学生選抜チームが我々に教へたものは何んであらう？

関西の事はいざ知らず、関東に於ける彼等の最初の試合は二月一日の対慶応の一戦であつた。そして明治、早稲田、全日本と戦ひ二勝二敗。

来朝前に思つてゐた程の強いチームではないが、各人が自己の任務を忠実に尽してゐた事は確かだ、フォーワードの見事なるバックアップはたとひ日本チームがそのTB線を突破しても彼等に依つてくひとめられてゐた、バックスの攻撃に対するスピードあるダツシュ、防禦としてのあざやかなタックル等学ぶべき点が大いにある。殊に主将のフルバックウェストフィールドは常に良い位置に居り、巧みにバックラインに加はつて攻撃のチャンスを作り出し、又正確なるキックと堅実な動きとでゴールを守り、味方のメンバーに後顧の憂ひを

無からしめてゐる

そのプレイ振りは恐らく現在の日本のチームには見出す事が出来ぬだらう。又ファイブ、エイスのクラークのデフェンスに対する素早いダツシュと正確に低く強く跳び込むタツクルにはスタンドで見ても胸がすうつとする。セコンドローのマツクウィリアムは最前線にあつて、味方のFWを指揮し何時もよく活躍してゐた。

彼等の特長であり、日本のチームに無い3 4 1のシステムを一度でも見たいと思つてゐたが、全関西の時のみに用ひ、背が小さく、且つ腰を低く組むことの出来る日本のチームには適しないとして、それ以後使用せないの、見る事が出来なく非常に残念だつた。

彼等の欠点はドリブルとルーズ、タイトに多く見られた、ドリブルは前年来朝したカナダチームと比較して殆んど利用せなかつたと云つても過言ではあるまい。タイトに於ては日本のどのチームにも押されて大半球を取られてゐる、ルーズに於ても亦然り、しかし常に出来得る限り球をバックへ渡し、戦ひをオープンへ導かんと努力してゐるのが見られた。又毛唐共通の逆モーションの欠陥が多少見られそれが対明治に大変ひどかつた。もつともグランドのコンデイションが悪かつた事も原因ではあらうが、あの時は見てゐてもハガユイ程彼等の体の自由がきかなかつた。大きな体がコロコロと自分の力で顛覆へつてゐたのに同情せずにはをられなかつた。それ故あれ程の大敗を喫したのである。

対早大に吹かれた監督マーチン氏のレフエリー振りは日本の、やや日本式にかたまりかかつた現在のレフエリー振りに一脈の新鮮さと、新しい研究の余地を発見させてゐる。インターフェアを重要視し、リメンによく気を付け、それでゐて、少しぐらいの反則にゲームの進行をさまたげる事なく、面白く展開させやうとしてゐるのには感心の外はない。

暖いシドニーから来たこのメンバーは気候の変化とか、グ

ランドコンディション、長途の疲労等が幾分実力に影響したであらうが、大変に強いといふチームではなかつた。がしかし彼等に依つて学び得たるものの最も大なるものは技術上の問題ではなく、勝敗に拘泥せずして、堂々と、しかも綺麗なゲームをする即ちラグビーの真精神である。

昭和九年度の天中より 主将 伊藤 素義

昭和九年度のラグビーシーズン将に來らんとし、今や我等天中蹴球部も「今年こそ」と雄飛の準備を勧めております。

本年一月二日榮ある全国大会に於て甲子園原頭に無念の恨をのみしより早や六ヶ月我等蹴球部員の頭には唯復讐、全国制覇をのみ考へて今日迄進んで來ました、その間十四人もの多数の卒業生を三月に送り出していさゝか淋しさを感じましたが、その後着々とメンバー編成につとめ一意専心ラグビーに精進して來ました、必ずやその報ひ現れて「巧成るの日」あるを信じて疑ひません。

十四人もの卒業生を出したなら「今年は?…」と思はれるかもしれませんが私達は少しもその弱味を感じません、本年の天中チームは潑刺たる元氣と敗れじとの心念を持つラグーマンの集りと信じてゐます、故全国大会優勝の榮は我等本年度チームによつて成されると信じて止みません。我々部員一同片時も仇敵好敵、天理、北野を忘れません、堂々彼等を撃破せんとの意氣のみです、未づ大阪予選大会を次いで全国大会を!……北野にはトロフィー奪還の務あり天理には年来の恨ありです、「秋田工業、京一商何者ぞ彼も又中学生、我も又中学生なり いかでこれが破れざらん、」です 彼等如何に強くとも我に諸先輩の築きし榮ある桃陰の歴史あり、天中魂あり加ふるに先輩諸氏及び校内天中生の一致共力の後援あり、人の和此れに越えるものあらんや……

さてチームは今言ひました様に殆んど新人のみです、です

から本年度の成績は今の処全然白紙です、それ故反つて先輩諸氏の御指導と我等の努力によつて必ずや成功を見ると確信する次第です、今までの試合を見ますに選手達には気力はあるのですが唯ラグビープレー上の重要点に不解の所が少なくない為に敵に陥れられ易い感があるのですからどうか先輩諸氏の暇あり次第天中へ御来校あつて指導して下さい事を願つて止みません、選手一同は今教へられる事は自分達が白紙であるだけにそれだけその教へられる通りに覚え込みますから例年より反つてよい素質を持つチームとなると思ひます。本年も例年の如くFWが強く破竹の勢を以て敵を粉碎せんとし古豪村田、朴等を第一線とし新進浜口、吉田、古市等一騎当千の勇士が充満し戦を有利に転開しH、Bには高田、丹後の巧者ありT、Bにも蒲生以下健闘の士ありFB宮崎はチームを泰山の安きに置いております、しかし技術は皆未だしの感を多々感じさせられます、漸次その心配は無くなるものと思ひますが、又本年度も夏期合宿練習をやりたいと考へておりますからぜひ多数お出で下さる様希望致します、場所時日等くわしき事は後日又お報せ致しますから唯だ八月中旬以後にお暇を作つておかれる様お願い致します。

昭和九年度の活躍を前にして今申し上げました如く本年も又新人多しとは云ひながら先輩諸氏の御指導と団結力の強さを以つてすれば敢て昨年に勝るともおとらず全国制覇を成し得ると誓言致します、故に一層の御後援をお願い致します、我等部員も又先輩諸氏の伝統をきつづけたい様邁進する積りです、では次に本年度予想メンバーを記して擱筆致します。

(弧内の数字は学年を示す)

(5)	(5)	(4)	(4)	(5)	(5)	(3)	(4)	(4)	(4)	(5)	(4)	(5)	(2)	(4)	(3)	(4)	(4)	
村	朴	佐	吉	伊	大	小	古	吉	平	浜	高	丹	宮	鈴	宮	小	蒲	高
田	原	田	藤	橋	西	市	田	川	口	田	後	崎	木	越	西	生	井	
FW										HB		TB			FB			

昭和九年度

平井 宏

一、他の競技を行ふ事

会員諸氏は中々ラグビーばかりでなくあらゆる運動に秀いでてゐる関係上今年より野球、サッカー、テニス等の対外マッチをやつて会員諸君の親密の度を増したいと考へて居ります、何れの運動を問はず相手見つかり次第申込み下さい、諸君に通知して大いに奮闘して戴きますから、何卒よろしく。

一、ユニホーム（個人持ち）作成に付いて

和歌山遠征のみぎり決定しました個人持ユニホーム作成致す事になりましたからどしどし御申込下さい。一着（ユニホームのみ）金四円也で半毛の最上品になつて居ります。

一、天中O、B練習日

練習日は木曜と決定して居りますから是非皆様木曜日には天中へ行つて楕円の球と親しみそして天中現役を御指導下さる様お願いしておきます。

一、四国遠征

本年は二月十日十一日と休みが続きますのでこれを利用して四国松山に遠征したいと考へます、九日夜出発で十日に二試合、十一日に二試合、都合四試合をして十一日の夜帰る予定です。

大ぜいのO、B諸兄が舟に乗り又共に寝て親しむ様が眼の前に見える様では是非決行する考へで居りますから、O、B諸兄は今から十日十一日は四国行きと云ふ予定を立てられて皆々出席されん事を今からお願いしておきます。

四試合の内には三十才以上の人でチームを作り一試合する予定ですからO、B中のO、B軍も元気で御参加下さい。一寸サーティオーバー軍のメンバーを書いてみませうか、

糸岡 松尾 上田 三島 寺戸 谷口 阿部 松川 三好 村山 前川 巖井 村上 井上
健次郎 直造 猛實 敏夫 幸作 秀男 深平 仁博 栄成 喜二 郎政 郎

補欠、沢田捨次郎、棗田芳春、植田光治、平井宏、等

紹介のページ

平井 宏

又々ざつくばらんに紹介しまして御怒りをうけるかも知れませんがその点は御許し下さい、今度若い連中のを一通り書いて見まして、直感した事は天中時代うんとラグビーをやつた人が上級の学校に進んでやめてしまつてゐる人の多い事です、これは中には体の悪い方もありませうが皆様の一考を要する点だと考へます、不肖私の眼からこの人なら大学へ行つて、ものになると思つた人が皆多くは途中でやめて居られますがその真意を疑ひます、願くば天中でやられた方が皆上級の学校に進まれ、その方々が上級学校の中心になつてラグビーをやつて戴く様御願ひ致しておきます。

井上成一 天中十九回卒業京大出身今大軌電車の株式係に居られ大軌ラグビーのスタンドオフ。

隅田角治 二十八回小幡氏等と同輩姫高ラグビーで名をなされたが京大ではやられなかつた今取引所へ御出勤。

山田信雄 通称チンコ（チン二世）糸岡君の次のキャプテン秀才三高を経て東大法科に入る、三高時代から体弱りラグビーはやらないがラグビーに關する本なら一通り読んだ男。

小野木唯夫 山田時代の名T、Bセンター浪高を経て京大に入る、彼も体弱く今はラグビーの練習もされない由今年卒業東京にて就職。

岡本徳蔵 通称象、小野木君と二人でT、Bセンター当時超中学級と定評された人、慶大に行きラグビー

をやめたが彼が慶大に行つたのが誤りで彼は大阪商大行きの人だつた、今自家の家業に励んで居るとの事.

梅沢不二夫 小野木君と共に浪高の重鎮たりし人、天中時代は中々わんぱくの様に見受けられた.

馬 淵 碩 通称マブ一名アク アクの強いので戴いた名、山田時代の名フルバック大高医ラグビーの始祖、併し何を云つてもお医者はんは暇がなかつたらしい、今岡山医大で小児相手ではアクも出ないだらふ.

脇 野 義 光 山田時代のバックローセンター、早大中途で退学何処へ行つたのかと思つてゐたら已に満洲の官吏になつてゐた.
今後満洲国のため将来又日本のために充分尽して欲しい.

斎 藤 権 三 山田主将の後を受け天中黄金時代三回目の主将関学に入り、よく関学を関西に於ける今の地位までにした人、通称サイゴン今満鉄に入り本年相思の彼女と結婚大連の星ヶ浦でスキートホームを作つてゐる幸運児.

山 内 安 朗 斎藤主将時代の超中学級の名フッカー、今満洲の国際運輸で一働き中との事.

山本幸之助 斎藤時代のマネージャー斎藤をよく助け黄金時代を築かれた人、今は実家で瀬戸物屋の番頭はん通称アクビ.

荒 賀 嘉 樹 斎藤時代の名T, Bウイング早大に入り、たちまち認められて早大T, Bの重位についた人、今年卒業東京の新聞聯合社に入社.

奥 田 致 一 斎藤時代の名フルバック一時三重高農に入り高農ラグビーの重鎮たりし人、弘前高校途中で病気のため退学今家で静養中.

- 御 牧 元 義 斎藤時代のセカンドロー岐阜高農の重鎮たりし人、今宝塚植物園で自然を相手のサラリーマン。
- 島 田 重 道 天中時代一時やつて其の後勉学に力を入れ浪高に入り本年あたり不振なる京大を背負つて関西のため奮気一番押し寄せる関東勢を喰止めて欲しい通称は犬。
- 井 上 元 幸 斎藤時代のセカンドロー通称ドンコ、陸士を優秀の成績で卒業、今朝鮮の工兵隊勤務非常時の折柄何卒御国のために勉励あらせん事を!!。
- 田 中 健 三 通称、ウマ、オヤジ等々斎藤主将の後をうけて主将になつた人、名キツカー、今鉄やの番頭さん此の頃景気がよいので、晩酌付きとの由。
- 川 西 徳 滉 田中時代名バックローセンター高に入学、一向に名を聞かず今東大法科志願して準備中との事。
- 橋 政 雄 田中時代の名ロック薬専ラグビーの重鎮たりし人、今は幹部候補生川西君と共に大学級のプレーヤーになれる質の人だつたが。
- 長 岡 祐 三 通称ハナ、ステキな鼻の所有者田中時代のマネジャー、関学本年卒業今就職口物色中。
- 村 山 潔 田中時代のT、Bウイング大会に負傷して不出場だつた事は真に気の毒だつた、福高ラグビーの重鎮たりし人、令兄仁さんの後をうけて京大に入り本年度の活躍を期待される人。
- 桑 原 好 夫 エラ田中時代のフッカー今右翼団体の闘士、あの大きなロイド眼鏡にほゝ下にくつと出たエラ正に一流の闘士だ。
- 青 山 克 巳 通称ビョウ田中時代のスタンドオフ対天理中の優勝戦の君の一蹴今も目に残つてゐる今ラジオ商会のショツプボーイ、君には房はしい。
- 中 野 正 美 通称ハリ有名なハリ中野の次男坊、ハリが縁で

兵隊も衛生隊，上海事変の時大阪衛生隊出動に
際し不幸選にもれた君の胸中や如何.

瀧 山 厳 通称キャマ，三重高農の名バックローたりし
人，今個人で温室経営をやるとかやらぬとかで
未だ船場の真中におさまつてゐる.

伊 藤 泰 運 通称インヂ，田中主将不振の後をうけ天中を背
負つて立つた男，その意気と頭の良さはよく不
振の天中を救ふと思はれたが不幸部内に動揺あ
り君の努力の無に期した事に対し同情する卒業
後花卉園芸家として志ししが今家で他の方面の
就職口物色中との事.

浜 口 隆 カンコ，伊藤時代のT，Bセンター—昨昨年よ
く天中を指導され不振の天中を又黄金時代のそ
れに返されし事を感謝すると共に今後君の関西
に於ける目ざましい活躍を期待して止まぬ.

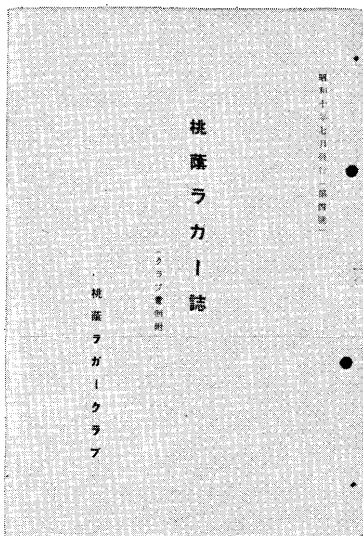
中 川 一 三 都ぞ弥生の雲紫に高唱する君の姿が如何にも君
に房はしい，大波を蹴つてのマグロ取り君の行
手は大海原願くば不振なる日本の漁業界に貢献
されん事を，天中時代水泳部の重鎮ラグビーに
好意をもつて部のため尽されし人，北海道帝大
水産科在学中.

内 山 寧 隆 伊藤，中川と共に浜寺の海岸を黒い体でぶらつ
いてゐる様は全くの三羽鳥，天中時代水泳部の
重鎮中川君と共に好意で天中ラグビーを助けて
くれた人，今は関大ラグビーのピカー通称はチ
ヤマ.

正 野 虎 雄 通称正虎，小学五年，中学四年，大高，東大
と，フルスピードで学生生活をしてゐる秀才し
かもラグビーは中学一年より今日東大にてもレ
ギュラーとして出場と云ふ，真の秀才，本年度
の君の活躍や如何に.

大谷正宜 天中時代病気で途中でラグビーはやめたが三重
高農に入りラグビーをやり将来を望まれてゐた
が又々病のため出来なくなつた事を君のために
惜しむ、通称ダイコン。

注意＝八木久米一君、宮崎幸次郎君、泉原修君、及び又三十
四回以後は次回に紹介致します。



昭和10年7月発行

桃陰ラグカー誌——第四号

桃陰ラグークラブの組織的結成と

天中コーチ団の設置に付て 井上 二郎

我が桃陰ラグークラブ即ち旧天中OBラグビークラブは母校天中ラグビー部に次で過去十有余年の歴史を有するものなるが其の組織内容たるや全く唯単に天中卒業生にしてラグビーの好きな者が寄り集つて共にプレーを楽しむと云つた程度に過ぎなかつた。もつとも嘗て天中ラグビー後援会なるものが一時組織された事はあつたが之とても今日の桃陰ラグークラブの母校に対する積極的態度とは比較すべくもない。さりながら我々の過去に於ての種々様々なる工作は今日の桃陰ラグークラブを嫌が上にも作り上げずには置かなかつたのである。純情忠実卒直然も天下に比類なき人の和を以て集る我等の同志は現在に於て百三十余名を数ふる事が出来る。俄然昨秋来大いに同志の集りを拡大強化し母校天中チームを強豪ならしめ引いては斯界に貢献をなすべしとの声が盛かんになつて来た。天中OBより桃陰ラグークラブへの改称本年二月の松山遠征を経て遂に五月十四日会員総会を開催し全会一致を以て別稿所載の会則制定に至る迄此間之に苦心されたる幹部諸氏の労もさり乍ら之一に全会員諸氏の協力熱誠の賜物に外ならない。不肖右会則に基き最初の会長に就任し別稿の如く委員諸氏の出馬を乞ひ愈々本格的に本会の使命に邁進するを得るは此上ない喜びである。本会の今回の組織化は会則を御

覧下さる大方諸賢の大抵気は附かるゝであらうやう非常に中央集権的である。之即ち一団体の中央に其の組織当を得たる場合には生じつかの多数政治よりは其の各方面に於て絶大なる成果を挙ぐるを得る事を検討したる結果である。我が桃陰ラグークラブに於ては之より永き将来の間其の人を得る事必ずしも難事ではない。ラグビー競技の本質が其精神に重さを置くが故なるにより必ずしも然るのみならず今日迄に我々のグループの間に自然に築き上げられたる桃陰ラグー精神然も益々それを磨き上げんとする各員の努力が愈々其の人を生み出す事を信じて疑はない。即ち少くとも桃陰ラグークラブの秩序ある組織の下に諸氏の信頼を受けて最初の会長として就任したる自分は桃陰ラグークラブとは天下に向つてラグビー精神を確り把持したる人材を送り出す原産地であると言明するを得るを誇りとする。我々のラグビー技術或は競技の方法は凡そ社会の事物現象とは反対に我々の精神から生み出されたのである。我々は此の精神を我々の後援する母校天中にも充分に了承さしめたい之即ち今春五月桃陰ラグークラブの組織化に次で天中コーチ団を設置したる所以である。天中コーチ団の意図する処は其の精神に於ては桃陰クラブと軌を全じくするも其の組織に於ては大體に於て別個である。即ち我々は天中ラグビーチームをして良きチームたらしむると共にチームの各員をして尊敬すべきラグーたらしめん事を第一の目標として居る。此の目標が終局に於てチームを強くし全国に覇を唱ふるものとなる事を確実に期待してゐる。天中コーチ団は之を頭腦的コーチ団フキールドコーチ団に大別し如何なる些少の事柄も極力之を討議練磨して然る後にフキールドコーチに移す事を原則として居る。先づ第一に天中チームの精神的統一、練習時間の短縮化練習能率の増進等を目的として今春来天中コーチ団は全能力を傾倒して之に当つて居るのである。此上は我々の企図する処が如何なる点迄発展し得るや桃陰ラグークラブ諸氏の熱誠なる批判と鞭撻を待つより外に

ない。

以上を以て大体此の稿を終るのであるが最後に今一言駄足を附け加へさせて貰ひたい。それは我が桃陰ラグークラブが今回の組織化を以て簡単に之で満足してゐるものでないと云ふ事である。先般来聞く処に依れば我々の今回の此の結束此の進展振りに刺激されたか如何かは別問題として天中卒業生を以て我々と同様の趣旨の下に桃陰野球クラブ桃陰水泳クラブの実現されたる事を聞く。誠に愉快なる現象ではあるまいか。即ち我が桃陰ラグークラブは進んで之等の兄弟と提携しなければならない。換言すれば我々はおつともつと全天中卒業生に呼びかけもつともつと全天中卒業生にスポーツマン的な精神的覚醒を要求しなければならない。近き将来に於て我々は全天中卒業生をスポーツを以て一丸となし全桃陰クラブの名の下に社会的にも意義ある団体たらしめん事を夢見てゐる。

我が桃陰ラグークラブは単なるラグビー団体に満足すべきではない。今後共に限りなき進展をするであらう処の純正ラグー精神を以て全天中をイデオロギー的にリードしなければならぬ。即ち我が桃陰ラグークラブは天下に有為の人材を突進せしめる源泉であらねばならぬ。以上

注 意

別紙住所録ニモ記載シテアル如ク大阪予選ハ一回戦ヨリ強敵天理中ト顔ヲ合ス事ニナリマシタ本年度ノ天理中ハ中々アナドリ難イ大敵ナノデ対天理中戦迄出来ルダケ天中行ケル人ハ行ツテ下サイ

相手が無いノデ困ツテ居マスカラ

又当日ハ勿論全会員ノ絶大ナル声援ヲ期待シテ居リマス

天中コーチ団ヨリ

孫子の兵法とラグビー

阿部 幸作

兵書と云へば昔から沢山あるが孫子を始め呉子、司馬法、尉繚子、六韜、三略、太宗問答等の七書を以て其の優なるものとされて居る。私は今此処に此の中の最もよく知られて居る孫子を引張り出して来てラグビーと關聯せしめて断片的な感想を述べて見たいと思ふ。従つて勿論孫子の講釈でもなければ漢文の解釈でもない。然も極く一部分を抽出して居るに過ぎない。

陸軍戦闘綱要第一に「軍ノ主トスルコロハ戦闘ナリ云々戦闘一般ノ目的ハ敵ヲ圧倒殲滅シテ迅速ニ戦捷ヲ獲得スルニ在リ」とある。誠に能く適切に戦闘の目的を云ひ現して居ると云いたい。私は此処にラグビーを一個の戦闘なりと云ふ仮定の下に此の話しを進めると同時に「敵ヲ圧倒殲滅シテ迅速ニ戦捷ヲ獲得」せんが為には並々ならぬ平常からの苦心が要る。然も其の苦心たるやラグビー競技の上に現はれる技術上の事よりも「敵ヲ圧倒殲滅」する味方の精神力の上に果た又一チーム一団体内に於ける統卒和合の中により以上に真実に真面目に考へなければならぬ要素があるに違いないと考へる。此の要素を孫子は至極端的に然も底知れぬ含蓄を味はして述べてゐる。孫子の兵法はグラウンドに於けるチームの動き方を示すものではない。むしろ其の平常の起居動作に於て勉強に於て職業上に於ての大きな人生觀、完膚無く敵を圧倒殲滅する為のファイティングスピリットの養成法を示すものであらう。

「孫子曰く兵は国の大事、死生の地、存亡の道なり。察せざる可からざるなり」

何事もよく考へないで元氣だけ張り切つて飛び出す人間の事を暴虎馮河の勇と云ふ。事いやくも兵に關する事は死生の地存亡の道じや充分に考へてやれと冒頭第一孫子は空元氣と批判無反省の態度を警しめて居る。後漢の光武は一戦を起

す毎に鬢髪白きを加へたと云はれる程によく考へて戦を起した。ボールを持つて無茶苦茶に飛び出すのがファイティングスピリットではない徒に試合の場数を踏んだつて真の戦闘精神が出来るものでない。平素の研究充分の練磨確りした反省の上に立つて此処と云ふ時に猛然突進する者こそ真の勇者である。それ程ゲームは難しいもんだ少くとも其のチームが代表する学校等にとつては死生の地存亡の道だ確り考へてやつてくれと云ふのが孫子の趣意であらう。

「一に曰く道。二に曰く天。三に曰く地。四に曰く将。五に曰く法。」

恐らく孫子の兵法は此の五者が其のエッセンスではないかと私には考へられる。道は「士卒をして生死一つ心あらしむべし」で之は一軍の主将たる者の心得だと云ふ事になる。何と云つても人間には徳が無ければならぬ。徳とは常に自分の人格の向上を計画する精神的工夫の事を云ふ。次には味方の為には献身犠牲を志す事を云ふ。人に「死せよ」「タツクルせよ」と云ふ前に自分がそれをやつてのけねばならぬ。然し又いくら将が之をやつても従ふ者が何も感じないと云ふやうでは何にもならぬ。其処で孫子は之を大きく道と云つたのだ。假令チームの一員にでもラガーとしての面目を傷つける如き不心得者があつてはならぬ。一人の精神的落魄者のある事はチーム全体の道がゆるむ。之では真の勝利は難しい。よし勝つても決して其は輝しき歴史に載せらるべきものでない。結局道とは一軍揃つて徳の人になる事だ。二に曰く天三に曰く地とあるが孟子は「天の時は地の利に如かず地の利は人の和に如かず」と明快にやつて退けて居る。日本海の大海戦に如何に天が味方してくれて天気晴朗にして波高くとも日本軍がホームグラウンドたる日本海で戦ふ事が出来たにしても上下一致一丸となつて当る人の和を得てゐなかつたならば果して天の利地の利は役立つたであらうか。人の和の前には天の利も地の利も及ばない。チームがほんとうにまとまつて

各員が相互に信頼し合つてチームは何処へ行つても如何なる時にでも最も強い。結局は孫子の二と三は一の道に吸収されてしまふ。四に曰く將五に曰く法とあるが法は曲制官道主用とあり要するにチームの編成を如何にするかと云ふ事で此処で之よりも力説したいのは將である。人の將たるものはなかなか難しい。之も亦一の道に合体すべきものであるが特に引き出して述べられてあるのは之が難しいからであらう。將は智信仁勇嚴なりとある。ぼんやりでは駄目だ徳がなければいかん犠牲的精神も必要だ億病卑法ではいかんづぼらでもいかと云ふ事になる。將たる者はなかなか並大抵の修養の仕方ではチームが思ふやうに活躍しない。大いに御研究を望むと云ふより外ない。此の中でも特に難しいのは人の將たるの即ち親分たるの換言すれば自分の周囲に完全に優れたプレイヤーを引きつけそれを自在に使い廻す事の出来る徳を作り上げる事であらう。世界一の事業家カーネギーは其の臨終に際し次の如く遺言した。「自分が死んだら墓標には何も書かないでよい唯次の事を書いてくれ即ち『此の墓の下に眠る男は何も知らない男であつた。然し彼は自分よりも勝れた人物を彼の周囲に集める事の出来る才能を持つて居つた』と」カーネギーは孫子の所謂將たるの徳を備へてゐたらしい。

「彼を知らずして己れを知れば一勝一負彼を知らず己れを知らざれば戦ふ毎に必ず敗る」「彼を知り己れを知らば百戦危ふからず」

当り前の事だがなかなか出来難い事なのである。世間には往々にして人を知るよりも自分を知らぬ人間の方が多い。要するに何も判つてゐないのが一等恐ろしい。戦ふ毎に必ず敗れてしまふ。知らないのに知つてると思つてるのは之より恐ろしい。戦い始まらざるに敗北目に見えて居る。いやしくも一戦を交へんとするならば味方の力と敵の力を充分知つて置かねばならぬ。否戦闘の真最中に於ても少くとも幹部級に於て適宜此の判断を下し有効適切に一軍を指導せねばならぬ。

然らば百戦危ぶからずで常勝の名を専断する事が出来るであらう。自分の力は知つて居つても敵の欠点が目につかず一勝一負互格の勝負は余りばつとしない。之又結局よく考へて充分注意力を働かしてゲームをやれと云ふ孫子の趣旨であらう。

「昔の善く戦ふ者は先づ勝つべからざるを為して以て敵の勝つ可きを待つ。勝つ可からざるは己れにあり。勝つべきは敵に在り」

之は一寸文句がひねくつてあるから意味が解りにくいやうに思ふが何でもない。要するに戦闘の健実主義を主張したものだ。一度勝を制したならば断じて少くとも其の一点に於ては最後迄敗かされない要慎がなければならぬ。見事なコーターパスでトライしたのに次に同じ事をやつたらもう欠点を見抜かれてインターセプトされたと云ふやうでは勝負にならない。自ら守る処あつて決して人に敗かされない要慎をせよと孫子は注意してくれてるのだ。先づ勝つ可からざるを為してとは敵をして我に勝ち得ざるものとする即ち敵をして乗ずる機会や虚を無くしてしまふ事である。息もつかせず攻め立てるのも此の一方法であらう。味方の攻撃ラインの整備をする事も一方法であらう。然して味方の乗ず可き敵のあらを見て見る。要するに右に述べた如き敵に喰い込まれない要慎準備をするのは敵にやられて氣附くやうではいかん。己に在りで自分の方からよく先づ以て考へて行けと云ふのだ。勝つべきは敵に在りで今度は我の乗ずる虚を造ると否とは敵側にあるのだから我は之を造らしむる如く我の虚を無くして敵に働きかけて行かねばならん。味方のコーターパスはフォワードの援助と相待つて至極完全にして敵が如何にインターセプトせんとしても変転万化少しも虚がない。のみならず却つて敵はインターセプトの失敗によつて其の虚を我に乗ぜられたと云ふやうになりたいものだ。

以上書いたのは孫子のほんの一部分であるが次から次へと

こんな風に書きまくつてゐたら限りがない。否もつと書きたいのだが初秋の夜も大分更けたから此辺で格筆する。孫子はこんなもんだと思つてもらつたら結構だ。最後に私は此処に孫子を引き出して此の駄筆を揮つたのは唯々孫子の精神的訓言を以て我々桃陰ラグークラブ員の精神的向上をお互に考へて貰はうと云ふ大それた野心を抱いて居るからに過ぎないと云ふ事を云はして頂きたい。漫筆的な愚文読んで少しでも考へて頂ければ幸甚此の上もない。

松山遠征記

阿部 幸作

桃陰ラグークラブ始つて以来最初の遠征たる松山遠征は昭和十年二月十、十一日の休日を利して行はれた。従つて事件は半歳も以前の出来事に属し然も暑苦しい此の三伏の候に此の遠征記の執筆を命ぜられて居る我輩たるや元来記憶力は良い？方ではあるが時間の経過と暑さの加減で如何しても松山遠征思い出し記にならざるを得ない事を予め断つて置く。

抑々此の拳たるや昨年の六月頃から云い出されて居つたもので交渉は僕が引受けてやると巖先輩引受けるは例の名調子で引受けてくれたのであるが本年の一月になつても一向に交渉が進展しないだけとうとう小生が交渉方を譲り受けて松山の二宮氏に折渉した処が早速に万事OK。其処で一党の連中に往復端書で案内状を出した。忽ち承諾参加の返事が殺到して来ると思つてゐたのが大間違ひ十二三名参加を申込んで来ただけで待てども待てどもさつぱり返事を寄さない。断つて来るであらうと思つてゐた連中が断り状を寄すのみだ。此の時の小生の気のみ方と云つたら一通りではない。大体桃陰クラブの連中は斯様な事にかけては至極づぼらではつきりしとらん。なつとらんぞ！以後気をつけてくれ此の機会に鬱憤を晴して置く。小生など商売は暫く休みにして戸別的に勧誘し歩いたが中には「行く云ふ事は返事出さんでもわかつてゐる

やないか」など云ふ全く呑気な不屈者もあつたが兎も角島田君が速達で参加を申込んで喜ばしてくれたのをきつかけに漸く総勢卅六名、先方の宿屋へ山をかけて卅五六名と云つてあつたのが当つて二月九日午後七時天保山棧橋へ顔を揃へた時は嬉しくも勇しかつた、やがて井上監督が颯爽たる英姿を現す頃には我輩も今迄の苦勞をすっかり忘れてしまつた、賑々しいドラの音に急ぎ立てられて一同乗船井上令夫人令息山本幸之助君等に見送られて愈々花々しく征途に上つたのである、何しろ精力の有り余つた連中ばかり卅名以上も引張つて行くのだから我々の氣苦勞一通りではない、然し其の割合に親の心子知らずと云ふ程でもなく統卒のとれてゐるのはさすがに同志同窓の集りなればこそと嬉しく思ふ、けれどもさすがに船中の賑しさ豪華船錦丸の三等船室の一ブロックを全部我々で占領して将棋が始る唄を歌ふ手品をやる、此の処正に一門徒党団欒の最高潮である、だが明日は試合と云ふので追々と一同何時の間にか寝に就く、誰かが枕と間違へて柱にゴツンと頭を打ちつけ物すごい音をさして寝たのを尻りに皆寝てしまつた、午前五時頃船が今治に着いた時松山ラグビー聯盟幹事市村敏夫氏が「お迎へに上りました」と乗船して来られたには恐縮した、愈々船が高浜港へ入るので声高く吠え立てて完全に一同を起床させてしまつた、午前八時廿分松山ラグビー聯盟相原、二宮、藤井、鮎田、諸氏の出迎へを受けて一同上陸直に電車を連ねて松山市道後温泉前岩井屋旅館に入る、午後の試合迄約二三時間寝て置け寝て置けと云ふのになかなか寝ない船の中でうんと朝飯を食つたくせに又昼飯もうんと食ふと云ふ始末、午後一時愈々試合は開始される事になつた道後ヶ丘グラウンド迄は宿から約四五丁グラウンドコンディション甚だ悪い雨後の泥濘は戦前既に苦戦を予想させた、第一次戦は松山クラブと云ふ松山のOB軍を向ふに廻して当方も年寄りを主力として次の如きメンバーで相手をした、

田中	広瀬	斧原	橋田	島田	谷口	松川	阿部	巖部	小幡	山田	中井	長沖	中野	竹束
FW						HB			TB			FB		

松山軍案外に当りが強い。何を田舎チームと思つてゐた予想を裏切つて然もなかなかあの手この手を充分に承知してゐる。中央のスクラム後勿ちドリブルで蹴り廻して来る。泥の中でねて止めなければならず顔も手も足もユニホームも全く泥々になつてしまつた。然し五分松山陣前でルーズとなつたのが幸いにしてスツポリとスクラムハーフ巖先輩の手に飛び込んだ。彼氏得たりとばかりスクラムサイドを衝けば敵はルーズに氣をとられてゐたのか妙に其の儘抜けてしまつて巖先輩遠征最初のトライを獲得した。話をすれば自家広告を拡げ廻す巖先輩をして之は又宣伝ポスターの十枚もくれてやつたやうなものだ。泥で以て顔面神経を硬らせ乍ら巖先輩意氣揚々と中央線へ引き返して来る。何れ劣らぬ自家広告屋の谷口などは嬉しさの中にも今度は俺だと云はんばかりの顔をして居る。然し此の一トライで試合はぐんと氣楽に展開した。案の定次には谷口がトライした。ペナルティキックをダツシュしてトライしたのだが自分一人で十五人を向ふに廻してトライしたやうな氣持で居るらしいから面白い。天狗揃いの我が軍の連中其の後は釣瓶打ちにトライを挙げ島田のキック大抵コンパートして得点を開き長沖中野等の現役並の奮戦は此処に詳報する迄もなく我が桃陰クラブの方々ならば目をつぶつて想像して見給へ勿ち戦況眼前に髣髴とするであらう。読者諸氏須く臉のラグビーを味つて下さい。然し前半廿分頃谷口ゴール前で我輩にパスした球を我輩とつて突込んでトライしたと思つたのに無惨敵軍に強奪され当然トライと思はれしを逸した惜しいのやら中井が球を抱へて堂々と敵のインゴールへ飛び込んで置き乍ら首筋をつかまへられて引き戻されたりした珍芸などは臉のラグビーでは味へないから特に此処に断つて置く。結局スコアは四十八対零で五十を越さなかつ

たのが残念だつたと一同フラフラになつてくるくせに口だけは達者である。

次に第二回戦は松山地方の No. 1 愛媛師範を相手に我軍は学生を主力として左のメンバーで対戦した。

林	内	上	吉	瀧	寺	尾	石	荒	北	福	野	潮	今	簀
											長			
山	原	田	山	戸	崎	田	賀	條	井	瀬	田	井	本	
FW							HB		TB			FB		

之又敵軍なかなか強い。出来るだけ食い下つてやろうと云ふ意気当る可らず若手のチャキチャキばかりを並べてある我軍忽ち押しまくられて味方二五碼で一進一退混戦を続けて居る。斯ふなると収まらないのはスタンドで見てる連中「若い奴はラグビーを知らんからあかん」などとえらさうに批評兼声援をやつて居る。然しそう心配したもんでない十分桃陰陣三十碼のルーズの球我が軍に出で荒賀北條から福井に渡り我が軍独自の鮮かなコーターパスで勿ち敵軍に殺到潮田ゴール直下にトライしたのを手始めに北條又もやトライ此間敵軍我を十碼に押しルーズの球をドリブルで蹴り込み素早く押へて一トライを挙げたのは誠に称賛に価した。斯くて前半八対三とは些か情けなかつたが之はむしろ愛師の健闘に桃陰クラブの若手連中が敬意？を表したのであらう。後半は相手方の疲労に依つて二十一点を獲得した。戦況は前例に従ひ読者諸氏の臉のラグビーで想像して貰はう。FWでは内山、上原のふとつたのやら滝山のヒヨロヒヨロとしたのやら吉田、寺戸、尾崎、林と何れ劣らぬモツサリしたやうなのが相当すばしく仲良く活躍した。HBは兩人共些か少さいがなかなかよい。TB、FB等の動く有様之等は何れも読者の想像通りだ。スコアは二十九対三で些か点が足らぬ。然も三点を献上したのはしやくだつた。けれども此の連中は前のメンバーの連中と較べてえらさうに云はんから書くのも之位にして置く。試合終了午後三時半泥のユニホームと靴をぬいで宿のお向いの道後温泉に飛び込む。きれいなお湯よい湯加減一度に

疲れが抜けてしまった。湯上りに名物坊ちやんだんごをかぶりついたうまさ。之を思い出せばもそもぞと松山へもう一度行きたくなる位うまかつた。之を読む当時の諸氏けだし我輩の言を保証するであらうと思ふが如何。

午後五時半から新聞社主催の歓迎会が県庁食堂で開かれた。一同出席大盛会各々挨拶自己紹介等に松山の天狗連中に吹かれ吹き返して午後八時閉会。明日の試合も残つてゐるし一同未だ飯が食い足らぬとあつて現金なもんださつさと宿へ引き揚げてしまった。我々が心配してゐた程に夜飛び出す者もなく向ふの部屋此方の部屋と思い思いに陣取つてガヤガヤ騒いでゐる中に何時しか夢路を辿つてしまった。故郷大阪の夢を見るやうな気の利いたセンチなのはゐない。ゴウゴウと河馬のやうな響きを立てゝ明日の試合が済んで船の中でうんと飲んでメートルを挙げて居る夢位しか見て居るまい。純真ライオンのやうな桃陰ラグークラブの面々も斯くして遠征第一日の鉾を収めた。

明くれば第二日昭和十年二月十一日紀元節当日思い掛けない日本晴れた。井上監督の思いやりに依つて起きて来る迄寝させて置く事にしたらなかなかどうして起きて来ない。然し起きて来た者は町をぶらつきに行つたり土産物を買ひに出掛けたりして居る。宿の三階から二階にかけて凡そ日当りの良い処は泥のユニホームストッキングの陳列だ。玄関先は泥を洗ひ落した靴の陳列だ。処へ満洲に行つてるとばかり思つてゐた森好男がやつて来た休暇で当地へ静養に来て居るのださうだ。満洲からこんな処迄静養にやつてくるなんて尻の軽い男である。本日バックローに加へてやる事にした。冬の日とは云へぐづぐづしてる間に昼飯だ。食事だと聞くと今迄寝てゐた連中がもうちやんと起き出してるから妙である。然も朝飯と昼飯を一諸に済そうと云ふのが居る。愈々今日は当地の強敵全松山軍に当らねばならぬ。メンバー編成で此の処参謀連中しきりに協議して居るのに傍らでは相変らず女房を貰い

立ての谷口が彼一流のサイノロを発揮すれば同じ会社に勤めてる関係上慣れて居ると見えて中井が自己の未来の夢で応対するわいわいとうるさい中に一同支度に着手する。第一回戦は松山地方中等学校選抜軍との対戦だ。我が軍のメンバー次の如し

上 原	広 瀬	橋 田	吉 島	竹 口	谷 森	阿 部	中 野	藪 本	瀧 山	福 井	山 田	中 井	島 田
FW					HB		TB		FB				

第二回戦の方へ全力を注いだのと相手は中等学校と見くびつてゐたのと昨日の疲れとで戦い始めるや否や勿ち相手の捨身の突込みに味方ゴール前へ圧迫され続いて軽くスクラムトライを挙げられてしまった。スタンドの連中とても気をもんださうながやつてる連中のさすがにあつかましい者迄が一寸面喰はされた形である。漸く一トライを返したが前半五対三とは些か情なくなつてしまつた後半俄然と云いたいが一寸奮起して面白い処迄漕ぎつけボカボカとトライする。瀧山がヒヨロヒヨロとお膳でも献げるやうな恰好に球を持つて約六十碼独走トライしたりTBパスで中井がトライして鼻を高くしたり其の他島田、森、等の奮戦に上原、広瀬、竹島等の若手FWの奮闘で何とかとか球をあつちへやつたりこつちへ廻したりしてひねくり廻して居る間にノーサイドの笛が鳴つてしまつた。スコアは廿六対六である。いやもう我輩など此の一戦でヘトヘトになつてしまつた。泥中のドリブル戦は腰の曲らぬ我々年寄りには苦手だ次は最後の全松山軍との対戦だ。午後二時廿分開始我が軍のベストメンバー左の如し

林	内	斧	山	尾	石	小	寺	荒	北	中	潮	長	今	野
山	原	脇	崎	田	幡	戸	賀	條	野	田	沖	井	野	長
FW								HB		TB		FB		

総して松山軍は開始直前猛烈に突込んで来る案に違はず前半忽ち桃陰を圧したが北條等のキックで反撃され松山右陣前で混戦球左に渡つて左陣前ルーズとなり桃陰其のまま押し切

つてゴール左にトライ野長瀬コンバート之から至極順調、松山側で戦ふ中尾崎拾つた球を其の儘持つてあつさり抜けてトライ石田敵のパス失を拾つてトライ、TBパスで長沖鰻のやうにぬらぬらと抜けてトライ敵前タイトで荒賀コソコソとスクラムサイドを抜いてトライ野長瀬全部コンバートして一挙廿五点を挙げてしまつた、此の分なら先々安心と思いきや左に非ず後半の松山軍恰も前半最初のやうな調子で雪崩れ込んで来た、最も松山軍の主将仲田氏は松山女学校の先生でスタンド上からは全松山の女学生が満洲国々旗の色のやうな声を出して大声援だ、我が軍の連中若いから無理もなからうが大部分のぼせ上つてしまつたらしい、殊にスクラムサイドとハーフ及びスリーコーターの者共がスクラムへ頭を突込まなくともよいからスタンドの方をよそ見して居つたのだらうFWの連中よりものぼせてしまつた為か敵主将センタースリーコーター仲田氏に三個のトライを差上げて女学生の御機嫌をとつてしまつた、然も二つ迄コンバートし敵十三点味方も四トライしたが今度はFB野長瀬スタンドに声援されて一個もコンバートしない味方十二点後半は負け戦だ、然も味方の四トライ中一トライは石田、林、内山、今井、の見事なFWトライであつた女学校の先生後半戦疲労気のゆるみ等々をコンデンスして此処に妙に緊張し且つ考へねばならぬものがあるわい、けれども総じて良きゲームであつた事は間違いない、スコア卅七対十三此処に全試合を終つて何とも云へぬ嬉しさが込み上げる、夕陽西に沈む松山の町よ二日間とは云へ尽きぬ名残りを惜しみ惜しまれて午後六時高浜より紅丸に乗船松山ラグビー聯盟の人達を暗夜の栈橋に残して船は出て行く、何処へ、故郷大阪へ、嚇々たる戦績を残し輝しき武勲を積んで一路凱旋の途へ、

船中は全く無礼講だ飲め飲め、催促しなくとも盛んにやつて居る、歌ふ踊る、島田上原の手品較べが始る、夕食は飯のお代りで飛んだ処でストームをやつて居る、新聞社から帰り

掛けにグラウンドで写した一同の写真をくれたがそれを船中で抽籤した。全部に当てる事が出来ないのは気の毒だつた。そろそろ二日間の試合の各自の功名話しが始る。船中で新しい球にサインして此の記念すべき喜びを遠き南洋に居る伊藤君に分けてやる事にした。今夜は徹夜で帰る気でも何時しか一人二人と討死的に寝てしまふ。午前六時半神戸着会社行の連中は御勤め大事と大抵此处で下船してしまつた。万歳万歳。船は午前八時天保山着一同勇躍として上陸。井上監督を中心に此处に万歳を三唱して解散した。

思へば今回の此の挙たるや唯に松山軍と試合をしたと云ふ単なる結果に止るべきものでない。桃陰ラグークラブの遠征の愉快気楽さ面白さは既に諸君の満喫された事であらう。我々は此の上に実に云ふに云へない相互の親睦を深める事が出来た。之取りもなほさず無意識の間に於ける相互の人格の陶冶であり桃陰ラグークラブ会則第二条の目的を絶対的に効果あらしめる所以である。況んや日本ラグビー界に於て人格識見匹敵する者なき井上会長、巖総務を頂く我等は尚一層に前記目的達成に努力しなければならぬのだ。

諸君よ来年度の遠征には今年のやうにやいやい云はさずに全員挙つて参加して下さい。

新春に接した関西レフェリー 伊藤 英夫

人が人を審判する。神でなき限り必ず其処に幾らかの誤が生ずる。ラグビーに於けるレフェリーも人間である以上絶対に間違いは無いと云へない。

そもそもプレーヤーはレフェリーを兎や角云ふべきものではないが将来に於てゲームを審判する機会が無いとも限らぬ故関東チームの一員たる立場から、此の新春に関西で接した彼等に就ていささか述べてみよう。

元旦の慶京戦。思はぬ所で笛が鳴り関東流の笛に慣れた小

生等は面喰ふ事があつた。四日の慶応対三高。この時のレフェリー、斯道に長年の経験と研究を積んでをられるだけに非難するところなく、ゲームはすらすらと進行して行つた。

ラグビーに於ては実力の接近したチームの試合はレフェリー如何に依り勝敗の決定する場合がある。早稲田と同志社の一戦を見物してつくづくさう感じた。同大が明治、京大に大敗してゐる戦跡からみて早大のフイフティーンはのびのびとして試合に出場したであらう。

誰が惜敗を予想し得たか？ 前半の接戦これではいけないとあせり出したが関東と関西ではレフェリーの見解が異る、次から次へと絶間のないねばり強いチームワークで敵の混乱に乗じて常に得点する彼等が今一步と云うところで笛を吹かれチャンスを中絶される事が多かつた。レフェリーの性質をよく研究せずして試合に臨んだ事を後悔したであらう。

東西の覇者、銚子を交へる京明戦、で無敵の常勝軍明治が何故敗れたか？ それもレフェリーに原因してゐると強く主張する事が出来るでせう。もしもこの試合が関東で挙行されてゐたのならば明大は少くとももう六点（二トライ）を得て、勝敗は顛覆つてゐたに違ひない。それは前半中頃京大ゴールライン前のタイトスクラムに於て球を得た明治、ここぞとばかり押し始めた。ところが故意か、偶然か、京大F、W、はラインの上で潰れてしまつた。相手が潰ればもうそれ以上押せないのは諸兄よく御承知でせう。関東なればトライを宣言せられますがレフェリーはそれをなさなかつた。押しても駄目だと知つた彼等はタイムアップ直前、右隅にスクラムトライを完全に出来るチャンスなのに球をヒールアウトしたです。而して一敗地にまみれた様な次第。これなんかレフェリーの見解が関東のそれと甚だしく相違してゐる一例だと云はねばなりません。

早同京明の戦ひを見た吾々慶応メンバーの中には同志社との一戦を関東のレフェリーの許に於て思ふ存分活躍してみた

いと云ふ者の出来たのはさう一概に否定出来ぬと思ひました。しかし幸ひ九日には快勝するを得たが、やはりスクラムトライを一つ逃したです。

一体に関西の方はリメンをよく注意してをられる様に見受けます。関東では敵に邪魔や損害を与へなければ笛を吹く事なく、試合をそのまま続行させてゐる様です。それから気に懸つたのは、TBがパスの際小さきノック、オン、タイトスクラムになるべきをそのままに続行せられ、反則した方がチャンスを握り、時としてはトライとなつたのを見た事です。反則して得点するなんてあまり香ばしくないと思ひます。

この狭い日本に於てさへ東と西で相当笛の吹き方が違つてゐるのに、況んや民族の異つた諸外国との相違も推して知る事が出来るでせう。

しかしその見解は別として、一つのゲームを審判する以上私心を去り、強き信念を持ち、絶体に中立の立場で、且つ甲子園にて拝見した中等学校大会の如きスクラムを遠く離れて両手を後へ廻し、ふんぞりかへつてゐてフット、アツプをとつてゐた様な事なく懸命なる努力と熱心さを持つてやつていただきたい。

井の中の蛙、間違ひあれば御容赦を乞ふ。 十年二月記

漫 言

斎藤 正三

(一) 最初は聊か柄にもない事を書かして戴きます。これ天中現役諸君に役立つ所あれば好甚です。

ラグビー技術上達の要素として私は「服従と自由」が根本じゃないかと思ひます。何をするにも、服従と自由とは要素ですが、殊にラグビーの様に組織化されたスポーツには、一層この二者の使ひ分けが、肝要じゃないかと思ふのです。服従すべき時は服従し、自由に考へる時は考へてこそ、そのチ

ームの持ち得る最大能力が発揮されると思ひます。

先輩のコーチに絶対的に服従しなければなりません、それを咀嚼しなくては駄目です。たとへよく咀嚼しても、よく自分で自由に考へて、自分等に適したものになければ、結局は先輩の考へた範囲は愚か、それにも達する事は出来ません。

と言つて最初から先輩の考へた事なんか価値ないものと思へて掛つたら、大きな間違ひで、亀の甲より年の功、とか言ひまして、どんなラグビーの天才でも、何千といふ諸先輩によつて考へ出され、オーガナイズされた理論より、優れたものを造り出す訳には行きません。

以上何大体技術上ですが、精神上では矢張り服従の精神が役立つのじゃないでしょうか、近代の中学スポーツマン諸君は自由主義的思想の反映と言ふか、あまり服従の精神を好まない様です。だがこの精神は社会に出て役立つだろうと思ひます。

しかしいざゲームに立向つて、服従の精神が頭の奥深く結晶して、悪化して、退嬰的になる様では駄目で、横に（コーチとの関係を縦として）現役間に考へた立派な戦法を守る範囲内でどしどし考へどほり実行して行くべきであると思ひます。

（二）レフェリーの東西の相違といふ事に就いて、伊藤君が大いに書かれてゐる様ですが、僕も確実な全国的統制が必要だろうと思ひます。

ラグビー協会は日本スポーツ協会の中で一番立派なものと思ひますが、ルールの方でもレフェリーソサエティーでルールの実際的意味を明解して、各協会加入校への配布を希望して止みません。

（三）天中グラウンドの悪い事はいつ行つてもがっかりします。あれではタツクルも練習マツチも思ふ様に出来まいと思ひます。断然決心してタツクルしても、肩や腰や膝にビフス

テーキを造る次第です。これは建康上面白くありません。

一方経済上から言ふならば靴の修繕も大きな負担です。

先輩諸役員の天中当局との折衝をお願いします。

(四) 夏休みや春休みに時々天中の練習にお邪魔しますが、僕の回(三十五回)の人は一向顔を出さないのが残念です。まだ家庭的に縛られる年寄りでも、ありませんから、ハイキングや海水浴の合間には、(勿論勉強とは思ひません)旧交を温める意味に於て、(天中現役軍の冒瀆ですか?)又天中軍の練習相手に、健康の為に、お越しを切望してゐるものです。

昭和十年度の天中蹴球部

蒲生 天中主将

愈々本年度の我々のラグビーシーズンも約五十日間の酷暑の後に迫りました、光輝と伝統を誇る我々廿有八名の天中蹴球部員は只今「今年こそは」と否私共十名の五年生にとつては「今年ならすんば」と云ふ意気と熱とを以つてシーズンに破格の活躍を遂げやうと頑張り励んで居ります。

願ますれば此所数年来殊に昨年度の如きに至つては幾多の熱誠なる先輩の一方ならぬ御助力御配慮にも拘らず全国大会に於てならまだしも大阪予選に於て而も天理にも顔も会せず十年も勝ち続けて来た弱敵北中に一敗地にまみれ剩へトロフィ迄持ち帰られ我々天中蹴球部員はあの熱誠なる一千三百余名の天中健児に又あれ程熱心に御援助下さつた諸先輩に対してどの面下げてお会ひ出来やうかと悲憤の涙にかきくれ来年こそはと誓つてより早や既に二百余日の時を数へ来りました。

而して不肖私のやうな者を主将に持つた本年度ラグビー部員は之に反し日本ラグビー界の大御所であり且つ我々の大先輩である井上二郎氏を始めとし阿部幸作氏等六名に依つて一分の隙きもなく新に作られたコーチ団又巖氏、三島氏、等の日本ラグビー界の重鎮を以つて組織されてゐる研究団に直接

間接に精神的技術的方面の指導を受けその元にある我々は実に幸福であり且つ力強く希望に充ちて居ります。

さて本年度の部員はと申しますと実に潑刺として明朗性に富み部員全部の間にも和氣藹々たるものがありますために私を第一に愉快的乱暴者揃ひであります。

先づ大体のレギュラーの全貌を見ますと今年位近年稀に見る駿足と悪く云へばアクよく云へば負けず気の強いチームは無いと確く信じます。

先づF、Wの第一線に熱血漢佐原を匹頭に超中学級の体の持主塩見を始め名手且つ駿足の小西（信）真面目な吉田あり、サードローに智勇兼備の闘將浜口残念乍ら今年活躍出来なくつても参謀役として活躍を期待出来る、又H、Bには彼の熱心と素質が物を云ひ日々益々急速の進歩を見せてゐる平川、又小駆隼の如き鋭いタツクルを見せる太田ありそのパスワークの速さと確さに次第に精進して来た武田T、Bには巧者で且つ闘志旺盛な丹後の健在を始め坂本、鈴木、塩田等の爆弾的の駿馬ありF、B高井は未だ未知乍ら彼の熱心がこの難関を固守する事と信じて居る。

此の如く本年度のチームを考概し来れば前面に十六貫半平均で加ふるにアクを多分に持つ優秀なるFW中間に堅実なるH、B背後に駿足バック団を有する事になる、我々本年度ラグビーチームの前に何ぞ齒応へすべき敵があらふか、京城何者ぞ秋田何者ぞ我等には熱と意気加ふるに各先輩のコーチがあるではないか、彼等は我等の眼中には殆んど認め得ざる状態のものではないか、我々は本年度必ずや着々と勝利を重ね全勝の記録を樹立し少くとも私は其の当然の結果として必ず全国に覇を唱へん事を堅く信じて疑ひませんと同時に之を先輩諸氏に誓ひます。

最後に今夏も亦合宿練習を行ひたいと存じますが適当な土地を先輩が選んで下されば尚結構に存じますそして益々御指導下さる事を切に願ひしてやみません。

紹介のページ

前号に引続き今回は主として卅四，卅五回出身の元気のいい若手連を御紹介致します。

若し失礼にあたる事が書かれてあつても，どうか御容赦下さいます様。

八木久米一 （卅一回）大外語でフルバックをやつて活躍した方，現在は自家の魔法器製作所に働いて居られる，余り消息を聞きません。

宮崎幸次郎 （卅一回）通称ポーター。関大のフロントローとして活躍され，学生時代より君子然として居られたが今は八木氏同様自家営業に御精励の由。

泉原修 （卅三回）天中時代は水泳部にあつて内山，中川君，等と共に大いに暴れた人気者，今は桃陰クラブの熱心な後援者，渾名カツパ。

北條誠司 伊藤君の後を継いで見事輝かしい戦跡を残した名主将，其の技は既に中学時代より令名あり，又桃陰ラガーきつての紅顔の美少年，併し漸く今年適齢に達して芽出度く甲種合格の由。

潮田郷三郎 渾名ルート，潮田北條と並んだセンタースリーの強味は当代随一であつた，外語の主将を経て現在では中々の紳士，彼の純情のロマンスは知る人ぞ知る。

寺戸敏郎 天中ではロック関学ではバックローをやり其の他フルバック等もやれる中々器用な真面目な男，併し盛り場新世界の非常な礼讃者にして且つ其の権威，渾名は直接な人に照会され度し。

安藤直政 通称アンコロ，猪が走つてゐるのと想はず駿足のバックロー，機械いじりと音楽が好きと云ふ良い趣味の持主，今はラグビー生活から遠ざか

つて物理学校で静かに勉強中.

塩田 克巳 通称イロキ, 天中時代のフロントロー, 現在は健康を害して練習を休んでゐる, 猛烈な宝塚ファンである, 一方では蛇を口の中に入れたり首に巻いたりして遊ぶと云ふ悪趣味の持主.

斧原 保幸 渾名ブツツアン, 我が桃陰クラブの為陰に陽に尽くして来た無くてはならぬ恩人, 超中学級の体軀を利してのフロントロー振りは正に各校脅威的であつた目下コーチの一員として天中現役の為に熱心に指導されてゐる.

林 武夫 天中ではバックロー現在関学ではフロントローをやつてゐる威勢のいい兄ちゃん, 彼の押しの一手は有名なもので相当な発展家である, 今シーズンあたり関学FWの中心として大いに頑張るであらう.

伊藤 英夫 長身を利しラインアウトによくルーズによく長沖氏無き後の塾にあつてセカンドローとしてよく母校天中の名を関東に轟かしてゐる. 同君にとつて最後のシーズンである今年こそ其の活躍を刮目して待つべきであらう.

石田繁次郎 一名ゴリラ, 当今関学を卒業して自ら高等遊民と自負して居る, 天中時代セカンドロー, プーヤンと共に好きペアー, 今は毎日天中現役の為に汗を流して, グランドを走り廻つて居られる, 当クラブ随一の物知りなり, 皆さん何事なりとも御聞き下さい.

沖田 萬年 通称オキマン. 天中では身体の調子を悪くしてやめたが現在三重高農で再び球をとつて立ちスタンドオフをやつてゐる, 高専大会での活躍を祈る.

吉田 和雄 大外語でセカンドローとしてよく潮田主将を援

けた内助の功は大きいものがある、真面目な人で現在は露語を修めた関係から満鉄に勤務、渾名ラツキヨ。

野長瀬正道 通称ガセ。天中ではウイングをやつた駿足、関大ではローバーとして関西に独自の境地を開拓しつつあり、真面目な奮闘を祈る。

吉田 晃 相当なスプリントを持ちながらも常に事故多く機会にめぐまれぬ男、今シーズンを期待したが又もや健康を害して今はマネージャを助けてゐる非常なダンスファンである。

島田富士郎 四年から大高へ行き其処で主将を務めて今春直ちに東大へ這入つた兄に勝るとも劣らぬ秀才、位置はセンタスリー、渾名は色が黒いのでカラス。

斎藤正三 北條の次の主将。中学時代は病気の為に最後の一年しか活躍しなかつたが覇者早大へ行くや彼の心の奥深く秘めた燃ゆる様な闘争精神と負けじ魂とは彼を馳つて遂に昨年正選手の位置を獲得せしめた、早慶戦での伊藤との一騎打ちは興味ある観物であらう。

村山 純 斎藤時代のマネジャー。相当な詩人で現今は世塵をさけて上ヶ原の高地で静かにカレツデライフをエンヂョイしてゐる、渾名は言はぬが花か？。

今井秀典 通称チン。美しい走り方をする駿足ウイング、現在の神戸高工はラグビーがないので精力のはけ口に困りやつとサッカーで其の鬱を晴らしてゐるとの事。

志度忠雄 第二世ルート。元気なフロントロー、卒業後敢然実業界入りをして大朝に行き、時折り大朝の試合に顔を出してゐる、話術の巧みな事は有名

なものである。

荒賀 嘉世 中学時代に引続き現在も関学のスタンドオフ。
今年君にかける我々の期待は大きい。好漢の自
愛を祈る。食ふ事にかけては人後に落ちぬと云
ふ大食家だから彼にカモられぬ様注意が肝要。
通称は兄譲りのガラ。

木村 芳生 通称コーナー。天中近来にない好ハーフであつ
た。早大でも彼の真剣な態度と巧みな技術は認
められて遂に今や第一線のハーフを虎視眈眈と
してねらふと云つた調子。晴れの出場の一日も
早からん事を願ふ。

加藤 清 デラ。スクラムセンターとして其のアクの強い
事は天中で其の右に出る者がなかつた程である
が早大に行くと同時に俄然紳士に転向。如何に
転向ばやりの当世とは云へ彼の転向は余りにも
鮮かで友人連をして啞然たらしめたものであ
る。

尾崎 博 渾名はトロン。昨今不振の大阪商大を背負つて
名誉回復の為緊禪一番今期大いに働くであらう
と想像される好漢。セカンドロー。堅い様で堅
からず。遊ぶ時はよく遊ぶ由。

川上 泰男 天中時代はウイングとしてよくかせいだもの。
今は実業団中の強チーム大阪鉄道局に務めて相
変らず元気な勇姿で駅に、グラウンドに大童の活
躍を続けてゐるとの事である。

簀本 武秀 通称ヤブ。天中時代は野球をやつて居たが関大
に這入つてからラグビーをやりだした。淹山。
内山。野長瀬等天中の先輩の指導よろしきを得
て小軀よくハーフとして其の任をはたしてゐ
る。

卅六回以後は又次号に譲ります。

以上

桃陰ラグークラブ会則

名 称

第 一 条 本会ハ桃陰ラグークラブト称ス

目 的

第 二 条 本会ハ純正ナルラグビー精神ニ基キ会員各自ノ人格ノ陶冶ト相互ノ親睦ヲ計リ併セテ母校天王寺中学ラグビー部ノ後援ヲ為スヲ以テ目的トス

事 業

第 三 条 本会ハ会員ヲ以テ強力ナルラグビーチームヲ組成シ西部ラグビー蹴球協会ニ加盟シテ日本ラグビー蹴球協会所属ノ各チームト試合ヲ行フ他前条ノ目的達成ノ為メ適当ト認ムル各種ノ事業ヲ為ス

会 員

第 四 条 本会ハ天王寺中学出身者タルラグビー競技愛好者ニシテ委員会ノ承認ヲ経テ入会セシメタル者ヲ会員トス

但シ天中出身者ニ非ズシテ特ニ本会ノ全精神ヲ理解シ入会ヲ希望スル者アルトキハ会長ハ委員会ノ全会一致ノ承認ヲ経テ之ヲ入会セシムルコトヲ得此ノ他会長ハ委員会ノ全会一致ノ推薦ニ因リ名誉会員顧問ヲ置クコトヲ得各会員ハ本会発行ノ機関誌ヲ受クルモノトス

機 関

第 五 条 本会ニ左ノ如キ機関ヲ置ク

一、 会員総会

二、 会 長 一名

三、 総 務 一名

四、 委員会

五、 委 員 四名以上

但シ委員ハ会務委員二名、会計委員一名、記録委

員一名、無任所委員若干名ニ分ツ

- 第 六 条 前条ノ機関ノ他ニ会長ハ各委員ノ請求ニ因リ其ノ所管事務ニ関シ其ノ委員ヲ補佐セシムル為メ何時ニテモ補助委員ヲ設クルコトヲ得
但シ補助委員ハ委員会ニ参加スルコトヲ得ス

会員総会

- 第 七 条 会員総会ハ本会ノ最高機関ニシテ毎年四月会長之ヲ招集シ次年度ニ於ケル本会ノ事業ノ決定、会計ノ承認、予算ノ審議、会長及総務ノ選挙、其他重要ナル事項ノ協議、並ニ本会ノ興廃ニ関スル事項ヲ決定ス但シ会長ニ於テ必要ト認ムルトキハ随時臨時総会ヲ招集スルコトヲ得、

- 第 八 条 会員総会ヲ招集スルニハ会日ヨリ十日前ニ各会員ニ対シテ会議ノ目的タル事項ヲ記載シタル通知ヲ発スルコトヲ要ス
但シ臨時総会ハ此ノ限リニ非ス

- 第 九 条 会員総会ノ議事ハ本会則ニ別段ノ定メアル場合ヲ除ク外出席シタル会員ノ過半数ヲ以テ之ヲ決ス

会 長

- 第 十 条 会長ハ本会ヲ統率総覧シ、会員総会及ビ委員会ヲ招集シ、自ラ其ノ議長トナリ、其ノ議案ヲ発案シ、会員総会ノ決議実行ノタメ委員ノ指名任命ヲ行ヒ、委員会並ビニ各役員ノ職務ヲ指揮監督シ、其ノ他本会則ニ定メナキ事項又ハ会員総会ニ於テ決議セサル事項ニシテ本会ノ目的ヲ達成スルニ必要ナル一切ノ事項ヲ為スノ職務権限ヲ有ス
委員ノ指名任命ハ定時総会ニ於テ次年度会長之ヲ為ス、但シ無任所委員ハ此ノ限リニ非ス

総 務

- 第十一 条 総務ハ会長ヲ補佐シ会長事故ニ際シテハ会長ニ代ツテ一切ノ其ノ職務権限ヲ行ヒ各委員ノ事務ノ代

行、並ニ各委員間ノ職務権限ノ判定ヲ為ス、但シ
委員会ヲ招集スル場合ニハ予メ会長ニ通告スルコ
トヲ要ス

委 員 会

第十二条 委員会ハ毎月一回会長之ヲ招集シ、会員総会ノ決
議遂行ノ為メ各決議事項ノ具体的決定、シーズン
外ノ事業ノ計画、スケジュールノ決定、入会退会
ノ承認、各委員ノ職掌ノ決定ヲ為ス、

右ノ他会員総会決議外事項又ハ本会則外事項ニシ
テ本会ノ目的達成ニ必要ナル一切ノ事項ヲ決定ス
ルコトヲ得、但シ此ノ場合ニハ会長ノ承認ヲ得ル
ニ非サレハ之レヲ具体的実行ニ移スコトヲ得ス
会長ニ於テ必要ト認ムルトキハ第一項ニ拘ハラス
隨時委員会ヲ招集スルコトヲ得

第十三条 委員会ノ議事ハ出席者ノ過半数ヲ以テ之ヲ決ス

委 員

第十四条 会務委員、会計委員、記録委員、及ビ無任所委員
ハ会長、総務、委員会ノ命令決議ニ従フ外左ノ如
キ職務権限ヲ有ス

一、会務委員ハ会務一般ヲ管掌シ、スケジュール
ノ遂行、シーズン外事業其ノ他ノ遂行、遠征ノ計
画準備、試合ニ関スル外部トノ折渉、会員ノ入会
勧誘、新入会員ノ紹介、試合通知、集会通知等、
一切ノ通報連絡、試合要具ノ管理、試合場ノ準備
等ヲ為ス

二、会計委員ハ会計一般ヲ管掌シ、本会則ニ従ヒ
会費ヲ徴収シ、寄附ヲ受納シ、適当ナル支出ヲ為
シ、財産目録、貸借対照表ヲ整頓シ、委員会ノ都
度其ノ間ノ会計報告ヲ為シ、定時会員総会前ニ
ハ、会長総務ト協議シテ次年度ノ大略ノ予算ヲ編
成シ、定時総会ニ於テ会計報告ト共ニ其ノ説明ヲ

為ス

三、記録員ハ一切ノ會議ノ議事録ヲ調製シ、各試合其ノ他ノ事業ノ大要ヲ記録シ、會員名簿、試合表ヲ作製シ、毎年シーズン開始前ニ会誌ヲ発行ス
四、無任所委員ハ會長ノ命ニ因リ、隨時他ノ委員ヲ補佐シ、天中ラグビーチームトノ關係事務其ノ他前記委員ノ何レニモ屬セサル事務ヲ管掌ス

第十五条 會長、総務、委員ノ任期ハ定時會員總會終了ノ翌日ヨリ翌年定時會員總會ノ終了ニ至ル迄ノ間約一箇年トス

第十六条 総務ハ之ヲ重選スルコトヲ得ス
委員ハ會長之ヲ引続キ二年以上指名任命スルコトヲ得ス

財 政

第十七条 本会ノ財源ハ会費及寄附金等ヲ以テ之ニ充ツ、但シ特別會員ハ会費ヲ徴セサルコトアルヘシ

第十八条 会費ハ會計委員ノ指示ニ從ヒ天王寺中学卒業ノ年ニ金五円也卒業後十年目ニ金五円也、二十年目ニ金拾円也、以下十年目毎ニ金拾円也ヲ納ムルモノトス

「全国高等学校

ラグビーフットボール大会 50 回の歩み」より

半世紀のあゆみ

天王寺、そして北野にチーム

大正14年の第8回大会は、それまでのいわゆる京都勢での京都大会という規模から、大阪の名門天中（現天王寺高校）と北中（現北野高）の参加で京阪大会にまで拡大されたこと、京一商が宿敵同志社中の6連勝をはばんで念願の初優勝を遂げたことで画期的な大会となった。ところで天中のチーム誕生は前回でふれたように英国艦隊チームと大阪高商との本社主催の試合観戦が直接の導火線になった。大正11年のことである。もっともそれまでにも阿部幸作をリーダー格とする猛者は、天王寺公園で練習していた大阪高商を見て「手が使える、持って走れる。相手を倒せる。思い切りなんでもやれる」ダ円球の競技に大きな興味と関心を寄せていたことは事実。こんな下地があったところへ勇壮な国際試合を見物したものだから「よし天中にもチームを作ろうじゃないか」と阿部がチーム作りの音頭を取った。だれを集めるかという段になって阿部らが目をつけたのが、杉村正二郎（現野村）がキャプテンをしていたサッカー部。阿部は杉村に申し入れた。「いっぺんわしらとサッカーの試合をやらないか。そしてサッカー組が負けたらラグビーをやる」

この珍妙な申し入れによる試合は、なんとかしてラグビーチームを作ろうとする素人阿部組が勝ち。サッカー組は“降参”してここにめでたくチームが生まれた。この時、つまり大正11年の秋にできたチームのメンバーは（FW）井上進、藤溪香英、中田譲二、松沢金次、山村茂（旧谷上）阿部幸作、野村正二郎（旧杉村）木村義郎（HB）三好博三、松川秀男（TB）横田邦三、小野巖、西村弘二、宇治三千夫（FB）三島実（旧足立）だった。チームができ上がると先輩の

稗田幸太郎，奥村正也（ともに慶応）巖栄一—現関西協会会長，三好深平（ともに三高—京大）らがコーチにみっちりラグビーを仕こんだ。

三好らは“プリンス・マッチ”での興奮を後輩に語り聞かせて刺激を与えた。このようなよい先輩に恵まれた天中は当然のようにめきめき腕をあげた。試合をする中学校チームがないせいもあったが，12年2月の大阪高商との初めての対外試合では15対0。ついで大阪外語（現大外大）とは0対0の接戦をやったのけ“大阪に天中あり”を印象づけた。このような大阪中学ラグビー界の草分け的存在である天中から名選手，好選手が続々と輩出したのもうなずける。巖，三好をはじめ京大の三島実，東大の石田啓次郎，慶大の杉本彰（旧長沖）早大の西野綱三，山東嘉樹（旧荒賀）と枚挙にいとまがない。ちなみに大高（旧制）が昭和3年の全国高専大会に優勝したとき，15人のうち8人までが天中出身者で占められていたという時代もあったほど。

この天中と相前後して北中にもチームが誕生した。大正12年の春，佐多長春，宮内林蔵，馬詰弘，杉尾太一郎，山本博，伊藤次郎らが集まってきた。「現在は大阪駅の貨物引込線の構内となっていてとても堅い土のグラウンドで毎日放課後，日が暮れるまで夢中になって練習したが，15人のメンバーをそろえるのは大変だった」というのが創立時のキャプテンをつとめた伊藤の述懐。創立当時，伊藤と苦勞を分けた杉尾は「そのころのラグビーはまだ校友会に認められず貧乏なクラブ組織で当時15円もしたシルコックのボールを買うのに血の出るような苦勞をした」と昭和8年刊行の北中創立50周年史に書いている。しかし早大の中村元一，京大の奥村竹之助，土井太郎らのコーチを受けて着実に腕をあげていた。距離的にも近かったせいもあり，竹田繁七（相撲）三宅次郎（サッカー）小野田潔（陸上）脇野徳三郎（剣道）林太郎（野球）戸張昇（柔道）らを集めてチームを作った関大とは

よく試合をした。

対関大戦にはこんなエピソードが残っている。「大正12年11月19日、放課後関大と試合をす。我軍善戦せしが、体力の差いかんとする能わず6－0で敗る」「大正12年12月29日、関大来襲、午後3時より本校校庭に於て試合する。宮内の貴重なる1トライにより多年の宿望を達す」。つまり北中が3－0で勝ったわけ。そしてこれが翌日の新聞に出た。「正規のゲームでないのに新聞に出すとはと脇野さんからしかれたうえまた挑戦され、こんどはコテンコテンにやられた」（伊藤）。天中－北中戦は「大阪中学スポーツの花」といわれるほどの活況を呈し、第8回の全国大会にそろって初出場した。

戦争で一時“地区大会”

トラ、トラ、トラ——昭和16年12月8日、日本軍の真珠湾攻撃で、太平洋戦争がぼっ発した。「諸種の情勢は、全国大会の開催を不可能ならしめ、ここに地域別大会を企画」（大阪毎日新聞）することが告げられているように、全国大会を開くのも困難になってきた。25日の香港攻略に、ロサンゼルス、ベルリン両オリンピックの平泳ぎで活躍した小池礼三（慶大出）伊藤三郎（明大出）の指導した“決死遊泳隊”の武勲が伝えられる。「全15人の心身を一に凝らせて相うつラグビー競技こそ、輝く海の若き勇士たちが、日ごろ練成しておかないところ。第24回大会（17年）を関西、九州の両地区に分って興行する意義もまたここにある」……大阪毎日新聞社は、“2地区大会”に踏み切った。

関西大会は南甲子園運動場で、九州大会は福岡・春日原球場で、それぞれ開かれた。朝鮮、台湾チームはもちろん、関東、東北勢の参加はなかった。

前年優勝した台北一中の選手たちは、優勝旗を持って甲子園に——と張切っていた。しかし、大賀宥（大阪西成警察署交通課）らの部員には、瀬古喜三郎から悲しい知らせが告げ

られた。大東亜戦争が始まり、内地からの新聞も遅れがち。客船も少なくなっていたので、ある程度の予感があった。だが「行きの船は確保できたが、帰りの見込みはたたない。誠に残念だが、遠征はあきらめろ」改めて聞かされると、大会に胸をときめかせていた大賀たちは、泣けてしょうがなかった。そして、船で送り返したはずの“優勝旗”は、潜水艦に沈められたのか、それっきり行方が知れなくなった。

満州でも同じことだった。「18年に部員といっしょに解散式をした。本当にうしろ髪の手引かれる思いだった」と往時をしのぶ鳥取良平は感無量。山本芳松が創部し、後輩たちが育てた満州の中学ラグビーも、戦争でその歴史を断った。

さて、この24回大会は、北野中と福岡中が優勝した。雨あがりのコンディションで、北野中は重量FWのものすごい突っ込みで、天王寺中の俊足TBの動きを押えた。ドリブルからの速攻、ライン・アウト、ルースでの圧倒、北野中は、天王寺中に1トライを許しただけだった。九州大会は、福岡中と満州から遠征してきた鞍山中が接戦、福岡中が後半で粘る鞍山中を振り切っている。関西大会で、決勝を争った北野中と天王寺中は、ラグビーを校技にして、古くからライバル意識をむきだしにして戦ってきている。両校がいざ対戦すると、全校生徒がラグビー場に集まってきて、激しい応援合戦が加わる。終わると、勝った、負けたでケンカ……。ケンカをさけるために、勝った方の応援団が、2列ずつになってまず引きあげる。負けた方にとって、それを見送ることのくやしきははかり知れない。おかげで、花園ラグビー場前の臨時停車駅（現東花園駅）までの、あるいは電車の中でのケンカ騒ぎもなくなったとか。

戦前戦後の覇者・天王寺中

競技第一主義は時局にそわず。国民一人々々が均整のとれた体力をもつよう“検定制度”が取られるなど、スポーツは全て政府の統制下にはいった。そのため、第25回大会は、文

部省、大日本学徒振興会の共催で行なわれた。戦前最後の大会で、天王寺中が初優勝。小粒ながら果敢な試合運びをみせた。準決戦で対戦した神戸二中の選手などは「神宮大会の予選のときには負けた気持さえ起らなかったのに、大会では完敗した」とあっさりカブトを脱いでいる。優勝争いは福岡中と。「福岡が前半、前衛の活躍で肉薄したが、後半、天王寺中は20分、混戦より浅岡巧みに拾って北江に渡してトライ。28分には罰蹴をゴールして決定的なものとした」（大阪毎日新聞、昭和18年1月8日）。「主将なきチームだったが、トスに勝っても風下をとれ、といった自信を持っていた」と若山克己（彫刻家）。この代理主将・若山をチーム全員で盛り上げようという空気にあふれていた。細かいことに気のつく浅岡隆、伊藤康夫・寿夫兄弟、日ごろから「馬賊になる」といていた佐々木登、さらに新村郁甫、川本久義（早大出）ら、いろんなタイプの選手が集まって、自由にのびのびしたプレーを見せていた。そして理論的な研究もよく進み早大型のFWプレー、慶大型のボックス・プレーで、大学チームそこのけの技量を展開した。この初優勝したときの下級生に岡仁詩（前同大監督）門戸良太郎（同大出）らがいた。この年、天王寺中に近い常盤小学校の生徒だった青井達也（慶大出）は天中ラグビーにあこがれていた。入部の後、第30回大会（昭和25年）に竹尾（早大）青井のHB団、北垣、山本（関学出）坂口（早大出）のラインの活躍で、2度目の優勝を遂げている。

このころは、北野中も強かった。全国大会でも優勝できるほどのメンバーがそろっていた。みんなラグビー部にあこがれてきた選手ばかり。部員が試合に臨む前日には、全校生徒が集まって、応援歌を歌い、一段高いところに立ってユニフォーム姿のフィフティーンを励ますので、その晴れがましさに感激して、他のクラブから選手たちが転向した。田中（早大）清水（慶大）上田（関学）らは柔道をやっていたし、富

上（慶大）は陸上競技，下平（中大）は器械体操の選手だった。しかし，強かったといえ，大会は戦争で中止となって，選手たちはひどくくやしがあったという。

戦争で中断した北野中のラグビーも昭和21年には復活した。先輩・田尾，上原（慶大）や林（早大）らがやってきた。ボール紙で作ったボールを使って高粱畑に変わっていた校庭で練習を始めた。紙製とはいえ，大事なボールだった。雨が降ると，何はさておいてもボールを濡らさないよう部室にかけ込んだものだった。天王寺中との定期戦も復活した。だが再開第1戦は3－0で敗れている。その後の国体予選は12－3で北野中が，天王寺中を降したが，全国大会（第26回）の予選は，こんどは天王寺中が3－0で北野中に勝ち。このとき，天王寺中は準決勝で3－0で敗退したが，だから，天王寺中に敗れて大会に出れなかった北野中の選手たちは「ベスト4の力だ」といいあった。

大会復活 各地で芽生え

昭和20年8月15日，戦争は終わった。悪夢の覚めたあとには，飢えと一面の焦土だけが残った。が，平和はまた戦時中の禁欲になれた日本人を，気の遠くなるような解放感で包んだ。その中から，戦後あらゆるスポーツがいっせいに開花する。とりわけ10代の少年たちは，いつまでも大人の虚脱感につき合っているには生命力にあふれ過ぎていた。いたるところで中学校のラグビーは生き生きと芽を吹きはじめた。

秋田工をめぐる20年代の強豪たち

第30回大会，常勝秋田工は戦前の予想を裏切って決勝で天王寺高に敗れた。秋工に取っては痛恨の1敗で，高校ラグビーのほとんどあらゆる記録を書き換えながら，このために同志社中の5連勝を破る機会を逸した。

天王寺高は関西切っのの名門で，前述の通り中断前の最後の大会で優勝している。高校（中学）ラグビーの先進地・関西の伝統を踏まえて華麗なTBプレーを誇った。なかでも竹

尾（早大）青井（慶大）のHB団は大会でもきわ立った存在だった。秋田工がいかにも王者らしい足取りで勝ち進んで来たのに対し、天王寺は準決勝の北見北斗戦で後半さんざん苦しめられた。衆目は秋田工に厚い。体力から見てもFWの優劣は明らかだったが、竹尾らは「四分六でボールを取ってくれ。いや三分でもいい。なんとしてもトライをあげて見せる」。実際、スクラムは押しまくられた。しかしHB団が縦横に動いて秋田工のゆさぶりの芽をつみ、風を読んだ好パンツでしばしば秋工ラインの背後を脅やかし、松岡の前、後半のトライで8-0で快勝した。大会が復活して数年のこの時は、まだ戦前からの伝統が技術の上でも精神面でもものをいう。天王寺高の選手には秋田工に対するコンプレックスなど毛ほどもなかった。しかし、またこの大会の優勝は名門・天王寺高の輝やかなしい伝統の最後の余映だった。大阪ではあの協町のラグビーを育てた長谷川の手で淀川工がにわかに台頭し、丸山部長の下で四条曜が力をつけて主導権を競う。同じように20年代は日本の各地で新しい勢力地図がつくられようとしていた。

大 阪

大阪が全国高等学校ラグビー大会に参加したのは第8回からで、大正12年あいついでラグビー部を創設した天王寺中学、北野中学が推選されて出場した。本大会で天王寺が決勝戦において京一商に敗れたが、大阪の輝やかなしい第1歩を飾った。第9回は大正14年ラグビー部を創設した天理中学を加え、初めて地区予選を行ない天王寺が出場権を得た。

当時活躍した杉本氏（旧姓長沖）は今も惑々クラブで健在である。第10回は予選を行わずに従来の戦績その他を考慮して協会から大阪代表として天王寺、紀和代表として天理が会場に出場した。天王寺は再び決勝戦まで勝ち進んだが同志社中学に敗れた。第11回からは予選の出場チームも前記3校の外に浪華商業（現浪商高）、京阪商業（現守口高）、八尾中学、四

条嶮中学、浪速中学、大阪中学など参加したが、3校を抜くことはできなかった。天王寺の優位は第11回までで、第12回からは天理が土佐氏（現奈良協会会長）を中心に台頭し、天王寺、北野をしりぞけて出場権を得た。本大会においても第13回、第15回と2度決勝戦で京城師範に敗れているが健闘した。第17回以後は天理が圧倒的に強く、大阪では打倒天理を目指して各チームは精進したが何れも敗れた。天理は遂に第18回本大会において全国制覇を遂げ、第1期の黄金時代を築いた。またこの頃より海草中学（現向陽高）、和歌山中学（現桐陰高）、和歌山商業などの和歌山勢や畝傍中学、正気書院商業なども加わり、地区予選もにぎやかになってきている。大阪では打倒天理を目指す天王寺、北野の定期戦が晩秋の風物詩としてファンを熱狂させ、花園のスタンドは両校の教員生徒で埋めつくされ、大応援を行なった。

昭和13年雌伏10年北野が天理を破った天王寺に劇的な逆転で2回目の出場を果し、以後4年連続して出場権を得た。中でも第23回の天理との決勝戦は11－6とリードされた北野がノーサイド寸前右隅に林氏がトライ。むつかしい位置からのゴールキックを橋本氏が行なった。ボールはポストに当り、バーに落ち、向側に転んで同点となり、延長戦で精魂つきた天理に前後半1ゴールを奪って劇的な勝利を得た。

第24回はようやく戦火も厳しく本大会は関西大会、九州大会という形で分散大会となったが、地区予選は従来どおり行なわれた。久し振りに天王寺がFWの健闘と柴垣、浅岡両氏の活躍や北江氏（兄）の快走で北野を敗った。大阪から2校出場で両チームが本大会に駒を進めたが本大会においては決勝戦で逆に北野のFWの活躍にあい12－3で天王寺は敗れた。第25回は戦時下の中学体育大会の一環として文部省が主催して南甲子園で最後の本大会が持たれた。花園ラグビー場でも戦前最後の地区予選が行なわれた。天王寺は昨年度のメンバーと大差なく、練習試合を含め総ての試合で1度の敗戦

をも記録せず、明治神宮大会、本大会での初優勝を遂げた。
この時のCTB伊藤康夫氏を長兄とする5兄弟はまさにラグビー兄弟である。即ち次男寿夫氏がフロンカー、三男栄夫氏は第26回のCTB、四男道夫氏は第30回の2度目の優勝時のフロンカー、五男和男氏は第38回のCTBとして5人揃って全国大会に出場し、その上3人が全国優勝経験というまことに見事な記録をつくった。

戦後の苦しい生活の中から、楳円球に対するOBの情熱はラグビー競技復活の大きな支えとなり、昭和21年11月には早くも第26回の地区予選が開始された。戦前大阪紀和地区で10数チームの参加であったのが20チームの参加を見た。名門天王寺、北野は戦時中の部員が残っており、OBの肝入りで再建も早かった。また古豪天理は昭和21年度までは大阪協会に属していたが、翌年奈良協会が独立して地区予選は別になった。しかし復活には少し時間がかかった。本大会には天王寺、神戸二中が出場した。天王寺は準決勝で神戸二中は決勝で何れも福岡中学に敗れたが好成績を収めた。この時の天王寺のメンバーの中には岡氏（前同大監督）の名も見える。予選のグラウンドは花園ラグビー場が米軍に接収されていたので、関西大学、大阪市立運動場、近鉄あやめ池などが使用された。用具も不揃いでユニフォームはバラバラのチームも多く、ボールは変形したものを使用し、シューズもラグビースューズらしきものをはいているものは少なかった。

日本ラグビー史（昭和30年）・より

関西中学チームの勃興

関西、ことに京阪神地方の中学ラグビー界は、京都の京一中、同志社普通部、京一商の3校の中、京一中が一時凋落したあとは、同志社と京一商の2校のみとなり、大毎の全国大会の出場校についても京一商は第1回から、同志社普通部は第2回から出場しているが、中学部が高専と別れた第3回以降も、3・4・5はこの2校以外で参加をみたのは、第4回の慶普あるのみで大正12年の第6回になってようやく立命館中学が、第7回に京都中学が参加しているだけである。いずれも京都ばかりで、京都以外では、大阪の天王寺中学の11年9月、北野中学の12年の創立が最古参である。

☆天王寺中学

天中は阿部幸作、野村正二郎（初代主将）松川秀雄、三好博藏（京大三好深平の弟）らが、在来のサッカー部をおし潰して強引に発足せしめたものといわれているが、先輩の慶応の稗田幸三郎、京大の巖栄一、三好深平、同大の奥村正也らの陰陽の援助もむろん見逃し得ない。大阪高商が天王寺公園で練習していたのを見て、生徒たちが自分の学校でもやってみたくなったのが動機といえよう。

12年は稗田のコーチをうけ、12年2月大阪高商とのはじめての対外試合では15対0、ついで大阪外語と0対0と経験を積み、13年1月19日、ひと足遅れて創立した北野中学と定期戦の約定を結び、大阪での最初の中学対抗としてのその第1回戦を11対3で勝っている。この時のメンバーに天中には慶応に進んでC・T・Bをやった長沖彰（のち杉本）北野には同じく慶応のF・Bをやった伊藤二郎がいた。この天中对北野の定期戦は、大阪での小早慶戦の観を呈し、のちに花園ラグビー場を使用するようになったときには、職員生徒全校総

出で応援し、大阪スポーツ界の名物になった。両校の定期戦は今日もつづけられ、すでに40回に垂んとしている。昭和36年までの戦績は天中の25勝10敗1分である。

また13年1月2日に、京一商との定期戦で西下した先輩の慶普と初手合せをやり、21対0で敗れている。しかし、その後ながく大阪のトップクラスを維持して、全国大会出場16回、うち優勝2回（昭和36年まで）の記録は名門の名に恥じない。

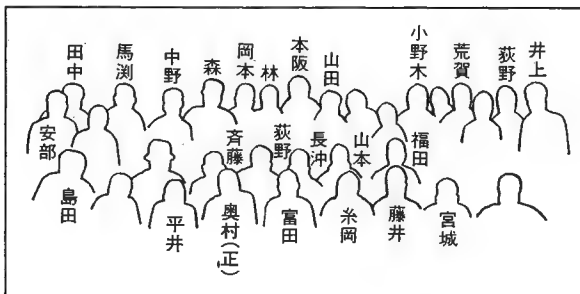
天中からは、その創立前に、巖栄一のほか、東大の石田啓次郎、早大の西野綱三が出ている。大高が高専大会で全国優勝したときのフィフティーンのうちで、8人までが天中出であったという時代もあり、後続のラグーマンに東大の正野虎雄、北大の中川一三、早大の荒賀嘉樹（のち山東）、斉藤正三、松元秀明、鹿子木聡などをおくり出し、名門の泉は涸れることなくつづいた。—日本ラグビーフットボール協会編—

●桃陰50年のわだち





大正15年3月卒 (28回) 旧天中校舎



ラ式中等學校(甲子)
天中3京都三中0 午後
十二時二十五分三中のキックオフで開始。レフリー杉本氏。天中直ちに肉瘤十五分後天中山本右翼にトライして三點を先制し、後半戦に入るや天中のオラサイドに三中フリーキックを導き、漸くセンタールとタラチに迫り、三中ドリブルに進みスタラムと密着に好機到来せしが遂に點をなさずしてタイムアップとなる。天中三、京三中零

京商3同志0 午後
二時半レフリー岡村氏、一商のキックオフで開始。同志社三分フリーキックを得て、ドロブゴールを傳たが、入らず、同志社なほも攻めたが京一商よく防ぎ、後半に入り一商ドリブルで攻め込み、ゴールライン前で密着をくり、京一商藤井繁田のパスを受けて右翼にトライし同志社奮然挽回に努めたが一連一連遂にタイムアップとなり本年まで五回の優勝を獲けた同志中も遂に三對〇で敗れた

了式專口學校(甲子)

大正14年1月19日付大阪毎日新聞から

甲子園のスタンドから

大阪びいきの聲援に

勝ち誇る天中

サッカーの桃中は惜敗

大正15年度は、甲子園の甲子園に、大阪の甲子園に、勝ち誇る天中。サッカーの桃中は惜敗。甲子園の甲子園に、勝ち誇る天中。サッカーの桃中は惜敗。甲子園の甲子園に、勝ち誇る天中。サッカーの桃中は惜敗。

恵まれた天中

見事大勝す

恵まれた天中。見事大勝す。甲子園の甲子園に、勝ち誇る天中。サッカーの桃中は惜敗。甲子園の甲子園に、勝ち誇る天中。サッカーの桃中は惜敗。

恨みの心

桃中の敗戦

恨みの心。桃中の敗戦。甲子園の甲子園に、勝ち誇る天中。サッカーの桃中は惜敗。甲子園の甲子園に、勝ち誇る天中。サッカーの桃中は惜敗。

大会興味の中心

は今日の準決勝戦

大会興味の中心。は今日の準決勝戦。甲子園の甲子園に、勝ち誇る天中。サッカーの桃中は惜敗。甲子園の甲子園に、勝ち誇る天中。サッカーの桃中は惜敗。

嵐のやうな拍手聲援

ラグビーの準決勝戦

嵐のやうな拍手聲援。ラグビーの準決勝戦。甲子園の甲子園に、勝ち誇る天中。サッカーの桃中は惜敗。甲子園の甲子園に、勝ち誇る天中。サッカーの桃中は惜敗。



戦況。甲子園の甲子園に、勝ち誇る天中。サッカーの桃中は惜敗。甲子園の甲子園に、勝ち誇る天中。サッカーの桃中は惜敗。

大正15年1月6日付大阪毎日新聞から

毎阪大 日六月一年五十正大 (有部製電報三第) (二)

雨中のラグビー戦

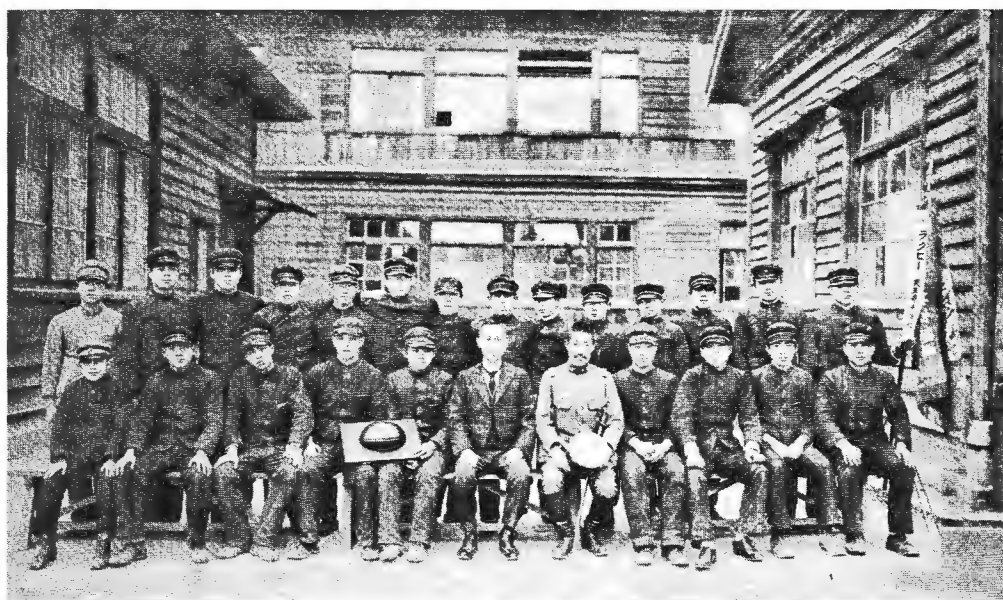
凍りつく寒さにも怯げず
赤紫にラガーの猛者揃ひ
甲子園に歓呼の聲わく

本報記者 甲子園中等学校蹴球大会
二日は五年生、十時から甲子園中等学校蹴球大会。雨の中、甲子園中等学校蹴球大会。雨の中、甲子園中等学校蹴球大会。雨の中、甲子園中等学校蹴球大会。

戦況

天中21勝中0
南滿20早寛0

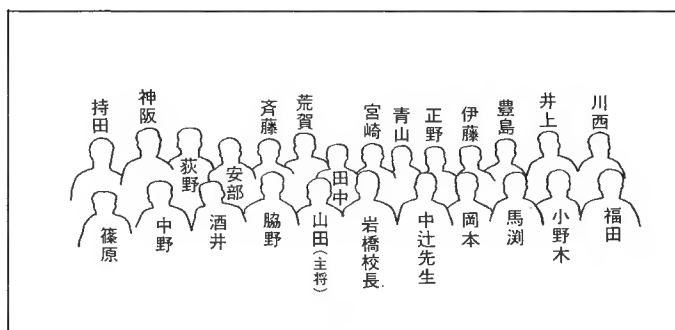
甲子園中等学校蹴球大会。雨の中、甲子園中等学校蹴球大会。雨の中、甲子園中等学校蹴球大会。雨の中、甲子園中等学校蹴球大会。



昭和3年3月卒(30回)女子師範校舎跡



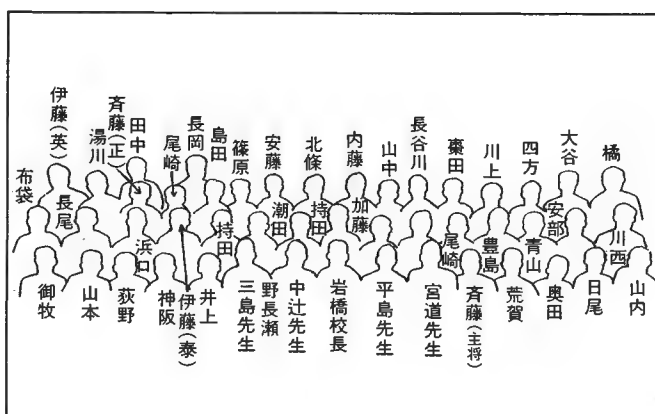
昭和3年1月5日付大阪毎日新聞





昭和4年3月卒業 (31回)

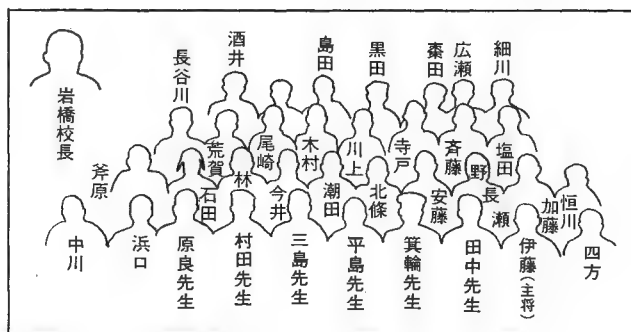
女子師範校舎前



山 上
細川(中退)
四方
尾崎
木村
今井
荒賀
秦田
長谷川
篠原
酒井
野長瀬
安藤
寺戸
米谷
安部
村上
荒木
斧原
伊藤
齊藤
北條
加藤
沖田
正野
福田
青山
坂教頭
安道先生(部長)
奈良先生
田中(主将)
長尾
豊島



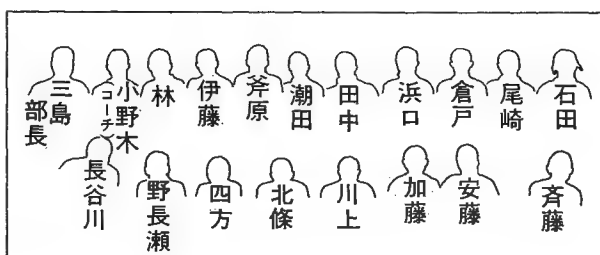
昭和6年3月卒業（33回）





昭和6年3月卒業（33回）

伊藤泰運主将のとき

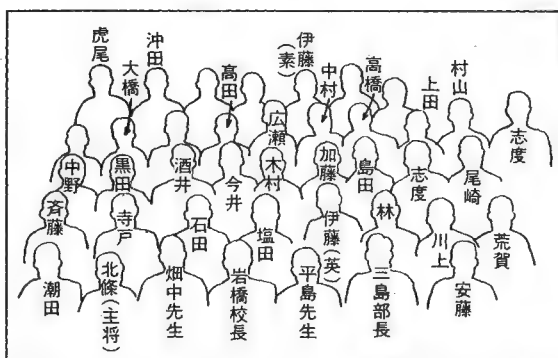




昭和7年卒業 (34回)



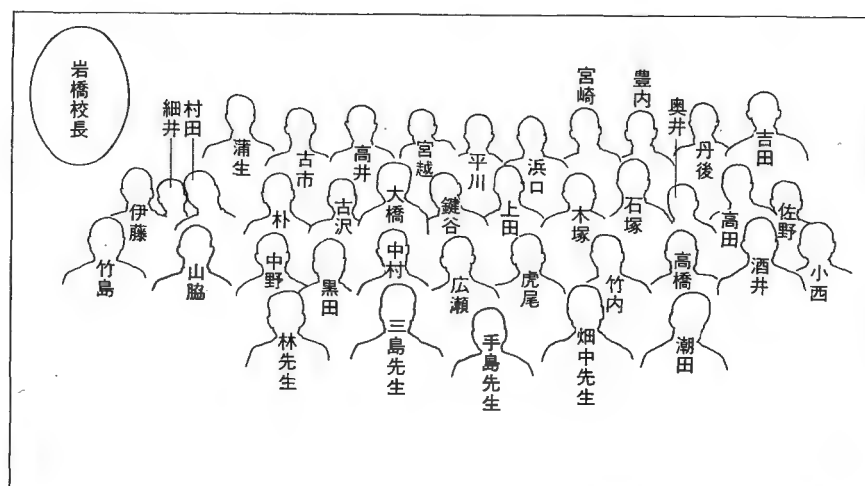
昭和7年1月4日付大阪
毎日新聞



島田 (コイチ)
中野 荒賀
奥井
満生
古沢
高田
篠原
丹後
上田
浜口
八木
竹内
竹島
虎尾
酒井
尾崎
黒田
川上
村田
大谷先生
村上(マネージャー)
斎藤(主将)
三島先生(部長)
岩橋校長
今井
高橋
中村
大橋
久保田
志度
平島先生
島田 (コイチ)
加藤
山脇
細井
奥井
中野 荒賀
島田 (コイチ)



昭和9年卒業（36回）



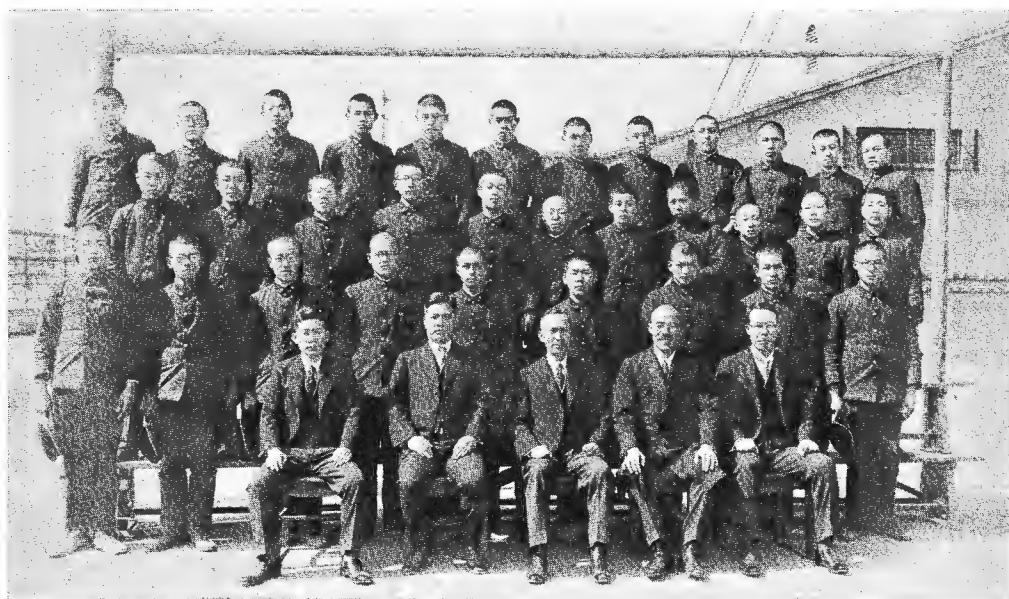
平井 伊藤 虎尾 竹内 中野 山脇 中臣 中野 伊藤 高田 酒井 村田 尾崎

伊藤 斧原 木塚 黒田 中村 伊藤 高田 酒井 村田 尾崎

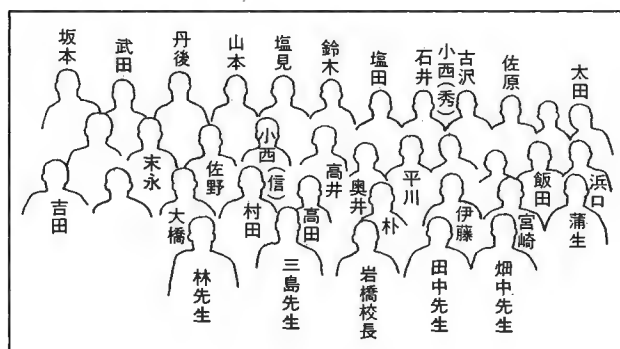
鎌谷 伊藤 潮田 (広田) 潮田 滝山 朴 (新井) 中野 今井 広瀬

[illegible]

777



昭和10年3月卒業（37回）





昭和11年3月卒業（38回）

全國中等ラグビー 大阪地區豫選

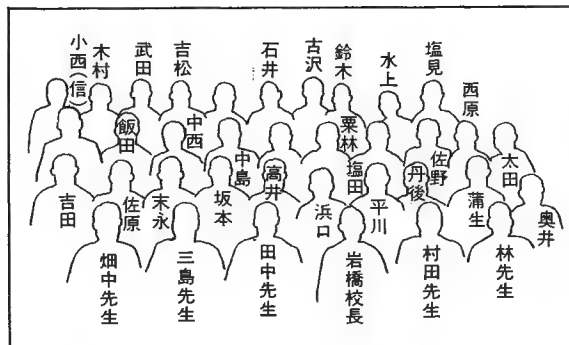
第一回戦に四校快勝

本戦主戦第十八回全國中等ラグビー大会大阪地區豫選第一回戦は三日花園ラグビー場（第一）で舉行、天理中、北野中、浪速中、大坂中がそれぞれ快勝した。天理中11-0、北野中10-0、浪速中11-0、大坂中11-0。正副主将は、天理中 西村、北野中 西村、浪速中 西村、大坂中 西村。

学校	得点	対戦校	得点
天理中	11	北野中	0
浪速中	11	大坂中	0

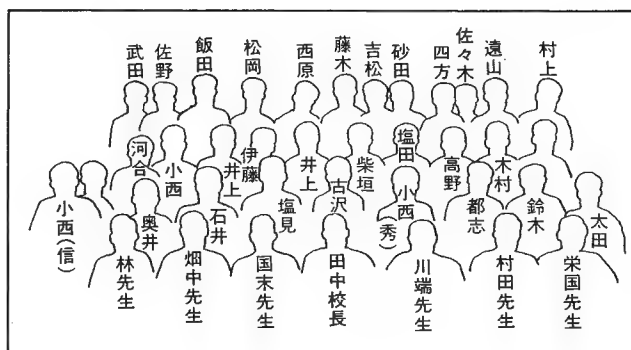
正副主将は、天理中 西村、北野中 西村、浪速中 西村、大坂中 西村。

昭和11年10月4日付毎日新聞





昭和12年3月卒業（39回）



昭和11年11月30日付毎日新聞

ラグビー戦績

本社主簿第九回全國中學學校
グレバ大会大阪に於て、**天理中**
大崎地区内選らばに本社役員
第十二回全國中大阪に於て、**天理中**
勝越は秋晴れの廿九日大勢で花
開け、**天理中**は連日大勢では
天理中學が**天理中**に勝つとい
う上紀の勢を代表を定するこ
となり。高橋は日大門が大
阪外灘を渡り、大會に出場す
ることとなつたが、戦後左のことし
天理中、豊田寺中學の試合は
午前十一時、**天理中**の先攻で閉
始主審役下、錦旗歌水、田中

天理中	12
豊田寺中	16
天理中	66
豊田寺中	9

天理中	12
豊田寺中	10
天理中	6
豊田寺中	6

天理中	13
豊田寺中	00
天理中	3
豊田寺中	6

【天理中】

[illegible]

和中勝つ

和 中 和
和 中 和

谷縣野村田田上川長井山山岡
大御橋野多小村藤田生南杉西
FW HB TB FB
西野西村土田 惣野西内上島
小今中井野段 北今小大瀬中

日大應援來社

佐伯國造ラヂオ（日本）昭和地盤量

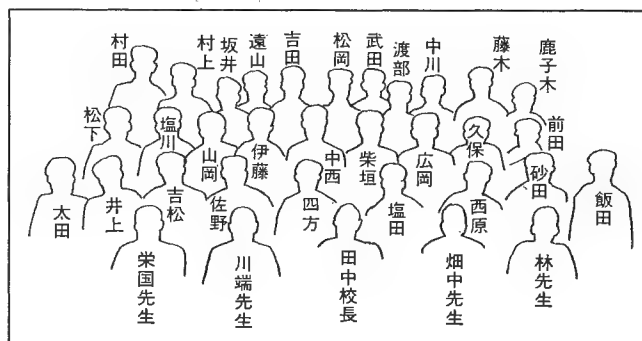
大日本新聞部は、張敬奎様と我々の交渉を断つて、二百名が直に大阪上本町駅前に集合し、南京路の生主寺・河田園遊會場長引率の下に隊伍をととのへ三時四十分に出発し、日高から日本橋一丁目・永石町門前・舞臺附近停留場を経て四時半本社に來り、殊本ラララ部メジャーが萬國大會に對する決意演説の挨拶をする。彼等本社計連諸報紙の激勵の聲あがりて、大毎の万歳を叫んで數回に達した後散會した。

昭和12年対神戸二中戦（於・甲南グラウンドで）





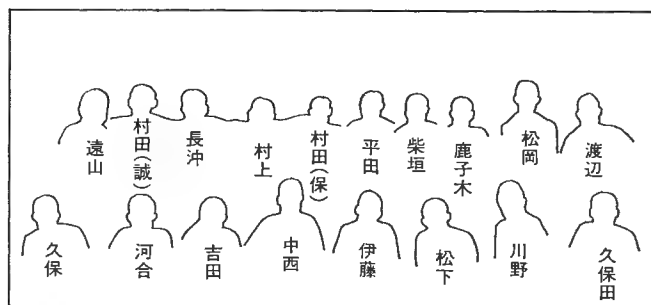
昭和13年3月卒業（40回）





昭和14年3月卒業（41回）

於・関西学院夏合宿



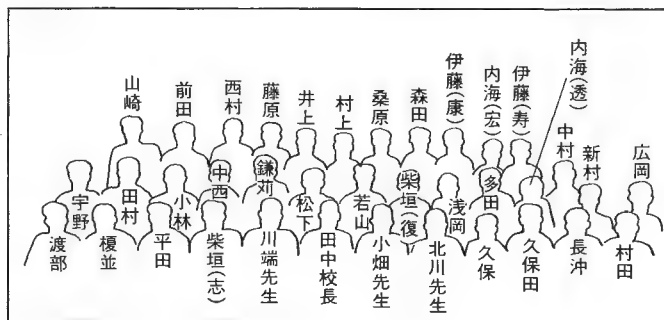


昭和13年11月
対大阪中戦（於・花園Ⅱグラウンド）





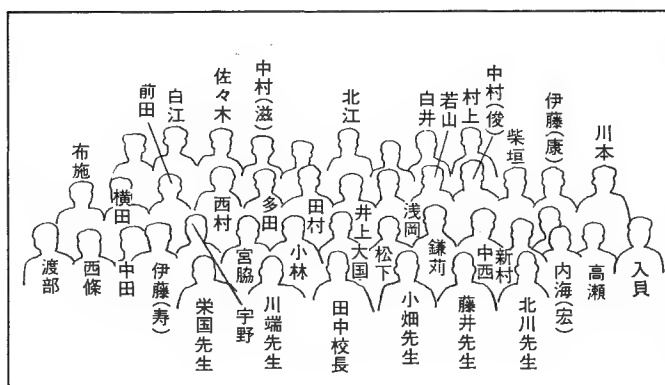
昭和15年3月卒業（42回）



（前列右端）西岡（後列左端）由利

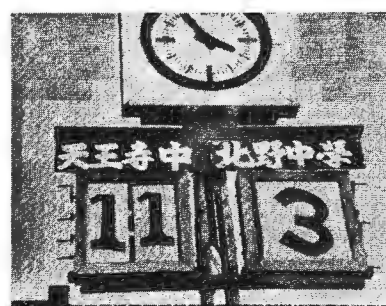


昭和16年3月卒業（43回）

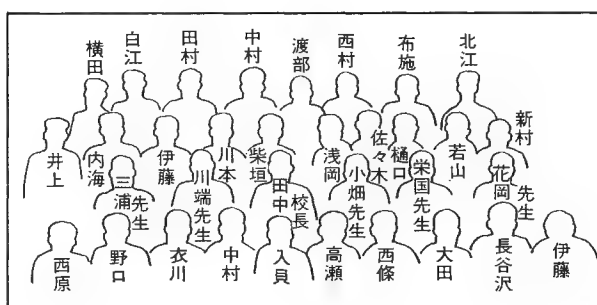




昭和17年3月卒業（44回）



対北野中戦スコアボード（花園）



第24回全国中等学校ラグビー大会関西大会プログラム・メンバー表

名哲文學部編輯 京都文學部編輯	大阪商業	同	京都三 京都一商	大阪文學部編輯	同	天寺中學	同	北野中學	同	天現中學	名哲文學部編輯	村野工業	水原文學部編輯	同	米崎鐵道	同	愛媛師範
--------------------	------	---	-------------	---------	---	------	---	------	---	------	---------	------	---------	---	------	---	------

大會日程

第一日 (一、二日) 第二日 (三、四)

開會式(午前十時半) 第二回戰

- [illegible]

第一回戰 第一試合 (一)

- [illegible]

第一日 (一、二日) 第二日 (三、四)

開會式(午前十時半) 第二回戰

- | | |
|----------------------------------|----------------------------|
| 役員會中代表 | 第一六次會
文成中書 材院中書 (十餘部) |
| 秘書長 張其昌 (前清翰林院庶吉士) | 文書 楊鼎芳 王鼎 王鼎 |
| 宮城 張其昌 | 第二七次會
永樂館進 北野中書 (一四回十分) |
| 軍部將士の待遇及兵部中士に對する
將士の待遇に對するの勸告 | 第三八次會
張其昌 文成 永樂 永樂 |
| 開會の辭 | 第三九次會
(張其昌) 文成 永樂 永樂 |
| 會長 張其昌 | 第四〇次會
(張其昌) 文成 永樂 永樂 |

文相祝辭 (1990) 第三卷 (96. 11)

- | | | |
|----------------------|-------------------------|--------|
| 第一試合 聖徳興範一王寺中学(十一歳) | 第一試合 (主審) 白鳥 (観客) 林・田中 | (一場) |
| (北澤) 朝田 (監督) 水村・近藤 | 第二試合 (主審) 川本 (観客) 園寺・黒川 | (二場五分) |
| 第二試合 龍岡中学 香取中学(中学十才) | | |

第四頁(七)

- 第四日(七日)
續 踏 歌
(主演) 阿部 (監督) 阿部、白根
(主審) 佐藤 (監修) 天、内藤
第三試合 京都三中—松原商業 (一戦全勝)
(主審) 相川 (監督) 石河、村松
第四試合 神戸二小—京都一高 (二戦全勝)
(主審) 木下 (監督) 和道、西

東海代務

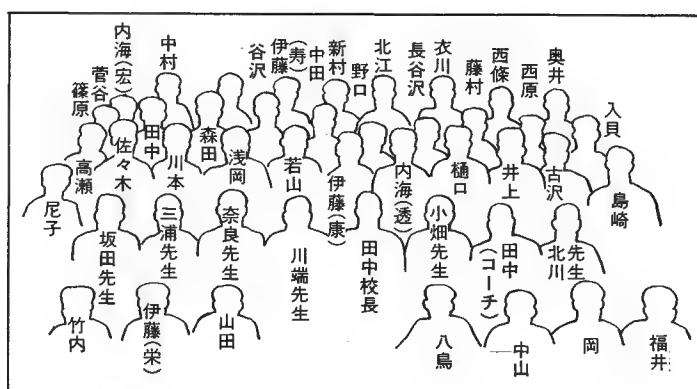
校販商業

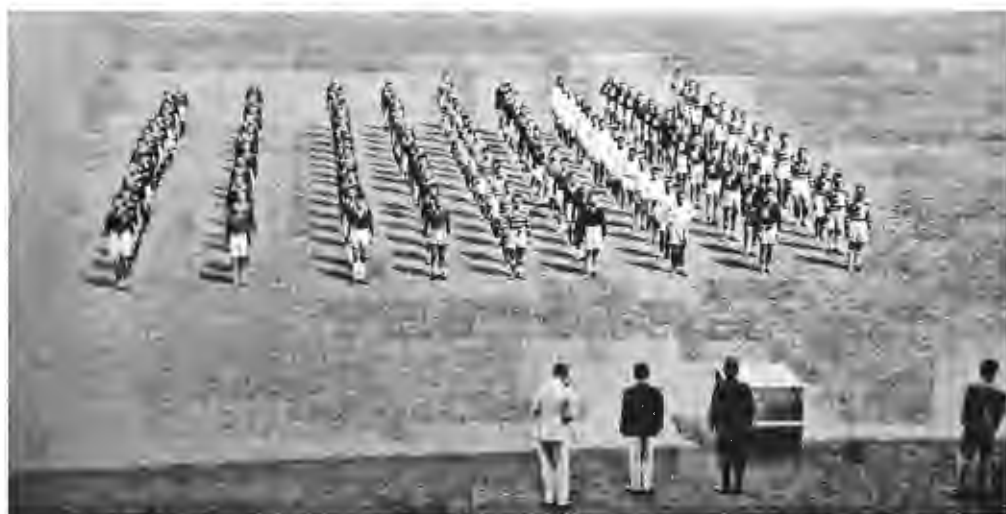
保羅	張平	台	華	年	年	齡	三	十	七	才	•	李	國	華	三	三	十	七	才							
FV	台	內	華	三	三	十	八	才	•	三	甘	方	題	三	十	六	才	•	羊	川	良	題	三	十	八	才
•	士	俊	題	三	十	七	才	•	•	夢	題	三	十	七	才	•	•	竹	內	明	三	十	八	才	•	

[illegible]



昭和18年3月卒業(45回)





昭和17年9月19日 神宮予選開幕式（花園グラウンド）



神宮大会第一回戦
昭和17年10月30日
対京城師範戦
（東伏見グラウンド）



神宮大会準決勝
昭和17年10月31日
対修猷館中学戦
（東伏見グラウンド）



神宮大会優勝（神宮外苑競技場前で）



昭和17年11月2日付朝日新聞

府縣對抗中等學校代表選手名

127

出 場 者 名 簿										
番 号	年 次	姓 名	年 次	姓 名	年 次	姓 名	年 次	姓 名	年 次	
1	上	佐宮 正太郎	2	佐宮 正太郎	3	佐宮 正太郎	4	佐宮 正太郎	5	佐宮 正太郎
2	上	佐宮 正太郎	2	佐宮 正太郎	3	佐宮 正太郎	4	佐宮 正太郎	5	佐宮 正太郎
3	上	佐宮 正太郎	2	佐宮 正太郎	3	佐宮 正太郎	4	佐宮 正太郎	5	佐宮 正太郎
4	上	佐宮 正太郎	2	佐宮 正太郎	3	佐宮 正太郎	4	佐宮 正太郎	5	佐宮 正太郎
5	上	佐宮 正太郎	2	佐宮 正太郎	3	佐宮 正太郎	4	佐宮 正太郎	5	佐宮 正太郎
6	上	佐宮 正太郎	2	佐宮 正太郎	3	佐宮 正太郎	4	佐宮 正太郎	5	佐宮 正太郎
7	上	佐宮 正太郎	2	佐宮 正太郎	3	佐宮 正太郎	4	佐宮 正太郎	5	佐宮 正太郎
8	上	佐宮 正太郎	2	佐宮 正太郎	3	佐宮 正太郎	4	佐宮 正太郎	5	佐宮 正太郎
9	上	佐宮 正太郎	2	佐宮 正太郎	3	佐宮 正太郎	4	佐宮 正太郎	5	佐宮 正太郎
10	上	佐宮 正太郎	2	佐宮 正太郎	3	佐宮 正太郎	4	佐宮 正太郎	5	佐宮 正太郎



全国大会優勝（南甲子園グラウンド）

前列左から 若山, 浅岡, 北江
佐々木, 川本, 樋口
後列左から 井上, 長谷沢, 内海
伊藤(康), 中村, 新村
衣川, 西條, 伊藤(寿)



昭和18年1月4～8日付大阪毎日新聞



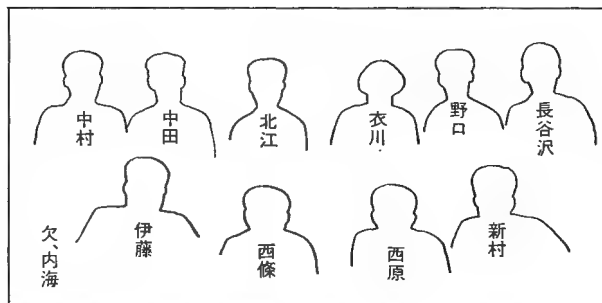
全国制覇時の 5 年生

代表校選手一覽		代表校選手一覽	
年級	代表校	年級	代表校
1940	...	1940	...
1941	...	1941	...
1942	...	1942	...
1943	...	1943	...
1944	...	1944	...
1945	...	1945	...
1946	...	1946	...
1947	...	1947	...
1948	...	1948	...
1949	...	1949	...
1950	...	1950	...
1951	...	1951	...
1952	...	1952	...
1953	...	1953	...
1954	...	1954	...
1955	...	1955	...
1956	...	1956	...
1957	...	1957	...
1958	...	1958	...
1959	...	1959	...
1960	...	1960	...
1961	...	1961	...
1962	...	1962	...
1963	...	1963	...
1964	...	1964	...
1965	...	1965	...
1966	...	1966	...
1967	...	1967	...
1968	...	1968	...
1969	...	1969	...
1970	...	1970	...
1971	...	1971	...
1972	...	1972	...
1973	...	1973	...
1974	...	1974	...
1975	...	1975	...
1976	...	1976	...
1977	...	1977	...
1978	...	1978	...
1979	...	1979	...
1980	...	1980	...
1981	...	1981	...
1982	...	1982	...
1983	...	1983	...
1984	...	1984	...
1985	...	1985	...
1986	...	1986	...
1987	...	1987	...
1988	...	1988	...
1989	...	1989	...
1990	...	1990	...
1991	...	1991	...
1992	...	1992	...
1993	...	1993	...
1994	...	1994	...
1995	...	1995	...
1996	...	1996	...
1997	...	1997	...
1998	...	1998	...
1999	...	1999	...
2000	...	2000	...
2001	...	2001	...
2002	...	2002	...
2003	...	2003	...
2004	...	2004	...
2005	...	2005	...
2006	...	2006	...
2007	...	2007	...
2008	...	2008	...
2009	...	2009	...
2010	...	2010	...
2011	...	2011	...
2012	...	2012	...
2013	...	2013	...
2014	...	2014	...
2015	...	2015	...
2016	...	2016	...
2017	...	2017	...
2018	...	2018	...
2019	...	2019	...
2020	...	2020	...
2021	...	2021	...
2022	...	2022	...
2023	...	2023	...
2024	...	2024	...
2025	...	2025	...
2026	...	2026	...
2027	...	2027	...
2028	...	2028	...
2029	...	2029	...
2030	...	2030	...

[illegible]



昭和19年3月卒業（46回）



[illegible]

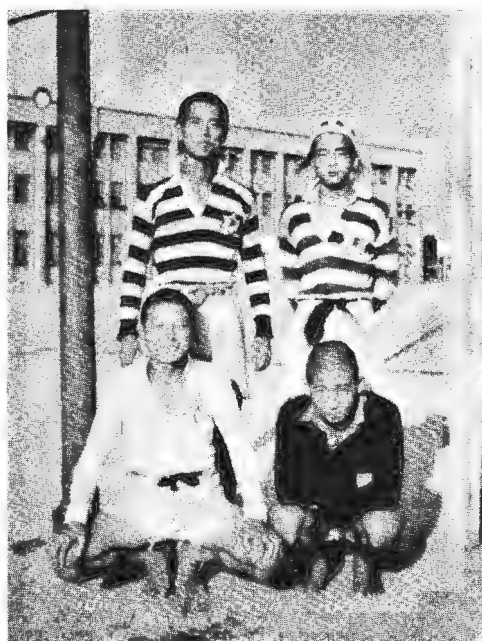
昭和18年秋対浪商戦（大阪大会準決勝）





前列左から 菅谷，藤村
後列左から 田中，谷沢，高瀬，篠原
(いずれも47回)

昭和20年3月卒業 (47・48回)



前列左から 福井，八鳥 (49回)
後列左から 島崎 (48回) 尼子 (49回)



吉田，古沢，島崎 (48回) 田中 (47回)



左から 吉田 (48回) 門戸 (49回)
島崎, 古沢 (48回)



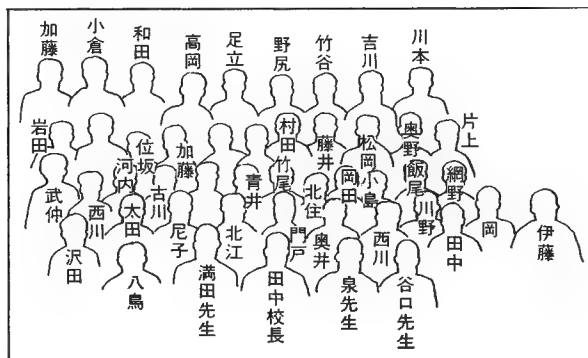
前列左から 門戸 (49回) 古沢 (48回)
後列左から 吉田, 島崎 (48回)



前列左から 篠原, 高瀬
後列左から 田中, 藤村, 菅谷
(いずれも47回)



昭和21年3月卒業（49回）

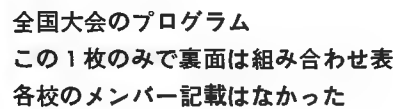
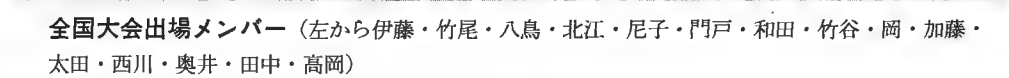


闘球
對北中復活第一戰
關西中央グビーの華

北田にスカーレットの種を賣る
し大田に種を賣るをライ
ンといふ北田のラインとを
別物にして由緒を反轉して
北田のラインといふ五十二
十五ヤードのラインとを夫
中アオウチ種を賣るをライ
ンといふラインといふこと
下種を賣るをラインといふ
に違へ、大田をラインといふ
北田に種を賣るをラインといふ

[illegible]

昭和20年12月27日付大阪新聞（復活した対北野戦を報道）

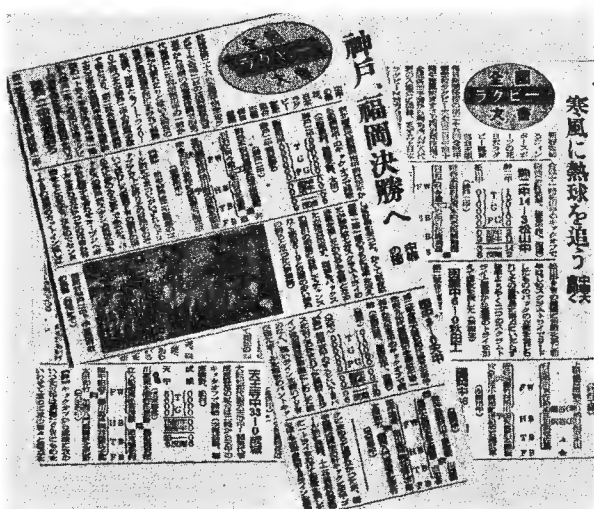




全国大会予選決勝戦（対北野中）



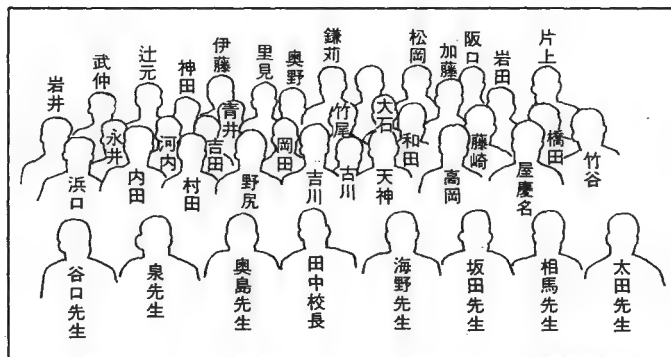
悦に入る田中校長

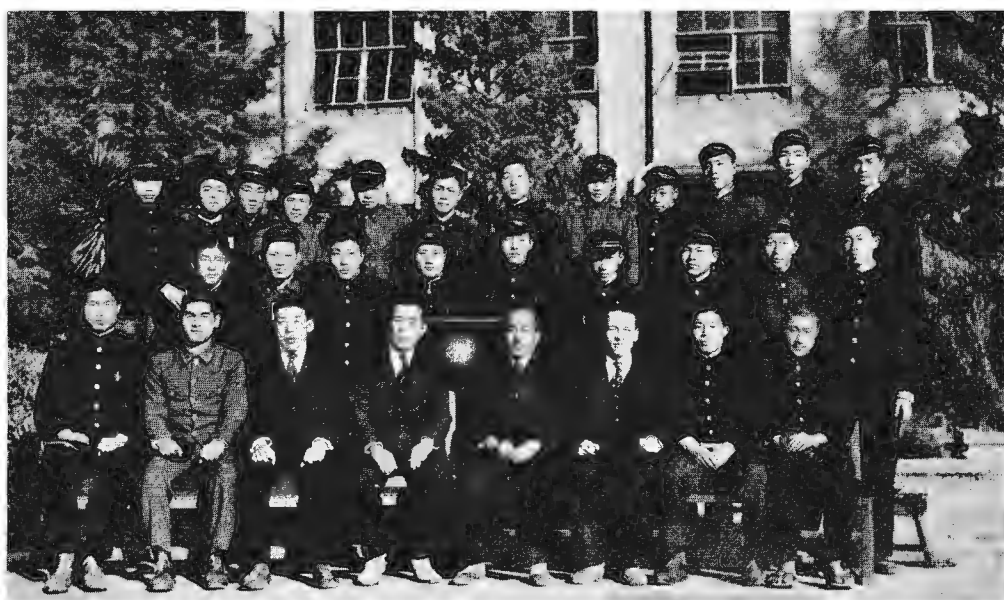


昭和22年1月5日付毎日新聞

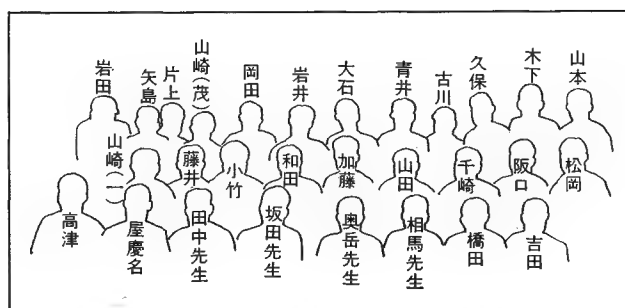


昭和23年3月卒業（50回）



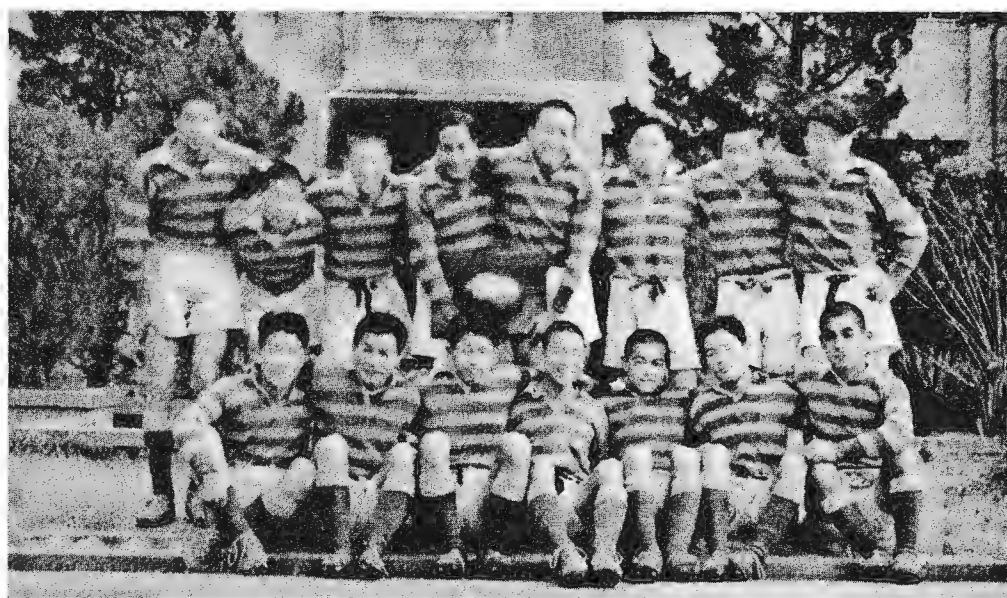


昭和24年3月卒業（高1回）





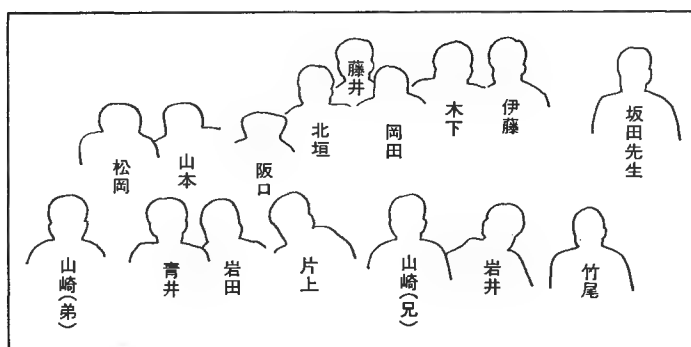
(前列左から) 屋慶名, 橋田, 坂田部長, 吉田, 小竹
(後列左から) 山田, 高津, 和田, 加藤



(前列左から) 片上, 岩井, 松岡, 岡田, 青井,
北垣, 屋慶名 (後列左から) 高津, 阪口, 山田,
和田, 加藤, 橋田, 吉田, 小竹



昭和25年3月卒業（高2回）

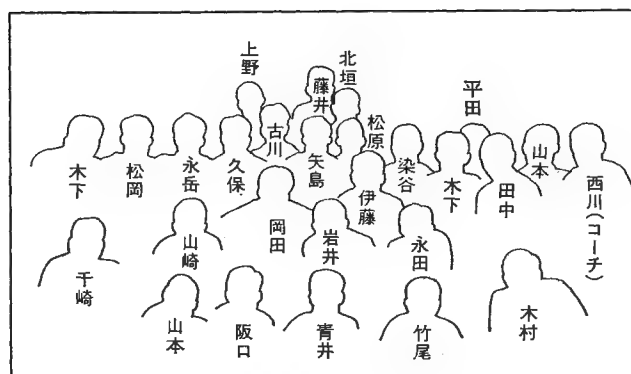


全国大会・対大淀高戦





昭和26年3月卒業（高3回）





優勝旗と楯
そして井上杯も…



全国大会メンバー表の表紙



対金足農高戦



全国制覇の足跡



対千歳高校戦



対北見高校戦



対秋田工高優勝戦



対秋田工高優勝戦



優勝表彰式にのぞむフィフティーン



井上芳子氏より井上杯を受ける岩井君

＜井上杯＞ ラグビー界に大きな貢献を残された元関西ラグビー協会々長井上二郎氏（17回卒慶応大出）の没後、ご遺族が全国高等学校ラグビー大会に寄贈された銀製花瓶で、代々の優勝校に受与されていた。現在は破損が激しく、数年前より日本体育協会の資料館に保管されている。



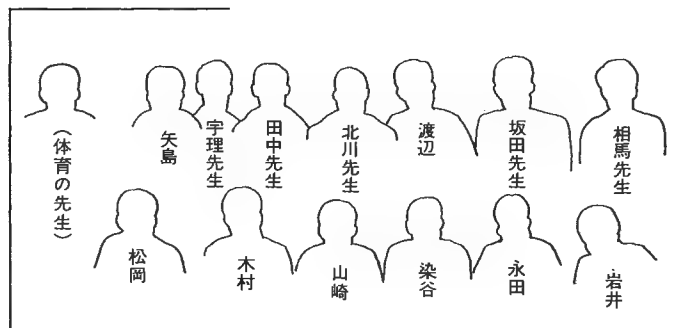
優勝記念撮影



昭和26年1月3～8日付毎日新聞



昭和27年3月卒業（高4回）





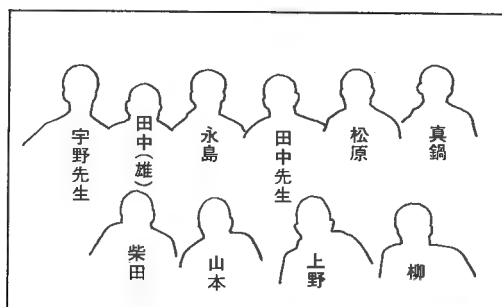
昭和28年3月卒業（高5回）

近畿局校ラグビー
 決勝 官 近畿局校ラグビー大会
 準決勝 西 第二日（後援）は三
 十日午後二時半から
 官校で行われた

F Wの健闘に快勝
 試合上手の天王寺、光風を降す

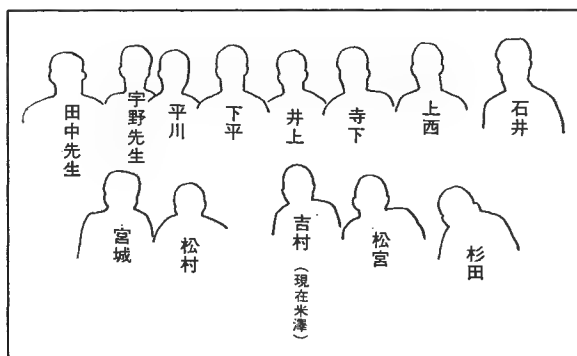
（近畿）（6-0）（官）（6-0）
 集計 10 10 0 0
 T O F 反
 西 2 0 0 0
 官 0 0 0 0

「試合上手の天王寺、光風を降す」
 近畿局校ラグビー大会の決勝戦は、官校（天王寺）と西校（光風）との対戦で、官校が6-0で快勝した。試合は天王寺の選手が、光風の選手を降すという、非常に上手なプレーで、光風の選手は、非常に苦戦した。天王寺の選手は、非常に上手なプレーで、光風の選手を降すという、非常に上手なプレーで、光風の選手は、非常に苦戦した。





昭和29年3月卒業（高6回）





『入試』どこ吹く風

仲がよすぎてこまる

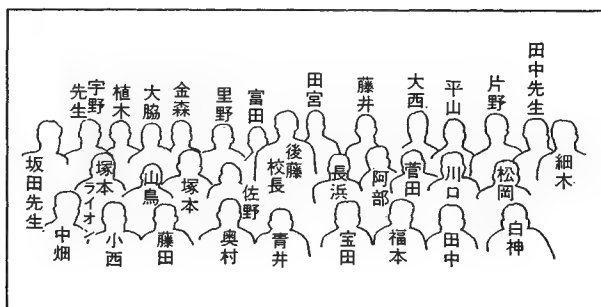
近は高校が大学の予備校化して三年になると留手も引退、もっぱら受験勉強でギューギューいませられている学校が多いのに、天守寺高校では三年生も受験など吹く風、入京にも受験準備ふりを装って勝つとつもらし。

[illegible][illegible][illegible]

昭和28年秋の読売新聞



昭和30年3月卒業（高7回）



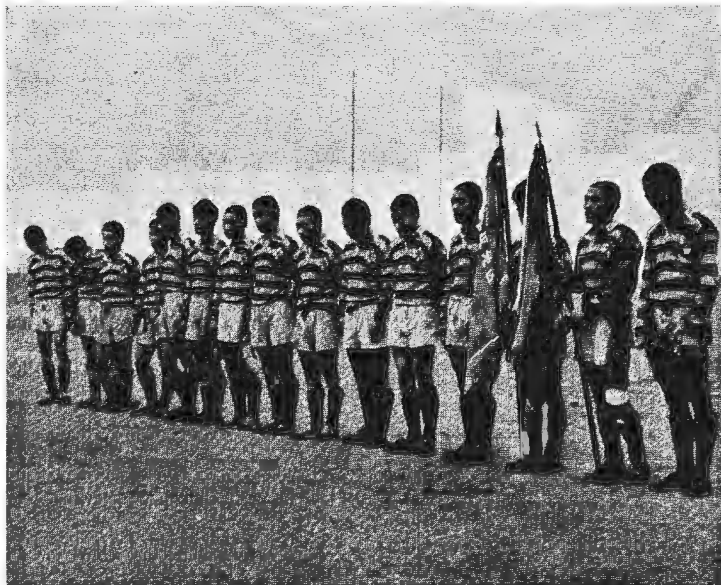


国体優勝戦 対秋田工高





対桐陰高戦



大阪予選優勝戦



国体出場メンバー

国体メンバー表

国体出場メンバー表		高校野球対抗出場メンバー名		
国体出場メンバー表		徳島県立高等学校 (選手15名)	山口県立高等学校 (選手15名)	香川県立高等学校 (選手15名)
投手	佐々木 隆	佐々木 隆	佐々木 隆	佐々木 隆
捕手	佐々木 隆	佐々木 隆	佐々木 隆	佐々木 隆
一塁手	佐々木 隆	佐々木 隆	佐々木 隆	佐々木 隆
二塁手	佐々木 隆	佐々木 隆	佐々木 隆	佐々木 隆
三塁手	佐々木 隆	佐々木 隆	佐々木 隆	佐々木 隆
遊撃手	佐々木 隆	佐々木 隆	佐々木 隆	佐々木 隆
内野手	佐々木 隆	佐々木 隆	佐々木 隆	佐々木 隆
外野手	佐々木 隆	佐々木 隆	佐々木 隆	佐々木 隆
投手	佐々木 隆	佐々木 隆	佐々木 隆	佐々木 隆
捕手	佐々木 隆	佐々木 隆	佐々木 隆	佐々木 隆
一塁手	佐々木 隆	佐々木 隆	佐々木 隆	佐々木 隆
二塁手	佐々木 隆	佐々木 隆	佐々木 隆	佐々木 隆
三塁手	佐々木 隆	佐々木 隆	佐々木 隆	佐々木 隆
遊撃手	佐々木 隆	佐々木 隆	佐々木 隆	佐々木 隆
内野手	佐々木 隆	佐々木 隆	佐々木 隆	佐々木 隆
外野手	佐々木 隆	佐々木 隆	佐々木 隆	佐々木 隆
投手	佐々木 隆	佐々木 隆	佐々木 隆	佐々木 隆
捕手	佐々木 隆	佐々木 隆	佐々木 隆	佐々木 隆
一塁手	佐々木 隆	佐々木 隆	佐々木 隆	佐々木 隆
二塁手	佐々木 隆	佐々木 隆	佐々木 隆	佐々木 隆
三塁手	佐々木 隆	佐々木 隆	佐々木 隆	佐々木 隆
遊撃手	佐々木 隆	佐々木 隆	佐々木 隆	佐々木 隆
内野手	佐々木 隆	佐々木 隆	佐々木 隆	佐々木 隆
外野手	佐々木 隆	佐々木 隆	佐々木 隆	佐々木 隆



第34回全国大会出場メンバー





対北見高戦

対福岡高戦



[illegible]

第 二 日

● 男子 100 ヤード 決勝

1	アメリカ	10.0
2	イギリス	10.2
3	フランス	10.3
4	オーストラリア	10.4
5	ドイツ	10.5
6	日本	10.6
7	イタリア	10.7
8	ソ連	10.8

● 男子 200 ヤード 決勝

1	アメリカ	20.5
2	イギリス	20.8
3	フランス	21.0
4	オーストラリア	21.2
5	ドイツ	21.5
6	日本	21.8
7	イタリア	22.0
8	ソ連	22.2

● 男子 400 ヤード 決勝

1	アメリカ	41.5
2	イギリス	42.0
3	フランス	42.5
4	オーストラリア	43.0
5	ドイツ	43.5
6	日本	44.0
7	イタリア	44.5
8	ソ連	45.0

● 男子 800 ヤード 決勝

1	アメリカ	1:25.0
2	イギリス	1:26.0
3	フランス	1:27.0
4	オーストラリア	1:28.0
5	ドイツ	1:29.0
6	日本	1:30.0
7	イタリア	1:31.0
8	ソ連	1:32.0

● 男子 1600 ヤード 決勝

1	アメリカ	2:55.0
2	イギリス	2:56.0
3	フランス	2:57.0
4	オーストラリア	2:58.0
5	ドイツ	2:59.0
6	日本	3:00.0
7	イタリア	3:01.0
8	ソ連	3:02.0

● 男子 3200 ヤード 決勝

1	アメリカ	5:50.0
2	イギリス	5:51.0
3	フランス	5:52.0
4	オーストラリア	5:53.0
5	ドイツ	5:54.0
6	日本	5:55.0
7	イタリア	5:56.0
8	ソ連	5:57.0

● 男子 6400 ヤード 決勝

1	アメリカ	11:40.0
2	イギリス	11:41.0
3	フランス	11:42.0
4	オーストラリア	11:43.0
5	ドイツ	11:44.0
6	日本	11:45.0
7	イタリア	11:46.0
8	ソ連	11:47.0

● 男子 12800 ヤード 決勝

1	アメリカ	23:30.0
2	イギリス	23:31.0
3	フランス	23:32.0
4	オーストラリア	23:33.0
5	ドイツ	23:34.0
6	日本	23:35.0
7	イタリア	23:36.0
8	ソ連	23:37.0

● 男子 25600 ヤード 決勝

1	アメリカ	47:00.0
2	イギリス	47:01.0
3	フランス	47:02.0
4	オーストラリア	47:03.0
5	ドイツ	47:04.0
6	日本	47:05.0
7	イタリア	47:06.0
8	ソ連	47:07.0

● 男子 51200 ヤード 決勝

1	アメリカ	94:00.0
2	イギリス	94:01.0
3	フランス	94:02.0
4	オーストラリア	94:03.0
5	ドイツ	94:04.0
6	日本	94:05.0
7	イタリア	94:06.0
8	ソ連	94:07.0

● 男子 102400 ヤード 決勝

1	アメリカ	188:00.0
2	イギリス	188:01.0
3	フランス	188:02.0
4	オーストラリア	188:03.0
5	ドイツ	188:04.0
6	日本	188:05.0
7	イタリア	188:06.0
8	ソ連	188:07.0

● 男子 204800 ヤード 決勝

1	アメリカ	376:00.0
2	イギリス	376:01.0
3	フランス	376:02.0
4	オーストラリア	376:03.0
5	ドイツ	376:04.0
6	日本	376:05.0
7	イタリア	376:06.0
8	ソ連	376:07.0

● 男子 409600 ヤード 決勝

1	アメリカ	752:00.0
2	イギリス	752:01.0
3	フランス	752:02.0
4	オーストラリア	752:03.0
5	ドイツ	752:04.0
6	日本	752:05.0
7	イタリア	752:06.0
8	ソ連	752:07.0

● 男子 819200 ヤード 決勝

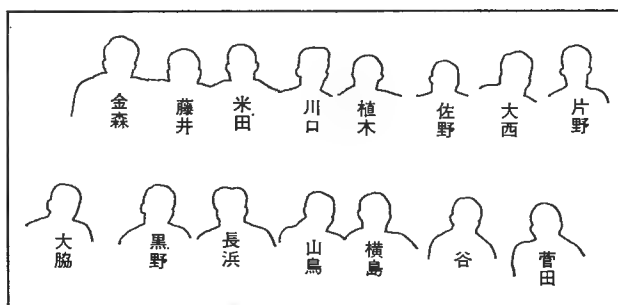
1	アメリカ	1504:00.0
2	イギリス	1504:01.0
3	フランス	1504:02.0
4	オーストラリア	1504:03.0
5	ドイツ	1504:04.0
6	日本	1504:05.0
7	イタリア	1504:06.0
8	ソ連	1504:07.0

[illegible]



昭和31年3月卒業（高8回）

大阪予選優勝





＜野本楯＞ 昭和29年12月27日の定期戦で傷つき、翌日不幸にも亡くなった北野高・野本君のご両親が、両校の定期戦に寄贈された楯で、翌昭和30年12月25日の定期戦より、その勝者に授与されることになった。

昭和30年12月25日第34回対北野定期戦北野高
・野本君の1周年忌に野本楯が作成された





対夕陽丘定期戦

第35回全国高等学校ラグビー大会
昭和31年1月13.5.7日 於西宮球場

鹿 島 高—3	3	優勝	10—0	兵 庫 高
上 野 丘 高—16	3		8—0	高 崎 高
北 見 北 斗 高—58	22		24—0	天 理 高
萩 商 工 高—0	22		6—0	密 着 高
秋 田 工 高—25	33	秋田工高	0—0	天 王 寺 高
福 岡 工 高—0	33		19—12	保 羅 高
熊 津 高—12	3		5—0	照 本 工 高
新 田 高—3	3		24—3	愛 媛 工 高



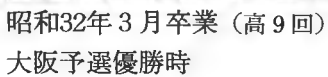
第35回全国大会出場メンバー



入場行進するフィフティーン



対保善高戦



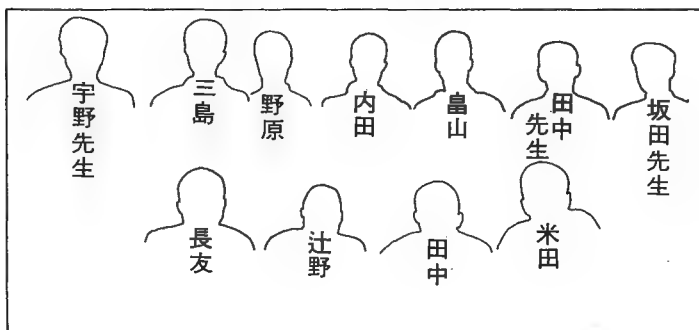
報徳、天理など勝進す。

昭和31年1月朝日新聞



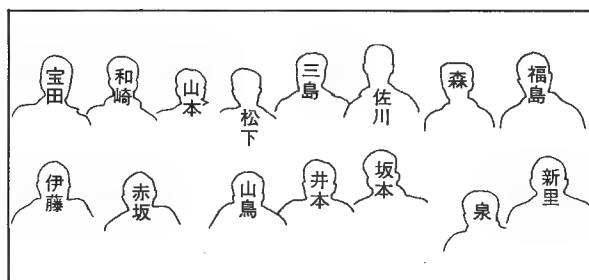


昭和33年3月卒業（高10回）





昭和34年3月卒業（高11回）





第38回全国大会で行進するフィフティーン



対盛岡工商戦

元日のスポーツ

全国高校ラグビー

第一日

雨中の熱戦、強豪勝ち進む

秋田「王者の風格」

新田、保善を苦しめる

【秋田県立新田高校対保善高校戦】

秋田県立新田高校の選手たちが、保善高校の選手たちと激しく争っている。新田高校の選手たちは、保善高校の選手たちを苦しめている。

【秋田県立保善高校対新田高校戦】

秋田県立保善高校の選手たちが、新田高校の選手たちと激しく争っている。保善高校の選手たちは、新田高校の選手たちを苦しめている。



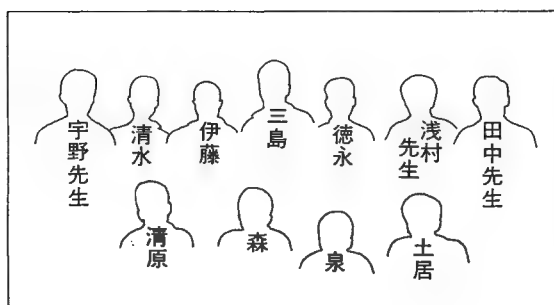
昭和34年1月3日付毎日新聞



昭和35年3月卒業（高12回）

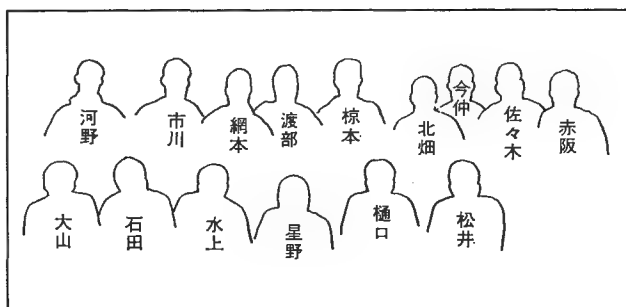


春のメンバー



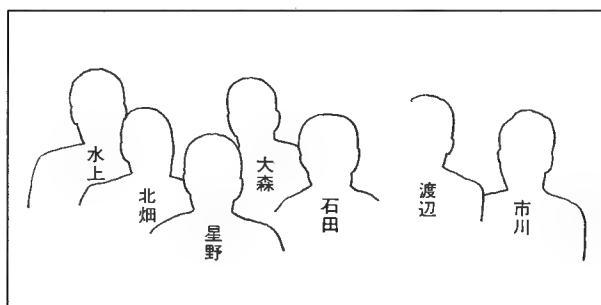


昭和36年3月卒業（高13回）



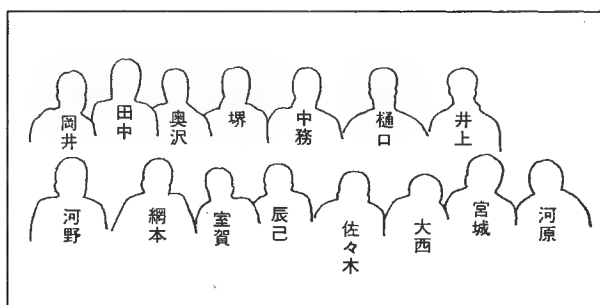


昭和37年3月卒業（高14回）



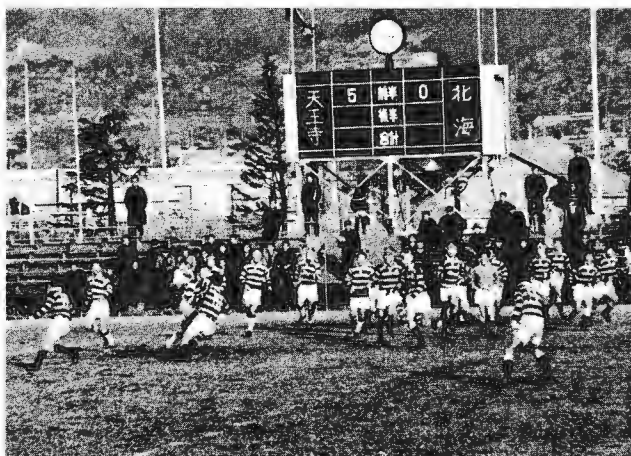


昭和38年3月卒業（高15回）
第42回全国大会場



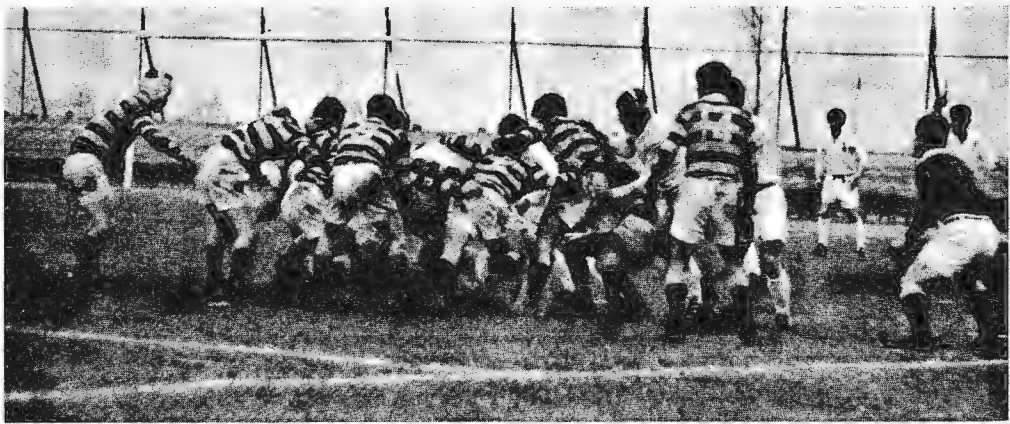


対日大鶴丘高戦



対北海高戦





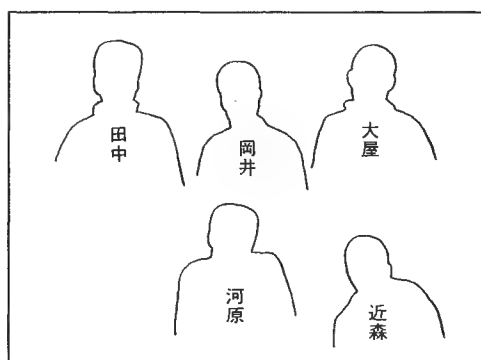
対天理高戦



戦い終わって…

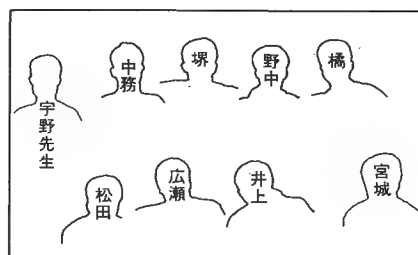


昭和39年3月卒業（高16回）





昭和40年3月卒業（高17回）



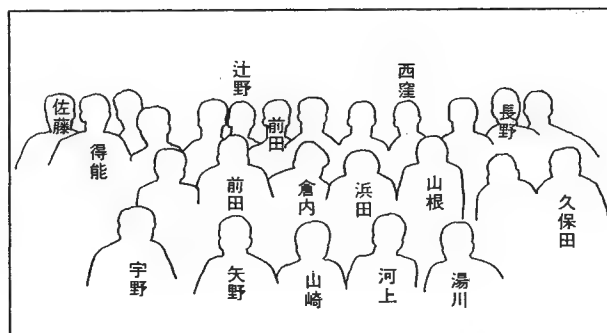


全国大会大阪予選（大阪城）





昭和41年3月卒業（高18回）



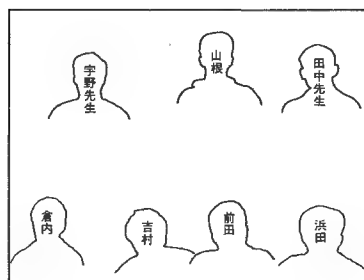


第1回菅平合宿より



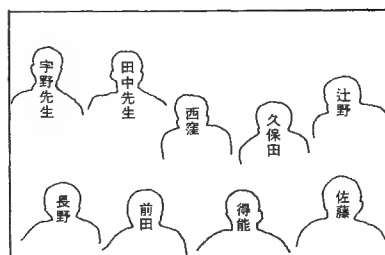


昭和42年3月卒業（高19回）





昭和43年 3 月卒業（高20回）





大阪予選優勝戦
対布施工戦

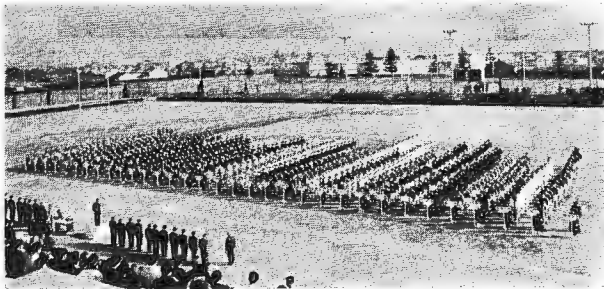


第47回全国大会出場を決める





昭和43年1月3日付毎日新聞



・第46回全国大会

天王寺 健闘及ばず
広工大付と新田は快勝

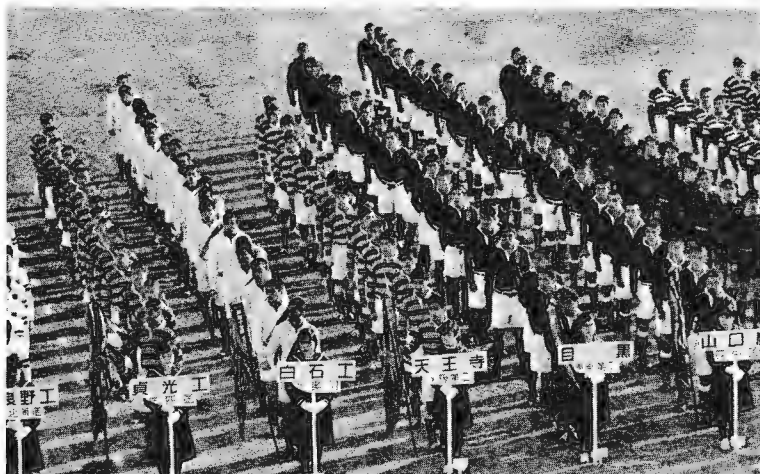
【大阪(第二)】
 10月18日(土)の第46回全日本学生選手権大会(以下全日本学生選手権)の第1試合、天王寺大学(大阪第二)対広島工業大学(広島)の試合が行われ、天王寺は0-1で敗れた。天王寺は前半から積極的にボールを回したが、後半に入ると広島が徐々にペースを握り、後半25分に新田がゴールを決めて勝利した。天王寺は健闘したが、結果は敗戦となった。

【広島(第一)】
 10月19日(日)の第46回全日本学生選手権の第2試合、広島工業大学(広島)対新田高等学校(新潟)の試合が行われ、広島は3-0で快勝した。広島は前半から圧倒的な攻撃を仕掛け、前半10分に新田がゴールを決めた。後半にはさらに2ゴールを決め、大勝した。

【天王寺(大阪第二)】
 10月20日(月)の第46回全日本学生選手権の第3試合、天王寺大学(大阪第二)対山口大学(山口)の試合が行われ、天王寺は0-1で敗れた。天王寺は前半から積極的にボールを回したが、後半に入ると山口が徐々にペースを握り、後半25分に山口がゴールを決めて勝利した。天王寺は健闘したが、結果は敗戦となった。

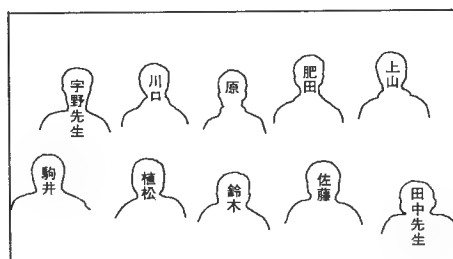
【山口(山口)】
 10月21日(火)の第46回全日本学生選手権の第4試合、山口大学(山口)対白石工科大学(山梨)の試合が行われ、山口は2-1で勝利した。山口は前半から積極的にボールを回したが、後半に入ると白石工が徐々にペースを握り、後半25分に山口がゴールを決めて勝利した。山口は健闘したが、結果は勝利となった。

辛勝
 やっと



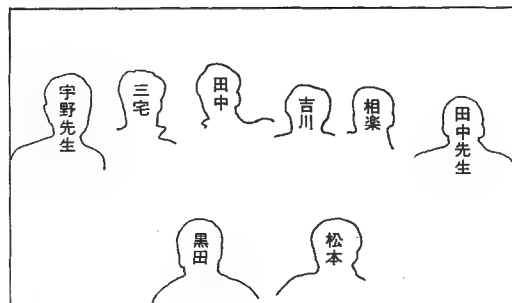


昭和44年3月卒業（高21回）



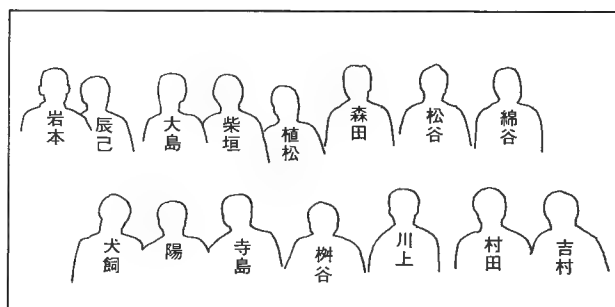


昭和45年 3 月卒業（高22回）



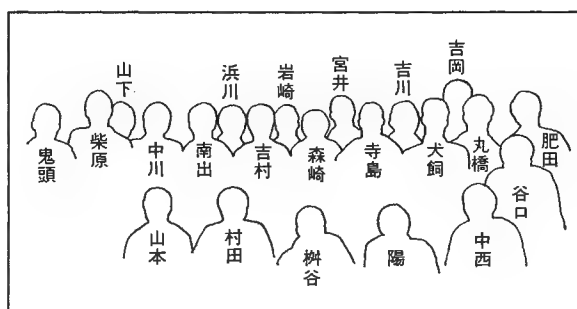


昭和46年3月卒業（高23回）



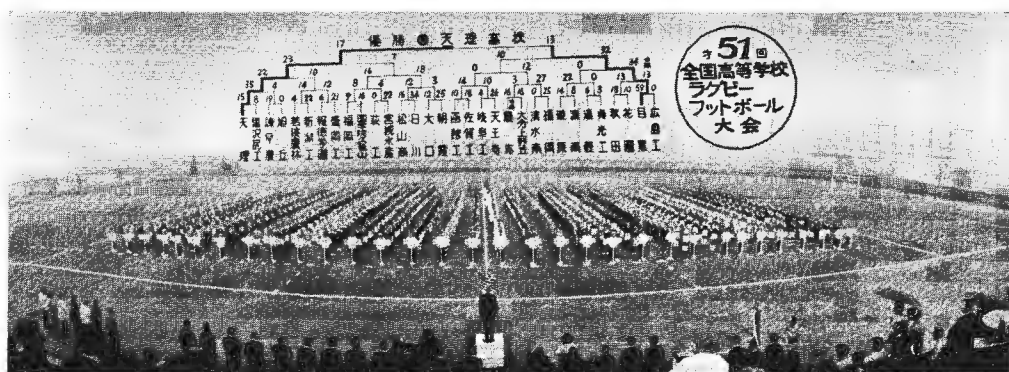


昭和47年3月卒業（高24回）



国体出場のメンバー





対岐阜工高



↑
対佐賀工高戦

昭和47年1月5日付毎日新聞

[illegible][illegible]

大正12年
1923
8-7 読川工業

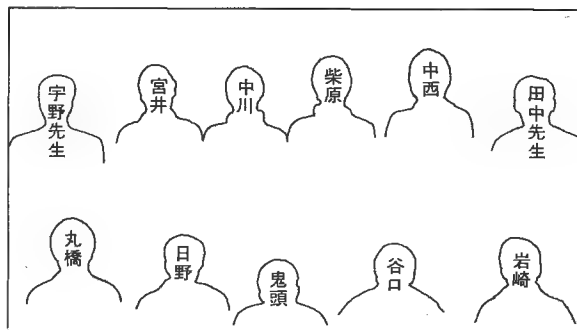
工 事 表		(三 電 表)	
姓 名	学 号	年 月 日	工 作 内 容
田 中 孝 一	3 2 2 1	3 月 2 日	1. 2. 3. 4. 5. 6. 7. 8. 9. 10. 11. 12. 13. 14. 15. 16. 17. 18. 19. 20. 21. 22. 23. 24. 25. 26. 27. 28. 29. 30. 31. 32. 33. 34. 35. 36. 37. 38. 39. 40. 41. 42. 43. 44. 45. 46. 47. 48. 49. 50. 51. 52. 53. 54. 55. 56. 57. 58. 59. 60. 61. 62. 63. 64. 65. 66. 67. 68. 69. 70. 71. 72. 73. 74. 75. 76. 77. 78. 79. 80. 81. 82. 83. 84. 85. 86. 87. 88. 89. 90. 91. 92. 93. 94. 95. 96. 97. 98. 99. 100. 101. 102. 103. 104. 105. 106. 107. 108. 109. 110. 111. 112. 113. 114. 115. 116. 117. 118. 119. 120. 121. 122. 123. 124. 125. 126. 127. 128. 129. 130. 131. 132. 133. 134. 135. 136. 137. 138. 139. 140. 141. 142. 143. 144. 145. 146. 147. 148. 149. 150. 151. 152. 153. 154. 155. 156. 157. 158. 159. 160. 161. 162. 163. 164. 165. 166. 167. 168. 169. 170. 171. 172. 173. 174. 175. 176. 177. 178. 179. 180. 181. 182. 183. 184. 185. 186. 187. 188. 189. 190. 191. 192. 193. 194. 195. 196. 197. 198. 199. 200. 201. 202. 203. 204. 205. 206. 207. 208. 209. 210. 211. 212. 213. 214. 215. 216. 217. 218. 219. 220. 221. 222. 223. 224. 225. 226. 227. 228. 229. 230. 231. 232. 233. 234. 235. 236. 237. 238. 239. 240. 241. 242. 243. 244. 245. 246. 247. 248. 249. 250. 251. 252. 253. 254. 255. 256. 257. 258. 259. 260. 261. 262. 263. 264. 265. 266. 267. 268. 269. 270. 271. 272. 273. 274. 275. 276. 277. 278. 279. 280. 281. 282. 283. 284. 285. 286. 287. 288. 289. 290. 291. 292. 293. 294. 295. 296. 297. 298. 299. 300. 301. 302. 303. 304. 305. 306. 307. 308. 309. 310. 311. 312. 313. 314. 315. 316. 317. 318. 319. 320. 321. 322. 323. 324. 325. 326. 327. 328. 329. 330. 331. 332. 333. 334. 335. 336. 337. 338. 339. 340. 341. 342. 343. 344. 345. 346. 347. 348. 349. 350. 351. 352. 353. 354. 355. 356. 357. 358. 359. 360. 361. 362. 363. 364. 365. 366. 367. 368. 369. 370. 371. 372. 373. 374. 375. 376. 377. 378. 379. 380. 381. 382. 383. 384. 385. 386. 387. 388. 389. 390. 391. 392. 393. 394. 395. 396. 397. 398. 399. 400. 401. 402. 403. 404. 405. 406. 407. 408. 409. 410. 411. 412. 413. 414. 415. 416. 417. 418. 419. 420. 421. 422. 423. 424. 425. 426. 427. 428. 429. 430. 431. 432. 433. 434. 435. 436. 437. 438. 439. 440. 441. 442. 443. 444. 445. 446. 447. 448. 449. 450. 451. 452. 453. 454. 455. 456. 457. 458. 459. 460. 461. 462. 463. 464. 465. 466. 467. 468. 469. 470. 471. 472. 473. 474. 475. 476. 477. 478. 479. 480. 481. 482. 483. 484. 485. 486. 487. 488. 489. 490. 491. 492. 493. 494. 495. 496. 497. 498. 499. 500. 501. 502. 503. 504. 505. 506. 507. 508. 509. 510. 511. 512. 513. 514. 515. 516. 517. 518. 519. 520. 521. 522. 523. 524. 525. 526. 527. 528. 529. 530. 531. 532. 533. 534. 535. 536. 537. 538. 539. 540. 541. 542. 543. 544. 545. 546. 547. 548. 549. 550. 551. 552. 553. 554. 555. 556. 557. 558. 559. 560. 561. 562. 563. 564. 565. 566. 567. 568. 569. 570. 571. 572. 573. 574. 575. 576. 577. 578. 579. 580. 581. 582. 583. 584. 585. 586. 587. 588. 589. 590. 591. 592. 593. 594. 595. 596. 597. 598. 599. 600. 601. 602. 603. 604. 605. 606. 607. 608. 609. 610. 611. 612. 613. 614. 615. 616. 617. 618. 619. 620. 621. 622. 623. 624. 625. 626. 627. 628. 629. 630. 631. 632. 633. 634. 635. 636. 637. 638. 639. 640. 641. 642. 643. 644. 645. 646. 647. 648. 649. 650. 651. 652. 653. 654. 655. 656. 657. 658. 659. 660. 661. 662. 663. 664. 665. 666. 667. 668. 669. 670. 671. 672. 673. 674. 675. 676. 677. 678. 679. 680. 681. 682. 683. 684. 685. 686. 687. 688. 689. 690. 691. 692. 693. 694. 695. 696. 697. 698. 699. 700. 701. 702. 703. 704. 705. 706. 707. 708. 709. 710. 711. 712. 713. 714. 715. 716. 717. 718. 719. 720. 721. 722. 723. 724. 725. 726. 727. 728. 729. 730. 731. 732. 733. 734. 735. 736. 737. 738. 739. 740. 741. 742. 743. 744. 745. 746. 747. 748. 749. 750. 751. 752. 753. 754. 755. 756. 757. 758. 759. 760. 761. 762. 763. 764. 765. 766. 767. 768. 769. 770. 771. 772. 773. 774. 775. 776. 777. 778. 779. 780. 781. 782. 783. 784. 785. 786. 787. 788. 789. 790. 791. 792. 793. 794. 795. 796. 797. 798. 799. 800. 801. 802. 803. 804. 805. 806. 807. 808. 809. 810. 811. 812.

昭和25年
9月
17-3 2庫/6



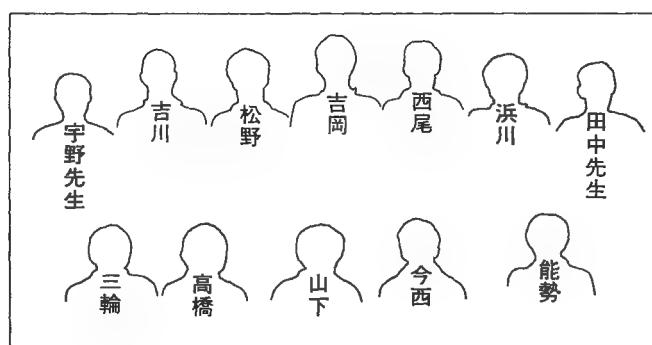


昭和48年3月卒業（高25回）





昭和49年3月卒業（高26回）

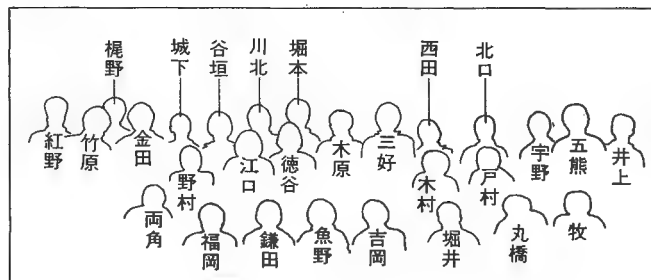


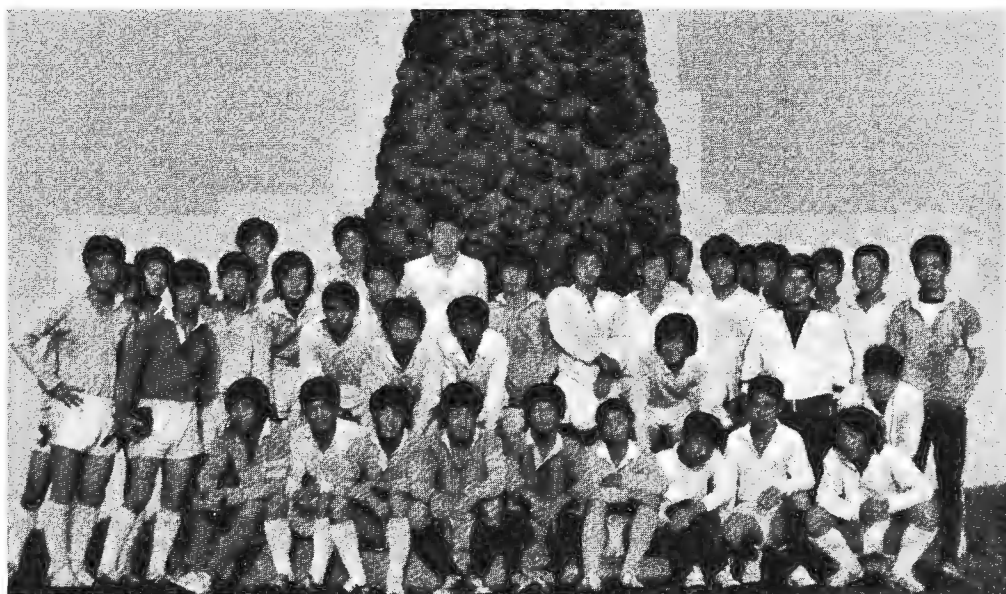


昭和50年3月卒業（高27回）



対北野定期戦兼全国大会予選③（大阪城で）

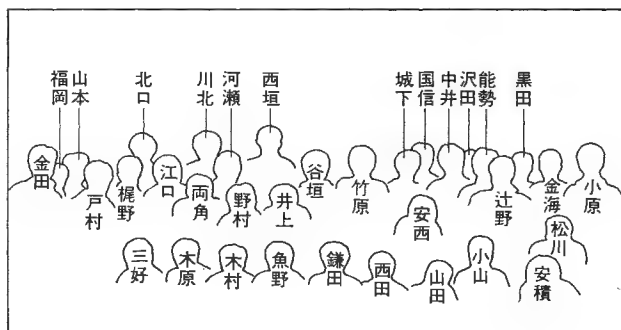




昭和51年3月卒業（高28回）



全国大会大阪予選メンバー



●思い出の記



回想にならぬ回想記

西 野 綱 三(23回生)

ボクは天中時代、ラグビーをやらなかった。その理由はいとも簡単、天中にはラグビーがなかったからである。

天中でスポーツらしいものといえば野球ぐらいで、わずかにもっぱら走るだけのランニングがこれに続いていた。当時2年間続いたのち突然中止になった大阪府立十中聯合運動会が最初からもし開催されていなかったなら、このランニングすらも生まれなかったであろう。

この十中聯合運動会が中止になったので急にボクの3年生の時、天中としてははじめての全国的規模のレースに出場することとなり、800メートルリレーのメンバーが編成され、ボクははからずも4、5年生の上級生の中に3年生として一人加わることとなった。タイムなど計測したことがなかったので、この天中組の力量のほどはだれも分からなかった。誠に大胆で幼稚な時代である。ボクなどはレースの前夜になってはじめてランニングシューズを手に入れるほどだった。レースは当時すでに全国でその名の高かった愛知一中が第一着で入り、天中組は思いもよらずスタートからゴール寸前まで第二位を持続し、天中応援団をわき立たせたが、惜しくも関西学院中等部にゴール前で敗れ第3位に甘んじた。しかしこの実力未知数の天中組の奮闘振

りはスタンドで応援の天中生と共に観戦していたかの勉強一本ヤリのがん固一徹な鈴木寿太郎校長をいたく感激させたらしく、われわれがゴールに入るや直ちにスタンドの前に呼んで、翌日4人そろって校長室に来るようにとのことだった。

校長室ではボクとしては初めて破天荒のおほめの言葉をいただき、つづいてこの入賞を機会に今後天中の対外試合不許可の禁を解くと言明されたのであった。それからというのは天中の校庭はバツと明るくなり、まず野球が夏の全国中等学校大会予選に出場、つづいてテニスをはじめいろいろとスポーツが芽生え、やがてラグビーもようやく生まれ出ようとして胎動をはじめたのであった。

ところでこのあたりでそろそろ本題のラグビーに入らねばなるまい。——ボクが天中時代にラグビーというものを見たのは、阪神沿線の鳴尾競馬場で朝日新聞社主催の陸上競技冬期練習会に参加した折、競馬場のはるか彼方の芝生の上で慶応義塾の連中が楕円の球を蹴^キっており、その中に天中第17回生の井上二郎先輩がいると聞かされると同時にあれがラグビーという競技だと教えられた。この井上二郎先輩はやがて推されて慶応義塾の主将となり、しかも慶応普通部出身者以外から主将に選ばれた最初の人と聞いた。またそのころ天中時代から足の速かった第18回生の村尾喜政先輩も同志社大学ラグビーで活躍しているとも伝えられていた。以上のこの二つの事例がボクの天中時代に接したラグビーのかかわ

りあいである。

後年ボクが早大に進学するに及び、遅まきながらどういう機縁かラグビーにうつつを抜かすようになり、ついには早大の濠洲遠征にも加わり、日本最初のラグビー海外遠征までなしとげることにもなった。今にして思うに、ボクの天中時代にラグビーがあったとすれば、ボクの気性のことだから、なんの躊躇^{ちゆうちよ}もなしに進んでラグビーに飛び込み、さらに高度のラグビーを体得したであろうと惜しまれてならない。

天中時代のラグビーと限定されると以上の如く材料が極めて貧弱で、こんなことぐらしか書けず、ここにこわるるまま、いわゆる回想記ならぬ一文を草し、いうなれば天中ラグビー部50年史作製に当たり、わずかに枯木も山のにぎわいともなればとあえて筆を執った次第である。

50年に思う

阿部 幸作(25回生)

桃陰の庭にラグビーが胎動し始めたのは、大正11年の春ごろである。大正11年といえ、今の若い人には想像もつかないが、世はまさに「枯すき時代」といわれて「俺もお前も枯すきどうせ二人はこの世では花の咲かない枯すき」という歌が一世を風びし、その物語るごとく、第1次世界大戦の余波を受けて、青年の士気の退廃墮落は、現代青年の道理に対する蒙昧^{もろまい}より来たる墮落とは違っ

て、まさに国家の無明時代であった。それは、ちょうど1820年ごろ英国にラグビーが発生するころの前夜の様相に似ていた。かつては7つの海に君臨した英国もフランス革命の影響を受けて国民の意気沈滞、無感激の社会を現出しつつあったに似ている。すなわち「無明」とは、何事にも無感覚で、驚かない状態に彷徨^{ほうこう}することである。「ぼくは唯一の不思議な願いを持っている。大科学者。大哲学者。大宗教家になることでもない。理想社会の実現でもない。結局、それは驚きたい、という願いだ」と国木田独歩が「牛肉と馬鈴薯」の主人公に叫ばせているのは有名である。すなわち人間は、だんだん驚かなくなる。すなわち純真熱烈に感じなくなる。マヒしてくる。善にも、また悪にも何ともなくなってくる。当時の若い者は、それはちょうど幕末の儒者塩谷宕陰がいったように「その庠校に在るや孜々勤勞する者あり。庠退くに及んでは即ち倦む。庠を退いて倦まざる者あり。妻子を蓄ふるに及んでは即ち衰ふ。妻子を蓄へて衰へざる者あり。一患一災に逢へば即ち挫^{くじ}く」。庠とは学校のことである。学校を卒業しただけで消えてしまう者もあるが、やっと社会に出て家を持った者といえども、一患一災にあえば挫けてしまう。当時の青年にはかくのごとき風潮があったのである。

しかしながら突如として当時の天王寺の校庭に見たこともない一個の楕円球^だが投げ込まれた。これに驚いた者は、むしろ孔々として勤勞する者よりも、わずかながらも驚きに驚

き得る純情を持っていた者たちである。これがラグビーに飛びついた。そしてラグビーの模索と研鑽^{さん}が始まったのである。

以来今日まで50余年を経て考えてみると、当時より勤勉^{ぎん}挫折することなく、今日をなし遂げた者もある。しかし少なくとも私にとってはラグビーは、私なりに私の精神的基盤となったことは間違いない。すなわちいずれの出発点よりするも、人生は絶えざる学業である。社会や宇宙はそのままに一大経巻である。これをいかに解し会得するかが学ぶ人と学び得ざる人の別れるゆえんである。王陽明の詩に「坎^{かん}に遇うて稍餒^ううる莫^なし」逆境に遭ってもどうやら心がふらつかない。魂が飢えないようになったということであるが、私にとっては、坎^{かん}遭って餒^ううるものがなくなったのは、精神的にはラグビーに出発したる人生であり得たからであると今なおありがたく考えている。

桃陰のラグビーで、われらの先輩として忘れてはならぬ人が3人ある。それは稗田幸三郎、奥村正也、井上二郎の三先輩である。稗田さんは天中11回の卒業生である。大正11年の初夏、突如として私の家へ稗田さんから電話がかかった。私にとっては、もちろん、一面識もない人からの電話である。いわく、自分は天中11回の卒業生である。天中でラグビーをやり始めたそうだが、そうか、それなら自分が指導しに行きやう。練習は日曜ごとに朝10時から始めるから大阪高等学校のグラウンドへ集れという指令である。私は先輩と

はありがたいものだとは思ったが、その圧倒的な気迫に最初から押された。果たしてその練習の猛烈なこと、指導ぶりの厳しいこと、さしも当時の天中随一の硬派を集めた我々も、いささか音を上げた。

稗田さんは自ら語るところによると、稗田さんは慶応のラグビー選手であった。ラグビーというものは気楽なものではない。苦しみの中に自分を求めて行くのだというようなことを我々に教えられた。当時の稗田さんは若かったのであろうが率先して走りまわった。稗田さんはその言外に、その態度の中に、当時の若者の退廃精神を歎いていたのである。

「オレはオレの家の物干しにラグビーの旗を立てて置くから、その旗の立ってる時はいつでも遊びに来い」といわれた。当時ほどの家でも物干し場は屋根の上にあったのである。それでその旗の立っている時に私も参上したことを覚えている。稗田さんの家は堀江川に面した、こじんまりとした家だった。そこで稗田さんは我々に、いろいろなことを教えてくださった。ラグビーは英国から伝わったものではあるが、その精神は我々日本人として養わねばならぬこと、我々日本の青年としてこれを練成することによって、良き紳士たるべきことを強調された。私は妙に感激して、ラグビーを超えて人生に対する気概のようなものをおぼえ出したのはこの時からである。その稗田さんも間もなく九州へ転任され、戦争の始る前に彼地で亡くなられたことを聞いた。折あらばその最後の消息を確かめて、私

も自分の生きている間にその墓前に桃陰ラグー50年を報告したいと思っている。

奥村正也さんは天中16回の卒業生である。この人のことになると桃陰ラグーの中でも、知ってる人も多かろう。奥村さんは同志社大学の往年の名選手である。奥村さんが天中の後輩である天王寺ラグビー選手をかわいがったことは、天中独特の先輩後輩のつながりの権化である。それこそ奥村さんは天中ラグビーを強くするために、自分の生活をさいてでも尽くしてくれた人である。昭和17年に天中が神宮大会、全国大会と優勝し得た素地がつくられたのは、その遠因が奥村時代につくられたと申してもよい。奥村さんは昭和5、6年ごろに東京へ移られたが、晩年は健康を害して不遇といううわさを聞いた。その後私も戦争出征、帰還後の病臥と目まぐるしい回りどうろうを眺めているうちに、奥村さんの他界を聞いた。私は、ここにも心残を背負いながら、何かは奥村さんにも桃陰ラグーも50年になったことを申しあげねばならぬと思っている。

井上二郎さんが亡くなられてから、もう20年以上にもなる。井上さんは天中17回の卒業生で、往年の慶応の名ラグーであったことは少し古いラグーなら、だれでも知っている。従って戦前戦後を通じて天中でラグビーをやった者で井上さんを知らない者はないはずだし、直接間接に井上さんに厄介にならなかった者もないはずである。井上さんは私の目から見れば、終始一貫して貴公子であった。と

もすれば柄が悪くなる我々は、井上さんに接するようになってからは、無意識の中に自分を慎しむようになっていたことを今にして思い出す。井上さんは阪急を創立した財界人平賀敏氏の御曹子であって、兄さんも弟さんも3人そろって天中の先輩である。そして井上家に養嗣子となられ、生まれながらの持てる家に育った物質的には恵まれた人であった。井上さんはそれをよく自覚し、心の底ではそれを感謝していた人であったということは、その時々^もの言動にそれを伺うことが出来た。金は儲けるよりも使う方が難しい。私は井上さんを見ながらそう思った。昭和14、15年ごろまでは、私は主として桃陰ラグーの財政面に気を遣っていたが、井上さんは何時も私にいわれた「阿部、桃陰ラグーの練習や合宿で金が足りなかったら何時でもオレにいつて来い。そのしりぬぐいはオレがする」と。この一言が当時の私にとっては、どれだけ大きな力になったかいいしれない。

私は井上さんにこういわれてからは、井上さんに負担を掛けまいと懸命になった。お蔭で事実上は、そう井上さんにご迷惑はかけなかったと今でも喜んでいる。井上さんは貴公子ではあったが、なかなかの慎重居士であった。けれども一度決断したことには迅速であった。

昭和16、7年ごろであったか、足が速くなければラグビーはどうもならんという議論が起こった。しからば足を速くするにはどうしたらよいか、それは陸上競技のスタートダッ

シュの練習をさせることだ。それをやるには陸上競技のスパイクシューズをはかせてやるのが一番よいといひ出したのは井上さんである。そして井上さんは全選手にスパイクを注文させて、たちまち全選手に支給してしまった。私は何だか、皆の足が急に速くなったような気がしたのである。昭和17年の柴垣時代に神宮大会に優勝出来たのは、この辺に真因があったのであると今にして思う。私は井上さんに厄介になっていない者はないといったが、それは井上さんがよく自分を知っておられて、その見えない力を桃陰ラグーの上に与えて、見える結果の招来に役立たされたことを私はいったつもりである。いわんや井上さんには個人的にも厄介になった者も少なくない。

総じて天中の先輩の心根というものは、議論や理屈で考えていては到底分らない。なぜかというに、これら天中の先輩は後輩を世話したとか、まして恩を施したなどは毛頭思っていないからである。この人たちは、各々その持てるものをもって尽くしてくれたのではなく、そのなすところのものをもって、その責を果たそうとしたに過ぎない。すなわち、これら先輩にとっては、ラグビー精神が自然であったのである。

この外には、巖さんなどにも随分とたくさん厄介になっている。けれども巖さんはまだ健在であるし、この辺になると私などは先輩というより兄貴だという感が深い。従って巖さんがこの世を去る時は、私も続いてこの世

を去る時であるから現存の先輩については触れないで置く。

先輩の断片的な思い出を書いたので、もう一度当初に戻って回想と所感を続けてみよう。先にも申した通り、大正10年ごろは、上下社会の爛熟^{らんじゆくたいはい}顔^{らん}廃期^{はい}であって、少し気骨のある若者にとっては何ともはや切り切れない時勢であった。この時勢の天中になぜラグビーが生まれたのか、それは一にも二にも天王寺中学という学校の気風のなせる業である。私が天中へ入学した時には鈴木巻太郎という校長がいた。母校の標語である「質実剛健」を文字通りやってのけたのがこの校長である。今から考えても私の知る限りにおいては、この校長以上の傑物はいない。所持品であろうが学用品であろうが外国製品は一切禁止。冬でも外とうは着せない。上衣ズボンに手を入れるようなポケットはつけない。頭髪は二分刈りでもダメ。家へ帰って外出する時は必ず袴^{はかま}着用、女学校の運動会をのぞいたり宝塚の少女歌劇を見に行った者は即時停学、等々という具合に、恐らく今の若い者にいわせば、自由も何もない独裁の大弾圧ではないか、そんなところでよく被圧迫階級として辛抱したものだ。恐らく当時の天中生は縮み上がって萎縮していたのではないかというであろう。

ところが大いに違うのである。当時の天中生こそ今の自由を満喫しているであろうと思われる者よりも、はるかに意気軒昂^{こう}としていた。だからこそラグビー^{ラグビー}ルールの日本語訳もなかったあのころにラグビーが生まれたので

ある。しからばそのような弾圧下？においてさえもなぜ今日の者たちよりも意気軒昂であったのか、という疑問が起こるであろう。

佐藤一斎の言志録中に一斎がいている「教へて之を化すれば、化及び難し。化して之を教ゆれば、教へ入り易し」と。やれ自由だ、理論だ、民主主義だ、社会主義だ、ルールだ規則だ法律だ等々、今の世の中には議論や理屈ばかり教えることが多過ぎる。現在の学校も研修会も、教育と名のつくものには「教」が多すぎる。まさに教育過剰である。だから人間形成などいっても、理論や行事を伝達するのが関の山で、人間そのものをつくり上げるところまでいかない。この一斎の言葉の中で「化」ということが一番大事なのである。化とは変化の化であって、人間で申せば、気質なり体質を変化させることである。化の力の最大なるものは天地の化であるが、化は天地の間にみなぎり万物を化して生々とせしめている。古人は四季の天地の化を春生、夏長、秋収、冬蔵といっている。天地に化ある如く、人間もまた、これを有するのである。春風^{たいとう}駘蕩たる和気も生ずれば、疾風迅雷の怒気も生ずる。それ等によって家風を生じ、校風を生じ、国風を生ずる。人々はこの「風」によって自ら化せられるのである。

教育や政治の最上の働きはここにあるべきだと思う。この「風」を作る原動力が、自然界における天である如く、人間界においてはその指導的地位にある「人」である。「治人

ありて治法なし」であって、往年の鈴木巻太郎校長は、自らを治むる人となすことによって、わが母校天中に「質実剛健」という化、すなわち気風を作り上げたのである。そしてその中に前記の、いわゆる弾圧とも思われる教えを教え込んだ。これはただ単に教えて気風を作ろうとしても、教えは到底及び難いのであるけれども、質実剛健の気風の中に教え込まれた教えは、極めて入り易く、かえってこれは当時の天中生にとっては、知らず知らずの中に、困苦の中に自己を養う気力として意気軒昂にはね返ったのである。

かかる校風がラグビーにマッチし、ラグビーを母校に招来せしめた。50年を経たる今日、私はこのように考えている。従って春秋の論法をもってすれば、鈴木校長わが校風を作り、わが校風ラグビーを呼ぶ、ということになる。鈴木校長はその校風を残して突如として辞職した。その後の混とんたる時代にラグビーが創設された。一口に創設というが、日本語のルールや書物が皆無の当時では、何事も伝聞、口伝に終始していた。案ずるより生むが易しというけれども、それは第三者から見ての話であって、あのころの中学生にとっては案じるだけでも容易なことではなかったのに、生み出すことはなかなかの苦勞であった。何も分かってくれない学校当局への説得、やろうという者への説明、反対勢力の鎮圧等々に約1年かかった。それでも大正11年秋には一応チームの恰好をしたチームが出来上がったのである。

ラグビーは他のスポーツと違って、簡単に上衣だけを脱いでやるという訳にはいかない。これは欠点であるかも知れないが反面からいえばラグビーのラグビーたる所以である。すなわちラグビーは、やる気になって腹を決めてかからなければやれない競技である。中途半端では出来ない。腹を決めて徹底したいでちになって勝負をする。どうも当時の天中生にはそんな気風があったように思う。いずれにしてもこんな気風というものは、若者が自己の所信に対して純情なる熱情を持っている証拠であって、従って当時の天中生は、文句なしにかなりの訓練によく耐えたものだ。困苦を打開して勝利を得るためには、訓練より外にはないという潜在精神が、校風の余韻として浸透していたものと思われる。訓練を尊ぶという精神は、現実の中に論理的なもの。正しいものが必ずひそんでいることを信頼している表れである。

それから数10年経った今日、近ごろ私はふと、わが桃陰の気風というものが、どこかでござ然たる音響を立てながら崩壊し始めているのではあるまいかという気がしてならない。私はこれが杞憂であることを願ってはいるが、そうも思えない。あえてこの点も一言したい。今の若者たちが、年寄りのいうことはもう古いという考えを持ち始めたら、果たして自分のいうことが新しいのかどうかを考えてもらいたいということである。ついでに古いとは何か、新しいとは何か、ということもとっくりと考えてほしい。私は桃陰50年の

間に、終始一貫してラグビーを精神的なる面よりこれを見、これを精神上の糧として把握することによって、桃陰ラガー諸君の人格形成の礎としてももらいたいと念じて来たつもりである。私はラグビーについての考え方は、すべて近ごろの考え方のように自分の外にこれを求め、自分を疎外して解決して行くという立場はとらないのである。たとへば、被圧迫階級の困窮によって革命が起こるという風に説くのがマルクス式の考えであるとするならば、私はラグビーマンとしては、困窮はその不平不満を外部的に対して反発爆発するものではなく、困窮は己にかえって己を深めるものでなければならぬと考えたいのである。すなわち私は自己を深めることなくして自分はおろか、世を革新するなどいうことは出来ないと考える。先年、天高のラグビー選手中から、先輩の指導によるよりも、もっと自由な練習をとという声が出たことがある。これがどう解決されたのかその後のことは私は知らない。けれども、これなどは時勢といえれば時勢といえるかもしれぬが、私の考え方から申せば全く逆であることを残念に思った。総じてスポーツマンは、その肉体を根拠としてその技の中に精神を発動しようとするものであるから、ともすれば精神の鍛練が後になるのみならず、時には全く忘却されてしまっている。これ、すなわちスポーツマンに哲学者や宗教家はなく、往々にして市井無頼の徒になお劣る手合いを生み出している所以である。

私は一昨年英国においてラグビースクール

を訪れた時に1823年にあの校庭においてボールを持って走ることによって今日のラグビーの起源を作ったといわれているウィリアム・ウェッブ・エリスという少年は、その後オックスフォード大学で神学を学び、その一生をキリスト教の牧師として、熱烈なる伝道に従事しながら、ラグビーの指導に尽くした人であって、南フランスにおいてその生涯を終わるまで、彼は牧師でありラグビーマンであったということを聞き知って、私は非常なる感激を覚えた。洋の東西を問わず、帰するところはみな一つで、ラグビーはあくまでも、技を鍛えることによって、自己の内なるものを鍛練し、自己の内なるものの練成から、これを技に発揮するものである。そういうことを自在になし得るラグーをつくりたい。これが私の50年の念願である。このような人間がラグビー界にわんさと輩出されたならば、日本の国も良くなって行くに違いない。ラグビーの達人は人生の達人たらしめたい。

莊子の外編達生編の中において、莊子は人間が自己の生を全うし、人生の達人となるにはどのようにすればよいかということを説いている。すなわち心技の鍛練によって、勝敗にとらわれぬ者こそ無敵の強者であり、無心こそ最大の武器であることを説いた話が出ている、

曰く「紀渚子、王の為に闘雞を養ふ。十日にして而して問ふ、雞^こ己^こきか。曰く、末だし。方に虚僞にして而して氣を恃むと。十日にして又問ふ。曰く、末だし。猶ほ嚮景に応

ずと。十日にして又問ふ。曰く末だし。猶ほ疾視して而して氣を盛んにす。十日にして又問ふ。曰く^{ちか}幾^こし。雞。鳴くものありと雖も、己に變ずることなし。之を望むに木雞に似たり。其の徳全し。異雞敢て応ずるもの無く、反って走る」と。紀渚子と云う喧嘩雞を養成する名人が、周の宣王に命ぜられて闘雞の訓練を始めるのである。10日程して王が問うた。「どうだやれるか」「駄目です。空威張りばかりしてむやみにさぼっていますから駄目です」10日程して又王が問うた。「ダメです。まだまだ相手にとらわれています」また王が問うた。「まだ駄目です。すぐ目をつり上げて、この野郎というところがあってかさにかかるところがあるから今しばらく」という。「もういいか」としばらくして王が問うた。紀渚子は云う「ぼつぼつよろしい。相手が挑戦して来ても平常と少しも変わりません」と。そこで王はその雞をながめると、それはあたかも木彫りの雞のようで、何の動きもない。そこで試しに他の雞に闘いをいどませてみると、その相手の雞はかっとかかっ行って行ったが、木雞先生の前でピタリと止まり、じろじろながめていたが、にわか反りて走るといのは背中を向けて一目散に逃げってしまったというのである。

から威張りをして気負ったり、自分の実力内容よりも敵を意識して気にしたり、相手をなめてかかったり、こんな人間がいかに多いことか、これはラグーのグラウンドにおける気構えばかりを説いたものではない。人間は

何時いかなる境遇にあらうとも、自然に超脱したる境地に達するように工天しなければならぬ。往年の名力士双葉山がかってどこかでこの「木雞」の話を聞いた。彼は非常に感動して終始木雞の工夫に専念したということである。彼は当時肉体的には既に片方の目が見えなかったらしいが、それにも打ち克^かつて、ついに69連勝を達成したのは、この木雞の修行から得たものであるといわれている。このような修行は単に土俵の上のみで得られるものではなく、彼はその私生活の上にもこれを修練したのである。

桃陰50年をかえり見て、私などは母校のためにも、また自分の人生においても、別にこれといったことは何もして来なかった。今日70歳の声を聞いて、69年を非なりと考えている。ただ私は若いころにラグビーで悟り得た考え方を基盤として、これからの残年を「息をととのえて」初めからやり直してやろうという気概だけは消えないことは、ありがたいと思っている。

何事も自らを深めることに役立てたい。ラグビーも、学問も、自らを深めることなくして、真に人を愛し国を愛し、社会を思うことは出来ない。繰り返しこれを述べて拙稿を終わる。

創立当時の思い出

松川 秀 男(25回生)

今を去る50有余年前、天中ラグビー部の創立当時を想起し、ここに拙筆をとった次第である。

いつであったか、戦前昭和の初めに発行されたラグビー部の小誌に書いた記憶があるが、戦災のために焼かれ、残念ながら残っておらないと思い、ここに再び筆をとったのであるが、すでに50余年を経過し70にならんとする私には記憶の薄らいだ点も多々あるのでこの点をご勘弁を願いたい。

私たちが天中を卒業する前年、たしか大正11年のことかと思うが、関西いな全国に文武両道にその黄金時代を誇っていたわが天中も旧制高校の受験のため運動部は年々一まつの寂しさを感じざるを得なかった。わずかに陸上部に日本短距離界の名スプリンター忠田を擁し、関東の高木(暁星中)と共に陸上界に気を吐いたにすぎなかった。この現状を不がいなしとする三好、阿部と私の3人が5年生の幾何や代数の授業の最中、先生の目を盗んでは三好の説明でラグビーの手ほどきを受けた。三好の令兄は当時三高一京大で巖さんと共に日本一のスクラムハーフとうたわれていた。

三好は我々の質問に不明の点を令兄に聞いて説明してくれた。これでやっとラグビーの概念をつかむことが出来た。

ここで3人は何とかラグビー部をつくって天中の名を天下にとどかすべく腐心したのであった。旧制高専の入試準備に全精力を傾注している学友をよそに、ただ1個の和製のボールを追いつつ同志相集まって、ようやくメンバーの編成に努力したのであった。

いよいよ2月の末かと思うが当時創立された大阪外語を迎え、先陣の血祭りにあげんと下記の陣容で戦ったが、惜しくも引き分けに終わったのであった。

井藤	平松	中阿	杉木	三松	西小	前宇	足
上	溪	井	沢	田	部	村	村
				好	川	村	野
				川	治	立	
				FW		HB	TB
							FB

続いて卒業式の前日、旧制大阪高校に挑戦したが、当時の大高は後年京大の黄金時代に活躍した村山を始め木崎、柏本らがおり15対0で敗れたのであった。しかしこれが関西にラグビー天中の独歩の地位を誇る基となったのである。

翌日、我々3人は卒業したが、見事進学に失敗し浪人生活に入った。阿部は大阪を去り三好と私は大阪で受験準備をしていたが、そろそろシーズンが近づいたが新しいメンバーの編成も出来ず、これでは我々3人の努力も途中で消え去るのでないかと、受験のことより気にかかり、私は冬の休みに入る前に何とか陣容を整備せねばと毎日学校へ出かけ西村、足立の諸君と語らい、新陣容を組織すると共に毎日放課後、私のとぼしい知識で練習を強化したのであった。

今でも忘れられず、まざまざと目に浮かぶ

のは大正12年の暮れ近く、三好が私の家へ飛んで来て、今日の東京の新聞に慶応普通部のラグビーチームが西下しその第一戦に天中と対戦すると発表したと知らせてくれた。当時は関西の同志社普通部、京一商と共に関東いな全国のラグビーの名門校である慶応普通部が関西遠征の第1戦にわが天中を選んだと聞いて我々3人の計画が、こんなに早く花が咲くとは夢にも思われなかった2人は相抱いて喜んだのであった。

それまでに我々は大先輩である稗田、井上(二)(慶応出)、奥村(同志社出)の諸氏を訪ね種々精神的な指導を賜り、巖さんもかけつけられ心技両面の指導をたまわったのである。

これら諸先輩の指導は後年名門天中に脈々と受けつがれたラグビー精神である。すなわちラグビーは勝つことが目的でない、第一はラグビー精神の体得であり、第二は強^{じん}靱な体力の養生、第三は勝敗であると教えられた。我々が教室で教えられるより、グラウンドで肉弾相うつ試合の最中に自然と覚えるフェアプレーの精神こそが後年の人生にどれほど役立つかはかり知れない。

さて日は忘れたが12月の暮れ近く、いよいよ問題の慶応普通部を旧大高グラウンドに迎えた。戦いはいうまでもなく29対0と敗れはしたが、西村の70ヤードの独走、足立、田中の果敢なタックルに満場をわかせ、天中ラグビーここにありと、その名声は全国を風靡^びしたのであった。

塚藤平本糸河田矢富宮西長宇横足
田井井坂岡原中島田城村沖治田立
FW HB TB FB

その翌年か、平井君が主将のとき全国大会にコマを進め優勝戦に同志社に惜しくも敗れた記憶がある。ここに名実共にラグビー天中の名声は全国に鳴り響いた。その後、巖さん阿部らのよき先輩の指導により神宮にコマを進め全国制覇の実を挙げたのであった。後年、幾多の名選手を世に送り出し日本ラグビー界に気品あるチームとして名門天中の名をほしいままにしたのである。

桃陰のグラウンドで初めて球を蹴った友のほとんどは大東亜戦争に華々しく戦場の華と散り、あるいは若くして他界したが、この輝かしい天中ラグビーの活躍をどれだけ地下で喜んでいる事だろう。阿部も私も齢すでに70に達し余生いくばくもなきとき、最近の私立校の台頭により、いたずらに阿蒙と化しつつある母校を思うとき、再び栄光ある天中魂を振り起こし名門天高ラグビーの真価を天下に響かせて欲しい。

当時ラグビーの右も左もわからない、おぼつかない私の知識をたよりに練習に努力された当時の若い人々のひたむきなラグビー愛と、諸先輩に教えられたフェアプレーの精神を発揮し、その気品とたくましい精神をもって天中ラグビーの基礎を創られた諸君に心から敬意を表すと共に、創立当時を想起しては淡い誇りを感じるものである。

戦後の夢と希望つなぐ

谷口敏夫(26回生)

次頁の写真をご覧下さい。関西ラグビー対三高（旧制第三高等学校）とのラグビー試合の前に記念にうつした一見平凡な写真ですが、これは昭和20年9月23日に京大北白川のグラウンドでうつしたものです。終戦の日、すなわち昭和20年8月15日、みな人生の夢も希望も失って、ただぼんやりしていた時です。それから何日か経過したある日、西野綱三先輩の発言で小生の夙川の家に井上二郎氏、奥村竹之助（三高、京大）巖栄一氏、杉本彰氏、川本時雄氏（三高、京大）矢島引一氏（大高、京大）らが集まって、好きなラグビーの話で灰色の気分をふっ飛ばして快気炎をあげました。その時だれかが三高のラグビーが練習を始めているそうだと、クツのないやつはワラジをはいてボールをけているそうだと——その時、西野先輩が「よし三高と試合をやろうじゃないか、谷口、お前関西ラグビーのメンバーを集めろ」といいだし、それが実現したのが写真の試合です。この写真の中に天中出身者が9人もおります。

主審杉本、線審松下、関西ラグビー斧原、正野、谷口、村田、北條、中西、三高中村。この試合のあと写真の真ん中におられる山本修二先生（三高ラグビー部長）が西野先輩の手をにぎって、日本のスポーツ再建のためにがんばって下さいという感激のシーンがあり



京大北白川グラウンドで戦後初のラグビー試合が行われた

ました事をつけ加えます。

天高ラグビー部50年。早いものですネ小生の卒業の時にはまだ天中にはラグビー部がなかったのです。同好の者が集まって昼休み、また放課後グラウンドで楕円のボールをけっていたようです。ボクもボールを皆と取り合いしてけて楽しんだ事をよく覚えております。その後、平井君、山村君、松本君らがラグビー部をデッチ上げた様に記憶します。

もちろん先輩の井上さん、石田さん、西野さん、三好さん、阿部さん、寺戸さんらが卒業して高校、大学の選手として活躍され天中ラグビー部の創立にご尽力された事と思います。

(昭和20年9月24日 朝日新聞)

関西俱勝つ 対三高ラグビー

戦争終結後全国初のラグビー試合——三高対関西ラグビー俱の試合は一千余の観衆を集めて23日午後3時20分から京大グラウンドで審判杉本(主) 松下、菅(線)の3君、関西俱の先蹴で挙行結局24—6で関西俱勝つ

関西俱 24 $\left(\begin{smallmatrix} 9 & 0 \\ 15 & 6 \end{smallmatrix}\right)$ 三高

阿部(早大)	栗山(同大)	斧原(関大)	正野(東大)	伊藤(京大)	谷口(京大)	村田(日大)	北条(関学)	堀場(同大)	野上(早大)	坂口(早大)	林(早大)	中西(慶大)	内藤(同大)	田尾(京大)
FW				HB				TB			FB			
清水(京一中)	下村(膳所中)	山下(京三中)	笹井(京三中)	梅村(京三中)	高原(北野中)	浜田(北野中)	岡田(京一中)	亀谷(京一中)	田村(京一中)	中村(天王寺)	小泉(京一中)	森本(尼崎中)	岩沢(灘中)	緒方(神二中)

概評—戦時中といえどもよく練習をつづけて体力の保持につとめていた三高、これに対するに復員したばかりの往年の名選手などを加へた関西ラ俱、懸念されたこともなく最初からスピーディなゲームを展開したが、三高は老巧な関西俱を前にしては施すすべもなく潰えた。関西俱は自己の弱味たるFW戦をさけてよく球をバックに回して勝因をつかんだ。もし三高にしてFWが相互にバックを固めて乱れ気味の関西FWの中央を破って出れば面白い試合が見られたことと思ふ。

(西野綱三)

戦後の荒廃に灯

杉本 彰(28回生)

大分記憶も薄れていますが、思い出すままにあれやこれや書きつづてみます。

昔風にいえば人生50年、長い様であり、短い様でもある。自分もどうやら50年間、1年も欠かさずに楯円球を追っかけて過ごしてきました。

あの終戦直後の昭和20年にも世の中が荒廃し、敗戦でガックリしている日本を立て直すのは「ラグビーから」だと朝日新聞の西野氏(23期)の発案で、9月21日(あるいは23日)の秋分の日に同好者が寄り集まって三高(旧制)相手に京大のグラウンドで試合を行った。そのチームの中に我々桃陰ラグーのメンバーが8人—谷口、北條、正野、斧原、村田、中西、松下と小生と半数を数えた。少々大げさかもしれないけれど、事がラグビーの話になると必ず天中にぶつかるといわれるほど我々桃陰ラグーが存在する。

戦後最初のスポーツ試合として、翌日の朝日新聞には両チームの写真が堂々と掲載されて、世間をアッといわせたものだった。試合後、何もない時にかかわらず正野君等が苦心して集めた多分戦時中の軍需物資であろう「ゆであづき」のかん詰めなど当時の貴重品でミーティングもやった。ミーティングといえどこんな事を思い出した。多分4年生の時だと思う。同志社中学との試合後、同校の寄

宿舍でもあったのだろう畳敷の広間での出来事。

お定まりのあいさつ、自己紹介の後、さあ余興という段になって、同中の一選手が立ち上がり活弁芝居の声色、次から次へと出るわ出るわ、こっちは全然ダメ。恐れ入って引き下がった次第だが、この選手はだれであったろう——現在映画界の第一人者マキノ君であったらしい。

さて僕がラグビーを始めたというか、知ったというか、関係を持ったのは確か大正11年の夏であったと思う。上級生の宇治氏に誘われて多分信太山辺りであったろうか?そこには三好、阿部、松川氏らがいた様に思う。そこで初めて楯円球に接したのだが、そこで何を見、何をしたかは覚えていない。

3年生の時にチームらしいものが出来上がり、それまでは大阪高商、関大、大高、大外語など専門学校相手にばかり試合をしていたが、正月にちょうど西下中の慶応普通部と一戦を交じえる事になって、大正13年1月、北畠の大高のグラウンドで稗田幸三郎氏(17回慶応OB)のレフェリーでキック・オフ。相手には山口(享)、鈴木、岸田らの大学級の選手を含んだメンバー。結局21—0で敗れたが、試合中数々のエピソードが生まれた。谷上エル氏(山村27回)が試合に備えてヘッドキャップを買ってきたが、これが何とアメリカンフットボール用。ゲーム中ボールと間違えられて小わきに抱えられたとか、けとばされたとか、あるいは西村ニシヤン氏(26回)

が相手のTBのピカー山口選手と一騎打ちをやっているうちにボールがとくに回されトライされたり、横田氏（26回）が習いたてのフェアキャッチで当時としては奇想天外のドロップキックでタッチに蹴り出したり、足立（三島、27回）FBがいつの間にやらスクラムを押していたり……。この三島君ではこんな話を思い出した。確か昭和12、3年ごろのOB戦での出来事。

タックルされながらボールをパス、起き上がってフォローしようとしたところ、つかまれ足をどうしても放してくれない。「コラッ放せ」とよく見ると三島君だ。彼いわく「タックルしたぞ」と。訳は一度TBをタックルしたいと思っていたところ（彼はセカンド・ロー）やっとタックルしたらお前だったので、後で知らんといわれると困るので確認したという。これには二の句がつけなかった。

我々の練習中、最初に来られた先輩は確か奥村正也氏（16回、同大）で、やあラグビーはじめたかといってグラウンドに来られたと記憶する。奥村先輩にも何かと教えられところも多かったが、何といても精神論、技術論と、あらゆる面から教えを受けたのは巖栄一（22回）氏である。

グラウンドに来られる時は必ず和服姿にキチンと袴を着けて来られた。ボックスのパスの練習の時など見ていられなくなって、袴のすそをからげてゲタばきのまま走って手本を示された。また話好きというか、話上手というか、微に入り細にわたり、手を取る様に具

体的に教えを受けた。ある時は学校を出て阿倍野橋を経て新世界で支那料理をごちそうになり、更に堺筋を北へ千日前辺りまで延々とおだてたり、すかしたり、そのラグビー論は尽きるところを知らない。この事は私の中にいろんな面で深く根を下して、私のラグビー論の中心になっている事には間違いない。

我々の時の最初のキャプテンは田中伊三君通称オチャン、いわゆる オヤジ 第一世である。彼は4年で中退。社会に出て今や非鉄金属の間屋田中商店の社長として堂々たるもの。次は平井(宏)チン。彼は東海地方ラグビーの草分け三重高農のラグビー部の創設者として有名である。次は富田(孝夫)ボンコである。当時のラグビー部には記憶すべき2人の選手がいた。このスクラムハーフの富田君ともう1人スクラムセンターの藤井(三郎)オンテイである。前者は天才的な選手で、当時名ハーフとうたわれた慶応の萩原選手をほうふつさせる様なスクラムサイドの攻撃ぶりでもし続けていたら必ず有名なスクラムハーフになったであろうが、残念ながら彼の進学した七高にはラグビー部がなかったので大成を見るに至らなかったのは残念である。後者は努力型である。ラグビーをはじめた時には全然キックが出来なかった。独りで黙々練習して大成した。神戸高等商船に入学してラグビー部を作り、自らチームリーダーとして、またキッカーにまでなった。2人とも既に世を去っているが、特にオンテイはその後、海軍航空隊に入り、開戦直前山本五十六麾下でハワイ

真珠湾攻撃のための訓練中、南方洋上にて墜死、その葬儀には山本五十六隊長自ら参列して弔詞を読んだ程で、これもまた惜しい男であった。

我々天中がラグビーをはじめたのに刺激されてか北野中学にもラグビーが生まれた。第1回定期戦が大正13年1月19日、北中校庭で真島氏(慶応OB)のレフェリーで行われ、14-3で勝った。北中のグラウンドは我々天中のコンクリートまがいのグラウンドと大違いで、とても軟らかくて良いグラウンドだったと記憶している。第2回戦は天中で大正14年1月25日奥村正也氏のレフェリーで挙行。その時覚えたこのドロップゴールを試みて見事成功した事は忘れられない思い出である。

全国大会初出場は大正14年の正月で会場は現在の甲子園の野球場で、サッカーと一緒にだった。準決勝で優勝候補同志の同志社中と京一商が当たり、我々は京三中に勝ち幸運にも最初から優勝戦に出場出来た。

翌年の大会は満洲の南満工業と準決勝で当たりキック力の差で17-0で敗れた。この試合で中央付近のスクラムからパスを右へ回して左へのクロスキックWTBの松山とのサインプレーでトライかと思われたが、間一髪オフサイドをとられたのはいまだに残念に思われる。なおこの大会に3年生で斉藤権三がバックローで初出場、あがりっぱなしで最後までスクラムを押す時に立てたヒザのふるえが止まらなかったと言う話。

終わりに私事ではなはだ恐縮だが、忘れ得

ぬ一コマである。卒業して慶応へ入学した最初の正月の合宿中「オイ電報だ」と上級生から渡された。今ごろ電報とはといぶかりながら開いて見てアッと驚いた。いわく「ケイフニカツ、シンロウヲシヤス」とご存じの通り慶応は大学も普通部も一体のところであり、彼らも普通部の勝敗いかん?と心配していたところだ。この電報一本で信用がなくなり、すっかり見る目が変わってしまった。スパイ扱いである。

後日この話をしたら、他人の電報を開けるヤツが悪いと一。確かにその通りではあるが……。しかし、もう少し心してほしかったものである。最初にした様にラグビー界には桃陰ラガーが多いが、と同時にその反対派も必ずいる事にも気をくばってほしい。

まだまだ書く事が多い様な気がするが……。この50年を契機に全国制覇のために現役諸君の奮起を切望してやまない。



タックルそしてタックル

足立卓夫(28回生)

私はラグビーをやっていた事を最高にうれしく思っています。今でも心の中ではいつもラグビーを大変楽しんでいます。テレビのお陰でいろいろなスポーツを見るにつけますますその感を深くし、他の競技のスポーツマンにも一度はラグビーをやってほしいと思っています。そうすれば彼らも強くなる一方、逆に彼等の特技をラグビーに吸収し易いでしょうし、吸収したい事も多々あるように思います。

私はラグビーは難しい事をいわなければだれでもやれる楽しいスポーツだと思っています。旧制大阪高校時代、体操の老先生が「今日は寒いケン、ラグビーをやろう」と体操時間にはしばしばラグビーをやらせていました。お陰で大高生はほとんどラグビーの味を知っています。また法(無理のない正しいやり方)をもってすればケガもしないで無理なく選手生活もやれると思います。ラグビーは「タックルに始まりタックルに終わる」という言葉がありますが、少なくとも天高のグラウンドに10台位タックルマシンを並べて、全校生徒が在学中一度はタックルをやった事があるといえるようになってほしいものと夢見たりします。

さて私がラグビーというものを知ったのは天中ラグビー部創設時代ですから約50年前と

いう事になります。当時は確か阿部さんや松川さんがやっておられ、兄貴(三島実)も参加しており、ラグビー部の方々には大変親しみを感じていました。巖栄一大先輩が当時夕方になるとさっそうと天中へコーチに来られるのに出会い、よく毎日のように来られるものだと思心もし、不思議に思った事も記憶に新たなところ。近所におられた平井宏さんが兄貴と中身は分かりませんが、ラグビー談話を熱心にやっておられるのを聞き、その熱中ぶりに感心した事も思い出されます。

しかし私自身は当時チビでヒョロヒョロであつたためでもありましたが、テニスや野球は好んでやりましたが、身体と身体をぶっつけ合う、しかも足元へ飛び込んだりするラグビーはとても出来ないものと信じ込んでおりました。ところが大阪高等学校へ入学しますと、木崎国嘉君(北野中出身、テレビドクター)が「足立、ラグビーをやろう」「球を蹴^けって遊ぶだけだ」と「ラグビーは出来ない」という私を巧くだましてグラウンドに誘い出しました。部生活などする気はありませんでしたが、グラウンドに出ると楽しい連中がたくさんおりました。兄貴もおります。天中の仲間もいます。他校の人たちもみな愉快的な人々でした。

練習はキック、ドリブルなど単独練習の範囲は一緒にやりましたが、合同練習になるといつも見物して待っていました。練習よりも練習後、皆と寮その他で共に遊ぶのがたまたまなく楽しく、またラグビー精神なるものが何

か分かりませんでした。あこがれをもち、毎日のこのグラウンドにでかけました。いつの間にか2学年末になって天中同期の山田孝雄君から「お前もわしも来年はレギュラーだぞ」といわれ、付属物のつもりがそんなものにと驚きあわてた事もついこの間のように思われます。以上のような次第でいつの間にか選手生活に入り、卒業後、来日のカナダ戦やOB戦、レフェリー等もやり、また40歳にもなると不惑クラブの創立メンバーまでやったりするようになりました。とてもラグビー等出来そうもなかった私でも、これだけやれたのは良い先輩や仲間のお陰とっておりますが、やりようでラグビーはだれでもやれるものと思っています。現に私の親しい友人にも小さい仲間で威張っているのがたくさんおります。

私のようなものでもラグビーをやれた過程は前のように大した無理はしませんでした。が、次の3つの事が大変役立ったと思いますのでついでに書かせて頂きます。

(1)ドリブルを熱心にやった事。

それは前記のように大高で1人だけ合同練習を外から見物していたある日、山田孝雄君から昨夜読んだ「ウェークフィールド」の原書に「グラウンドの端から端まで1フィートもボールを足元から離さずにドリブルができたら一流のプレーヤーだ」と書いてあったと教えられました。それならタックルも何も出来ない私でもできるかも知れないと思って懸命にやるようになりました。だからドリブルは

私の武器だと思うようになりました。キックでも、ラインアウトでも、スクラムでも、もちろんタックルが最短距離と思われませんが、何でも良い一つ得意技を作るとやり易くなります。

(2)タックルをやるようになった事。

京都大学に入って関東勢とやるようになり、軽量FWの私は最もエネルギーを使わずに強引な相手を止める工夫として考えたのが足元に飛び込む事でした。軽量FWの私でも足元に思いきり飛び込めば $1/2MV^2$ の運動エネルギーで倒せるだろうと考え、合同練習後1人でタックルマシンに何回か分かりませんが、最初は簡単な飛び込みから段々各種ケースを考えて、それぞれ私なりに一応納得ゆくまでけいこしました。それから毎日のようにランニング、タックルをやらないと気がすまなくなりました。タックルをやるようになってからは試合ではタックルだけ考え、相手を求めて走り回るようになり試合そのものも怖くなくなりました。ケガなどもしないものと思うようになりました。最近気になる事はケガ人が多い事です。ケガはプレーに無理があると起こり易い、例えばグラウンドで急にタックルをやれといわれても、やり方も知らずに無理に突っ込むとケガする可能性が多い。タックルの必要性が分かれば、ふだんから十分タックルマシンでけいこして自信をつけてからやってもらいたいと思います。無理のない正しいプレーを力強くやる事が必要と思われます。

(3)ランニングの練習をした事.

大学2年の春、シーズンオフの時、陸上部にいた仲間に教えられてスパイクを借りてスタートダッシュを練習した事です。私の天中時代当時日本のNo.2といわれた忠田喜一選手が1人で黙々と練習しておられたのをよく見ていたので、スタートダッシュの際も忠田さんを思いだしてクイックピッチ走法や、足をあげたり、いろいろ工夫をして走りますと、意外にも今まで歯のたたない相手と思われた人にも追いつけるようになり、これならTBでも追えるぞと大いに自信をつけるようになりました。陸上部の人が「正規に練習すればだれでも11秒台にはなり得る」というのを聞いた事があります。

以上の3つが学生時代の大収穫で、不思議に私はだれにもタックルしろとか、何とか強制された覚えはないが(多分だれも相手にしていなかったのかもしれない)、それぞれ偶然の練習が大変役立ちましたので、私と同じような弱々しいスタート過程の人も多いと思います、ご参考までに記します。

私と天中ラグビー部とのかかわり合いで一つうれしい思い出があります。それは天中が初めて国体で優勝した時の事(確か柴垣君がキャプテンで新村君らがいた)です。夏の地方予選で天中が炎天下確か30数校勝ち抜いて優勝し、東京神宮競技場での国体大会に出場するという記録報告を受けて、むちゃな勝ち抜き戦によくぞ勝ち抜きが出来たものだと思っていました。

明日から大会が始まろうという日「優勝候補は京城師範で、明日天中が当たり、歯が立たない」という話を聞かされ、私も若かったのでそんなバカなことあるものか、あれだけの勝ち抜き戦歴のあるチームは相当鍛えられているだろうし、タックルもやるだろうしがんばりようで必ず勝てると、私は急いで自分の経験も含めて一生懸命激励の手紙を書き宿舎の阿部監督宛に速達で出しました。

当時の速達は即日確実に届いていました。それはタックルに対する心構えが中心でした。私の念力が届いたか試合は一戦一戦見事に勝ち抜いて優勝となりました。どうした事か残念ながら私は一戦も遂に見ませんでした。あるいは怖かったのかもかもしれません。優勝ときいて宿舎に飛んで行きましたが、見れば田中校長先生を始め、父母付き添いもおられ、坊やのような多勢の天中健児達で、この顔々を見たのではあんな強いことはいえなかったろうと、戦歴を見ただけで書いた手紙もあだにならず、ケガもなく、一同無事でよかったと冷や汗をかいたものです。聞けば阿部監督が私の手紙を繰り返し読んで下さったそうで、少しは元気づけに役立ったかと大変うれしく楽しい思い出にしています。最後に一言、豊かな心をもったスケールの大きい気分のラグビーチームである事を祈ります。

昭和初期の回想と人物断想

奥田 致一(31回生)

桃陰ラグビーの50年にわたる火が絶ゆる事なく燃え続けたという事は一体どういう事なのであろうか、厳、阿部両先輩の50余年の情熱には、ただただ頭が下がる次第である。それに続く多くの人達の顔が浮かんで来る。各個人の情熱の強さに消長があったとしても、だけれかがその火に情熱のマキを投入したからこそ、今日の桃陰ラグビーがあるといえる。その昔、若き日、ラグビーなるものに青春の情熱を投入したものは一体なんなのだろうか。

楕円のボールのままならぬ事に、持って走れる事に、その持って走る人間に肉弾をぶつけて阻止し得る事に、その男らしさに心をひかれたのか、これらの要素が作用した事は確かであるが、それだけであつたろうか、15の個が集まって、一つのボールを目的地に運ぶために、一途に、ひたむきに、己の全力を尽くし、己を殺し邁進する魅力にとりつかれたからか、団体球技はみなそうであるとはいえ15という多数は他にはない。ここに日ごろの精神的、肉体的修練の非常なむづかしさがあり、これを克服する所に他に勝る価値があり、法悦(大げさ?)ともいふべきものが存在するからと思うのである。

ラグビーの華というべきタックル一つにしても、タックルマシンではそれだけに終わってしまう。やはり人間を相手にした練習が必

要である。真剣勝負であり、心のゆるみは許されない。真剣味のあるところケガ負傷は案外少ないものである。このような厳しい練習を求めるスポーツが他にあるのか。ラグビーの発生はイートンの中学生が思わずボールを持って走った事から起こったと聞く。これは人間の本性(本能)の表われで蹴るという本性が加わったのである。この勝手気ままの本性発揮にはホワード、リメーン、オフサイドというブレーキ、ペナルティーが科せられている。すなわち理性で自らを律しているといふべきである。また交代を許さない事は古い言葉の一連托生、相互連体感の強調を強く覚えるものである。他にこんなスポーツはない。オール日本がカナダに遠征、対戦中に負傷で1人が退場した時、相手のカナダ側で知らぬ間に1人減らしていたと聞いた時、身体がじんとした事を覚えている。こうした事をなしうる相手に限りなき豊かさ、崇高な人間性を感じたのは自分だけであつたろうか。

こうしたラグビーを選び得た事に限りなき満足と優越感を覚えたものである。レフェリーに対しても絶対服従という事も理性の極地ではなかろうか。長々とラグビーにラグビーを説く愚を犯したようである。結局は「おもしろい」からという事になるのではないかと思う。

桃陰ラグー45周年の記念祭が行われ、50年史編纂^{さん}の声を耳にした時、創部者の1人阿部先輩はじめ、大正の末から昭和の初期のころ

の方々が存命されている現時点において、この事をしないと、このころの事は神話になってしまう恐れがあると、危惧^ゐの念を抱いていただけに、うれしく両手を上げて賛成、是非なにがなんでも完成してもらいたいと思った次第である。

そしてそのころの漠然^{はく}と、もやもやと脳裏に残っていたものが、割りに鮮明な人間像として、また情景として次々と出て来るのは自分ながら不思議に思うほどである。しかし、こうした昔の事を割りにハッキリ覚えている現象は動脈硬化の一徴候でもあるそうである。従って案外思い違いが多いし、自分だけの独りよがりがあるかもしれない。それに順序よく出て来るわけでもないし、飛び飛びになって一貫性のあるものにまとめあげる文才もない。まずご寛容をこいたい。また先輩の事を書く僭越も併せてお許し願いたい。

思い出は大正の終わりごろか、昭和の始めのころか、校舎が焼失してから後のグラウンド風景である。長身にして鼻梁一きわ高き白^{せき}皙^{せき}の人。ハーフを前に置いて足先でボールをヒールアウトし、時々バックにフォローしてウイングの外側に、また内側に入って駆け抜け、ゴールライン内へ入るや片手で軽くボールをグラウンドにタッチされた。そのスマートな姿が出て来る。ブルーのジャージに白いパンツ、またトックリ（今でいうタートルネック）のラクダのジャケットにグレイのフラノのズボンの時もあった。背広の時は両手をズボンのポケットに入れて、ソフト帽、とにか

く絵になる姿は我々部に入っていないラグビーファン観戦部隊を魅了し、憧^{どうけい}憬^{けい}せしめた。この人が巖氏である事を知ったのはしばらくしてからである。この巖氏とよく一緒に来て練習相手をしておられた人が三好氏（22回）である。確か三高、京大もご一緒である。この巖氏をして日本一のハーフとバックといわしめたのは山田信雄氏（30回）のハーフ斎藤権三（31回）のスタンドオフ、神阪健夫（31回）のウイング、岡本徳三氏（30回）と小野木唯雄氏（30回）のセンタースリー荒賀嘉樹（31回）のウイングである。ことに岡本、小野木両氏の超ロングパスは大学級以上と絶賛されたと我々観戦部隊の耳にも入って来て喜んだものである。この第1期黄金時代というべきこの日本一のバックを擁しながら、全国制覇をなし得なかった。優勝また難しきかなである。

天なるか、命なるか山田、岡本、小野木3先輩は既に故人であり、同期の先輩がお書きになると思うが、当時部外者であった自分は非常に強い印象を受けたので少し書かして頂く。山田信雄氏（キャプテン）とりわけ両もを高く上げた走り方が目立った。片手でハンドオフして必ず2人や3人をさばかれた疾走振りが出て来る。学校もよく出来た事は三高一京大と進まれた事でも分かる。当時ラグーという英国の原書を手にされて、セオリーを説明されているのをよく見受け、偉い人だなと思った。少し横道に入るかもしれないが、この人の兄さんの孝雄氏（28回）は大阪

高等学校時代に全国高専大会に優勝、京都大学時代に全国制覇を遂げられている。当時この大高のラインアウトは一番前に三角こと（失礼ご容赦）木崎氏（北中出）がおられた。前々回参議員全国区に立候補された方である。前述の山田孝雄氏は2番目か3番目だったと思う。真ん中ごろに一段と背の高い人が足立実氏（後三島26回）で一番後ろのバックロー足立卓夫氏（28回）と兄弟である。このお2人は後年オール日本に選ばれカナダへ遠征された。この外にもう1人天中出の人がおられたように思うがはっきりしない。

スクラムハーフは岩前氏（北中出）でそのずんぐりした体格が印象に残っている。フルバック寺村氏が全国高専大会の決勝対東京高師戦でドロップゴールを成功させ逆転優勝をもたらされた事は、当時華やかに喧伝けんでんされ自分らの胸をふくらませ感激したものである。このメンバーの大半が京大へ進まれ、京大の全国制覇がなされたのである。この時のスタンドオフが村山仁氏（25回）と記憶する。この先輩には後年コーチを受けた事がある。少しタイプの違ったクツをはいておられたのをよく覚えている。とにかくこの時のメンバーの約半数が天中出であったと思う。ここに絢爛けんらんたる花が咲き日本一の実を結んだ事は阿部先輩らのまかれた一粒の種からと、自分は信ずる者である。後続の多くの人達は天中においてラグビーをされた人ばかりでない。天中生であったがために在学中に自然と培われ、育てられ、いつの間にかラグビーを理解し身に

つけ、いつでもラグビーが出来る素地が出来ていたと思うのは、思い過ぎであろうか。この因子を含んだ種と入部して培われた種が全国の上の学校、社会にばらまかれ、根をおろし、花が咲き、実を結んだ事は今度の50年史に歴然とその全貌を現す事であろうと思う。

前に戻って昭和2年度（30回）の印象深き人脈をたどる事にする。

岡本徳三氏（センタースリー）バックでは一番長身でボリュームがあった。ボールを手にして疾走されるや、1人や2人のタックルではなかなかとめられなかった。同じセンタースリー小野木唯夫氏とこの両者のスピードあるロングパスは本当に見事なものであった。この昭和2年度のトライ総数の中（記録のあるものだけ）約半数の49・2%が荒賀、神阪両ウイングのトライゲット数である。翌3年度の同じこの両者のトライ数は40%である。この2人の活躍振りが躍如とうかがわれるものであるが、この約10%の差は岡本、小野木両氏の偉大さを物語るものでなかろうか。

小野木唯夫氏。この人だけは「さん」づけであったように思う。それだけ備わったものを持っておられ、言動の静かな心ひかれるフェイトマンであった。上に行かれた浪速高等学校時代を通じての華麗ともいべきスワープは超ロングパスと共に天下一品であった。ここでまた数字を出す事を許されたい。この小野木氏、荒賀（新山東）サイドのトライ数

と、岡本氏、神阪サイドのトライ数の比は7対3になる。小野木氏の名センターぶりがうかがえると思う。もちろんトライというものの本質からいって、かかる数の結論を出す事は意味のない事であるし、どうかと思うものではあるが、思い付きの一つの見方をしてみたのである。

「総力戦に奇蹟無し」とは故守山義雄氏（30回・大外語・朝日新聞ベルリン支局長）の大東亜戦争中に帰朝された時の第一声である。この時すでに日本の敗戦を予知しての大胆なる警世の言葉であった事を今にして思う者である。この第1期（30回）黄金時代にしてもこれに優るとも劣らざる31回にしても、優勝出来なかったのである。この由来するところは簡単である。総力の結集発揮に欠くる所があったといえると思う。30回の敗因はわからないしその任でない。31回の昭和4年正月の全国大会（現在の甲子園球場）の敗因の追求を自分なりにしておこうと思う。どうしたわけか、桃陰にこの時の戦績の記載がない。スコアの記録は編集のお世話をしてくださっている伊藤康夫君（45回）のご尽力で当時の毎日新聞からのものを知らして頂いた。この50年史に収録されるはずであるからここでは省く。桃陰によればその年度の緒戦を天中OBと9月2日に始めている。

引き分けに終わっているが、この対戦までに何度かの練習試合をしているはずであるが、この記載もない。少しくどいが、この昭和3年度が昭和2年度の第1期黄金時代に劣

らずと称せられたが、不敗という点から見ればむしろ勝っていたと思う。かくして昭和4年正月恒例の全国大会に臨んだのである。同級の神阪の思い出の記述によれば、同志社に対し負けムードを持っていたとある。これは積年の敗戦結果から無意識の中に全くなかったとはいいい得ないが、この日まで不敗で来た絶体的ともいえる自信を各自の胸中に秘めてコマを中原にすすめたものと自分は確信している。前年度に比肩し得るバックと自負し、神阪の記述にある如く、後半押しに押しまくったフォワードを持ってしての最大敗因は、キャプテン、スタンドオフ斉藤権三の右膝^{ひざ}の負傷である。この負傷は前々日、対京三中戦において彼がセービングした時に、相手のラッシュ^{ラッシュ}中意図的に（今でも自分はそう思っている）彼の右膝を踏んだのである。一瞬遅れて飛び込んだ自分の目の前で見せつけられて今日なおクローズアップして来るし、憤怒の情を禁じ得ないのである。ホイッスルで彼はすぐ立ち上がれなかった。この京三中戦のスコア11対0の小差を見ても、この負傷が大きな打撃を与えた事を示していると思う。

この斉藤を対同志社戦に出場さすべきか否かと随分論議された。正野虎雄（33回）を出すべしという論と、キャプテンの不出場は士気に影響を与える。彼の豊富な経験を買うべきで「立っているだけで心張棒くらいの役になる」という前キャプテン山田氏の意見が採用され、斉藤の出場が決まった。この心張棒説がいまだに忘れないで残っている。しかし

対同志社戦、キックオフ数分にしてボールが齊藤に回り、その負傷した右足でのスタンドキックである。その瞬間、彼は倒れ、それからはこの棒はかえって邪魔になってしまい、ハーフ青山（32回）からのパスはスタンドレシーブでバックのダッシュは全くつかなかった。センタースリーのタッチキックでボールを糊塗^{こと}するのがやっとであった。しばらく戦況を語らしめよ。前半の同志社のウイング吉田氏（当時の400メートル中学校記録保持者）のタッチラインに沿った疾走に白煙が上がったと見た自分はタックルをしなかった。タッチジャッジの旗はあがらないで痛恨の1トライを許した。

後同じような疾走に一念こめたタックルは、彼の両ももに炸裂^{さく}し、肩に電気が走り、彼もしばらく立てず5、6分間くらい出場出来なかった。それからは彼を追うだけでボールを離してくれた。ハーフタイムの時、スタンドオフとフルバックを交代さすべしとの話もあったが、走れない蹴れないフルバックではという事で、そのまま後半に移ったが、立ちん棒に終わった。人一倍負けずぎらいの強気一点張りの齊藤の胸中いかばかりであったろうか。バックにボールを回してもダメと見たフォワードは、自らの手でトライとスクラムリーダー山内（31回）がスクラム、ラインアウトの度ごとに両手をあげての絶叫、それに応じてのフォワードの獅子奮迅の形相は壮絶なものであった。神阪のいうごとく押しに押せども、あせりになってボールは手につか

ず、いたずらに混戦を繰り返す中にノーサイドとなった。

このころは落第（今の留年）しても不出場の制度はなかった。もしこの制度があったら、この時代に全国優勝の2回や3回は実現したと思うのは自分だけの甘い考えであろうか（ラガーらしくないぞ）ここから31期の同級生の横顔を点描して行こうと思う。

齊藤権三、少し前述したが昭和3年度のキャプテンである。前年度のスクラムハーフからスタンドオフになった。齊藤三兄弟の真ん中である。長兄才三氏（桃中出）は関学の名ゴールキーパーで、全日本にも選ばれたと記憶しているが、弟正三（35回）の活躍は知人ぞ知るで早稲田でキャプテンかバイスキャプテンをしただれかの筆の中に出て来ると思うので割愛するとして、彼が天王寺師範の付属小学校時代に中心となって日本で初めて小学校にラグビーチームが出来た事を記しておきたい。敗戦後、いつであったか日本で初めて小学校（立教？）に出来たラグビーチームとしてアサヒグラフ（？）に紹介された事があったが、少なくとも「初めて」という事は当たらないと思う。彼は残念ながら故人であるので、だれかにこの詳細を記載してもらいたいと思う。

彼の時も写真入りで新聞にのった。中兄齊藤権三は、そう背は高くなく（163センチ位）腰の強靱さはチーム随一であったと思う。当時、バックの相手はフォワード、ラインアウト、スクラムの相手はバックがした（今でも

同じかもしれない)。そんな時、彼のステップイン、ステップアウトはカットイン、カットアウトというべきでその鋭さは、1人や2人必ず抜かれて3人目で止め得たとしても、決して倒れる事がなかった。自分が一発で倒した事は最後まで全くなかった。向こう意気がすこぶる強く、それが爆発する時はちょっと手がつけられない感じであった。32回のおやじこと田中健三、33回のインデこと伊藤泰運は、このころの強気の三壁と自分は思っている。3人ともキャプテンであった事も共通している。卒業後関学へ入り、やはりスタンドオフとして活躍、関学に斉藤ありといわしめた。関学時代の事はだれかの筆にまわたい。卒業後南満州鉄道に入社、応召、戦死とその当時の青年の多くがたどった同じ道を歩んだ惜念の情、ひとしお強きを覚える人である。

荒賀嘉樹（新山東）神阪健夫この2人は昭和2年度、昭和3年度両年にわたる両ウイングである。この二人の活躍は若干既述したが、この2年間の桃陰の戦績に躍如たるものがある。荒賀は昨年の参議員全国区に当選した山東昭子の父である。彼は荒賀一家の五兄弟の真ん中で、ラグビーでは一番名をなしたと思う。卒業後、早稲田に入り宿敵同志社中学から行った柯との名コンビは、当時の東都大学ラグビーの華であった。彼は単にウイングとして一番の要素である俊足だけではなく、スワープ、タズル、クロスキック、フェイントなど大抵の事を器用にこなした。ま

たブレスキッカーでもあった。昭和3年度のブレスキックは一世の名手（自分は今でも彼に勝る人を知らない。少なくとも中学級にはない）田中健三の陰にかくれているが、昭和2年のゴールキック振り目は目を見張るものが記録されている。タックルはあまり好まなかったが、ここぞという時は俊足であっただけによく決まった。

神阪は荒賀に劣らず俊足で、足を高く上げての疾走はきれいで、クロスキックが上手であった。日大工科に進んだ。現在少し身体の不調をかこっている。好漢自愛を望むや切である。

藤野重郎、右（？）のフロントローやせ形でフォワード一番の長身で従ってラインアウトが得意である。昭和2年度は随分活躍したが少し身体を損ない、3年度は静養しながらマネジャーを務めてくれた。彼が丈夫で第一線で活躍していてくれたら、斉藤の負傷がなかったら、この50年史に最初の輝く栄光の一頁を加え得たのではないかと思う。卒業後、同期の御牧元義と共に岐阜高農に進みラグビー部を創設した。ここを出て大阪府庁を経て国際見本市協会の理事である。

御牧元義（セカンドロー）身長は前述の藤野と同じ位だが少し肥えていた。この時のフォワードの面々は一騎当千というべきで、一くせも二くせもある連中の中では温厚な人柄で、黙々として任務遂行する人であった。現在彼の消息を知らないのが誠に残念のきわみである。

井上元幸（フロントローとセカンドローを兼ねていたと思う）31回生の中で一番秀才であった。当時は50番までの1組を作り、これをいわゆる秀才組と称し、彼はいつもその組に入っていた。それに加えて硬軟兼備というべく誠にやんちゃであった。それを記述する事も一興と思うが長くなるから割愛する。堅ぶとりで背丈もあるフォワードで一番体重があったのではないと思う。陸軍士官学校の受験で、この最終学年は常時試合出場は出来なかったように思うが、昭和4年正月の全国大会には幸い出場する事が出来た。工兵大佐で敗戦を迎えた。日本の回転軸が変わらなかったら、きっとと思う人である。

山内安郎（フロントロー）前述の井上と同じ位の背丈で贅肉のない締まった体格である。確か4年の時転校して来て、半ばごろからレギュラーの地位を確保した豪傑である。秘めたるファイトを持っていると思っていたが、農中の錐である事は対同志社戦にはあの人がと思うほどその鋭い錐先を現して一驚した。中央大学へ行った。昨年45年ぶりに会い、九州は宮崎県佐土原町の町長をしているという。さぞかし突進力のある町長ぶりを発揮している事と思う。

日尾淳雄（左センタースリー）肥満形であるが足が速かったので加速度がつくとちょっと止められなかった。この事が昭和3年度の不敗の記録が対天理中戦において累卵の危機に立った時、それを救ったのである。天理の地への遠征で天中、天中（これは天理中とい

う事）という大声援で上がってしまい、圧迫につぐ圧迫、押しに押しながらボールが手につかずトライが出来なかった。そのあせりの極、ノーサイドの直前、だれかのフォローがあったのにかかわらず彼の何が何でもの猪突で、右から左へ回って左すみコーナーフラッグのそばにトライになったのである。この彼のトライによって、やっとその不敗の栄を保ち得たのである。いくつかの強烈な印象の中の一つとして自分の脳裏に今なおまざまざと残っているものである。関学へ行ったがボールを手にしなかったようである。

山本幸之助 彼もこよなくラグビーを愛した。休み時間にグラウンドでボールを取り合い、蹴り合い、試合となれば見に行った連中の1人である。5年生になって斉藤の頼みで藤野マネジャーを助けるために入部し、献身的に働いてくれた。卒業後、家業を継ぐかわらOBとしてよく顔を出した。本年早春になくなった。50年史に一筆を残してくれなかった事を残念に思うものである。

奥田致一 自分の事を書く事はいささか躊躇逡巡を覚える。が、やはり人脈、史実に関する事もあるので書いておこうと思う。かなりの頁を占める恐れもあるが、寛容をこう次第である。自分はラグビーがしたくてたまらなかったが、親父は許してくれなかった。休み時間にボールを取り合い、蹴る事と試合には必ず見に行く事で、わずかに自己満足をさせていた。昭和3年2月に父が逝き、しばらくして新キャプテン斉藤から入部の勧

誘を受け、これ幸いと母親に内証で練習を始めたものの、クツには困った。人一倍小さい足なので、だれのクツも合わなかった。母親に話す時、斉藤が同道してくれた事を覚えている。既に母親は知っていたようで、黙ってクツ代をくれた。大高のクツ屋にとんで行った。彼が自分を勧誘した理由は知らないが、彼は動物好きで、彼の家には食用鳩、伝書鳩、鶏、七面鳥、ホロホロ鳥、犬等々、血統証がついているのが多かった。自分も生きものが好きで、こんな事でラグビー以外の交友があう事と、休み時間に蹴る自分のボールがかなり飛び、左でも右でも蹴れたといった事に目をつけたのかもしれない。

入部してもボールを蹴る事に負けるのは、この斉藤と、田中健三（32回）とその他にそうはいなかったと記憶している。もっともブレースキックは全くだめであった。ここで田中健三のブレースキックの事に言及しようと思う。当時の日本一だったと思うし、彼も自他共に許していたと思う。昭和3年正月の全国大会準決勝、対慶応普通部戦において（今の甲子園球場）自陣10ヤードラインの地点から、ペナルティーゴールをねらった。味方も相手もいわずもがな、観戦者もぼう然とし、それがどよめきに変わる中に、ゆうゆうとしてボールをブレースし、しばしの静寂の中にキック、ボールは西風のやや追い風とはいえ低く途中からグンと伸びてパーすれすれで越えたか否かは不明であったが、タッチジャッジの旗の上がるのと、ホイッスルによって確

認されるや、大地を揺るがす大歓声が上がったのである。これにより敵の出足が鈍り、じりじり相手を押し、勝利を収め決勝へ進出したのである。

この超ブレースキックが桃陰の戦績に明確に出ていないのが残念であるので、この際、特に記しておきたいのである。この田中のブレースキックへの執心は尋常並々のものではない。自分はこの年度には一緒に練習していなかったが、翌年練習を共にするようになった時、始めて合点が行った。それはある日、彼は物差しを持って来た、ゴールへの距離に応じてボールの傾斜角度を変える事は知っていたが、彼の場合なお左足の位置が違うらしいのである。後ろへ下がる歩幅、歩数は同じであるが、その左足の位置の差を測って求めているのである。（この事はゴルフをするようになってボール1個分の位置を変える事の重要性を理解するようになって、やっと思い知らされたのである）ブレースキックの確実性はボールの左右仰角の角度の正確さ、蹴る方についていえば、足首の強さ、その角度、及びその保持、腰の強さ、及びその入れ方等々その要素は多くあるだろうが、彼の場合その大部分がその天性によるものであるといっても、なおこうした努力精進があったのである。今日でもそうだと思うが、スクラムの練習は動的連けい練習が終わって、たそがれが迫ってからで暗くなつてからの事もある。月がある時は月あかりでという事になる。彼はスクラムセンターでありフッカーであるから

タイトの練習が終わってからボールの1本に両手をあててボールインの足合わせである。これが終わると、なお執拗^{よう}なまでの彼のプレースキックの練習が始まるのであり「お前残れ」の声がかかりボール拾いである。上に上がったボールは分かるのであるが、地面に転がるボールは、なかなか見にくく、暗中模索で閉口した。残されないように気を遣ったのも今日となってはなつかしい。パントキックにしても左右の区別なくよく蹴った。しかも米式ロングパスの如くボールの長軸回転するキック（適当な用語を知らない）をなし得た。自分も彼から多くのキックを学んだが、プレースキックは最後までものにならなかった。

卒業後浪人するつもりでいたら平井宏氏（27回斉藤権三と従兄弟）がノコノコやって来られて（氏はそんな感じの歩き方をする人であった）三重高農へ行ってくれんかである。特に何になりたいと希望があったわけでもなし、南米へ行ったら大農場（？）を経営するといった気持ちが心の底にあったのか、農業知識を持っておく事も心が動いて承諾してしまったが、平井先輩は来年まで待てんから選科生として入学してくれという頼みである。というのは平井氏が三重にラグビー部を創設して目鼻が付きかけた時に卒業である。だからラグビーを知っている者（？）と目を付けられたものと思う。三重では2人程の先生の面接があって入学を許された。入ったらキャプテンでハーフの四方恒次氏（29回、33回の

四方康一氏の兄上）とバイスキャプテンバックローの山本善次郎氏（29回）がおられた。

両氏は天中時代にラグビーの経験はないが、若輩の自分のいう事をよく聞いて頂いた。1学期はともかく、2学期に入って農科の方の実習が遅くなると練習、ことにバックの練習が出来ず自分を待っておられる。他に理由もあったが、実習をさぼる事に決め練習に専心した。当時、高専の東海地区予選は名古屋高商、彦根高商と三重高農の3校である。この両校に勝って、創部2年目にして地区代表になる事が出来た。こうして全国大会（花園）へ出場したら第1回戦に関学に当たった。

対するスタンドオフは斉藤権三で、自分の鈍足を知っているのですきに走られ、たまに回って来たアワーボールはキックで逃げるより仕方なかった。コテンコテンの惨敗であったスコアの記憶はない。創部2年では当然の結果といえる。しかしいささか平井氏の負託にこたえ得たと思い三重を去った。それから地方の高校へ。病を得て療養生活、よくなってぶらぶらしていたら、昭和9年度(37回)を見てくれといわれて顔を出したが9月(?)の神戸二中戦をみて退いた。少し体調がおかしくなったからである。自分の軽率さから迷惑をかけたなあと思っている。

昭和10年4月、東京歯科へ入ったらこの時の村田義幸がいた。遅れる事6年である。彼が東歯を出て帰阪、後輩の世話を永年した事はよく知られている事と思う。

伊藤泰運(33回)書いておきたい人の中の1人である。ちょっと前述したが斉藤(31回)田中(32回)に続いてのキャプテンで、強気の人である。その重責を非常に意識して部の強化に全勢力を投入。少し極端であるが学業を全く放棄したと思えた節があった。一度問うてみたいと思っている。何事によらず事を成すにはバカと思えるほどにならないと成就しがたいのではなからうか。この点、この時代にはこの種のバカが割りに多かったような気がする。彼はその最たる最後の人ではなからうか、彼の自己犠牲(そう彼は思っていないだろう)にもかかわらず、それに相応した結実はなかったとはいえ、人事を尽くして天命をまつすがすがしさを体得したのではなからうかと思う(放言多赦)。

最後に31回で上に行きラグビーをやり、また部を創設した人を知っている範囲で列記しておこうと思う(順序不同)

谷山義親、島田重道(浪速高校)、谷山は確か4年終了である。後者は犬というニックネームがあったほど犬好きで、常盤小学校(旧天王寺村第2尋常小学校)の正門の南側にいた。6尺になんなんとする大男で、浪高、京大を通じてラグビーをしたようであるが、その詳細を自分は知らない。社会へ出てもボールを手にしていたようである(確か三共精機)。最後の勤務先、金沢工業高工の教官になった時、2、3年中に必ず全国大会に優勝させると豪語していたと人づてに聞いて彼らしいと期待していたが、昨年、東京で急死した

のは残念である。彼がいたら、この当時の浪高の事がと思うのである。

八木久米一、加茂敏雄。共に大阪外語で八木はキャプテンをしたと思う。

今西伊三郎、同志社大でマネジャーをした。

いつであったか、どこであったかは忘れたが、グラウンドで会った事がある。同志社の連中が彼に会うと目礼し、話しかけると姿勢を正したの見て、さすがに大同志社のマネジャーの貫禄であるなあと思った。

末永恒雄、長崎高商でラグビー部を創設したと聞いた。50年史に期待したい。

石田謙次郎、東京高商でボート部をかけ持ちしてたと知らしてくれた。彼の手紙は別載してもらおう事にする。

丹羽勝、生きていたらとしみじみ思う人であり、丹羽3兄弟の真ん中である。北大と一高両方に入学し、北大の農科を選んだと聞いた。寮歌「都弥弥生」にあこがれた1人と思う。水泳部での活躍ぶりは水泳部史に書かれている事と思う。とに角、夏冬を通じ上着一つで通しシャツを着用しなかった。北海道でそれを押し通したかどうかは知らないが、豪傑であった。北大では水泳はままならぬとみえて、ラグビーに専心、確かハーフかセンタースリーで活躍していると聞いた記憶がある。彼を語る人なきやである。

以上の同期の桜は校舎を焼け出されてから江の子島(西区)の府庁舎の跡から上九の女子師範の校舎跡(現在警察病院)にと遍歴

し、運動らしい運動は出来ず（部の練習は放課後、現在地の運動場に通ったものである）小さな運動場で、うっ憤を晴らす手段は休み時間にボールを取り合い、蹴るより外になかったのである。こうして書いているとその当時の各人各様の姿が浮かび上がって来る。

ローマは1日にしてならず、後年、総力を結集して全国制覇を成し遂げた事、幾度か、

昭和17年、26年、29年度のフィフティーンに対し万腔^{こゝろ}の敬意と感謝の念を捧げ、この天下に燦然^{さん}たる光芝を仰ぎ見、誇る者であると同時に、ここに至る棘^{いばら}の道を、清き美しき執念の情熱の火を持って開き伝えた人々を忘れてはならないと思う。今日、天高ラグビーの現状に目を向ける時、幾多の感慨制約、困難を意識するが、各人の心の情熱の火種、よし小さくとも絶やさぬ限り伝え行く限り、いつの日にか、また、この燦然たる栄光^{さん}の火に点火し得ると信ずる者である。

輝く全勝記録

山 東 嘉 樹(31回生)
(旧姓・荒賀)

私がラグビーを始めたのは2年生からで、約50年を経過している今日、当時のことについて、あまりくわしく記憶していないというのが事実です。

しかしながら昨日のことのよう鮮明に思い出されるのは甲子園（現在の野球場）で開催されていた全国中等学校大会に4年生、5年生の時、連続して大阪紀和代表として出場

し、優勝戦で同志社中学に敗れ、ついに全国大会に一度も優勝出来ずに卒業したことです。同志社中学に勝った京都一商には二度対戦し二度とも勝っているのです、勝てない相手ではない同志社中学を、どうしても破ることが出来なかったのが一番残念でした。4年生の時は関西大学、大阪高等学校に敗れた以外は、中学校は問題でなく、大阪高商、大阪外語、天理外語等の専門学校にも勝ち、コーチの巖先輩には、当時日本一のTBラインといわれていた全盛時代の京都大学ボックス（馬場、星名、望月（宇野）進藤）に次ぐTBラインとおだてられ、気を良くしてがんばったものです。

5年生の最後のシーズンには、前年敗れた関西大学、大阪高等学校にも雪辱し、輝かしい全勝の記録を残して卒業出来たことが今は懐かしい思い出となって残っております。関西大学との試合終了後のミーティングの席上で関大のラグビー部長が「私達は大学生であり、中学生である諸君をコーチすべき立場にありながら敗れたのは誠に申し訳ないと同時に極めて残念である。とのあいさつがあり、我々は大いに面目をほどこしたことを覚えております。

天中を卒業し、早大ラグビー部に入部すると同志社中学からは柯、林の両君、京都一商からは松原君、奉天中学からは小川君とってはグラウンドで敵として戦った連中が顔をそろえているのには驚きました。私が大学2・3年生の時に早稲田大学が連続全国制覇が

出来たのも、この年に入部した諸君が中心となって活躍した結果であることも感慨深いものがあります。いずれにしても私が早稲田大学に進学し大過なくラグビー選手生活をまっとうできたのも、天中時代に諸先輩からラグビーの基礎をたたき込まれたたまものと感謝に堪えない次第です。

対同志社中戦のこと

神 阪 健 夫(31回生)

昭和4年正月、全国ラグビー大会の模様を当時の記憶をたどりながら記してみようと思う。ただし40年あまりも昔のことで、正確は期し難い。もし誤りのあることに気付かれた方は遠慮なく奥田氏まで知らせて下さい。検討の結果、訂正いたしたいと存じます。

当日は確か曇り空のように記憶します。それと我々15人の者達はいうかいわぬは別として、同志社中に対し一種の負けムードを持っていました。特に同志社中のスリークォーター中張および柯の2人はその俊足とプレー上手で有名であったことを明確に記憶しています。天中は前半1トライを上げ幸先よいプレーをしましたが、この時私の心の中に芽生え出したのが前述した同志社中に対する天中の負けムードでした。

後半のプレーが始まるや否や同志社中のトライが中央付近にあり5点を先取され、次々にトライがあり後半しばらくは我々も何とか防げるものなら防ぎたいとがんばりました

が、そのかいなく18点を許す結果になり、何としても残念に思います。それにしてもフォワードの皆さんはよくがんばりました。逆にバックスには勢いなく張、柯の2人にほんろうされた形となり、ある意味ではキレイに見えたかもしれないが、本音は以上の通りであったように思います。

後で聞いたことですが、決勝に残った早稲田実業が同志社との一戦（決勝戦）で41対0で負けたとか、バックスの一糸乱れぬ行動の強さをつくづくと知らされた思いがします。それにしても時の経過は恐ろしいもので今となっては、天中（天高）はおろか同志社中の声すら聞かなくなりました。

黄金時代の思い出

藤 野 重 郎(31回生)

天中に入学当時、広いグラウンドのあちらこちらで、野球や陸上そしてラグビーなどの練習がよく行われていたが、放課後ただぼんやりとみるのが好きだった。

3年生のとき（大正15年）ラグビー部（当時は蹴球部といった）に入部した。そのときのいきさつは、はっきりおぼえていないが、たぶん練習をみているうちに、誘われてなるとなしに入ったのであろうと思う。当時のユニホームは真っ白で、黒いマークの校章がついていた。毎日の練習は新部員はキックパスなどで、レギュラーのように本格的なものではなかった。ボールの手入れ（ワセリンでみ

がきあげる）や白線引きなどの雑用がかなりあったと記憶している。

3年生の秋に校舎が全焼した。そして仮校舎が江之子島の旧府庁舎に設けられ毎日市電で通った。また年末には、年号が大正から昭和に変わった。

仮校舎にはグラウンドは全然なく、狭い空地を利用して練習をした。しかし、正月の全国大会は中止であった。新学期から、天王寺の旧女子師範の校舎に仮校舎が移った。ここはグラウンドは狭かったが、一応の練習はできた。部室も階段下にあった。しかし、シーズンになって本格的な練習は天中のグラウンドを利用した。また天中の近くに、美章園という住宅地があった。そこに広場があって、ユーカリの木が2、3本茂っていて、草原であったが練習には都合がよいのでよく利用した。校舎の通用門の近くにうどん屋があって、そこはユニホームの着替えやボールの空気入れなど部のたまりになっていた。

4年生になって、レギュラーになった。ポジションはライトフッカーであった。スクラムのときは、フロントローは真っ先にそろわなくては姿勢がくずれて押し返されボールもとれない。首を相手の胸深く突っこんで、ボール・インと同時に押し上げ、左足でボールをかき出すのである。

ホワードというポジションは、ボールを手にするという了見をおこさず、ブレイク・アップと同時に、味方のコーナーフラッグ目がけて走り、バックをフォローするのが使命と

いわれたぐらい地味で縁の下の存在であった。（現在と大分ちがう）

当時、ラグビー部のある学校は少なく、その相手も大阪高校、大阪高商、大阪外語、関大、北野中それに関西ラグビー、府外では天理外語、天理中、京一商、同志社中と数えるほどであった。このうち北中と京一商とは毎年定期戦が行われた。北中戦はいつも一方的勝利に終わったが、京一商は強かった。この年はじめて勝って多年にわたる復しゅうをとげたのだった。そして、第2戦にも連勝して大いに面目をほどこした。年が変わると毎日新聞社主催の全国大会が甲子園球場で行われる。これに備えて、正月早々から合宿がはじまった。当時は球場の周辺も住宅がほとんどなく、松林が多かった。この松林を抜けたところに旧村落の様子が残っている町並みがあって、そのうちの民家が合宿所になった。2階建てであったが15人が寝泊まりするには狭かった。練習は少しはなれた鳴尾競馬場まで出かけた。その道には田畑が多く草むらの中での練習だった。先輩の指導のもとに、夕方まで真剣にやった。

大会は1月4日から始まった。そのときの出場校は8校で、1回戦えば準優勝戦、2回戦えば優勝戦であった。第1回戦は、奉天中学との対戦で、34対3で大勝した。第2回戦は東の雄、慶応普通部で有名な北野、石井がTBにいたが、9対3で快勝した。わが方のフィフティーンは、コンディションが最高で、とくにフォワードはスクラムで球をよく

とった。前半は9対0と優勢裏に終わった。そして後半、敵はばん回しようとして猛烈に突っこんできた。しかし、わが方の強いディフェンスにはばまれ、時間が刻々と経過した。反対に9点をリードした天中勢は落ち着いて着実にプレーを進めた。

ラインアップのときなど、日ごろ聞きなれない東京弁がぽんぽんとび出し、敵はいよいよあせってきた。そして試合はエキサイトしてきた。結局タイムアップ近くで1トライを許しただけだった。

そして第3回戦、すなわち優勝戦は宿敵同志社中学であった。

そのときの記録に「決勝戦の日はいよいよ来た。スタンドの両翼に対峙する両校数百の応援団、8000の観衆、歓声の嵐を捲きおこし、物すごい緊張裏に、いよいよ戦いの幕は切っておとされた」と当時の緊張した様子をいかんなく伝えている。

しかし戦いは前半0-8、後半0-3、結局11点を失い敗れたのである。このときは、8人制をとっていた敵のスクラムは強く、球をよくとられた。したがってバックの活躍もなく0敗したのだった。同中には、張、柯らの有名な選手がいてよくがんばった。

再び当時の記録をみると「かくて光栄ある優勝旗は、同中の手に授与された。われわれの両眼からは、熱い熱い涙が唯とめどなく頬を伝って落ちた。当日は、われわれ15人は死力を尽して闘った、天我に幸せざる何ぞ甚だしき。11対0我勝つ可きに敗れて涙禁ずる能

はず。噫、悲し語らんと欲するも能わず、唯此の上は、臥薪嘗胆来年を期するのみ」とそのときの15人の気持ちをそのまま伝えている。

この大会が終わると入試や学年末試験のため練習も中止となるが、5年は近く卒業ということでレギュラーから離れ、新メンバーが編成された。

この年度の戦績をみると、試合数は19で、このうち負けたのはわずかに3試合、それも本格的な負け試合は優勝戦のみで、まさに天中ラグビー部の黄金時代といえる時期だった。

私は、4年で、商大予科（現市大）を受験したのだが、そのときの身体検査が人一倍時間がかかった。胸が悪いらしいから精密検査を受けるようにと医者から注意された。それまで運動をしてきたし、体には自信があったので大した心配もしなかった。

しかし、家に帰って話すと家族は非常に驚いて、すぐ日赤病院に私をつれてゆき、レントゲン写真をとってもらったが、別に悪い様子でもなかった。それでも当時としては、胸の病気ともなれば大事であった。当分静養するにしかずと、新学期から学校を休んだ。1学期の臨時試験も受けなかった。

今まで毎日、練習、試合そして感激の全国大会と全くラグビーともに明け暮れしてきたのが、1日中家にとじこもることは、さびしくまた退屈で、たえられなかった。その後心配しながら通学しだしたが、もちろんラグビ

ーをやめた。しかしみんなの要望にこたえてマネジャーとして残ることになった。だから5年生時代は、もっぱら観戦に終始した。

この年も例年のように、8月下旬から練習が始まった。9月の練習試合を経て、10月には本格的なシーズンを迎えた。前年に引き続き優勢で、ほとんどの試合には勝った。そして年が変わると全国大会である。

この大会では第1回戦は京三中に11対0で勝ち、次いで第2回戦は同中戦であった。この試合は雨中戦であった。私はタッチジャッジをやった。結局18対3で敗れたが、同中は優勝戦で41対0で大勝していることから、実質上の優勝戦であったといえる。

天中を卒業して岐阜高等農林学校に入学したが、ここにはラグビー部はなかった。ちょうど同級生に神戸二中卒の友人がいたので、2人で相談してラグビー部を創設しようということになった。そして3年かかってチームをつくり上げた。私は体の関係で、選手にはならなかったが、練習はもちろん合宿でも一同と全く同じように行動した。1年下に天中から御牧君が入学してきたので、チームはさらに強化された。東海地区は三重高農、名古屋屋高商が強かったが、一時はこれらに全勝し、時には関学や神戸高工との遠征試合をするほどだった。東海地区代表決定戦には敗れて大会出場はできなかったが、名声を博したものだ。ラグビーによってささえられた岐阜の生活は非常に愉快だった。

世の中に出て、学生時代のラグビー精神

は、いつでも心のささえとなっている。たのしく、がまん強く、そしてほがらかに生きるためのバックボーンになっている。

3 ケタ台のスコアで大敗

石田謙次郎(31回生)

小生、一橋に入ったころは、一橋はボート部が全盛であり、全員ボート部という状態でしたが、小生、天中出というだけで無理にボート部とラグビー部をやらされました。そのころ現在でも記憶に残っている事は荒賀(後山東)君が早大のスタープレーヤー、センタースリーにおり一橋と一戦交える事になった時、彼が小生にいわく「君の学校であれば自分は洗濯したてのこのパンツに泥を付けなくても勝てるだろう」と豪語しておりましたが、その通りになり、スコアは3ケタ台であったのを記憶しております。このような記憶しか残っておりません。

走馬灯の20余年

田中健三(32回生)

天中に入学したのは大正14年4月です。2年遅れて入学した私はテニスをやりたかったが身体が大きかったのでラグビーをやらんかとの先輩のすすめを受け入部したのが始まりです。大正15年から昭和2年3月までは大正天皇の崩御のため大会もなく終わりました。

昭和3年3月までは故山田信雄主将の時、

京大の名ラガー巖先輩、長沖（杉本）先輩の指導を受け同志社中学、大阪高等学校には勝てませんでしたが、その他の大学、高専、中学に全部勝った様に記憶しています。特に全国大会準決勝で慶応普通部と当たり快勝、しかも私のペナルティーゴール2つで9対3で勝ったのですから一生忘れられませんが、それよりも長沖（杉本）先輩の事も忘れられません。それは慶普選手の一人一人の個性、能力を逐一長文でお知らせ下さった事です。後でかなりの制裁を受けられたと聞きました。

昭和3年4月―昭和4年3月、斉藤権三君が主将でしたが、前年同様準決勝で同志社に負けました。細部は奥田君が書いてくれると思いますので省きます。昭和4年4月―昭和5年3月私が途中から主将になりましたが、事故者続出し予選で天理中学に逆転負けしました。実に申し訳けない事です。昭和5年4月―昭和6年3月、伊藤泰違君が主将でしたが、始めて同志社に大差で勝ちましたのが始めてもの罪ほろぼしだったと思います。

その後、北条誠司、斉藤正三、酒井竜平君や多くの後輩がそれぞれ、がんばってくれ、それなりの成果を残してくれましたが、天理中、北野中のため何回か全国大会出場をさまたげられました。昭和17年4月からほとんど毎日午後3時には天中グラウンドに集まり始めて神宮大会優勝。翌18年1月の全国大会で優勝。毎日新聞に雌伏18年の大きな見出しで記事が出された事も今更のように思い出されます。その当時の裏話を若干書きましょう。

西条君（ハーフ）新村君（フルバック）この2人に特にきびしく練習をさせましたが、最後までがんばってくれました。後年、新村君が早大に進み名フルバックの異名があがったのもこの特訓が基礎になっただろうと思っています。次は神宮大会の第1回戦、京城師範と対戦、世評では天中不利といわれておりましたが快勝。その夜、若山君ほか1、2の選手が酒をのんで帰り、付き添いの先生（奈良、北川、三浦）方に発見されましたが、理解あるはからいで無事に済まして頂きました。

第3は神宮大会終了後、5年生は全国大会出場停止、受験準備をするよう職員会議で決定された事です。若山君等は是非出場したいという。なんとかして選手の気持ちを通してやりたいと思い阿部先輩、村田義幸君と共に田中校長に面談懇願しましたが、なかなか承認されませんでした。やむを得ず校長に対し今夜の朝日、毎日の夕刊を見ろ、天中同窓会の名において事の真相を発表するといって困りました。さすがの校長もその熱意に負けて、決定を撤回してくれました。以後ラグビーは校技であると校長にいわしめたのもそれからのように記憶します。

後日北川先生（ボテさん）が私に対し50数人で決定された職員会議を短時間の校長との面談で一変したといわれました。むちゃな男だといわれているのか熱ある男だといわれているのか、いまだに判断に苦しんでいます。

昭和25年1月、青井兄主将のとき全国優

勝。その時の裏話を一つ書きます。

西川君が一切の面倒を見てくれていましたが、木村芳生君を監督に指名した事です。村田義幸君を始め青井、岡田君らから非難を受けましたが、村田君の家に青井、岡田君らを呼んで指名理由を説明して了解を得ました。木村、西川両君を始め選手一同の努力の結果、優勝でき幸いでした。その理由は最悪の場合、西川君が周囲から非難されるのを恐れたからです。木村君なら早大での歴戦経験十分だし、非難が出たとしても理解してくれると思ったからです。その他50年の歴史の中でまだまだ問題は数えきれないほどありますが、文筆才能のない私では満足に書けませんのでここで終わります。

最後に最近の天王寺高校はラグビーをはじめ、どのスポーツもパツとしません。上級学校の予備校の感じがしてなりません。先生父兄方のご理解ご協力を得て健全な体育をつくり1日も早く昔の状態に戻し、満天下にその名をあげる日を切望してやみません。卒業生諸君も物心両面のご協力下さる事をお願いして筆をおきます。

昭和初年の天中ラグビー

正野 虎雄(33回生)

天中ラグビーと私との初めての出会いは、大正14年12月小学生のころ。当時、天中の3年生であった私の兄、良介(30回)に連れられて中学大会の地区予選の決勝(対北野中だ

ったと思います)を北畠の大高グラウンドへ見に行ったときです。当時の天中は5年に長沖、浜田、富田、笥、森、藤井、宮城。4年に糸岡の諸先輩がおられ、まことに鮮やかな勝ちっぷりだったのを思い出します。その日から私はラグビーにとりつかれ、明けて正月の甲子園野球場での全国中学大会に連日通いました。

2月になって、どこの中学を受験するかとなると、迷いなく天中をえらびました。幸い合格できた私は入学早々ラグビー部の部室に行き、入部希望を申し述べましたが、当時私は身体が小さい方でしたので「入部はしていいがその辺でボールをいじって遊んでおれ」といわれ、1人前扱いはしてくれませんでした。それでも大高の北門前にある川村というラグビー専門のクツ屋に行き、オーダーでラグビースーツをたのみ、それが出来てきたときは机の上に飾って、うれしくて、うれしくてたまらなかったのを思い出します。

それからの4年は糸岡、山田、斉藤、田中の歴代キャプテンにいろいろ教えていただきました。OBでは奥村、巖、三好、阿部、平井、松川の諸先輩がよく見えられました。在学中のことでは3年生の秋、天中としては大事な試合であった対大高戦(大高は前年度全国高専大会優勝チーム)に初陣でFBとして出場させてもらい、快勝したのが印象に残ります。

その後、大高、東大、学士ラガー、関西ラグビー、関西OB代表、全三菱、大阪クラブ

などでプレーしましたが、私にとっては、昭和初年の天中のラグビーが精神面でも技術面でも基本になって、私のラグビーに何よりも役に立ってくれたといつも感謝しております。

初の勝利

浜 口 隆(33回生)

大正15年4月に天中(旧校舎)へ入学、当時小生出身の大阪市西区の小学校はグラウンドがコンクリートで固められている状態で、あまりスポーツは盛んでありませんでした。一般に知られまた行れていたものは武道、陸上、水泳、ピンポン、軟式テニス、野球(子供は主として三角ベース)バスケットボール、バレーボールくらいでサッカーもあまり知られていなかったのではないかと思います。もちろんラグビーは全く知られていませんでした。

さて小生入学時の校舎は木造2階建て東西に長い3棟で北側1階に教員室、2階1年、中央が2、3年、南が4、5年であったと思います。各棟をつなぐ渡り廊下が確か3本位あり、この西端の渡り廊下の西側2・3段下に部室があり便所へ行く途中しばしば異様なスタイル(パンツは現在の野球のようにひざ下まであり)の大男たちが変なボールをいっているのを見ていましたが、どんなスポーツか全く知りませんでした。その年の冬休みに道場付近より出火全焼した事はご承知の通

りです。

昭和2年1月第3学期は江之子島の旧大阪府庁跡、同4月ごろから上九の旧大阪女子師範跡を仮校舎として、昭和3年、4年、5年の4月まで過ごしました。

小生2年生の終わりごろ勧誘されて入部を承諾、昭和3年9月のシーズンより練習に参加しました。斉藤主将で1年上の田中のおやじさんが主として指導してくれましたが、全く予備知識もないため、ただ人のあとをついて行くだけでした。4年生になりいきなりCTBをさせられましたが、ペアの長尾は当時超^と弩級の大学選手並みにいろいろと教わりましたが、一向上達せず5年生になり(正野大高、長尾早大進学)知らぬ間にバックのリーダーにされていました。小生4年生ごろまでは先輩は平素はあまり見えず、上級生の指導を受けミーティングで山田先輩の訳された外国書(ラグビー?)のプリントを読んだりする程度でした。上九の仮校舎から焼跡のグラウンドまで約30分歩いて3時半ごろ到着して門西側のうどん屋を部室にし、田中のおやじさんからボールの手入れを教わり(毎日空気を入れ練習後空気を抜いていました。ボールはシルコックが主で時にギルバートというのを使用、年間10個位でした)暗くなって帰路につく状態で、特に昭和4年の夏ごろは建築資材が置かれて桃中のグラウンドを借用するなど、はなはだ不便な状態で過ごしました。

昭和5年伊藤主将のもとで校舎も落成し、また9月のシーズン始めに、対同志社戦が組

まれましたので、初めての夏季合宿を当時仁川に移転間もない関西学院のグラウンドで行い（この時奥田先輩がマムシに噛まれるというアクシデントがありました）引き続き天中グラウンドで当時日本一を誇った京大FWの主力であった三島、足立兄弟、小幡先輩、バックでは日本一のSO村山仁さんらの先輩、さらに天中先輩ではないがSH岩前氏まで練習に参加、巖、平井、田中その他諸先輩及びこの年専任監督をして頂く事になった小野木先輩ら、一丸となって指導して頂き対同志社戦に部創立以来、初めて勝利を得て諸先輩の喜びもひとしおで大いに期待されていましたがシーズン半ばFWの一部に退部者が出たため急に戦力低下、ついに全国大会に出場出来ませんでした。また小生も残念ながら10月始めから11月下旬ごろまで約2カ月くらい腎炎のため休学、同志社戦、北野戦のほか2、3に出場した位で終わりました。

昭和6年、北条主将の年、小生は浪人していましたので巖先輩が監督、小生がコーチとして毎日みなと一緒に過ごし、平井先輩も熱心に来られ全国大会に出場しましたが、浜甲子園グラウンドで1回戦で敗退しました。

この年ごろから一般社会人のラグビーがぼつぼつでき始めたのと前後して、天中OBの若手の社会人が次第に増加し桃陰ラガー設立の機運が熟して来たと思います。小生、昭和7年、大阪高医に入学、その方のチームづくりに追われるようになり、天中の方へはあまり顔が出せなくなり主として桃陰ラガーの方

でプレーを楽しませてもらっていました。

社会人ラグビー熱と共に大学高専も急速にラグビーが盛んになりましたが、その原動力となったのは天中卒業生と申して過言ではない状態でした。

最後に昭和初年ごろ関西の中等学校でラグビー部のあったのは京都で同志社普通部、京一中、京一商、大阪で天中と北中、神戸では神戸一中が昭和5年ごろ正式に発足したはずです。神戸二中は天中より陰山先生（体操）が転任されて昭和6年か7年に正式に設立されたと聞いています。

桃陰ラガーの誇り

中 川 一 三(33回生)

天王寺中学、高校、ラグビー創設50年記念行事の一環として記念誌を後世に残すことになった。大変結構なことであり、編集委員の諸兄のご苦心に対しては深く敬意を表したい。

各期からそれぞれ代表的な人が筆をとることになったそうだが、それも当然のことであり、私の期（33回）では伊藤泰運君が最適であると思うのだが……。最高学年には主将をつとめたし卒業後も数年間大阪に在住して現役の面倒を見ていたし諸先輩とのつながりも多くて深い。

ラグビー部に入部したのは正野が少し早かったそうだが、1年生からたたき上げた筋金入りの桃陰ラガーマンの名にふさわしい。そ

れがどうしても書いてくれないのでラグビー部在籍年数からいえばおよそ資格のない私が村田保男編集委員長の厳しい命令で書かざるを得ない破目になった。天王寺のラグビーを愛するという点では人後に落ちないと思っているので、この点にめんじて思い出の断片を記すことをお許し頂きたい。

私があこがれの天王寺中学に入校したのは大正15年3月、そしてその年の冬、母校が化学教室だけを残して全焼した。その日から全校生徒のわびしい仮校舎生活が始まったのであるが、新校舎の出来上がったのは私たちの4年生の終了直前であったから、火災による被害を最も多く受けた学年といえよう。

私のいいたいのは勉強の被害ではない。運動部の練習場がほとんど奪われた事をいいたいのだ。一部正課となっていた柔剣道や小さい場所でやれるバスケットはまだ何とかあった様だが、ラグビーを始め陸上、プールのない水泳など目もあてられなかった。グラウンドとは程遠い石と瓦だらけでネコのヒタイ程の空き地で練習しながら、全国大会（当時甲子園）で優秀な成績を残した。斉藤、荒賀（山東）田中（健）、奥田先輩らは一体どのような非凡な資質を持っておられたのだろうか。恐らく私の知ることの出来ない傑出した精神力の集団であった事と想像するが、天王寺ラグビー第1期黄金時代がこの苦境の時代に花開いた事を我々桃陰ラグーの後輩は深く銘記せねばならないと思う。（戦跡は日本ラグビーフットボール協会発行高校50年史を参照された

い）

私が伝統ある桃陰ラグークラブの一員となれ、それ以降北大、社会人を通じて私の半生以上をラグビーの虫として過ごし私の人生に大きな影響を与える端緒を作って下さった恩人は田中健三先輩であった。私が天王寺中学に入校した当時はシーズンの関係と創設者阿部会長の影響もあってラグビー部と水泳部を兼ねる人が多かった様だが、それはそれなりに、また弊害もあって私の3年生のときのラグビー部主将斉藤権三さん（関学）と水泳部主将丹羽勝さん（北大）が話し合った結果、現役とOBの承認がなければ両部を兼ねることが出来ないという不文律を作られた。

運動部員にTAMの銀のバッジを作られたのもこの人たちであった。私はラグビーが大変好きだった、伊藤泰運君とは1年生から無二の親友であった関係上、上記の斉藤の権三さんからもかわいがられラグビーに専念したかったが、別にプールを守らねばならぬ使命もあって意を得なかった。

4年生になって田中先輩や伊藤君の好意で大丸、関電、大阪外語、大阪商大など年配の相手とやるときに使ってもらってやっとうさを晴らしていた。新校舎も出来たし黄金時代を引き継いで伊藤泰運君が主将となったがここに大きなアクシデントが生じた。正野は秀才なので4年で大阪高等学校に入ったのは致し方ないとして、同期のフロントロー豊島、TB野長瀬、1期下のFWのベテラン伊藤というような人がそれぞれ勝手な理由で退部して

しまった。伊藤主将の痛恨察するに余りある状況となった。田中健三先輩が伊藤、浜口らと相談して私を拾ってくれたのである。このような状況でこの年は天理に敗れ、連続全国大会出場の夢は破れたが、伊藤主将として傷心の中にも大いに誇って良い立派な戦跡がある。

同志社中学との第8回目定期戦を行い初めての1勝を（7連敗）記録すると共に、北野、神戸一中など大切な定期戦を全勝で飾った事である。駄文が長くなって恐縮だが重い筆をいざとってみると桃陰の思い出は尽きない。この際桃陰ラグークラブの発祥の事についてふれて見るのも無意味ではなかろう。

私が北大に入学してから伊藤君が三重高農のラグビーを創設された。平井宏先輩の農園で彼が好きだった花作りと天王寺の現役を指導していた昭和8年ごろクラブが誕生している。伊藤君の話ではクラブのマークになっている龍の落とし子というのは生きてるときは絶対横にはならない、必ず立った姿勢だ。この縁起をかついで平井先輩がこのマークに固執せられたのが真相だそうだ。私は古い応援歌に臥龍ヶ丘の文字があるのを知っていたので、これから龍をとったものと確信していたが、臥龍では発案者の意にそわないことおびただしい。一人合点を深く恥じている次第。発会のころ会費は終身会費が5円也で、あとは会費不要。濃紺の楯の中に竜の落とし子の浮き彫りされたバッジをもらって感激したものだ。クラブ員の資格は天王寺のラグビーを愛するものということで、ラグビー部員とし



図

ての前歴も出身校も問わぬスケールの大きなものであったと記憶している。

クラブ創設のお世話は平井先輩や伊藤君が中心になってやってくれたはずだが斧原君も手伝った事だろう。もちろん初代会長は井上二郎先輩（慶応OB・関西ラグビー協会初代会長）であった。その関係もあって日本橋のKOクラブ？ によく集まった記憶がある。戦後、私と井上二郎会長とのつながりは深い。物資のない終戦直後、毎日の様におべんとう持参で私の家に来られて貧しいお汁を作って差し上げると喜んで昼食を共にされ、来られてから帰られるまで話は全部ラグビーの事だった。

前述の桃陰のバッジを私は空襲で焼いたが、井上会長が大切に持っておられたものを「これは私が持っているより、君が持っている方がふさわしい」といって下さったご厚意

は今もって忘れることが出来ない。終戦後気になるまま天王寺のグラウンドへ行ってみた。八鳥、岡の時代であったと思う、私は3年前病気になるまで母校ラグビーと深いおつきあいをさせて頂いた。阿部、田中両先輩始め皆様方の温かい友情があったからだと深く感謝している。

桃陰ラグー戦後活動のスタートは前述した平井先輩の農園（甲東園）で集まれる者が集まってイチゴ狩りをやった事から初まったと思うが、井上会長は夫人もお子様もご一緒であったと思う。

組織だった会合を持ったのは現副幹事長の浅岡君が淀屋橋の浪速屋をあっ旋してくれた事だった。私と伊藤君が相談の上、田中健三先輩の細かい指示を頂いてやったことだ。戦時中は止むを得ず村田義幸君（現幹事長の実兄）や、その他少数の人の世話になって運営して来たものを出来るだけ広く各期から委員を出してもらって委員の総意で運営して行こうというのが最大の目的であって、それが45周年記念祭、50年記念祭と発展し過渡的に戦後2度目の松山遠征や名古屋における桃陰東西ミーティング・ゲームに発展して行った。事情があって長い間顔を出してもらえないが戦前1人で背負って桃陰の世話をされた村田義幸君にこの機会を利用して深甚の謝意を表したい。

戦後30年近い天高ラグビー部と私とのおつき合いのうち最も深く印象に残るのは高7期の連中だ。青井賢主将始め田中啓一（田中健三

先輩・長男）奥村、白神、福本、宝田らの顔を思い出しても心温まる連中ばかりだ。国体は北海道と遠かったし、全国大会にも出場して学業との板ばさみでどれ程苦労したことか。それでも良くやってくれた彼等にはラグビーだけではなく人間としての筋が通っていた。大学へ進んでも社会人になっても全国で一流の活躍もし、後進の面倒も良く見てくれている。ありがたい事だと今以って思っている。内田（日大卒）、岡（同志社出・全日本監督）両君が熱を入れてくれたのもこの時代であった。だれか手を挙げればOBも現役も1本になった。桃陰の真の姿がここにある。

戦後の現役の指導者として忘れてならないもう1人の人がいる。それは今東京で朝日新聞の新社屋建設委員長でがんばっている鹿子木君だ。詳述すれば紙が何枚あっても足りそうにない。彼の事は恐らくだれかが書いてくれていることだろう。シーズン中天高グラウンドが改造のため使えず近くの白鷺公園やその他の不備なグラウンドをもとめて苦心を重ねて全国大会に優秀なチームを送ってくれたご苦労だけをお伝えして置こう。松山遠征でも彼の力に負うところが多かった。簡単に筆をおくつもりが、意外に長くなってしまった。過去を振りかえってみるとき、私は桃陰ラグーとはありがたいと、しみじみ思っている。それは先輩もない後輩もない、私自身持つことの出来ない立派なものを備えた人々の中に身を置くことが出来た喜びである。今後一層の発展を期待してやまない。

私とラグビー

北 條 誠 司(34回生)

大正天皇が崩御され、昭和と年号が変わった昭和2年の春、天王寺の仮校舎に入学した。旧校舎が火災にあい、旧女子師範の跡、現在の警察病院付近に、バラックの仮校舎があった。校庭も狭かったが、そこで体操や、教練や、応援歌の練習もやった。初めてラグビーなるものを見たのは焼け跡のグラウンドでの対京都一商戦だった。天中の近所の小学校から来た連中はラグビーを知っていて、彼等に誘われて、焼け跡のグラウンドまで歩いて応援に行った。その試合は勝ったようだった。というのは、その時の部長の先生(ヘブ)が胴上げされていたので、勝ったことを知ったように思う。

秋になると1年生のクラス対抗のラグビー試合が始まった。5年生のラグビー部員が各組のコーチを担当し、相当熱の入った練習を狭いグラウンドでやった。他の組がボックスの練習をしている時、我々は校舎と校舎の間の狭い空き地でスクラムやパスの練習をした。その当時1年は6組あり、試合は焼け跡のグラウンドまで行ってラグビーらしきものをやった。服装もバラバラではあるが、それらしく整っていた。私たちの組のコーチは安部奈良雄氏(オタヤン)で、幸いにも優勝することが出来た。私はたしかスタンドオフをやったように覚えている。それからラグビー部

の部員勧誘が始まり、翌年2月に栄光のラグビー部員となった。その時一緒に入部し卒業まで苦楽を共にしたのは広田郷三郎君(旧姓潮田)石田繁次郎君、亡くなった伊藤英夫君、現在消息不明の安藤直政君もいたように思う。2年生になり服装も整え本格的にラグビーに打ち込んだ。47年前のことである。

初めての試合出場は3年生の春の対三重高農戦であった。三重高農には故平井宏先輩がおられ、試合前日から行って学校の養蚕室に泊めて頂いて、のんびりとした朝を迎えたことを覚えている。試合中は無我夢中で長尾先輩からのボールを受け取るとガムシャラにコーナーフラッグをめがけて走った。その当時は足も速かったのかウイングをやった。試合には確か勝って初陣を飾ったように思う。全国大会へは3年、4年の時は部がゴタゴタして2年出場出来なかった。5年生になって部員の推薦により主将となった。副主将兼フォワードリーダーには安藤君がなった。その時の正選手に8人の5年生がいて心強い限りであった。

全国大会への出場が2年間空白だったので今年こそはと部員はもちろんのこと、先輩諸氏も入れ代わり立ち代わりコーチに見えられ、学校も全校挙げて応援してくれた。練習中に私が岩橋校長先生に呼ばれ、何事かと校長室に行くとお盆の上に栗饅頭^{まんじゅう}がいっぱい乗っており、校長のねぎらいの言葉と一緒に練習後部員みんなで栗饅頭をほおばった。このような学校やOB諸氏の物心にわたるご指

導、ご支援のおかげで、シーズン中は同志社中学に1敗しただけだった。その試合は明治神宮大会（今の国体か）の予選で神戸から神戸一中、京都からは同志社中学が、大阪からは我が校が地区予選を勝ち抜いて残り、最初には神戸一中と現在の甲南大学のグラウンドで熱戦を繰り広げた。幸い小差ではあったが我が校が勝ち、いよいよ同志社中学と決勝戦をやることになった。当時の神宮大会には関西、関東から1校ずつが出て、11月3日の明治節（今の文化の日）に東京で試合をすることになっていた。11月3日ごろはちょうど中間試験のある時期なので、それを逃れるためにも、どうしても同志社中学に勝ちたかった。戦は我に利あらず、シーズン初めての1敗を喫し中間試験を受けざるを得ない事となった。

その後は全国大会出場を目指してがんばった。北野中学の定期戦も20点余の差で勝ち、余勢をかって予選に臨んだ。決勝戦は予想通り天理中学と当たり、花園グラウンドへ必勝の意気に燃えて乗り込んだ。生駒側のスタンドは両校の応援団で満員だった。天理中学には超中学級の足の速いウイングの田中君がおり、これを徹底的にマークする作戦をたてた。マークするのはアクの強いセカンドローの伊藤英夫君がこれに当たり、田中君の怒りっぽい性格をあおりたてるように持って行った。この当時は技術的な作戦はもちろんのこと相手の性格まで研究して対策をたてたのも、勝利への執念だったかもしれない。試合

は前半は作戦が当たらず11対0でリードされ、後半にやっと調子が出て来て19対0と抑え、結局19対11で全国大会出場の栄冠を勝ち得たのであった。

この試合で私の長いラグビー生活を通じて一度だけの劇的なプレーを今も忘れることが出来ない。それは後半に天理中学の田中君がボールをインゴールを持ち込んだが、背中がグラウンドについていてボールをつけていなかったの、私がそのボールをもぎ取って、そのまま地面につけ、ドロップアウトにし味方の危急を救った。この様なプレーもファイティングスピリットの表れであったと、その後の人世においても最後まであきらめず、粘り強く処す教訓を得た一コマであった。

その当時の中学の全国大会は阪神間の浜甲子園グラウンド（現在の阪神パーク）で行われた。正月のお祝もそこそこに甲子園の合宿に入った。1月2日に入場式があり、その後引き続いて第1回戦が行われ、宿敵同志社中学と当たった。寒風の中、天中魂を発揮して奮戦したが、11対3で涙をのみ、全国制覇の夢は断たれた。その時は決勝戦で同志社中学が破れ、京城師範が優勝し大優勝旗が初めて玄海灘を渡ったのであった。その時の参加賞はラグビーのボールの形で、表に「第14回全国中等学校大会」裏に「1932」と刻まれている。今でも時々取り出しては当時の若かりしころをしのんでいる。

その年、関西学院高商部に石田君、寺戸君と共に進み、ラグビー生活を続け、翌年の正

月には花園ラグビー場で行われた全国高専大会に出場した。また桃陰ラグーの一員となり、四国・松山へ遠征し、AB両チームとも大差で勝ち、四国の地に桃陰ラグークラブの名を高めたのだった。その当時の写真を見て故人になられた方も多数おられ、過ぎ去った年月を懐かしく思っている。

現役の軍隊生活を北鮮の平壤で1年間鍛えられ、日支事変のぼっ発に伴い昭和13年5月に初めての召集を受けたが、幸い内地勤務だったので関西学院のコーチをまかされ、試合のある休日には軍服姿でグラウンドへ行って試合を見、帰って兵舎でその日の試合の批評を手紙にして、キャプテンに送るという隔靴搔痒かくかそうようの感が多分にあるコーチであった。

昭和15年7月に除隊し、翌年2月に満州国新京へ転勤し、新京クラブの一員となり春の全満都市対抗の新京代表に選ばれた。試合は大連で行われ、第1戦は撫順に辛勝し、第2戦も奉天にタイムアップ寸前の私のゴールポスト直下のトライで苦戦のすえやっと勝てた。奉天のスクラムハーフには天中から早大に進み、その年卒業し徴兵検査をすませて試合にはせ参じた松元君がおり、大いに彼に苦められた。優勝戦は地元大連と当たり、3日間の連戦で当方に利あらず、遂に優勝を逸した。3日間の激戦でやせてしまい、新京の勤務先の奥さんに見違えられる程だった。

その7月にまた召集が来て、内地に帰り終戦の20年10月末まで大阪の司令部での軍隊生活を送った。学校を卒業して10年間の内7年

半を軍隊で過ごし、貴重な体験をした。その間、天中、関学を通してラグビーの苦楽を共にした寺戸敏朗君、林武夫君を南の島で亡くしたのは今になっても心の寂しさを感じる。

終戦後、ラグビー復活の声は天中の谷口先輩から起こった。町は瓦れきの山、人の心は荒廃している。何とか心のうるおいをということでは他のスポーツに先がけて、大阪クラブと京都の第三高等学校との戦後初めてのラグビー試合が京都大学のグラウンドで行われた。ユニホームはバラバラ、くつも運動ぐつをはいている者もあり、三高にはハダシで走り回っていた豪傑もいた。何年振りかでボールを蹴り走り回ってラグビーを通して平和のよさを、しみじみと膚で感じたものだった。

23年の福岡の国体に大阪代表として遠征することになり、各自お米を持参して大阪発の国体列車で平和台へ乗り込んだが、緒戦で東京代表に敗れた。その時は東北、東京、大阪、福岡の4地区代表のトーナメント方式で行われ、確か東京代表が優勝したように思う。

昭和26年に東京支店に転勤となり、それと共にラグビーから離れ、テニス、ゴルフへと変わって行った。中学1年からラグビーのボールに親しみ、戦争中の数年間こそ遠ざかったが、25年間のラグビー生活は、私の人生のすべてであったように思われる。その間の苦しかったこと、楽しかったこと、よき先輩、よき仲間、それによって人生もうるおい、また精神的にも幾多の身についたプラスアルフ

ァを考えると、ほんとに有意義なラグビー生活だったと感謝している。

ラグビー部創立50周年を迎えた天高ラグビー部の栄光と発展を切に祈る。

全国大会出場のメンバー

塩田	加藤	斧原	伊藤	寺戸	石田	安藤	林村	木賀	荒上	川北	広田	今井	尾崎
克己	清	保幸	英夫	敏朗	繁次郎	直政	武夫	芳生	嘉生	誠司	三郎	秀典	博
(5)	(4)	(4)	(5)	(5)	(5)	(5)	(4)	(4)	(4)	(5)	(5)	(4)	(4)
FW				HB				TB		FB			

() 内数字は学年を示す

勝つは体力、気力のしるし

加藤 清(35回生)

天中時代、4年間半にわたり在部しましたので、その当手を回想させていただきます。ただ資料としては天高の同窓会名簿と写真類しかありませんので、45年余の昔の記憶にのみ頼っており、間違いも多いでしょうがお許しを願います。文中、失礼ですが敬称は省略させていただきます。

1年生(昭3年)の秋、同級だった故斉藤正三〔早大、ロック、正兵衛〕のすすめでラグビー部に入部しました。当時の天中は初期黄金時代の終わりのころで全国中等学校ラグビー大会の定連校で2回準優勝しましたが、同志社中にだけいつも勝てず打倒同中を目標にしていたころです。31期の故斉藤権三〔主将、関学大、スタンド・オフ〕山東(荒賀)嘉樹〔早大、ウィング〕奥田致一(東歯専)井上元幸〔陸士、ロック〕らを始めとして、

中等ラグビー界の名選手が並んでおりました。部員も40人以上いたようで、私はもちろんC組で同期生では荒賀嘉世〔関学大、スタンド・オフ、ガラ〕尾崎博〔大高商、ロック、トロン〕らが、すでに部員だったように記憶しております。C組の我々はボール磨き、空気入れに精を出して、アメリカンフットボールと称して密集の突っ込みの練習を励んでおりました。

当時は天王寺区北山町の仮校舎でしたので、授業が終わると新築中の現在の天高の校庭まで徒歩で急いだものです。部長は故宮道馨先生〔オ稻荷サン〕で、翌4年5月に現在の新校舎に移転しました。C組時代の変ったゲームとしては伊藤素義〔37期、秋田鉱専、バックロー、モッチン〕の率いる天師附属小学校ラグビー部の挑戦をうけ、天師グラウンドで練習試合を行い、かわいい小学生がファイトに燃えて、しがみついて来たのを覚えております。

2年生になって少しラグビーが分かりかけて来た秋、府中等学校聯合運動会に2年のリレーメンバーで出場し、右足をスパイクされ長く化膿したため約半年間練習を休みました。このために、それまでは俊足?だったのが残念にも鈍足となり、以後FWのフロントロー(昔懐かしいので用語は当時のを使います)という事になりました。

昭和4年から全国大会の予選が大阪・奈良地区と変わり、これ以来天理中と宿敵となり「大阪の天中ノ」「奈良の天中ノ」と応援合

戦も激しいものとなるわけです。田中健三主将〔スクラム・センター、オヤジ〕を中心に天中柔道場に合宿して、南甲子園で天理中と対戦し、33期の長尾寿三〔C・T・B早大〕の快走トライもあったのですが激戦のすえ、残念にも敗れました。故北野（米谷）文夫〔34期、ロック、ヒグマ〕が試合中首を痛め、柔道場で動けずに寝ていたのを覚えております。

32回に非常に愉快的なフッカーの桑原道竜（好夫）〔初代エラ〕がいて、私は2代目エラという事でデラと呼ばれました。33回に日本ラグビー協会副会長の正野虎雄〔東大、サード・ロー〕がいて、勉強は教室での授業中に覚えてしまうという復習の必要のないラグビー部きっての秀才で、我々うらやましく思っておりましたが、どうしたわけか「スケ虎」と呼ばれていたようです。

翌、3年生（昭5年）の時、伊藤泰運主将〔サード・ロー、インジ〕のもと宿敵同志社中を天中校庭に迎え定期戦を行いました。腕に全国優勝の数を入れた例のユニホームの同中は、さっそうと天中校庭に勇姿を現しました。この試合にて初めて同中に勝ったのです。全校生徒は勝利に酔い伊藤主将は胴上げして祝福されました。のちに私が早大ラグビー部に入ってから、同僚の当時の同中の選手と話が出た時「とにかく、天中のファイトにやられたね。それに、天中の校庭の硬いこと。あれでまず度胆をぬかれたよ。ゴールキックの時、砂場から砂を持って来てボールを

置かねばならんぐらいだから。まず、あの硬いグラウンドでファイトが抜けたね」と面白く語っておりました。以上までが私のB組時代で、私がレギュラーになったのが3年生の秋の京一商との定期戦からです。

4年生の石田寛〔立命館大〕が背椎を痛め、急遽^{きよ}そのあとに入りました。アウト・サイドのフッカーで、トイメンは当時中等ラグビー界で勇名をはせていた京一商の金丸主将です。当時の中等学校のラグビーでは、スクラムを「機関車組み」と称して猛烈な当たりで組んで、相手を心身ともに圧倒しようとしたものです。試合の第1スクラムは特にものすごく、相手スクラムに押し勝てばスタンドから大きな拍手がわいたものです。大高一京大と卒業生を多数送っている天中は、当時の覇者京大式のエイト・スクラムを遵奉し、バックを出来るだけ固くして押しに全力をあげたものです。のちに早大へ行った私はセブンF・Wでバックを軟らかくして、横のユサブリ戦法を主とした集散に力を注いでいるのに、一度に様子が変わり面食らったものです。

京一商戦は寝屋川であり、初陣の私は京阪電車の中からもう落ち着かず、試合をへばらずにやれるかなど心配したものです。役にも立たぬのに足にサロメチールを塗り込んだりしてグラウンドに出ました。相手の金丸主将とのスクラムはやはり激しいもので、数回の機関車組みの中、突然、顔が衝突して私の前歯が1本折れました。試合はC・T・Bの5年生の浜口隆〔大高医、カンコ〕と4年生の広

田（潮田）郷三郎〔大外語，初代ルート〕との大当たりの日で快勝に終わりました。試合後、伊藤主将から相手を押しあげていたと誉められ、それ以後5年卒業まで（のちにスクラム・センターとなる）全試合に出場させていただきました。今でも鏡の前で前歯の入れ歯を見て、タフだった若き日を懐かしんでおります。

この年は同中に初めて勝ち意気大いにあがったのですが、退部者が続いたりして全国大会の予選は再び天理中に敗れました。昭5年末に部長が三島輝員先生〔蟹^{カニ}〕に変わりました。4年生の時、北条誠司主将〔関学大，C・T・B，ペー〕のチームは久し振りに充実したものとなり、22期の巖栄一先輩〔京大〕がわざわざ激励に来られたり、25回の桃陰ラグー会長の阿部幸作先輩〔慶大〕も、しばしばグラウンドにお見えになりました。熱心であり、また怖かったのが田中健三先輩で、その姿がグラウンドの一角に現れると、それまで楽しく？ 練習していた部員一同が一度にシェンとなり皆チリチリしたものです。

全国大会予選の対天理中戦は、当時の語り草となった激戦でした。前半風下で苦しんだ天中は、11―0とリードされ応援団をヤキモキさせましたが、後半風上となり奮起しました。負傷後ののはち巻き姿も痛々しい4年生井上（川上）泰男〔立教大，ウィング〕の強引なトライもあって、追撃に追撃を重ね、ようやく11―11の同点とした時は、私は思わず5年生の石田繁次郎〔関学大，ロック，ゴリ〕

と抱き合って喜んだものです。後で聞いたのですが、熱血漢若田応援団長は熱狂の余り応援旗を持ったまま、花園ラグビー場のスタンドからグラウンドへ落ちたそうです。波に乗った天中は5年生故寺戸敏郎〔関学大，ロック，ブーヤン〕がポスト直下へ飛び込んで決勝点をあげ、16―11で逆転勝ちをしました。ようやく3年目に宿敵に雪辱したわけです。勝者も敗者も涙にぬれて、天理中のフィフティーンが応援団の前に頭を垂れて泣いているのを見て、勝負の厳しさというものを痛いほど感じました。全国大会ではやはり宿敵同志社中と対戦し、大会随一の好試合を演じましたが武運つたなく小差で敗れました。

昭和7年に入り、34期卒業生の送別会の席上、当時のコーチの30期故小野木唯夫先輩〔浪高〕が私に「デラもなんやかんやいわれてたけど、いよいよ卒業やね」としみじみといわれ「いえ、まだ4年生ですよ」と答え、両者ともびっくりしたのを覚えております。毎日のように熱心にコーチしておられた小野木先輩ですが、私を最上級生と思い込んでいたようです。勉学とラグビーとは至って弱かったのですが、当時天中一の強心臓とアクの強さを、自他ともに許していたアクデラの私でしたので、コーチの目にもそう映っていたのでしょう。事実、次の年はFW7人までが卒業し、私1人だけが残ったわけです。

このころは毎年、斉藤権三先輩〔サイゴン〕のお世話で、夏合宿は仁川の関学グラウンドで行い、関陽館で宿泊していました。34回生

は北条主将を始め、石田繁次郎、塩田克巳〔フッカー〕、故寺戸敏郎、故林武夫〔バック・ロー〕と5名が関学へ進学しました。私の記憶では当時の関学大ラグビー部は、斉権入学後に形が整い、昭7年ごろから急速に強くなったようです。昭4年ごろには天中校庭で対関学戦がありましたが、まだ天中が勝っていたように覚えております。大高とも毎年、秋のシーズン開幕の第1戦が定期戦となっていたようですが、いつもほぼ互角の好試合だったように記憶しております。

いよいよ35期生は故島田重道先輩〔31期〕をコーチに、病氣回復した故斉藤正三を主将に故村山純〔関学大〕をマネジャーに、荒賀嘉世、井上（川上）泰男、今井秀典〔神高、ウィング、チン〕尾崎博、木村芳生〔早大、スクラム・ハーフ、コーナー〕故志度忠雄〔フッカー、2代目ルート〕故棟久享祐〔フッカー〕、私という面々で出発し相当な好チームを編成しました。4年生に優秀なプレイヤーが多数いたお陰です。

宿敵同志社中に雪辱し、北野中にも接戦のすえ勝ちました。打倒天中を多年の念願とし、まだ天中に勝った事のない北中は、今年こそはと必勝を期して花園に参りましたが、斉藤主将が快走し北中の主将がこれを最後まで追いつめるという、両者ファイトむき出しの場面がありまして、斉藤主将執念のトライとなり辛勝しました。

後に早大へ行ってから、当時の北中から早大へ来て名C・T・Bで鳴らした小寺祐吉君が

語っておりました。

「下級生のころ全校生徒こぞって応援に行ったが毎年天中に敗れ、沈む夕陽のなか校旗を垂れて敗戦の歌を歌うのが、まことに無念やるかたなく、どうしても天中を負かしてやろうと自分はラグビー部に入った。だが自分の在学中にはついに天中に勝てず、後に弟の時に初めて天中に勝ち、喜びに浸ったものだ」との事です。かつて同中打倒の執念に燃えていた天中と同じですね。

全国大会の予選はやはり天理中と対戦し、36回中臣（上田）国彦〔早大、ウィング、道明寺〕が快心のトライをあげましたが、天理の塩見君もトライを返し3－3で、ラグビーとしては珍しく延長戦をやるという大激戦となりました。スクラム・ハーフの木村芳生が負傷し何回もかつぎ出されるというものすごい激闘で、延長戦に入ってから、不運にも木村の退場中のゴール前で、スクラム・サイドを抜けられて決勝点をうばわれました。控室で全員無念の涙にむせんたものです。

これをもって、あとを優秀な36回生にバトンをゆずり、酒井竜平主将〔東工大、フルバック〕以下奮闘のすえ、天理中に雪辱して全国大会に出場してくれたのは皆様ご承知のとおりであります。早大へ進学した斉藤、木村、私と同じ下宿にいましたが「天理に勝ち、全国大会出場」との36回生の喜びの電報が届いた時は、3人、心の底から快さを叫んだものです。

私は30歳の時に終戦という、満洲からマレ

ーまで転々とした苦しい暗い青春時代を送りましたが、ラグビーに打ち込んでいた時だけが楽しい青春の思い出として残っております。

エール交換や、大試合の前に控室で全員で歌った

勝つは体力 気力のしるし

天中健児の気概を見よや

雄々しき理想のリズムの声に

立てよ 振えよ 健男児

フレー フレー 天中

フレー フレー 天中

この歌が、還暦を過ぎた今でも、糖尿病と高血圧に苦しむ私を激励し、振るい立たせてくれる源となっております。

最後に長くラグビーの道をともしたファイトのかたまり故斉藤正三や、天中一の人気者として常に笑いの渦を巻いた親友の故志度忠雄（ニューギニアにて戦死）を始め、幾多の故人のご冥福を切にお祈りして、この筆をおきます。

〔付記〕

質実剛健の校風とともに当時の天中生は皆ラグビーが好きで、毎年開催される学年ごとの対組ラグビー校内大会は盛大を極め、部員以外にもスタブプレーヤーは多士済々で、ラグビーが天中の校技といってもよいほどでした。上級学校へ進学してからも、そこにラグビー部がある学校であれば、天中時代に部員でなかった者でもラグビーの名門天中出身ということだけで、無理やりラグビー部に入れ

られたものです。

桃陰ラガーの思い出としては、早大在学中帰省の折、時々出場させていただきましたが、そのころは36回の故山脇一見（重雄）〔バック・ロー、テッキン〕がなかなか奮闘しておりました。昭12年ごろと思いますが、広島へ多数で遠征した楽しい思い出があります。第1日は崇徳中OBを破り、第2日はメーンイベントの広島ラグビーにも快勝しました。この両試合はベストメンバーでしたが、呉ラグビーとの1戦が年長組も出たため惜敗しました。当時の早慶組だった故伊藤英夫〔34回、慶大、ロック、^{ドゥモワ}擲猛〕や斉藤正三、木村芳生、私など若手組が応援しながら、若気の至りで自分等が出ておれば負けはせぬのになどといって残念がったものです。

ご参考までに、早大ラグビー部進学者の事に触れますと、古くは23回西野綱三があり山東（荒賀）嘉樹、長尾寿三とつづき、故斉藤正三、木村芳生、私について36回は中臣（上田）国彦、故木塚長敏〔スタンド・オフ、ドク〕故高橋信之〔サード・ロー、三本〕松元秀明〔マツゲン、天中時代ラグビー部でなかったが早大入学以来、スクラム・ハーフとしてよく努力して主将となる〕と多数を送り、40回故矢辺（鈴木）昌雄〔C・T・B〕41回鹿子木聡〔バック・ロー、主将となる〕、46回新村郁甫〔FB〕、のちには高7回宝田雄弥らと、私以外は名プレーヤーとして早大で重きをなしました。昨今、学生ラグビーの王座を守っている早大も、これら天中出身者が現

役、OB時代を通じて多年の貢献をして来た事が、今日の隆盛の一助になっていると信じております。早大関係者の天中出身者評は「皆、一風の変わり者が多く、頭の良さ？と、一本筋金の通ったところはたいしたもの」というのが一致したところのようです。

第3軍の記

なつめ
棗田 信夫(35回生)

大正11年創立の天中ラグビー部に入れてもらったのは、昭和3年11月上本町9丁目の女子師範学校跡の仮校舎に学校があつて、15銭のライスカレーを薄暗い立ち食い食堂で食べていたころである。ぼくは1年5組にいて、2年生だけはなぜかカーキ色の制服を着ていた。廃校の跡として満足な練習もできず、時折烏が辻町の旧大阪高等商業学校の校庭を借りて練習をしていた。

当時天中ラグビー部は大変強く、全国に覇を争い現在の甲子園野球場で行われた翌昭和4年1月の全国中等学校ラグビー大会では好敵手、同志社中学と優勝をかけて争ったのを覚えている。この前後のことはきつとどなたかが書かれると思いますので略記しますが、あの大鉄さん下のスタンドから見る5年生の斉藤、井上、神坂、荒賀、奥田といった猛者、4年生のプレスキッカー田中さん、フロンカー安部さん、3年生の正野、布袋、長尾、伊藤（板裏をはいてボールコースを記録にとっておられた）さんらの悲壮な雄姿が今



昭和5年春

（後列左から）伊藤、野長瀬、？、持田、荒賀
（前列左から）北條、石田、棗田、潮田、斧原

さらくっきりと眼前に浮かびます。

さてぼくは背も低く、足も遅く1年生と2年生の前半は第3軍所属であつた。1軍、2軍の30人がコンビネーションプレーにはいるとゴールポスト裏でアメリカンフットボールつまりスクラム拔のラグビーをやっていた。もちろん試合とてなく、一度天王寺師範付属小学校チームと、また翌年であつたか、オフシーズンの水泳部チームと相まみえたのを覚えている。9歳年上になる兄の話をきくとはじめはラグビー部と水泳部は同じメンバーであつたそうですが、その兄に連れられて奈良公園での天中OB対当時大軌電鉄といつていた近鉄の試合を見に行つた時、人員が不足でフルバックをやらされタックルだけはしたのを覚えている。これはだれも知らないと思う。3年生の時中尾保氏設計になる新設の花園ラグビー場でこの近鉄チームと戦い、その中に

2年前の少年フルバックを覚えていた人がいて肩車にのせられとても恥ずかしかった。ぼくはこの時、グレーとオレンジの正式ジャージを着てフランカーとして初の出場であったが、田中さん（おやじ）や安部さん（おたやん）の永年のしった激励も空しく、スクラムサイドを抜いてくる馬のように大きい（と見えた）足に飛び付いて一ぺんにはね飛ばされた。すぐ後「ひぐま」というあだ名の大きい4年生のセカンドロー（米谷）がタックルを決めてくれた。

卒業まで在学していたらぼくはこの軽量の克服に工夫をしたかもしれないが、3年生を終わって僕は天中をはなれて上京し、ラグビー部の思い出はわずか2年程で終わる。短い在籍と練習ではあったが、それは戦前戦後のぼくの人生の大きな支えであった。そしてその理由が今なお解明できない。あれ程短い期間の経験がこれ程大きな影響を人生に与えるとは不思議に思う。いまだ60歳の肉体の左右の肩は水平でないし、あばら骨も右が高く左が低い。広いグラウンドで瞬間、瞬間に見る30人の敵味方の分布と、それへのとっさの判断と処置は、くせというか性格の一部となって社会生活、私生活の尽きない推進力となっている。テレビを見るにも、よい試合は座っては見れない、映像の1・2メートル前に仁王立ちになって腕組みをしてみる。冬のたのしみの一つである。

過日、桃陰ラグークラブよりの書信にて、元気者、志度忠雄、秀才島田富士郎、よく神



故 斎藤正三氏

の木の家で皆と遊んだ斎藤正三の3君がすでに他界の事を知り、いつか花園で応援団席で会えるわ、と思っていただけに悔しい。機を得て墓前に立ち、故人をしのびたい。

最後にぼくのいる府中市は新幹線も停車する福山市より国鉄またはバスで50分ばかりの所です。皆さんご通過の折は思い出して是非寄って下さい。

いまなお燃える火

竹内 弘(36回生)

昭和9年の全国大会出場（大阪紀和代表）予選（花園）は、準決勝天理を6対3、決勝北野を13対5と連破、大会（南甲子園競技場）は京都一商と対戦、再三敵ゴールに迫りながら8対8の引き分け、抽せん負けを喫しました。酒井竜平主将の見事なゴーキックが印象に残ります。往時を回想、つたない短歌を詠みました。

仄青き月ののぼりし校庭に楯円球追いぬいた駆けりつつ

全国の制覇をめざす大会の宿舎に聴けり皇太子誕生

ともに泣きともに笑いしラグビーの同期の
友のなかばは逝きて

40年遠さりゆけどわが胸の底に燃ゆるもラ
グビーの火は

尽きぬ魅力

大橋 甫清(37回生)
(旧名・良太郎)

ラグビーを知り、ラグビーをやってよかった。
これはラガーたるものだれもが感ずるものである。
それ程ラグビーの魅力は尽きない。

そして人生の苦楽は、ラグビーを満喫し、
また満喫したものにとって、すべてが相通ずる
ものであることがわかる。

一つの球を追う無私の心境は多くのスポーツ
に見られるが、あらゆる部面を兼ね備えた
スポーツはラグビーを置いて外にない。それが
人生においていかに必要であるかを体得する
ことが出来る。母校が教育上の主眼として
校技に取り入れたことに敬服し、かついつま
でも続けてほしいものである。

上級校に進学したものが天王寺出身という
ことだけでラグビー部に入部を勧誘されたとい
う経験は多くの方が持たれたと思う。母校
が日本有数の進学校ということもさることな
がら、いつまでもラグビーの名門校として維
持してほしいものである。

自分のことを述べて申し訳ないが、小学校
時代、病気がちで弱かった体がふとしたこと
からラグビー部に入り、練習で4年生の時か

がとをネンザしたので一時母親から止められ
たこともあったが、部長の言と私の意思で続
け、恒例の平野往復全校マラソンにゆうゆう
トップを切って母の涙を見た感激は今でも忘
れることが出来ない。ひいては軍隊の当時の
厳しい訓練、戦闘に人一倍耐え抜くことが出
来たのもそのお陰だと思っている。

在学4年生、昭和9年南甲子園の全国大会
で京都一商と引き分け抽せん負け、翌年予選
で前半2 ゴールリードしながら北野に逆転さ
れ、決して輝かしい成績ではなかったが、神
戸商大に進学して同校の黄金時代を作ったこ
とは、天王寺出身者として輝かしい戦歴を持
つ先輩後輩の各位にせめてものなぐさめとし
てもらいたい。

勉学もラグビーもということが我が母校出
身者の誇りであり、これを維持することこそ
伝統ある天王寺高校の後継者であることを肝
に銘じて在學生、入學生の諸君にお願いす
る。同期の伊藤、高田、村田、朴、宮崎の各
兄に代わり、^{せん}僭越ながら指名を受けたので諸
君の代弁者として以上の提言と報告を本誌に
捧げる。



前列左より
平川，古市，
丹後，虎尾，
古沢，小西(信)，
村田，浜口

後列左より
奥井，蒲生，
宮崎，朴，
伊藤，高井，
高田

ソフトな合宿時代

高井 正一(38回生)

私の天中ラグビー部に在籍中の思い出をたどってみましょう。なんといっても40年も昔の事ですので間違いが多々あるかと思いますが、お許しのほど。

昭和9年度 監督阿部幸作氏，主将伊藤素義氏，副将高田善治氏，他の5年生に村田義幸氏，大橋良太郎氏，朴斗鉦氏，宮崎義男氏がおられ4年生には蒲生安夫君，浜口隆三君，丹後康一郎君，吉田俊夫君，平川信次君，末永新二君(故)，佐原博夫君(故)，坂本義夫君(故)と私の9人。3年生に小西信二君，石井一夫君，奥井一夫君，古沢潤三(故)，塩見茂夫君(故)，小西秀夫君(故)，都志善治君(故)，2年生に矢辺昌雄(旧鈴木，故)飯田彦弥君ら総勢25人位と記憶しています。

夏合宿は関学グラウンドで現関学高等部横の関生寮(個人経営，現在もある)に泊まりこみ，実に猛練習でした。先輩は若手が大学して来られ当時早大の斉藤正三氏(故)，加藤清氏，木村芳生氏，慶応の伊藤英夫氏(故)，関学の北条誠司氏，林武夫氏(故)，寺戸敏郎氏(故)，石田繁治郎氏，荒賀嘉世氏，関大の内山寧隆氏，斧原保幸氏，東大の正野虎雄氏，大高医の浜口隆氏，大外語の広田郷三郎氏(旧潮田)等若手が中心であの暑い関学グラウンド(現在理学部が建ちグラウンドは無し……ラグビー場は校外にあり)で午前は9時より午後は2時より，猛練習でしごかれ，5日目より高熱で寝る者が出だしはじめ，7日目に至って主将の伊藤さん始め25人中半数以上(私も含む)が高熱で寝込んで練習続行不可能という状態になりました。

先輩団が協議され遂に10日間の予定が7日間で打ち切りという事態になってしまいました

た。先輩団よりの指示により合宿打ち切りを宣言する。伊藤主将の言葉は悲そうそのものであり、今も耳に残っております。

私は日焼けで黒く、ホオは落ち込み大きなボストンバッグを持ってフラフラで家に帰りました。母がその私の姿を見て「ゆうれいが帰って来たのかと思った」と驚いたのを覚えています。

この様な状態でも1人の退部者もなく3日間の休養のあと一同そろって天中グラウンドに顔を見せ再び練習を始めました。

その年の大阪予選は北野に敗れて全国大会出場の夢は果たされなかった。

昭和10年度 監督斧原保幸氏、主将蒲生安夫君、副将浜口隆三君、この年になって3年生の飯田、矢辺(旧鈴木)の他に太田俊治、佐野格次、四方緑太郎、塩田悌三、砂田欣也、西原篤介、水上哲之、吉松嘉寿夫の諸君が入部してまいりました。

この年は若い先輩より古い先輩が非常によく面倒を見て下さいました。私の想像ですが昨年は若い先輩に任しておいたらむちゃをしよったから、今年は古い先輩がやろうと決められたのではないかと思います。すなわち井上二郎大先輩(17回故、当時関西ラグビー協会会長)を筆頭に巖栄一氏(22回)、寺戸猛郎氏(22回)、西野綱三氏(13回)、阿部幸作氏(25回)、三島実氏(26回・故)、平井宏氏(27回)、杉本彰氏(28回・旧長沖)ら古い先輩が春の練習よりグラウンドにお見えになり、昨年のハードの練習を止め今年はソフトな練習をや

ろうということになったようでした。

ラグビーの基本はランニングだということで私たち全員に陸上スパイクを買って頂き、西野剛三氏(23回、天中時代陸上部、早大時代ラグビー部)が直接ランニングについて指導をして頂きました。また、ある土曜日の練習終了後ラグビー部全員、帝塚山の井上二郎氏宅に招かれ、広い美しい芝生の庭でスキヤキパーティーを開いて頂き、夜は16ミリの英国の「ラガー」という映画を見せて頂いたりしました。

夏合宿は加太のゑびす屋という旅館(現在もある)で7日間行われ、グラウンドは加太駅前近くの小学校のグラウンドを借りましたが、狭くもちろん正規のラグビーのスペースはとれない。また先輩は監督の斧原さんの他1人も来られないというソフトな合宿練習でした。しかも中日の1日、近くの深山重砲連隊の見学があり、大阪の天王寺中学生徒ということで特別扱いを受け案内役も大尉(名は忘れました)が付き、当時としては全く想像も出来ない山陰に据えられてある要塞砲の実地訓練を見せて頂いたのが印象に残っております。練習が終わり旅館に帰り夕食のあとは自由時間で、斧原氏が持参されたポータブル蓄音機でレコード鑑賞等、その時の曲は『ポエマタンゴ』『奥様お手をどうぞ』等、今でもその曲を聴くと加太合宿が思い出されます。夜は淡島神社近くの防波堤まで出掛けて矢辺昌雄君(旧鈴木、故)らと西瓜を割って食べたことなど思い出の一つです。旅館に「おげん」

さんという私等と同年輩の娘さんがおり、だれかがその後も交際をしていたようでしたが、詳細は知りません。とにかく昨年の関学での合宿と打って変わった楽な合宿でした。

その年の成績はというと大阪予選で天理に敗れ、2年連続全国大会出場が出来なかった。思い出しますが天理戦の前の練習にて5年生9人中5人が負傷し試合に出場出来ないという悲運に遭いました。

副将の浜口君（スクラム ハーフ）は肩脱臼、丹後君（スタンドオフ）は足関節脱臼、吉田君（バックロー）末永君（フロントロー）の負傷名は忘れましたが、出場不可能、また私（セカンドロー）は肋骨骨折。

主力の5年生5人を欠いて試合にのぞむ蒲生主将の胸中はどんなであったろうかと思いました。結果は28?—0にて惨敗し、私達は古い先輩の労苦に報いることなく完全に期待を裏切ってしまいました。

思えば昭和9年、10年は天中ラグビー部の歴史において全く低調な時代であったと思います。この低調の時代に4年生、5年生をすごした私はとても思い出を書く気にはなれなかったのですが、誠に祖末な思い出ですが一筆したためました。

昭和9年1月の全国大会出場後の新メンバー（5年生2名参加、虎尾氏の他にもう1人おられたのですが試合終了後ロッカーに引揚げられたのでこの写真には入っておられない、どなたであったか思い出せません）

4年生の伊藤素義氏、高田善治氏、朴斗鉦

氏、村田義幸氏と3年生の中では蒲生安夫君だけはレギュラーとして試合の経験者ですが他は全部初めての試合でした。後の私のラグビー生活の事を考えると忘れられない緒戦でした。

対敵傍中（19—0? 勝ち）

この写真の中の虎尾芳男氏と古沢潤三氏（慶応）が戦死され、他は全部お元気と聞いております。ただ古市功氏のみ消息不明です。

『古市君 通称 タヌキ は4年進級試験に失敗し学習院中等部に転校（祖父男爵古市六三氏）のち高等部より京大に進み、同和鉱業の関連会社の役員でいると聞きましたが消息はわかりません』

先輩、後輩が一体に

小西 信二(39回生)

天高ラグビーが誕生して50年を迎えた事は桃陰ラガーの1人として皆様と共によろこび大いに祝福したいと思います。

若い中学生時代に楯円球にそそいだ情熱と喜怒哀楽の感激のいくつかを、今、次から次へと目に浮かぶまを思い出し、私たちの現役時代の前後の皆さんと一緒になつかしい日々を思い浮かべていただきたいと思います。

昭和7年、斉藤正三氏が主将であった時、私は1年生で恒例の校内学級対抗にボールを持って走り、これが機会でラグビーの魅力にとりつかれたものでした。当時、天中は大阪外語、大阪商大（市大）、大阪高校など上級



前列左より 伊藤、小西(信)、太田
後列左より 小西(秀)、平川、古沢

学校などと堂々と試合をしており、天中ラグビーは強いなあと驚き入部の決意を固めたものでした。

昭和8年、2年生の時、酒井竜平氏の主将時代でマネジャーの広瀬氏の熱心な勧誘で入部し、レギュラーの練習相手となり、山脇氏(テッキン)高橋氏(サンボン)中村(チスーヤン)虎尾氏(トラ)竹島氏(金時)らの第1軍の人達のように早くなりたいものだとがんばったものです。秋の定期戦に北野中に負けた時は、レギュラーの人達は学期試験中にもかかわらず涙ぐましい練習をして努力され、大阪予選には奮起して、大阪代表となり優勝された事が強く印象に残ります。当時コーチとして伊藤泰運氏(インジ)のスパルタ訓練、また斧原氏(ブツアン)内山氏(チャマ)潮田氏(ルーちゃん)ら諸先輩のハッパ

が有名でした。

昭和9年、3年生の時は前年10余人のラグビー部員が卒業した後の年で(インジの弟)伊藤素義氏(モツチン)が主将として引き継がれ、村田氏(ピッグ)高田氏(エテ公)大橋氏(マツタン)等の同期生の協力を得て活躍されましたが、利あらず予選と定期戦を兼ねた対北野中戦に1敗地にまみれたにかい時代でした。

昭和10年、4年生になって蒲生安夫氏(ヤッサン)を主将として、佐原氏(バッテラ)吉田氏(バチン)高井氏(ドカン)浜口氏(カンコー)らの前年度レギュラーが残られ、阿部幸作氏、井上二郎氏ら大先輩を中心にオーナー的な力の入れようでチームは活気づき、予選前日には温泉風呂(今でいうサウナでしようか)にまで入れて頂く心のくばりようで、大阪代表は軽いと十分全員自信をもって望んだのですが、天理中が全国大会優勝した時の相手だったので、運悪く敗退した事を思い出の一つとして残っています。

昭和11年、5年生の時、私は主将にえられ、同期には塩見君(ダイコン)小西秀(アゲパン)石井氏(ムケ)奥井氏(アカテン)らがチームワークよろしく前年度以上に期待を持たれたチームでした。井上先輩、阿部先輩も引き続きコーチングスタッフのOB連の中心となり、積極的な指導、協力に惜しみなく努力され、フォワードには伊藤英夫氏(慶応)またバックスには阪口二郎氏(今中OB早大出)を専属に手ほどきを受け、大会予選

決勝までは無敗に近かったのですが、
またも超中学級のスタンドオフ（角谷）を持った
天理中に無念やるかたなく惜敗したのでし
た。

以上簡単に天中ラグビー生活を中心にして
更に思い出の強いものは、先輩、後輩一体と
なって過ごした関西学院グラウンドの夏季合
宿、また対北野戦、対天理戦には全校生徒が
1週間前から体育館で応援歌の練習を行い、
試合当日は花園ラグビー場で向かい合わせに
なってやる両校全生徒による応援旗を打ちふ
り、手拍手、校歌、応援歌をささえた若い熱
気あふれるあの状況は、天中卒業生たるもの
は一生涯その脳裏から消え去る事はないでし
ょう。

創立50周年に当たり、この雄々しき伝統あ
るラグビー部の将来ますます栄ある事を願う
次第です。

OBの温かい支援

田 中 進(39回生)

ラグビー部創部50年記念誌に一文をとのこ
とでありましたが、生来の筆不精のこと、ラ
グビー部出身でもない私に、何も書くような
ことはないとお断りして来ましたが、場所を
空けて待っているから是非にとのこと、何
んとか埋めなければならず筆をとりました。

私が天中に入学したのは、昭和7年4
月で、その当時は対北野定期戦は無敗であま
り問題はなかったようですが、2年、3年の

時にはこの定期戦に初めて連敗を喫し、それ
以後我々一般生徒にも関心が深まり、応援に
も一段と熱がこもったような気がします。勝
ったときは早く引き揚げられたのですが、負
けたときは、北野側の応援団が帰ってしまっ
てからでないと帰れず、陽が落ちてうす暗く
なった花園で、応援団リーダー（各部主将）
が、応援旗を焼いて無念の涙を流し、来年度
の必勝を期していた光景は、今も忘れること
が出来ません。

私が天高に奉職したのは、新制高校発
足の昭和23年の6月からで、天中卒業生はラ
グビー部顧問をやるんだということで、顧問
になった訳ですが、部長は坂田先生で顧問に
相馬先生がおられたと思います。すぐ1年の
担任をしましたが、この高3の学年は、名に
し負う猛者ぞろいで、何かと話題を提供して
くれたものです。私の担任をした最初の学年
でもあり、一番印象が強く残っている学年で
す。特にラグビー部の諸君は、全国制覇を成
し遂げた学年で、一層その感が深いもので
す。この学年は近畿大会優勝、国体は予選の
決勝で淀工に負けましたが、全国大会予選は
ほとんどシャットアウトかそれに近いスコア
で勝ち進み、全国大会に出場しました。

1、2回戦は勝てても、全国制覇まではち
ょっと無理だろうというのが、大方の見方では
なかったかと思いますが、準決勝で北見北
斗高に接戦のすえ決勝戦に駒を進めるように
なってはじめて、全国制覇の夢が大きくふく
らんだような気がします。優勝出来て、表彰

式で自分の身体より大きいような重量感のある優勝楯を受け取った青井主将の姿と、生徒と一緒に練習に心血をそそいで頂いたコーチの西川さんの人一倍の喜びようが、強く印象に残っております。

その年の秋に宇野先生が来られ、お陰ではとんど1年おきに全国大会に出場出来たようですが、全国制覇への道はなかなか険しいようでした。当時対北野定期戦は毎年12月中下旬に行われていましたが、この定期戦は両校共負けられないという必死の戦いとなり、選手が傷ついて全国大会にさしつかえるということもあって、（もちろんそれだけではないでしょうが）昭和32年度から10月に繰り上げられました。それ以後全国大会出場の間隔が4、5年にあいて来たようで、皮肉な現象という結果になっています。OBの方々の蔭に陽にそそがれる絶大なお支援に対しても、なんとかその間隔を少しでも短くするよう部員一同の発奮が強く望まれます。思いつくままに、赴任当時の思い出を主に記して来ましたが、つまらない文章で恐縮ですのでこの辺で止めることにして、最後に桃陰ラグークラブの皆様方の変わらざるご支援を厚く感謝し、ご発展を心からお祈り致します。

（ラグビー部顧問）

黄金時代へのかけ橋

西原 篤 介(40回生)

半世紀にわたる伝統の中のひと駒に加えさせて頂いた者として、在部中の事を回想しております。何分にも1期上の小西信二兄というラグビーの虫的存在が余りにも大きく、ことラグビーに関してはすべて兄に一任という極めて横着な考えでおりましたのと、復員のため、わずかながらも手元にあった資料、写真等を焼失しておりますので、ただ37、8年前の記憶をたどりながら書き記す次第で悪しからずご了承願います。

私どもの5年生の時は、キャプテン太田俊治、バイスキャプテン飯田彦弥、マネージャー井上平治郎の諸君により運営されておりました。個々にはファイターぞろいでありながら、宿敵北野、天理に1勝もあげ得ずに終わった事を今さら残念に思っています。一つには前年に小西兄以下7名のレギュラーが卒業され、さらにエース鈴木君が早大に進学し都合8名の抜けた穴が余りにも大きく、個々の力では補いきれないチームプレーの拙さが目立った1年でした。しかしながら、後続には中西、鹿子木、柴垣の諸君をはじめ、有能な選手が続々育ち、後年に楽しみをもち得る過渡的な年であったといえましょう。事実予想通りの戦績を年々挙げられる結果となりました。

そのような苦難の年でありながら、桃陰の

火をかき立てようと諸先輩が終始熱心にご指導願った事を今さらながら感謝しております。戦績に比べて同学年には塩田、砂田、四方の諸君を始め、秀才も多くおられた反面、悪童も人後に落ちず、ラグビー部在籍の功（？）により、罪一等を減ぜられて危うく退学を免れた人物（だれかな）もあり、部長の畑中ジャンボ先生にご苦労をおかけした点では、前後の学年を通じて最高ではなかったかと自負しております。

何はともあれ後年の黄金時代に通ずるかけ橋になり得た事の喜びと誇りを感じる次第であります。過日も小西兄から50年史投稿の原案について電話を頂戴致し、相変わらずの情熱をもってまくしたてられ、この人こそ本当に桃陰の虫だと痛感致した事を付記し、拙文を終わります。

まず自分に勝て

中西 一雄(41回生)

ラグビーというスポーツを知らなかった私は、昭和9年天中に入学して上級生の楯円球を蹴っては追い、かけ回っている姿を見てもあまり興味もわかず、野球のクラス対抗に熱中していたが、なぜラグビーに取りつかれたのか、それは花園ラグビー場における対北野中学戦、天理中学戦の応援に始まったといえましょう。残念ながらあの負けたくやしさのみが私の全身を震わせ、ファイトをかきたて上級生は現在負けているが、将来必ず自分の

力で勝ってやろうと決心させました。かといって自ら進んで入部の意思表示をする勇気もなく、休憩時間、放課後にはボールになじむ程度で、特に放課後は先輩部員の練習を見守るという程度であったと記憶しております。

2年生の3学期に吉田先輩（5年1組秀才組）の強引な勧誘により入部することになったのですが、その際勉強とラグビーが両立するか否かの疑問に対し、吉田先輩は“本人の心構え一つで左右される”との明確な回答に接し、私は十分自分自身を納得させることが出来勇躍入部しました。

いよいよ春の本格的な練習に入りグラウンド上のラグビーに専念していたが、ある日阿部幸作先輩がグラウンドに来られ訓示がありました。私は先輩の話は技術指導であると期待していたが、技術的な話はほとんどなく、精神訓話に終始した事を今でもよく記憶しています。すなわち“ラグビーを通じ精神修養をし、立派な人間となれ”とのことでした。この時こそ若い私の心に植え付けたものは、相手に勝つことではなく、まず自分に勝つことであり、それが将来の人生観につながるものであるということに気がついたことである。これこそ天中ラグビー部の伝統を支える柱の大きな一つであると確信しています。入部早々にかかるレクチャーがなかったなら、私のラグビー生活は線香花火的なものになったと思います。

その年（昭和11年）の春の近畿選抜大会には左のウイングスリーコーターとして出場、

H B 飯田，武田，T B 中西，水上，鈴木（後に矢部），塩田，F B 古沢のメンバーであったと記憶しています。とにかく、花園第1グラウンドで私はどのようなプレーをしたか全く記憶なく、ただ武田先輩に試合中ずっと叱咤^{シツタ}激励されていたことだけをよく覚えています。

昭和11年，12年度（私が3年，4年生）は小西（デンボ），小西（モーヤン）のキャプテンのもと奮起のかいもなく，全国大会出場を阻止され，特に11年度は小西，塩見ら大型FW，武田，鈴木（矢部），塩田，古沢のバックス陣をもちヘッドコーチには阪口氏（早大出）伊藤英夫氏（慶大出）を迎え意気揚々たるものがあったが，いかにせん角谷（早大），の率いる天理中に惜敗したのである。

昭和13年度に入り主将に任命され，新チームがスタートしたのであるが，スタートに当たり副主将であった鹿子木氏と合意に達したことは，チームワークによる総合力の発揮と特定のゲーム運びによる得点力の養成であった。部員の中に傑出したプレーヤーもなく，体力的にも他チームに比し優位差がないことを認識し，ただ総合力，機動力の養成に主眼を置いた特定のゲーム運びの習得については，11年度阪口コーチの指導による早大式スイングプレー（ユサブリ戦法と称されていた）にしぼる考えでいたところへちようど早大出の木村芳生先輩の監督が決定し，意を強くした次第でありました。

知将格の鹿子木，下級生の面倒をよく見た河合（故人），マジメ徹の松岡らその特徴を

いかんなく発揮し，木村監督，諸先輩の心技両面の指導のもと着々と実力がついていった。シーズンが深まるにつれ，木村監督が勤務の都合でグラウンドに来られない時には寂しくて，練習後，鹿子木，河合両君と共に自宅を訪問し種々レクチャーを受けたものである。訪問のつどシューマイやラーメンをごちそうになり，そのウマかった事は今でも忘れられない思い出の一つである。ごちそうになったことで忘れられないのは大試合の前々日と記憶するが，練習後，井上先輩宅における選手激励夕食会である。私は現役3年間お邪魔しましたが，ご家族全員でもてなしをされ我々を激励下さった故井上二郎先輩に満ここの感謝の意を表するものであります。

さて全国大会予選では最強といわれた天理中を準決勝で8－6と破り優勝戦では北野中と対戦したが8－6で涙をのんだのであります。大江（日大，近鉄）の率いる天理中を軍門に下し我らフィフティーンは俊足上原（慶大）を擁する北野中をタイムアップ寸前まで圧倒していたが一瞬の内にゴールポスト真ん中にトライされ優勝の夢が消えさったのである。私はその時の様子が明確に脳裏にきざみ込まれているので，ここにご披露したいと思います。

試合経過はタイムアップ前5分までは2トライ6－0にて押していた。この2トライはいずれも前述の新チーム発足からの念願であったスイングプレー（ユサブリ）によりルーズスクラムからHB河合，柴垣（兄），TB久保

田、中西と渡り左ウイング松岡が左中間に俊足をとばし見事な快心のトライであった。タイムアップ約2分前天中ゴール前25ヤード真ん中で天中フライングハーフのオフサイドでペナルティーゴール6-3となる。キックオフのボールがダイレクトでラインアウトとなりセンタースクラム、センタースクラムからボールは北中に出てスタンドオフがキック、ラインアウトになると思われたボールが逆にインフィールドにリバウンド、北中バックスがそのボールを取り独走トライかに見えたが、ゴール寸前バックアップした天中右ウイング平田が見事タックルしたが、ルーズからのボールを北中勢にトライされゴール成り敗戦となる。一瞬にして明暗ところを分け泣くに泣けない無念の一戦であり、先生方、諸先輩、応援の皆様の期待に添えず面目なき次第でありました。脱衣場に引き揚げた我々に対し、阿部先輩は大声で“人生とはこんなものだ”と大声で叫ばれた声が今でもこの耳に残っている。阿部先輩も心の中では大いに泣いておられたと思います。

人生意気に感じ天中ラグビーのために精進した私であったが、最後の気のゆるみということに気が付かずにフィティーンを引っ張っていた事を今でも悔しく思っています。タイムアップのホイッスルがなるまで全力投球をしなければならぬことは百も承知のはずであったが、ちょっとした気のゆるみが全員にあったのではないかと、また主将として気分を引き締めることを怠ったものであると深く反省



し、現在に到るまで、その教訓を胸に秘めているものであります。

かくてこの悔しさが後輩に受け継がれ、共に泣いた柴垣(弟)、若山、浅岡、北江、伊藤、西村、内海らの諸氏の手により昭和17年の全国制覇が果たされ、かかる諸氏の努力に対し満こうの感謝の意を捧げるものであります。

卒業後慶応大学に進学し、全国高専大会優勝、大学全勝を経験、終戦後、東西対抗出場、関西ラグビー、神戸ラグビー、KYRC など数々の思い出多い私のラグビーであります。青春時代をラグビー一途に過ごした私にとって、心の支えとなり、また現在の処生観も天王寺中学で学んだラグビー精神にありと確信しており、阿部先輩をはじめとする皆様のお陰であると深く感謝しています。

天中ラグビー部50年史編纂にあたり村田委員長始め皆様のお骨折りに対し感謝すると共に伝統あるラグビー部の繁栄を切に念願するものであります。

男の涙は夜流れる

鹿子木 聡(41回生)

ビー、主審阿部吉さんの笛がまた鳴った。

天中陣25ヤード中央あたりの混戦だった。この日私のブレイクからフォローへのスタート、コースが、私自身では好いカンで動いていると思っていたのだが、阿部主審の目には私のプレーが、相手バックローの出足を妨害するとして、何回笛を吹かれたことか。

連戦連勝、その年の天中は夏合宿以来無敗街道を進んでいた。だが強力チームではなかった。昭和17年全国制覇した柴垣、若山君らの時代には遠く及ばないし、いってみれば戦後30年前後の青井(弟)、川口、黒野君ら当時の力量と同じぐらいのものだった。遠山と村上を中心としたFWは軽量だし、バックスも俊足ぞろいとは、ひいき目にみてもいえない。河合、柴垣(志)のハーフ団のみがA級といえるチームだった。これにCTBの中西主将とバックローの私がハーフ団に協力して敵陣突破というのが攻め口であった。ハーフ河合がサイドをもぐって、オープンに開いた私にパスし、それから柴垣、中西へと続く手を一番多く練習した。低くくまれた3・2・2のセブンFW、私はロックの足元からヒールアウトされると同時に、球の動きに合わせてスタートを切ることを一生懸命練習した。私がスクラムを離れて一步か二歩動いたころ、ハーフ河合の手に球は押えられているのだ。

ドングリまなこをギョロつかせた河合は、球に手がふれた一瞬、敵陣をちらっと心の目で見てとり、スタンドオフ柴垣に回すか、自から持って出るかを判断して球を生かしてきたのであった。

昭和13年度大阪紀和予選決勝、天王寺中対北野中の試合は定期戦を兼ねて11月27日行われた。

強力ではなかったが、15人の気が合っていたのと、試合運びの巧さで天王寺はキックオフから北野を常に圧していた。しかし、好機到来。ここ一番というところで、天中はPKを北野に何度も進呈した。原因は私だ。それでも終了寸前まで6―0と点差をつけていた。

北野のキッカーは上原君(慶大)ではなかったかと思うが、慎重にゴールをねらった。われわれはポスト下に集まってその足に注目した。なにげなしにバックスタンド中央の大時計をみるとタイムアップの時間にきている。時計台の下では全校あげて応援に来ている北野の白旗が揺れ動いている。私は3点やってもいいさ、6―3でピーピーだ(試合終わり)と思っていたし、他の14人も同様の気持ちであった。

その前の日曜日に同じ花園第1グラウンドで行われた天理中との準決勝も幕切れ、天理がゴールをねらって入らず、その時タイムアップの笛がひびいて昭和8年の酒井主将の時から5年ぶりに5―3で勝ったのだった。

北野のPKはバーを越して6―3となっ

た。だが、笛は吹かれない。それなら次のキックオフのあとの区切りでタイムアップかと考えて、私は自分のいる右サイドに球を呼びこもうとして生駒山側に走った。キッカー中西君も心得たものだし、他のメンバーも3年生の松下君を真ん中に右側センタラインの後方に集まっていった。私はサイドラインの外から中西君のキックに合わせて飛び出した。当たりのよいキックだった。私がついて倒れてもよい、はじいてもよいと球を見ながら北野陣に走りこんだが、無情、球は私のバンザイする頭上をより高く越えてダイレクトに場外に落ちた。まだ終了の笛は鳴らない。とって返してセンタスクラム。北野ボール、ハーフからスタンドオフ、中央突破の大きなキック、FB広岡君の前で地上に落ちた。ワンバウンドで広岡君の胸に順当なら入る球がイレギュラーバウンドして広岡君の右側に大きく方向転換した。だれがラグビーの球を楕円形にしたのだ。この時、北野のだれかが疾風のように走ってきて空中にふわっと浮いた球をかすめとっていった。ポスト直下まで25ヤードあるかないかの距離だ。あつという間にインゴールに彼はとびこんだ。6—6。ゴール下に並んだわれわれはコンバートさせるものと必死にキッカーに迫ったが、北野の勝利を乗せた球は難なくゴールを破った。8—6。まだ笛はならない。キックオフ、無我夢中の密集、もつれあったあと球がこぼれて笛。そして、もう一度笛が鳴った。1分ほど前までは待ち望んでいたものだが、いま

となっては遅い。

北野がPGをねらってから終了までは、キツネにばかされたような空虚な時間だった。しかも、あつという間によぎっていった時間だった。ラグビー協会大阪支部長の井上二郎先輩はスタンドの貴賓席から、後輩に優勝旗が渡せるとニコニコしながらスタンド背後のうすぐらい通路を下りて、小春日和の陽光が芝生に映えるグラウンド出入り口に出たとたん逆転劇は終わっていたのだ。あ然とした面持ちの井上先輩の顔が見ていなくともわかる気がする。

控室の中の空気は、なんともいいようのないシラケたものであった。阿部幸作さん、中川さん、田中のオヤジ、藪本、山本さんら常連の先輩が泣くなとなぐさめていた。しかし私は涙も出なかった。他の仲間がどうしていたか、覚えていない。優勝を見越して用意されていた折り詰め弁当がくばられ、味気ない気分で食べた。OBのだれかが「ファンらしいオッサンがレフリーに3分間も時間が過ぎている、とどなりこんでいるよ」という声を聞いたが、すべては終わっているのだ。

ラグビーのことなどほとんど知らず勉強しろというだけの年とった親父が決勝戦を見ていた。晩めしするとき「天中の方が勝っていたなー」とぼつりといった。やはりうれしかった。だが心の傷はいやされていない。寝床にもぐりこんでから、ゲームのひと駒ひと駒が浮かんできた。あそこでこうしたら、ああしたら、なぜオレのプレーがインタフェア

ーになるのだと考えていると涙がどっと流れてきた。ついに一晚泣きあかしてしまった。夜明けを待って人通りのない街道をまっしぐらに大鳥神社の森に歩いていった。もやもやした気持ちをぬぐいさるためである。同時にあとに続く者に勝ってくれを祈った。

劇的な負けっぷりが1、2年生の胸に訴えるものがあつたのだろう。柴垣マタヤン、若山、伊藤、浅岡、新村といった名手が、このあと次々にラグビー部にはいつてきた。田中校長も体操でうるさい奈良先生もラグビーファンになったようだ。そして昭和17年全国制覇へとつながるのである。11月27日、その日は私の誕生日である。これからも誕生日がくるたびに、天中5年生の秋を思い出すであろう。

鹿子木聡氏は、この原稿を寄稿された後、記念史の発行を待たず昭和51年3月16日急逝されました。ここに謹んで哀悼の意を表します。 編集委員

桃陰ラグーと秋田鉤専

武田 基(41回生)

伊藤素義先輩のあとをついた昭和16年の秋田鉤専ラグビー部はまさに桃陰ラグーがその主力を担っていたといっても過言ではなかった。おそらく戦前の高専にこれだけの桃陰ラグーが一枝に集まっていたところはなかった

のではなかろうか、15年に飯田彦弥、水上啓三、河合信一郎、武田基が在学し翌16年には松下哲三、鎌刈松男というすごい後輩が加わって、東北の一ぐうで桃陰ラグーが万丈の気炎をあげたものである。

当時は東北、北関東のどの高専にも天中の卒業生が1人か2人は在学し、天中時代に陸上部や剣道部に籍をおいていた者が高専に進学してからは、ほとんどの者がラグビー部にくら替えし、それぞれの学校のフィフティーンとして東北予選に出場して来ていたが、彼等が我々に向かって笑いながら

「鉤専相手では話にならんわ。中学時代のプロばかりやないか」

と、戦わずして弱音をあげていた。

昭和15年まで全国高専ラグビー大会に連続して東北代表として懐かしい花園に駒を進めてきたが、16年には東北大会に優勝したものの、戦争のために全国大会が中止となり無念の涙をのんだ。

あれから30有余年、飯田、河合の両氏が病死し、鎌刈君が本土防衛の迎撃機で空中に散った。夢多く楽しかった秋田鉤専時代をしのんで心から哀悼の意を表します。

さわやかな敗戦

柴垣志郎(42回生)

もう卒業して15年もたつ。その間、本当にいろいろなことがあった。一番悲しいのは当時ラグビーを仕込まれた人のあの顔この顔、また教えたあの人達……数え始めたら涙が出るようになるほどたくさんの人が、若くして戦争で亡くなり、また戦後病没された事である。でも、そうした悲しみを乗り越え天中ラグビーは、天高ラグビーへと受け継がれ、すでに創立50数年を迎えようとしている。誠にうれしい限りである。

私たちがやっていたころ、大阪府下でラグビーをやっていた学校は、せいぜい7、8校ではなかったか。それが今ではほとんどの高校がラグビーをやり、本場のウェールズが日本にやってくるまでになった。まさに隔世の感がある。

私自身は小学生のころ(昭和7年ごろ)花園でオールジャパンとカナダのゲームを見て感激、ラグビーに魅せられて以来、近所に天中生が多かったせいもあり、当時の小学生が三角野球に熱中するように、その辺の広っぱで三角ラグビーに明け暮れるようになったのがラグビーのしはじめであった。

天中に入ってから本格的にラグビーを仕込まれ、昭和11年秋、2年生で初めて正式ゲームの北中戦にスクラムハーフで出場し、確か20対0位で勝つには勝ったが、死ぬような思

いで、やっとゲームを終えた。あのつらさは今だに忘れられない。

試合が終わってから、スタンドオフの5年生武田のケーヤんから「お前3年やと思っとったら2年生やったんやてなあー」と、ニコッと笑ってもらった。日ごろ鬼のようにこわかったケーヤんの最大級のほめ言葉なんだなあーと、その時のうれしさは、今もって温かく胸の中に納っている。

その後、中学、高校、大学、社会人と、ずっとラグビーをやったが、今でも感慨新たに思い出されるのは4年生の時の北中戦である。両校ともシーズン中全勝で11月27日の定期戦に臨んだ。その時の北野のバックラインはそのまま府下陸上大会のリレーメンバーに出る俊足ぞろいだった。それでもタイムアップ寸前まで確か6-3で勝っていた。それがロスタイムに入ったあたりで、北野のあげたパントがタッチラインすれすれの所で、なんとほんと内側へ絶好のパウンドになり、それをもち込まれてゴールされ、8-6で負けて終わった。(当時はトライ3点、ゴール5点、ペナルティーゴール3点、ドロップゴール3点だった)同時に全国大会出場権も失った。全校挙げての応援団のわきかえる中での一瞬の逆転だった。悔しさとも、なんとも形容の出来ない出来事だった。

試合後、着替え室で、5年生を始め大部分の人は当然号泣していた。しかし、私は実に冷静に、むしろさわやかな気持ちで、ゲームの余韻にひたっていた。というのは、私はこ

のゲームに全身全霊をかけ、また4年であり、チームをリードする精神的重荷もなく、伸び伸びとプレー出来、一球の落球も、一発のタックルもはずさず、心底思う存分なんの悔いもないプレーが出来たからだった。

全力を尽くして戦い、これほどさわやかに負けたことは、あとにも先にもなかった。勝ったゲームであろうと、ましてや負けたゲームでは必ず、あそこでああして置けばとの悔いがいくつか残るものである。それがこのゲームでは一つもなかったからであり、やれたからだと思う。勝敗を超越して味わい得たこのさわやかさ、これこそ私の青春の貴重な体験の1頁であったと思う。鹿子木兄とも今だにあのゲームほど感激に満ち、印象深いゲームはお互に経験したことないなあーと語り合う。

その後の人生でも、特に戦時中の軍隊生活の中でも、苦しく負けそうになった時はあの時代を思い出し、全力を尽して悔いないゲームをやれば成否、生死は別だ、またあのさわやかさが味わえるのだと、がんばって今日まで来た。天中ラグビーが教えてくれた強烈な体験が、ともするとくじけそうになる人間に活を入れてくれる。

幸いラグビー創立50数年を迎えた。今の天高は新潟高校、阪大でラグビーをプレーされた明石校長を迎えた。先日も運動会でユニホームを着てOB側に入り、現役陣に果敢なタックルを示されたと聞く。どうか1人でも多くの天高生が、天高ラグビーの現役がラグビ



ーそのものの良さを味わい、青春ならではの味わえぬ感激をラグビーの中に求め、心深く残して卒業して行ってくれるよう祈ってやまない。

校長自らOB戦に出場されるとは天中、天高と開校以来初の出来事であり、まさに天の配剤であると思う。これを機会にますます天高ラグビーが栄えんことを心から祈りたい。

信頼できる友の輪

村田 保 男(42回生)

大正11年、阿部先輩らによりラグビー部が創設された。その同じ年に私は生まれた。私は生れた時から天中ラグビーと縁があったようだ。

昭和10年長兄村田義幸(37回)が卒業した年に私は入学した。兄もラグビーをしていたので私も入部したかった。が、兄の組主任の寺村のビンサンが、私の組主任になったので最初から私を知ってくれており、そのうえ出来が良かったので、入部を許可してくれなかった。家では祖母もラグビーを知っていて「あんな牛のけんかみたいな事はやめときな

はれ」ときらわれた。そんな事で私の入部は遅く同期の柴垣のシロチャンは既にレギュラーで出場していた。

昭和14年最上級生の時、5年生は柴垣のシロチャン、久保のボク、長沖のワイ、久保田の大陸、平田のサナエ、榎並、五島、渡辺、西岡のポパイ、マネジャーの由利と私、いずれを見ても^{もう}錚々たるメンバーであった。まだそのうえに前年海軍に身を投じ戦死した伊藤のモッチン、4年から慶応大に行った広岡のへろもいたのだが、いわゆる練習上手の試合下手というか、天理に負け、北野にも負けた。結論、あまり強いチームというよりは相手が強かったという事か。

弱い時代の記録は残っていないものだが、「天理ラグビー50年の歩み」から引用させてもらう。

昭和14年4月25日 第4回近畿選抜中学校ラグビー大会 準決勝 花園 レフェリー 白崎都香佐氏

天王寺中学13—8 天理

晴天、選手一同、燃ゆるが如き熱と意気。昨年破れし天王寺中学、今日再び此^{こゝ}処で涙しては先輩に申訳なし。歴史の名誉にかけても天王寺を倒さずんばならじ。

戦記 1時、天王寺先蹴、一進一退、互に必死の攻防を繰り返す。味方、敵陣25碼附近から球を得、TB攻撃に移りチャンスと思はれたがドロップアウトとなりチャンスを逸す。15分、ハーフライン左のラインアウトの球、敵得てオープンに回す。味方TB、FB

これを追うが及ばず、遂にトライを許しゴールも成って5点先取さる。味方再度元気をとりもどし、FWの猛烈な突込み、更に見事なFWパスで敵陣深く攻め込むも又もやドロップアウトに逃げられ得点ならず。しかし25分、FWのものすごい突進で敵陣を突破、最後菊地ゴール左に飛込んでトライす。惜しくもゴール成らず。後半、味方の意気、ますます上がり、6分、敵陣深く攻め込み、敵ゴール右隅にスクラムトライ、ゴールも成功、逆転リードを奪う。しかし13分、スクラムから味方に出た球、敵TBにインターセプトされゴールポスト直下にトライさる。その後、互にキック戦法に移り攻防を続けたが得点成らず。試合もこれまでかと思はれたが、25分、スクラムから味方に出た球を敵にひっかけられ、巧みなドリブルで防禦ラインを破られトライさる。ゴール成り13対8、惜敗の涙をのむ。

悲観するなかれ、試合はこれで終りでない。全国大会の予選があるのだ、予選には、昨年の恨みと今日の涙の恨みを合せて報いるのだ。

昭和14年11月23日、第22回全国中学校ラグビー大会大阪奈良地区予選 準決勝 花園 レフリー 小杉氏

天王寺中学6—13 天理

戦記 昨年この花園グラウンドに於て、5対3にて敗れ、又本年の選抜大会では13対8とこれ又敗れた相手、天王寺中学、本日曇天にして生駒山上に雲低くたれしも風おだやか。

実にラグビー日和。殺気みなぎるスタンドには千名余りの天理中健児の応援団、彼のうらみを晴らさんものと選手応援団の気持はびたりと結ばれ灼熱の一丸となって試合に望む。

1時、天王寺中の先蹴。

天理のすべり出しよく敵陣に攻め込む。6分、はやくの敵の反則をさそい、ペナルティゴール成功、意気いやが上にも上り、8分、中央ライン右側のスクラムからボールは味方に出、TBパスから、金敵のタックルをはずし大きくスワープしゴールポスト直下にトライ。ゴールも成って5点追加。しかしその後、敵の反撃にあひ混戦。押されぎみになる。敵も大阪の強の者、遂に19分、味方、ゴール前でオフサイドありペナルティゴールを許す。

後半、応援団に送られ元気に敵陣に迫る。3分、敵陣25碼中央の密集から出たボール、三谷、極端にながれ二階堂これとクロース、見事に決り中央にトライ、後半早くも5点追加、天王寺元気をもりかへし再三、再四我ゴール前に攻め来るが得点ならず混戦続く。16分、柴垣のキックを追走した長沖、よくこのボールを得、そのまま走り切ってトライ、続いて息もつかせぬ天王寺の猛攻をしりぞけタイムアップとなる。敗者、勝者共に涙。

天王寺中	久	柴	中	若	西	伊	松	村	渡	柴	復	平	久	長	前
	保	垣	村	山	岡	藤	下	田	部	垣	並	田	保	沖	田
	(5)	(2)	(3)	(2)	(5)	(2)	(4)	(5)	(3)	(5)	(5)	(5)	(5)	(5)	(3)
	FW					HB			TB			FB			
天理	蔽	高	吉	菊	江	沢	片	井	中	三	二	金	森	岡	長
	橋	田	地	草	田	山	原	村	谷	堂	階	山	尾		

私のラグビー人生で、1人よがり、特別大書出来る事は医学校に進学して、ずぶの素人集団ラグビー部に入って、コーチングプレイヤーをし、関東医歯薬リーグで初優勝させた事と、終戦後海軍より復員しぶらぶらしている時「日本の復興はラグビーから」という事で京都に遠征、第三高等学校と対戦した事です。先年杉本先輩（長沖さん）から写真を送っていただき、この試合が戦後日本における初めての試合であったという事です。

その日、昭和20年9月23日、京都大学グラウンドに集まった連中は、戦闘帽に軍服、国民服、等々。私も陸戦隊服に飛行グツでした。

写真には、谷口さん(26)、杉本さん(28)、正野さん(33)、斧原のブツァン(34)、中西のワンユー(41)、村田(42)、松下のテツァン(43)の若かりし日の顔が見られます。

現在桃陰ラグークラブはもちろんですが、関西ドクターズラグビークラブ、惑々クラブに席を置かせてもらっておりますが、先年SHで出場、強いセービングをされ左下腿の骨折、以後はタッチジャッジを楽しんでおります。

とに角ラグビーをした事で得難いのは信頼の出来る多くの友を得た事です。

最後に現役諸君に一言。諸君は文武両道に秀で、天王寺ラグビー健在なりを世にけん伝され、毎年正月花園原頭はその雄姿を見せてほしいものである。

人生の原点

由利和久(42回生)

ラグビーをやった人は、だれでも大なり小なりラグビーにホレているはずだ。そうでなければ、あんなつらい、きつい練習に堪え、OBになってもまだゲームをやりたいなどと思うわけがない。

私もラグビーにぞっこんホレてホレぬいた人間である。しかし、私は残念なことに、スポーツマンとしては完全に失格の“欠陥心臓”を持って生まれてきた。したがって私の場合は、いくらホレても色よい返事はもらえない“片思い”のラグビーに終わるはずだった。

そんな私が、いまもってラグビー人間のはしぐれに名をつらね、超OBのゲームと聞けばノコノコ出かけてくるとは、奇妙とも不思議ともいいようがないが、よく考えてみれば、私に入部を許し、ラグビーの片鱗^{うろこ}を味わわせてくれた天中42回の柴垣キャプテンをはじめ、村田（現桃陰ラグー幹事長）、長沖、久保、平田（故人）らの温かい友情のおかげである。私のことを心もとないと思っていた柴垣などは、旧制の大阪高校にはいらたまたま花園で試合をやっていた私を見つけて“おい、みてみい、みてみい。和ベエがやっとなるぞ。おーい、和ベエ。死なんようにやれよ”などとありがたい応援をしてくれたし、のちに京大にはいったときには、すでに同志社にいた平田が、わざわざ河原町の喫茶店に私を

呼びだし“おまえ、からだはええのか、おまえと試合やれるようになるとは思わなんだな”と喜んでくれた。

このように仲間に心配かけっぱなしの私だったが、天中に入学する前から、ラグビーをやりたいとは思っていた。兄貴2人も天中で、上の兄貴は水泳部にいたが、のちに高槻の医専ではラグビーに転進してしまったことをみても、天中時代からラグビーをやりたいかっただけ。この兄貴が私が小学校4年のころに、使い古して楯円が真円に近くなったようなボールを持ってかえてきたことがある。兄貴が説明するラグビーのルールやゲームの進め方などは私には一向に分からなかったが、楯円球の奇妙なころがり具合だけは私の心をとらえた。さっそく小学校にもって行って、悪童どもを集め“ラグビーおしえたらか”。このときの悪童仲間に吉田磧や遠山克己（ともに41回卒業）がいた。

本格的なラグビーに接したのは、小学校5年の秋、おやじに連れだされたときである。

いまとなっては場所もチーム名もさだかではないが、たぶん大阪高校の校庭ではなかったろうか、タッチライン際でみたせいもあって、タックルのときのウツと呼吸をつめる感じとか、ラインアウトのときのあえぐような荒々しい息づかいとか、汗とホコリにまみれた顔とかの強烈な印象が残っている。

このとき以来、ラグビーが私のいちばん好きなスポーツになった。しかし、不思議なもので、はじめにスタンドのうえから見物した

なら、ゲーム全体の展開とかチーム・プレーとかを感じたかもしれないが、タッチライン際でみたためか“肉弾戦”が私のラグビー観の基礎をつくってしまった。あるいは爆弾をかかえて味方の進路をきりひらいた“バクダン三勇士”という当時有名だった戦場美談が、私のラグビー観に影響をあたえたのかもしれない。ほんとうは、FWの一員といたいところだったが、極端にチビだったので、大まけにまけてSHというのが空想のなかでの私のポジションだった。

しかし現実の世界では、天中1年（昭和9年）のときには、あんまりチョコすぎるといふ理由で入部をあきらめ、その年のおわりに心臓弁膜症が発見されたため、2年生になったとたん1年間完全休学、2年生を2回やることになってしまった。

“そうっと、だいじにしていれば大学卒業ぐらいはできるでしょう”という情けないご託宣がくだり、ラグビーどころではなくなってしまった。このままいけば、私の生涯はラグビーへの“片思い”で終わってしまうところだったが、昭和10年代という時代が私にある考え方をとらせた。

当時の日本では若者はすべて兵役に服し、戦場におもむくことが常識だった。したがってすべての若者は、20歳前後で生死の別れ道を経験してはじめて一人前になるという前提で人生を考えていた。私も生死の別れ道を私なりに経験しなければ肩身がせまい。ところが、私の欠陥心臓では、おそらく兵隊に不合

格になるだろう。かりに合格しても、そううとだいじにしていた体では、戦場に行くまえに、ダウンしてしまうだろう。そうすると、私には生死関頭に立つ経験は不可能となり、一人前の男とはいえなくなってしまう。

このままではいけないのだ。そこで私は、自分の体をラグビーで徹底的にいじめてみる決心をした。もしそれで参ってしまったら、ほかの若者の人生もどうせ20年なのだからもともとじゃないか。逆に、激しい運動にたえられたとしたら、私は病氣と縁を切って堂々と生活ができるというわけだ。

いまにしておもえば、荒っぽい貧弱な論理だし、自分の都合だけでラグビーを利用しようという、身勝手な結論だったので、なかなかいいだせなかった。たまたま4年生（昭和13年）のシーズンの最終戦で北野に惜敗し、しかも雪辱を期すべき14年度のメンバーがやや手薄なことを知って、ようやく私の心は決まった。“おれが雑務や下級生の世話をひきうければ、その分だけでもレギュラーたちの負担がすくなくなり、練習に打ちこめるのではなかろうか”——そして新キャプテンの柴垣に相談したところ、彼は快諾してくれた。このようにして欠陥心臓をかかえたラグビー部員が誕生したのである。

私のポジションはマネジャー専門である。こんなやつが試合に出て事故でもおこしてはえらいことになるので、絶対にレギュラー・プレーヤーにはならないが…（もちろんその実力もないが…）、自分の限界をためすため

に、練習だけは人並みにがっちりとやらせてもらうというのが、私のハラづもりだった。

5年生になってからの、しかも病気でだいにしてきたからだでの練習は、ほんとうにきつかった。はじめの3週間ばかりは、ひょっとしたら本当に死んでしまうのではないかと恐怖感にとらわれたことも事実である。

受験勉強を本格的に始めなければならない時期になって、おまけにレギュラーにもなれんのにになが悲しゅうてラグビーなんかはじめたんや、と心配したり嘲笑^{ちよう}したりするクラスメートもいた。両親にはマネジャーやから練習はせんでもええのんや…とごまかしたために、家でへばったとは一言もいえなかった。

夏の合宿もなんとか乗りきることができ、ようやくラグビーとともに生きていけそうな自信ができてきた。私個人としては、大きな賭けに成功したといえるのだが、この年（昭和14年）の戦績はあまりかんばしくはなかった。私が結局は邪魔ばかりしていたためではないか、と反省している次第である。

しかし、この時期に得た自信と友情は、その後の私の人生で強烈な支えとなった。旧制大阪高校では、レギュラーとして思う存分ラグビーをやらせてもらった。ただひとつの心残は、私のラグビー観である“肉弾戦”のポジションをもらえず、WTBをやらされたことだ。それでもスクラムや密集のそばで細工することが好きだった。三つ子の魂というやつかもしれない。

関西の旧制高校や専門学校では、天中出身

というだけで、ラグビー部へひっぱりこまれるケースが多かった。試合のたびに、そういう連中と顔を合わせるのも楽しみだった。なかでも慶応につぐラグビーの歴史をもつ三高では、吉田磧がCTBでがんばっており、定期戦では、ふたりだけに通じるファイトを燃やし合ったものだ。

学徒動員のときにも、頼りない軍医さんをごまかして無事入隊、歩兵の訓練も特別つらいとは感じなかった。ラグビーのおかげで欠陥心臓に毛がはえてきたらしい。毛のはえついでに、飛行機乗りを志願したところ、ここではさすがに欠陥心臓を見破られてしまい、軍隊から追い出されるハメとなった。昭和19年の末に大学にもどってみると、グラウンドに人影はなく、部室はカギがかかっていた。このときほど寂しい思いをしたことはなかった。軍の命令であらゆる外来スポーツが禁止され、しかもスポーツマンたちはすべて兵士としてかりだされてしまった後のグラウンドは、まさに生命を失ったうつろな空間にすぎなかった。こんな時代がふたたびくることのないように祈りたい。

戦後の社会にでてからも、あらゆることを人並みにやってくることができた。天中時代に得た自信のおかげである。というわけで、私にとってラグビーとはなにか、と問われれば、大げさなようだが人生の原点だ。と答えたい。と同時に初心忘るべからず——今後とも機会あるたびにラグビーを通じて、なにかを触発されたい、と考えている。

わが青春とラグビー

大 国 丈 夫(43回生)

この稿は、元来松下哲三君が書くべきものですが、書いてくれないだろうと思いますので、天王寺50年のラグビー部史の中で15年度だけが欠けてしまうのも残念なので、私が代わりに書きました。すべて記憶に頼りましたが、往時^{ぼう}芒々として、あやふやな所があり、間違った所もあると思いますが、ご寛容下さい。

昭和15年といえば日支事変が泥沼に落ち入ったようになって、いつ終わるとも知れず物資もようやく不自由となり、衣料品・食料品に制限が加えられ始めた年です。ラグビー界にも影響があり、クツが豚皮と牛皮とを併用したものとなり、純毛・純綿のユニホームが入手困難になったため、それまで合宿に参加すれば支給されていた紺黄のジャージーが作れなくなったので、秋のシーズンには古いので間に合せる。ストッキングだけは作りましたがスフ入りで、つけていると折り返しがダランと下がってくるという具合でした。なぜか色も紺黄でなく黒黄でした。

こんな情勢下で、部長栄国先生、主将松下哲三、副将鎌刈松男のもとに新チームが発足しました。前年度のチームからFW久保藤男、伊藤和夫（シーズン中に甲種飛行予科練習生志願・故人）、バックス柴垣志郎、村田保男、久保田修、平田早苗、長沖通、榎並稔

が卒業し、3年生ながら左ウイングをつとめていた山岡康が退部したので、FWは、負傷して先シーズン欠場した鎌刈松男、中西良次の復活で力強さを加えておりましたが、Bはハーフ渡部以外は全員新顔となり、やや心もとないものがありました。

春休みには村田義幸さんを中心に、早大の鈴木(矢辺、故人)、鹿子木、慶応の古沢(故人)、中西、秋田鉱専の河合さんらが来校され熱心にコーチをして下さいました。天王寺は昨年まで伝統として7FWを組んでいましたが、本年度から8FWを組み現在に至っております。日本のラグビー界の中に8FWへの動きが出始めたところで、早大もこのころから8に組み変えていたと記憶しています。ここに天王寺の歴史のひと駒があったわけです。新チームを結成して最初の練習マッチが3月末、京阪商業との間でありました。バックスの動きにギゴチなさが目立ちましたが77-0で勝ち、先輩連をほっとさせました。

西村	柴垣	中村	若山	鎌刈	多田	松西	浅岡	渡部	伊藤	藤原	白村	田江	前田
(4)	(3)	(4)	(3)	(5)	(4)	(5)	(3)	(4)	(3)	(4)	(4)	(4)	(4)
FW							HB		TB		FB		

これがその時のメンバーでしたが、この直後、左センターの藤原が退部してしまいました。4月に入ると恒例の近畿選抜中等ラグビー大会が、参加8チームで開かれました。天王寺、北野、天理、京一商、同志社、神戸二中、他に浪華商業と村野工業が選ばれたように思っています。予想では北野の優位が伝えられましたが、幕をあけてみると、天王寺の

FWが猛威を振るい、14—6 同志社、16—12 北野、20—0 京一商と各チームのFWを蹂躪して優勝してしまいました。

私が天王寺に入学した昭和11年度のチームは、小西(信)、小西(秀)、奥井、西原、大田、鈴木(矢辺)、古沢といった人達がいる、穴のないとても強いチームだったように記憶していますが、それでも春の大会には優勝戦で天理中学に8—6で敗れていました。この大会で優勝したのは在学5年間で初めてのことでしたが、チーム自身も終わってみると優勝しているのに、驚いているようなところがありました。心斎橋の針半かで阿部さんを始めとする先輩たちから、すき焼きの祝勝会を開いていただいたのもうれしい思い出です。この時のフィフティーンは左の通りです。

西村	柴垣	中村	若山	鎌田	多田	中田	松西	浅岡	渡部	伊藤	前田	田村	白江	小林
(4)	(3)	(4)	(3)	(5)	(4)	(5)	(5)	(3)	(4)	(3)	(4)	(4)	(4)	(5)
FW				HB			TB		FB					

大会後は、比較的のんびりした練習をつづけ、シーズン・オフに入る前に、八尾中と練習マッチを行い26—0で勝って春のシーズンを無事に終わりました。

夏合宿は8月5日から10日間、関学のグラウンドを借りて行われました。この合宿は村田義幸さんのもとに、時の早大主将松元さんが鈴木、鹿子木両先輩の他に、豊島、井上、井沢らの人々をつれてこられ、慶応OBの松本さん、早大OBの木塚さん、三高の吉田碩さん、新卒の柴垣、平田、村田(保)さんらを交じて連日猛練習をつづけました。当初ス

タンド・オフを予定されていた渡部が合宿不参加のため、合宿中は私がスタンド・オフをつとめることになり、松元、柴垣先輩から手とり足とり教えられましたが、3日目ごろから両足の甲がはれ上がり、4日目からは練習はおろか、歩くのがやっとという状態になり、チームメートに迷惑をかけたのは、まことに不がいなく、残念な思い出として残っています。合宿から帰って5日間ほど休みがあり、8月20日ごろから学校で練習を始めました。

9月に入ってOBとの練習マッチがあり、次週に同志社中学とのマッチがありました。メンバーはOBの試合も時も同じで23—3で軽く勝ちました。

西村	柴垣	中村	若山	鎌田	多田	中田	松西	浅岡	渡部	伊藤	前田	田村	白江	小林
(4)	(3)	(4)	(3)	(5)	(4)	(5)	(5)	(3)	(5)	(3)	(5)	(4)	(5)	(4)
FW				HB			TB		FB					

同志社はあの程度の強さでも全国大会に出場出来るのだからよいなあと、うらやましく思ったことを覚えています。また、このころから早大OBの木塚さんが主としてチームの面倒を見ることになったようでした。9月末、神戸二中との定期戦がありました。二中にはここ数年負けつづけていましたが、この試合では強力FWが相手を押しまくり、バックスも快走して35—0で大勝しました。交通費を地元のチームが持つことになっていたので、試合終了後受け取りに行くと、悔しそうに渡してくれました。負けた上に取られるのでは面白くなかったのでしょう。

西村	柴垣	中村	若山	鎌刈	多田	中西	松下	浅岡	渡部	伊藤	小林	田村	宮脇	前田
(4)	(3)	(4)	(3)	(5)	(4)	(5)	(5)	(3)	(4)	(3)	(5)	(4)	(5)	(4)
FW				HB				TB				FB		

それから天理中学との練習マッチがありました。天理は春からみると、まとまりができて、小柄ながら腰の強いFWが低く固いバックのスクラムを組み、天王寺の強力FWとはほとんど五分に渡りあえる程力をつけていました。天王寺の方が全体的には優勢でしたが、8-8の引き分けに持ちこまれました。ここは後のためにも一番勝って、相手にやっぱりダメか、という感じを与えておきたいところでした。

西村	柴垣	中村	若山	鎌刈	大田	中西	松下	浅岡	渡部	伊藤	小林	田村	宮脇	前田
(4)	(3)	(5)	(3)	(5)	(5)	(5)	(5)	(3)	(4)	(3)	(5)	(4)	(5)	(4)
FW				HB				TB				FB		

10月には明治神宮大会の予選が行われました。昨年までは、春の近畿中等ラグビー大会の優勝チームが関西を代表して東上し、東京勢を相手に一試合しただけだったので、今年は天王寺が行けると喜んでいましたが、間際になって急に制度が変わり、各地で推されたチームが、ブロックごとの予選を行い、西日本代表と東日本代表が明治神宮大会に出場することになりました。天王寺はまたも天理と当たりました。当初は天王寺FWが圧倒的な強さを見せて6-3とリードしておりましたが、前半の中ごろからハーフ浅岡が負傷、折れた腕をかばいながらノーサイドまで健闘しましたが、やはりブレーキとなり、11-6で逆転負けを喫しました。結局近畿ブロックで

は北野が勝ち残り、修猶館と戦いましたが、予想を裏切って北野が負けてしまいました。この試合以後、浅岡の出場が不可能となり、渡辺がハーフになりましたが、スタンドオフに苦しむことになりました。またこの前後、大高との練習マッチがあり、北江哲夫が2年生ながらセンターとして出場31-0で初陣を飾りました。この時期の主将、松下哲夫の父君が逝去され、大阪商大との練習マッチは、彼を欠いたまま大敗しました。彼個人の實力もさることながら、チームのリーダーとしての重さを改めて認識させられたものです。

11月に入ると全国大会の予選が始まりました。悪い事が重なるもので、確か2回戦だったと思いますが、浪商との一戦で16-0で勝ちましたが、試合中ロックの若山が鎖骨骨折で中途退場し、北野との試合には出場不可能になりました。彼は学年こそ3年ですが、実際は5年生で試合経験も豊かなファイターでしたから、かなりの痛手でした。この穴埋めに井上が第一列に起用され、中村が若山の跡に入りました。浪商戦のフィフティーンは

西村	中村	中村	若山	鎌刈	大田	前田	松下	渡部	柴垣	宮脇	伊藤	田村	白江	小林
(4)	(5)	(4)	(3)	(5)	(5)	(4)	(5)	(4)	(3)	(5)	(3)	(4)	(4)	(5)
FW				HB				TB				FB		

北野中との準決勝戦は11月下旬のよく晴れた暑いくらいの日に、花園第1競技場で行われました。北野はバック・ローの橋本が右足ねんざでずっと欠場していましたが、この試合にはぐるぐるの包帯を巻きつけての出場。ベ

ストメンバーの編成でした。準決勝の第1戦で天理の主将三谷が骨折して、優勝戦には出場不能になっていたのも、天王寺、北野戦の勝者が優位に立つことは十分予想されました。必死にがんばりましたが、前半松下がライン・アウトから右タッチ・ライン際を独走してあげた1トライにとどまり、16-3で敗れました。昨年のシーズンも鎌刈の鎖骨骨折、中西(良)の大腿部肉離れでFWが弱体化し、天理に後れをとったこと、一昨年は天理を5-3で破り、優勝戦では終了直前まで6-0で北野を圧倒しながら、一瞬の中に8-6と逆転された不運(この時、勝ったと思った田中校長が席を立ててグラウンドに出て来たら負けていたので、一瞬わが目を疑ったそうです。息子の同級生、田中亮が今でもよくこの話をします)など、ここ3年間ツキから見放されていたように思いますが、反面、その間に柴垣(復)、浅岡、伊藤(康)、若山、井上、川本、内海(透)、佐々木、伊藤(寿)、北江、新村等の好選手がみっちり鍛えられ、実戦の経験を積んで、後年、明治神宮大会、全国中等学校大会で優勝する素地を養っておりましたことは、この不本意なシーズンの慰めでありました。最後に同級生のことにふれておきます。対北中戦フィフティーンは

西村	柴垣	井上	鎌刈	大國	中西	松下	前田	宮藤	伊藤	田村	白江	小林
(4)	(3)	(3)	(4)	(5)	(5)	(5)	(4)	(4)	(5)	(3)	(4)	(5)
FW				HB			TB		FB			

鎌刈松男はチームーというより、学校一のノッポでした。1年の時はそんなに大きな

く、中より少し高い位で、松下哲三と同じ位でしたが、3年ころから急に背丈が伸び、5年の時は180センチ以上、体重も72キロを超えていたと思われます。教室では鉄仮面のような無表情な顔をして静かにしていました。運動神経は抜群で、筋肉質の体といい、俊足といい、もし早大に進学していれば、恐らく指折りの名選手になったものと思われます。松下哲三と共に秋田鉱専に進み、主将をつとめておりましたが卒業後、海軍予備学生に採用されました。学徒出陣で騒然としていた昭和18年の暮れ、夕方の東京駅を歩いていると、予備学生の一隊が並んでいました。見るともなしに見ると、最右翼に鎌刈松男が真面目くさった顔で並んでおりました。約1時間程の休みがあるとかで、2人で喫茶店に入ってお茶ともいえないものを飲みました。何を話したかも忘れましたが、それが彼を見た最後となった次第です。

中西良次は2年上の中西一雄さんの弟で、皆からボンボンと呼ばれていました。その通称みじんも悪気がなくオットリとしていて、いつもニコニコときげんのよい顔をしていました。1年の時は鎌刈、松下、私と4人同じ2組にいましたが、一雄さんの弟であるということも知りませんでしたし、ラグビーをやるようには見えませんでした。クラス対抗の試合があっても出ていなかったような気がしています。3年のころに弟だということが分かり、やがてラグビーの練習を始めたのでびっくりした人もいました。人柄の良さが自然

ににじみ出ている、だれからも好かれていました。徳島高工に進学してからも、天中の合宿には毎年姿を見せていました。中支で戦死されたと聞いていますが、両君のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

松下哲三は初め水泳部に入っていました。が、やがてラグビー部に転じました。がっちりした身体つきで足はクラスで一番速かったようです。3年の時には早くもレギュラーとなり、センターフッカーとして活躍しておりました。スタミナがありファイトのかたまりのような男で、鋭い突進力と、猛烈な低いタックルは、よくチャンスをつくり、ピンチを救っておりました。当時行われました体力章検定の2,000メートルでは当時の天中生の最高記録6分30秒をマークしました。秋田鉦専に進みましたが、胸を患って鎌刈より1年遅れて卒業。終戦後、関西学院に入学し、天王寺時代の後輩西村、内海、北江らと関学ラグビー部始って以来の黄金時代を築きましたが、卒業後神戸製鋼に入社、40過ぎてからがんばって一女を得、今は宝塚に住んで、神戸製鉄所総務部長をつとめております。

小林康男は1年生の時は大柄で、がっしりしており、年末のクラス対抗試合では3組のスタープレイヤーで、彼の活躍により3組が優勝した程でしたが、その後成長がとまり、卒業の時は前から6、7番目位だったように思います。東京農大に進み、在学中一緒に上野を散歩したりしましたが、学業半ばで学徒出陣となり、入営前、一緒に天王寺中学に行き

ましたら、ちょうど京大在学中の柴垣志郎さんも来合せて、3人で阿倍野橋の喫茶店で別れのお茶をのみました。あの時代生きて帰れるとは思われなかったもので、一期一会の感懐が胸に迫る思いをしたものです。終戦後、学校に帰り、卒業後不二屋に勤めていましたが、現在は独立して逗子に住んでいます。

宮脇祖順は大阪歯科医専に進み、卒業後、家業をついで東住吉区で開業していると聞き、終戦後ブラブラして閑だった私は2、3度訪ねてみました。白衣を着て、昔から歯科医をしている様な板についた態度であられ、忙しそうにしていました。中学時代から書道を習っていたので漢文に強く、漢文だけは模擬試験でもよい点を取っていました。これを達筆というのか、読めないような手紙が来て判読に苦しんだのを思い出します。現在、母校天王寺の校医も兼ねていると聞いています。私は東京美術学校に進み、在学中に召集され、北支に1年と少しおりましたが、20年12月復員、同年卒業ということになりましたが、23年、東京美術学校彫刻科に再入学、27年卒業、同時に東京芸術大学彫刻科に再々入学して31年に卒業。いま彫刻を作りながらかなり気ままに暮らしております。小生が美術学校に入学ときまりました時、若山克己君が生真面目な顔で「そこ出たら美術士でっか」と聞いたので面くらいましたが、その若山君が後年私と同じ彫刻を志すようになったのですから、人生というものは分からないものです。

新米ウイングの記

白江甲子夫(44回生)

ノーサイド2分前くらい6点、リードされていたのをやっとトライ・ゴールで1点差に追いつく。“もう一丁”と松下主将の声が響く。北野のS・Oがセットしてキック。鎌刈さんが取って突進。松下、中西さんらが続く、止まる、ルーズ、出たS・Oの渡部がパント、追う、敵ゴール前ルーズ、S・Hの浅岡から渡部そして最後は松下さんが飛び込んで押える。黄と紺のユニホームがかたまっている。逆転!!

昭和15年、4年生の1学期、近畿中学校選抜大会の準決勝。あの時は新米のウイングとして出場。まるで無我夢中だった。35年たった今でも柔らかい春の午後の日ざしと花園の芝生の色と共に鮮やかに思い出す事が出来る。

試合の流れの恐ろしさ、そして守勢に回ったらどんなゲームでも負けるという教訓と共に……。

“放課後部室に來れ”、〇年〇組何某

幾多の名選手を擁しながら北野との定期戦に入学以来負け続けて来た3年生の秋、体育館の前の廊下に出された告示板。

昼休みになれば校庭に12・3個の楕円球がとびほとんどの生徒がボールを目掛けて入り交った時代、ラグビーが正課のようであった時代。

田中校長が北中戦の終わった翌日“昨日の日曜日に応援にも行かず試験が迫っていると、家で勉強していた生徒がある。その様な生徒は天中生ではない。天中を止めてしまえ”と訓示した時代(我々5年生の時柔道、水泳、陸上、バスケット等7つの運動部が府下で優勝した。ラグビーの北野との定期戦は即大阪、和歌山、奈良三地区の優勝または準優勝戦であり、天中と北野全校あげての正念場でもあった)恐らくあのころ、天理にも負け続けていたのではなかったか?

“あゝ幾度かの敗戦に断腸の年送りつゝ苦難の途を辿りしが…(雌伏の年を送りしが?であったかもしれぬ)…と天中生は復しゅうの歌ばかり練習し“勝つは体力”は空しく花園の空に消え、“花は散る散る”の勝利の歌を歌う事の出来なかったその時、その告示は絶対的なもので、あの当時でいえば召集令状みたいなもの。今から思えばラグビー部へ入った唯一の理由でありキッカケであった。西村君とは2、3日違いであったと思う。

その年でレギュラーがごっそり卒業したので、入部してすぐ足だけを買われウイングにしてもらったが、運動神経も鈍く4年、5年と、書いて自慢できる様な事是一つもない。それでも年がたてば良い思い出ばかり残る。5年の北野との定期戦(3地域の優勝戦)で入学以来始めて勝ち全国大会への出場権を得た事等(天理とは4度ほどやったが負けた記憶がない)その年の全国大会は変則的なものになり、優勝戦で再度北野に当たり優勝を逸

したけれど、定期戦に勝った事と試合の始めから3番、5番、10番が脳震とう様状態になってチグハグなゲームであったし、残念さは意外と少ない。

4年の時1年上の松下主将はじめ、鎌刈、中西、小林、大国、宮脇ら諸兄のゲーム中での事は自分自身が新米で夢中、ゲームの流れも分からなかったのと同様、合宿や練習での事しか思い出す事が出来ぬ。しかし5年の時、一緒にゲームをした1年または2年下の諸兄の事は余裕がある程度出来たのか？生き生きと思い出に残る。卒業後、関学や京大、早稲田等へ行ってラグビーを続ける事が出来、名選手として勇名をはせた柴垣弟、内海、川本、新村、北江君らはもちろんの事だが、戦死した佐々木(3)の体力と頭。いまだ感々クラブで元気な突っ込みを見せている若山兄、いつもボールの後にぴったりとついていた井上(6)の地味な忠実な動き、華やかな動きで花園をわかしたハーフの浅岡、そしてチーム随一の快足であったC・T・B伊藤の教科書のような、本当にいぶし銀のようなプレー、翌年のチームが国体、全国大会と優勝したのも当然過ぎる程当然という気がする。あの様にすばらしい選手がそろっていながら、だれもが目だたない15人のプレーに徹したチーム、本当にすばらしいチームだったと思う。

当初、わけも分からず始めたラグビーではあったが、秋になればまた冬になればファンとして毎日曜日花園へ、西京極へと通う。時には正月秩父宮へも行かねばならぬ。我な

がらどうなったのかと思う。だが息子が通っている医大のラグビー部のコンパ等で親父と対戦した北野出の先輩に酒をついでもらったなどと聞くと、つくづく天中でラグビーをやれてよかったと思う。この上一つの望みは母校天王寺が再び返り咲いて全国優勝してくれたらと、それだけがたった一つの夢である。

ラグーに国境なし

柴垣復生(45回生)

来日中のウェールズと、オールジャパンの最終戦をテレビで観戦しながら、選手が最後まで懸命にタックルしているのを見て、昔を思い出し、涙線がゆるんで仕方がなかった。

もう20数年も前の話。既に社会人になっていたが、光栄にもオールジャパンの一員に選ばれた。その日から半年ほど、禁酒・禁煙。毎日グラウンドを走ってトレーニングに励み、体調を整えて来日したオックスフォード・チームと対戦した。新聞でいう厚い壁とか何とか、そんな生やさしいものではなかった。文字通り全く歯がたたず惨敗した。相手の一人々々が、体格や体力の差はもちろん、それ以上にあらゆる点で、余りにも卓越したプレーヤーであった。天中のころから何年もやって来た自分自身のラグビーとは、およそ異質なラグビーである事を痛感させられて、それを機会に第一線から退く決心をしたのを覚えている。

天中時代に「アベハン」から常にいわれた

昭和27年秋オックスフォード来日の際、オールジャパンに選ばれたとき



「要するに精神」だけでは到底かなわない事もよく分かった。今回のゲームを見ていて、現在のオールジャパンの実力は、当時より数段上のはずだが、相手が更に数枚上であったのかもしれない。岡監督さん、しっかり頼みまっせ。それにしても、ラグビーのあの烈しいブツカリ合いに、よくまあ自分自身が堪えて、やったものだと思心するが、自分の人生をかえりみて、やっぱり「ラグビーをカンカンになってやって良かったなあ」と思う。

商売柄、海外に出かける事が多いが、英国とか、カナダとか、南アフリカ等々の国々で、相手にラグーがいて、お互にラグビーをやっていた事が分ると、不思議にそのとたんふん囲気が変わって、むずかしい話もスムーズに解決する事もしばしばある。そんな時は本当に「ラグビーをやった良かった」と思う。

日本国内でも同じだが、海外でも年齢や、職業や、ハダの色が違って、ラグー同志と

いうだけで、通じ合う何かがあるようだ。恐らく「アホさ加減」が共通しているのだろう。

東京に住みついて20年になるが、やはり天中のラグビー時代が一番懐かしい。勝って泣き、負けて泣き「要するに精神」で一生懸命であった。毎日練習が終わってから、銃機手入れ台に手をつけて、フッキングを鍛えてくれた「忠ヤン」。スクラムセンターで初めて試合に出た時、せっかくのマイボールも、

「お前は敵にボールをやっとる」とボロクソにどなられた「オヤジ」。たくさんのオソロシ先輩がいたが、今でも良い伝統が残っている事と思う。

天中ラグビーで鍛えられたお蔭で、海軍兵学校の毎日の猛訓練も全く平気であった。海軍ではラグビーが盛んで、土曜日ごとに有志の試合が行われたが、ここぞとばかり上級生たちを、猛烈にタックルしたら、それ以後あまりドツカレずに済んだ。海軍から復員して浪人時代、しばらく母校のコーチを務めたが、そのころの連中が、ラグビー界で活躍しているのを、新聞やテレビで見て、わが事のようにうれしかった。それにしても近ごろは一流選手の中に「天王寺高校出身」が見られないのはいささか寂しい。

先日、ラグビーの試合中、相手のタックルを引きずりながら、ゴールラインに向かって飛び込んだ。「トライ」と思ったトタンに、寝台から転落、ドッスンと夜中に大きな音。女房がビックリして目を覚まし大笑いされたが、伊藤君（45回の同僚）からぜひ何か

書け、と頼まれ、気になっていたせいだろう。いや、まだまだやる気は十分です。今年はずいぶんOB戦に出場させて頂けるのを期待しております。

男と男の闘争

若山 克己(45回生)

—ラグビーの骨格は“死にもの狂いの男と男の闘争だ”—

教祖：19世紀（1823年11月）ラグビー校、

ウィリアム・ウェブ・エリス少年

起源：古代ギリシャ

ローマ仏教は釈迦に還れ

騎士槍試合 野試合

激しさ、国と国との衝突（統一のための国王の度々なる禁止令）——産み出る苦悩

ピサにおけるジョーコ・デル・ポンテ（橋上模擬戦）に原型、古代ヨーロッパの騎士は自分の剣に自らの信念のすべてを託す——騎士道の象徴

—スポーツの哲学—スポーツの基準

スポーツを哲学により処を求めると、陽明学となる。知的遊戯に終わらんために実践が必要。実践を通じて自己のラグビー観をもつ。

演劇3要素

キャラクター（エトス）

スポーツのルール
フェアプレーの精神
スポーツマンシップ } ①

（註）HipとSquareは、かのアメリカの作家ノーマン・メイラーの心理学的な一つの分析リスト、もっとも彼の分析と私のとは同一あり、差異もある



哲学としての（隋円形）and（正方形）、演劇（ラグビー・ゲームの展開をドラマツルギーとして）、修了年号＝レトリック（祭り、象徴としての男をヒクシジョンの上に立ち立てる）は根源的に結びついている。此の思想がこの作品の根底となり存在表現となる。

パッション（パトス）

ファイティングスピリット ②

アクション（プラクシス）

動作、技術 ③

①理性的、道徳的な要素、②感情的、闘争的な要素、③実践的、技術的な要素、根源として本能的、闘争的な要素、以上よりの影響として青少年の鍛練。

発芽の場としての——（本能的深く根ざした知恵）そ知らぬふりをして鍛えられた魂、単なる本能でなく（黙々として鍛えられた魂）、やはり、ほのかな良心の初芽を大切に、

— 壟る Rugby（作品）原型出来て!! —

昭和50年3月26日午後3時15分出来た。まず太陽のもとに出して見た。冬に戻ったかな

あゝ！と思われる様な冷たい風にさらされて。次は土間の上で……、部屋内からしげしげと見る。そして最後は部屋のある仕事場で、出来た、出来た。

そしたら自然と涙が出て出た。冷酒一杯で一人で祝って、なぐさめて、オイオイ泣いた。そして胸のうちにかたまっていたものが……少しずつとけていった。よくやった、そして思った。

もう万一、これで私のラグビーが終わってもよい。こんなの、やはり私とラグビーのかかり合いではじめての事の様だ。ヤッタ、ヤッタゾ克巳！！

なんだか肩がドサーッと落ちて、口をポカンとあけてしまった。悔ないぞ、これで、ノーサイド！

“真の芸術家のすべきことは、自分のやった事で喜ぶことではなくて、それを自分がしようと思ったことと悲しい思いでくらべて見ることだ” —ジョルジュ・クリトリーヌ^注 (1880～1929)劇作家—

注 ここはロマンチックな、あつい言い方をしているが、問題は冷静に俗に言う向こう岸からじっくりと冷めたい目で凝視する。仕事のうちの自分に耳を傾ける。例えば炎の中の我が子をスケッチする、非情の美の存在のことを言っているのではないかと思う。

もう金輪際ラグビーはしない、と思ったことは厳密には過去にもう一度あった。愛する彫刻の仕事をやり出した時だ。しかしあの時は、我が仕事として自信をもってつかんでいるとは言えなかった。しかし今度は違う。も

う子供じゃあるまいし、今度の塑るラグビー（作品）が免罪符の存在となったことは事実だが、愛する彫刻の仕事をちぢめたり、いじけたりしない様に、それは痛感したことだ。だから従来通り、身体のきたえにもなるし、楽しい友達もいることだし、仕事を外にしない様にしながらするだろう。

さて思う。この様に2度あった、もう一度あるだろう。ラグビーを to be or not to be と。その時はおそらく別にラグビーとて特定のものとしてこだわらないで、たんたんとした存在で私とかかわり合っているのではないか、……を卒業することはあり得ないが、あるとしたら、こんな形態でするのじゃないかしら。（昭和 50. 3.28）

今回は私ごとの仕事を申上げて少々恐縮なのですが、実は一昨年（昭和49年）暮れから、全力をあげてかかりきりでした制作も、やっと原型の出来た時点で、私としましては全く新しい大きいショックを受けました。その背景等を申し上げ、また制作内容の過程等にも簡単にふれながら説明を続けさせてもらいます。

ことラグビーに限らず、あらゆるスポーツあるいは武道等の何々道も含めまして、すべてにわたり“力”と“力”の対立、闘争、歓喜(よろこび)を造型のジャンルへ形象化しようとしたわけです。（で私にとりまして、桃陰ラガーの皆様と同様に、ことラグビーは良いにつけ悪いにつけ、ちょっとやそっとのかかり合いでなく）このラグビーも自分の

仕事の中に何とか持ち込もうとこれまで度々努力しましたが、いつも残念ながらざ折でした。それは先の“制作のノート&メモ（抜すい）”にも出ている。ジョルジュ・クリトリヌ（1880～1929）の言っていることにも大いに関連しているのですが、とにかくどう言うのか、その試みる作品を見ると、いつも安直なんです。それで結果的には“考えるラグビー”から“つくるラグビー”それ以上に私としては、“するラグビー”になっていました。でも今度はどうやらパスした様です。

さてこれは制作中、いつもやることですが、疲れると音楽を聴く。それも私の場合、身近なものを利用して、例えばFMラジオを聞く程度なんです。今回もそれをしていて、何かの演奏の後の解説者の言葉のうちに“ラグビー”なる標題の作品があることを知りました。（大体制作中は、ことにテーマに関連したこと、それはわずかなことでも神経をとぎすましてあさっているものです）。そんな時、都合よく私の処に出入りしてくれている若い女性ピアニストの方に早速頼みました。“その作品の作曲家や、そのつくられた年度等、それに関連したことを調べて下さい”と、（この事に関しましては41回卒の鹿子木先輩にもお世話になりました）。そしたらありがたい事に、この作曲家についての事も、またこの“ラグビー”なる作品のレコードも一緒に届けてくれました。

ところで皆さんもこと“ラグビー”に関しては大好きな方々、ご参考にもなるかと思

い、ちょっと紹介させてもらいます。このレコードは日本にも度々NHKの招きで来日している現在フランスの香り高き指揮者ジャン・アルティノン（フランス国立放送管絃楽団）演奏、作曲アルテュール・オネゲル（1892～1955）今生きていたら83歳ですか。（参考までに、この作曲家の両親はスイス人ですが、彼の国籍はフランス。そして北フランスのルーヴル生まれ、そして大のスポーツファンであり、ラグビーもやっています）この作曲家は“ラグビー”なる運動それ自体を“力と力”の対立、闘争、歓喜（よろこび）と音のパレットの上で喚起しようとしたのです。彼はこの曲の題名を“フットボール”とつけなかった理由として“ラグビー”の方が、“ずっと自然で乱雑で死に物狂いなリズムにより魅せられたため”と彼自身も言っています。なお彼はこの交響的楽章“ラグビー”は1928年に作曲しています。（フランスは1906年にラグビーフットボール・ユニオンに参加しています）それと、これは本題を少し離れた問題ですが、重要なことに将来の音楽論なんです。現在はまるで人々は子供のオモチャやビックリ箱に首を突っ込んでいる様な雑音とも音楽とも区別のつかぬ状況では本当の音楽は分からなくなると、世界でも数少ない音楽終末論者の一人です。音楽は貧血によって減ぶのではなく、充血によって減ぶとさえいっています。でも私はそれは彼が音楽をこよなく愛するあまり、音楽界の混乱期に警鐘の意味で少々オーバーに音楽終末論を言ったのだと

思っています。でちょうどそのころ、私の制作も大詰めになっていたし、このレコードを聴きながら、自分の作品を見まわしていました。すると自分の作品に“ソオーウ”とまるで恋人にふれる様な快感であったり、一方マラソンでゴール前、苦しく疲れ切っている。しかしその恍惚の中にある種の快感がある。そんな心境もありました。そしてここで私は“ラグビー”と言えばフェア・プレー、あるいはゼントルマン・シップとか、ファイティング・スピリットあるいは1人のための15人、15人のための1人と言う様なチームワーク等を思いうかべていましたが、ここに来て“ラグビー、それは死もの狂いの男と男の闘争、これが骨格だ”と痛感しました。その辺が大ショックだったのです。

つまり死にもの狂いの男と男の闘争、これは命をかけて渡り合う、しかもフェアなる場で、これはまさしく一つの美の極地(最高)と分かったわけです。ヒューマニズムと言ったとて、いわば人間あつてのこと。そしてその人間、ことに男は下手すれば命を落とすかもしれないぬ“力と力”の衝突を、やはり時としてはせねばならぬ。それも時には貴婦人の前で……、こんなことを想像しました(これは単なる想像じゃなく、深いものです。人間の歴史的存在とかかわり合っているのですからね)この一つの立証する一例を申しますと、かの西ヨーロッパのキリスト教が生んだ偉大なる思想家(キリスト教の三大聖人の一人)聖アウグスチヌスでさえその告白に“円形競

技場の魅力的効果”をいっています。

もっとも、こんなこと私としましては今は逃げ出したいところですが(実は私も惑々クラブなるオールドプレイヤーの集りや、桃陰ラガーの超OBでゲームに出してもらえることもあります。これ等はいうならホンモノのラグビーからは程遠いといえる、ラグビーらしきもの、哀愁のラグビーみたいなものかもしれませんが……)、ホンモノのラグビーに接するなら、以上述べた様なことがあり得るということ、そして今や私としましては年齢的にも自分の実感した“死”という問題が明らかに射程距離に入っている。そうと知ったら自己の鍛え方にしても出来るだけニセモノじゃなく、ホンモノに出会いたいとだれしも思うことが人情だ。そんなことを思いおこしますと、今後の私においても、そうと気付いた時“ナントイウコトカ”あっ!! 絶句でした。全く恐ろしいショックでした。でも一方では、“ソオーウ”と恋人にやさしくふれる様な実感もある。(これは彼の有名な彫刻家ロダンが春、接吻、抱擁等一連の作品に表現しています美の極地、実はこれも一つなんです)もっともこれらは別にレイレイしく美の極地なんていわなくても、世の殿方中の殿方の皆さんには好き好きのことですが、以上の感動は決して一本調子でなく、何かが複合的(ポリフォニー)になってい。あるいは重複している。そしてこの本能的にダブっているところこそ、絶大の妙味があると思うんです。またこのリアリティーという面からい

いまでも、アメリカの哲学者パースもいっています。“実際出会って思いのほかの側面（ギクリとする側面）がなければリアリティーではない”と、このいっている言葉にも合致しよう。

こんなことを通じて少なくとも今回の私の作品“ラグビー”はホンモノだと自信をもったうれしい反面、心深く切り込まれた一つの教訓みたいなものを得ました。

また、ラグビーのみの起源はイギリスにて12世紀ころより……1823年11月、エリス少年の劇的プレーに端を発し、今日に到る。だが多くのスポーツと同様にその起源は古代ギリシャやローマに求められるとなると、宗教界の混乱期によく“仏教は釈迦に還れ”といわれるが、これと同様に根源に問題提起を求め、その意味するものを出発点とする。この事により現実のもつ豊かさを見失っている今日のあり方（例えば、対象そのもの、問題そのものを見ようとしなくて安易な意味づけを意味）（“観念、イデオロギー”の固定化）に対して、深い重視の目を持つ機会を得たことを喜びにしております。

で、この様に今度の作品の完成前に赤裸々に味わったというより（認識した）ことも皆さんに偽ることなく報告させてもらって、実はあの例の我等が歌“勝つは体力、気力のしるし”あの体力、気力なんです、今の世の中は物が足りなくて人々は飢えようとしているのではなく、むしろ我々は精神材に飢えている。そう考えることによって、この世の中

の末世的終末に向かっているんじゃないかと不安定に思う。その精神的飢えの上にこそ、体力を、気力を燃やさねば、そしてお互に手を取り合って励まし、鍛えあって喚越しよう。くどい様ですが、この精神的な飢えの上にこそ、我等が体力、気力……と叫ばずにはおれません。

なお、ついでにと申せば失礼なんです、もう一ついわせてもらえるなら、我々はお互いに一つの釜の飯（めし）を食べあって、励まし、鍛えあった仲、いわばお互いに許しあえる、懐しい友人、そして今じゃそれぞれ各分野で活躍しておられる。そんなすばらしい仲間、時に、共にお互いのなかに土足で入り込んだり、入りこまれたりするかもしれん。しかし、いずれにしろ飾り気は捨て、自分の本当に思っている事もいい合い、いつか過ぎし日にやった青春の思い出、母校を後に理想に燃え、それぞれの方向に元気よく散って行った、その気迫で、あの抱負で明日へのスタートとしようではありませんか。

なお、今回の制作にあたり、ラグビーのいろんな事を知りたく、分からん時は心臓強く、ラグビー仲間のだれかれなく質問したし、ルールブック等の資料もおねだりしましたが、中でも同窓（45回卒）の伊藤大兄や先輩（41回卒）の鹿子木大兄には、お忙しいのにいろいろとお世話になりありがとうございます。私としましては出来るだけ、テーマ“ラグビー”という作品を通じて、またそのわく組から問題を固執したつもりですが、結果と

しましては、ただらだと、とりとめもない事を書く羽目となりましたが、何とか書けたことを皆さんに感謝しております。また作品原型の出来た時点で私としましては旧制中学在学中、とてつもない程面倒を見てもらった恩ある故田中栄一郎校長のご仏前に30年ぶりにお参りして、作品完成の報告と共に、作品のスケッチをお供え出来て、当初の念願が果たせて心晴れ晴れと引きあげましたが、今も目にありありと浮かぶ次第で、本当に良い思い出を持った事を心から喜んでおります。皆さんありがとう!! そして皆で天王寺ラグビー部の50年をたたえ、すばらしい我々のスタート台としようじゃありませんか。

一発必中のタックル精神

浅 岡 隆(45回生)

私が天中に入学したのは昭和13年の春であった。天中のラグビーに関してはすでに天中に在学していた兄からよく話を聞いており、また近所には当時天中ラグビーの選手として活躍され、私の入学と同時に卒業された西原篤介氏(40回)が住んでおられて私の入学を知って「天中では必ずラグビーをやれよ」と再三声を掛けられたせいもあって、入学早々からラグビーの選手になることに非常なあこがれを持っていた。たまたま入学1年の同クラスに柴垣(復)君、伊藤(康)君がいて、いつとはなしにラグビー部に入ろうかという話も出たが、1年坊主が4年、5年生に伍し

て練習に参加することは体力的にとっても無理だとの理由で、しばらく時機を待とうということになった。そしてその年の12月、全国大会予選の決勝戦対北野戦で応援席の一隅で目にしたタイムアップ寸前の逆転負けの光景、柴垣、伊藤両君と3人してラグビー部入部を申し出たのはその翌日であった。その時我々の在学中にはきっとこの仇を討って見せようと3人で誓い合ったのを今でも覚えている。

新主将には柴垣君の兄の志郎氏(42回)が付き、間もなく練習が始ったが、シーズンオフの練習にもかかわらず、やはり1年生の我々にとってはきついものであった。翌昭和14年2年生の夏季合宿練習中に母が亡くなった。「母の死に関係なくラグビーを続けろ」との父の励ましもあり、寂しさをまぎらわすためにも練習にはげんだ。しかしこの年は部員不足のうえ負傷者も多く、まだ2年生であった柴垣、伊藤両君と私が再三試合に出場せねばならぬ状態であった。そしてこの年も天理、北野に勝つことが出来なかった。松下哲三氏(43回)が主将を引き継いだ翌昭和15年も、春の近畿大会で優勝を果たしながらシーズンに入ってから負傷者が続出、全国大会の予選で天理に敗れ、北野との定期戦にも再び苦杯をなめた。シーズン半ば左手首を骨折した私はベンチでこの敗戦を見ながら口惜し涙を流したことを思い出す。

明けて昭和16年度、私たちが4年生になったころ、ようやく充実したチームが出来上がりつつあった。この年、新監督に阿部幸作

(25回・現桃陰会長) 田中健三(32回・現桃陰副会長)の両先輩を迎えた。監督2人というのもちょっと聞けばおかしい話であるが、阿部先輩は専ら精神面の、そして田中先輩は技術面の指導で、両先輩の見事なさい配ぶりは翌年全国制覇を成し遂げる大きな要因となった。中村主将を始め西村、渡部、白江諸氏(44回)の5年生に柴垣、若山、伊藤、私の他に後に入部し猛練習に堪え抜いた内海、佐々木、井上、小沢(旧姓川本)諸君の4年生の活躍もあって、このシーズンには明治神宮大会の予選で北野に敗れはしたものの、遂に全国大会予選の決勝戦で宿敵北野を11-3で下して、宿望の優勝を果たし、その出場権を得た。1年生の終わりに入部の時誓い合った夢が実現した喜びは、当時私たちにとって最高のものであった。しかしこの年の12月8日に勃発した第2次世界戦争のため翌17年1月の全国大会(第24回大会)は関西、九州の二地区に分かれて行われるという変則的なものとなり、大阪、紀和地区からは天中の他に天理と北野が選ばれて出場して来た。

何はともあれ我々が夢にまで見た南甲子園への出場である。1回戦で本大会最強豪といわれた愛媛師範と対戦し13-13の同点で抽選勝ちを得た天中は続いて京都三中、天理を破って決勝戦に臨んだが、ここで一方から勝ち進んで来た北野と再び雌雄を決する事となった。結果は残念ながら3-12の敗戦となり、優勝を逸してしまった。この年の北野は福井主将を始め劉、早田、中山、小松、山根、名

和諸氏を擁し、技量、闘志、品位の三拍子そろった実に立派なチームであった。この年、北野と3戦して1勝2敗という結果になったのも今にして思えば当然のことであったかもしれない。

明けて昭和17年度、捲土重来を期して新しいチームが編成された。阿部、田中両先輩に引き続いて監督をお引き受け願ひ、新主将に柴垣君、副主将に若山君がついた。既に歴戦の経験を持つ5年生に北江、伊藤(弟)、新村、西條、野口、衣川諸君の4年生がレギュラーに加わった。時すでに第2次世界大戦もたけなわとなり、そのためか春の大会も中止になって今後ラグビーもどうなるかわからなくなっていたが、当時の校長であった田中英一郎先生は天中の校技であるラグビーには特に熱を入れられ、我々選手に対しても深い理解を示され、また部長の奈良先生始め諸先生方の特別のご配慮もあって、非常に恵まれた環境で、とにかく練習だけは続けられた。恒例の関学大グラウンドにおける夏季合宿を終えた直後、明治神宮大会が予定通り行われることを知り、必勝を期して予選に臨んだ。そして……。くわしい戦績は記録の資料にゆだねるとして、明治神宮大会に優勝し、更にこの優勝後、海兵入学の主将柴垣君を失いながら若山新主将を立て、余勢をかって戦前最後の第25回全国大会にも優勝を果たし、ここに天中として初めての、しかも全国完全制覇を遂げたのである。創立以来18年歴代先輩の汗と涙で礎かれた伝統の勝利というべき快挙で

あった。

あれから30余年の歳月が経過した。しかしその間、絶えず考え続けて来たことは「よくぞ天中でラグビーをやり抜いた」ということである。事実、私の天中卒業後の人生はラグビーによりつくられたものであるといって過言ではない。戦後激動の時世を何とか無難に切抜け、現在、生きがいのある職業につき、幸せな家庭を営み得ることは、天中のみならずラグビーの先輩や後輩諸氏のご援助の賜であり、同時にラグビーで培われた「一発必中のタックル」の精神に支えられた結果であると信じているからである。もはやプレーの出来ぬ年ごろとなったが、ラグビーを愛し、ラグビーを思い、ラグビーに感謝しつつ私の人生は更に続くであろう。



ホイッスルと友

伊藤 康夫(45回生)

一昨年昭和48年11月、我々45回生の卒業30年の同窓会が有馬温泉で開かれた。宴たけなわ、出て来る歌は、黄塵はるか——の校歌にはじまり、勝つは体力、戦勝の歌、果ては復讐^{しゅう}の歌まで、在校当時の応援歌ばかり、それも皆よく覚えているのに呆れる。

思えば私がラグビーにとりつかれたのは、天中1年、昭和13年11月27日の北野中学との定期戦（全国大会大阪紀和予選の優勝戦でもあった）で、土壇場の逆転負け、優勝を逸した悔しさが、翌日だったか同じ組にいた浅岡、柴垣両君と部室を訪れた時から始まった。純心無垢^くの1年生の私には部室は山賊の巣に見えた。早速わきの大きく破れた古い虎のユニホームをもらったが、しばらくは家には内証だった。しかし父の従兄弟に昔同志社のラガーだった平田留造氏（東京在住）がいて、父もラグビーを知っていたためか何時とはなしに黙認の形になり、卒業までその巣の住人となった。

体育館の応援練習をしたのはその年だけで、翌14年のシーズンにはグラウンドでそれらの歌を聞く羽目になった。柴垣（兄）主将の昭和14年度、次の松下主将の15年度は部員が少なく、2年生の私らがレギュラーとして試合に出ねばならない窮状であった。上級生、先輩にとっては実に頼りない思いだった

に違いない。従って私共のクラスの連中は皆初陣が早い。大抵は2年あるいは3年で天中ラグビーの何たるかの洗礼を受けているはずだ。

私の初陣は2年生。昭和14年9月24日、花園10周年の招待試合で対同志社中学だった。フライングハーフ、初陣で初トライという快挙をやったのけた。（といっても皆の後ろについて走っている内に手にボールが、後ろから先輩らにしまったされながらゴールに駆けこんだ）以後どういうわけか、左のバックローを仰せ付けられ、4年生の松下氏より例の縦にボールを回転させるスローイングの練習を体育館の壁に向かっていやという程させられた。

昭和15年松下主将のシーズンには、センターまたはウイングをやった。この年春の近畿選抜大会で優勝する快調なすべり出しを見せながら、シーズンに入り負傷者も多く、しりすばみとなり、全国大会予選の準決勝で北野に敗退した。

昭和16年中村主将の時、春の選抜大会、優勝戦で村野工業に敗れはしたが好調のシーズンで、1シーズン3回北野と対戦している。9月23日神宮大会予選6―8負け、11月30日全国大会予選優勝戦兼定期戦11―3で勝ち、大会出場権を得たが、時局柄全国大会は関西と九州大会に分かれ、大阪から2校準優勝の北野も出場、優勝戦で3度顔を合わせ、一番大切なこの試合3―12で敗れ、初の全国優勝を逸した。この大会、天中はセブンで臨み、

ローバー柴垣、SH浅岡、SO私と4年生のハーフ団を組んだ。緒戦の愛媛師範大きな相手に圧倒され（師範学校は修業年限が1年長かった）13―13で抽選勝ち、北野との優勝戦ではバックリーダー渡部氏から出るサインは全部SOのキック、次第に相手バックローに合わされ始め、終わりににはヘッピリ腰で蹴るせいか、ボールはみな真上に上がる様になった。タックルされて起き上がった所に落ちて来る有様で実に情けない思いをした。しかしこの敗戦は不思議に余り残念な思い出にはなっていない。

昭和17年柴垣（復生）主将、我々45回生の5年の時は不敗の年だった。私のポジション遍歴も、この年は左センターに終始した。春の緒戦、関西学院大学を下して勝運にのり、神宮大会予選は大阪大会が9月20日から23日まで3試合、近畿中部予選が25日から27日まで3試合と、実に8日間に6試合という強行スケジュールで神宮大会に駒をすすめた。神戸二中との優勝戦、前半左ウイングの野口が負傷退場、後半も11―8でリードはしていたものの相手は欠けている左サイドを徹底的について来る。1ゴール逆転の危機に、あわやトライかという独走を反対側から返った右ウイング川本（現・小沢）の起死回生の猛タックルで切り抜けた。もしもこの時負けていたら以後の順風満帆は覚つかなかったかもしれない。

神宮大会優勝―大阪選手団の専用列車が東京駅に着いた時、出迎えの慶応の中西（一雄）

氏から“1回戦は京城師範、苦戦だぞ”と知らされ、全員何くそと大いに発奮、早稲田大学の東伏見グラウンドで、京城師範と修猷館中学に快勝、神宮競技場での台北工業との優勝戦に臨んだ。全試合タッチジャッジは早大の鹿子木氏がして下さった。優勝戦よりも京城師範の強い当たりと、修猷館のTB堀の活躍に苦しめられた方が印象的だ。優勝の決まった11月1日、柴垣主将の海軍兵学校合格の通知も舞い込んで二重の喜びにわいた。

柴垣の抜けたチームの建て直しは比較的順調にいった。若山を主将に浅岡がこれを助けた。（全国大会の予選に出場させるか否か、田中校長、先生方、諸先輩の間に種々論議され宇余曲折のあった事を後になって聞いた）11月15日から大阪紀和予選、敵なしで楽に優勝した。

全国大会優勝一昭和18年1月、第25回全国大会はFWに樋口が加わり、LWTBに野口と長谷沢が交互に起用された。この年度に入ってから既に約20試合を消化、しかも不敗という自信がなされたのか、酷寒烈風下の南甲子園で“前半タイスコアで行けば勝てる”とトスに勝っても風下に陣した試合運びは、第1戦を除いてその通りになり、遂に全国制覇という夢にまで見た感激を味わうことが出来た。

この大会既に外地からの参加校なく、戦局いよいよ急となり以後中止となったが、その参加章は小さな陶製の飾皿、優勝旗はオトギ話に出て来る様なのぼりがひと流れで、時の

文部大臣・橋田国彦氏書で“学行一如”とあった。メンバー一同のもらった目録は、立派な紅白の水引きのかかった奉書紙に“木盃一箇”。ただしこれは空手形に終わった。旗は戦後しばらくラグビー部の卒業記念写真に共に写っているが、今は紛失して学校にはないそうである。

この間、多数の先輩のご指導を仰いだが、ことに阿部幸作、田中健三、村田義幸各氏が終始私達と行動を共にされ、親身のコーチをしていただき部員一同、公私共にいろいろお世話になった。ともに泣き、ともに笑った諸先輩に万分の一の恩返しが出来たことを、うれしく思っている。また田中栄一郎校長の絶大なお力添え、学校挙げての熱烈な応援も優勝に至る大きな原動力となったことはいうまでもない。

チームも和気あいあい、実に気持ちの良いメンバーぞろいで、思えば非常に幸運であった。ただ佐々木、樋口という僚友を戦争があったがため若くして失ったことは非常に残念である。両君のご冥福を心からお祈りする。

花園のフロ場で他校の連中から“お前あと何年ラグビーをやるのや”といわれながら、昭和18年3月卒業と同時に私は浪人した。あくまで私の目で見、私の心に感じた昭和16、17年ごろを記したまでで、チームメート、先輩諸氏にはあの年代、また変わった見方があるのはもちろんである。

良き多くの先輩に恵まれ、多くの友人（後輩の人達をも含めて）を得たこと、ノーサイ

ドの笛とともに増えていった数多の知友、それもこれも、みなラグビーをやったればこそである。天中でとりつかれ、以後のラグビー生活でたたきこまれ、鍛えられて培われた精神と諸々の教訓は、現在私の貴重な処生訓となっている。そして終生離れないものと信じている。

人生の「宝物」

伊藤 寿夫(46回生)

天中ラグビーの思い出を書こうとして古いアルバムを引っ張り出して見た。天中1年入学は、昭和14年4月1年1組として小畑先生（ヘブさん）が主任であったが、なぜか1年1組の写真がなく、いきなり昭和15年2月11日ラグビー部5年生送別記念写真となっている。ここにいる1年生は、私、内海君、廣岡君、宇野君の4人である。私の兄、内海君の兄（共に2年生）も入っており、廣岡君の兄君はこの写真には入っていないが、確かこの送別5年生と同級で4年終了で慶応に入学されたものと思う。宇野君の兄貴はラグビー部員ではないが2年生であった。昭和14年度の1年生ラグビー部員は、皆兄貴を通じて校風の影響を受け入部したのであろうか。もっとも、私は最初からラグビー部に籍を置いたわけではなく、最初は柔道部に入ったのである。2学期になってからであると思うが内海君に引っ張られて、何となくラグビー部倉庫前まで行き、そこでその日限りで海軍に入ら

れるという伊藤和夫氏から、ストッキングなどを頂戴し、その日から何となく柔道部の方は失礼してしまったようである。先の5年生送別写真には、従って伊藤和夫氏の姿はない。

私は小学校の時、兄の天中1年のときの対北野中定期戦を花園で観戦した記憶がある。タイムアップ直前、FB廣岡の前で大きくボールがワンバウンドし、それをトライされて惜敗したのではと覚えている。私のラグビーとのかかわり合いはこのころからであったか。父に連れられて京大一同志社の一戦を花園に観に行ったのも昭和13年秋のシーズンであったろう。

1年生の秋、昭和14年のシーズンでの私の思い出は、対京一商戦で寺田球場まで皆について行ったことであろう。この時は文字通りついて行ったのであり、片道切符で往復したように思う。寺田球場とは近鉄西大寺から乗り換えて奈良線で京都の方向へ幾駅か行ったところであったが、当時は協会に登録した試合では近鉄の往復切符が各チームに出されていて、皆さんこの切符を持っていたせいとか、1年生部員の切符のことなど念頭になかったのであらうが、行きはともかく帰途は全く無賃乗車であった。往路は西大寺位までの切符を買ったような気もするが、というのも、寺田の駅（駅名が寺田かどうか不明）は全くの田舎駅で改札口も出入り自由である。しかし、切符なしでの帰路の車内では気が気でなく、実に長く感じたのを覚えているが、上六の改

札口出口でうまく切符を持って出てしまった浅岡氏が大声で『おいこれお前の切符やろ』と手渡してくれたときは、全く生き返ったこちで実に変なことが思い出となっている。

2年生、昭和15年は春の近畿選抜に優勝したが秋の全国大会予選では北野に敗退した年である。前に私は1年生秋からラグビー部に入ったように書いたが、それは学校内でのことであって、家に帰るとまだ大っぴらにはラグビーをしていることにはなっていないかと覚えている。その理由は、兄が2年生から試合に出ていたが余り早過ぎるということと、やはり学業成績のことがあったものと思われるが、当時は家に内証の部員が何時も何人かいたようである。この秋、記録によると9月22日の対神戸二中戦（於神戸商大）には行かなかったが、その1週間後9月29日花園第2での対天理中戦には行っている。

神戸二中戦では、キックしたボールが^崖の下へ落ちてしまったことなど聞かされたことを覚えている。天理中戦では、前半8-0とリード後半0-8と返され結局同点となつて、先輩（田中氏であったか？）から、こっぴどく叱られたのを鮮明に覚えている。実力さえあれば、後半は前半の2倍の得点が取れなければならないということであった。このようなことで、夏合宿には2年生では参加せず、3年生のときが最初の参加であった。

昭和16年、3年生であるが、この年の練習が一番激しかったと思う。春の選抜は優勝戦対村野工戦で5-3の負け。再三の柴垣氏の

ペナルティーキックが惜しくも届かず押しながら相手がSHの短足出っちにけり返された口惜しさが忘れられない。なお私の初陣もこの年対八尾中戦である。記録では29-0で勝ちとなっているが、私は試合そのもので何をしたかサッパリ覚えておらず、暑いような好天気であったことのみ記憶がある。このときの3年生は北江君、新村君らが常時メンバーに入っており、17年度全国優勝に向かって力を養っていたわけであった。

さて17年度は無敗、神宮大会優勝、18年正月の全国大会優勝の天中4年生時代の思い出多い年であるが茶色に変色した資料からその2、3を紹介する。

神宮大会は正式には、第13回明治神宮国民錬成大会と称し大会趣旨には「爰に畏くも三笠宮崇仁親王殿下を総裁に奉戴し大東亜戦下に……」とあり名誉会長は内閣総理大臣東條英機」とある。また府県対抗中等学校代表選手名欄には姓名、年齢の次に初、中、上、あるいは甲の字が印刷されている。これは当時体力賞検定というのがあり、その初級、中級、上級が示されているものと思われる。私の名前の所には甲となっているが、この甲の意味は全く忘れてしまった。ついでに、天中の平均年齢は約17.5、第1戦の相手の京城師範は約19.3歳となる。早稲田大学東伏見グラウンドでの第1戦、最初のスクラムをガッチリと低く組んで一步も押されなかったこと。第2戦では相手修猷館にゴールを許したときゴール内で円陣を組んで柴垣主将以下ゲキを

交わしたこと。これらは実感として、手ざわりとして今でもハッキリと手ごたえを覚えている。優勝戦の台北工業戦では、余り明確な記憶はない。ラインアウトからのボールが偶然手に入り前を見たら相手FB 1人しかいなかったこと、ゴール直前で一瞬とまどったことがあったが、これは台北戦であったか、全国大会の対神戸二中戦であったか定かではない。

また、神宮大会出場の時の学校から保護者あての案内状には、費用計37円5銭で右の内大阪府より10円、学校より15円計25円補助として支給、差し引き12円5銭各自負担とある。18年正月の南甲子園での全国大会は、明治専門部と同一宿舎でその規律の立派なことに自然と見習ったこと、試合に臨んでは全員実に満々たる自信を持ち、ゴール前に押されても落ち着いて処理し、こんな悠々としたチームの態度はどこから出て来たのかと自分でも考えさせられたことが、いまだに強い印象として残っている。

昭和18年4月からの天中5年生は、大東亜戦争も激しくなり、海軍飛行予科練習生に入る者もあって、とにかくあわただしいことであり全国大会も開催されなかったわけである。

私のアルバムと共に出て来たパンフレットによると、18年9月24、25、26日の3日間にわたり、大阪府中等学校報国団第2回総合体育訓練大会闘球班番組として花園闘球場にて12校によるトーナメント戦が行われている。

このメンバー表では、FWが前衛、HBは中衛、TBは後衛であるが、FBはなんと殿衛である。しかし、私達はこんないい方をした記憶はない。

かくて、天中5年間のラグビー、ここに書いた以外にも、苦しかった、あるいは楽しかった夏合宿の思い出等々尽きないものがあるが、天中ラグビーを通じて得た精神的なものは、実に大きな私の宝物となったことを付言して筆をおく。

人生の信条として

三宅哲夫(46回生)

私は小学生のころ、天中生だった兄貴について花園ラグビー場へ、対北野、対天理定期戦を見に行ったのが、ラグビーとの出会いではなかったかと思います。子供心ながらそのふん囲気に関かを感じたのがラグビーへの病みつきだったように思います。

昭和14年から18年まで天中時代を過ごし、その大半をラグビーに明け暮れたよき時代でした。よい先生、先輩に恵まれたものだといくづく思います。昭和17年の明治神宮大会、昭和18年の正月大会に連続全国制覇した当時の早朝と夕方の2回にわたる練習もよき思い出です。

終戦後、関西学院にすすみ、天中時代の先輩、後輩、あるいは好敵手と同じチームで汗を流し、早明と覇を競うよき時代に恵まれました。天中時代とは違った意味での充実した

生活だったと感謝しています。

現在は、テレビでゲームを見る程度で、ラグビーを忘れてしまったような生活ですが、ラグビーで得たものが生活の信条になっていると思います。

見事なタックル

野口 治 郎(46回生)

昨年義歯がこわれ歯科診療の問題が大きく取り上げられている最中、長期にわたって歯科医に通う羽目となりました。しかし昭和17年、先輩村田義幸氏に無料でつくっていただいたこの歯が、30余年もよくもったものだと思いつくづく感じいったことでした。

昭和17年の国体、近畿中部地区予選決勝で、神戸二中（現兵庫高校）との前半のことでした。左 C・T・B 伊藤康夫氏のパスを受け、勇躍してインゴールにとび込んだ次の瞬間、強い衝撃を顔面にうけて意識を失いました。間もなく意識が戻りましたが、そのまま更衣室にかつぎこまれ、村田先輩らの手当てを受けるうちに試合終了となりました。終了とともに雪崩れこんできた上級生に11－8での勝利を聞き、共に大声をあげて泣いたあの感激は、その後の本大会での優勝以上に、今もまざまざと思い浮かべることが出来ます。後刻、聞いたところではトライした時に追いついたトイメンの蹴ったクツ先が私の口に当たったとのことで結局6本の歯を失うこととなりました。

本大会に間に合うようにと、村田先輩が義歯をつくって下さったのですが、毎日の生活の中で、ふと義歯が感じられた時にはあの日の事が思い出され、ラグビー部の生活が連想され、太平洋戦争末期、あるいは戦後のつらい時期を生きぬく心の強い支えになってきたと思います。

大学卒業後は兵庫県公立高校に勤務し、ずっとラグビー部を指導して来ましたが、その間最も参考になったのは、天中時代の先輩、上級生の教えでした。第1は、ラグビー部の運営、対人関係が戦争中にもかかわらず極めて民主的であったこと。第2にプレーの上で例をあげると、C・T・BはW・T・Bが生きするようなパスを送ったこと。第3に、これが最も強調されたが、キックオフ後5分間で全員タックルをすること、等々。最近高校のゲームを見て痛感するのが第3のことで、シャープな、瞬間になぎ倒すようなタックルにめったにお目にかかれない。そこにあるのは上半身、あるいは首のところを手だけ伸ばしているぶざまな恰好です。「見事なタックル」のないゲームがラグビーといえるでしょうか。ラグビーに関係する者の発起すべきことだと思っています。

在職20余年の記

宇野 憲 治(46回生)

昭和25年3月に京都大農学部を卒業した私はその4月から長野県の下伊那農高の畜産の先生となり1年5ヵ月勤務した後、母校天王寺高に26年9月16日生物の先生として奉職、以来24年になろうとしています。その間の思い出は尽きないのですが、紙面も限られますので、全国大会出場を果たした年度を重点に書き記すことに致します。

まず就任1年目の26年度は前年度優勝校として無条件出場だったのですが、青井主将を始め13人の名選手がごっそり卒業し、矢島、山崎両君の全国優勝経験者中心に、岩井、木村、染谷、永田、松岡、渡辺の8人の3年生が若いチームを引っ張って行ったのですが、たしか9月末だったかに京都へ山城高との練習試合に行ったところ64-0で敗れるとか、敗戦の連続で全国大会では恥をかかないかと心配したのですが、次第に立ちなおり大会では高松高（現盛岡工）に6-0と惜敗するまでにこぎつけました。しかしこの試合は20数個の反則をとられ2PGの敗戦でした。

翌27年度は山本主将以下、永島、松原、上野、柴田、田中、真鍋の7人の3年生が中心で近畿大会にも出場できたし、大いに期待の持てる年だったのですが、私の指導力不足もあって伏兵の大手前高校に全国大会予選で敗れてしまいました。

28年度は吉村主将以下、井上、石井、上西、下平、杉田、寺下、平河、松宮、松村、宮城君の11人の3年生がおり、そのうえ49回の岡仁詩君がコーチに時々来てくれ、大いに期待が持てた年でした。事実国体予選は決勝に進み布施高にたしか3-3の抽選負けするといった状況でありながら、その国体予選で60点もの大差で勝った池田高に全国大会予選で敗退するというぶざまな結果に終わってしまいました。次の29年度と比べる時、いかにチームの結束というものが大事かを痛感する次第です。

さて29年度は11人のレギュラーが卒業し残ったのは宝田、青井君のハーフ団、CTBの白神君、フランカーの藤田君の4人だけだったのですが、大器の福本君をCTB、俊足の奥村君をWTB、田中君（田中健三大先輩の長男）をプロップに、マネジャーをやっていた小西君をフランカーと8人の3年生を中心に新2年生7人の計15人ちょうどのメンバーで新チームを発足しました。しかし青井賢次君はさすが全国優勝を果たした達也君の弟だけあって実に不言実行、率先してチームをまとめ引っ張って近畿大会、国体、全国大会の3大会出場をなしとげたのでした。もう次は負けだといい続けていた新人大会で、一戦一戦勝ち抜いて四條畷を雨中で前半の8-0の負けから後半8-8に追いついての抽選勝ちが近畿大会出場につながり、修学旅行を返上して必勝を期した国体予選で再度四條畷を破って北海道国体に出場する事が出来ました。

国体では1回戦ようやく戦後復活して来た保善高と対戦、スクラムでは10ヤード近く押し込まれながら、ラックにがんばり一度TBパスが回れば第2センターの福本君が相手ウィングの外に出てしまうようなバックスの活躍で、確か28―6で快勝、準決勝松山商戦は不調で辛勝したものの、決勝は秋田工高に前半0―0と善戦し、後半13―0と突き放されたものの準優勝の好成績を上げました。全国大会でも3度四條畷を破って出場、1回戦俊足榎本をようする北見北斗を破り、2回戦福岡高山田君の好技に惜しくも敗れました。この年を振りかえると私も星名先生指導の同志社大のラグビーを見て、バックスプレーに開眼し、軽量FWから見て早い球出しをしてバック스에得点を頼ろうとの基本方針を立て、ハーフ団はうんと距離をとって宝田君のダイブパスで青井君に十分の余裕を持たせSO以下は浅い伸びるパスを相手マークの前を通してラインを余そうとの策を立て、カニの横ばい式のパス練習を考案したところ、青井、白神、福本の3君はよくそのフィーリングをつかんで、時には第2センターが相手ウィングの外に出てしまうようなパス攻撃が可能になった事がこの年の成功につながったと思います。またフランカー藤田君のタフな動きも2次攻撃の起点を作り、スクラムは弱くともラックはとれる原動力となりました。しかし何といっても青井君の指導力が抜群で、時には1年生からのレギュラーの白神君を練習を休んだ罰としてグラウンドを数周回らすような事を

したりしても、それが結局チームの結束を固めるのにつながり、全員が一致して協力、自らの向上をめざしたのが好成績につながったといえましょう。またこの期は卒業後も宝田君が早大、白神、福本、田中君が関学大で、青井君も珍しく大阪大から東西学生対抗に選ばれる活躍をしました。また非常に仲良く長く親交があり、後輩のためにも田中啓一君を筆頭によく尽くしてくれました。その名主将青井君が若くしてガンのため昨49年死去された事は誠に哀惜の念に耐えません。なおこの年私の足らざるを補い、よくチームに精神力を吹き込んでくれた50回の内田実君のコーチ力もまことに大きかったと思います。この期は私が天王寺高を見て以来の最高の思い出を持った期といえましょう。

さて30年度は川口君が主将で前年度と一変してFWのチームとなり、川口、長浜、阿部、藤井、片野の1、2列は3年生で強力で2年の大西、黒野の3列も強かったものの大脇、菅田君等のバックスはやや非力で、そのアンバランスから国体予選は淀川工に敗退してしまいました。しかし全国大会予選ではFWががんばり、決勝の四條畷戦は、大西君が相手SO長谷川君を完封し、スクラムは猛威をふるってスクラムトライ2つをあげ8―8の同点抽選に持ち込み全国大会出場の栄を得ました。全国大会では保善高と対戦、FWはよくがんばったものの力及ばず1回戦で12―0で敗れました。この年及び次の年は41回の鹿子木先輩のご指導と前年卒業の田中啓一君の暇

を見てのFWのしごきが強力FWをつくり上げ全国大会出場につながったと思います。

31年度は1年生からレギュラー出場していた黒野君が主将となりFWに金森、黒野、横島の3列、バック스에谷、松岡のハーフ団、植木、大西、山鳥の強力ラインと、攻守にすぐれたFB佐野の9人の諸君が3年で強力チームができ、鹿子木先輩も一番力を入れて指導して下さり、新人大会こそ淀川工に不覚をとったものの、国体、全国大会は再度淀川工を破って出場する事が出来ました。この年は天王寺のグラウンド改修工事があり大阪市大グラウンドや今川の白鷺公園グラウンドを使わせてもらうといった苦難の年でした。そのうえ国体予選決勝では中心の黒野君が足を痛めて出場出来ず、金森、山鳥両君のこぼれ球からの2トライがきいて淀川工を振り切りました。神戸国体では3年連続保善高とあたり、いきなり黒野君のサイドアタックからの独走50ヤードの1ゴールをとりながら以後は保善高の強力FWにあたり負け、最後植木君の豪快な突進からの1トライを返したものの敗れました。全国大会予選決勝では、また淀川工と対戦、FB佐野君がインゴールに入った相手FBをタッチインゴールを割って外に放り出す好タックルを見せ淀川工をふり切りました。当時の淀工のエースであったFBが国体予選、全国大会予選ともそのミスが敗戦につながったのは皮肉だったと思います。またセンターの山鳥君が予選では大いに活躍しながら本大会・国体では発熱、全国大会では足の

負傷で不出場に終わったのは誠に不運なプレーヤーといえましょう。なおこうして全国大会出場が決定した後、12月試験終了後、チームは京大グラウンドを借り合宿し、京大とも練習試合をしましたが、当時やや弱体とはいえほとんど互角、あるいはそれ以上に渡り合い全国大会も大いに期待が持てたのでした。ところがこの年末、流感がまんえんし、この合宿中に感染したらしく、12月25日の北野定期戦を終えての白鷺公園の練習には遂に10人ぐらゐの出場者という事態になり全国大会には何とか間に合ったもののまだ発熱を押して出場する者もあり、北見北斗高に13-6と敗れてしまいました。国体、全国大会とも前述の山鳥君の欠場でFBの佐野君がCTBをつとめ、FBを不なれな1年生の山中君がつとめたのが響きました。

さて3年連続全国大会出場を果たした翌32年度は苦しい年となりました。高7回の田中啓一君の弟宏二君が主将で、内田、三島、米田、長友、野原の6君とバレー部から助けてくれた辻野君、野球部から助けてくれた畠山君の8人が3年生で若いチームを引っ張って行きましたが、苦難の連続で当時天王寺としては珍しく強かったサッカー部にも押され勝ちで、全国大会予選では鹿子木先輩のお奨めもあって、田中君をセブンエイス兼フライングハーフに使うという策に出ましたが実らず、淀川工に15-0の3Gに敗れました。

つづく33年度は同じく高7回の宝田君の弟良三君が主将でSO、高9回の山鳥君の弟忠

郎君がSHのハーフ団、フランカー松下君が副主将でFWリーダー、NO8の豪快な突進力を持った福島君、野球から転向してフランカーやWTBをつとめた和崎君、1年生時から全国大会に出場した井本君、及び同じWTBの阪本君、プロップでがんばった山本君と8人の3年生がおり期待できる年でした。しかし今一つ調子に乗り切れず新人大会、国体予選とも苦杯をなめ、全国大会予選では楽な相手と目されるチームにも今一つ得点をあげられず辛勝の連続で決勝の淀工戦を迎えました。後から私も知ったのですが、この試合を控えて3年生の諸君は話し合いを持ち、心を一にしてこの試合に向かったのです。私は正直なところ恐らく勝ち味はないのではないかと思っていました。ところが試合が始まっての第一スクラムで宝田君が猛烈なタックルで相手SOをぶっとばしたのがきっかけで、全員がこれまでにないファイトでぶつかっていったのです。そして後半なかばスクラムサイドを抜いた宝田君がラインの背中でパスしたところ、第1センターの1年生の赤阪君が絶妙のフリーパスを通し、2年生伊藤君の独走トライでとどめをさし、見事全国大会出場をなしとげたのです。そしてこの一戦でチームは見事に変身し、全国大会1回戦でこの大会準優勝の盛岡工高に5-0と敗れはしたものの後半終わり15分間は相手ゴール前であわやトライの場面も再三という善戦を致しました。本当に一度必死のゲームをやればチームはこうも変わるものかということを知った年

でした。

34年度は伊藤五兄弟（長男康夫、二男寿夫氏が昭18年の全国優勝、三男栄夫氏が昭22年のベスト4、四男道夫氏が昭25年の全国優勝）の末弟和夫君が主将で、FWに清原、清水、三島(弟)、森の諸君、バック스에泉君、陸上部から助けてくれた大本君の7人が3年生だったのですが、幾分力不足で、2年以下の部員も不足し、全国大会予選ではまだ当時は名もなかった近大付高に1回戦で敗れてしまいました。この試合2年のSO赤阪君の肩の脱臼^{きゆう}もこのゲームにはひびきましたが、伊藤君始め3年の諸君にとって不遇の年だったといえましょう。

35年度はまた苦難の年でした。主将がSHの松井君でSOに名手の赤阪君がいてハーフ団は立派だったものの、春に退部者が出るなど苦労の連続で、夏合宿も伊丹の自衛隊で兵庫高と帯同で行ったものの、ほとんど負けとあったところで国体予選も1回戦で敗れるとあった有様でした。ところが9月に入って退部していた巨漢の椋本君や2年生の市川君が復帰し、ウイングに陸上部の今仲君が加わり、プロップの大山君と3年生が5人になり、椋本君などはばりばりがんばって、むしろチームを引っ張って行くようになるとチームはぐんぐん復調し定期戦で敗れた北野を全国大会予選では20数点の差をつけて破って決勝まで進み四條畷高と対戦しました。この試合はまさに痛恨の試合で一度はライン際を快走してトライをあげた今仲君が前半終わり、

見事なゆさぶりでゴールポスト中央のノーマークパスを落球し、それを拾った相手SOの岡田君が自陣インゴールから、こちらのゴールまで100メートル以上独走してのゴールというアドバンテージルール適用の絵にかいた見本のような得点をあげられ、それが最後までたたって後半最後の力をふりしぼって市川君のトライで2点差となったコンバートを椋本君がライン際すれすれから好キックしたボールは無情にもバーにあたって手前に落ち涙をのんだのでした。今仲君も陸上から転向してよくやってくれたし、椋本君も復帰してよくやってくれました。チームが整ってきてやる気が出来た時の強さというものをつくづく感じさせられた年でした。

36年度は石田君が主将で水上、星野、渡部、市川君と陸上から加勢してくれた北畑君の6人が3年でがんばったのですが、翌年力を発揮した2年生がまだ力なく、3年もやや力不足で国体は淀川工、全国大会は興国高に敗れてしまいました。

37年度は35年の松井君の時代に既に1年生からレギュラーとして出場していたプレイヤーが多く期待の年でした。佐々木主将がSO、SHに室賀君、CTBに河野、網本君、FBに樋口君、FW3列に奥沢、辰己、大西君の8人の3年生がそろいました。高7の田中啓一君も卒業後毎年チームを良く見てくれていましたが、この年は最も力を入れてくれました。私もバックスがよくそろったので、High Speed Rugbyなどの洋書を取り寄せ

て訳したりし、数々のサインプレーを取り入れたり、FWのワインディングプレーや、セービングパスなどを練習させたり、田中君とよく酒をくみかわしては研究し、相談したものです。FWはしかし1年生の宮城、堺、中務の3君がレギュラーと非力でしたが、田中君はよく鍛え教えてチーム力から押してとにかく早い球出しに集中し、有力なバックスを生かして全国大会出場を果たしたのです。しかし国体は私はちょうど来日していたフランス学生対全法政大のレフェリーをおおせつかって東京に出かけていた時、四條畷に敗れ、全国大会予選も準決勝の対生野高に苦戦し、3年生を自宅に呼んで田中君はじめ3連続出場のころのOBが肉を買ってくれて七輪で焼き焼きを食べながらミーティングを行った事を記憶しています。決勝の淀工戦は立派に勝ち全国大会に出場しました。本大会では1回戦日大鶴ヶ丘に12-0で勝ち、2回戦北海高に11-0と勝ちベスト8に進出しましたが、準々で優勝した天理高に20-0と敗れました。田中進先生に撮っていただいた8ミリフィルムを見れば天理高にはFWも押し負け、フランカーの早いつぶしと研究した動きですっかりシザースプレーなどを抑えられたものの1、2回戦ではものの見事にサインプレーや、ワインディングプレーがきまっているのがよくわかります。29年度につぐ思い出多い年といえます。

つづく38年度は田中主将と大屋、近森、河原、岡井の5人の3年生で、前年プロップを

つとめた巨漢の田中君をSOに起用し、その突進を攻撃の軸にしようとしたが、なかなか田中君がその本領を発揮出来ずチームも苦戦の連続でした。そして全国大会予選で本大会出場を果たした淀工との対戦を迎えました。この試合、奮起した田中君は遂にその本領を発揮し、再度スクラムサイドを突破してチームは勢に乗り、タイムアップ寸前まで4点のリードを保ちました。そしてノーサイド寸前淀川工のコーナーへの突進を必死に防いだ後、ゆさぶられて中央にトライされ、ゴールを許して惜しくも1点差で敗れたのです。田中君や横島君などがコーナーに迫られた時トライさせろと叫んでいたのを思い出します。これを乗り切れれば私の経験からおしても、一度性根のすわったゲームをすればチームは生まれ変わるので、まことに惜しい年だったといえます。

つづく39年度は堺主将と宮城、橋、中務、松田、広瀬、野中、井上の8人の3年生がおり期待の持てる年でした。しかし今一つ成績が上らないままに春を過ごし夏合宿を迎えました。そして夏合宿の最終日のゲームでのぶざまな有様に私はカンシャクを起こしたところ3年生の某君がさからったのです。その場がすんで私は寂しい気持ちになり、ちょうど長野県の飯田でのラグビー講習会に田中啓一君と共に講師として招かれていたのを機会に古巣の下伊那高など飯田の高校のコーチを兼ね旅行し、ついで同志社大、関学大などの合宿を笛吹きついでに20日ばかり泊めて頂き

信州で過ごしました。8月末にやっと帰阪したところ全員そのまま退部することなく、その後もがんばってやっていてくれ9月のシーズンに入りました。しかし何となくこのシーズンは気づまりのまま肝心の秋に入っても余り口を出さず過ごしてしまいました。結局はたしか寝屋川高に全国大会予選で敗れてしまいました。ここ数年に変わって来た気風というものを思い知らされた年でした。しかし選手も気を遣っていたようです。

翌40年度は矢野主将と橋本、河上、山崎、湯川の5人の3年生がいましたが、前年の事件の尾も引いて2年生の退部者も多く遂に最悪の事態が到来し新チーム結成の折には遂に部員8人という状態になってしまいました。確定的に退部したのは新1年生の入部した4月でしたが新入大会、国体1次予選は私は涙をのんでその連中の手を借りて棄権はやめ、春の夕陽定期戦（6月始め）から新1年生7～8人を加え戦ったのを覚えています。そして阿部幸作会長にこの窮状をうったえたところ、始めて菅平の夏合宿をさせて頂くことになりました。合宿は天王寺OBといっても過言はない関学大OBの砂原さんのお世話で関学高と帯同しむしろ1年生の17人が主体といった状況で連日ゲームをしましたが、この年兵庫県代表として全国大会出場をなしとげた関学高に対し、最終日にはエースウイングの欠場もあったにせよ勝利を収め若い1年生諸君が心から喜んだのを覚えています。そして春、国体予選とも負けた花園高に全国大会予

選では勝利を収め翌年に期待をつないだのでした。

41年度は山根主将以下浜田、前田、倉内、吉村の5人の3年生でしたが、この年も新人大会では浪商高に勝ち予選の決勝まで進むという好調のスタートを切りながら合宿前にかなりの退部者が出、秋は今一つ成果が上がらないままに終わりました。そしてこの年菅平合宿に帯同した徳島市立高が全国大会に初出場しました。

42年度は得能主将がSO、佐藤君がフランカー、長野君がNO8、辻野君が3番、久保田君がフッカー、前田君がCTB、西窪君がマネジャーと7人の3年生に、1年時の17人から減少していました。しかしプレイヤーの6人は1年時からレギュラーでこの年大いに奮い立ち大きな進歩をとげました。この年は淀川工が大阪では群を抜いており、春近畿大会にも優勝し、その折来日したカナダのセントジョージ高校と対戦した近畿高校選抜チームにも7人が選ばれるという状況でした。しかしその主力は岡本、本多の両CTBとハーフ団フランカーでありました。私はこのチームの監督をうけたまわりましたが、秋全国大会の組み合わせが結局淀工を倒さないとな全国出場が出来ない組み合わせであったので、田中啓一君と相談したところ、彼も淀工を倒すにはSO得能君のキック力をフルに使って淀工FWとボックスを裏向かせオープン攻撃のペースを絶対狂わせてしまう事だと意見の一致を見ました。そして10月末から11月定時制

のナイター設備をつけさせて頂きボックスキックからのつぶしを徹底して行いました。しかしそのような策に出ることが予選の他のゲームなどから相手にわかってしまっは対策を立てられるので、全国予選では淀工戦まで普通のオープン攻撃の型に終始しました。その結果3回戦の対八尾高戦では後半半ば過ぎに2トライ程リードされるというような状況に陥る危ない場面もありました。しかしこの試合はボックスのきめ手の前田君の決断力ある突進で逆転に成功し準決勝の淀工戦を迎えたのです。ゲームが始まるとまずスクラムで3番の辻野君が大いにがんばり相手1番の胸を完全にとって押し込み敵ボールも再三とる有様で、よくコントロールされた得能君のボックスキックでゴール前に迫ってからの前田君らの突進と、絵にかいたようにゲームは思い通り運び、後半残りわずかを残して16—0とし少し気を許した残り5分に、やっと淀工ペースに入ってボックスに2トライを許したものの、確か16—6と快勝する事ができました。淀工の堀川監督は3番にやられたといていたそうで、この策の成功も辻野君を中心としたスクラムにあったようです。こうして出場した全国大会は初出場できなり準優勝した目黒高とあたり前半始め風上を利しての得能君のキックと前田君の突進で12—0とリードしたものの、前半半ば過ぎから次第に目黒のペースに入り31—12と逆転されました。

43年度は前年全国大会出場メンバーの過半数をしめた諸君が残っており、主将鈴木君以

下、川口、駒井、原、上山、植松、佐藤、肥田の8人が3年生で期待が持てたのですが、今一つ3年生に意欲なく秋のシーズンに入ってからでさえ、もめ事があるなどで成果のあがらないままに終わってしまいました。

44年度は吉川君が主将で相楽、三宅、田中、黒田の5人が3年生で、2、3年生が少なく苦しい年でした。得能君の1年時のように榊谷君始め有望な1年生が多数入部した事が大きな救いでした。合宿は例年のように関学高と菅平で行いましたが、そこに北野高も加わって3校励み合って行いました。北野とはよい勝負でしたが本番の国体予選では敗れ、なお悪いことに9月始めの練習試合で吉川主将が足を骨折しました。しかし11月の全国大会予選には復帰し枚方高などを破って準決勝あたりまで進んだと記憶しています。また吉川君は1月来日した台湾の六信職業高と対戦した全大阪高校選抜のSOをつとめました。

45年度も柴垣主将、松谷、辰己、大島、植松の5人の3年生でしたからチームの主力は2年生でした。この年は全国大会50周年で大阪からは3校出場権が得られる年でした。田中啓一君も大いに鍛えてくれましたが、まだ2年に翌年程の力はなく、安居君を中心とする四條畷の強力FWに負かされてしまいました。

46年度は再び全盛の年となりました。新チームとなって2年生が依然として16人も残っているという状況で3年生になっても補欠が出る事は必至という盛況でした。そして1月

新チームは練習試合ではあるが天理高に勝ち近畿大会予選でも花園高に決勝で苦戦したものの勝ち、久しぶりに和歌山での近畿大会に出場しました。近畿大会では準決勝で天理高に思わぬ大敗を喫しましたが、それ以後問題が起きました。このシーズン田中啓一君や福本君などが特に力を入れて見て来てくれたのですが、それに対し3年生が自分達でやりたい、あまりOBには口出しをして欲しくないなどといい出したのです。それは多すぎる3年生の問題もあり、いろいろ複雑な事情があったと思います。私は間に入って困りましたが、4月末ごろOB対現役戦のような機会を持ち、3年生とOB及び私を交じえての話し合いをし被害を最小に食い止めて、結局、榊谷主将CTB、村田CTB、山本SH、吉村、森崎WTB、陽FB、吉川ブロップ、南出フッカー、寺島フランカー、犬飼NO8、肥田マネジャーと11人の3年生が残りました。しかしこれ以後は田中啓一君は表立って出てくれなくなりました。鍛えに

これらの諸君も後から感じたでしょうが、もしこの年田中君の強い指導があったら、あるいは全国優勝も可能ではなかったかと惜しまれる次第です。しかしその後は一応順調に進み、夏合宿では関学大や京産大にも勝って、大きな故障もなく2軍も立派にそろって国体予選は枚方高を破って和歌山国体に出場、1回戦岐阜工を破りましたが、2回戦で秋田高に大敗しました。全国大会予選も淀工を破って出場、再度1回戦で岐阜工を破りま

したが、2回戦佐賀工に十分逆転出来る試合ながら惜敗してしまいました。しかしこの年、大阪高校選抜チームが韓国遠征しましたが、天王寺から梶谷、村田、山本、吉村、陽、吉川、南出、犬飼の8人が選ばれるという幸運を得ました。

47年度は丸橋主将、柴原、中西、岩崎、日野、中川、鬼頭、谷口、宮井の9人の3年生がそろい、高11回の松下君がコーチとなって力を入れてくれました。しかし今一つ成績が上がらず、秋のシーズンに入りましたが、次第に力を取り返し全国大会予選では枚方高を破って決勝まで進み、浪商高と決勝を争いました。この試合で始めてチームは生き返り、いきなりシザースからの1トライをとられたものの以後は優勢となり、逆転のTBパスが右に展開しながら惜しくもノックオンで逸し惜敗しました。こんな事ならもう少し力を入れて指導しておけばよかったと惜まれた年でした。なおこの年来日した韓国の養正高と対戦した全大阪選抜に中川君がSO、丸橋君がプロップに選ばれ活躍しました。

48年度は山下主将、浜川、高橋、西尾、能勢、今西、三輪、吉岡、吉川、松野の10人の3年生がおりましたが、春から不運が続きまとい、春の北野の50周年での招待試合でSHの能勢君が強く頭部を打ち入院する事故があり、夏合宿では松野君が命にかかわる大負傷をし、年末まで上田の小林脳外科に入院するという事態が起きました。幸い松野君は一命をとりとめ、翌年復学し今春卒業しました

が後遺症もまだあります。1日も早く正常な社会生活に戻るよう祈っている次第です。そしてこの年は全国大会予選で枚方高に敗れてしまいました。最終的にも3年生が9人出場していたのですから、今一步ファイトある試合をして欲しかったと思います。なおこの年は高20回の久保田君がコーチとしてよく見てくれました。

49年度は五熊主将、丸橋、吉岡、堀井、牧の5君が3年生で発足、新人大会当時は部員16人でしたので新3年生はかつて退部した連中を誘おうと交渉をしたようですが、私はそれを止めました。このままで新しい年を待って皆ががんばってやれば道は開けるといった事を覚えています。そして新人大会は南寝屋川高に勝ちながら四條畷高に敗れました。そして4月待望の辻野先生（高20回の前述のプロップ）が化学の先生として来校しました。私としてもラグビー部としても全く待望の時でした。そして国体予選は1年生を3人も使わざるを得ない破目に陥って国体出場の大東高に破れたものの、夏の強化練習以後は次第に力をあげ、全国大会予選では大阪鉄道高に新記録の134-0で大勝。北野、大手前と破って準決勝まで進みました。しかし全国大会出場を果たした工大高に雨中戦で敗れてしまいました。しかしこの年から私はともすれば辻野先生に頼りがちになりますが、ボックスはやはり私が教えなければと思いつつやっております。そして今年50年度は3年生が主将木村、木原、魚野、三好、金田、鎌田、戸村、

福岡の8君がおり、2年生14人1年16人計38人の大所帯となりました。夏合宿を終えこれからというところが現在の状況です。

つまらぬ駄文を記してきましたが、ある程度くわしく記した期やそうでない期があり、読んで腹立たしく思われるOBも多いかと思いますが、どうかお許し下さい。ふり返って見て私はほぼ三つ位の期に大別出来るのではないかと思います。すなわち戦前の気風がまだ残っていて、部員に大いにやる気があり、我々の古い気風がよく理解されていた時代（3連続出場から宝田弟君のころまで）。つづいて天王寺が次第に進学校化して来て、部員減少のため他の部から応援してもらったりした時代、そして最近の楽しくまあまあの感じでやろうという時代と変わってきたような感じがします。しかしたとえ部員数が少なくても、やはり各自が自ら鍛えてActiveに（一見しごかれているように見えても真の自発性があり）全国大会出場のPurposeを真にめざして、そして苦しく見えながらも実はenjoyしながらがんばった年が全国大会出場を果たした期といえます。そしてそれらの期のプレイヤーは大学に行っても皆ラグビーをつづけ、本当にラグビーをやった価値を見いだした期だと思えます。その意味で田中啓一君ともども指導して全国大会出場を果たした期の事は私の記憶に長くとどまっております。現在私の子供も長男は中学時代の水泳が尾を引いて天王寺の水泳部主将となった関係上（49年度の前述の南寝屋川高戦には部員不足

のためNO8として出場）今年大学に入ってラグビーを始めましたし、次男は現2年で同じくラグビーをやらしてもらっていますが（今年の合宿で足を骨折しご迷惑をかけました）私もそのような年になってしまいました。しかし私の天王寺の生活の続くかぎり出来る限りの力を尽くして行きたいと切願しております。

心のささえに

入 貝 五 郎(47回生)

ラグビー部室をはじめて訪れたのは昭和15年3月、天中の入学願書提出の日であった。当時大阪商大（現大阪市大）のラグビー部員であった兄貴（天中39回生）は、何も知らない小学生を部室に連れてゆき「入学出来たらラグビー部」という手形を松下新主将に発行した。何とまあきたないところだろう、というのが初印象でした。そして入学式の日、目のギョロツとした怖そうでもあり、やさしそうでもある松下キャプテンにぼんと肩をたたかれて「入貝君か、今日から練習だよ」と呼びかけられたのが、私のラグビー生活のはじまりであります。

昭和18年12月に海兵に入学するまで文字通りラグビーに明けラグビーに暮れた毎日でした。入学式の日から海兵に出発する日までラグビーの球をさわらなかったのは17年の秋に肺門浸潤で、そして18年の10月に盲腸の手術でベッドについた時ぐらいい、授業はさぼっ

でも、練習だけはという毎日でした。昭和15年4月から18年12月まで3年8カ月という短い期間ではありましたが日本の激動期に直面したため、その内容は変化に富んでいたといえましょう。食糧事情は入学当時から悪化の兆がありましたが16年12月の太平洋戦争突入と共に一挙に表面化してきました。しかし練習の方は時局の転回とは無関係に伝統という歯車の上をエンドレスに走り続けてゆきました。昭和17年11月3日には夢に見続けた全国制覇が明治神宮で、続いてその冬甲子園で実現したのも諸先輩の残していかれた伝統のおかげと確信しております。昭和18年は戦局ますます厳しく、全国大会はもとより10月に入ると府下の対抗試合すらむずかしくなり、19年に入ると練習すら思うようにならなかったようです。

私事で恐縮ですが、人生48年。戦前、戦中、戦後とまことに目まぐるしく変化に富んだ人生を送ってまいりましたが、その間最も印象に残る経験はと問われたら、私は遅滞なく「天中のラグビー」を最右翼にあげます。正直いって楽しかったという印象はゼロに等しく、苦しかったこと、つらかったことの連続であったといえますが、その後の人生で「天中のラグビー」に耐えてきたことが、いかに心の支えになったかという点で一生最右翼の地位を保つものと思います。

天中をはなれて32年その間桃陰ラグーのメンバーとしては何一つお手伝いも出来ず、多くの劣等生ではありますが「天中ラグビー」

の名をけがすことのないようにという気持ちを持ち続けてがんばっていることをご報告申し上げます。

ロマンを求めて

谷 沢 龍 一(47回生)

月曜日から始まった練習が、木曜日にピークとなり、日曜日に試合を迎える1週間。木曜日がすめばほっとしたものでしたが、あこのころの元気さは、なつかしい思い出です。

重い石をリュックに入れての行軍競走、ラグビー部のメンバー5人1組(4年生)で、全校で2位となり(1位は5年ラグビー部)その後更に練習をしても、へこたれなかったものでした。

先日「ラグビーにロマンを求める人が増えて来た」という加藤芳郎氏の漫画(週刊朝日・トップ魔)を見ました。私も現在関西ドクターズラグビークラブの一員ですが、今やロマンを求めるところか、専らボンコツメンバーとして、玉ころがしをしている有様ですが、それでも、そこはかかない青春の夢を追って、適当に楽しんでおります。これもささやかなロマンというべきでしょうか。

クラブでは村田先輩(42回)を始め、中村、東野、寺島(44回)、伊藤(45回)、東野(49回)の諸先輩が各方面に活躍しておられます。

現役の諸君にとっては学業とスポーツを両立させる事は、並大抵の事ではないと思いま

す。とかく怠惰に流れ勝ちの世相に抗して、自分の意思を貫くには、それなりの覚悟が必要です。「天高ラグビー部」の誇りは、何物にもかえ難い最高の青春時代と思います。今その時代を身を以て経験しておられる現役の諸君が、くじける事なく各自のベストをつくして、青春のロマンをかちとられる様、祈って止みません。

戦争と青春とラグビー

田 中 宏(47回生)

私が天中2年生の時、あの熾^し烈な大東亜戦争（太平洋戦争）が開始された。厳冬の12月8日朝、田中校長と小畑教頭が、悲壮な面持ちで「祖国日本が非常事態に突入し、存亡の危機にさらされているから、天中生は益々自重し、学問とスポーツとの両面から自身を鍛練しなくてはならない。つまり、文武両道が天中生の理想である」と発言された。何か異常にホオがこわばり、悪感に似たような緊張感を全身に覚えたような記憶が残っている。

でも、当初は日本軍は連戦連勝であるから全員の気持ちも楽であった。「祖国に身を捧げるために、身体を鍛えねばならない」—そのような神妙(?)な気持ちでぼくはラグビー部へ入部したいと申し入れたものだ。

中学3年の時であった。入貝五郎君が、ゴリボンという愛称で活躍していた。その機敏な動作は我々同級生の目を見はらせるものがあった。ぼくは入部するならばこの部しかな

いと堅く決心した。自分らのクラスでは入見君、高瀬君について3番目ぐらいだったと思うが、技術の低さでは、恐らくぼくの右に出るものはなかっただろう。マネジャーとして1年上の内海君がいた。元選手であったが、身体の関係でマネジャーとなっていた。入部を申し出た時「やれるかな?」というような顔付きをしたが、温厚な彼は早速、部長の許可を取ってくれた。

ぼくもうれしきこのうえない。だが、父親が反対であったので、練習グツを買ってくれない。やむを得ず、先輩が捨てていたクツの中から一番ましなのを拾ってはいてみたが、釘が中へ出ていて、とても苦痛であった。あまり走れなかった。タックルの練習が時々あったが、これもこわかった。徹底的にさぼってしかられた。たまにタックルすると頭を打って気絶寸前になった。ハーフバックが恰好いいと思って希望してみたが、名ハーフの浅岡君それに西条君や北江君が懸命に指導してくれたが、あまり上達が遅いので、ついにフォワードのフロントローに回されて、毎日スクラムばかり組まされていた。レギュラーにしてもらったのは、たった1回しかなかったが、技術そのものはともかく、＜戦争・青春・スポーツ＞がミックスした中学時代はまたとない痛快な良き時代であった。

2年上の柴垣復生君が主将の時、待望の全国優勝をなし遂げた。その前の夏は、確か関西学院大学の学生寮で合宿をした記憶がある。青々と広々とした芝生の上で、ひときわ

高くボールが天空をめがけて飛んだ。寮母さんにかわいい年ごろの娘さんがいたが、その昼寝姿を内証でのぞき合いたものだ。たしかだれか片思いでもしていたのだろう。

悪名(?)とどろく某先輩は学校に内証で飛田遊廊で遊んだ話を後輩に聞かせてくれた。(ただし真偽のほどはさだかでない)童貞を捨てた時の話、遊んだ相手の女の体臭が手にこびりついて取れない話など……。それらの未知の世界をわれわれ後輩の童貞たちはごくりごくりと生つばをのみ下しながら聞いたものだ。「ほら、女の匂い(臭い?)が残っているだろう」と、その先輩はわれわれに手をかがしてくれた。「うん、すごい匂いをする」などと次々と返事をしている。順番がぼくのところへ回って来た。でも、あまり臭気を感じないのである。(ほかの連中はごまをすっていたのかなあ?)「そうかな? 匂うかなあ」とぼくがいったら、「おまえは鼻づんぼだろう、ばか!!」としかられてしまった。この先輩も名スリークオーターであった。帽子をわざとピンピンに張り、形を少し変えてイキな恰好をして、さっそうと歩いていた。肩から下げるカバンも、蓋のつけ根を切って恰好よく、だらりと風を切って活歩していた。だが軍事教練の配属将校にはウケは良くなかった。この先輩の帽子を取り上げて、とくに教練の時間は終了して休み時間になっているのに、しきりに二木(ふたつぎ)配属将校(大尉?)は棒でこつきまわしていた。2階の教室から見ていて、ぼくたちは腹

が立ってこの先輩の応援をして「サゴエ!! もういい加減に止めろい」とどなった。この教官の名前は二木佐吾衛といった。さっそく鬼が住むという<教練・体育教室>へぼくらは連れこまれた。二木大尉が「貴様らはオレのアダ名をいったな」と怒った。「いいえアダ名は申しません。お名前を申し上げました」とぼくはいった。「もう一度同じ言葉をいってみろ」と教官はいった。「はい、サゴエ!! もういい加減に止めろ!!」

そのとたんに彼のクツがぼくの背中にこたえた。「バカ! 教官の名前を呼び捨てにしてよいのか!! 3尺下がって、師の影を踏まず——という言葉を知らんのか」

彼も涙ぐみ、ぼくも涙ぐんだ。後年、二木教官は復員して病の床に着いていた。ぼくは確か河内松原の自宅に二木教官を見舞ったことを覚えている。水面に花が影を落とす池の傍の2階でやせ衰えた二木教官の姿を見て、ぼくは胸を打たれた。やつれた体を起こして彼は涙ぐんだ。根はきつと情にもろい人であったのだろう。「君らの若い力で、この荒れ果てた祖国を復興してくれ」ぼくは河内松原の辺を通ると、今でもこの亡くなった二木教官の面影を、昨日のようになつかしく思い起こすのだ。信太山の軍事教練で宿泊した時、フケ飯を食わせたり、風呂に小便を入れたりしたと先輩たちはだぼらを吹いていたけれども。

話はさかのぼる。ぼくは中学時代、変てこなアダ名をつけられていた。<M珍>という

のがそれだ。読んで字の通り、Mが珍しいというのである。ことの起こりはこうだ。1年生の水泳の時、みな水泳フンドシの上からパンツをはいて、もそもそと着替えていた。ぼくは面倒くさいので、素っ裸になり＜つり金＞ではき替えていた。すると悪童たちがいっせいにかけ寄って来て局所を凝視するのである。そのうちの1人がいった。

「ヤッ、デッカイヤ」

ぼくは答えた。

「水でふやければ大きくもなるさ」

皆がどっと笑った。別の男がいった。

「ヤッ、曲がっている」

ぼくは答えた。

「ふんどしに巻き込まれて曲がったのさ」

ふたたび皆がゲラゲラ笑った。

翌日登校すると、もう＜M珍＞の異名は、全学年にひびいていた。アダ名が変な名前をつけられたものだから先ほど述べた夏の合宿でも、先輩たちに付けねられるところとなった。

ある昼寝の時、局所が妙に痛いような気分で目が覚めた。疲れて熟睡するのである。2階で寝ていたのだが、局所の先にひもを結びつけて、1階の階段の下で悪先輩(?)たちが、そのひもを引っ張っていた。「チン、チン」と1人がいうと、どっと皆が笑うのだ。名付けて「チンチン電車」というのだそう。真っ赤になって半泣きになるやら、わめくやら。この「チンチン電車」の加害者の数は相当な人数に達するだろう。遠慮なしに名

のり出られよ。もうとっくに＜時効＞は完成しているのだから。

＜M珍＞と呼ばれていたころはまだよかった。悪友どもは＜脱腸衛門＞などという変なアダ名をとえ始めた。つまりぼくは脱腸だというのだ。ぼくは本気になって悩み始めた。うつつとした日々が続いていた時、2年下だったか、伊藤君(弟)がぼくの相談に乗ってくれることになった。伊藤君の兄さんも名選手でお世話になったが、この弟さんには別の面でお手数を掛けた。幸いなことに、伊藤君のお父さんが当時名門病院という定評のあった藤森病院の副院長であったので、ほかの悪友たちに内証で、そっと受診することになったのである。奥まったついたての陰で、ぼくは恥ずかしそうにいったものだ。

「ぼく ＜脱腸＞なんです」

念のため形式的に診察をしてくれた後に、不思議そうに副院長先生はぼくに訊ねた。

「＜脱腸＞？ どこにその＜脱腸＞があるでしょうか？」

「ぼくのは大き過ぎはしないでしょうか？」

「なぜ、そんなに気になるのですか？」

そこでぼくは一部始終を話したものだ。

突然、副院長先生と看護婦たちが、腹をかかえて笑いだした。

「君は、その噂を真に受けて心配していたんですか!! ＜脱腸＞? いや、正常です。立派です。正常です。いや、ワハハ……」

ぼくが立ち去った後も、笑いは続いていた。

た。でも、ぼくはほっとしていった。

「伊藤君、ありがとう」

「よかったですな。＜脱腸＞でなくて、でも悪い友だちにかかったものだ」

伊藤君（弟）は、ぼくと一緒になって、ぶんぶん怒ったり笑ったりしていた。

ぼくに似たようなアダ名「チンポロ」をつけられたことがあったが、これには大先輩があった。雨の日で練習が出来ない関係もあり、相撲でトレーニングをしていた。この先輩も一生懸命に取り組んでいたが、パンツのすき間から、ポロリと例の「一物」がこぼれたのだ。愛きょうある光景に、どっと一同が笑いこけた。

「チンポロ」と最初は命名されたが、いつしか「チンがポロリ」と変わった。折しも「シンガポール陥落」の直後であり、その先輩も、もっと上品なアダ名にしてくれと申し出たそうで「チンがポロリ」は「シンガポロリ」から「シンガポール」と変わり、東條首相の命名にならって「昭南市」と変化した。「昭南!! これは光栄だ。ハハハ」とこの先輩は大笑いしていたが、ぼくを最もかわいがってくれたのもこの先輩であった。名スリークォーターであり、名フルバックでもあった。当時違反であった阪和線ガード下の喫茶店で「あん蜜」をおごってくれたのを覚えている。

1年の時に驚いたのは、北野中学との対抗戦であった。この時は確か花園ラグビー場の試合で敗れた記憶がある。当時の5年生が涙

ながらに応援旗を焼き「来年はきっとこの仇を討ってくれ」と絶叫していたのを思い出す。天高校医の宮脇歯科、宮脇祖順先生は名ウイング、水泳部キャプテンであった。代々水泳部キャプテンが応援団長であった。ぼくらの時は岡田享之君である。

柴垣キャプテンの全国優勝の時がピークで、後は祖国日本の敗戦度の進展とともに試合もあまり行われなくなり、ぼく等が5年の時は高瀬キャプテンであったが、北野中学との対校試合もなしで終わってしまったが、このころは中学だけでなく、旧制大阪高等学校（大高）や、旧制大阪商大（現大阪市大）と対抗試合をして、一ランク上の学校との勝負にも敗れたことがなかったから、その実力は大了なものだった。

富士屋（現天王寺ステーションデパート3階うどんすきの店）の2階で壮大な祝賀会が行われた。田中校長や、当時こわかった阿部監督らの列席のもとに、当時としては珍しい「若鶏のもも焼き」などが出されて、全員かなり酔い、大いに放言をし、大いに歌い踊ったものだ。だが、帰りのアベノ橋の上で、ある先輩が真相を告白した。

「おい、皆のもの、先ほど＜若鶏のもも焼き＞を食べたろう。うまかったか？」

「はあ、うまかったです。戦争の食糧難の配給時代に、久しぶりでごちそうになりました」

「うん、ごちそうならいいが、実はあれは食用蛙の後ろ足なんだ」

「……」

とたんにアベノ橋の上で「ゲエッ、ゲエッ」
と一斉に嘔吐^{おう}の聲が聞こえたといったら、い
ささかオーバーであろうか。

「パンチDEデート」なんて非公認の時代
であったが、それでも、ひそかな“恋”があ
った。先輩の名選手たちは試合のパンツのベ
ルトの代わりに、女学生のセーラー服のネク
タイを腰に締めていた。「羽衣高等女学校」
だの「夕陽丘高等女学校」だの、更には「ウ
イルミナ高等女学校（現大阪女学院高校）」だ
の、皆いそいそと腰に巻いて、精いっぱいグ
ラウンドの上を走り回っていた。このころの
ことだったと思う。悪先輩（？）が「今日は
夕陽丘高女の運動会だから、更衣室をのぞき
に行かないか」とさそった。全員OK!! だ
が、ぼくたち1年、2年、3年生は＜馬＞の
役で上に乗った先輩は塀ごしに「ヘッ、ヘ
ッ、ヘッ」とニタニタ笑いながら見物してい
た。

下からぼくたちが声を出した。

「しんどいです。代わって下さい」

「ようし、もう少し辛抱しろ。よい場面を
たんのうするほど見たら交代してやる」

だが、その時に後の方から恐ろしい教護連
盟（学生補導係の先生）の聲が聞こえたのだ。

「コラ!! おまえたちはどこの中学生か!!」

クモの子を散らすように5年生、4年生は
散げ去って、捕われたのは土台の＜馬＞にな
っていた。ぼくたち下級生ばかり。長時間、
教員室の板の間に正座させられて、タコをつ

られる羽目となった。ともあれ悲壮な敗戦の
さなかに、めまぐるししも華やかに昇華され
た天中ラグビー部の青春時代は、終生忘れ得
ない感動の日々の連続であったといえよう。

〔追記〕 柴垣先輩や入見五郎君に続いて、
ぼくは海軍兵学校へはいった。その時、高瀬
君らからだと思うが、手紙が江田島に届い
た。「学徒動員や空襲の中でも、ラグビー部
の練習は続けている。すべての対抗試合は
＜超非常時＞ということで中止になったけれ
ども……」大きな感動を覚えたものだ。高瀬
君、谷沢君、篠原君、そして後輩の伊藤君
（弟）、門戸君、岡君らの姿がまざまざと天中
のあの硬いグラウンドとともに浮かべられた。
スクラムを組むと地面が硬すぎて滑るので、
やはり水を打って、タイトの練習をしている
のであろうか。この時のメンバーから、後年
近鉄へは行って実業界ラグビーで大きく名を
あげた優秀選手が出たのも、なるほどとうな
ずかれる。相手もないのに、歯をくいしばっ
て練習を続け、桃陰ラグーの伝統の灯を絶や
さなかった高瀬君らの努力を高く評価してほ
しいと思う。

ペナルティーキック

古 沢 啓 三(48回生)

私がラグビーをはじめたのは、兄（39回生 古沢潤三，昭和21年死亡27歳）の影響である。小学生のころから兄のゲームを花園へ家族でよく観戦に行ったものだから，そのころから天中へ入学すればラグビーをやるんだと決めていた。天中に入学すると間もなく，六



島崎君，小生，吉田君

軒長屋にある部室へ申し込み，楕円形のボールを追いかけだした。ちょうどその年の12月に大東亜戦争が勃発し世相は軍国調がだんだんと激しくなり，登下校にも脚絆を巻き軍事教練も盛んになっていた。祖国のために空に海に若人がどしどし志願しはじめていた時代で，何時か朝礼の時に当時の田中校長の訓示に続いて，阿部会長が演壇に登られ熱弁をふるわれたあと，話のむすびに「空だ男の征くところ，ラグビー男のする運動」と話された

のを覚えている。その後戦争がすすみ中学3年生ごろには，当時のほとんどのスポーツが敵国競技だということで英語は禁止，ラグビーも闘球と呼称された時代である。

さて日ごろ敬愛する兄からはいろいろラグビーをするについての心構えや注意を聞かされた。やれ脚を冷やすな，肉離れや負傷のもとだ。ボールみがきは自分からすすんでやれ，雨の後のクツの手入れを念入りに……等々。優しい兄であった。その兄があるとき次のような話を聞かせてくれた。

慶大時代のあるゲームで相手にいくつかのトライを許しながら慶大はノートライ。しかしその日は兄のペナルティーキックがよく決まり，ペナルティーゴールの得点のみで勝利を得たゲームがあった。ゲームが終わっての帰途に，だれかが「今日は古沢のペナルティーキックで勝ったようなものだ」というような話を話した時，それを耳にされた監督がすかさず「だれがボールをそこまで運んだのだ!!」といわれたそうである。話はこれだけだが，兄はキッカーのみが得点をあげたのではなく，ラグビーは15人でやるものだとすることを強く私に教えたかったようである。後年私も兄と同じく天中，慶大と進み，ポジションもFBをやりゴールキックを蹴るようになったが，この話がいつまでも脳裏にこびりついて離れなかった。私のゴールキックは決して上手ではなかったが，15人が運んでくれたボールをいつも精いっぱい大事に蹴ったつもりである。

その後、社会へ出てからも、このキッカーとしての心構えは兄の教えとして胸に秘めている。良き兄を若くして失ったが、天中時代は背番号15、慶大時代にも兄と同じ背番号16のF Bのジャージーを着られたことを思うと何か兄弟の因縁めいたものを感じるのである。

ラグビーの報酬

岡 仁 詩(49回生)

昭和17年4月～23年3月まで第2次大戦の戦中、戦後を天中ラグビー部で過ごした私は、それ以後の長いラグビー生活の中でも、そのころの思い出は忘れられない。現在の私はそれなくしてあり得ないと考えている。

昭和20年10月、戦後の復興すら何の手もつかず、食糧事情は最悪、現人神^{あらひと}の天皇が一挙に我々と同じ人間になり、多感な青年として、日本人として情熱を燃やしていたものが、全く目標を失って何を信じていいのかわからないような状態におかれたときである。楯円のボールが我々若者の唯一の支えでもあった。現在の若い人達は、こんなことを聞いたら何を神がかったと一笑に付すかもしれない。しかし事実である。2度とあって欲しくない世相ではあるが、私にラグビーを人世の伴りよとせしめた最大のものかもしれないと思っている。

そして我々の仲間は、戦後の日本で一番早くラグビーの試合をやるのではないかと相手物を物色、浪高尋常科(旧制高校付属中学)と

試合をした。その試合実現のため浪高尋常科の中田、坂本君等と再三の打ち合わせのため交友を深めいったのもなつかしい思い出である。これが戦後初の試合であったかどうかは定かではない。結果は0－6と敗れた。

あの天中ラグーマンの誇りとする虎のユニホームもなく、部員が先輩の間を訊ねまわり、戦災の中も大事に保存しておられたユニホーム(純毛)を拝借、色あせ、紺と黄色が、グレーとクリーム色になったもの、比較的あざやかなもの、とりどりの色合いのこのユニホームで第1回の試合を行ったのである。

第1戦に敗れ、それではと続いて甲南高尋常科に挑んだが、これまた敗戦、気だけあせてもう一つ戦績があがらない。この時期、役員してこられた先輩方の熱意で、コーチとして松下哲三さんに来て頂いた。戦争中ラグビーらしいラグビーをほとんど知らなかったにもかかわらず、1年生の時の全国制覇のイメージから、自分等はラグビーのエリートのように考えていたのが大きな間違いだったようだ。私達は松下さんによって初めてラグビーの“いろは”を教えて頂いた。先日久し振りで松下さんとお会いしたが、昔と変わらぬ童顔でいつまでたってもお若い感じで、自分の白髪を振り返り見て感無量であった。

そして12月25日、戦後復活第1回北野中との定期戦を見事3－0で勝ち、明けて2月11日、神戸二中との定期戦を11－0で勝ち、やっと天中ラグーマンとしての面目を保った。前述の如く食糧もままならぬ中で、松下さん

がコーチ、そして運動用品をやっておられた斧原先輩のご好意、OB会の会計でいろいろ個人的にもお世話になった村田 Pig 先輩、ありがとうございました。

5年生になると、松下さんは関学に進まれ、海軍から帰って来られた全国制覇の主将、柴垣復生先輩がコーチとして我々の面倒を見られるようになった。更に早稲田にいておられ、病気で帰阪しておられた川本さん、そして全国制覇のとき柴垣さんが海兵に行かれたあと、主将をされた若山克己先輩らが指導して下さいました。雨が降ってグラウンドがぬかるむと若山さんが必ず来られ、“今日はマタ公(柴垣先輩のこと)からお前等^{いのち}の生命を頂かった”と云って天中独特のスマイルマッチ、夏の合宿で昼寝の最中に“カーヤン(若山先輩)が来た、”とだれかが叫ぶと一瞬皆がとび起きて顔色を変えたのも本当になつかしい思い出、よき思い出である。今は芸術家の温和そのものの若山さんから、その面影をしのぶことすら難しいようだが今でも“岡くん、元気ですか”と優しく声をかけられても思わず、気を付けの姿勢になるのは私だけでなく49回の連中共通のものであろう。1年生の時、暗い Box の奥で目だけがきらりと光っていた浅岡さん、大学時代に対戦して身のすくんだ北江さん、新村さん、厳しく思いやりのある上級生、竹谷、青井、木下、竹尾らすばらしい下級生、そして“ラグビーは男のする競技、女出来ない競技……”と、いまなら中ビ連から差別だとやっつけられそう

な講演を全校生徒の前で名調子でやられた阿部先輩ら先輩方のご支援、荒廃の世相の中で本当に幸せな時代を送らせて頂いたと思っている。最終学年のシーズン、国体予選で北野中に0-13と敗れたものの、定期戦を兼ねた全国大会予選決勝で快勝、松下、柴垣両先輩のコーチで、我々は最も洗練された強チームと自負していたにもかかわらず、戦後復活第1回の全国大会予想には、たしか“天王寺中も都会らしく洗練されたチーム”というわずかに18文字でかたづけられ、なにくそ、と思ったものだ。1回戦、関東代表成城高尋常科は33-0、しかも11トライ、ノーゴールという見事な？ 勝ちっぷりで2回戦準決勝福岡中と対戦、その強力FWに徹底的に押し込まれ、0-3で涙をのんだ。その時の優勝戦は、既に我々が勝ったことのある神戸二中と福岡中で争われ、0-6で福岡中が優勝している。そしてこの福岡中に負けた日、関学のグラウンドの傍の夏の合宿でなじみの Kansei 寮で合宿していた我々は、これで最後かと思うとそのまま別れにくく、何としてでも、その晩は泊まって語り明かしたい心境であった。何としてでも泊めろとダダをこねた私達を柴垣さんは一生懸命なだめ、それでも無理をいい続けたら、最後にあの冷静な柴垣さんが涙を浮かべて“気持ちちはわかる。しかし金がない”といわれてはとした。私達は複雑な心境で帰路についた。

私も、天高のコーチを1年、その後同志社のコーチ、全日本のコーチ等を経験しながら

ら、時にふれて、その時のことを思い出し、柴垣さんのその時の立場、心境を考え、何度か反省、なつかしさと同時に今だに手を合わせておわびしたい気持ちです。"柴垣さんすみませんでした。ほんとうにありがとうございます。" 来日した イングランドラグビー協会の会長、Dr ケンプが "ラグビーの真の報酬は、銀杯やチャンピオンシップではなく、ラグビーをやる楽しみと各プレーヤーの間に結ばれた永遠の友情にある。ラグビーというのは決してそれ以上、それ以下のものでもない" と語った言葉が私には印象深い。50年の伝統とは、50年、半世紀の友情に結ばれて初めて存在し得るのだと思う。天高ラグビー50年の歴史の中の一コマに連なり、その友情の中に生きている自分を誇りにしたい。

そして…全国制覇

西川 義行(49回生)

第2次世界大戦の進展につれてラグビーを「闘球」と呼ぶようになった。始めはピンとこなかったが「撃ちてし止まむ」戦争一色の当時であったからラグビーをやれるだけよかったのかもしれない。闘球という名に慣れたころには戦局いよいよ急を告げ、工場への動員で闘球どころではなくなっていた。しかし、ラグビーに対する郷愁はつねのるばかりであったので、49回ラグビー部員一同がラグビーをしている写真だけでも撮っておこうという、花園ラグビー場へ行って写真を撮った

のもなつかしい思い出である。

日本の敗戦によって戦争が終結した。「国破れて山河あり」再び天中で勉強できたことは本当に幸せだった。授業が始まり運動場でボールをけることが出来るようになった。運動場から見える校舎の窓ガラスは情けない程たくさん割れていたし、体育館裏の部室は焼失してしまっていた。新しい部室は銃が持ち去られた旧銃器庫であった。ラグビースューズがないので弱った。売っていなかったのだ。日本中食べる物がなくて生きることが大変だった時代である。そんな時代にラグビーをやれたのだから割合に恵まれていたのであろう。更に恵まれていたことは、松下哲三先輩にコーチしてもらえたことである。基礎的なことから教えてもらったことを今でもおぼえている。

師走の声を聞ころ北中と定期戦ができることを聞いて小躍りして喜んだ。しかし、それからが大変だった。虎のジャージーをそろえるために先輩を訪問したり、ラグビースューズを借りにまわったりした。水に弱いファイバー底のシューズで試合をしたものもいた。翌日の新聞の記事を紹介しておこう。(昭和20年度記録参照)

敗戦後わずか4カ月で定期戦が行えたことを心から喜んだ。ラグビー関係者はもちろんのことだが、当時の故田中栄一郎校長先生が意気あがる天中健児の姿に満足して下さったのが記憶に残っている。

小雨が降り底冷えのする昭和21年2月のあ

る日、西宮球技場で神戸二中（現兵庫高校）と定期戦をした。神戸二中のドリブルラッシュに対し一生懸命セービングしたことが特に思い出されることである。

その年の春より、柴垣復生先輩に教えてもらうことになった。やさしく、合理的な指導によりラグビーがますます面白くなり、技術的にも向上していった。連戦連勝、大阪に敵なしの勢いをもって全国大会に出場した。第1戦は東京代表に楽勝。第2戦で福岡中学に惜敗した。今もって集まれば、バックスの独走をトライに結びつけられなかったことと、スクラムが押しに押されたことが話題になる。昭和22年度を果たせないままに卒業、ラグビーが好きでたまらないままにうちそろって現役と練習をしによく行った。今になって考えてみるとよく暇（勉強もしないで、働かないで）と金（食べる物の不自由な時代に）があったものだと思う。

昭和24年秋より僕1人で現役のコーチをするようになった。「がんばれ、がんばれ」といっている間に、大阪大会で優勝して全国大会出場。準決勝で秋田工業に敗れた。片上主将はじめ元気なチームだった。テキ肉を食べ、秋田名産を食ったのだがそのかいなく負けてしまった。しかし次年度の基礎がこの年に出来たのである。新メンバーによる近畿大会では快調に優勝。日本一をめざして主将青井達也君を中心にハードトレーニングにとび込んでいったのである。僕もある面ではきびしくいった。一つのパターンを絶対に（99%

でなく100%）やり遂げて欲しかったから、何度もくり返してやらせた。年齢があまり変わらない私のいうことをよく聞き入れてくれたことを心から感謝している。朝から晩までいや夜を徹してラグビーの話をしたこともあった。ラグビー以外何もない日々だった。国体予選は実力を発揮しないままに負けてしまった。いくら力を持っても、それが出なかったら負けるのだということをいやという程思い知らされた。チームづくりの波について大へんよい勉強になった。選手諸君も辛い経験だったが、よく生かしていつてくれた。

全国大会予選はまさに敵なしの感があった。力いっぱい戦ってラグビーを楽しんでくれたと思っている。大阪大会で勝って西宮のトキワホテルに合宿。自由でのびのびした合宿だった。というのも実に個性的な選手の集まりで型にはめられない魅力を持っていた。試合については記録もあることだし当時の選手諸君の寄稿もあることだろうから割愛させてもらいます。第1戦は力を出し切って一方的に寄り切りの勝ち。第2戦は試合の始めにサインプレーでスクラムサイドを抜いたトライによって相手が調子を乱したのをマイペースに巻きこんで引き倒しの勝ち。第3戦北見北斗戦は第2戦なみのゲームをしようと思ったのがいけなかった。中途半端な引きが相手の調子を引き出し、当たり勝とうとする相手をかわし切れず、当られっぱなしでもっと時間があれば負けていたかもしれない。満身傷だらけ、選手諸君は疲れ切って食欲もあまり

なかった。肉よりも塩さけでお茶づけサラサラという有様で、本当に心配だった。「勝つは体力気力のしるし」まさにその通り、試合前夜のミーティングにはびっくりする程の元気を回復してくれた。秋田工業との優勝戦はまさに作戦通り俊足、技巧派の相手バックスをピタリと止めて、WTBがSOのキックを押えた。トライで先行し、FWのだめ押しのトライで、日本一の栄冠をつかんだ。底抜けに明るいチームだった。皆の口ぐせは「まかしとき」指示したことの一つ一つに対し「まかしとき」という軽快な答えが返ってきた。結果的に完全にまかし得た頼もしい「よい男たち」だった。全国制覇という快挙は選手をとりまく多くの人たちの尽力の結晶であった。天高あげてのバックアップもさることながら、今は亡き木下常吉氏の物心両面にわたるご援助は言葉にいい尽せないものであった。

先年、天中49回に始まり、高3回を中心とする高6回が合同で会をもったことがあった。私たちの青春時代は、今日程豊かな時代ではなかったが、それなりに熱情をぶつけ合った思い出は語り尽くせないものがあった。今後とも6期会の友情が深まり、それが桃陰クラブ全体の発展につながっていくことを望むものである。最後に、個人の名前はあまり多くなるのでほとんど割愛しました。文面の一節一節に旧友の面影をうかべてもらえれば幸である。母校天王寺高校ラグビー部および桃陰クラブの今後の発展を祈り、微力ながら貢献することを誓ってペンをおきます。

湯ぶねに広がる友情

高岡 昭(50・高1回生)

昭和50年8月29日(金)天中50期ラグビー部員“全員集合”の号令がかかり南久宝寺の中華料理店で久し振りに食事をともにし昔話にはなをさかせた。“50年史編集にあたって衆知を結集しよう”というのが会のねらい。当日集まったメンバーは竹谷(マツカ)、和田(ワンコウ)、加藤(ヤリ)、野尻(ケツ)、屋慶名(ヤケナ)、橋田(ジョンジロケ)、内田(カメ)、高岡(オジョー)そして51期の片上(カメ)の9人。大先輩がおみえになっているのかと間違えうほど頭が白く(ヤケナ)あるいは薄く(内田)になっているものもいれば、昔と少しも変わらぬ万年青年(加藤)もいる。50回生ですでに原稿を提出しているのは野尻君1人で、あと2～3人は書いてもらわねばということで、私もあわてて筆をとることになった。

我々50回生が、あこがれの天中に入学したのは昭和18年。今から32年前のことである。我々が入学してから大東亜戦争は、ますます激しく上級生から次々と勤労動員にかりだされていった。食糧不足も深刻になるばかり。授業、体育より“いも掘り”や“貯水池掘り”の方が重要となり、また英語も廃止で“ラグビー部”も“闘球部”と名称変更を余儀なくされた。幸いにもラグビーは海軍兵学校の訓練課目に入っているということで禁止されることはなかったが、ラグビージュースなど、

しゃれたものではなく皆ハダシでスクラムを組み、またボールをキックし走っていたのである。ユニホームもつぎはぎだらけで、今の雑布より悪い。ボールも変形してツルツル、それでも空襲警報がでない限り練習はつづけられた。やがて外地に出陣する兵隊さん達が運動部の部室に住み込むようになり、その結果大八車約3～4台分の焼夷弾が天中の校舎、運動場におとされた。また近くに爆弾も投下された。

昭和20年8月、終戦とともに勤労働員にでていた上級生も次々に学校にもどり、やがて外地に出陣しておられた諸先輩も復員され天中のグラウンドに顔をみせられるようになった。ちょうどわれわれ50回生が3年のときである。まだこのチームも対外試合が出来る状態でなく、専らOBを加えての紅白試合で実力を養成していった。

終戦後復活した第1回目の北中との定期戦は12月25日に西宮第1グラウンドで行われ3-0で天中が勝った。その翌年の昭和21年3月30日に3年以下で西宮で四条畷中学と対戦、8-0で敗れた。この時は市内の中学と郊外の中学との体力のちがいをハッキリと知らされ、同じ食糧難でも“やはり差があるわい”とくやしがったことをおぼえている。

この時のメンバーを小生の兄（研一、38回生）が記録していたので参考までに記載すると

対北中戦 天中 $3\left(\begin{smallmatrix} 3 & 0 \\ 0 & 0 \end{smallmatrix}\right) 0$ 北中

(昭20・12・25 西宮第1)

	和田	野竹	加西	八門	足屋	伊藤	尼藤	北川
			岡			慶	兄	
学年	田中	尻谷	藤川	鳥戸	立名	子江	野	
	(3)	(4)	(3)	(4)	(3)	(4)	(4)	(4)
	FW			HB		TB	FB	

対四条畷戦 四条畷中 $8\left(\begin{smallmatrix} 8 & 0 \\ 0 & 0 \end{smallmatrix}\right) 0$ 天中

(昭21・3・30 西宮第1)

	古片	奥竹	吉岡	伊藤	和村	足松	屋高	青糸
				弟			慶	
学年	市上	野谷	川田	田田	立岡	岡岡	井島	
	(2)	(2)	(1)	(3)	(1)	(3)	(3)	(1)
	FW			HB		TB	FB	

である。

昭和20年はすでに中学が5年制から4年制に短縮されており、その翌年の昭和21年から再び5年制に復活したので、この時のメンバーが第26回全国大会（昭和22年1月於西宮）および全国制覇した第30回大会（昭26年1月於西宮）の主力選手として活躍したことになる。

昭和21年に入って戦争のため、しばらく中断されていた全国中等学校ラグビー大会が復活されるという朗報が入り、かつまた国民体育大会でもラグビーがとり入れられるというニュースが入った。もちろんまだ戦後でユニホームなど新調できる時代ではない。諸先輩がかげずりまわって虎のユニホームを集めて下さった。前掲のメンバーから川野、足立両氏が転校で天中を去ったのでFBに高岡が、HBに竹尾または村田が起用され、門戸氏がスタンドオフというメンバーで21年秋のシーズンをむかえた。9月8日にまずOB戦。この時はたくさんのOBが集まり（有名選手ば

かり) 36—6 で現役が大敗した。9月15日に
 四条畷中と対戦 $22\left(\frac{6-3}{16-0}\right)3$ で快勝、9月22
 日より国体予選に入る。

9月22日の第1回戦は38—0 で淀川工業
 (中モズグラウンド) に快勝したが第2回戦
 で北野中に13—0 (於榎原グラウンド) で敗
 れた。この翌日から“打倒北野” および全国
 大会出場をめざして猛烈な強化練習が始まっ
 た。ヘッドコーチは柴垣復生氏、バックスの
 コーチ川本氏(早大OB)で、毎日毎日気合
 のはいった強化練習の連続であった。ランバ
 スのときのトップダッシュが休みなく20回く
 りかえされたことをおぼえている。全国大会
 予選は11月10日より始まり、予想通り大阪紀
 和代表の決勝戦は北野中学と対戦することに
 なった。長らく米軍に接収されていた花園グ
 ラウンドも準決勝から使用可能になり、天中
 —北野の定期戦をも兼ねての決勝戦というこ
 とで、両校とも伝統の応援団を結成、また久
 し振りに伝統の好ゲームをみようとする多くのラ
 グビーファンも花園につめかけ、熱気こも
 るグラウンドでキック・オフ、熱戦のうえ
 $11\left(\frac{8-0}{3-5}\right)5$ で、ついに北野をやぶった時
 は、試合終了のホイッスルとともに感激の涙
 にひたったのである。応援団とともに校歌合
 唱、また選手以上に喜び“おお勝った。あり
 がとう、ありがとう”と選手、応援団にあい
 さつされた名校長の田中先生の言葉は今でも
 忘れられない。

全国大会は昭和22年1月2日西宮球技場で
 開催された。全国各地予選から勝ちすすんだ

8代表で、天中は第1回戦関東代表の成城高
 校尋常科と対戦33—0で快勝した。準決勝
 は福岡中学、事実上の優勝戦とあって前半
 0—0 後半も白熱戦をくりかえしたが、1ト
 ライをゆるし3—0で惜敗した。全国大会の
 記録は毎日新聞あるいはラグビーフットボ
 ル50回の歩み(昭和46年9月発行)に記載さ
 れているので詳細は割愛したが、戦時中およ
 び戦後の混乱期にめげず“天中ラグビー健在”
 を全国大会を通じて全国の諸先輩に報じ得た
 ことは、阿部大先輩を始めラグビー部諸先輩
 の絶大な支援があつてこそと感謝している。
 阿部先輩が、常にいわれた言葉は“タックル
 は最大の攻撃である”という言葉で今なお身
 にしめている。昭和21年度の戦績は次のとお
 り。

＜昭和21年度の戦績＞

。国体予選

10/6	神戸二中15—6 北中
10/10	神戸二中30—0 京一中
10/13	神戸二中11—6 修猷館 (九州)

(対淀工)

大田	和竹	岡	加西	八竹	門屋	伊北	奥高
田中	田谷	藤川	藤川	尾戸	慶名	藤江	井岡
学	(5)	(4)	(4)	(5)	(4)	(5)	(5)
年	(5)	(4)	(4)	(5)	(2)	(5)	(4)
	FW			HB		TB	FB

(対北野)

大田	和竹	橋加	西村	門屋	伊北	尼高
田中	田谷	田藤	藤川	田戸	慶名	藤江
学	(5)	(4)	(4)	(4)	(5)	(4)
年	(5)	(4)	(4)	(4)	(5)	(4)
	FW			HB		TB
						FB

。全国大会予選

対北野(決勝戦メンバー)

太田	和竹	岡	加西	八竹	門屋	伊北	奥高
田中	田中	谷	藤	川	島	尾	戸
(5)	(5)	(4)	(5)	(4)	(5)	(2)	(5)
						(4)	(5)
						(5)	(5)
						(5)	(4)
FW				HB		TB	
						FB	

。全国ラグビー大会

(対成城尋)

太田	和竹	岡	加西	八竹	門屋	高岡	奥井	伊藤	北江	野尻
田中	田中	谷	藤	川	島	尾	戸	伊藤	北江	野尻
(5)	(5)	(4)	(5)	(4)	(5)	(5)	(4)	(5)	(5)	(4)
FW				HB		TB		FB		

(対福岡中)

太田	和竹	岡	加西	八竹	門屋	高岡	奥井	伊藤	北江	野尻
田中	田中	谷	藤	川	島	尾	戸	伊藤	北江	野尻
(5)	(5)	(4)	(5)	(4)	(5)	(2)	(5)	(5)	(5)	(4)
FW				HB		TB		FB		

(注) 全国大会の時、協会にとどけられたメンバー(毎日新聞記載、50回の歩みに掲載分)と実際のメンバーが作戦上一部ことになっている。成城尋常科との対戦のときは、ハーフバックス門戸—高岡でフルバック野尻であるが、福岡中のときは福岡中のSO麻生の好キックに西村、宮下両バックローの突進という戦法にそなえるために、ハーフバック竹尾—門戸、フルバック高岡というように試合直前に変更が行われた。

さて八鳥主将はじめ49回生が輝かしい戦績を残して、めでたく卒業されたあと、竹谷主将を中心に青井、竹尾、木下、阪口、伊藤、岡田など若手ホープ(当時3年生…30回大会で全国制覇したときのメンバー)を加えて、新しいメンバー編成で昭和22年度の練習に入った。ところが、シーズン入りする前に学制改革が発表され、中学校第2、第3学年は新

制中学校の第2、第3学年として本校に併設されるが、全国大会など公式試合には、われわれと一緒に出場は出来ないという通知がきた。当時の4年と5年では、とてもメンバーが組めず大きな苦境に立たされたのである。そこで水泳部や柔道部をはじめ皆の協力を呼びかけメンバー集めに皆が奔走した。その結果、内田、浜口、吉田、天神、藤崎、大久保、政田らが入部、新入を加えて苦しいメンバー編成でシーズンをむかえたのである。

国民体育大会の第1回戦は9月14日あやめ池グラウンドで京阪商業と対戦した。台風が近畿を直撃した日であり暴風雨のなか、文字どおりの泥試合でやっと6—0で勝ち星をあげた。当時天中のラグビー部には北中、天理、神戸一中、神戸二中、京都一中、京都三中などの伝統・名門校以外には絶対敗れてはならぬ!! という気迫があった(伝統をけがすなという合言葉があった)次いで9月23日京都一中と対戦16—8で敗れたが、試合内容では決して悪いものではなかったと思う。全国大会にそなえて再び強化練習が始まった。オープンゲームで鳳中を44—0でやぶって、ようやく自信もついてきた。全国大会の予選は11月8日より始まり第1回戦は大阪中学と対戦したが、この時ぐらい苦戦したことはない。6—6の同点でやっと反則数で天中の勝利となったが、この時ぐらいきつくOB諸兄からしかられたことがない。試合終了後、説教をうけるだけでなく、すぐ練習ということできたえられた。そのかいあって2回戦は12

—6で富田林を、そして3回戦で北野を6—3でやぶり、大阪から天王寺、四条畷、淀工の3校が近畿予選に進出することになった。近畿予選の第1回戦は、再び京都一中と対戦することになったが前半5—0、後半5—0で10—0でやぶれ、ここに2年連続全国大会出場の夢は断れたのである。北野中学との定期戦は予定通り12月25日西宮で行われたが21—5でやぶれた。もし学制改革がなければ、これ程苦勞をせず順調なシーズンをすごすことが出来たのに本当に残念である。

われわれ50回生で旧制中学は終り、23年4月より天王寺中学は天王寺高校と改称されることになり、また一方男女共学実施に伴い夕陽丘女学校と交流することになった。さらに現在の校舎は新制中学校に転用のため全生徒の授業を夕陽丘高校にて行うことが発表された。われわれ50回生も旧制高校、専門学校にすすむものと新制高校3年として残るものの二通りにわかれた。戦時中、戦後の波乱期を支えた50回生の思い出は、あまりにも大きい。

(昭和22年度の戦績)

・国民体育大会

・大阪予選選抜大会

9月14日 あやめ池 天中6—0京阪商業

・近畿大会 1回戦

9月23日 西宮第2 天中8—16京都一中

・オープンゲーム

10月5日 天中44—0鳳中

・全国大会予選

・大阪予選

1回戦 11月8日 市立運動場

天 中6—6大阪中学

2 ♫ 11月16日 天王寺中学

天 中12—6富田林中学

3 ♫ 11月23日 西宮第2

天 中6—3北野中学

(四条畷54—0生野中)
(淀川工34—0天理中)

・近畿大会

1回戦 11月30日 西宮第1

天 中0—10京都一中

(四条畷14—3神戸一中)
(京都三中18—8和商)
(神戸二中9—3淀工)

・北中定期戦

12月25日 西宮第2

天中5 $\left(\begin{smallmatrix} 0 & -8 \\ 5 & -13 \end{smallmatrix}\right)$ 21北中

対京都一中戦(近畿予選)

天中0 $\left(\begin{smallmatrix} 0 & -5 \\ 0 & -5 \end{smallmatrix}\right)$ 10京一中(於西宮)

(昭22・11・30)

野	片	永	川	竹	橋	藤	和	村	高	吉	浜	屋	天	内	
尻	上	本	本	谷	田	崎	田	田	岡	田	口	慶	名	神	田
(5)	(4)	(4)	(4)	(5)	(5)	(5)	(5)	(5)	(5)	(5)	(5)	(5)	(5)	(5)	(5)
FW				HB				TB				FB			

対北野中学(定期戦)

天中5 $\left(\begin{smallmatrix} 0 & -8 \\ 5 & -13 \end{smallmatrix}\right)$ 21北中(於西宮第2)

(昭22・12・25)

野	片	鎌	竹	奥	橋	藤	和	村	高	吉	浜	屋	天	内	
尻	上	苅	谷	野	田	崎	田	田	岡	田	口	慶	名	神	田
(5)	(4)	(2)	(5)	(3)	(5)	(5)	(5)	(5)	(5)	(5)	(5)	(5)	(5)	(5)	(5)
FW				HB				TB				FB			

(注) 50回生のラグビー部には、最初奈良先生の長男奈良高君、谷口豊三朗氏の長男谷口雄一郎君がいた。奈良は2年になるととき東京四中へ転校(東大卒・協和醗酵(株)農博)また谷口は3年になるととき海兵予科へすすみ終戦後、京都三中に復学し京大のラグビー部で

活躍していたことを付記しておく。また、ここに引用した成績・メンバー表は小生の兄研一（38回生）の記録にもとづくものである。

ラグビーの魅力

高岡 昭(50・高1回生)

烈風すさぶグラウンドで汗と泥にまみれて力いっぱい闘うウィンタースポーツのはなラグビー。そもそも私も芋がゆのジャボジャボ腹を抱え、終戦直後再開された全国大会（旧制中学）に出場してはや30年になる。数年前まではOB戦ありときけば、アスパラ、ヘルタスなどのお助けを借りねばならぬスタミナの衰えを歎きつつも、メンバーに首を連ねなければ承知できないほどのラグビー狂であった。桃陰ラグークラブ創立45周年記念のときも天王寺一北野の現役戦につづいて行われたOB対抗戦“模範試合”に岡元同大監督や青井元全日本監督などと一緒に出場、その時の写真が毎日新聞の指定席にのっている。

昭和18年に天中に入学して以来昭和43年まで約25年間ラグビーを欠かしたことがなかった。昭和44年2月から48年2月まで米国駐在員としてニューヨークに滞在していたので、この期間は全くラグビーを楽しむチャンスに恵まれず、そのためすっかりスタミナが衰え、もう一度基礎練習から始めなければと思っている。ラグビーの魅力は一体どこにあるのだろうか？

まず第1に“The honor is ebuol”という

ことである。すなわち“一つのトライは、そのトライゲッター1人の名誉でなく、15人結束せるチーム全体の名誉である”ということである。その点同じチーム・プレーでも打撃王、本塁打王、打点王などの個人記録を争う野球とはかなり違った競技といえる。

第2に、ラグビーは肉弾と肉弾がぶつかりあう激烈なファイトの競技であり、レフェリーの絶対性とフェアプレーが他のいかなるスポーツに優るとも劣らぬほど厳格である点である。プロ野球など時として審判にくっかかるような光景は、ラグビー場では見られない。またラグビーにおいて1人のレフェリーが広いグラウンドで、しかも30人のプレーヤーの動きを隅から隅まで完全にみることが出来ない。従ってもしスポーツマン・シップに欠けたプレーヤーが1人でも混じっていれば、非常に危険である。ふた言めにフェアプレーが叫ばれる理由がここに存在する。

第3に、試合が終わった後の温情溢るるばかりの美しさを強調せねばならない。ラグビー場には不思議と風呂場が一つしかない。試合が終了すれば、そこには、もはや敵も味方もなくお互いに素裸の人間同士となり一刻前の火花を散らした激戦も勝敗の無念さも、さっぱりと湯水に流し、ラグビーを愛するもののみに与えられた和睦と親愛の湯ぶねの中に、たっぷりとひたりきるのである。

最後に楕円型であるラグビー・ボールが、人生そのものの象徴であるということを述べたい。グラウンドにころがったボールはイレ

ギュラーバウンドするので、常日ごろからよく練習しているものでなければ容易にキャッチできない。またボールのバウンドいかんによって有利・不利が生じ、これが勝敗を決することもしばしばである。また怒とうのように襲ってくるドリブルラッシュには身をていしてこれを食い止めなければならない。そのためにウインタースポーツであるラグビー精神は、炎天下におこなわれる夏季合宿によってきたえられる。きびしい練習に耐えぬいてきた者だけが、9月から始まる対外試合の選手として選ばれ、しかも栄光をかちとるのである。つまるところ人生も、ある瞬間の転がり方の方向づけが、生涯の分岐点となることが多いが、そのような場合にも動揺しないよう、常日ごろから切磋琢磨しておかねばならない。

昨年天高一北野高の試合をみにいったが昔名物の応援団もなく、さびしい限りであった。それでも阿部大先輩をはじめ村田、浅岡、伊藤、若山、宇野諸先輩を始めOBの方がかなり応援にきておられた。北野も日高、斉藤、下平君始めたたくさんのOBがきていた。小生の兄は今でも必ず応援にいく、この時も兄弟3人そろって大阪城公園へいった。(兄は38回生と41回生) 応援団が少なくなった今日OBで応援団を結成し現役を声援してやろうではないか!! (昭和50年9月7日記)

(50回生・現在旭化成勤務・工学博士)

空きっ腹奮戦記

野尻庄蔵(50・高1回生)

天中50回生は、まさに波乱期、端境期の非常時に遭遇した戦中派であって、終戦による混乱期から新学制による端境期の5年間、乃至、夕陽丘へ高校生としての移籍組は6年間を過ごしたのである。

この5、6年間のラグビー生活で最も辛かったのはやはり食糧不足、食い盛りの中学2、3、4年生の時に食いのものがないのだから本当に困ったものだ。空ききった腹の虫を抑え抑えグラウンドを走ったものである。見るに見かねて大田先生(グリコ先生)が、各運動部員の食事調査を行うという異例の処置まであった。これは運動部員が食事らしい食事をきちんととっているかという調査であって、今では考えもつかないことであろう。

当時、四条畷中学とか八尾中学とか新興チームがだんだん頭角をあらわして来たころだが、彼等にはたらふく食えるメンがついていると、妙な負け惜しみをいったりしたものだ。

戦時中の空襲が激しかったころも、ラグビーの練習は中断することなく、まがりなりにも続けておこなっていた。昭和18年から19年にかけて、われわれの1、2年上の48回生、49回生が軍需工場に動員され、また、われわれの下級生は51回生はともかく、52回生の入学試験も学童疎開、授業時数の不足、紙不足



第27回全国大会予選出場メンバー

とか種々急迫し切った状態で、天中への入学試験もろくにおこなえないような異例な年だった。まったくこの1年間は、50回生と51回生の2学年だけがボツンとグラウンドにとり残され、留守部隊をおおせつかり、また19年から20年にかけては上級生に続いて50回生も軍需工場に動員されるという大変な年であった。

そして日本の運命の日、昭和20年8月15日、われわれ50回生は大阪府立天王寺中学、3年生の夏であった。夏休みもなく焼け跡の工場にぼう然とたたずんだのである。

混乱のうちにも同年9月、新学期は始まり練習もまた始まった。このころからOBが続々と母校を訪ねて来られた。陸軍から、海軍から、空軍から、士官学校から、兵学校から、外地から、軍需工場から多勢のOBが帰阪してはすぐ母校へ、わがラグビー部へ帰っ

て来られたのである。阿部大先輩始め、杉本（長沖）先輩、中川先輩、斧原先輩、鹿子木氏、村田氏、柴垣兄弟、伊藤兄弟、若山氏、北江（兄）氏、新村氏、入見氏等々書き尽くせぬ程多勢のOBが連日現役の指導に来校された。授業時間の終わるのを待ちかねているのは現役の人数に倍するOBなのだから、われわれ現役は連日フラフラ、たまったものではない。現役一人一人のポジションにOBが2、3人必ずつくという豪勢さ、今の現役諸君に想像出来るだろうか。しかもOBの一人一人はわが国ラグビー史の各頁をかざる、そうそうたるメンバー。現役はフラフラにしごかれはした事ではあるが、こういう時機に遭遇しなければ本格的ラグビーの神髄を多数のOBから手を取り、足をとって、眼のあたり教えてもらった事は到底経験し得ない事であったろう。

翌々年、われわれ50回生が最高学年になって関学でおこなった合宿の記録写真を取り出してみると、現役の数と来訪のOBの人数がほぼ同数である。この2、3年はこういうありがたい状態が続いたのである。

さて、混乱の戦後にあって、大きな変革がやって来た。それは学制の改革である。終戦後50回生がやっと最高学年になった時、日本中の学校が6・3・3・4制の新学制に移行のため、50回生、51回生（のちの高2回）は旧学制、52回生（のちの高3回）からは新制中学生と見なされ、ラグビーの公式戦全部に新制中学生である52回生以下の部員を出場させてはならないという通達が、文部省からか、協会からか、とにかく絶対守らねばならない規制がうち出されたのである。

異例づくめの経験をさせられ、さまざまな苦労を経て来た50回生も、これには全く困り果てた。ただの2学年だけではチームのメンバーにもことかく。（51回生は片上君他2人位でもともと手うす）ボーダーラインをひかれた52回生の中には、のちの全日本主将の青井達也はじめ、竹尾、木下、伊藤、岩井、大石、阪口、武仲、山本、岡田、辻元ら逸材の諸君がワンサとひかえているのに公式戦に一切出場させられなくなったのだ。なんとも皮肉な話である。

そこで、50回生の竹谷主将を中心に、何度も何度も鳩首相談を重ねた。とにかく天中ラグビー部の伝統の火を消してはならない。後輩の諸君に立派に伝承させねばならない。既

にこの年の春卒業された49期生の八鳥氏、岡氏諸先輩も心配顔で度々来られた。相談の日々を重ね、水泳部から柔道部からボクシング部などから応援を頼むことにした。各部ともそれぞれ事情があるのに、快く天中校技のラグビー部の一大事のため来援してくれた。その時の面々が内田、天神、浜口、大久保、藤崎、糸島らの諸君である。

急ごしらえでチームづくりをしたこの年、戦績は手元に記録が残っていないので詳細を思い出すことは出来ないが、新学制での第1回国民体育大会に初参加したことと、全国大会においては近畿ブロック、西宮球場で京都一中に惜敗したことを覚えている。急造チームで強くはなかったが、とにかく大事な歴史ある伝統を後輩に伝え得たことだけを誇りに思っている50回生ではある。後年52回生を最高学年生としたチームは全国優勝をしてくれたので、われわれの大変な、そして異常な苦労も報われたのだと思っている。

在校中、最も記憶に残っている試合は4年生の正月、全国大会（第26回全国中等学校ラグビー大会、毎日新聞社主催）において成城中学に33-0で勝ち、準決勝戦を福岡中学と戦ったあの一戦、事実上の決勝戦といわれたこの試合、3-0でリードされたまま、敵の堅陣をなかなか突破できず、一進一退激戦を続け、いまだに忘れ得ぬレフェリーの白崎氏が、ロスタイムもぎりぎり一杯に見てくださり、攻めに攻めこんだ敵陣30ヤード右隅でのデッドで吹かれたノーサイドのホイッス

ル。2万人の西宮球技場の大観衆のどよめき、六甲の山なみに傾きかけた1月の淡い陽の光と長い長いフィフティーンの影響、はっきりと脳裏に残っている映像である。

天中、天高、桃陰ラグビー。思うに長い長いタテの伝統である。盛大にますます発展の実を挙げ、さらに100周年200周年を祝うことの出来るよう心より祈って筆をおく。

トライに大かつ

和田良二(50・高1回生)

我々50回生は卒業年度に学制改革が行われたために最高学年を昭和22年、23年度の2回を経験した部員がある。すなわち、22年度天王寺中学5年生、23年度天王寺高校3年生(高校第1回生)として加藤和男、屋慶名政男、吉田尚、橋田勝、高津郁男の諸君と私である。他に49回から再編入された小竹、山田の両氏を含めたものが天高1回生のメンバーである。

35回、木村芳生氏を監督に迎え、実戦主体の練習に取り組み、大会予戦前までは週2回の練習マッチ(日曜、水または木曜)を行い、勘の養成を行った。マネジャー山田氏、サブ岩田君(51回)の相手チーム探しも大変であったと思う。試合なれして来たころだったと思う。対鳳戦の後、木村監督の大カッ一声「貴様らはラグビーとはトライするという事ではない……」で練習マッチはチョン！今まで以上の猛練習……だが残念ながら全国大

会の夢は破れた。

残る対北野定期戦に全力を傾注して前年度預けたトロフィーを西宮グラウンドで井上二郎大先輩から私の手に頂き49回から受けついだトロフィーを無事51回にバトンタッチした。

50回 昭和23年度メンバー

井上	田津	竹田	田藤	垣井	田名	口岡	岡田
52	51	52	50	49	50	52	50
回	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
FW				HB		TB	FB

素足でスクラム

片上逸磨(高2回生)

昭和43年5月ごろ、天高のそばの大阪女子商業高校で会議があるので、久しぶりに天高グラウンドに立ち寄ってみた。ちょうど放課後で三々五々各部の部員が集まって来て、トレーニングをはじめかけていた。私たちの時代と違って各クラブとも女生徒を混じえて大変華やかな活動が見られ、グラウンドも立派に整備されていた。

我々51回生の在学中のグラウンドはコークスガラの広場であって、物資不足の戦中戦後の時代には素足で走り、スクラムを組んだものだと大変懐かしかった。ラグビー部はグラウンドの中央までの折り返しのランパスをしていた。野球部の内野へは一足も入っていないようだ。玄関には42年度卒業生の進学先の発表がされており、東大13人、京大100人、

阪大93人、神大35人とほとんどが国公立校へ進学していて、何か違ったものを感じた。

50年8月末、50回生のラグビー部同窓会桃虎会が開かれた。「同期も同じやからお前もこいよ」と誘って頂き、懐かしい諸先輩にお会い出来て、最近にない楽しいひとときを過ごさせて頂いた。野尻さんの回想記を読ませて頂いて、忘れかけていたいろいろな出来事が思い出された。1試合ごとの思い出を話し合っているうちに、話が脱線してやっと3試合程の記憶を呼びおこすだけで、中華料理屋の閉店時間になってしまった。

私たちの青春時代は……大東亜戦争連勝、それに続く苦戦、学徒動員警報発令と同時に帰宅、授業をせず焼け跡整理、終戦、戦後の闇市場、学制改革、夕陽ヶ丘高校仮住まいなど目まぐるしく変化し食糧事情も最悪の時代であった。だがラグビーの練習だけは続けられた。焼け跡整理の帰路もコークスガラのグラウンドに帰って走った。

当時、48回、49回生が学徒動員にかり出されていて木曜日が休日で皆グラウンドに来られた。そして大変しぼられた。その日に限って雨が多かったように思う。スモールマッチやタックル、セービングの絶好のグラウンドコンディションである。パンツの下はビフテキがコークスガラの粉と一緒にめくれ、めくられての黒あざは今も残っている。雨の日は水泳部の好意で入浴？ をさしてもらった。ボウフラのわいているプールで泥を落とした。体育館の裏に6軒長屋という各部の部室長屋

があったが、火事を出してから体育館北側の更衣室へ、戦後は体育館南側の銃器庫へ部室が変わった。銃器庫の2階は格好のかくれ家で、朝からたきぎを持ち込んでとんどをかこみながら1日中Y談に花が咲いた。

西川先輩は1日も休まず来て下った。雨が降ると若山先輩が必ずやって来られた。私たちが最高学年になった時には同期部員は3人（片上、岩田、山崎）だけしか残っていなかった。戦中戦後の食糧難や戦災による転居などで多くの同期生が退部した。生田君、故谷口君が京都へ、川本君、永本君が家庭の事情で、その他多くの者が校技ラグビーにあこがれて入部したが続かなかった。しかし52回生が多勢いて主体になってがんばったが、国体予選で淀川工業に敗れた。淀工は古川選手のワンマンチームでみな彼をマークした。ラインアウトで古川はどこやと探していると、ある時は一番前で、あるときは一番後で「コニコルワレ」と返事があった。

当時、天高と淀工、四条畷高がいつも三つどもえでありながら、対戦経験は少なかった。淀工は天高に強く四条畷に弱かった。全国大会予選の準々決勝で我々は四条畷とぶつかった。花園第2グラウンドの泥の中で8-3で勝った。ハーフ団を徹底的にマークする作戦であった。帰りのバスの中で決勝戦で会うだろう淀工選手が、もう優勝したような喜びようであったことを覚えている。翌々週の優勝戦は花園第1グラウンドで淀川工業と戦った。トスで勝ちながら風下のディフェンス

をとって、すべてを後半にかけて戦った。淀工の長谷川監督が金歯をむきながらタッチラインに沿っていらいらしていた顔を思い出す。大阪優勝の写真はみなボクシングの試合に出場した選手の様に顔がはれている。阪和地区優勝戦で和歌山の桐蔭高にやっと勝った。そして第29回全国大会に出場した。

翌年52回生が全国制覇をなしとげた。千崎君からその時のメンバーの写真を贈られた。みんなニコニコして平素よりひとまわり大きく写っていた。

今も底流に天中魂

岩田 由雄(高2回生)

日米戦争の最中、昭和19年あこがれの天王寺中学校に入学、質実剛健の天中魂、尊敬する田中校長のもとに早速ラグビー部に入部したものの、時勢は我が意ならず、勉学、スポーツ、すべて奪取され弁当にシャベル片手の日々が敗戦の日まで続いた。

「敗戦」それはラグビーに関するかぎりあまり体験はなかった。なぜか、偉大なる天中魂、そして50年に及ぶラグビー部の歴史が物語るであろう軌跡。しかしながら戦後の現実はきびしかった。校舎はなく（当時、夕陽ヶ丘女学校に間借り）毎日、旧グラウンドに練習に通った。シューズはない……ボールはない……ユニホームはない……まさに、ないないづくしの連続である。

諸先輩のご配慮でボールが用意された。一

つ、二つ、数は少ない。しかし少ないボールでも十分に練習は出来た。練習を重ねるうちに、ボールは楕円形から円形に変形し、そのうちに縫い目が切れる。補充はなく困った。毎日一つ、あるいは二つと家に持ち帰りボールの切れ目を修理した。シューズも当初はなかった。が、それは裸足で十分であった。まさに裸足で球形のボールを追うラグビーの姿であった。

やがてウサギの皮のシューズが配布された。それも補充がなかった。だれかがクツの修理の金型を用意した。クツの修理も始まった。ユニホームもしかり。食糧も難。物資不足の折から用意していただいた諸先輩には本当に頭のさがる思いだ。それに報いるのは勝つ事のみ。やがて合宿も開始され、十分な練習も出来る様になった。

当時を思えば学校、先輩、部員が一つの目的のために、ただひたすらに邁進した姿、それはまさに天中魂が底流にあったからであろう。

昭和50年9月24日、岡仁詩監督の率いる全日本チームとウエールズとのゲーム。国立競技場のスタンドより緑濃い芝生に全日本の鮮やかな白赤じま、ウエールズの赤のユニホームの雄姿を観戦し、当時を回想し懐かしさと感激の交錯の中で記す。我々同輩3人、全国大会は準決勝で敗れたものの翌年、その目的を見事達成させ全国制覇を遂げた事を追記。

ボールとともに30年

青井達也(高3回生)

1. 全国制覇

「ピッピー」西宮グラウンドで高らかにホイッスルは鳴った。8－0勝った。6年間ひたすら目標にして走った全国制覇だ。ずっしりと重い優勝楯だった。西川監督も赤い目をされていた。応援団の連中と肩を組んで校歌を歌い「勝つは体力」を歌った。

私のラグビー歴で最大の誇りであり、その後の人生の方向に大きな影響を与えたのがこの全国制覇だった。

昭和20年終戦後1カ月で早くも天中グラウンドでは戦後のラグビーがスタートを切っていた。私もちゅうちょなくラグビー部に飛びこんだ。キャプテンは八鳥さんだった。1年生だけで20人位も集まり、早くも卒業の時には全国優勝を目標に練習に精をだした。軍隊から柴垣、新村、若山、北江さんらが帰ってこられコーチを受けた。ボールは皮がのびてバスケットボールのようだった。皮がすり切れてチューブがとび出してパンクすることもしばしばあった。クツなどもなく初陣は貴重品だったゴム底の運動グツだった。最初の1～2年はほとんど裸足で練習をした。氷の張ったグラウンドを裸足で走ると、足は全く棒のような感覚だったことを覚えている。また裸足でプレスキックなども蹴ったので今も右足の甲に固いタコのようなものが残っている。

る。食物もなく、いつもおなか減っていたが、それでもよき指導者といひ仲間のおかげで本当に一生懸命ラグビーをやった。20人もいた我々の学年も中学3年を終わった時、新制高校の制度となり我々天中男子生徒は天王寺と夕陽ヶ丘に分けられ、再編成を余儀なくされ、他の部からメンバーを集めざるを得なかった。それでも翌昭和24年度の全国大会は片上主将の下に準決勝まで駒をすすめ、秋田工に敗れたものの、3年生の出場者が2人だったので翌年度の必勝を期したものであった。しかしながら全国大会優勝までの道はそう簡単なものではなかった。春こそ近畿大会の優勝と順調だったが、秋の国体予選の決勝で淀川工業に引き分け反則負けを喫してしまった。が然キャプテンの私にも批判の声が出た。事実練習方法などに私自身の独善的なところもあり、これを機会に改め率直にディスカストしたことにより、かえって一体感は強固なものになった。おかげで予選は比較的楽に勝ちぬくことが出来た。

全国大会が始まった。1、2回戦は順調であつたが準決勝戦の北見北斗高との試合はまさに薄氷を踏む思いだった。8－5のあと正面のペナルティーゴールの時には本当に神に祈る思いだった。入ると8対8の同点で反則負けになるからだ。しかしゴールならず辛勝した。北見は快速宮井（後に明大）がC・T・Bで出場、FWの強さはすさまじいもので、スクラムのたびに5ヤードは押されるありさまだった。私とWTB北垣君のトライで前半

は8対0とリード、後半は押されっぱなしで、最後は味方ゴール前2年生の矢島君のタックルでタッチとなりタイムアップ。本当に心身ともにぐったり、旅館に帰ったフィフティーンは全く声も出ずフトンを引っぱり出してひっくりかえるのがやっとだった。

当時のチームはボックスに自信をもっており、30%ボールをだしてくれたら勝つと日ごろからいばっていたが、北見北斗の時には本当によく勝てたものだった。

1日おいて決勝戦は試合中はあがったが朝からの雨で悪コンディションであった。軽量FWは不利な戦いをと心配したがよくがんばり、前半ハーフライン付近からの私の右オープンパントを秋田WTBが落とし、右WTB北森君（旧姓松岡）が出足よく足に引っかけてインゴールでおさえてトライ、これが前半唯一の得点だった。後半に入ったがFWは疲れも見せずよくがんばった。しかしグラウンドはやわらかく両軍とも苦戦、一進一退の後タイムアップ寸前、ハーフ竹尾君が判断よく右ブラインドの北森君にパス、ラインを突破リターンパスをバックローセンタ伊藤君、ロック木下君とつなぎ右中間にトライゴール成功して8-0で完勝した。西宮のグラウンドはうれし涙でぼやけていた。

坂上氏の評では「優勝戦は運悪く朝来の雨で、試合の興味をそがれはしないかと心配しが、天王寺、秋田工高ともに3回戦もの激しい試合を戦って来たあとも思われぬ元気いっぱい、終始敢闘して悪コンディションを

克服、スピーディーなプレーは立派なものであった。このことは高校ラグビーの技量が昨年に比し、数段の進歩をとげたことを証明している。さすがに優勝戦、勝ち残ったチームだ。……天王寺に秋田工は混然一体よくまとまりのある高校としては完成に近い好チームであった」——全国高等学校ラグビーフットボール大会50回の歩みより。

2. 外国チームとの対戦

天王寺から慶応に進み、その後もラグビーに関し非常に恵まれた経験をする事が出来た。中でも昭和27年来日したオックスフォード大に始まり、38年のカナダ遠征までこの間のすべての来日チームと対戦する機会を得たので特に印象的だったチームについて書いてみよう。

(1) 印象的だったオックスフォード大

大学2年生の秋、昭和27年戦後始めてのまとまったチームの来日であり、私自身にとっても初めての外国チームとの対戦だったので最も印象深いものとなった。特にブーブバイヤー、カネルの両TBが代表する華麗なボックスの攻撃はすばらしいものであり、今春来日したケンブリッジ大が対早大戦で示したTB攻撃とともに英国らしいTB攻撃の典型のように我々ボックス経験者に教えたところは大であった。

慶応はこの第1戦をセブンシステムで戦い28-6と敗れたが、ボールはとられサイドステップ、シザーズプレーなどTBにかきまわされた。この試合の結果我々はFWはいかに

ボールをとるか、Backsはどうすれば早く倒せるか、要は前でつぶすかという課題が与えられた。結局この課題はその後まかわることなく今の全日本がオールウェールズと戦う時に考えなくてはならないこととおそらく永遠に日本チームの課題になりそうである。また幸いなことに、この年始めて全日本に選ばれたがSOに私のラグビーの師匠の柴垣さんがおられたので出場の機会は得られなかった。しかし全日本のメンバーとして、今後どのようにしてこのような外国のチームと対戦するかという点について考えきられたことだけでも大いにその後の経験にプラスするものがあった。

(四) 全く強かったオールブラックス

33年に来日したオールブラックス・コルツは全く強かった。私は幸いにも平和台、花園での全日本と東京での全慶応の試合に出場の機会を得た。しかしいずれも完敗した。例の独特のウォークライで戦闘的なオールブラックスは日本に本当の意味のパワーのラグビーを見せつけてくれた。戦前からFW中心のチームで **up and under** とNZ独特の2人制フアイブエースのチームと聞かされていたが、まさにそのとおりブラウン、リニーン両FEの動きもさることながら、何人といってもキャプテン、ウイナレーの率いるFW・ミーズ、ピカリンら、ソーパーなどの全く力のラグビーそのものだった。ラインアウト、モールにおけるクサビを打つFWプレーとともに全日本がFWの大型化に力をそぞく導火線となっ

た。

またこの時も全日本は完敗したが、いわゆるインターナショナルのテストマッチ、すなわち国旗を背負った時のゲームへの意気込みの違いに気づかされた。また全日本のチームがいつも外国のチームが来るということになってからメンバーが集められ、寄せ集めチームだったのでチームとしての作戦やコンビネーションも全くなく、結局バラバラのゲームをやって来たことが反省された。このような結果協会としても37年のフランスのチーム来日のころから全日本候補選手による強化合宿が計画されるようになった。

(五) 初めてのナイター国際ゲーム

34年秋来日したオックスフォード・ケンブリッジ大連合軍と全慶応は国立競技場で戦後始めてナイターのゲームで行われた。翌日の新聞の抜粋を書いてみよう。

「盛り上がる慶応の闘志で戦後初めてのナイターにつめかけた3万の大観衆をたんのうさせた。6分左中間30ヤードの混戦から山田が抜け見事なFWパスから豊島の先制トライをあげた。英学生は中ごろからもりかえしバックスに回すと確実にトライに結びつけるというチャンスの強さを発揮して1トライ2ゴールをあげて逆転した。慶応も前半終了前青井が抜けてFWへかえし堤のトライ(ゴール)を追加し16-8。後半はじめ21-8と開き、このままの差で終わるかと思われたが慶大はなかごろから猛然と追い込み、防禦一方の英学生の混乱から3つのペナルティーゴールを

宮島がきれいに決め21—17と迫りスタンドをわかせたが英学生は34分ミルズのトライで振り切った」

このゲームで経験したことは ①9月のナイターは露がおりボールが雨の日と同じ以上にすべること、②上がったボールははっきりわかるがライナーでボールが飛んだ時に光の中に入り見えにくいことがある、③国立競技場のような周囲の囲まれたところでは声援は頭の上から聞こえてくるし、グラウンド以外のところはあまり見えないのでゲームに集中出来る反面、興奮したり上がりやすいのではないかと思う。英学生は全日本も勝ち全勝で帰国した。

(二) 戦後初めての全日本の遠征

全日本は33年振り戦後初めての海外遠征を昭和38年4月にカナダで行った。それまでオックスフォード大を始め英仏加・新・聯など各国のチームを呼ぶばかりで全日本が海外へ出るのは昭和7年以来ということで日本ラグビーの真価を問うまたとないチャンスであった。日本協会の新しい試みとしてこの遠征では監督を廃止し、プレーの責任はもちろんメンバーの選択、作戦まですべてキャプテンの私とバイスカプテンの宮井君にあずけられた。

チームの方針として私は「カナダとの国際親善はもちろんであるが、国際ゲームである以上国のレベルを競うのであり絶対に勝つことに主眼をおいた」更に選手の諸君にはこの勝つことに絶対必要なチームの和に重点をお



図

くと同時に、スポーツマンシップとジェントルマンシップを身につけることをつよく要求した。チームの方向としては、全体にスピードとFWには低い当たり、バックスには変化ある攻撃を考えチームの方向づけをした。

ゲームは第1戦B・C大5—23で勝ち、第2戦オールバンクーバー39—5負け、この第2戦の完敗は本当にこたえた。私は自分の体のコンディションから代わりに平島君を出したがこの遠征でただ一つの心残となった敗戦となった。キャプテンは少々のがあっても全試合を出るべきだった。第3戦は全ビクトリア10—20で勝ち、第4戦はテストマッチに相当する全ブリティッシュコロンビアには6—33で完勝した。このゲームは全員タックルあるのみという事を試合前に誓い合い、試合にのぞんだ。事実FW、バックスともにみなぎる闘志と強烈なタックルが勝因となり第2

戦とは全くちがったいい成果を残した。第5戦はジュニャーB・C 0-3で勝と4勝1敗でこの遠征を終わった。

この遠征の教訓は、まず現在の全日本にも通じることであるが、雨天の時のボールのハンドリングとそのプレーが晴天の時と同じようなプレーが出来ること。身体の差をゲーム中にすこしでも感じて身を引くようなプレーがあれば、これだけでゲームは負けであるということ。チームの和がどんな時でも最も大切であるということ。若いメンバーには積極性のある自から買って出て苦勞をいとわないプレーヤーを選ぶことであった。この遠征では石塚、尾崎、伊藤がそうであった。ともあれこの遠征は4勝1敗で無事遠征の目的と国際親善の大役を果たしたことを報告しておきたい。

3. ラグビーの指導と不惑のラグビー

ラグビーはするスポーツであるといわれて来たが、チームを育てるのもまたやりがいのあることである。決して楽しいとはいいたくない。昭和43年、たのまれて慶応の監督をやった。チームを強化するためのあらゆる手段を講じた。特にラグビーに対する考え方を若い人達に理解させるのが第1の仕事だった。我々のように仕事を持っている者が監督をやるといかに学生と一緒にラグビーをしたり考える時間を多く持つかということが大変重要になってくる。従って春の遠征や夏の海外遠征（タイ、香港）がこの意味で非常に役立った。このようにして選手との間に本当に信頼

出来る人間関係をつくりあげることが、大切だったと思う。大切なゲームを選手が懸命に戦うのを見ることは自分でプレーするより大変つかれる。しかし試合前の緊張が若さを維持してくれるような気がしてならない。そして学生の監督をやって最も大切だと思ったことは「このチームでラグビーをやってよかったと卒業の時に思わせること」であった。また忘れてならないことは次の年、更にその次の年を考えてのチームづくりであろう。

いつの間にか年をとり私も不惑クラブでラグビーを楽しめる年になってしまった。昨年は仕事と肥りすぎから狭心症になってしまったが、これからも節制して本当に楽しめるラグビーをやりたいと思っている。60年記念史には是非そのことを書くつもりである。

執念のハード・トレーニング

竹尾 靖 造(高3 回生)

私たちは旧制天王寺中学から天王寺高校へと、6年間も同じ学舎で育った。そして、私たちに各先輩諸氏、上級生の方々が全国制覇の夢を託されました。と、私たちは自負していました。高2の時、準決勝で秋田工業に敗れ、巻土重来を誓った我々は、ただ秋田工業に勝つ事のみを目標に最後の1年間を過ごしたように思います。ところが、国体予選において、思いもかけず、宿敵淀工に1敗地にまみれてしまいました。その後の練習はいうまでもありません。平野を通り越して八尾の近



追い出しマッチを終えて

くの竜神駅まで何度走った事でしょう。私たちは西川コーチから、この練習は天王寺始まって以来のハードトレーニングだと聞かされました。このへん真疑の程は分かりません。コーチの選手掌握のテクニックだったかも…

優勝の感激は西の宮球場の脱衣場で突然襲って来た。よくあれだけの練習をやったなあーと、涙を流しながらその感動に浸れたのである。いま野球でもバレーでも高校生の優勝の瞬間の姿をテレビで見る時、ハードトレーニングの必要性のその価値を思い浮かべ、共に涙を誘われる次第である。

なお蛇足ながら、私が社会人チームの監督として我々のチームを新潟国体に送った時の練習に、この辺のテクニックを使わしてもらいました。西川コーチありがとう。

ノーサイン

竹尾 靖造(高3 回生)

全国大会決勝戦、対秋田工高戦の最後を飾るトライはハーフライン近くの右側のスクラムからのブラインド攻撃より始まった。ノーサインによるブラインド攻撃は当時、SO・青井主将を中心とする攻撃を得意とする天高と対峙した秋田工にとっては意外に違いなかったであろう。球を持った北森（旧姓松岡）が、ゲインラインを突破し、つぶされた球をすばやくロック、木下がドリブルに引っかけてゴールポスト側にトライ。ゴール成功、8ー0で天王寺2度目の全国大会優勝決まる。このノーサインによるブラインド攻撃はなぜ生まれたか。

ある暑い日の練習。すでに練習は最後のドンドンにさしかかっていた。SHであった私は疲れ果てて、ヒールされたボールを、ただ体の向いた方向に投げてしまった。それが北森選手のいた右ブラインドサイドであった。ユサブリをパターンとする攻撃練習において、ブラインドサイドにいるウイングは当然SOからFBのフォローに回り、続いて自分の次の位置へ移動するのが当たり前である。いくらヒールアウトの方向が違っていようが、疲れていようが、SOに合わせてオープンに良い球を回す事、これがSHの役目である。しかるに私は自分勝手にブラインドへ球を投げてしまったのである。いや投げ捨てたともいってよいであろう。「いけない」と思った時、西川コーチの厳しい声が飛んだ。「バン公（北森のニックネーム）!!なぜその球がとれない。SHの姿勢とタイミングがなぜ分からない。そんなヤツはやめてしまえ!!」

いうまでもなく皆さんには、お分かりいただけた事と思う。個人練習では徹底的にシボられた。しかもへまをしたのは北森選手だとして。当時、私は個性の非常に強い、いいかえればわがままな選手であった。西川コーチはどのような心境で指導されたのかは浅学非才の私には今もって分からない。ただ後にも先にもノーサインでブラインドへ球を投げたのは決勝戦のこの1回だけと記憶している。不惑を過ぎ、その時の事を全然知らない顔で東京で何度か会って卓を囲んだ時の北森選手に永遠の変わらぬラガーの友情を感じる次第。

ラグビー精神と医学

久保正治(高3回生)

母校天王寺高校卒業後はや20数年たち、また医者となって大学に残り、すでに17年の歳月が過ぎ去った。私は「艱難汝を玉にする」という言葉を好む。大学勤務医は毎日が試験である。診療上、難しい症例にあたれば、常に積極的に取り組み最善の治療をするように心掛けている。自分に与えられたポジションは死守し、がんばり通し、問題解決へと努力する主義は、天高ラグビー部在籍中たたき込まれたものと思う。当時ご指導、お世話頂いた諸先生、諸先輩並びに全国優勝の誉れあるチームのメンバーの1人として出場し、栄光の実感を味わわせてくれた同輩への感謝の気持ちを忘れた事はない。

医療に携わる身として、高等、微細な手技を必要とする手術や、長時間を要する手術に挑戦出来るがんばりの精神力と体力も高校時代に鍛えられた成果とありがたく思っている。全国制覇を達成した我々フィフティーンは、すでに焼け跡派中年といわれる年齢になり、繁栄日本の中堅として、各界で活躍し多くは管理職としてそれぞれの職場で優れた能力を発揮している。終戦の混乱期を中学生、高校生として、どん底の社会の中で多感な青春時代をラグビーを友として学び、強く生き抜いて来た年代だけに少々の世間の異変など気にせぬ。いわゆる頼りがいがある存在でもある。

最近、どの職場でも同じことだと思うが、自己を主張し、他人のことまで考えて行動する人が少なくなり、嘆かわしい現象だと思う。すなわち自分を犠牲にしてまで人のため全体のために役立とうとする犠牲的精神の持ち主は少ないのではないか。近年、受験中心の予備校化した学校が多く、自分だけが一流校への風潮の強い教育界にあっては、母校天高は昔のまま質実剛健の校風をもとに、体力、人格、そして学力の優れた世のためになる生徒づくりの指導、教育をすることで天王寺高校なお健在なることを、あらためて天下に知らしめてほしい。

今日まで私は多数の患者、種々な難病を相手に健康を保ちつつ連日研究、診療に奉仕できたのは、高校時代の特訓のお蔭と感謝している。今は人の命を預かる立場にあるが、現役時代には腸骨骨折、四肢痙攣等の外傷による疾病を体験し、当時の皆様にご心配ご迷惑をかけた事を覚えている。特に夏合宿では、ちょっとした気のゆるみからセービング直後に腸骨骨折をおこし、大野病院外科の村田先生のご高診を頂いた事があり、天高ラグビーの先輩の層の厚いのに驚くと共に、ありがたかったものであり、一方、先輩は大いに利用すべきである事も知り得た。左四肢痙攣性麻痺は、同輩の岩井君の鋭い突っ込みの頭が練習台の私の右頭部に激突しておこったもので、この症状は解剖学的に有名な交叉性神経運動路に原因して表れる運動麻痺症状で、この苦い体験が、その後医学生の際に、解

剖学の口答試問に出て、すらすらと答えることが出来、貴重な体験を進級試験に生かす事ができて岩井君の石仏のような固い頭にいつも感謝している。

近年、スポーツ医学も予防及び治療の両面から重要視されるようになり、特に心、肺機能を中心とした内科的な分野、骨、靱帯を取り扱う整形外科領域の疾患が、主な対象となっているが、私の専門とする耳鼻咽喉科領域でもスポーツによる損傷として鼻骨の脱臼骨折の頻度が高く、天高の選手も外傷後の鼻骨の変形で来院し整復したことがある。この場合、多くは非観血的に整復可能なために、男前を崩す心配はない。このような場合、私共の施設の利用も申し添えるが、しかし、ケガはせぬに限ることはいうまでもない。

鼻部外傷の際、鼻出血もよく表れる症状であるが、これは多くは物理的な外力によって鼻中隔（鼻の中央にある隔壁）前部にある豊富な小血管が破綻しておこるため、従って、この場合は鼻の入り口の圧迫により簡単に止血するもので、それ程不安はない。

耳に関係する外傷性疾患の場合、鼓膜穿孔や、これに続発する中耳炎や、耳介を刺激することによっておこる血腫や耳介軟骨膜炎をおこす事があり、この治療過程で相撲取りによく見られる耳翼にたこが出来、いわゆる力士耳と呼ばれるものになる。ラグビー選手の耳にもしばしばお見かけする事がある。特にFWの選手に多く私も現役時代に右耳にこしらえ、そのころは激痛を耐えつつスクラムを

組み通したが、今は私の青春時代の貴重な思い出ともなり、時にこの“たこ”を誇りにさえ思っている。ところが顔の横のために余り人目につかず、時々散髪屋のオヤジが気付く程度で、中には顔と見較べながら、職業はボクサーかと予期せぬ質問をされ、苦笑する事もある。この右耳の“マスコット”は、これから私の人生を共に歩む事になるが、私の過去の一切を知っているように、未来を共に喜び、共に悲しみ、また慰め、励ましてくれるものと思い大切にしていきたい。

“勝つは体力気力のしるし”の天高応援歌が教えるように、不屈の精神と、平素から鍛練されたがん強な体力が、スポーツ・仕事を問わず、心身のコンディションを整え、勝利と成功をもたらす。ラグビー、その他のスポーツにおいて、小兵の選手がチームの中心的戦力となりチームを勝利に導く光景をみる。日ごろから人の倍以上の練習により、体力と気力を充実させ、身体のハンディキャップを補うからであろう。

スポーツ医学に関する仕事は、むしろこれからの研究に期待したい分野であるが、国際的視野で日本のスポーツ界全般の向上、発展に寄与できる研究計画と成果が望まれる。

大阪市立大学医学部には毎年新入生の一割近くの天高生が入学する。また新1年生のうちの数人余りが経験の有無を問わず医学部ラグビー部に入り、医学の勉強の傍ら6年間の学生生活の間、体力づくりと医学以外にクラブ活動を通じて人生について学ぶ。そして卒

業するころは、身心共に健全な青年に成長する。近年ほど医師のモラルの低下をマスコミによって取り上げられた事はかつてなく、たとえそれが一握りの医者であっても、医道に携わる者として非常に残念な事に思う。

この理由には種々の要因が挙げられるが、長い6年間の医学教育機関において医学教育以前の問題として、学生たちが道義感、使命感を自ら習得し得る環境づくりも必要であろう。

医者職場としては厳しい大学で長い間、大過なく勤められたのも健康であった事、若い学生たちと接触する機会が多くふけ込まなかった事、そして医者として満足できるレベルの高い治療に専念できた事が主な理由である。

今後も可能な限り誠実な医療を施すべく50年の伝統ある天高ラグビー部でたたき上げられた身体と意地をもとに、日本の医療に尽くしたいと思う。



昭和27年
8月31日
対桃山高
戦を終え
て

ファンの神髄

真 鍋 正 稔(高5回生)

今年の正月7日、仕事の暇を見つけて高校ラグビーの観戦に行った。花園のほぼ満員のスタンドで同期のU君に数年振りに会った。確か数年前に会ったのもこのスタンドのはずである。彼は高校時代、何のスポーツもしていなかったが、よくラグビーの部室の前に来てはボールを転がしていた様に思われる。彼は今年の正月もほとんど連日、ここへ来ているとの事で、さすがゲームを見るに当たっても、その詳しいこと、小生などあまり使い慣れていないモール・ラックなどのラグビー用語がポンポンと飛び出し「あのウイングは何秒で走りよる」「このチームのFWの平均体重は何キロ」等々ラグビー記者顔負けの解説をしてもらった。

彼はラグビーが好きで好きでたまらないといい、ビッグゲームは必ず見ているという。彼とラグビーの出合いは、やはり天王寺に入学してかららしい。1年生の冬、北野との定期戦の応援に酔い、明けて正月全国制覇時のあの華麗な天王寺ラグビーを見て病みつきになったという。

彼がラグビーで一番好きなのはタックルで、あの一発で決まった時のバシッ！という音には、しびれるらしい。その日の観戦時に彼の解説の中で「よく帰っている」「よくついている」という言葉が何度か聞かれたが、目立たない忠実なプレーも好きらしい。彼はラグビーを見てただ楽しむだけのラグビーファンではなくて、「不屈の闘志・自己犠牲の精神」を人生の指標にしているという。小生など、そばにも寄れない真のラグーマンである。彼は2人の女の子の父親で、しきりに息子のいないのを悔み「息子がいたら、どん

な事をして天王寺へ入れてラグビーをさせたかった」と残念がっていた。その彼がもう一つ残念がっていた「最近天王寺の名前が新聞に出るのが寂しいしょうがない」といい「どうなってんねん」と聞く。

現役諸君、がんばろう。OB諸兄、大阪府のOB大会に是非とも出て来て下さい。「OB大会天王寺優勝」の活字をU君のためにも出してやって下さい。

汗と涙の合宿

米 沢 弓 雄(高6回生)

まず第一にコーチ陣について思い出す。伊藤道夫氏が最初のコーチであり、そして宇野先生の着任とともに、我々は宇野第1期生となった。当時来日したケンブリッジ大学の独特のパスを宇野先生が取り入れ、ボックスは泣かされたものだが、今もそれが基礎としてプレーされているのを見ると、胸を張りたくなる、というのは当時泣かされた連中である。そして岡仁詩氏がサインプレーを、そしてコンビネーションで独特の頭脳プレーを教えてくれたものである。

1年の淡輪、2年の名張、3年の奈良の合宿は、まさに汗と涙と下痢の思い出が先に立つが、しかし、その後の人生においてあの合宿の苦しさを思うと、少々苦しい事があっても必ず乗り切れるのだという自信が今も確実に我々の心の中にある。

それにしても我々の仲間は楽しいのが多く

いた。寺下君はレーンシューズをはいて(入部当時)練習に現れて、妙な足音を立てながら走った。平河君はインゴールを突き切りデッドボール・ラインの向こうでトライ(?)を試み、あ然とさせた。下平君は部室に入った泥棒にシューズを盗まれ、後日釜ヶ崎に売れ残っているのを再購入した。(文数が大き過ぎて売れなかったのだ)。宮城君は脳震とうをおこして、まだラグビーがこわいというが少しもそんな事はなさそうだ。杉田君は練習がつかいころになると鎖骨を痛め練習を休んだ(自分で外すのでないかと思われる位だ)。松村君、松宮君や上西君の真面目さはおそらく今も変わっていないだろう。井上君は相当なヤンチャだったが、今全く消息のわからないのは残念である。(平河君も消息不明という)できれば50年史発行を機会に、40代に入った我々も、もう一度手を組んで残る人生を楽しく仲良く暮らしたいものです。

全国大会を目前にして先輩の指導を受け仲の良さという点では、本当に一丸となっていた我々は強かった、と思う。池田高校に30-0で勝ち、大会予選でその池田高校と対戦した。ナメたわけではなかったが、やはり気のゆるみがあったのだろう。惜敗し目の前にぶら下がっていた大会出場をフイにしまった。国体では大阪府予選で布施高校と引き分け、両校優勝したものの大会出場のために行った抽選も忘れられない。先ずジャンケンで勝ち、そして先につまんだマッチ棒の先端には“玉”がなかった……。私はあの時の気持

ちを今も鮮明に、あの暗い室の様子とともに思い出す。仕方がないといえばそれまでだが、既にフロに入っていた者も、皆が結果に対して何も愚痴らず、私を責めもしなかった。いやむしろしょげる私を励ましてくれただけに今でも残念に思う。

思い出は果てしがないが、最後に私自身の事に触れることを許してほしい。天王寺の某中華料理店（店名は忘れたが）でのミーティングのとき、ややあって私が主将に指名されたとき、技術的には私より上回る者が多数いる中で、どうしたものか、その責任の重大さに私なりにずいぶん悩んだものである。そんなとき、前任の山本正行氏から5枚の葉書もらった。①から⑤まで番号を打ったその葉書を読んでいる内に、やれるだけやってみようという決意ができ、同時に暗雲の晴れるが如く、今までの悩みは消え去った。私は先ず“和”を念頭にチームをまとめたつもりである。そしてその後の私の人生において、この貴重な経験はどれほど私の救いになっていることか。まさに私の人生はラグビーによって礎かれたものであるといえよう。

ニックネーム

松村 竜男(高6回生)

数えきれない思い出の中に必ず出てくるのが、あだ名である。本名を忘れてもあだ名だけは覚えているから不思議なもの。それだけ本名を呼ばなかったのだろう。

ヨッシャン、シモヘイ、トッチャン、アパッチ、ドン、ヘソ、ムツリ、スギジン、コブウイサン、ホーデン、フク、オクソ、オハル、ナナナン、ライオン、ホッテン、故ケンボウなどなど。先輩では敬称略で、チイチャン、キュウリ、ソンパチ、オイワ、ヤンチ、ボイナ、ナガシ、ハムベニヤン。

全国制覇の翌年の1年生であった我々はアオタツ大先輩をはじめ、オカマ、ポンチ、キッタン、ナオチャン、ロスケ、ヨツロウ、ドウ、ババタ、の諸先輩の猛烈な指導(シボリ)にあずかったことが生々しい。それぞれの時代の、それぞれのあだ名が良き伝統の流れと共に、いつまでも生き続けることだろう。

私のあだ名は「エムタツ」松村竜男である

貴重な良き友

松 宮 侑(高6回生)

天王寺ラグビー部50年史にのせる資料がなにかとの電話を編集委員の1人で、同期生の松村君から受けた。その前に一筆書くようにとの手紙をもらっていたので、何とか資料になるものでも探し出してその責めを免れたいと思い、あてもないままに本箱をひっくりかえしてみた。案の定役にたつようなものは何も見付からなかったが、古い雑誌の間から黄色く変色したオックスフォード大学対全日本のメンバー表が出て来た。日付を見ると昭和27年10月1日(水)とあり、10年一昔という

が、もう二昔以上も前で全く月日のたつのは早いものだと思う。

しかしダークブルーが見事なオープンプレーで全日本を圧倒した試合の様子は鮮やかに思い出すことが出来る。そんなわけで当時の思い出話を書いてお許しを願うことにしたい。

はじめて天王寺のラグビーを知ったのはたしか昭和26年1月のある日の毎日新聞紙上であった。まだ戦後間もないころで新聞もページ数は少なく、たしか1枚すなわち4ページだけで従って小さいスペースだったと思うが、天高が全国高校ラグビー大会で秋田工などの強敵を破って優勝したという記事が目にとまった。ラグビーという球技のあることは知っていたがどんな競技かはサッパリ分からず、まして天高が高校ラグビー界の名門であることなど知る由もなかったが、間もなく自分が受験する高校ということで何となく身近かにまた頼もしく感じられたのを覚えている。

その年の4月には無事入学出来たが、それまでスポーツというものには全く縁がなく自信もなかったのもので、高校でラグビーをやろうなどとは思もしなかった。ところが1年生の冬のある日、担任の先生から青春時代にスポーツもしないで勉強だけしているようでは片輪人間だという話があり、それがどうも気にかかって仕方がなかった。

明けて昭和27年の正月、赤いジャージの天高（双方よく似たジャージなので天高が

赤を着用したとは後で聞いた話）が盛岡工に敗れるという実況放送を聞いてスポーツするならラグビーだという気がしてきた。

体力にもスピードにも自信はなく、とてもついて行けそうもないという気がしたが、ラグビー部なら全国優勝する位の強チームなので、ボール拾いに終始しても何とか恰好がつくだろうという単純といえば単純な、また身の程知らずな動機からであった。そんなわけで1年生も終了間際になってラグビーをはじめたが、最初はランニング・パスでは遅れるし、ボールを蹴ってはあらぬ方へとぶという具合で散々であった。もっともその後も大して進歩しなかったが、3年生になって最上級生ということで空いたポジションを与えられることになった。しかし軽量で極めて頼りないのがフォワードに入ったせいか、チームは華々しい戦績を挙げることが出来なかった。

そのころ宇野先生が赴任され連日練習を見ていただくことになり、また時には先年全国優勝時の名選手がコーチにお見えになるなど大変恵まれており、現役にも同期には文の里中学より鳴らした吉村、井上、下平、松村、上西また1年下には宝田、青井、福本の諸君らそうそうたるメンバーがいて、それなりの自信は持っていたが、軽量フォワードが災いしてか結局大阪予選の壁を破れず誠に残念であった。まず春の近畿大会であるが、大阪の代表決定戦は積雪の中、前半0-0と接戦であったが後半力つきて0-12と布施工の前に屈した。相当激しく動いたはずであるが、ち

ようど雪が解け出す時で猛烈に冷え、試合が
終わった時はパンツのひもがほどけなかった
ことを記憶している。これがキッカケで積雪
の場合は試合は順延されることになったと聞
いているので、いわば歴史的な試合といえる
のではなかろうか（ホンマカイナ？）。

秋の国体予選の決勝では今度は雨の中で布
施高と対戦し0—0と相譲らなかったが抽選
で涙をのんだ。全国大会の予選では第2ラン
クにシードされながら最初の試合で池田高に
8—9と予想外の敗戦を喫し、結局中央への
進出は成らなかった。次年度からはまた全国
大会へ姿を出すようになったのだから、この
年は天高ラグビーにとっては谷間だったとい
えよう。ただ北野高との定期戦に快勝したの
がせめてものなぐさめであった。大学へ入っ
てからの4年間も負け戦の方が多い位で、関
東の強豪と対戦した時には記録的な大敗と新
聞でたたかれるなど、伝統を汚すことしばし
ばであった。

ということで自分のラグビー生活はあまり
バツとしたものではなかったが、今となれば
すべてがなつかしい思い出で、本当にラグビ
ーをやって良かったと思っている。ラグビー
を通じてフェアプレーの精神が培われると
か、いろいろいわれ、まさにその通りである
が、むずかしいことはさておいて、何かをや
ったという満足感と、多くの良き友を得たこ
とが最も貴重なのではあるまいか。

ところで対オ大の全日本のフィフティーン
を冒頭に述べたメンバー表から写してみると

次の通りである。

齊藤	中島	関川	橋本	田中	高橋	藤井	門戸	柴垣	横岩	大塚	小山	青木	佐藤
(明大)	(立命)	(慶大)	(早大)	(早大)	(東大)	(早大)	(同大)	(京大)	(早大)	(関大)	(早大)	(早大)	(早大)
O	O	O	O	O	O	O	O	O	O	O	O	O	O
B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B
FW				HB				TB				FB	

試合は35—0と全日本の大敗に終わった
が、始めて見る歴史的な試合に目を奪われた
ものである。その時全日本のハーフ団が天王
寺の先輩だと聞いてうれしくもあり、誇らし
い気持ちになったのが思い出される。その後
も我が天王寺から日本を代表するような名選
手が多く出たが、最近はどうであろうか。今
年はウェールズの来日があり、またまた歴史
的な試合を花園のスタンドの一隅で観戦する
機会を得た。全日本の監督が岡大先輩である
ということで天王寺ここにありと力強く感じ
たが、欲をいえば代表選手に名を連ねる人が
いたら、と思った次第である。試合の方は23
年前のオ大の時と同様、全日本でも歯がたた
なかったが、ウェールズの実力はオ大より数
等上という話なので日本のラグビーも着実に
進歩しているのだろう。しかし彼等の体格を
見ていると果たして日本で彼らと対等に戦え
るチームが出来るのかという気がしてくる。
ともあれラグビー人口を増やしラグビーの底
辺を広げることが日本のラグビーの進歩に必
要であろう。もちろんラグビーも以前より普
及したが、まだ一般にはなじみが薄く、ルー
ルがサッパリ分からんとか、単に危険なスポ
ーツだという人が多い。ここは一工夫してよ
り一層の普及をはかりたいものである。その

ためにはまず天高のラグビー部員を増やすことである。聞くところによると最近^は15人を集めるのに窮々としているとのこと（間違っていたら失礼）。

連日紅白試合が出来てこそ実のある練習が出来、またお互いに切磋琢磨^{きさくさく}してはじめて強いチームが生まれるのだと思う。そこで天高の先生方をお願いしたい。天高の生徒たるもの全員がラグビー部員たれと指導していただきたい。全員がラグビー部ということでは他のクラブから苦情が出そうなので、全員が何らかのスポーツに親しむようすすめていただき、その上でラグビー部員が100人になるようご配慮願いたい。そうなった時に再び天高が全国大会の常連になり、更に全国に覇をとえ、多くの名選手を輩出することになるであらう。

またその時には日本のラグビーの国際的な地位が一段と高くなっているであらう。そんな日の近からんことを祈って筆をおく。

ゴンボとウンコ

田中啓一(高7回生)

昭和34年春、予定通り関学を留年になった私は、早大を落第して同輩宝田雄弥君と共に当時コーチの、故青井賢次君と宇野先生の要請で、母校へ指導に行ったのが運のつき、長いコーチ生活の始まりでした。昭和46年まで時間の許す限りグラウンドへ行きましたが、ゴルフの腕が上がるにつれ、ラグビーが私よ

り逃げて行き、最近^はは全くのごぶさたで申し訳けなく思っております。数々の思い出が、私の頭の中を走ります。あのゲーム、あのプレー、あの涙、目先の欲のためにラグビー部を去って行ったあの学生。しかし最後までラグビーを続け立派に卒業して行った我々天高ラガーを、いつも温かく見守り、励まし、指導して下さいた田中先生（2代目ゴンボ）と宇野先生（ウンコ）に改めて感謝致しますと共に、今後も明るい元気な天高ラガーの育成指導をお願いする次第です。私が学生時代のゴンボは、苦手の数学の教師のせいか、とっつきにくい、話しにくい感じで、ウンコはぼやいてばかりで、試験の点数もちっともオマケがなく、いやらしい先生でした。しかし、我々の送別会のかくし芸大会で、浅岡先輩の講談「次郎長外伝、吉良仁吉」の熱演につられたのか、ゴンボが川田晴久の物真似で「セントルイスブルース」を面白、おかしく演じ、大爆笑で我々を送り出してくれて以来、天高の数学の先生でも、こんなにおもしろいか、と非常に親しみを持ちました。その時ウンコは真面目くさって、藤原義江の物真似で「出船」を歌っておりましたが、翌年花園の合宿中、嫁はんのノロケ(当時新婚ホヤホヤ)や、アノ話をするにおよびこれまた天高の先生でもワイラと一緒にド助平やなあ、これから気兼ねしにアノ話も出来るワと思い、今でも失礼な事ばかりいっております。ゴンボが精神論主体、寛大なる心で学生を指導して下さいたのに対し、ウンコは、ヒステリックに

生徒をしかる事によって指導して下さった様に思います。一般学生対教師のラグビー試合で、理論、技とも熟知しているウンコが、全然タックルせず何の技も知らないゴンボがすばらしい突進や、ナイスタックルをした事がありました。あれはどういう訳でっしゃろな。ウンコがビビりなのか、ゴンボが怖いもの知らずなのか……。ラグビーが理屈だけではうまく行かない一面を見た様にも思えました。対照的な2人の先生の共通点は、ただ天高ラグビー部を愛し、立派な天高ラガーを育てるの心意気だけの様に見えます。

あの入試地獄の折、ほとんどの天高教師が「天王寺へ入学して、運動部へ入るなんてアホと違うか」といった時「ラグビーも勉強も出来るのが本当の天高生や」と叫びつづけたゴンボとウンコ、つらかったでっしゃろ。あの時、先生の叫びがなかったら、ラグビー部は消滅していたかもしれませんね。今、桃陰ラガーは50余年の歴史をよみがえらせています。私が卒業して20年、ゴンボとウンコはそれ以前より、相手変われど主変わらずで、終始天高ラグビー部を見守って下さっております。雨の日も風の日も、必ず試合場に現れ、小さなカバンを小わきに抱え、黙って立って応援するゴンボ、しゃがみ込んでブツブツぼやきながら草をむしり、小石を投げ、時々大声を出して怒りながら応援するウンコ、本当にすばらしい両先生の指導で巣立つ天高ラガーは幸せ者です。いつまでも変わらぬあのスタイル、あの顔で、若いたくましい天高ラガ

ーをご指導下さい。最後に長い間、学生と共にラグビーをして来ましたが、思い出深いゲーム、チームを語らせて下さい。生涯忘れられないゲームは、松井淳太郎主将の年の対四条畷決勝戦です。負けました。しかし、決勝まで進める程実力のないチームが、松井君の命令通り15人が一丸となって戦い、持てる力を十二分に発揮したあのゲームは、ラグビーにおいてチームワーク、キャプテンシーがいかに大切かを再認識させてくれると共に、勝負は、正々堂々と戦い、絶対に勝たねばならぬ「敗れて悔なし」なんて第3者のきれいな事ではない事を教えてくれました。最も尊敬するチームは名将佐々木慎太郎君率いるチームです。レギュラーに新人5人を入れながら、あの猛練習に耐えたばかりか、堂々と全国大会にも出場し、進学も佐々木、室賀、奥沢、野中が神戸大へ、河野が東大、大屋、近森、中務、松田が京大、大西が阪大と、入りにくいといわれる学校へ見事入学した事に敬意を表します。真の天高ラガーといえるでしょう。しかし卒業後の後輩指導を怠った事は反省して下さい。計算通りの試合運びをしてくれたのは得能君主将時の淀工戦です。SOのキックによるFWの突進しか出来なかったチームが、指示通りの試合をしてくれました。得能君のあのボックスキックをフェアーク্যাッチで防がれれば何にもならんなあと思いながら、「ええいままよ、淀工のOBがフェアーク্যাッチに気が付くのはゲームが終わってからよ」と自分で決め込み、全くの作戦通り

に快勝したゲームは実に痛快でした。この戦法しかない事を知りながら、このチームが全国大会の目黒戦で作戦を無視し、敗れ去ったのは残念でした。

好選手が多勢いながら並のチームでしかなかったのは榊谷主将の時だけ。選手の我慢を抑え切れなかった主将、榊谷に、親父の根性の一片でもあれば、文の里中よりの先輩、松井、佐々木の度量があればすばらしいチームになっていただろうと後で惜しまれるだけ。珍プレーの最たるものは全国大会に新人で初出場した井上君、敵のキックをフェアーキャッチの恰好して受けたものの声が出ず、となりの樋口君が代返をし、レフェリーがこれを認めた事や、全国大会予選の決勝戦で、トライ後のプレースキックを、空振りし、レフェリーをまごつかせた陽君でしょう。ほんとうにいろいろと思い出します。やはりラグビーはすばらしいスポーツです。ラグビーが私からいくら逃げても、しょせん逃げ切れないでしょう。今は和気あいあいとプレーする桃陰ラグーのゴルフコンペと、惑々クラブの新人として年齢に合ったラグビーを楽しんでいます。

人生観の原点

川口 治雄(高8回生)

高8回とは1955、56、57年と天高が3年連続して全国大会に出場した時の、1956年のチームである。前年の高7回のチームが、優秀なボックス中心のチームに対し、高8回はフォワード中心のチームであり、優秀なボックスが多い天中、天高ラグビーの歴史の中でも、異色のチームではなかったかと思う。

高8回を中に、高7～9と3年連続全国大会へ出場したが、高7回は故青井賢次主将はじめ、宝田、福本、白神、奥村先輩の優秀なボックスをもって、国体、全国大会に出場した。フォワードは田中(兄)、小西、藤田の3人の3年生と、私や長浜の2年生や、1年生の黒野君であり、軽量で弱体であった。1年生の黒野君が一番体重があった程度である。大ていの試合ではスクラムは押されっぱなしで、試合中は宝田、福本先輩あたりからどなられどおしで、2年生の時の記憶では試合中にボールを持って走ったことはほとんどなく、わずかに一度だけボールを持ったら、前が見えず相手のユニホームだけがぼやけて見え、気がついたらルーズの下敷きになっていた。したがって私などは、フォワードはスクラムは、押すのではなく、押されるのをこらえ、ルーズには何も考えず、頭から突っ込み、ボールがあれば、後ろへかくとボックスが走ってくれるぐらいに思っていた。

さて3年生が卒業し、私達が3年生になった。フォワードは田中(兄)、小西、藤田の3人が抜けただけで、私や長浜、黒野、阿部、藤井、片野や、2年生の横島、大西、金森、1年生の米田、田中(弟)と多数いたが、バックスは、大脇、菅田の両君を残し、入れかわった。松岡、谷、山鳥、佐野、植木君などの2年生が主力となった。新チームになり近畿大会が始まった。予選から近畿大会を通じフォワードを中心に戦っていた。優勝戦で天理高校にこそ惜敗したが、この間を通じ、一番の得点源はスクラムトライであった。相手ゴール前に近づくと「やってしまえ！」というわけでスクラムトライをねらっていた。一番確実な方法だった。特に印象に残るのは、近畿大会の1回戦、瀬田高校戦だった。雨中の試合ではあったが、47-0で大勝した。15トライで何とゴールが決まったのは一つだけという試合だった。それまで昨年よりフォワードは自信をつけてきたが、この試合で大いに自信を持った。何しろスクラムを組めば今までは押されるものと思っていたのが、相手は軽く、ぐんぐん押せる。ボールを持つ機会がぐんと多くなり、持って走れば走れる。ラグビーがこんなにも面白いのかと、本当に心から思った。

以後、夏合宿、国体予選、全国大会へと、スケジュールが進んで行くのであるが、この年の夏合宿は、花園ラグビー場で行った。この夏合宿では関学へ進学した田中(兄)の強烈なしぼり方が忘れられない。前年までは、我

々と一緒にスクラムを組み、試合では一緒に相手から押されていた先輩が、一転して、しぼり役に回ったのである。スクラムを押しながら、グラウンドを一周するという強烈さであり、我々の味方のつもりが、憎き先輩というわけで、合宿中はぼやきどおしだった。しかし、この時の訓練のおかげで、それ以降も他校が戦力強化してくるのをしりぞけ、全国大会への出場を果たすことが出来たのである。

この年の北野高校との定期戦で、前年の定期戦で不幸にも亡くなった野本君のご両親より、この定期戦に野本楯の寄贈があり、第1回目は私ども天高が勝ち、着物をきた野本君の妹さんより楯と花束をいただいた。なお野本君は前年の定期戦では私のトイメンであり、非常にスクラムは強かった。

国体予選は決勝で淀川工に敗れた。全国大会予選の決勝は、またも宿敵四条畷高校だった。当時四条畷と天高は実力伯仲し、常に好ゲームを演じ、良きライバルであった。特に前年より引き分けが多く、私どもの時も2度対戦し2度共引き分けている。そして2度の引き分けとも天高が抽選勝ちの幸運を得ている。前年に続き3回連続抽選勝ちであった。特にこの全国大会の決勝戦は3-3の同点の上で、正月の全国大会の出場をかけての抽選であった。抽選はジャンケンに始まり、三段階よりなる抽選で、私が3回目の幸運に恵まれた。この時の四条畷の主将が「またか！」といって全く、くやしそうに顔をゆがめたの

が印象的で今も忘れられない。

さて、明けて正月、西宮球技場で全国大会である。対戦相手は東京代表保善高校である。当時の保善高校は高校随一の強力フォワードを有し、この年の全国大会の優勝校にもなった。保善高校とは、前年の北海道国体の1回戦にも対戦し、この時は快勝している。しかしこの国体での試合の最初のスクラムは、全く散々たるものであり、組むやいなや、約10ヤード以上もあつというまに押されてしまった。全く手も足も出なかった。あの時の驚きは今も忘れられない。しかしルーズでは私達はよく走り、互角に戦ったためバックスがよく走り快勝した。

今度はまた、その保善高校が対戦相手だった。私はあの時の屈辱をそそぎたいと試合最初のスクラムに勝負をかけた。組んだ！お互に一步も動かなかった。私の両足も地面に食い込んだまま一步も動かなかった。試合後田中(兄)先輩がいつてくれたが、非常に低いスクラムだった。試合はフォワード戦を中心に展開したが、総合戦力にまさる保善高校にゴリゴリ押され12-0で敗れた。試合に負けた悔しさはもちろんではあるが、前年スクラムで足が地につかない程に押しまくられた相手に一步もゆずらずスクラムを組めたことはうれしかった。特にフォワードの方にはご経験あると思うが、試合に勝ってもスクラムが押されがちな試合はもう一つ満足感が少ないのである。

高8回が終わり、高9回になり、黒野君が

主将になり、3年目の全国大会に出場した。

この年のチームはフォワード、バックスのバランスのとれたチームだった。もちろん私達の高8回もフォワードだけでなく、大脇、菅田両君を中心としたバックスは攻守に大いに活躍して15人全員で試合をしたことはいうまでもない。

今ふり返ってみると、長いラグビー生活を通じ天高時代ほど一生懸命にラグビーに打ち込んだ時はないと思う。良き先輩と環境に恵まれ、先輩よりの良きご指導を受け、青春の一時期を過ごし得たことは、今日の私の行動、発想、そして人生観の原点になっております。最後ではありますが、私達をご指導下さり、また何かとごめんどうをおかけて頂きました。青井賢次主将が、昨年不幸にもお亡くなりになり早くも1年たちました。全く惜しい人をなくしました。私ども高8回卒業生一同、心からご冥福をお祈りいたします。

つらい練習に充実感

阿部浩三(高8回生)

はじめて私がラグビーの門をたたいたのは天高2年生の秋であった。早いもので、あれからもう20余年をラグビーと共に歩んで来た。入部当時人一倍走ることの苦手だった私は、正直練習について行けなかったと記憶する。ランパスのトップの3回位になると、私がグラウンドの端に着いたころは、もう皆は引き返しかけていたものである。

そんな練習も3年生になるころには、なんとか人並みになり興味もわいて来た。

そうして慶応に入ってから、ラグビーを続ける羽目となってしまう今日に至っている。お陰で（これは口実であるが）学業の方は高校、大学を通じていつも最低線ぎりぎり甘んじて来た。しかし、学校で勉強しなかったことを一度も後悔したことはない。

むしろ、昨今ただ下宿と学校、あるいは学校の近くのマージャン屋等との間を往復して学生生活を過ごしてしまうような若者が多い中で、辛い練習の中に何か充実感、満足感といったものを感じて学生生活を過ごすことが出来たことをうれしく思っている。

昨今、新聞などで見聞きするところによれば、大学の体育会の運動部員は、ますます減少の一途をたどっており、一方、同好会スポーツクラブの人数が増えつつあるとのことであるが、これは苦しい練習の行われる運動部をさけ、楽しくスポーツの出来る（これは厳密にはスポーツではなく遊びだと思う）いわば、快楽追求型となっているということであるが、これは現代社会のすう勢であろうか。

しかし安易に求めた快楽の中に、真の楽しみはないと思う。真の楽しみは苦しみを越えた時にのみあるのだということを知らない若者は不幸だと思う。幸い我々は楽しみの味を知っている。現役諸君には今後共ラグビーを続けてもらいたいし、また、若き先輩諸兄にあっても、体力の続く限りプレーをやってももらいたいと思う。そして年齢の限界を知り、

寂しさを感じる年ごろとなった時には、桃陰ラグーコンペへの入会をお勧めする。年に4回各シーズンごとに行われるコンペは、桃陰一家という感じであり、よき先輩、よき友を持った喜びを必ず感ずると信じる。桃陰ラグビー50周年を記しゴルフ50年誌を作る日まで、ともにがんばりたいと思う。

第9回 国体出場記

大 脇 成 裕(高8回生)

日本中、どここの街でもそうだが所用で北海道を訪れる度に、街も自然も変ぼうし、美しさが失われ、昔はよかったのにといいなくなる。というのも昭和39年第9回国体が札幌で開催され、天高ラグビー部の一員として訪れたときの印象が、いまだに強烈だからであろうか。何分20年以上昔のことであり、記憶もうすれ勝ちであるが、覚えている部分と記して、同行した諸兄に補足していただきたいと思う。

「天王寺のラグビーは全国大会（正月の）で優勝することを目指しており、国体なんかに出場する必要はないが、仕方がないから派遣することにした」云々の田中健三先輩の例によって渋い壮行の辞に送られて国体列車に乗り込んだ。たしかに出場選手以外にも含めて部員全員を自己負担なしに派遣してもらったのは先輩各位の並々ならぬご尽力のたまものと今だに感激している。

国体列車なるものが現在もあるのか否か知

らないが、当時はひどいものだった。大阪発裏日本回りできちょう面に各駅に停車して国体選手を次々に積み込み、田舎のプラットフォームもないような所に1時間も停車し、上り下りの急行、鈍行はもちろん、貨物列車にまで追い越される超鈍行列車であった。そこでは各チームともランニング、体操をして体調を整えながら一路北へ向かった。とにかく大阪を出てから札幌に到着するまで何日要したのか失念したくらい気長な汽車旅行の末、札幌に到着した。8月とはいえさすが北海道は涼しく、ずい分遠くへ来たなという感激と、こんな気候なら良いプレーが出来るだろうという期待を抱いて札幌郊外の静かな温泉地、定山溪温泉の宿舎に入った。昨今と違って大らかな混浴の大浴場に全員色めき立ち、ついに入浴は1日1回に制限され、宝田さんに「女が入浴したら知らせよ」と番台役をさせられたのは松岡、山鳥氏らだったか？ このときのチームワークは抜群で、緊張をはぐす三枚目役は福本、田中さん、締め役は青井、藤田さんらの3年生、いびられ役は1年生、筆者らの2年生は一番個性に乏しい学年だったか。また、3年生は予選決勝戦と重複するので修学旅行を辞退し、全員がその意気込みに引きずられるというふん囲気であった。

戦績は別に記されていると思うが、第1戦は保善に快勝したものの、2回戦で松山東に辛勝、内田先輩（コーチとして予選からずっと面倒を見られた）に大カツを入れられ、ブロック優勝戦では秋田工に13-0で敗れた

が、善戦であったのはこのカツが効いたのだろう。この試合の写真が新聞の大阪版に掲載され、菅田が好タックルしているのに、まわりで2、3人がサボっていると批判されたりした。

元飛行場だったとかいうグラウンド（北大の北の方）は今、団地となり、札幌駅から地下鉄が通っている。市内から定山溪への足であった豊平電鉄もなくなり途中の羊が群れていた牧場も市街地となり、定山溪は札幌市街と地続きになった。優勝戦には応援に来てくれた旅館の番頭、女中さんと話をしたくて探したが旅館そのものが案内書には見当たらない。大阪出発から大会終了まで緊張の連続で精神的疲労の大きい一同は、帰途、洞爺湖に1泊した。山道をバスにゆられ静かな湖畔に数軒の宿が並んでいるだけだったここも一大歓楽温泉地となっており、山道とは思えぬ舗装道路、国鉄の駅名まで蚊田から洞爺に変わってしまっている。

青井キャプテンが物故され、北海道で所用があって試合中同宿されたラグビー好きの後藤安久校長も亡くなられたと聞く。当時、肥えるために飯をドンブリに3ばいずつ食べてもフォワードの平均体重50kg未満であった連中が巨体をもて余している昨今だから20年は長い歳月といえるのかもしれない。

現役の部員及びその他天高生に一言。天高卒業を間近なある日、級友の1人が筆者にいった言葉が今でも強く印象に残っているので諸君に伝えておこう。「天高にあこがれて入

学し、天中の伝統なるものを耳にタコが出来
る程聞かされてきたが、3年経った今、その
伝統の何であるかを知らないまま卒業する。
それに比べたら、お前は幸せや。天中時代か
ら残っている何かとはラグビー部にしかない
のではないか。天高でラグビーをやったヤツ
がうらやましい」

他人がいうのだから手前ミソではない。天
高時代の思い出のほとんどはラグビーに関す
る事で北海道遠征はそのほんの一部にしか過
ぎない。より充実した高校生活をエンジョイ
したけれど、ラグビー部の門をたたき、泥と
汗と涙にまみれることをすすめる。

3年連続全国大会へ

黒野 嵩 祥(高9回生)

昭和29年4月に入部した私達は非常にラッ
キーな3年間であった。4月3日に入部して
ラグビーのラ字も知らなかった私はその年
の夏に北海道国体に出場、新人4人(松岡、
山鳥、佐野、黒野)を含めて計18人の部員で
その当時身長169cm 体重63kgの私がFWで一
番大きく、すぐにロックに使ってもらった、
というよりもFWは私を入れてちょうど8人
という有様であった。

北海道では1、2回戦は楽勝、決勝戦では
秋田工業に敗れはしたが北海道定山溪温泉で
の1週間は桃陰ラグビーのよさを知る第一歩
であったと思う。それから以後全国大会に出
場(2回戦で敗れる)3年生卒業後春の近畿

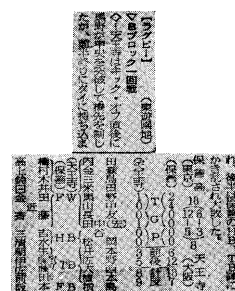
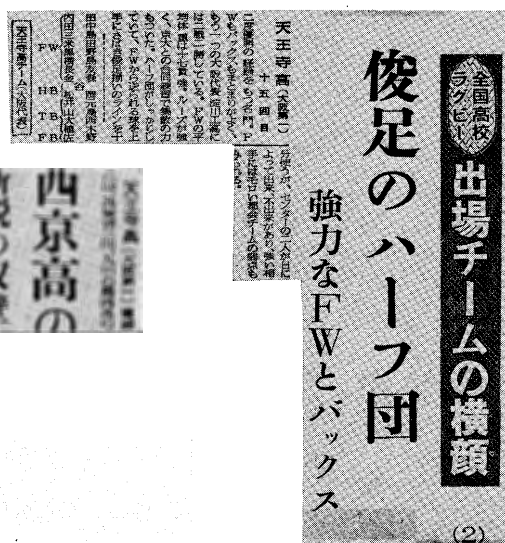
大会では決勝戦で天理高校に敗れる。決勝戦
当日、交通ストのため2年生5人が山鳥宅で
前日より合宿?に入ったがマージャンしたこと
が先輩(田中、宝田、白神、福本、諸氏)
にばれて、4月になってすぐグラウンド25周
走らされたのが最初にしぼられた思い出であ
る。

夏合宿でも、またまた上記の諸氏に門限に
遅れしぼられました。その当時はにくいにく
い兄貴でOB戦になるとねらってタックルし
たものです。その当時からラグビーが好きに
なり、楽しくなりました。2年生の時は非常
に川口さんが抽選に強く、近畿大会、全国大
会すべて抽選勝ちの出場、国体のみ淀工に敗
れる。これが3年間で大阪で負けた、ただ一
校でした。

3年生になって大阪では敵なし、大阪予戦
の決勝戦まではすべて40点以上の差をつけて
の楽勝でした(ロックで一試合10トライを記
録した)。この年から全国大会は32校にふえ、
大阪代表は2校となりました。

全国大会出場前、京都において京大と合
宿、合同練習、雪のふる北白河の町を走って
チーム力も数段と進歩した。非常に楽しい高
校最後の合宿となった。

しかし12月25日の北野高校定期戦で山鳥が
またも足首負傷、全国大会出場不可能とな
り、全国大会1回戦北見北斗に敗れた。20年
が過ぎた今、ほんとうにたのしい3年間であ
った。私たちにとって青春はラグビー以外の
なにものでもなかった。1年生の時は内田さ



ん2、3年の時は鹿子木さんにコーチしてもらい宇野監督には怒られ、ラグビーを教えてもらった。この苦しい楽しさを今の人々にも理解してもらいラグビーにはげんでもらいたい。3年間を通じて上級生、同、下級生、多くの人々が途中で退部した。短い者は3日

間、長い者は1年もしてやめたが、私たちに
 にとってはラグビーをやめて一体なにをするの
 か疑問に思った。年月がすぎてはじめて後悔
 している人々が多数あるだろう。ことラグビ
 ーに関して高9回生は恵まれた時期であっ
 た。

紺黄のジャージー

松岡賢治(高9回生)

私は昭和32年天王寺高校を卒業して慶応で4年、横河電機で社会人ラグビーを6年とラグビーを続けたが、振り返ってみて、ラグビーに対して本当に純粋な情熱を注げたのは何といっても天高時代の3年間であったと思います。私の従兄弟の北森道貫氏(WTB)が青井達也氏と同期で、全国制覇をし、また、兄(松岡義仁)がその1年下でフランカーをやっていたこともあり、天王寺のゲームを小学生のころから見る機会があり、早くから天王寺に入ってラグビーをしようと考えていました。中学時代、私の住んでいた東住吉区の平野から花園ラグビー場までトレーニングを兼ねて自転車で毎日曜日、天高の国体や全国大会の予戦を見に行きました。天王寺の紺黄のジャージーを着れることを夢見た事がつい昨日の様に目に浮かびます。

その様な訳で入試発表当日、新キャプテン青井賢次氏(故人)が勧誘に見えたので、早速入部しました。同期に私と同様の変わり種があと2人いて(黒野、山鳥)、3人が早速練習に参加し、入学式の日には既に高校生に成りきった積もりの生意気な新入生でありました。大変マセた悪が多かった3年生、反対に生真面目で、おとなしい2年生の下に大変まとまりの良い1年生でした。

高校ラグビーで一番苦しいまた懐かしい思

い出は、やはり夏合宿です。花園ラグビー場の暑さは格別で、ボウフラの泳いでいる井戸水をガブガブ飲んで、よく赤痢にならなかったと思います。余りの猛練習で血の小便を出したヤツ、副交感神経失調で、あの炎天下で汗が全然出ず苦しんだヤツ、それでも練習を休ませてもらえずがんばり通した。夜、一面の星空を眺めて遥かに輝く栄光を夢み、励まし合った友、この貴重な経験は、どれ程我々の精神的支えになった事か!!

とにかく良く練習し、良く遊んだ3年間でした。お陰で2年の国体以外は、すべて国体全国大会に出場出来るという大変恵まれた高校ラグビー生活を過ごせました。

3年生の時はFW、BKが大変バランスがとれた好チームといわれました。当時のメンバーを紹介しますと、体力運動神経に恵まれたキャプテン黒野(セカンドロー)、殺人タックラー大西(CTB)、華麗なスワープを踏む山鳥(CTB)、左右のキック力のある佐野(FB)、突進力抜群の植木(WTB)、馬力のある金森(フランカー)、しつこさが売り物の横島(フランカー)、ゲームセンスの良い谷(SH)、向こう気一点ばりの松岡(SO)以上に迷マネジャー鎌倉を含む主力3年生10人に努力屋ぞろいの2年生が1、2列を占めていた。

近畿地方では無敗(春の近畿大会予戦で淀川工に3-3で1回引き分けたのみ)その淀川工に初夏のオープン戦で5トライの15-0で圧勝、全国大会予選決勝でも8-3で完勝

した)で、しかし、悲しいかなメンバーの層が薄く、全国大会、国体共エース山鳥の負傷欠場、1年生の素人が出場する羽目となり、国体では保善に8-18、全国大会では北見北斗に6-13と1回戦で敗れ涙をのみました。

朝日新聞運動部(大阪在勤中)鹿子木先輩、天高宇野先生の大変熱心なご指導を受けながら肝心なところで力を出す事が出来ず、恩返しが出来なかった事が大変くやまれ、現在でも集まるとその話が出ます。いずれにしても多感な青春を光輝ある天王寺高校ラグビー部で過ごせた事は大変幸せであったと思っています。

ラグーの特権

田中宏二(高10回生)

今度桃陰ラグー50年史発刊に際して、高10回の一員として一筆寄稿申し上げます。とかく我々の期は、特筆すべき戦績を残さず、無念の一語に尽きます。高7~9回の先輩達の全国大会出場をはじめ、国体、対各校定期戦等の戦績、そのうえ高11回の連中の全国大会出場善戦の谷間に位置し、随分肩身の狭い思いをしています。いい訳けではありませんが、春先よりの部員不足に悩み、シーズオフになった野球部より、畠山、和崎両君の助っ人により、全国大会、大阪予選の決勝進出が精いっぱいのところ(淀川工15-0敗にて全国大会出場ならず)仕方なかったと思っています。

この度50年史発刊という機会にふれ、ただ思い出される事は練習がきつかったとか、どこに勝った負けたはありましたが、とにかく楽しかった事のみ去来致します。これはラグビーだけだという訳ではないのですが、その道の体験した者しか味わえない特権だと自負しています。幸い、私個人としては、親父、兄を桃陰ラグーの一員に持つ環境にめぐまれ、体力は著しく衰えましたが、今もあるクラブチームの一員として懲りずに楽しんでおります。テレビ映画の解説者の言葉ではないですが……。「ラグビーって本当に楽しいですネ」

最後に申し遅れましたが、我々の期をコーチしていただいた高7回の青井賢次先輩が先年、若くして他界された事は残念で仕方ありません。紙面をお借りして我々の良き先輩のご冥福をお祈りしたいと思います。

ダイゴ味を息子に

三島忠一(高10回生)

学窓を出て早いもので既に10数年が過ぎてしまった。ラグビーとはすっかり縁が遠くなってしまったが、天高ラグビー部時代がなつかしく思い出される。苦しかった夏の合宿、全国大会、国体へのお出場など数多くあるが、最も印象深く残っているのは、私がラグビー部に入部することになった経緯である。私は天高入学当時ラグビーについて深い知識は何ももっていなかった。入学早々柔道部に入部

した。これは本人の希望というより父親の願望といった方がいいだろう。3、4カ月柔道が続けたが、どうにも好きになれない。第一に個人競技特有の陰気な印象を受ける。次に道場がほこりっぽく開放感がない。そのうえ練習が単調で投げられた時の痛いことも耐えられない。最後には柔道着の汗臭さまで気になるといった具合で、すっかりイヤ気がさしていた。その当時ラグビー部は新入生が2人（田中、米田両君）しかおらず、宇野先生が授業中に熱心に部員の勧誘をされていた。それを聞いて何となく伝統あるラグビー部に魅せられて同級生の内田君と誘い合わせてラグビー部に入部する羽目となった。ラグビーを何もしらないまま、走ったりスクラムの練習台にさせられたりしていたが、それでも柔道に比べれば結構楽しい毎日だった。

無断で退部した柔道部からはしばらくは何のともがめもなかったが、もちろんいつまでも発覚しないはずはない。運動会のクラブ行進でジャージ姿を見つけられて早速翌日呼び出しを受けた。恐る恐る道場に行くと、部員全員が居並ぶ前に正座させられた。大きな声で無断退部の詫びをいい深々と頭を下げさせられた。それが終わると10人近くの上級生に1人5、6回ずつ無抵抗で畳に投げつけられた。無断で退部した自分が悪いとは分かっている、痛さと屈辱感で涙がこぼれたものだ。それでもふらつく腰で道場を出た時は、いやな柔道と縁が切れてほっとしたものだった。



こうして晴れて正式のラグビー部員となり、私のラグビー生活が始まったわけだが、7年間のラグビー生活で自慢できることといえば、練習を一度も休んだことがなかったこと位である。自分なりにラグビーの楽しさが分かったつもりではいるが、本当のダイゴ味を知り得たかどうかは疑問である。思うにラグビーというスポーツは歴史が古く奥が深いだけにそのダイゴ味を知るには何代という時間が必要なのではないだろうか。その証拠に周囲を見ても親子、兄弟でラグビーをしている例が多い。私も息子にはラグビーをさせて、自分では味わえなかったラグビーのダイゴ味を息子に味わわせてやりたいと思っている。

伝統の重圧

松下 忠男(高11回生)

初日から気温 37°C 無風状態の快晴のコンディションであった。つらかった毎日、花園第1グラウンドに布団を出して夜空の星を見ながら、夏合宿の早く終わるのを祈った。宇野先生がいった「流れ星を見つけて消えるまでに願いごとをすると、願いがかなうそうだよ」その言葉を聞いて一生懸命流れ星を探した。見つければ「どうか最後まで合宿に耐えさせて下さい」と祈るつもりでいた。合宿の中日に同僚の山鳥君が骨折で自宅に帰った。実にうらやましかった。自分もどこか骨折しないかと本気で考えたりした。わずか7日間の合宿の最後の練習が終わって、グラウンドで全員が輪になって「黄塵はるか」を歌ったとき目に涙がにじんだ。

それ程苦しい合宿であった。思えば合宿のはじまる1週間前に入部したことが、いけなかったのかもしれない。もちろん先輩や上級生の目から見れば、練習量でも半分ぐらい、何の役にも立たない実にお粗末な練習参加であったと思うが自分にとってこれ程苦しく、かつ長い1週間はなかった。しかし、その苦しい自己投資の見返りは大きかった。

「自分はこんなに苦しい試練に耐えたのだ。こんな苦しみは参加した者でなければだれにもわからない。自分はだれよりもすばらしい経験により強い人間になったんだ」と自

信がわいた。この過剰気味の自信がその後の高校生活にどれ程役立ったかわからない。おかげでラグビーから離れられなくなった。3年生になったとき、それまであまり気づかなかった天王寺ラグビーの伝統の重みが肩にかかって来た。「大阪一になって当たり前」「全国大会には必ず出場せねばならない」まさしく無言の重圧であった。

近畿大会が始まった。快調に勝ち進んで、決勝で四条畷高とあたった。勝つ気満々であった。ところが開始直後5分で切り札キャプテンの宝田君がラフプレーで退場となった。あとは推して知るべし12-0の完敗であった。若干慣れた苦しい夏合宿も終わり、国体予選が始まった。今度こそ大阪代表をとの意気込みであった。しかし、なんと2回戦、当時無名に等しい興国商に惜敗した。ものすごくショックでもうこれまでと思った。こんなラグビーならもうやめて受験勉強に専念した方が良いと思った。次の日学校へ行って1時間目は担任の加島先生の人文地理であった。先生は開口一番「松下、昨日はどうだった」「負けました」「もうあかん、これからは勉強しろよ」「この言葉はカチンと来た。やめようと思っていたのが逆に、よし、もう一度がんばってみせる、と決心した。実に皮肉なものである。しかし、それ以後、練習には先輩はあまり顔を出さなくなった。先生もほとんど出て来なかった。残ったのは意地だけだったと思う。

全国大会予選が始まった。名もないチーム

に苦戦の連続であった。ついに住吉商に6-0で辛勝した後、キャプテン宝田君の命令で3年生全員、学校の教室に戻った。だれもない学校の薄暗くなった教室の中で、宝田君はいった。「お前らは本当に全国大会に出る気があるのか……。」この説教は全員胸にこたえた。おかげで3年生の意思統一は出来た。リーダーとしての宝田君はずいぶん立派だったと今にしても思う。全国大会出場決定戦は淀川工業であった。前評判は淀工の方が良かったと思う。試合は前半3-3で終わり後半に入って15分間程は味方ゴール前にたたきつけられた。ずいぶんタックルしたように思う、やっと敵のミスに乗じて敵陣に入り、ゆさぶった。きれいなヒールアウトが出て、スタンドオフ、宝田君がルーズサイドを抜けパス、1年生の赤阪君がすばらしいパスワークで第2ランナー伊藤君へ渡し、そのまま内に切れ込んで、快速ウイング井本君を残して中央にトライ、ゴール。これで勝負は決まった。全国大会は不運にも準優勝した東北の強豪、盛岡工が緒戦に当たり5-0で惜敗してやっと終わった。疲れた。もうラグビーは大学へ行ってもやりたくない。他のことをして楽しみたいと思った。それ程天王寺ラグビーの伝統は重く大きかった。しかし、この気持ちにはほんの数カ月で、その後ますますラグビーが好きになったことだけは確かである。また、1年生の合宿で得た自信によりこの3年間の天王寺ラグビーで得た教訓は、現在も含めてその後の自分の人生にずいぶん大きな

支えになった。それは単にラグビープレーの一流技術を学び、良き友人、先輩、後輩が出来たというだけではなく、人間というものの人間の能力のかぎりなき可能性、組織体としての良い条件、伝統の良さ、大切さ、真の根性の必要性など、ずいぶん多くのことを厳しい天王寺ラグビーで学ばせてもらった。

最近の学生はずいぶんと個人主義にはしり、天王寺ラグビーは強くなれないという声も聞くが、いくら生活環境や時代が変わったといっても、高校時代は人生の中で最も情熱が高いことはいつの世も変わるはずはなく、この情熱のあふれた時期に、天王寺ラグビーの伝統のもつ厳しいラグビーを、いつまでも与えてやってほしいと願ってやまない。

先輩諸兄の“活”に感謝

伊藤和夫(高12回生)

たしか小学校4年生の正月7日であった。この日は小生にとって生まれて初めて腹一杯の肉を食べた日である。卵がふんだんに用意してあった。この日こそ青井主将ひきいる天高ラグビー部が宿敵秋田工業を8-0で破り全国制覇をなしとげたその日である。

試合終了後、東海道線の長い貨物列車をやりすごして阪急今津線の駅にほど近い宿舎に兄達に連れられて向かった記憶がある。小生は5人兄弟の末である。今、四兄(道夫)が優勝メンバーの一員として連なり、従って小生もまた、ものごころついて初めての大すき

焼パーティーにめぐりあえた次第である。

小生にはラグビーを始めるための動機はいくら探しても見当たらない。四兄の優勝の感激を共に味わった事も決して動機とはいえない、何しろいつの間にか楕円形のボールとなじんでしまっていたのだから……。当時すでに三兄（栄夫）は天中より門戸さん、岡さんらと共に同志社に進んで活躍していたし、従って花園へは何度となく観戦にも行き、練習風景等も見慣れていたので自分自身はもう当然の如くラグビーをするものと決めてかかっていたのである。

小生に課せられた難題はただラグビーを競技するだけではなかった。長兄（康夫）次兄（寿夫）は戦前天中が初めて念願の全国優勝を果たした時のメンバーであり三兄は前述した通り同志社に進んだが、天中在学時やはり優勝候補の一角として全国大会に出場し、勝運我になく敗れたが、四兄は、また天高時代優勝経験をもつにいたったのである。従って末弟たる小生は1人天高の他でラグビーする事を許される身ではなかったのである。小生は世にいうところの「三つで神童……？」というタイプで、高校受験期には「ただの人」になり下がり、なまじ勉強するくせがないものだから天高に「受からなければ」と思いながらも成績はジリジリ下がるし、いよいよあせったものである。どうにかこうにか受験期には最低のレベルに間に合ったのであろう。かううじて入学が許された次第である。受験期があと半年おくれていれば桃陰のメンバー

の一員たる榮譽に浴せなかったところである。当然のことながら在学中の3年間は天高はラグビーであり、教室ではうだつのあがない存在であった。

さて入部してみたものの当時のラグビー部は昔日のおもかげなく、田中主将以下10人位のメンバーしかいなかった。メンバーが少なければレギュラーに早くなれるので一面喜ばなければならぬのだが「全国大会出場」という目的からすれば、頼りないことこの上もない。案の条「小生」「森」「三島」の半素人の1年生が5月にはレギュラーとして兵庫高校定期戦に出る羽目におちいった。補欠は今亡き「泉」1人である。もちろん大敗であった。何とも情けない「あこがれの天高ラグビー」の姿だった。

この夏、花園で合宿の洗礼にあった。前年までは少なくとも大阪では1、2を争うチームであったため、弱体化したチームに対し部員の2倍以上の先輩が集まる日もあった。当時の若手の先輩は田中、福本、白神（関学）宝田、黒野（早大）川口（慶大）青井（後に阪大）の諸先輩の他、現役のパリパリが数多くおられ、戦後天高ラグビーが大学ラグビーに花開いた最後の時期でなかったろうか。田中、福本先輩ら、1年生にとっては悪魔的存在であった。この年ついに花開かず、淀工に15-0と完敗し、天高での1年は終了した。

2年生になってもメンバー不足は相変わらずであった。宝田主将のもと公式戦に最初から14人で戦った記録がある。補欠がいないと

ころへ当日メンバーが急病で補充のしようがなかったためである。この年、昨年若くして亡くなられた青井先輩が阪大への受験勉強の合間をぬってご指導下さった事は忘れ得ない思い出である。

秋が深まると共に徐々に実力が増し、そして淀工との決定戦において戦前の評を裏切ってついに全国大会出場への道がひらかれたのである。

この試合、3-3の一進一退の後スクラムからの絶好のヒールアウトをSO宝田主将の判断よくクイックパスが右センター赤阪、左センター小生と渡り、小生が内側に切りこんで左ポスト直下にトライし、ゴールなり8-3で勝利した。松下フォワードリーダーのもと、非力のフォワードが全力を出しきり、悪戦苦闘のうえ夏合宿を乗り切った阪本先輩の前半のトライ等、いまだ忘れる事の出来ない思い出である。全国大会の組み合わせは、当時秋田工と高校ラグビー界を二分した盛岡工との対戦となった。新聞の評によると、我が校の大敗を予想するが如きものばかり、しかし大みそかのミーティングに鹿子木先輩より「絶対勝つ」の暗示があり、心機一転試合にのぞみ大接戦のすえ5-0で惜敗したのである。負けて満足感を味わったのはこの時のみであった。しかし、日がたつにつれ、小生のデフェンスの甘さをつかれて許した前半のトライを悔やむことしきりであった。

さて、この時1、2年生のメンバーが半数近くあり、翌年の活躍を期待されたのである

が、主将としての小生の力の足らぬ事も相まって、退部者が続出し、3年の冬は全く目もあてられぬ惨状となり松井、石田各後輩主将に多大の迷惑をかける羽目におちいった事を深くおわびする次第である。

全力を出しきってラグビーにのめりこんだのは天高時代だけであるが、3年生の時の悔いが残ったためか、もう一度関東か関西の大学で第一線でやってみたい未練にかられたものである。また退部した連中も卒業後、ラグビーを忘れられず、大学でやっているもの、花園に必ず姿をあらわすもの等、ラグビーを愛する気持ち、青春への悔やみはいい年になっても色あせず等しく心に残っている様である。

最後に三兄（栄夫）の同級、下級のチームメートの諸先輩にお礼申し上げます。万一、このクラスで全国優勝でもしてもらっておればことラグビーに関して兄達に仲間外れになり暗黒？の半生をおくらねばならないところでありました。優勝出来なくて喜んでいるのはおそらく天高関係者で小生ただ1人でありましょう。

わが半生(反省)記

清水 則行(高12回生)

駄文を連ねる前に、心ならずも戦地に、あるいは現代社会に逝かれた50年の歴史、伝統の礎を築いていただいた諸先輩、桃陰の会員諸氏に慎しんで哀悼の意を表します。

同志社で陸上競技をやっていて、雇われバックメンをやったことのある父から感化を受け、6、7歳から2、3年花園ラグビー場へ通ったことや、我が家の麦畑でゴム製の楕円球と戯れたのがそもそもの出会いである。寒中、生駒下ろしを受けながら花園のスタンドで震えていたものだ。門戸さんらの名前が断片的に思い出され懐かしい思いである。

さて、この様なラグビーとの出会いであるが、小学3年ごろ以降は全く縁が切れてしまったのである。それは小学校、中高学年時代は背ばかり高いものの、比較的体が弱く、特に運動もせず骨折やその他のケガを機会に憶病風に吹かれむしろ苦手としてしまったからに他ならない。中学では、やがては天王寺へ入ることだけは約束されていた(?)のだが「天王寺」と「ラグビー」の関係も強い意識も持たず(知ってはいたが)ヤクザな中学生のまま天王寺へ入学したのである。入学してラグビー部のあることを募集ポスターその他で知って強く魅かれたのであるが、つつい半年あまりの惰眠をむさぼるところとなった。したがって入部は秋の10月ごろだったと

思う。

入部のキッカケとなったのが当時の担任の松村茂吉先生の言葉であった。「なあ、清水よ。運動するか勉強するか、どっちかにせえよ。中途半端はあかんぞ」といわれたのがそれであった。そこで意を決して当時の部員の少なかったラグビー部へ入部を願い出、その部員の少なさをゆえに頼りないのを歓迎していただいたのである。前述の様な次第であるから、中途半端なフニャフニャ野郎で先輩も随分面食らわれたことであろう。当時コーチをいただいた故青井賢次先輩には特にご面倒なことだったろうとお詫び申し上げたい。また、ここで今もって悔やまれるのは夏合宿を過ぎてからの入部で当然のこととしてハードな合宿練習を受けていなかったことが、同期の連中にもひけ目があって半端プレーで終わったことである。

同期のキャプテン伊藤君、1期上の宝田(良)キャプテン、2期上の田中(宏)キャプテンら、極く周囲を見てもF・スピリットおう盛な人がたくさんいるが、現役時を振り返るとこれに欠けていたことに自分自身でもあきれたものだと、今もって恥ずかしい思いがする。勉強しないことにかけては猛烈とPrincipleを貫いて(これは余り努力を要しない)これがために田中、宇野両先生には随分とご心配をかけた。努力を要することについてはつつい easy going になってしまいチームメートや先輩諸氏にはご迷惑をかけたものだと思う。

さて、こういった性癖もその後の人生においても、そう簡単に抜け切るものではなく、反省するところ大なるものがある。すなわち、卒業して進学するでもなく、しないのもなくずるずると1年浪人して過ごしてしまい、その後金沢の親類の家へ3年余、大阪へ戻り10年余、現職にあるが以下の如しである。

フランチャイズチェーン本部の専門職スタッフとして多忙な毎日であるが、やはりここでも半端な面が出てしまう。すなわち、エセゼネラリストであり、スペシャリストでないことのジレンマである。幅広い浅い知識と適当に management (文字通り manage) することは、だれにも負けないと自負しているが、しょせんエセゼネラリストは(トップマネジメントの方には非礼ではあるが)T・マネジメント以外は用がないのだ。もちろんT・Mに望まれるのは真のゼネラリストであることはいうまでもないことであるが、中堅サラリーマン、スタッフにとっては、スペシャリストでないことは、ウツカリすると職場がないということで真剣勝負の毎日である。このこともF・スピリットの欠除と安易に過ごした報いと反省しきりである。

いずれは独立自営を心がけているので自身の人生設計の上では(long span で見た場合)誤っていないつもりだが、諸先輩見て下さい。

かような小生だが、練習や試合の時に厳しかった先輩が卒業してからは、ノーサイドの

精神(本来の意の用い方とは違うが)そのままに温かく声かけて1人前に扱っていただけるのは、まことにありがたいものだ。現代社会に欠けている良い意味の共同体精神の表れと感謝して受けとめている。

少年期は理屈と鼻っばしだけが強くプレーヤーとしても勉学においても、二流であったがそこで知った一流のものについては終生忘れることはないし、また反面、教師の多いこの世の中で一流を知った二流として、その後の人生でも決しておごることなく努力できるのは、名門の末席に連ねさせていただいたお陰と大変に感謝している。数々の反省多い「ラグビー」と「我が半生」であったが、今後は希望を託す意味でも、報恩の意味でも次の二点を努力目標としたい。

①我が息子5歳(1975年4月現在)を何とかして天王寺ラグビーの一員として送り込み伝統の火を更に燃えさせるように努力すること。また伝統と名誉を体得させること。②また、自分自身としても諸先輩の良き伝統を引き継いで、せめてもの現役時の不名誉(全国大会予選第1戦にて敗退)の払拭とお世話になったお礼とを、後輩に伝えたいと願っている。はなはだ自虐的な文章とはなったが正直なところを記したつもりなので、編集者諸氏ならびに読者諸氏には十分に参酌をお願いしたい。

血と涙の青春

松井淳太郎(高13回生)

それは思いだけでジーンと熱いものがこみあげてきます。昭和35年、今から15年前の秋のシーズン、我が天高ラグビー部は大阪地区決勝戦で四条畷高校と全国大会出場をかけて白熱のゲームを展開していました。先生、OB諸先輩、母校の同級生、後輩の励ましの声もほとんど耳に入らず、ただひたすらに楕円球を追っていたのであります。後半の20分すぎ、もうタイム・アップまで少しの時間しかありません。スコアは8-3味方劣勢であります。しかし、敵をこのところゴール前にくぎづけにし、味方の意気は盛んであります。何とかあと1ゴール。倒されても倒されてもただ前進あるのみ。そしてタイム・アップ直前待望のトライを右スミにあげました。ゴールをネラったのでありますが味方、椋本の蹴ったボールはバーにあたって無念にも前にはねかえったのであります。

これは我々の血と涙の青春の1ページであります。この経験は、我々のその後の人生に大きな影響を与えたと思われまふ。また、夏の合宿での宇野先生、田中先生、田中先輩他諸先輩のご指導激励でがんばった1週間は強い精神力と体力を養ってくれたものと思っています。天高ラグビー部、桃陰ラグークラブのますますの発展を！



因

"ラグビー学部" 卒

石田 恒彦(高14回生)

ラグビーを始めた動機は、中学3年のの正月に天王寺高校ラグビー部の全国大会での活躍ぶりを新聞で目にしたのがきっかけである。かっこいいと思って始めたようだ。始めた動機となった全国大会には、3年間ついに一度も出場出来ず、まことにみっともない主将で天王寺を卒業した。3年の時の予選で負けた時にはショックと悔しさで、いつも虚脱状態が続き同期の家を交互に訪れては酒とマージャンに明け暮れたように思う。

京大に進学してからもラグビーを続け留年を含め合計8年間、一生懸命ラグビーをやった。社会に出た時は、なんら学問的知識は身につけておらず、何年間も「学部はラグビー部です」で押し通した。森林昆虫^{とん}を専攻して

いたにもかかわらず、いま設計事務所をやっているのもラグビー部出身で押し通したおかげと思っています。

『ラグビーは、ラグビー道なり。過程の努力なしには道は極められないし、また、極めようと努力しない者はラグビーをやる資格なし』とよく京大の恩師である星名先生に教えられました。凡才にとってはラグビーをやる以上、他の事は出来ないのだと、自分なりに納得してラグビー一筋に打ち込んできましたし、今もそう思っています。

カッコよいスポーツとして、ラグビーがもてはやされている昨今、地にしっかり足のついたラグビー道を、少しでも青少年に教える事がラグビー人生の恩返しだと思っていますが、今はまだその余裕がなく、いつの日か夢を叶えるべく努力して行きたいと念じています。

素朴さと気力と

佐々木慎太郎(高15回生)

ノーサイド寸前、右隅にトライ。最も難しい位置からのプレースキック、No. 8 椋本さんの蹴ったボールは高く舞い上り、ボールに当たって手前に落ちてしまいました。私が天高ラグビー生活の3年間で、最も印象に残った一瞬です。それは私が1年の時、松井淳太郎さんがキャプテンの時でした。相手校は四条畷高校、全国大会の大阪府予選決勝戦、場所は花園ラグビー場でした。

当時の天高は部員数が20人余り、3年生が松井、赤阪、大山、椋本さんと陸上部から応援の今仲さんの5人。2年生が石田さん以下6人、1年生が4人という陣容で、特にバックスは、ハーフ団松井、赤阪さんの蹴ったボールを、センターの私、河野が追っかけるという、キックアンドラッシュ戦法だけのチームでした。相手校、四条畷は前年全国大会ベスト4に残り、当時大阪では揺ぎない、No. 1 の実力チームで、我々は勝つというより、自分達の力をいかに出し切るかという考えが大半をしていました。バックスはハーフ団のキックとタックルのみを念頭に試合に挑みました。

試合は予想外に接戦となり、8-3でむかえた後半15分すぎから、四条畷陣内25ヤード付近のせり合いが続きました。ノーサイド寸前、わが天高がやっとの思いでトライを挙げ、前述のような結果で、我々は6-8で敗れてしまいました。試合が終わり、キャプテン松井さんが皆なを集め、よくやってくれた、と言いわれた時、我々は全員泣き出してしまいました。しかし、その涙はくやし涙というよりも、我ながらよくやったという涙でした。我々は10の力を12、13にも出せたのです。私はその時こそラグビーをやっていて良かったと感じました。そして我々にそれだけの力を出させてくれたのが、天高ラグビー部の伝統の力だと感じました。

桃陰ラグーの一員に加えてもらい、はや12年たった今、後輩の全国大会あるいは他の試

合を見て私の感じる事は、我々の時代もそうであったように、あまりにもラグビーの技術屋になりすぎているのではないかという事です。ラグビー本来の力強さ、素朴さがたりないと思われまふ。我々の現役時代も頭でラグビーをやれとよくいわれました。私は、なるほど練習では頭を使う事が最も必要です。しかし試合では頭より心と体を使う事が最も大切だと思います。日ごろ鍛えられた体を気力で動かす事こそ、ラグビーの本当の面白さだと思います。

痛恨！ PK

堺 徹夫(高17回生)

昭和39年11月、全国大会大阪府予選も大詰めを迎え、準決勝、決勝を残すだけだった。我々の当面の敵は、決勝に出て来るであろう淀川工だった。そして準決勝は、寝屋川高校であった。

まさかと思っていた苦戦である。後半20分を過ぎた。が、得点は3-3。ここで負ければ全国大会を目指し励んだ夏合宿等の猛練習、努力はすべて水泡に帰す。我々はあせった。そして一丸となつての猛攻、そして敵陣深く約7~8ヤード、ポスト左30度絶好の位置にPKを得た。ゴールは目の前だ。このゴールを割れば勝てる。トライのみが脳裏を占めた。そして特別に練習を重ねたとしておきのSO、CTBのシザーズFB参加のサインプレーを出した。このサインプレーでトライ

・ゴール、そして勝利、私は確信した。が、SOとCTBの間でパスミス、結局はノートライ、そしてノーサイドとなった。フィールドの外で見守って下さった監督、先輩そして朋友を見た。みな落胆の表情である。結局、抽選負け。3年間苦勞の結果である。

大局観を失した私一人のサインのために予想外の寝屋川高に(寝屋川高の方々には申し訳けないが)負けた。ショックであった。PGさえ決めておれば……。労苦を共にしたフイフティーン、補欠員、マネジャー、監督、先輩の方々に申し訳けない。

永年の伝統に汚点を残したと、いまだにこの一つのPKは自分の脳裏から消えない。自分の心の傷でもあるこの一つのPKは天高50年の歴史の汚点として残ると思えば誠に心苦しい。今でもこの一つのPKは自分の心に重くのしかかる。

昭和39年(昭和40年度)全国大会大阪府予選にて天王寺高校3-3寝屋川高、抽選負けという事実は、天王寺高校ラグビー部50年史から消える事はないであろう。

宿命の不規則バウンド

橋本優也(高18回生)

遺憾ながら、最も弱体化した一時期といわれる。したがって、燃焼した青春は、同じであっても、諸々の思い出も記念になるゲームも少なかったのは、やむを得ない。“受験地獄”といわれる言葉が、流行しだしたのも私

達のところからだ記憶している。受験とスポーツという問題が深刻度を増したのもそのころであった。しかしながら、それをクラブの弱体化した要因とは思いたくないし、自分達の不がいなさのかくれみのにしようとは考えもしない。

ラグビーが何であるかも知らずに、ただラグビーにあこがれて、進んで入部した1年生のころの事は今だに新鮮な思い出である。ましてや、ほんの2～3カ月で、レギュラーにもらった事、また初陣を大きなミスでかざった事等、非常に懐かしく思いだされる。後にして思えばその年のシーズンが、私の3年間では最強の一時期であった様に思われる。細部に渡っての記憶は、さだかではないが、大阪予戦の第2戦目（淀川工）だと思う。事実上の優勝戦との呼び声も高く、期待に違わず好試合を展開した。

5－0とリードしていた前半に、私達はあらん限りの力を出し切ったかの様に、後半に入ると、劣勢に陥り、私自身でも体力の消耗がはっきりと自覚できた。そして、それを決定づけるかの様にゴールポスト中央に屈辱的なスクラムトライをあげられてしまった。

結果は5－5でノーサイドとなったが、疲労感と共にごく自然に敗北感が訪れた。抽選は負けとでてしまった。楯門球の不規則バウンドの宿命を感じてならない。

受験プレッシャーKO

吉村公男(高19回生)

接戦のうえ雪辱戦であった浪商高校との試合（昭和41年近畿大会準決勝）が、よく記憶に残っています。前年の全国大会予選ではこの浪商高校に敗れたわけですが、この予選ではしり上がりに調子を上げて勝ち進んできていましたので、なんとか勝ちたいの一念でした。花園Bグラウンドで曇天の日の試合でした。相手校のラフプレーはあらかじめ予想していましたものの、予想以上のものがあり、自軍TBが肋骨を傷めるなど苦戦をしました。しかし、逆に全員が奮起し、後半相手の攻撃を抑えきって勝つことができました。この時のレフェリーは野々村先生でした。

結局、近畿大会予選は四条畷高校に決勝戦で敗れ、雪辱すべく臨んだ夏の練習試合でも炎天をものともせず押しまくってくる同校に大敗を喫してしまいました。むせかえるジャージのため悪寒に襲われ、その苦しさを突破することができませんでした。ところが、私達が菅平の合宿に入る前、六甲で合宿中であつたこの四条畷高校（私の記憶違いで他校であつたかもしれません）の両プロップが、日射病で倒れるという事故がありました。マナーのきれいな実力府下ナンバーワンのチームだっただけに練習にもきびしいものがあつたのでしょう。頭の下がる思いでいっぱいでした。（このため、私達の合宿では村田先生

をはじめ諸先輩の方々に、随分注意を払っていただきました)。

全国大会予選では、四条畷高校と並ぶ強力チームであった淀川工高に敗退し、全国大会での活躍は、翌年の人達の活躍によらねばなりませんでした。ふりかえてみますと、私などは腰をよく痛めてマネジャーをしたりしていて、プレーもきわめて下手くそでありました。そのような私がよく試合に出してもらえたのは、やはり部員の層の薄さでありました。私の年代も入部した当時10人ほどいたのが、2年生になる時には5人に減ってしまっていました。やめていった人の中には、俊足を誇る人も怪力の持ち主もいたわけです。確かに受験勉強というプレッシャーもあるわけですが、現役の皆様はどうか初心を貫かれてラグビーのスポーツマンシップを築きあげて下さい。

血の通う縦のつながり

辻 野 雅 三(高20回生)

入学したのは昭和40年4月、その時のラグビー部には2、3年あわせて8人の部員しかいなかった。我々1年生は17、18人入部したが、中学校での経験者もなく、春の国体予選ではメンバーづくりに宇野先生も苦労されたことだろうと思う。したがって試合に出場するメンバーの半数近くは1年生であるわけで、矢野キャプテンを始め、上級生の方は大変だったろう。夏合宿は初めて菅平へ行かせ

てもらった。帯同の関学高はなかなか強く翌年の正月には全国大会に出場している。合宿中午後の関学高との練習試合には連日敗れたが最終日の試合は、相手にケガ人が出たこともあり小差だが勝った。その時のうれしさは今でも忘れない。秋のシーズンに入ってから練習試合では天理(定)、京都洛北高、大阪花園高、近大付高としたが連敗であった。また北野との定期戦にも敗れた。しかし、全国大会予選では練習試合で負けている近大付高、花園高と対戦し、いずれも勝てたことは特に我々1年生にとっては意義があった。そのシーズンの主な試合のメンバーを記す。

前田(保)	久保田	辻野	長野	山根	浜田	河上	佐藤	前田(真)	得能	出水	矢野	倉内	中山	村崎
②	①	①	①	②	②	③	①	①	①	③	②	①	③	
FW							HB		TB		FB			

予選は結局、準決勝で浪商に大敗した。しかし、その浪商にも2ヵ月後の近畿大会予選準決勝では12-9で勝てた。この試合ではセンターの佐野君が負傷退場する場面もあったが、かえって全員が非常にファイトを燃やした。しかし、決勝は、学年末の試験中の大雨の日に四条畷に敗れた。この時の畷は非常にまとまった好チームであったが、その夏の合宿中にあった事故は残念であった。2年生の時は、退部者が多く出、チームとしてのまとまりにも欠け、成果もあまりあがらなかった。1年時に17人いた同学年の者も7人に減り、3年生の秋を迎えた。この年は岡氏、田中啓一氏、福本氏、黒野氏を始め多勢の先輩に連日みてもらえた。10月に入ってから11

月末の淀工戦に備え、連日放課後遅くまでナイターで練習をした。

淀工はバックスが良く、特に本多、岡本の両センターは抜群であったので、こちらの作戦は、主将のSO得能君のボックスキックによるFWの突進であった。スクラムでも相手ボールをとる研究をやった。三番を組んでいた自分はフッカーの久保田君とあわせて、マイボールよりもむしろ相手ボールのセットスクラムの練習をよくやった。試合前日、皆でミーティングをし、作戦の細部の確認を行ったが、その時のふん囲気は非常に盛り上がったものだった。11月23日の試合当日は朝からの快晴で土岐レフェリーの笛で試合が始まった。試合中は必死で個々のプレーは覚えていないが、得能君のボックスキックが練習の時よりもずっと正確で（得能君には申し訳ないが）、全く宇野先生を始め諸先輩の作戦通りに試合が進み完勝した。危ない場面もあったが、1年生の三宅君の好タックル等できりぬけられた。3年間で初めてラグビーの試合をしたと思った。淀工にとっては思いもかけぬ敗戦であつたらしく、当時のキャプテンでセンターだった岡本君は、今だによくその時のくやしさを語る。この淀工戦をきっかけにチーム力は急上昇し、決勝は布施工に危なげなく勝った。正月の全国大会では1回戦で目黒高とあたった。試合のすべり出しは良く、いきなりノーホイッスル・トライをあげたが、後半、スピードと体力差で逆転された。この試合では3年間で最高のタックルができたと思

分では思ったが、そのタックルをきめた後、相手選手が平気な顔をして起きあがってきたのが印象に残っている。いろいろと苦しかったこともあったが、全国大会に出場できて本当に良かったと思う。指導をしていただいた多勢のOBの方に心から感謝したい。天高の3年間のラグビー生活、特に淀工との試合が自分の進む方向を決めたように思う。ここにその淀工と対戦した時のメンバーを記しておく。

駒久 辻 上 川 佐 長 佐 藤 得 三 鈴 前 肥 原
井 保 野 山 口 藤 野 藤 原 能 宅 木 田 田

② ③ ③ ② ② ③ ③ ② ③ ① ② ③ ② ②
FW HB TB FB

49年より化学の教諭として母校天王寺に再びお世話になっているわけであるが、恩返しのためでがんばりたいと思っている。現在の高校教育で欠けているものの一つに師弟の関係における血のつながり、対話、接触のうすさがあると思う。昔、例えば松下村塾の教育は師弟同行であり寝食を共にすることによって得られた師弟の密接なつながりがあり、学問と共に学問する態度や感化が明治維新の原動力となる人々を生んだ。教育は、その当時に比べると進歩したのは確かであるが、それは施設設備と教育内容の系統化等、教科の持つ科学的な体系、あるいは学校制度であつて、それに反し師弟のつながりはうすれてきている。今日の教育は特にこの傾向が顕著で、天高においても同様であると思う。その中で、田中（進）先生や宇野先生は立派で、

自分も見習わなければならない。また、昔の教育には師弟の関係だけでなく先輩と後輩、上級生と下級生との縦のつながりも厳しさの中に血の通うものがあった。そこには自分らの学舎で、同じカマの飯を食い、上級生にしばられたという苦しい思い出も、社会に出からは母校を中心として先輩に対する尊敬と親しみという面で大きくプラスしていると思う。残念ながら、現在の学校では、このような関係は望み難いが、放課後遅くまでグラウンドで共に流した汗や、合宿での苦しい練習の中に、天高の生徒としてのつながり、あるいは先生やOBと生徒との裸の触れあいによって、生涯忘れえぬ心の支えができるものと思う。これは、教科学習においても全くいえない事ではないが、部活動こそ、これらの生きた教育の場であると信ずる。ラグビーの理論等については、まだまだわからないことが多いので、そちらの方は宇野先生にお任せして、自分は出来るだけ着がえてグラウンドに出て、生徒と共に汗を流したいと思っている。49年度は、全国大会予選準決勝で大工大附高に敗れ、全国大会出場は成らず、OB諸兄には申し訳なく思っている。しかし、3年生5人はみな天高で3年間ラグビーをやって良かったといって卒業してくれた。

困難な面もあるが、素晴らしい伝統を受け継ぎ、立派なラグビーチームをつくりたい。そして3年生に、天高でラグビーをやって有意義な高校生活を送れたと満足して卒業させてやる事が自分の使命であると信じている。

私の3年間

吉川史彦(高22回生)

昭和42年春に天王寺高に入学、中学校で2年上の得能さん、辻野さんがラグビーをやっていると聞いていたことと、ちょうどその冬にニュージーランドの大学選抜が来て初めて試合を見て、入学前からラグビーをしようと思っていたので、すぐ練習を見に行った。

そこでの状況：頭がチリチリのこわそうなOBが赤いトレーニングパンツで練習をしている。ボクは体育館の前の水道の横で、ボールを拾いにきた2年生の藤原さんに“ラグビーをやりたいんですけど、ボクみたいに小さいもんでもできますか”。藤原さん“できる、オレ見てみい。お前より小さいやろ、すぐ来いや”次の日入部、前日OBと思った人は、まだ3年生で久保田という名だとわかる。

当日部室で新入部員を集めて、佐藤さん“オレがバイスキャプテンの佐藤や、キャプテンは得能で何でも相談してくれ。まあガンバレよ”とはいっても、当時3年生は部室（今はとりこわされた体育館の横にあった）の2階に陣どって恐ろしいばかり。1年生は古いプールの上で遅くまでボールをみがく毎日。1年生には田中、黒田、相楽、伊東らがあり（三宅はまだ入っていなかった）雨の日などボールをこすって乾かし、その光らせあいをしたものである。

そのころ、ボクは激しい運動を急に始めたため、クラブを終わって家に帰っても夕食が食べられず、先ずフロに入り、3時間ほど寝て、10時ごろ起き出して食事をするという日が続けていた。今思うとよくあんなことが出来たと思う。

昭和43年正月全国大会：レギュラーのがんばりで当時大阪最強といわれた淀工、そして決勝での布施工を破っての出場の全国大会1回戦、相手は目黒、この時ボクはFBとして、公式戦初出場という恐ろしい立場に立っていたのだ。花園ⅢG、目黒のSOキックはすべてボクの頭を越し、CTBが抜けてFBの前まで来たときには既にフォローが3人程ついている。何が何やらわからないまま終了のホイッスル。後2、3年のとき、よく"今くらいの力であの全国大会に出ていたらなあ"とよく思ったものだ。

同年近畿大会予選：ボクが自力でトライし一人歩きが出来る様になった記念すべき大会、メンバーは試合によってよく変わったが、決勝での対近大附高では確か次の様だったと思う。

田中	藤井	駒井	上川	佐藤	植松	原田	黒田	鈴木	肥田	吉田	松川	相本
(1)	(2)	(2)	(2)	(2)	(2)	(2)	(1)	(2)	(1)	(2)	(1)	(1)
FW			HB			TB		FB				

この試合以後ボクは右CTBに定着し、同年の田中、黒田、三宅、吉川、相楽と3年まで残るメンバーが、レギュラーとして顔を連ねる。対近大附高、敵CTB酒井、吉田。天王寺のCTBより段違いにウマイ。ホンロウ

されるが、終了間ぎわ、ラックのこぼれ球を黒田拾い吉川にパス、右隅にとびこみゼロ敗をまぬかれる(これは仲間うちでは、タッチを踏んでいたといわれている。ボク1人がトライだとがんばっている)

全国大会予選：この年も戦力的に安定していたので"オンタイ氏"よく姿を現し、秋初めの練習では、終わったとたん、グラウンドにぶっ倒れること数度。だが練習のかいなく、準決戦で四条畷に負ける。——この時も、現在全日本がかかえているのと同じweek pointを天高もまた持っていたため——

昭和44年近畿大会予選：年あらたまり新陣容は次の如く。

岩本	辰巳	田中	森田	綿谷	相楽	大島	松谷	黒田	吉川	箱谷	三宅	安達	松本	柴垣
(1)	(1)	(2)	(1)	(1)	(2)	(1)	(1)	(2)	(2)	(1)	(2)	(1)	(2)	(1)
FW				HB				TB		FB				

何とか勝ち進んだが決勝で、啓光学園に敗れる。その前花園40周年のカーニバルで天理高とやることになった。実は真っ青になっていたのだが、試合は前半天王寺がリードするなど大健闘。結局15—8で敗れたが、2年生のボールに対する執着が、やれば出来ると自信をつけた試合だった。(この試合で初めて顔を合せた天理高の主将荒木——彼が相楽の中学時代のRugby mateであるため——今でも親しくつきあっている)。

ところが、この後恐ろしいことがおこりだした。レギュラーの1年生が2年生になるとき続々やめるといいだしたのだ。森田、綿谷、箱谷、安達と4人が結局やめてしまった。家

に説得に行ったり、練習そっちのけで教室で話したり、上に立つつらさを味わった時期だった。4人もレギュラーが欠け、その4月からのチーム編成はメチャメチャとなり、1年生にはラッキーだと思うが、春早々の試合から新入の1年生を使わざるを得なくなってしまった。

国体予選：

岩本	辰巳	田中	松谷	犬養	相楽	寺島	大島	黒田	吉川	山本	三宅	榎谷	吉村	柴垣
(2)	(2)	(3)	(2)	(1)	(3)	(1)	(2)	(3)	(3)	(1)	(3)	(1)	(1)	(2)
FW				HB				TB				FB		

確かこのメンバーで準決勝で北野に3点差で敗れ、以後、練習試合連戦連敗（布施工戦で、ボクは骨を折り試合には勝ったが、その後全国大会予選まで欠場）とヨイヨイの戦力で全国大会の予選に臨んだ。

全国大会予選：なぜかシードされていて、第1戦は3回戦の枚方、うまいことゴマかして、ダミーランからの柴垣のトライと、三宅のタッチぎわ40ヤードの独走とで勝つ。準々決勝対啓光学園、メンバーは

岩本	辰巳	田中	松谷	犬養	相楽	寺島	村田	植松	黒田	三宅	吉川	榎谷	吉村	柴垣
(2)	(2)	(3)	(2)	(1)	(3)	(1)	(1)	(2)	(3)	(3)	(3)	(1)	(1)	(2)
FW				HB				TB				FB		

2年生大島のケガと、3年生三宅の走力を生かすための苦肉の陣容。1年生村田を初めてNo.8に使い、2年生植松をハーフに、黒田、吉川をそれぞれSO、CTBに下げる。前半0-0、後半啓光オープンプレーでトライ。天王寺相楽、敵SOのキックをチャージそのままおさえる（3-3）。その後一進一退、

終了間際、田中がなぐられて得たPK、榎谷ゴールをねらうが外れる（これはボクが蹴ればよかったんだ。外れても気がすんだのにと、当時の3年連中は今でもいう）ノーサイド引き分け。抽選、キャプテンたるボクの引いた札は、アア無情、出場権なし!! その瞬間、目の前がボーとしてなぜか涙が出て止まらない。3年間何やってたのか、わからないようになって、もう本当に何が何だかわからない。10数分後下級生を集めて、涙もかわかない顔で次のキャプテン柴垣、バيسキャプテン松谷を任命してボクの天高ラグビー生活は終わったのだ。

現役諸君に：苦しかった3年生のシーズンを振り返るたび、ここ数年の天高の部員数が多いことがうらやましい。今後も特に3年生が毎年、最低10人は残るように、つらいこともあるだろうけれど、助け合って最後までやってほしい。10人残れば絶対強くなるから。

負け試合の記

柴垣元太郎(高23回生)

ぼくたちが在籍した3年間は、残念ながら大会と名のつくものに、ひとつも出ることができませんでした。決勝まで行きながらわずかの差で負けたりしていて、根性が足らなかったなあと思われる試合もあります。

3年間、各年の最も印象に残っているものをあげてみましょう。1年生の時は当然何もかも新しいことばかりで、そう深刻になった

ことはありませんが、全国大会予選で負けたその瞬間の気持ちは忘れることができません。ぼくたちの学年で一軍に出ていたのは、フッカーの辰己だけで、あとみなは公式戦の経験がほとんどありませんでした。負けた瞬間、3年生がぐちゃし泣きをしている横でぼくらは「いよいよ自分らの時代が来るんだ」と思い胸がドキドキしたのを覚えています。そのころは部員が少なく、3年生が引退すれば1年生のほとんどが一軍になれたのです。また帰り道では、はや新チームの構想などを話していた記憶があります。

こうして新チームになったのですが、2年の時おもしろかったことは、北野に負けて坊主頭になったことです。試合後、北野から帰る途中、キャプテン代理の三宅さん（吉川主将はけがで欠場）ら3年生が「3年と2年は頭をまるめて責任をとろう」といいだし、ぼくら2年生もなぜか素直に「そのぐらいはせんといかんだろう」という気持ちになってしまい、早速次の日、天高近くの低額料金理髪店大連で断髪式を行いました。騒ぎ好きの大島がカメラを持って来て、断髪前後の写真を記念に残しました。（参加者・3年三宅、相楽、田中、2年松谷、辰己、大島、岩本、植松、柴垣…3年黒田さんは元から坊主のため不参加）次の日からは、みな坊主頭で登校し、いろいろおもしろいことがありました。

例えばグラウンドの整備を怠って体育の新村先生にグラウンドの使用禁止をいわたされた時のことです。皆で坊主頭をそろえて、

「あやまりに行ったら先生も思わず笑いだしてしまわれ、何とか許してもらうことができませんでした。また三宅さんが彼女のところへ電話して「今日試合に負けて坊主にするけどええか」と聞いたところ、「勝手にしなさい」といわれ、それで女の子にもてない不幸な坊主9人の誕生となったといううなわさ（事実かも）も出たりしましたが、とにかく、しょげることなくまた元気に練習を続けることができたのです。

次に最も苦しかった年が来ます。3年は大島が肩をいため、フッカー辰己、ナンバーエイト松谷、スクラムハーフ植松、スタンドオフ柴垣とかろうじて縦の線の一部を押えたにとどまり、展開は完全に2年生バックス、フランカーの手によることになりました。そして全国大会予選では、7月から目標を一本にしぼりながら、四条畷に完敗を喫しました。この時ばかりはしばらくラグビーをする気力もなくなりました。

結局、ここでは負け試合の話ばかりになってしまいましたが、勝敗には関係なく、天高でラグビーをしていてよかったということはいつも思っています。しかし、ぼくたちにとってはあくまでも過去のことであり、今一番すばらしい時を過ごしているのは現役の諸君だと思います。自信を持って練習に励んでもらいたいと思います。

苦しい思い出も楽し

榎 谷 博 明(高24回生)

最初に50年史編集にあたり諸先輩方にはいろいろご面倒をおかけしまして申しわけなく思っております。

私自身天高には非常に多くの思い出があります。その中でも高校3年間ラグビーをやったという誇りはだれにも胸を張っていえるものです。2年生の時の全国大会府予選で四条畷高に0対20で完敗した時から私たちのチームは出発しました。そして近畿大会予選では前年度のチームからのメンバーがほとんど残っているという恵まれた事もあって、チームとしてのまとまりはできており、決勝の対花園高との試合以外は危なげない勝ちっぷりで春休みに和歌山で行われた本大会に出場したのでした。

1回戦・兵庫代表星稜高、2回戦・滋賀代表膳所高を退け、準決勝では奈良代表天理高と対戦する事になりました。しかし私たちのチームは、体力不足からか、ケガ人や疲れの見える者がいたりして気力だけで試合に臨んだのですが、結果は9対42と惨敗を喫しました。この後、当時2年生部員の間で大学進学のことなどから退部を申し出てくる者があり、7人位が去っていき、チームの危機となったわけです。しかし3人がもどってきてくれ、一応チームとしてはベストの状態になり、3年生の1学期の間は週1回の練習試合

を組み、国体出場をまず目標にFW、バックスー一体となったゲームのできるチームをめざして練習に励みました。しかし練習時間2時間足らずでは決して満足のいく練習はできませんでしたが、私は1日1日充実した練習を目標に、あまり多くの種目はさけて一つの事を反復することに時間をさきました。

私たちの夏合宿は、8月上旬に菅平で行われました。国体、全国大会出場をめざしての激しい練習をくり返しました。関西学院大学高等部との合同合宿でしたが、部員全員よくがんばり私自身納得のいくものであったと思っています。合宿についてはいろいろ思い出はありますが、合宿中はつらい苦しいと思うばかりでも、今となっては楽しいというか、良い思い出です。

そして8月下旬から行われた国体第2次予選、準々決勝対今宮高戦では106対0という記録的なスコアで破り、チームとしては一気に盛り上がり、準決勝淀川工、決勝枚方高18―6で破り兵庫国体以来実に15年ぶりの国体出場をとげました。本大会の前には天理高との定期戦があり、私たちのチーム力を試すには絶好の相手であり、私たちは天理高との試合に備えて万全の練習をし、気力を充実させて天理高のグラウンドに乗り込みました。その結果は20点差ほどつけて勝つという私たちにとってはこの上ない喜びでした。

第26回和歌山国体には少しの自信をつけて臨んだわけです。1回戦は岐阜工に23対0で勝ち、準決勝では秋田高と対戦することにな

りました。初めて対戦する東北のチームでしたが、私たちは少し勝算もあったわけですが、その試合は秋田高の一方的な勝利に終わり私たちはその日のうちに帰阪するというみじめな結果に終わったのでした。この敗北がやはり部員にはショックだったのか、その後の練習では元気がなく、全国大会府予選を前にして心配だったのですが、幸い3年生が多く、チームワークもよかったためくずれる事はなく決勝まで進みました。対戦相手は淀川工。相手も今まで近畿大会、国体の各予選で私たちに負けているので、すごい気迫で試合に臨んできました。私たちも4年ぶりの出場がかかっているだけに必死です。前半右WTB吉村君がこの試合を勝利に導くトライを見事右すみに決めて結局8対7の1点差で勝ちました。この時、後半は両チームとも無得点という緊迫したゲームのため、私としてはレフエリーのノーサイドの笛が待ち遠しくほんとうに長く感じた後半でした。

そして高校ラグーとしては、あこがれの正月大会へ出場が決まり、私たちのチーム目標も達成され今度は全国大会の優勝を目標として後1カ月練習にがんばりました。残された短い日々を3年生は、進学もあるのですがラグビーに打ち込みました。

本大会の1回戦では国体の時に対戦した岐阜工と戦う事になり部員全員「振り返りにしてやる!」の意気込みで花園第1グラウンドに飛び出していきました。試合は天高ペースで進められ26対4で快勝。この勢いに乗って

勝ち進もうとしましたが2回戦、佐賀代表・佐賀工の前に14対10で敗れ去りました。4点をリードされて残り時間がわずかしかないうの3年生の顔はみんな今までだれにも見せた事のない必死の顔をしていました。必死のタックル、必死のアタックとがんばりましたが力及ばずノーサイド。長いようで短い高校生活をラグビーに打ち込んだ3年生は、みんなすがすがしい顔をしていました。私もこのチームの主将を務められたことを光栄に思い、また3年生の仲間にはよくがまんして私のいう通りにやってきてくれたと感謝しています。私たちのチームを温かく、きびしい目で見守って下さった宇野、田中の両先生をはじめ、グラウンドに出ていただいた黒野氏、田中氏、福本氏のコーチ団の諸先輩方にはこの紙面をお借りしてお礼を申し上げます。最後に天王寺高校ラグビー部の3度目の全国優勝を期待して私の3年生時のチームの思い出についてかけ足ではありますがペンを置きたいと思います。

全国大会出場メンバー

吉川	南出	丸橋	谷口	中西	寺島	宮井	犬飼	山本	中川	森崎	村田	榎谷	吉村	陽
(3)	(3)	(2)	(2)	(2)	(3)	(2)	(3)	(3)	(2)	(3)	(3)	(3)	(3)	(3)
FW							HB		TB		FB			

伝統の精神に誇り

吉岡 則行(高27回生)

ぼくは高校へ入学してからラグビーを始め
たわけですが、困ったことに(?)ラグビーの
魔力にとりつかれてしまいました。遺憾なが
ら全国大会には出場できませんでした。僕
はこの天王寺高校ラグビー部へ入部できたこ
とを大変誇りに思っています。

ぼくたちは先輩たちが築いてくださった伝
統に頼るだけでしたが「名門天王寺」という
伝統は、ぼくたちの血管に脈動していまし
た。そして誇りに思っていました。

3年間で最も印象に残っている試合は、3
年の時、昭和49年11月4日、全国大会予選3
回戦、対北野高校の試合でした。これは北野
との定期戦も兼ねた大事な試合でしたので、
絶対に負けられませんでした。試合が始まる
と、両チームとも気合が入っていて、一進一
退でした。開始後10分ごろ、北野がずっと押
し合っていて僕たちは自陣22メートルラインから
脱け出すことができませんでした。スクラム
の連続でしたがフォワードがよく持ちこたえ
てくれました。ペースを変えなければいけな
いと思っているところへ、我がチームがペナ
ルティーをとられ、北野がPGを決めました。
「今だ」と思って反撃に転じてやっと20
-9で勝つことができました。このときは本
当にうれしく思いました。みんなが一人一人
本当によくやってくれました。このときほど

みんなに感謝したことはありませんでした。
自分でも、これほど気合の入ったいい試合は
初めてでした。

ラグビーをやってよかったと思うことは、
友達ができることです。今、ぼくは予備校に
通っていますが、そこでラグビーをやってい
たという人がいるとすぐ友達になれるので
す。特に一度試合をやったことのあるチーム
の人ですと、何の障壁もなくずっと話をする
ことができるのです。これもラグビーのもつ
魔力の一つ、喜びの一つだと思います。

今は浪人の身ですのでやむなくラグビーボ
ールにはごぶさたしていますが、やりたくて
仕方がありません。来年は大学で思い切りや
りたいと思っています。恐らく一生ラグビー
から離れることはできないと思います。

天王寺ラグビー部に栄光あれ！

●50年の足跡



年度別戦績記録

ラ式創成について

長らく沈んでいたア式蹴球部が、ラ式に新生したのは大正12年2月の終わりで、部員一同熱烈なる練習、しかもコーチもない独特の練習で、強敵大阪高等学校及び外国語学校と戦った。

時は3月初めで入学試験も目前にせまっていた。前者には15対0、後者とは0対0の接戦で、我をして勝たしめることは出来なかったけれども、正々堂々と戦いたるは天中魂の発露したものと愉快に感じた。剣を磨くこと8カ月、フットボールのシーズンがやって来た。再び大高と、また北中と戦わんとしている。

「ラグビー」という名はアソシエーションに対する言葉で、英国の有名なるハイスクールの名であって、1800年の始代に英国では従来の蹴球の形式に大改革があったがラグビーのみ孤節をまっとうして「ボールを持って走る」というシステムを固守したのであった。

そしてこの競技が今の英国人の人格をつくり上げたのである。

今この歴史ある競技の新に我が校に生まれ出たことは慶賀すべきことである。我等は天中八百の健児のあつき声援と我が部の益々盛んにならんことを切望してやまぬ。最後に阿倍、三好、松川の諸兄のご尽力に満こうの謝辞をもってお礼を云う。 (みちを生)

“天中魂”の発露望む

私は天中ラグビー蹴球部の創設者の一人として、かつ最初のメンバーの一員として深く名誉を感じると共に今後の発展を祈ります。

今や天中ラグビーの名は関西、少なくとも大阪の蹴球を口にする者の知る所にして彼等は皆我が部の将来に目を注いでおります。彼等の期待にそむかず天中の名を挙げるは一に在校生諸君の意気努力によるのです。ラグビーについて、天中魂がどれだけ表れるか？よろしく努力せられん事を望みます。 (杉村正二郎)

桃陰大正12年より、野村(杉村)正二郎氏は初代の主将、昭和50年1月15日没

大正12年度

3・初旬 0—15 大阪高校

〃 0—0 大阪外語

＜大正13年＞

1・19 11—3 北野中 第1回定期戦 レフェリー真島氏

天王寺	坂田	藤井	本阪	平井	谷上	川西	田中	橋岡	河原	富田	浜田	長森	宮城	
	FW							HB	TB			FB		
北野	杉尾	中村	島	岡田	羽仁	筒井	天野	横山	伊藤	松田	星野	宮内	佐井	山本

—桃陰、北野高ラグビー部50年史—

大正13年度

12・4 11—11 同志社中（京都）

本藤糸平福富宮松矢長山川
坂井岡寛林森田城山島沖本西

FW HB TB FB

＜大正14年＞

1・10 17—3 大阪外語(天中)

●第8回全国大会（甲子園球場）

北野中 0
京都一商 37
京都中 0
同志社中 33
天王寺中
立命館中 0
京三中 3

3
12
0
3
0
0

京都一商

1・19 3—0 京都三中 レフェリー杉本氏

1・20 優勝戦 0—12 京都一商 レフェリー奥村氏

天王寺	塚田	藤井	糸岡	寛	平井	岩林	橋崎	宮城	富田	松山	長森	山本	本坂	
	FW				HB			TB			FB			
京一商	黒川	菱田	関	田中	山口	石原	小野	牧野	上村	飯田	藤井	柴田	清水	大松

優勝戦に出場の資格を得たる我軍は全国の覇王、京一商と見ゆ。
我軍奮闘すると雖も、実力の差を如何せん、終に12——0を以て我
軍敗走す。 —桃陰—

● 1・25 21——11 北野中（天中）第2回定期戦

大正14年度

9・14 0——18 大阪高校

10・初旬 4——9 大阪高校

●明治神宮大会、関西予選（京都）

10・25 0——25 同志社中

憶は昨秋相見えてより正に1年、彼我の勝敗決すべき時は今、敵
は全国中学界の覇王、我は錦城々下の覇者、洛陽の球界為めに熱狂
せり……中略……我よく戦ひ敵よく守る。数万の観客、為めに酔え
る如し。然るに如何にしけん、天の時を得ざりしか、地の利を失ひ
しか、將た又人の和なき為めか、遂に25——0と拭ふべからざる大
敗となり……後略 —桃陰—

時日不明 6——3 天理中

〃 3——6 大阪外語

〃 0——19 関西大学

11・25 18 $\left(\begin{smallmatrix} 12 & 0 \\ 6 & 0 \end{smallmatrix}\right)$ 0 北野中 レフェリー厳氏

●全国大会大阪奈良地区予選

12・26 36——0 天理中（大阪高校）レフェリー大市氏

天王寺	三藤大古糸	本森林	富宮	浜長山	藤岡
	杉井塚市岡	坂	田城	田沖本	野本
	FW		HB	TB	FB
天西毛大西足正	薄原	池増	三平佐	土吉	
理神受宮村立垣		田野原	通藤	佐本	

12・28 優勝戦 42——0 北野中 定期戦 レフェリー下村氏

<大正15年>

1・1 3——15 天中OB レフェリー奥村氏

●第9回全国大会（甲子園球場）

1・4 21 $\left(\begin{smallmatrix} 9 & 0 \\ 12 & 0 \end{smallmatrix}\right)$ 0 福岡中 レフェリー下村氏

1・5 0 $\left(\begin{smallmatrix} 0 & 3 \\ 0 & 14 \end{smallmatrix}\right)$ 17 南満工業 レフェリー目良氏

三 藤 大 古 糸 齊 本	宮 富 浜 長 山 藤 岡
杉 井 塚 市 岡 藤 坂 林	城 田 田 沖 本 野 本
FW	HB TB FB
早稲田実 0	
南 満 工 20	17
福 岡 中 0	3
天王寺中 21	0
慶応普通 6	
京 一 商 15	3
同志社中 13	6
	同志社中

西戎の侵冠を一蹴し去り我が軍は第2回戦捲土重来せる南満工業と対戦す。彼年齢体力我に倍す。されど我には天中魂あり。彼を迎え撃ちて粉碎せんとす。当日闘士森、昨日の対福中戦に傷きて出場する能はず。斉藤を以て之に換ふ。然れども天我に幸せざる何ぞ甚しき。17—0。我勝つべきに敗れて涙禁ず能はず、噫、悲！語らんと欲するも言なく、但此上は臥薪嘗胆来年を期するのみ。—桃陰—

大正15年度

2・不明 11—0 大毎（大阪高商）

9・26 5—12 関西ラグビー（大阪高校）レフェリー林氏

10・2 0—12 甲南高校（大阪高校）レフェリー中村氏

10・9 0—26 京都一商（三高）レフェリー望月氏

中 井 藤 糸 福 安 馬 井 山 齊 長 荒 小 神 田	
野 上 野 岡 田 部 沢 上 田 藤 尾 賀 木 阪 中	
FW	HB TB FB

10・24 敗 同志社中（甲子園）

11・20 22—3 北野中（天中）第4回定期戦 レフェリー奥村氏

白雲金剛の峰をかすめ、瀬江の流悠々として秋正にたけなはなり。此の日我選手の奮闘目覚しく僅々1トライを与えしのみにて大勝せり。—桃陰—

昭和2年度

1・15 29—0 大阪高工（天中）

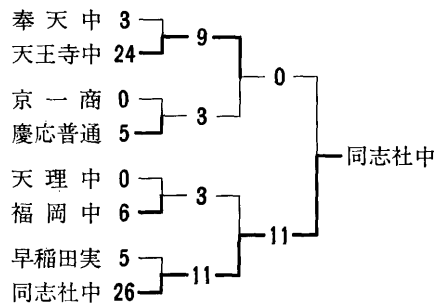
4・29 11—9 大阪高商（大阪高商）

- 5・21 10—14 大阪高校（天中）
 6・8 26—8 大阪外語（天中）レフェリー蔵氏
 6・19 24—0 大外語OB（天中）
 8・25 20—11 天理外語（天理）レフェリー阿部氏
 9・24 6—6 関西ラグビー（大阪高校）レフェリー村山氏
 10・5 24—0 大阪外語（天中）レフェリー松川氏
 10・8 9—6 天理中（天中）レフェリー山田氏

天王寺	山田	藤	福川	中脇	安	山	齊	荒	小	岡	神	馬
	内	中	野	田	西	野	野	部	田	藤	賀	木
	FW				HB		TB		FB			
天	小	高	徳	松	大	野	土	増	中	玉	吉	近
理	原	橋	永	岡	野	口	佐	野	村	垣	阪	藤
											井	藤
											田	

- 10・12 13—17 関西大学 レフェリー大市氏
 10・16 14—19 関西ラグビー レフェリー杉本氏
 10・18 63—0 浪華商（天中）レフェリー松川氏
 10・29 11—6 京都一商（天中）レフェリー吉岡氏
 11・19 54—0 北野中（甲子園）第5回定期戦
 レフェリー三宅氏
 11・26 11—5 京都一商（三高）レフェリー壇氏

●第10回全国大会（甲子園球場）昭和3年



1・4 24 $\left(\begin{smallmatrix} 11 & 0 \\ 13 & 3 \end{smallmatrix}\right)$ 3 奉天中 レフェリー中村氏

前半11—0，後半7分奉天中，天中側インゴールに蹴り込み押へて3点を奪回，その勢に乗じて形勢の挽回を計ったが，技倆の差は如何ともし難い．天中は依然チャンス多く，20分密集から左へ展開し小野木トライ，田中ゴール．更に24分中央30ヤードにFKを得て，田中のプレイスはゴール．最後に右へ攻めこんでゴール前のスクラムを左へ廻してトライ，田中ゴールとつづけ様に得点し，結局

3 ゴール 2 トライ, 1 ペナルティ 合計24点对 1 トライ (3 点) で天
中大勝す。 —桃陰—

1・6 9 $\left(\begin{smallmatrix} 9 & \text{---} & 0 \\ 0 & \text{---} & 3 \end{smallmatrix}\right)$ 3 慶応普通部 レフェリー馬場氏

8分慶応我陣深く攻めこみ, トライと思はれたが, 天中バック好
防, 12分天中25ヤード線に逆襲PKを得田中ゴール. 慶応挽回に努
め天中陣に迫るが, スクラムの球皆とられ, キックにジリジリ中央
を回復せらる. 17分天中, TBキックで左ゴール前に肉薄, スクラ
ムの球天中荒賀ブラインドをつきトライ, 20分左30ヤードのFKを
天中田中ゴールす. 後慶応1トライを返すも及ばず。 —桃陰—

1・7 優勝戦 0 $\left(\begin{smallmatrix} 0 & \text{---} & 8 \\ 0 & \text{---} & 3 \end{smallmatrix}\right)$ 11 同志社中 レフェリー杉本氏

天王 寺	山	田	藤	福	井	中	脇	安	齊	山	荒	小	岡	神	馬
	内	中	野	田	上	野	野	部	藤	田	賀	木	本	阪	洩
					FW				HB		TB		FB		
同志 社	居	齊	小		井	三	山	藤	田		吉		江	中	
	初	藤	竹		上	谷	本	原	中	林	田	張	柯	原	西

前半19分ゴールポスト左10ヤードのルーズの球. 同中林拾って強
引にとび込んでトライ. 柯ゴールして5点, 29分ゴール前25ヤード
でFKを得山本ゴールして3点を加へ前半を終る. 後半両軍バック
ローよくつぶし, バックに球渡らず, 双方ドリブル戦で中央に混戦
つづく. 30分左ゴール前のルーズの球同中FWとびこんでトライ.
32分天中最後の猛襲に右ゴール前に肉薄したが好機至らず, 中央線
に一進一退猛闘の内タイムアップの笛高く鳴り万事休す。 —桃陰—

古豪同志社中に対し, 今大会は前回の大会より頭角をあらわして
きた天王寺中, 慶応, 福岡中が挑戦をいどんだが稀に見るTBを揃
へた同志社中が8回目の優勝をとげた. しかし奉天中, 慶応を下し
て同志社中に迫った天王寺の奮戦は誠に注目すべきものがあつた.

—全国高校ラグビー大会50回の歩み—

昭和3年度

9・2 9—9 天中OB (大阪高校) レフェリー岩前氏

10・10 23—3 大阪外語 (大阪高校) レフェリー寺村氏

10・13 11—6 関西大学 (関大) レフェリー林氏

10・14 35—0 三重高農 (大阪高校)

天王寺 山内 布袋 橘 福田 御牧 安倍 田中 川西 青山 齊藤 荒賀 長尾 日尾 神阪 奥田

FW HB TB FB

脇野 木下 久富 松村 田中 合田 花田 林 三宅 安田 西野 寺村 大市 平岡 三宅

関西 西ラ

11・11 32—0 北野中（寝屋川球場）第6回定期戦

11 · 12 12 $\left(\begin{smallmatrix} 6 & \text{---} & 3 \\ 6 & \text{---} & 9 \end{smallmatrix} \right)$ 12 天理中

3分敵30ヤード中央より齊藤、長尾、荒賀と廻りトライ、以後天中圧迫されがちで攻勢に出る能はず、天理ドリブルでしばしば我が陣に迫る。フルバック奥田よく頑張るトライを成さしめず、13分天中にペナルティあり敵ドロップをねらい見事成る。20分中央線上のラインアウトから齊藤、日尾と廻りキック、敵フルバック前に転がるボールを日尾すかさず足でひっかけトライ、後半4分敵トライ、7分我がバックの球の乱れに乗じて敵トライ、天中奮起し12分敵ゴール前のルーズより青山、齊藤と渡りトライ、敵に1トライ返さるも、29分日尾の独走トライで引分ける。 一桃陰

慶応普通 0
同志社中 13
京 三 中 0
天王寺中 11
京 城 中 0
神戸一中 32
修猷館中 3
早稲田実 16

18
3
3
0
10
41
同志社中

1・4 11 $\begin{pmatrix} 3 & \text{—} & 0 \\ 8 & \text{—} & 0 \end{pmatrix}$ 0 京都三中 レフェリー藤井氏

1・6 $3 \begin{pmatrix} 3 & 8 \\ 0 & 10 \end{pmatrix} 18$ 同志社中 レフェリー馬場氏

天王寺	山	布	井	御	川	田	安	青	齊	荒	長	日	神	奥
	内	袋	橘	上	牧	西	中	部	山	藤	賀	尾	尾	阪
	FW							HB		TB			FB	
同志社	居	引	藤	田	大	清	藤	山	吉	張	柯	白	中	
	初	地	井	中	谷	野	原	林	本	田	杉	西		

全国大会は桃陰に記事なし、当時の毎日新聞の総評の中に合田夷氏のFWに就ての記載あり、それによると天中、神戸一中は奇麗であつたが凄味がない、とある。 —全国高校大会50回の歩み—

昭和4年度

9・7 14—5 大阪高校（大阪高校）レフェリー柏本氏

安 桑 持	豊 福 大 田 青 伊 北 浜 長 村 正
部 原 田	橋 島 田 谷 中 山 藤 條 口 尾 山 野
	FW HB TB FB

9・28 0—6 関西学院（大商大）

10・6 14—3 関西ラグビー（寝屋川）レフェリー奥田氏

10・12 14—8 神戸一中（甲南高校）レフェリー馬場氏

10・20 5—16 同志社中（寝屋川）神宮大会予選

レフェリー別所氏

11・16 13 $\left(\begin{smallmatrix} 3 & \text{---} & 3 \\ 10 & \text{---} & 3 \end{smallmatrix}\right)$ 6 天理中 レフェリー小野木氏

11・20 16 $\left(\begin{smallmatrix} 8 & \text{---} & 0 \\ 8 & \text{---} & 6 \end{smallmatrix}\right)$ 6 北野中 定期戦

前半8—0、後半初めより天中圧迫され、ファイブヤードスクラムを繰返す内、球敵に出て、スタンドオフもぐってトライ。数年来初めて北中にトライをゆるす。敵応援団躍起となる。15分又も天中反則ありペナルティゴールを得られ3点を取らる。22分天中奮起し敵25ヤード内のルーズの球伊藤、北條、田中と渡り左隅にトライ。その後両軍無為タイムアップとなる。 —桃陰—

11・23 0—15 京都一中（寝屋川）レフェリー平井氏

第一回定期戦なり。

此の年の桃陰には前記大阪高校との対戦メンバーが記載されているだけである。

●全国大会予選

12・25 準優勝戦 5 $\left(\begin{smallmatrix} 5 & \text{---} & 5 \\ 0 & \text{---} & 6 \end{smallmatrix}\right)$ 11 天理中 レフェリー阿部氏

天王寺	桑 豊 持 米	安 田 川	伊 青 北 長 潮 四 正
	原 島 田 田	橋 部 中 西	藤 山 條 尾 田 方 野
	FW	HB	TB FB
天 理	宮 脇 筑 田 宇 野 古 土	谷 渡	玉 吉 西 松 西
	西 田 地 下 宮	口 山 佐 和 辺 垣 田 村 井 谷	

—天理ラグビー50年の歩み—

今シーズンを顧みるに我部の成績余り芳しからず。校友諸賢の御期待に背きしことは万謝措かざる所なり。我等は諸兄の平常の御声援に報ゆべく、日夜寢食を忘れて更に猛練習を積まんとす。親愛なる校友諸賢よ、我等の為に倍旧の御声援を賜え。 一桃陰一

昭和5年度

8・31 30——3 天中OB

9・6 0——23 大阪商大（大商大）レフェリー小野木氏

9・13 6——16 大阪高校（天中）レフェリー田中氏

9・21 25——3 同志社中

石田	伊藤	斧原	石田	林	齊藤	野長瀬	安藤	伊藤	北條	川上	潮田	浜口	今井	尾崎
(寛)	(英)	(原)	(繁)	(藤)	(藤)	(藤)	(藤)	(泰)	(泰)	(上)	(田)	(口)	(井)	(崎)
FW					HB			TB			FB			

5度戦ひ5度敗北の憂き目を見たる強敵同志社に対し6度目に25—3の大スコアを以て大勝し先輩諸兄の仇を復したり。 一桃陰一

10・4 33——8 神戸二中（天中）レフェリー田辺氏

天王寺	吉中	伊藤	久保	石田	林	齊藤	野長瀬	安藤	伊藤	北條	川上	潮田	浜口	住吉	尾崎
(中)	(英)	(英)	(田)	(田)	(藤)	(藤)	(藤)	(藤)	(泰)	(泰)	(上)	(田)	(口)	(吉)	(崎)
FW					HB			TB			FB				
神二	田	山	羽	吉	加	田	鍋	引削	相	武	野	熊	永	堀	内
中	山	村	田	田	島	中	加	田	沢	内	長	田	井	井	武

10・12 9——14 神戸一中（天中）レフェリー目良氏

10・19 19 $\left(\frac{6}{13} \frac{9}{3}\right)$ 12 京都一商（寝屋川）レフェリー太田氏

●全国大会予選第2回戦

11・16 3——39 天理中 レフェリー合田氏

11・23 23 $\left(\frac{6}{17} \frac{0}{3}\right)$ 3 北野中（寝屋川）第8回定期戦

レフェリー天野氏

天王寺	石田	加藤	林	石田	寺戸	伊藤	野長瀬	齊藤	四方	北條	川上	潮田	浜口	中川	尾崎
(寛)	(藤)	(藤)	(繁)	(繁)	(戸)	(藤)	(藤)	(藤)	(方)	(泰)	(上)	(田)	(口)	(川)	(崎)
FW					HB			TB			FB				
北	立	西	高	大	鳥	室	原	頼	田	春	土	小	沢	森	泉
野	石	本	須	原	羽	田	田	尊	村	山	井	寺	村	田	

昭和6年度

- 4・25 16—0 大阪高校（大阪高校）レフェリー梅谷氏
 9・9 13—5 大阪高校（大阪高校）
 9・24 3—12 同志社中（花園）レフェリー小林氏
 10・11 30—6 神戸一中（甲南高）レフェリー目良氏
 10・25 14 $\left(\frac{8}{6} \frac{0}{0}\right)$ 0 天理中（花園）レフェリー目良氏
 11・14 65—3 浪華商（天中）レフェリー浜口氏
 11・21 19 $\left(\frac{6}{13} \frac{0}{5}\right)$ 5 北野中（甲子園）第9回定期戦

レフェリー中出氏

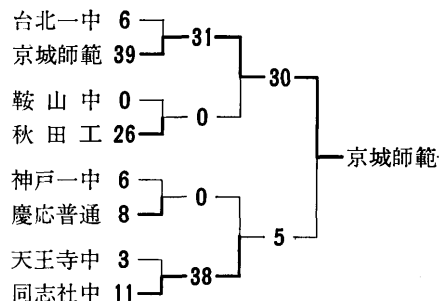
●全国大会大阪・紀和予選（花園）

- 11・29 準優勝戦 35 $\left(\frac{16}{19} \frac{0}{0}\right)$ 0 浪華商 レフェリー合田氏
 12・6 優勝戦 16 $\left(\frac{0}{16} \frac{11}{0}\right)$ 11 天理中 レフェリー目良氏

天王寺	塩田	加藤	斧原	石田	寺戸	安藤	林藤	伊藤	木村	荒賀	川上	潮田	北條	今井	島田
	FW				HB		TB		FB						
天	井	土	中	土	萩	竹	横	西	仁	玉	田	渡	塩	原	木
理	沢	佐	西	井	原	内	部	村	尾	垣	中	辺	見	田	田

前半敵に許したるトライは風による味方のミスをチャンスとせられたるものにて、フォワード、バック共に決して負けて居たるにあらず、殊に安藤、石田、伊藤等の一軍はよく活躍し、よくトライインを越えしが遂に成らざりき。後半現したる實力は実に驚くべき者にして、ルーズにタイトに或はハンドリング、パスワークによく實力を発揮して遂に敵に勝越したり。一方防戦に至っては北條等猛烈なるタックルにて全く敵は手も出でざりき。 一桃陰一

●第14回全国大会（南甲子園）昭和7年



1・3 第1回戦 3 $\begin{pmatrix} 0 & 8 \\ 3 & 3 \end{pmatrix}$ 11 同志社中 レフェリー安田氏

天王寺	塩田	加藤	斧原	石田	寺戸	安藤	林	伊藤	木村	荒賀	川上	潮田	北條	今井	島田
	FW				HB		TB			FB					
同志社	高垣	西村	赤木	宮城	橋本	尾中	半田	今西	武久	福原	山本	藤原	柳長	清井	水
	FW				HB		TB			FB					

—全国高校大会50年の歩み—

桃陰には全国大会の記載なく、この年のメンバーではFBに斉藤、尾崎、島田が交互に出場している。

昭和7年度

9・4 19—6 大阪高校（大阪高校）レフェリー大楽氏

以下日時不明

9—3 同志社中

29—6 神戸二中

54—0 八尾中

11—8 神戸一中

10・17 11—8 北野中（花園）定期戦

●全国大会予選

11・9 3 $\begin{pmatrix} 3 & 3 \\ 0 & 0 \\ 0 & 5 \end{pmatrix}$ 8 天理中（花園）レフェリー合田氏

天王寺	志度	加藤	虎尾	斉藤	尾崎	黒田	山脇	高橋	木村	荒賀	上田	中村	川上	今井	酒井
	FW				HB		TB			FB					
天理	太田	金平	土佐	辻井	西村	井村	木沢	山田	岡野	大塚	田中	横部	仁尾	塩見	岡利
	FW				HB		TB			FB					

—天理ラグビー50年の歩み—

天中のキックに始った大熱戦は、先づ中央に混戦の後、9分早くも天理ゴール前中央20ヤードに迫り、密集をかさねる中、12分中央左よりのルーズの球見事にヒールアウトされてHB木村より左WTB上田に渡り、左隅にとび込み先づ3点をあげた。しかし敵もさるもの。14分我が陣を破り3点をあげ3—3の同点となる。後半となるや天中再び元気に天理陣に突入し、5分、7分、11分とTBパスで得点を思はしし敵の好防に止めらる。18分敵WTB田中単身

しかし協定の上戦ひは続けられる事になる。我がフィフティーンは再び立った。又しても熱戦、再び無得点かと思はれたが、9分スタンド寄り、天中10ヤードのラインアウトを破られゴールを得られて8——3とリードさる。之より一段と奮戦したが、遂に敵を圧迫しつつトライに至らず、ノーサイドの笛は血みどろなグラウンドに響き渡った。万事窮す。しかし敗れたりとも我々は全力をつくしたのだ。何を悔むことがあろう、寧ろあの小軀をもって奮戦した15名の選手を称ふべきだ。しかし敗戦はいつの世にも悲しい。我等は皆男泣きに泣いた。

—桃陰—

志加虎齊尾黒山(中)高木荒(木)上中川今酒
度藤尾藤崎田脇(野)村賀(塚)田村上井井
FW HB TB FB

9・4 $18\left(\begin{smallmatrix} 9 & \text{—} & 20 \\ 9 & \text{—} & 18 \end{smallmatrix}\right)38$ 大阪高校 (大阪高校) レフェリー藤井氏
 9・9 8—26 大阪商大 (大商大)
 9・17 $22\left(\begin{smallmatrix} 19 & \text{—} & 0 \\ 3 & \text{—} & 13 \end{smallmatrix}\right)13$ 京都一中 (嵯峨野)
 9・23 $5\left(\begin{smallmatrix} 5 & \text{—} & 0 \\ 0 & \text{—} & 9 \end{smallmatrix}\right)9$ 同志社中 (嵯峨野)
 10・8 $6\left(\begin{smallmatrix} 3 & \text{—} & 19 \\ 3 & \text{—} & 6 \end{smallmatrix}\right)25$ 神戸二中 (花園)

10・15 3—11 京都一商（花園）
11・12 $6\left(\begin{smallmatrix} 3 & \text{—} & 10 \\ 3 & \text{—} & 0 \end{smallmatrix}\right)10$ 北野中（花園）定期戦

11・23 $6\left(\begin{smallmatrix} 3 & \text{---} & 3 \\ 3 & \text{---} & 0 \end{smallmatrix}\right)3$ 天理中 レフェリー合田氏

天王寺	村	竹	竹	虎	中	山	高	高	木	上	中	酒	蒲	黒	
田	朴	内	島	尾	野	脇	橋	田	塚	田	村	井	生	田	
	FW							HB		TB			FB		
天	小	鳥	梅	木	山	土	金	阿	岡	寺	山	横	井	岡	坂
理	西	取	田	村	崎	佐	平	保	岡	寺	山	横	井	岡	坂
									野	利					

—桃陰—

11・30 優勝戦 $11\left(\begin{smallmatrix} 8 & \text{---} & 0 \\ 3 & \text{---} & 8 \end{smallmatrix}\right) 8$ 北野中

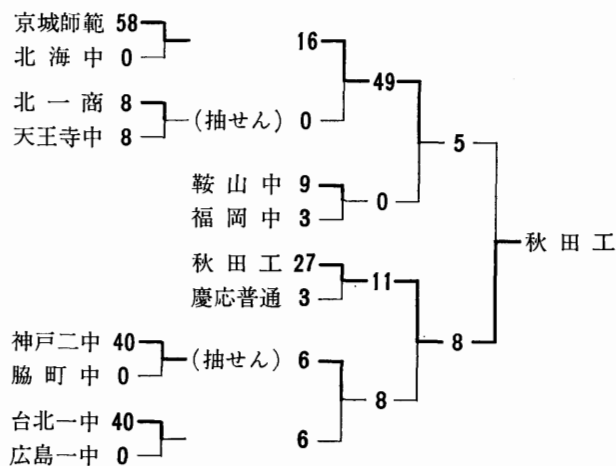
メンバーは天理戦のTB上田，FB黒田に代り，夫々石塚，酒井が
出場。3分敵陣25ヤードの密集から敵に出た球をパスするを中村
見事にインターセプトし，右中間にトライ，5点を先取して勢頭よ
り敵の気を呑む。6分天中ドリブルで進むを敵拾ってRWにパス，
独走せしが酒井好タックルして危機を脱す。

15分25ヤード右側で敵オフサイドあり、竹島オープンに蹴るを石塚拾って飛込んで右中間にトライ。後半常に敵陣内で戦ふ。

村田、高田、虎尾、竹島、中野等よく奮闘、新進蒲生は3年の弱輩なるもそのキック、ダッシュ共に称すべきものあり。13分中村キック、敵ゴール内を転々とするを伊藤おさえてトライ。16分25ヤード中央で天中オフサイド、敵ペナルティゴール成る。それより敵急に元気出で盛に天中を圧迫し19分スクラムトライす。

—桃陰—

●第16回全国大会（南甲子園）昭和9年



1・2 8 $\left(\begin{smallmatrix} 3 & 5 \\ 5 & 3 \end{smallmatrix} \right)$ 8 京都一商 レフェリー川本氏

天王寺 村 竹 竹 虎 高山中 高木 酒中 黒蒲 伊
 田 朴 内 島 尾 橋 脇 野 田 塚 井 村 田 生 藤
 FW HB TB FB
 京 宇 松 長 井 古 北 杉 藤 池 長 荒 田 北
 一 野 原 谷 川 上 川 李 村 本 田 田 岡 川 中 村
 商 野 原 谷 川 上 川 李 村 本 田 田 岡 川 中 村

桃陰に全国大会の記載は見られないが、双方共に1トライ、1ゴールずつで引き分け、抽せんで涙を吞む。

—全国高校大会50年の歩み—

昭和9年度

9・2 16—26 桃陰ラグークラブ（天中）

9・9 0 $\left(\begin{smallmatrix} 0 & 8 \\ 0 & 5 \end{smallmatrix} \right)$ 13 京都三中（花園）

9・16 16 $\left(\begin{smallmatrix} 8 & 3 \\ 8 & 3 \end{smallmatrix} \right)$ 6 京都一中（花園）レフェリー田中氏

10・7 スコア不明 京都一商（花園）レフェリー合田氏

日時不明 17—5 浪華商

11・4 32—3 松坂商（天中）

●全国大会大阪紀和予選（花園）

11・16 33 $\left(\begin{smallmatrix} 11 & 3 \\ 22 & 0 \end{smallmatrix} \right)$ 3 正気書院

11・23 2回戦 10 $\left(\begin{smallmatrix} 10 & 5 \\ 0 & 15 \end{smallmatrix} \right)$ 20 北野中（定期戦）

レフェリー田中氏

天王寺	大橋	佐朴	小原	西井	高井	平川	伊藤	浜高	武田	鈴木	丹後	蒲生	村田	吉田
								口田	田木	後生	田田			
								HB		TB				FB
北野	畠中	橋上	川合	末松	太田	筒井	平田	松井	平瀬	小寺	北村	来住	赤堀	早水

—桃陰，北野高ラグビー部50年史—

前半14分北中ゴール前15ヤードの密集天中に出で，高田逆をついて丹後にパス，丹後突込み左中間にトライ，伊藤の長蹴見事コンバート5点を先取し意気昂る。18分天中陣25ヤードのルーズ敵に出で，ハーフ，センターと渡りもぐってトライ。コンバート同点となる。26分敵陣に迫込み左右に攻め，ゴール前左寄りのルーズ取り高田，武田，蒲生と渡り，蒲生転びながらも村田にパス，村田敵を振り切って走り，インゴールを大きく廻って中央にトライ，伊藤の好蹴又もやコンバート。

後半10分天中のパスミス，ルーズとなり球転び出るを敵WTBトライ。その後15分敵センターに27分ゴール前スクラムをホイールされトライ。何れもゴール成る。噫々遂に敗れぬ。前半リードせるに後半敗をとりしは何故ぞ？ 対校試合のトロフィーは奪はれ，大優勝旗復我れを去りぬ。恨を吞みて昭和9年の幕は閉ず。 —桃陰—

昭和10年度

- 9・8 31—24 桃陰ラガー（天中）
 9・15 31—6 京都一中（花園Ⅱ）
 9・22 0—3 同志社中（花園Ⅱ）
 10・5 6—19 神戸二中（甲南高校）
 10・12 28—13 浪華商（花園Ⅱ）
 10・19 42—0 海草中（海草中）

●全国大会大阪奈良予選（花園）

11・3 0 $\left(\begin{smallmatrix} 0 & 9 \\ 0 & 18 \end{smallmatrix}\right)$ 27 天理中

天王寺	末永	小西	佐原	小西	吉田	石井	高井	武平	飯田	坂田	蒲生	鈴木	塩木	古田
								田川	田本	生本	田木	田沢		
								HB		TB				FB
天理	孫田	吉田	仁尾	辻	小西	大角	松村	中村	奥田	角谷	寺岡	坂本	吉崎	泰川

ああ遂に我々は予選の第1戦に於て宿敵天理に又しても後れをとる。 —桃陰—

12・1 $6\begin{pmatrix} 3 & \text{---} & 6 \\ 3 & \text{---} & 0 \end{pmatrix}6$ 北野中(市立運動場)レフェリー山田氏

天王寺	末永	小西(秀)	佐原	小西(信)	吉田	石井	平川	太飯田	武田	坂本	蒲生	鈴木	塩田	高井
	FW							HB		TB			FB	
北野	松谷	池浦	柴田	若林	田川	平田	筒井	平瀬	野沢	吉田	赤堀	早水	小根	根本

前半25分我方は鈴木の特ライ、27分よりつづけ様に2つのスクラムトライを敵にゆるし終了、後半は10分蒲生、塩田、鈴木と渡った1トライのみで引分けた。此の日選手一同実に元氣満々とし、闘志溢れ、よく戦ふも敵に氣を抜かれ、スクラムトライを2度もなされたるは返す返すも残念なりき。一桃陰、北野高ラグビー部50年史一

なお、この年は天理中が全国大会に出場、優勝している。

昭和11年度

1・18 25——0 大阪中(花園)

1・19 勝 海草中(天中)レフェリー内山氏

4・5 0—8 神戸二中(神戸遊園地)レフェリー河西氏

4・12 29—11 桃陰ラガー (天中)

4・19 33—36 慶応OB（花園）レフェリー長沖氏

●近畿中等学校選抜大会（花園）

4・26 第1回戦 21—8 京都一商

4・29 準優勝戦 31—6 北野中

5・10 優勝戦 $6\left(\begin{smallmatrix} 3 & \text{---} & 3 \\ 3 & \text{---} & 5 \end{smallmatrix}\right) 8$ 天理中

西 小 吉 小 塩 石 奥 太 武 飯 中 水 鈴 塩 古
 原 西 西 西 見 井 井 田 田 田 西 上 木 田 沢
 (秀) 松 (信)
 FW HB TB FB

9 · 5 24—11 浪速高校 (浪高)

9 · 13 $26 \begin{pmatrix} 13 & \text{—} & 3 \\ 13 & \text{—} & 5 \end{pmatrix} 8$ 京都一中 (三高)

9・20 $6\begin{pmatrix} 3 & \text{—} & 0 \\ 3 & \text{—} & 0 \end{pmatrix} 0$ 京都三中 (寺田)

9・12 0—21 神戸二中（神戸二中）

9・19 3—16 京都一商（花園）

9・23 11—17 同志社中（花園Ⅱ）

9・26 9—21 神戸一中（神戸一中）

10・2 13 $\left(\begin{smallmatrix} 5 & \text{—} & 3 \\ 8 & \text{—} & 3 \end{smallmatrix}\right)$ 6 海草中（大阪商大）

10・31 17 $\left(\begin{smallmatrix} 8 & \text{—} & 10 \\ 9 & \text{—} & 8 \end{smallmatrix}\right)$ 18 村野工業（花園Ⅱ）

●全国大会大阪，奈良，和歌山予選

11・23 36 $\left(\begin{smallmatrix} 15 & \text{—} & 0 \\ 21 & \text{—} & 0 \end{smallmatrix}\right)$ 0 和歌山商（花園Ⅱ）

11・28 3 $\left(\begin{smallmatrix} 0 & \text{—} & 8 \\ 3 & \text{—} & 15 \end{smallmatrix}\right)$ 23 天理中 準優勝戦（花園）

レフェリー伊藤氏

天王寺	吉	遠	村	西	佐	松	太	鹿柴中	四	飯	砂	塩	武
	松	山	上	原	野	岡	田	木垣西	方	田	田	田	田
	FW							HB	TB		FB		
天	大	宗		加	滝	加	佐	渡	大	今	藤	泰	阿
理	石	我	崔	納	本	藤	藤	辺	江	村	平	川	部

前半敵に1ゴール，1ペナルティゴールされ終る。後半3，10，13，17，24分と敵にトライをゆるし，味方は敵以上にチャンスがあり，又FWもスクラムに於ては対等に球を取っていたにもかかわらず，ハーフとスタンドオフとの連絡悪く，皆落して機を逸す。ただ15分敵に再三の不正行為あり，それがなければトライは確実と思はれたのでレフェリーよりトライを宣告された3点を得たのみで終る。

—桃陰—

12・25 8 $\left(\begin{smallmatrix} 8 & \text{—} & 5 \\ 5 & \text{—} & 16 \end{smallmatrix}\right)$ 21 北野中（花園）定期戦

レフェリー伊藤氏

天王寺	吉	遠	村	西	佐	伊	太	鹿中飯	塩	砂	中	四	武
	松	山	上	原	野	藤	田	木西田	田	田	川	方	田
	FW							HB	TB		FB		
北	仲	松	福	高	中	筒	池	平	浅	須	相	山	上
野	尾	本	井	原	田	井	浦	田	海	賀	原	内	原

前半24分北野のスタンドオフ切れ込んでトライ，ゴール成る。27分敵ゴール前にドリブルで進み伊藤蹴り込み，太田飛び込んでトライ。

後半5分自陣25ヤードのルーズより鹿子木，塩田と廻り，塩田得意のライン際をタックルをはずし80ヤード独走トライ。飯田のゴ

ル成るも、11分、14分、25分、28分と続けてトライされ敗れた。

—桃陰—

昭和13年度

4・24 9—24 同志社中（花園）

9・4 17—11 桃陰ラグー（花園Ⅱ）

9・11 43—0 京都一中（寺田）

9・14 61—0 興国商（花園Ⅱ）

9・18 11—8 神戸二中（神戸市民）

9・25 31—5 京都三中（寺田）

10・9 19—0 村野工（神戸市民）

●全国大会大阪紀和予選

11・6 第1回戦 勝 京阪商（花園）

11・13 第2回戦 5 $\left(\begin{smallmatrix} 0 & 0 \\ 5 & 3 \end{smallmatrix}\right)$ 3 天理中（花園）

天王寺	渡松久村遠伊鹿	吉河柴	松中久長広
	辺下保上山藤木	田合垣	岡西田沖岡
	FW	HB	TB FB
天理	滝高片江井上佐沢	三阪	二大阿阿
	本橋山草原野藤田	谷本	金階江部部

11・20 準優勝戦 16—0 大阪中（花園Ⅱ）

11・27 優勝戦 6 $\left(\begin{smallmatrix} 0 & 0 \\ 6 & 8 \end{smallmatrix}\right)$ 8 北野中（花園）定期戦

天王寺	渡松久村遠伊鹿	吉河柴	松中久平広
	辺下保上山藤木	田合垣	岡西田田岡
	FW	HB	TB FB
北野	若仲福中丸平中葛	相竹	佐上山師大
	林尾井田井田谷野	原内	藤原内尾塚

前半（0—0）略。

後半開始後、反則あり、中西左タッチに出す。ラインアウトはスクラムとなり、柴垣、松岡を廻りコーナースタック目がけて左隅に最初のトライを挙ぐ。ゴール成らず。敵キックオフはセンタースクラムとなり、此の時天中反則あり、敵のキックはオープンにとび、遠山受け河合突込み割るかと見えたがルーズ、敵突込んで来るを鹿子木見事なるタックルで防ぐ。反則あり敵右タッチへ出し、ライン

アウトよりルーズとなり、天中ボールを河合、柴垣、久保田、中西松岡と、大きく左隅のフラッグ前に廻り遂にトライ、ゴール成らず。敵キックオフ遠山とり2人ぬいたがタックルされルーズ、此の時天中に反則あり、敵のオープンキックを河合落してスクラム、ボールは敵に出たが、伊藤出すぎてペナルティを与う。敵ゴールを狙えば横木スレスレに入る。中西キックオフは直接タッチ、センタースクラムなり敵にボール廻る。敵のキックは広岡の前でバウンドし、広岡つかまんとして振り返る瞬間、上原ダッシュして之をつかみ、平田の最後のタックルはゴール前のルーズとなり、敵ハーフはピックアップ気味にてボールをとり、パスすれば、スタンドオフ倒れこんでトライす。敵コンパートを河合等懸命のチャージも及ばずゴール成る。天中何くそとがんばって中央に帰らんとする時、阿部(吉蔵)レフェリーは遂にタイムアップの笛を吹く。呼鳴制覇成らんとして一瞬にして破る。

一桃陰一

昭和14年度

●近畿中等選抜大会(花園)

4・23 第1回戦 8——6 神戸一中

4・25 第2回戦 14——9 天理中 レフェリー白崎氏

4・29 優勝戦 9——20 神戸二中

中	若	中	鎌	久	伊	松	村	渡	柴	山	平	久	長	榎
西	山	村	苅	保	藤	下	田	部	垣	岡	田	田	沖	並
FW					HB			TB			FB			

9・3 43——3 桃陰ラグークラブ(花園Ⅱ)

9・17 0——21 神戸二中(花園Ⅱ)

9・24 花園ラグビー場開場10周年記念招待

3——6 同志社中

キックオフ午後1時30分、我等名バックロー伊藤を失ひ(海軍甲種飛行練習生入校)ここに京都東海の覇者、同志社中に敗れたりといえど、敵にゆるせしトライはなく、我が挙げしトライは1、結局ペナルティの差にて敗れしは唯一の慰めとする所なり。

中	柴	中	久	若	多	松	伊	村	柴	榎	平	久	長	前
西	垣	村	保	山	田	下	藤	田	垣	並	田	田	沖	田
(弟)					(兄)									
FW					HB			TB			FB			

10・8 6—16 神戸一中(花園)

11・12 第1回戦 19—0 和歌山中（花園Ⅱ）

11・19 第2回戦 24—0 大阪中(花園Ⅱ)

11・23 準優勝戦 6—13 天理中(花園)レフェリー小杉氏

降雨後のこととてグランドコンディション悪く、実力発揮し得ずよく敵を圧迫せしも無念の敗をとる。メンバーは次の北野戦と同じ。

12・25 0——13 北野中（花園）定期戦

天王寺	久保	柴垣(弟)	中山	若山	西岡	伊藤	松下	松田	村田	渡部	柴垣(兄)	榎並	平田	久保田	長沖	前田
	FW							HB		TB			FB			
北野	石外	若林	劉	中山	日野	金子	清水	橋本	竹林	竹内	和田	權野	中沢	川本	片山	

天理戦より臥薪嘗胆の1ヶ月を経て宿敵北野を撃破せんものと花園原頭に向を進めたるが、敵は予選優勝の余勢を駆って堂々と対戦し、天中フィフティーンはよく戦ひ終始敵を陣内に圧迫せしも走力に打ちまかされ終に玉碎す。トロフィーは敵に帰し、我等1カ年の苦心精進も破れ去れり。

一桃陰一

昭和15年度

●近畿中等学校選抜大会（花園）

4 · 21 第1回戦 14—6 同志社中

4・25 第2回戦 16—12 北野中

西柴中若鎌多中松 浅渡 白田伊前小
村垣村山苧田西下 岡部 江村藤田 林

FW HB TB FB

4・29 優勝戦 20—0 京都一商

9・1 勝 桃陰ラガークラブ（花園）

9 · 8 23——3 同志社中 (花園)

9・22 35——0 神戸二中(神戸商大)

9 · 29 8——8 天理中 (花園Ⅱ)

●神宮大会予選第1回戦

10・6 6——11 天理中（花園）

10・10 31——0 大阪高校（大高）

●全国大会大阪紀和予選

11・3 第1回戦 25——0 和歌山商（花園Ⅱ）

11・10 第2回戦 22——0 浪華商（花園）

11・17 準優勝戦 $3\left(\begin{smallmatrix} 0 & \text{---} & 6 \\ 3 & \text{---} & 10 \end{smallmatrix}\right)16$ 北野中 定期戦

天王寺	西村	柴垣	井上	中村	鎌苅	大國	中西	松部	渡田	前田	宮脇	伊藤	田村	白江	小林
	FW						HB		TB			FB			
北野	杉野	石外	早田	日野	佐藤	福井	劉本	橋本	藤林	川田	山本	山谷	片山	小松	

春に折角勝利を得るも肝腎の定期戦に破れ積年の雪辱ならず。

我が校には闘士若山、浅岡の欠場ありともよく健闘す、前半に於ては敵を圧迫しつつも反則あり、敵ゴールを狙えば二つとも成る。後半天中の意気上り、最初に敵の虚を衝いて松下見事トライ。小林ゴール狙えば惜くも成らず。その後敵に2ゴールされてタイムアップとなる。

—桃陰—

昭和16年度

4・3 44——0 神戸二中（花園）

●近畿中等学校選抜大会（花園）

4・25 第1回戦 58——0 同志社中

4・27 準優勝戦 9——3 天理中

4・29 優勝戦 3——5 村野工

西村	内海	佐木	中村	多田	井上	前田	若山	浅岡	柴垣	伊藤	渡田	北村	川本
	FW						HB		TB			FB	

6・21 29——0 八尾中（八尾中）

9・7 26——17 桃陰ラグークラブ（花園Ⅱ）

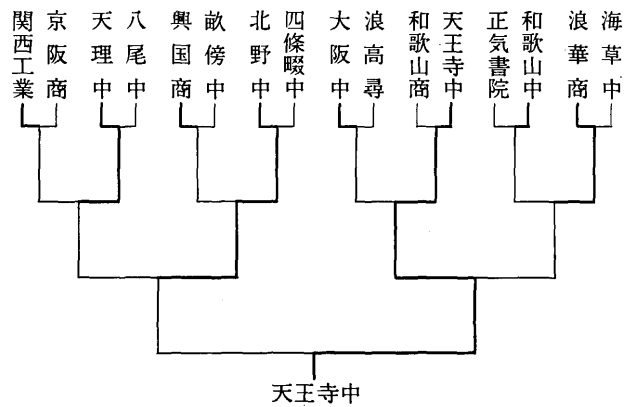
9・14 30——0 関西工業（花園）

●明治神宮大会大阪地区予選（花園）

9・23 $6\left(\begin{smallmatrix} 0 & \text{---} & 3 \\ 6 & \text{---} & 5 \end{smallmatrix}\right)8$ 北野中

10・12 35——5 浪華商（花園Ⅱ）
 10・17 33——16 大阪高校（大高）
 11・1 負 大阪商大（大商大）

●全国大会大阪紀和予選



11・9 第1回戦 43——0 和歌山商（花園Ⅱ）
 11・16 第2回戦 40——0 大阪中（花園Ⅱ）
 11・23 準優勝戦 46——5 浪華商（花園）
 11・30 優勝戦 11 $\left(\begin{smallmatrix} 3 & 3 \\ 8 & 0 \end{smallmatrix}\right)$ 3 北野中（花園）定期戦

後記全国大会と同じメンバー、但しF B新村に代り前田が入る。

遂に5年振りに我等は北野に勝てり、相手はノートライ。我が挙げしトライは3、此処にトロフィーは5年ぶりに、優勝旗は7年ぶりに我が手に帰せり。

●第24回全国大会、関西大会（南甲子園）昭和17年

1・2 第1回戦 13 $\left(\begin{smallmatrix} 10 & 13 \\ 13 & 0 \end{smallmatrix}\right)$ 13 愛媛師範 抽籤勝ち

レフェリー細田氏

烈風下に陣した我軍の不利は不覚の得点を奪はれ、敵は勢に乗じてT Bの活躍自在に1ゴール、1トライと重ねて前半13——0と引離した。然るに後半に入るや風を背にして天中の追撃目覚しく、長蹴を以てゴール前に押し、20分にしてよく2ゴール、1トライを挽

回同点となる。引分けとなったが抽籤の結果出場権を得た。

1・3 第2回戦 16 $\left(\begin{smallmatrix} 0 & \text{---} & 3 \\ 16 & \text{---} & 0 \end{smallmatrix}\right)$ 3 京都三中 レフェリー細田氏

両軍とも闘志旺盛終始熱戦をつづけ、後半中頃までは勝敗の逆賭を許さなかった、前半敵の1トライを後半追風を利し盛に高蹴をあげ、よくFWが球を得たのと相俟って我軍は9分、13分と2つのゴールに遂に勝敗は決った。

1・5 準優勝戦 18 $\left(\begin{smallmatrix} 5 & \text{---} & 0 \\ 13 & \text{---} & 0 \end{smallmatrix}\right)$ 0 天理中 レフェリー白崎氏

我軍はキックにパスに見事な出来栄えを見せ、敵は全く闘志を欠き、タックル決らず敗退した。

1・7 優勝戦 3 $\left(\begin{smallmatrix} 0 & \text{---} & 0 \\ 3 & \text{---} & 12 \end{smallmatrix}\right)$ 12 北野中

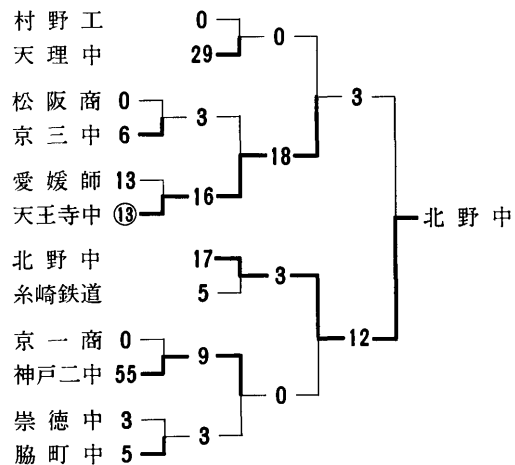
レフェリー阿部(吉)氏

此の日、中村早くも傷つき天中の意気稍々振はず、しかしよく0—0で前半を終った。後半に入り敵の攻撃激しく、天中は北江の1トライのみで敗れた。

天王寺	白内佐西中井若	柴浅伊川渡田北新
江	海々木村村上	垣岡藤本部村江村
	FW	HB TB FB
北	小名井小早福中	小片石山中渡奥
野	竹和上倉田井山	松山川根村辺田

此の年宿敵北野と3度戦いながら、定期戦に勝ったのみで、縮小全国大会とは云え難敵愛媛師範を屠り乍ら、決勝戦で又々屈す。全国優勝の悲願今一步にして達し得ず。

—桃陰—



一高校大会50回の歩み一

9・27 優勝戦 11 $\left(\begin{smallmatrix} 3 & \text{—} & 0 \\ 8 & \text{—} & 8 \end{smallmatrix}\right)$ 8 神戸二中

大阪大会 1 回戦より代表決定までの 8 日間に、実に 6 試合という
強行日程を、メンバー（後記）の変更もなく戦いぬき、殊に対神戸
二中戦は前半左ウイング野口が、トライ直後顔を蹴られ歯を折損退
場という負担にもめげず、悪戦苦闘 14 人で頑張り貴重な勝利を得
た。

●明治神宮大会

京 城 師 範 (朝鮮) 5
 天 王 寺 中 (近畿中部) 16
 中 学 修 猷 館 (九州)
 保 善 商 (関東) 10
 秋 田 工 (北海道, 東北)
 奉 天 一 中 (満洲) 11
 台 北 工 (台湾)
 崇 德 中 (四国, 中国) 12

5
 16
 21
 16
 10
 11
 0
 12

天王寺中

10・30 第1回戦 $16\left(\begin{smallmatrix} 5 & \text{---} & 5 \\ 11 & \text{---} & 0 \end{smallmatrix}\right)5$ 京城師範（早大東伏見）

レフェリー清瀬氏

10・31 第2回戦 $21\left(\begin{smallmatrix} 5 & \text{---} & 0 \\ 16 & \text{---} & 10 \end{smallmatrix}\right)10$ 修猷館中 (早大東伏見)

レフェリー大西氏

11・1 優勝戦 16 $\left(\begin{smallmatrix} 5 & \text{---} & 0 \\ 11 & \text{---} & 0 \end{smallmatrix}\right)$ 0 台北工業（神宮外苑）

レフェリー北島氏

中 内 佐 若 衣 井 伊 柴 西 浅 野 伊 北 川 新
村 海 木 山 川 上 藤 (弟) 垣 條 岡 口 (兄) 江 本 村
FW HB TB FB

誰の目にも不利と予想された第1戦、京城師範の第1回目のスクラムが、実に低くビシッと決った時、我々は勝てたと思った。第2戦の修猷館では、敵左センターの堀に再三抜かれ、後半は薄氷を踏むおもいを味ははされたが優勝戦は比較的楽に戦い、在京の諸先輩の熱狂的な応援にこたえることが出来た。

又学校では在校生が校門に並び、拍手を以て迎えられ、全校生の
の前で田中栄一郎校長から晴れがましい表彰を受けた。尚キャプ
テン柴垣は此の時を最後に海軍兵学校入学のためチームから去り、新
しいメンバーで次の全国大会の予選にそなえた。

朝日新聞——天王寺中学は京城師範を、台北工業は秋田工業と、こ

遂に、遂に夢にまで見た念願の全国制覇成る。感激に部員一同
 唯涙。願れば此の一年、寝食を忘れて我々と行動、苦楽を共にし、
 熱心な御指導をいただいた阿部幸作、田中健三、村田義幸各氏をは
 じめ、多くの先輩諸氏に御礼の言葉もなし。

年頭の酷寒、烈風下の南甲子園、FBの新村などユニホームを二
 枚着ても未だふるえている始末。前半対スコアで行けば必ず勝てる
 といった自信は、トスに勝っても風下をとれとまでなり、終始主導
 権を握った試合運びでフィフティーンの意気いやが上にも挙る。

此の年終始此の陣容でのぞみ、全国大会第2戦以降は野口に代り
 長谷沢が左ウイングに入った。他に機に応じてFWに西原、入貝、
 TBに島崎が出場している。

昭和18年度

以下何れも時日不明

●ジュニア大会

3 — 3 浪高尋（抽選勝）

6 — 11 浪速商

菅	藤	森	高	谷	田	八	浜	入	古	福	島	篠	伊	竹
谷	村	田	瀬	沢	中	鳥	田	貝	沢	井	崎	原	柴	内
FW								HB		TB		FB		

48 — 0 八尾中

45 — 0 城東工

36 — 5 城東工

10 — 23 大阪商大

11 — 10 北野中

●大阪大会（花園）

9・24 108 — 0 鳳中

9・25 35 — 3 八尾中

9・26 15 — 10 浪速商

9・27 10 — 12 北野中（定期戦）

谷	中	高	中	衣	西	伊	入	西	野	長	北	島	篠	新
沢	田	瀬	村	川	原	藤	貝	條	口	谷	江	崎	原	村
FW								HB		TB		FB		

大東亜戦争次第に激しく、大阪大会のみ開催されたが、全国大会は中止される。

戦争により全試合なし.

天王寺 和田 野尻 竹谷 加藤 西川 八鳥 門戸 足立 屋敷 伊藤 尼藤 北子 川江 野

FW HB TB FB

北野 大岩 田中 木村 中村 日高 比山 松本 石外 今永 石田 大塚 富上 堀平 下野 平原

桃陰ラガークラブ 40——13 六稜ラガークラブ

昭和21年度

5 · 11——0 神戸二中(西宮)

●国体大阪地区予選

9・22 38——0 淀川工（中舌島）

9・24 $3\left(\begin{array}{c|c} 3 & 8 \\ \hline 0 & 5 \end{array}\right)_{13}$ 北野中 準優勝戦 (檀原)

●全国大会，大阪紀和予選

山 水 中 — 6 —
 三 尾 商 0 — ⑥ — 0 —
 京 阪 商 18 —
 北 野 中 — 10 —
 四 條 啜 中 22 — 9 — 37 —
 和 歌 山 中 0 —
 天王寺中 — 30 —
 八 尾 中 3 — 0 — 45 —
 淀 川 工 0 —
 天 理 中 —
 海 草 中 15 — 0 —
 千 里 山 中 0 —

天王寺中

11・24 2回戦 30 $\left(\begin{smallmatrix} 9 & \text{---} & 0 \\ 21 & \text{---} & 0 \end{smallmatrix}\right)$ 0 八尾中(天中)

12・1 3回戦 45 $\left(\begin{smallmatrix} 23 & 0 \\ 22 & 0 \end{smallmatrix}\right)$ 0 海草中 (花園)

12・8 優勝戦 $11\left(\begin{smallmatrix} 8 & \text{---} & 0 \\ 3 & \text{---} & 5 \end{smallmatrix}\right)5$ 北野中(花園)定期戦

天王寺	太田	和田	竹岡	加藤	西川	八鳥	竹尾	門戸	奥井	伊藤	北江	尼子	高岡	
	FW						HB		TB			FB		
北野	上田	白小路	藤倉	清水	田中	比山(兄)	松本	石外	下平	沢田	中谷	石田	大塚	富山(弟)

●第26回全国大会（昭和22年）

1・2 第1回戦 33 $\left(\begin{smallmatrix} 15 & \text{---} & 0 \\ 18 & \text{---} & 0 \end{smallmatrix}\right)$ 0 成城尋 レフェリー高島氏

天王寺 太田 和竹 橋西八 門高奥伊北尼野
田中田谷 岡 田川鳥 戸岡 井藤江子 尻
FW HB TB FB

1・4 第2回戦 $0\begin{pmatrix} 0 & \text{---} & 0 \\ 0 & \text{---} & 3 \end{pmatrix}3$ 福岡中 レフェリー白崎氏

天王寺	太田	和田	和谷	竹岡	橋田	西川	八鳥	竹尾	門戸	奥井	伊藤	北江	尼子	高岡
	FW				HB		TB			FB				
福岡	藤田	池田	原井	大島	高橋	水田	宮上	土屋	麻生	志波	宗	古川	加藤	竹尾

秋田工	0	}	0	}	0	}	福岡中
函館市中	6						
松山中	3	}	⑩				
神戸二中	14						
成城尋	0	}	0	}	6	}	福岡中
天王寺中	33						
同志社中	3	}	3				
福岡中	36						

昭和22年度

●第1回国民大会予選

大阪予選（選抜）

9・14 6 — 0 京阪商（あやめ池）

近畿予選

9・23 第1回戦 8 — 16 京都一中（西宮Ⅱ）

10・5 44 — 0 鳳中

●全国大会予選

大阪予選Bブロック

11・8 1回戦 6 — 6 大阪中（反則勝）（市立運動場）

11・16 2回戦 12 — 6 富田林中（天中）

11・23 優勝戦 $6 \begin{pmatrix} 3 & 0 \\ 3 & 3 \end{pmatrix} 3$ 北野中（西宮Ⅱ）

なお、A、Cブロック優勝校四條畷中、淀川工と近畿予選に出場。

近畿予選

11・30 1回戦 $0 \begin{pmatrix} 0 & 5 \\ 0 & 5 \end{pmatrix} 10$ 京都一中（西宮Ⅰ）

野尻	片上	永本	川本	竹谷	橋田	藤崎	和	村田	高岡	吉田	浜田	屋敷	天名	内神
FW				HB		TB			FB					

この年四條畷中優勝全国大会に出場。

12・25 5 $\left(\begin{smallmatrix} 0 & \text{---} & 8 \\ 5 & \text{---} & 13 \end{smallmatrix}\right)$ 21 北野中 定期戦 (西宮Ⅱ)

天王寺	野	片	鎌	竹	奥	橋	藤	和	村	高	吉	浜	屋	天	内
	尻	上	刈	谷	野	田	崎	田	田	岡	田	口	慶	名	神
	FW					HB		TB			FB				
北野中	勢	藤	松	上	大	多	比	白	三	下	柏	三	大	宮	遠
	川	倉	宮	田	島	田	山	路	野	平	本	国	塚	地	山

昭和23年度

●ジュニア大会 (中学3年生まで)

1・21 3 — 0 城東工 (淀川工)

1・25 34 — 0 鳳中 (淀川工)

2・1 9 — 0 北野中 (淀川工) レフェリー長谷川氏

2・8 0 — 11 四條畷中 準優勝戦

5・9 16 — 22 山城高 (あやめ池)

●国体大阪予選 (藤井寺Ⅱ)

9・12 15 — 6 城東工

9・19 19 — 29 八尾高

●全国大会予選

不戦勝 和泉高

47 — 0 工大附高

53 — 8 富田林高

0 — 5 淀川工

12・25 8 $\left(\begin{smallmatrix} 5 & \text{---} & 3 \\ 3 & \text{---} & 0 \end{smallmatrix}\right)$ 3 北野高 (西宮) 定期戦

レフェリー杉本氏

天王寺	片	岡	岩	小	高	橋	和	加	北	青	吉	屋	阪	松	山
	上	田	井	竹	津	田	田	藤	垣	井	田	慶	名	口	岡
	FW					HB		TB			FB				
北野	加	西	井	勢	大	小	比	松	三	三	木	堀	青	和	伊
	野	納	田	原	川	島	崎	山	宮	野	国	村	田	山	達

昭和24年度

●近畿大会予選 (藤井寺)

1・16 25 — 0 鳳高

1・25 不戦勝 堺工

1・29 6—11 四條畷高

●天理教体育大会（天理）

4・24 12—6 天理高

岩岡	藤千	木山	伊片	竹青	北大	阪松	山
井田	井崎	下崎	藤上	尾井	垣石	口岡	本
FW				HB	TB		FB

3・5 0—12 山城高（京大）京大主催招待試合

6・中旬 0—21 村野工（西宮Ⅱ）

●全国大会予選（花園Ⅱ，Ⅰ）

11・6 53—8 山本高

11・13 14—0 布施工

11・20 $8\left(\begin{smallmatrix} 8 & 0 \\ 0 & 3 \end{smallmatrix}\right)3$ 四條畷高

11・27 15—0 八尾高

12・4 $16\left(\begin{smallmatrix} 6 & 0 \\ 10 & 5 \end{smallmatrix}\right)5$ 淀川工（大阪優勝戦）

12・11 $6\left(\begin{smallmatrix} 0 & 5 \\ 6 & 0 \end{smallmatrix}\right)5$ 桐蔭高（大阪和歌山地区優勝戦）

12・25 $12\left(\begin{smallmatrix} 3 & 0 \\ 9 & 0 \end{smallmatrix}\right)0$ 北野高（西宮）定期戦

レフェリー矢島氏

天王寺	藤岩	千木	片伊	矢岡	竹青	北山	阪松	古
井井	井崎	下上	藤島	田尾	井垣	本口	岡川	
FW				HB		TB		FB
北勢	山山	井井	上上	加比	斉三	鶴茂	小駒	永
野川	元元	下下	原林	島納	山藤	国田	幾柳	沢田

●第29回全国大会（西宮）昭和25年1月

福岡高	19	}	9	}	3	}	秋田工高
久居東高	0						
村野工高	19	}	6	}	14	}	
高崎高	3						
秋田工高	33	}	19	}	14	}	
鳴門高	0						
天王寺高	20	}	3	}	14	}	
大淀高	9						

1・1 $20\left(\begin{smallmatrix} 11 & 3 \\ 9 & 6 \end{smallmatrix}\right)9$ 大淀高

1・3 3 $\left(\begin{smallmatrix} 0 & 6 \\ 3 & 13 \end{smallmatrix}\right)$ 19 秋田工高

天王寺	藤井	岩井	千崎	木下	片上	山崎(兄)	伊藤	岡藤	竹尾	青井	北垣	山本	阪口	松岡	山崎(弟)
	FW						HB		TB			FB			
秋田工	保坂	鈴木	大木	長山	北坂	原島	今野	加賀(谷婿)	船木	今村	栗田	今木	加賀(谷良)	出雲	熊谷

準決勝予想一力の秋田工に対して洗練された天王寺のこの一戦は、超高校的な見ごたえのある好試合となろう。秋田は一人一人に馬力もあり、ハウ・ツウ・プレー・ラグビーも心得ているだけに、なかなか手強いところがあるが、一方天王寺もFWとバックスの調和が適度に保たれているうまい味のあるチームだ。第一日の試合にでも凄味にかけるといふ戦前の予想に反して、執拗な大淀高にぶつかって行った気魄は高く評価されてよいものだった。秋田の馬力に押切られることは先づあるまい。といえFWでは秋田に多少の有利が考えられるものの、バックスの攻撃力に幾分の強味を持つ天王寺がチャンス如何に生かして行くかで試合は面白くなる。—毎日新聞—
第1回戦のFBは古川が出場。

昭和25年度

●近畿大会予選（花園）

- 1・29 60—0 生野高
- 2・5 17—3 三島野高
- 2・12 46—0 香里高
- 2・26 優勝戦
- 9—3 四條畷高

●近畿大会（花園）

- 3・26 3—0 村野工
- 3・29 17—3 西京高
- 4・2 優勝戦
- 32—8 池田高

●関西7人制大会

- 4・30 勝 八尾高
- 〃 優勝戦 負 村野工

●国体予選（花園）

9・10 17—5 大手前高

9・17 6—6 淀川工 反則一つ多く惜敗

10・7 59—0 山城高

10・14 58—0 神戸高（花園）定期戦

10・26 48—0 天理高（天理）

天王寺	藤井	木村	千崎	木下	久保	岩井	伊藤	岡田	竹尾	青井	北垣	山本	阪口	松岡	山崎
	FW							HB			TB			FB	
天理	井野	生田	増田	須藤	高島	上田	金星	上月	砂永	川	岡田	櫛引	藤原	大坂	浜口

●全国大会予選

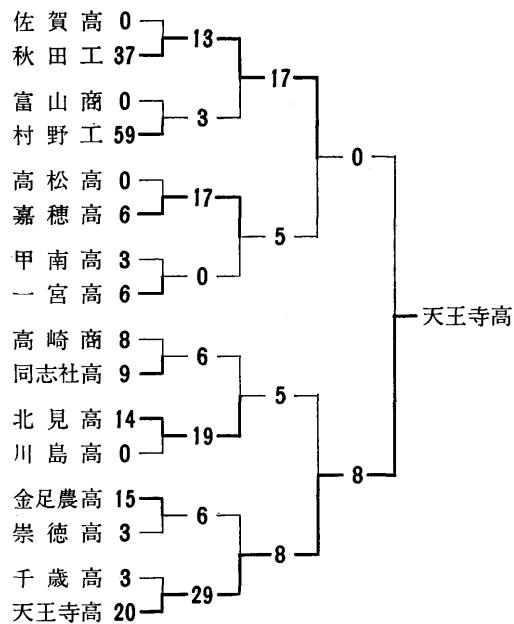
11・12 54—0 城東工

11・19 26—0 淀川工

11・26 21—8 四條畷高

12・3 21—3 北野高 優勝戦兼定期戦 レフェリー丸岡氏

●第30回全国大会（西宮）昭和26年1月



1・1 第1回戦 20(8—3)3 千歳高

1・3 第2回戦 29(20—0)6 金足農高

天王寺FWは強力金足FWにルーズにかけて、7分の球を支配した。金足は天王寺のピカーSO青井にマークしすぎ、HB竹尾へのチャージをおこたったすきを、竹尾にぬかれつづけて2トライを奪われ、ついで青井以下バックスの好走にトライを重ねられた。金足のFWは意外に元気なく、タックルの弱さが目立ち天王寺のルーズの姿勢も高かった。

—スポーツニッポン—

1・5 第3回戦 8 $\left(\begin{smallmatrix} 8 & \text{---} & 0 \\ 0 & \text{---} & 5 \end{smallmatrix}\right)$ 5 北見高

試合開始とともに一たん自陣にせめこまれた天王寺は、ただちに押し返して北見陣内に攻めこみ、4分北見ゴール前のスクラムから球を得たHB竹尾が、ブラインドサイドの右TB北垣にパス、北垣タッチ際を突進、巧みなスワープに北見のタックルをはずし右隅にトライ、率先よいリードを奪った。北見FWはルーズのつつこみにもあまり鋭さを見せず、バックの悪さを天王寺FWにしばしば割って出られた。天王寺HB団は北見の攻撃をタッチキックにかわし、かえって地域を獲得、20分北見ゴール前のルーズから天王寺球を得て、SO青井サイドをつきゴール前にタックルされながら強引にとびこみトライ（ゴール）と得点を重ねた。後半北見FWは見ちがえる闘志で天王寺陣にせまり、9分天王寺のキャリバックからスクラムトライ（ゴール）して8—5とせまり13分、17分の2度の天王寺のトライチャンスを好タックルにはばめば、23分天王寺も北見のWTB根本が力走あわやトライせんとするをHB竹尾の必死のタックルにとめるなど全くの白熱戦となった。一中略一天王寺のFWはよく強力北見FWに対等の戦いをつづけ、ルーズではより多くの球を優秀な自軍バック스에供給したことがこの日第一の殊勲で、北見は前半の立上りの鈍さと、バックスの持ちすぎが目立つたものの敗て悔ない敢闘ぶりであった。

—スポーツニッポン—

1・7 優勝戦 8 $\left(\begin{smallmatrix} 3 & \text{---} & 0 \\ 5 & \text{---} & 0 \end{smallmatrix}\right)$ 0 秋田工高

天王寺	藤井	矢島	千崎	木下	久保	岩井	伊藤	岡田	竹尾	青井	北垣	山本	阪口	松岡	山崎
	FW						HB		TB			FB			
秋田工	佐沢	吉川	笹岡	長坂	北島	今野	石黒	高橋	船木	加藤	戸藤	早祭	今福	出村	佐藤

微風ながら風下に陣した秋田は元気一杯のFWがルーズに優勢を
たもち、より多くの球をとりバックスは深いラインを敷いたTBの
パスで攻撃をくりかえせば、天王寺はFWのドリブルで攻めかえ
し、10分ごろからは秋田の紺藍、天王寺の黒黄のユニフォームとも
に泥一色の泥寧戦をつづけた。19分秋田陣に攻めこんだ天王寺はS
O青井がバントした球を、右WTB松岡が大きくドリブルにひっか
け、インゴールに追っておさえて最初のトライをあげた。奮起した
秋田は一気に攻めこみ、24分天王寺ゴール直前のラインアウトから
球を得たFWが飛びこんだが、ゴールラインにとどかずピックアップ
して機を逸した。後半に入り秋田FWはなおも威力を発揮。タイ
ト、ルーズで殆んど球をとり、バックスは懸命のTBパスをくり返
したが水気でボールが重く、たのみの戸祭、出雲の両WTBまで球
がわたらず、かえって天王寺のFWドリブルとバックスのキックで
かえされていた。危くにげこんだと思われた天王寺は、タイムア
ップ直前秋田陣10ヤードのタイトから、右WTB松岡が猛進。パッ
クロー伊藤にパス、ゴール直前にタックルされたがつづくルーズから木
下球をひっかけてとびこみとどめのトライをあげた。両チーム実力
の差はわずかだが、雨天のグラウンドコンディションを考えずTB
パス一本の単調な攻撃をくりかえした秋田に対し、FWの大きなド
リブルとバックスの好キックで攻めた天王寺の作戦が勝因であっ
た。

—スポーツニッポン—

昭和26年度

●近畿大会予選

1・28 37—0 農芸高

2・ 5—11 富田林高

●国体予選

5・ 第4回戦 6—3 布施高

準々優勝戦 6—0 夕陽丘高

準優勝戦 3—10 天理高

10・ 0—59 山城高（京大）

10・ 3—28 天理高（天理）

全国大会予選は前年度優勝のため出場せず。

12・25 3—6 北野高（西宮）定期戦

●第31回全国大会（西宮）昭和27年

1・1 0 $\left(\begin{smallmatrix} 0 & \text{---} & 0 \\ 0 & \text{---} & 6 \end{smallmatrix}\right)$ 6 高松高 レフェリー柳氏

吉 木 田 渡 上 松 永 矢 山 下 永 染 山 松 岩
村 村 中 辺 野 岡 田 島 崎 平 島 谷 本 原 井
FW HB TB FB

体の大きい高松に、天王寺FWはシャープな突込みで堂々と対抗、バックスのスピードある動きをともなうて、二度高松ゴール直前に攻めながら反則をおかしてトライを逸したのが敗因、このあと依然天王寺バックスの攻撃がつづいたが、体力の差で高松の防禦線を突破出来ず、後半ドリブルをまじえた高松FWの攻撃は天王寺を押しはじめ、二つのPGをあげて前年覇者を降した。

—スポーツニッポン—

昭和27年度

不明 勝 山城高（京大農学部）

●近畿大会予選

不明 14—11 淀川工

●近畿大会（西宮）

3・21 12—0 高田高（奈良）

3・30 準優勝戦 14 $\left(\begin{smallmatrix} 9 & \text{---} & 0 \\ 5 & \text{---} & 5 \end{smallmatrix}\right)$ 5 光風高（和歌山）

試合馴れた天王寺はFW、バックスともじょじょに光風を押し、快勝した。光風はせっかく出足のいいディフェンスラインもタックルのタイミングが悪いため、天王寺に割られるところとなり、アタックもコースをもっと縦にとらねばならない。

4・6 優勝戦 3 $\left(\begin{smallmatrix} 3 & \text{---} & 5 \\ 0 & \text{---} & 11 \end{smallmatrix}\right)$ 16 芦屋高（兵庫）

両軍新編成のメンバーながら高校戦にふさわしい、元気一ぱいの好ゲームであった。5分芦屋は立上りバナ天王寺をゴール前にゆさぶって、敵ミスに乘じ1ゴールをあげれば、天王寺また反撃に出て芦屋ゴール前にねばり1トライを返し、5—3のまま後半に入った。芦屋FWの好ヒールは12分見事なTBパスからウイング池田の快走でトライ、その後勢を得た芦屋はジリ押しに天王寺を圧迫して、2トライを追加してここに優勝をなしとげた。天王寺は最初の起遅れと気合負けが敗因となったが、HBのパスがいま一步の確実性が望まれる。

—新聞評—

吉	寺	田	柴	上	杉	井	宮	下	松	上	山	永	平
村	下	中	田	野	東	田	上	城	平	原	西	本	島
FW					HB		TB		FB				

4・16 23—0 桃山高

●関西7人制大会

4・29 優勝戦 0—0 淀川工A（両校優勝）

6・14 36—0 大手前高

6・19 6—9 四條畷高

6・28 29—0 鳴尾高

吉	寺	田	柴	上	杉	真	井	宮	下	松	上	山	永	平
村	下	中	田	野	田	鍋	上	城	平	原	西	本	島	河
FW					HB		TB		FB					

●国体予選（花園）

8・31 30—0 桃山高

9・9 14—11 布施高

9・14 15—3 都島高 大阪代表決定戦

9・21 $11\left(\begin{smallmatrix} 0 & 12 \\ 11 & 6 \end{smallmatrix}\right)18$ 芦屋高 近畿代表決定戦

9・28 8—3 同志社高（同大岩倉）

10・25 $9\left(\begin{smallmatrix} 0 & 3 \\ 9 & 6 \end{smallmatrix}\right)9$ 神戸高（西宮）定期戦

11・2 $52\left(\begin{smallmatrix} 24 & 0 \\ 28 & 0 \end{smallmatrix}\right)0$ 天理高（花園Ⅱ）定期戦

●全国大会予選（花園）

11・15 20—3 桃山高 3回戦

11・23 0—5 大手前高 準々優勝戦

12・21 $13\left(\begin{smallmatrix} 0 & 8 \\ 13 & 0 \end{smallmatrix}\right)8$ 北野高（花園Ⅰ）定期戦

吉	松	田	柴	上	杉	真	井	宝	青	松	下	山	永	平
村	宮	中	田	野	田	鍋	上	田	井	原	平	本	島	河
FW					HB		TB		FB					

前半約10分足らずして1トライ、1ゴールとリードをゆるし、しかも敵地寸前に迫りながらも力及ばず、かえってより返され8—0と大差をつけられた。しかし後半、前半の粗雑なFWのパスは見られず、又バックの守りも堅く、応援団のわき上るなかを永島の独走に最初のトライをあげ、下平のペナルティキックはゴールポスト真中に決り差を3点にちぢめ、更に敵の反則に乗じて、これ又下平のゴールで同点にこぎつけた。天高の意気益々あがり、決定的な1トライ、1ゴールを追加した。

一天高新聞一

昭和28年度

●近畿大会予選代表決定戦

0 $\begin{pmatrix} 0 & 0 \\ 0 & 12 \end{pmatrix}$ 12 布施工高

●国体予選（花園）

9・6 56—0 池田高

9・13 9—3 都島工

9・20 8 $\begin{pmatrix} 0 & 3 \\ 8 & 0 \end{pmatrix}$ 3 淀川工

9・2 0—0 布施高 優勝戦 抽選負

朝からの雨の為泥ねい戦となる。試合は白熱の様相を呈し、前半
我が校がやや押し気味であったが得点とならず終了。後半は開始直後
から布施高の優勢で、ボールは殆んど天王寺陣25ヤードライン内を
出なかったが、我が校は次第にもり返し相手ゴールライン近く迄攻め
込んだが及ばず、遂に無得点のままタイムアップとなった。

—天高新聞—

10・4 8 $\begin{pmatrix} 3 & 0 \\ 5 & 6 \end{pmatrix}$ 6 天理高（花園）定期戦

10・7 46 $\begin{pmatrix} 18 & 3 \\ 28 & 0 \end{pmatrix}$ 3 夕陽丘高 定期戦

●全国大会予選

第2回戦 8—9 池田高

12・6 27—3 北野高（西宮）定期戦

吉	松	寺	石	杉	井	宮	藤	宝	青	松	上	白	下	平
村	宮	下	井	田	上	城	田	田	井	村	西	神	平	河
FW							HB		TB			FB		

昭和29年度

●近畿大会予選

1・23 17—6 池田高

1・31 不戦勝 泉大津高

2・7 27—0 北野高

2・16 8—8 四條畷高（抽選勝）

2・21 16—0 生野高 優勝戦

●近畿大会（西京極）

3・21 17 $\left(\begin{smallmatrix} 11 & \text{---} & 3 \\ 6 & \text{---} & 9 \end{smallmatrix}\right)$ 12 嵯峨野高

前半1分、24分に得意のスリーコーターパスでトライ。7分、21分にはルーズの球をFWが割って出てトライ。後半も開始早々トライを挙げ、前半に1ペナルティゴールを許しただけで楽勝を思わせた。しかし後半大柄選手の多い相手に次第に疲れを見せ、好タックルでよく防ぎつつも3トライを挙げられ混戦となるも、前半の大量点で押し切った。

3・25 3 $\left(\begin{smallmatrix} 3 & \text{---} & 6 \\ 0 & \text{---} & 0 \end{smallmatrix}\right)$ 6 天理高 準優勝戦

田	片	長	藤	川	藤	中	小	宝	青	奥	白	福	大	菅
中	野	浜	井	口	田	畑	西	田	井	村	神	本	脇	田
FW								HB		TB		FB		

FWの弱体で完敗を喫した。開始後10分天王寺ゴール前混戦から天理トライ、その後も天理は押しに押し、塚本欠場のFWの弱体化から球を取れず苦戦した。然し17分天理のゴール前に押し返し反則によりペナルティゴールに成功大いに意気あがったが、FWの弱さはかくし切れず、20分又々ゴール前の混戦からトライを重ねられ6—3と引き離される。後半風上にやや押し気味に試合をすすめるも、FW戦に導かれ惜しい試合を失った。 一天高新聞—

●国体予選（花園Ⅱ）

5・5 20—3 三島野高

5・9 5 $\left(\begin{smallmatrix} 0 & \text{---} & 0 \\ 5 & \text{---} & 0 \end{smallmatrix}\right)$ 0 四條畷高 大阪予選優勝戦

5・23 19 $\left(\begin{smallmatrix} 11 & \text{---} & 3 \\ 8 & \text{---} & 0 \end{smallmatrix}\right)$ 3 桐蔭高 阪和地区優勝戦

6・5 27—0 夕陽丘高 定期戦

●国民体育大会（札幌）

8・22 22 $\left(\begin{smallmatrix} 11 & \text{---} & 0 \\ 11 & \text{---} & 6 \end{smallmatrix}\right)$ 6 保善高

FWはタイト、ルーズスクラム共に押され苦戦するもバックスの活躍にて大勝する。

8・24 8 $\left(\begin{smallmatrix} 8 & \text{---} & 0 \\ 0 & \text{---} & 3 \end{smallmatrix}\right)$ 3 松山商高

15分自陣10ヤード付近ルーズよりこぼれ球を白神ひろい福本にパス、福本そのまま走り切ってトライ、ゴール成る。25分25ヤード付近ルーズより白神、福本、大脇と渡り右隅にトライ成る。後半は5分頃まで相手陣、以後は殆んど自陣で試合をし、12分頃にはゴール

前に追い込まれ1トライをゆるした。その後もしばしばピンチにおち入ったが、どうにか切りぬけ事なきを得た。

8・26 $0\left(\begin{smallmatrix} 0 & \text{---} & 0 \\ 0 & \text{---} & 13 \end{smallmatrix}\right)13$ 秋田工高

田 長 川 片 黒 藤 小 塚 宝 青 奥 白 福 大 菅
中 浜 口 野 野 田 西 本 田 井 村 神 本 脇 田
FW HB TB FB

前半5分にして既にゆさぶられること数回に及ぶも、味方の好ディフェンスによりこれ以後の敵のアタックをくい止めた。その後ハーフタイムまで自陣25ヤードライン付近で一進一退する。後半開始後直ちに攻めこまれ、前半中頃より目立ったFBの拙守を徹底的につかれ、相手は大きなキックで着々前進を重ね、6分ゴール前ラインアウトより、13分スクラムトライ、18分ゴール前より福本が抜かれる等立てつづけに3トライを与えた。前半よかったタックルも生彩を欠きTBのディフェンスも充分でなかった。だが平均体重で2貫余の優位を誇る秋田を3トライに抑えたことは賞讃されてよい。

—天高新聞—

この結果Bブロック2位の成績を残した。

9・19 $8\left(\begin{smallmatrix} 8 & \text{---} & 3 \\ 0 & \text{---} & 3 \end{smallmatrix}\right)6$ 兵庫高 定期戦

10・10 $8\left(\begin{smallmatrix} 0 & \text{---} & 0 \\ 8 & \text{---} & 0 \end{smallmatrix}\right)0$ 天理高 定期戦

●全国大会予選（花園Ⅱ）

11・3 不戦勝 和泉高

11・7 18—3 三島野高

11・23 9—0 同志社香里

11・27 16—0 淀川工

12・2 $11\left(\begin{smallmatrix} 8 & \text{---} & 0 \\ 3 & \text{---} & 3 \end{smallmatrix}\right)3$ 四條畷高（花園Ⅰ）優勝戦

12・27 $25\left(\begin{smallmatrix} 14 & \text{---} & 0 \\ 11 & \text{---} & 0 \end{smallmatrix}\right)0$ 北野高 定期戦 レフェリー野本氏

●第34回全国大会（西宮）昭和30年

1・1 第1回戦 $14\left(\begin{smallmatrix} 9 & \text{---} & 8 \\ 5 & \text{---} & 0 \end{smallmatrix}\right)8$ 北見北斗高

レフェリー長谷川氏

正午天王寺のキックオフで開始。相手陣内25ヤードのスクラムつぶれてルーズとなり左に廻し、WTB奥村左隅にとび込み2分にして先制点を挙げ。北見も5分センタースクラムよりのボールをHB

がパント、之を敵WTB、天王寺バックス陣のけん命のタックルをはずして中央にトライ、ゴール成り逆にリードされた。しかし天王寺もFWが押されながらもボールを五分五分にとり、盛にバックスを走らせて終始攻勢に試合をすすめ10分北見にピックアップあり、ペナルティゴール成功、再び13分SO青井の右中間トライで9—5とリードした。北見も25分バック스에まわったボールを右センターが天王寺TB陣を抜いて独走ポスト直下にトライ、コンバート成らず。後半天王寺はFB菅田の負傷等で受身だった。スクラムは平均体重18貫の北見に押しまくられたが、ルーズスクラムは四分六分で優位だった。タッチキックで前進23分天王寺のパントを北見FB処置をあやまる間に一瞬とび込みトライ、決定的なゴールを挙げた。

一天高新聞一

1・3 第2回戦 $3\left(\begin{smallmatrix} 3 & \text{---} & 11 \\ 0 & \text{---} & 3 \end{smallmatrix}\right)14$ 福岡高 レフェリー丹羽氏

天 王 寺	田	長	川	大	黒	藤	塚	小	宝	青	奥	白	福	大	菅
	中	浜	口	西	野	田	本	西	田	井	村	神	本	脇	田
	FW					HB		TB		FB					
福	広	野	高	久	山	金	植	山	梅	白	山	小	高	井	行
岡	田	山	良	垣	下	子	木	田	津	垣	崎	林	谷	上	徳

試合開始後、福岡はドリブルで激しく攻めこみ、天王寺ゴール前ラインアウトから先制のトライをさる。これに対して天王寺はFWがボールを殆ど取られながらもバックスの早いつぶしで、福岡バックスを完全に封じ、徐々に前進福岡陣内25ヤードで相手の反則ありペナルティゴール成功、その後福岡のドリブル、パント等の多彩な攻撃に16分、25分にトライを許し、後半天王寺パントにより攻めこみ、再三チャンスを迎えながらFB菅田の負傷退場後は防戦一方にまわった。

一天高新聞一

昭和30年度

●近畿大会予選（花園Ⅱ，Ⅲ）

- 1・30 20—0 八尾高
- 2・6 9—3 勝山高
- 2・13 26—0 扇町高
- 2・20 9—0 夕陽丘高 優勝戦

●近畿大会（和歌山県営）

3・20 47 $\left(\begin{smallmatrix} 18 & \text{---} & 0 \\ 29 & \text{---} & 0 \end{smallmatrix}\right)$ 0 大津東高（滋賀代表）

3・24 6 $\left(\begin{smallmatrix} 3 & \text{---} & 0 \\ 3 & \text{---} & 0 \end{smallmatrix}\right)$ 0 向陽高（和歌山代表）

3・27 5 $\left(\begin{smallmatrix} 0 & \text{---} & 8 \\ 5 & \text{---} & 3 \end{smallmatrix}\right)$ 11 天理高（奈良代表）

阿	長	川	金	黒	大	藤	塚	松	佐	山	菅	大	塚	片
部	浜	口	森	野	西	井	(宗)	岡	野	鳥	田	脇	(光)	野
					FW		HB		TB		FB			

両軍闘志盛で反則の連続，しかし天理は早いつぶし，キック戦法で前半終始押し気味だった。天王寺は3分敵陣深く攻めこみトライ成るかに見えたが，オフサイドでものに出来ず。これに対し9分天理はTBパスを左にきめ，更に12分35ヤード上からPGを決め完全に天理のペースにまきこまれた。後半天王寺は奮起一番徐々に押しまくり，15分ルーズスクラムよりのFWパスでトライ，コンバート成功，その差1トライに迫ったが時すでに遅く，非力のバックスは勿論，FWでさえ天理の闘志に圧せられ20分にも決定的なトライをゆるした。

—天高新聞—

6・4 12 $\left(\begin{smallmatrix} 6 & \text{---} & 8 \\ 6 & \text{---} & 0 \end{smallmatrix}\right)$ 8 夕陽丘高 定期戦

●国体予選

9・ 2 回 戦 26—3 都島工

9・18 準優勝戦 0—0 四條畷高 抽選勝

9・ 優 勝 戦 負 淀川工

10・16 3—6 天理高（花園）

●全国大会予選

第1回戦 31—0 寝屋川高

第2回戦 41—0 近大附高

第3回戦 27—6 鳳高

準優勝戦 12—6 今宮高

優 勝 戦 3—3 四條畷高 抽選勝

12・25 14—0 北野高（西宮）定期戦

●第35回全国大会（西宮）昭和31年

1・1 第1回戦 0 $\left(\begin{smallmatrix} 0 & \text{---} & 3 \\ 0 & \text{---} & 9 \end{smallmatrix}\right)$ 12 保善高 レフェリー・国領氏

天王寺	藤井	長浜	川口	米田	黒野	大西	田中	金森	松岡	谷	横島	山鳥	佐野	植木	菅田
	FW					HB			TB			FB			
保善	中荒	前田	近	松永	片北	清水	金沢	指伊	岸藤	前田	石井				
	原	井	(文)	村	井	山岡	水沢	崎	藤	本	(勝)				

前半早くも2つの反則によりピンチを招き、5分左隅にトライされ3点のリードを許した。しかしその後は相手校有利に展開されながらも、FWがよく健闘、前半終了間際には保善陣内深く攻め入り長浜のトライ成るかに見えたが、はばまれ唯一のチャンスを逃した。後半天王寺はパントによりチャンスをつかみかけたが、惜しい所で反則がありことごとく機を逸した。6分にトライされてからFWが疲れを見せはじめ、15分スクラムトライを許すに至り勝敗は決した感があった。しかしチームの中心となる3年生片野、阿部、大脇の欠場、更にSO菅田の負傷いえず、FBにまわるなど、相当のハンディキャップにもかかわらず、大学級と定評のある保善FWに對してよく健闘した。

一天高新聞一

昭和31年度

●近畿大会予選（花園）

- 1・29 14—0 同志社香里
- 2・2 3—3 淀川工 抽選負
- 4・22 6 $\left(\begin{smallmatrix} 0 & 0 \\ 6 & 0 \end{smallmatrix}\right)$ 0 兵庫高（西宮）定期戦
- 6・2 23—0 夕陽丘高（中百舌鳥）定期戦
- 6・9 30—0 布施工（天高）
- 6・16 19—0 布施工（花園）
- 6・21 23—0 都島工（天高）
- 6・30 15—0 淀川工（花園）

●国体予選（花園）

- 9・9 51—0 桃山高
- 9・16 3—0 四條畷高
- 9・23 39—0 北野高
- 9・30 8 $\left(\begin{smallmatrix} 8 & 0 \\ 0 & 3 \end{smallmatrix}\right)$ 3 淀川工（優勝戦）

●第11回国体（神戸東遊園地）

10・28 8 $\left(\begin{smallmatrix} 3 & \text{---} & 6 \\ 5 & \text{---} & 12 \end{smallmatrix}\right)$ 18 保善高

内	金	三	米	黒	横	長	田	谷	松	井	佐	大	植	山
田	森	島	田	野	島	友	中	岡	本	野	西	木	中	
FW								HB	TB			FB		

開始直後のセンタースクラムをホイールして、ノーホイッスルで黒野独走トライする。あまり出足がよすぎたのか、前半のうちに6点を返され逆転される。後半一向に調子出ず、みるみる内に加点され、ノーサイド寸前に1ゴールを返すも無念の敗を喫す。

●全国大会予選（花園）

11・3 59—0 大阪高

11・11 72—0 城東工

11・18 71—0 興国高

11・23 11 $\left(\begin{smallmatrix} 3 & \text{---} & 3 \\ 8 & \text{---} & 3 \end{smallmatrix}\right)$ 6 四條畷高

12・2 8 $\left(\begin{smallmatrix} 5 & \text{---} & 3 \\ 3 & \text{---} & 0 \end{smallmatrix}\right)$ 3 淀川工高（優勝戦）

12・23 16 $\left(\begin{smallmatrix} 5 & \text{---} & 0 \\ 11 & \text{---} & 5 \end{smallmatrix}\right)$ 5 北野高（西宮）定期戦

●第36回全国大会（西宮）

12・30 第1回戦 6 $\left(\begin{smallmatrix} 6 & \text{---} & 10 \\ 0 & \text{---} & 3 \end{smallmatrix}\right)$ 13 北見北斗高

レフェリー—丹羽氏

天王寺	内	田	三	米	黒	横	長	金	谷	松	井	佐	大	和	植
	田	中	島	田	野	島	友	森	岡	本	野	西	崎	木	
FW								HB	TB			FB			
北北	曾	三	広	秋	岡	田	佐	渡	東	櫛	佐	西	武	坂	古
見斗	我	浦	沢	本	部	中	藤	辺		部	々	木	増	山	山

前半北見の佐々木が左隅にトライをあげれば、天王寺も5分に井本のトライを返し、北見は佐々木の独走で再び1ゴールを奪うと天王寺はまた佐野がPGをものにして、10—6と迫る接戦だった。後半天王寺は大西、植木のキックで北見のゴール前に迫ったが、今一步FWの押しが足らず、北見FWのドリブルにばん回され15分櫛部の突進から西増のトライ成って万事休し、体力の相違で惜くも退いた。

—毎日新聞評—

なお、この年より大阪地区より全国大会に2校出場、淀川工は1回戦で秋田工に敗れている。

昭和32年度

●近畿大会予選

- 1・27 勝 生野高
 2・ 負 四條畷高
 5・3 0—30 兵庫高（兵庫高）定期戦
 7・19 6—0 夕陽丘高（中舌島）定期戦

内田 三三 米松 長山 宝原 阪井 辻野
 田中 島島 田下 友森 鳥田 田本 本野 原
 FW HB TB FB

●国体予選

- 9・1 第1回戦 17—0 同志社香里
 9・8 第2回戦 $8\left(\begin{smallmatrix} 3 & 6 \\ 5 & 6 \end{smallmatrix}\right)12$ 四條畷高
 9・17 18—0 八尾高（天高）
 9・21 8—17 布施工（天高）
 9・26 19—3 都島工（天高）
 9・29 9—5 興国高（花園Ⅲ）
 10・3 12—0 今宮高（天高）
 10・13 $3\left(\begin{smallmatrix} 0 & 5 \\ 3 & 3 \end{smallmatrix}\right)8$ 北野高（西宮）定期戦
 10・26 28—5 生野高（天高）

●全国大会予選（花園Ⅱ，Ⅲ）

- 11・9 第2回戦 38—0 吹田高
 11・17 第3回戦 3—3 興国高 抽選勝
 11・23 準優勝戦 $0\left(\begin{smallmatrix} 0 & 5 \\ 0 & 10 \end{smallmatrix}\right)15$ 淀川工

内長 三三 福松 山田 山宝 伊阪 井辻 野
 田友 島田 島下 中中 鳥田 藤本 本野 原
 FW HB TB FB

他にTBに畠山らが出場。

昭和33年度

- 1・18 19—8 住吉商（天高）
 1・23 22—0 生野高（天高）

1・26 第1回戦 35—0 北野高
2・9 第2回戦 17—3 近大附高
2・16 第3回戦 31—0 住吉商
2・23 代表決定 0($\begin{smallmatrix} 0 & \text{—} & 6 \\ 0 & \text{—} & 6 \end{smallmatrix}$)12 四條畷高
4・24 22—8 桃山学院(天高)
5・11 18($\begin{smallmatrix} 13 & \text{—} & 0 \\ 5 & \text{—} & 3 \end{smallmatrix}$)3 兵庫高(花園Ⅱ)定期戦
5・17 13—16 桃山学院(天高)
6・7 23—3 夕陽丘高(中百舌鳥)定期戦
6・18 6—23 淀川工(淀川工)

9・1 第1回戦 14—11 桃山学院
9・7 第2回戦 12—20 興国高
9・20 41—8 同志社香里高（天高）
9・23 0—8 鳴尾高（天高）
9・27 24—8 池田高（池田高）
10・4 36 $\left(\begin{smallmatrix} 17 & 0 \\ 19 & 0 \end{smallmatrix}\right)$ 0 天理高（花園Ⅱ）定期戦
10・12 23 $\left(\begin{smallmatrix} 8 & 0 \\ 15 & 0 \end{smallmatrix}\right)$ 0 北野高（花園）定期戦

11・3	第2回戦	13—5	生野高
11・9	第3回戦	6—0	住吉商
11・16	準々決勝戦	18($\begin{smallmatrix} 9 & 0 \\ 9 & 5 \end{smallmatrix}$)5	北野高
11・23	準決勝戦 代表決定	8($\begin{smallmatrix} 3 & 3 \\ 5 & 0 \end{smallmatrix}$)3	淀川工
11・30	決勝戦	0($\begin{smallmatrix} 0 & 5 \\ 0 & 8 \end{smallmatrix}$)13	四條畷高

1・1 第1回戦 $0\left(\begin{smallmatrix} 0 & \text{---} & 5 \\ 0 & \text{---} & 0 \end{smallmatrix}\right)5$ 盛岡工高

天王寺	新里	森	山本	佐川	三島	和崎	福島	松下	山鳥	宝田	井本	伊藤	赤阪	阪本	泉
	FW							HB		TB			FB		
盛岡工	古館	田辺	伊五沢	高橋	佐々木	帷子	西川	菅原	熊倉	鈴木	秋元	伊藤	会田	亀ヶ森	工藤

418

を演じた。しかしキックの位置が悪かったり、惜しいパスミスなどが続いて、盛岡バックスの堅いディフェンスを破ることが出来ず、前半の1ゴールが返せなかった。 —毎日新聞—

この年、他にFWに清水、山中、TBに土居、松井らが出場。

昭和34年度

●近畿大会予選（花園Ⅲ，Ⅱ）

- 1・24 第1回戦 45—0 京阪高
 2・1 第2回戦 40—0 和泉高
 2・8 第3回戦 $3\left(\begin{smallmatrix} 3 & \text{---} & 3 \\ 0 & \text{---} & 6 \end{smallmatrix}\right)9$ 大商大附高
 5・9 16—3 鳳高（天高）
 5・17 $3\left(\begin{smallmatrix} 3 & \text{---} & 16 \\ 0 & \text{---} & 6 \end{smallmatrix}\right)22$ 兵庫高（甲南大）定期戦
 6・6 $18\left(\begin{smallmatrix} 3 & \text{---} & 3 \\ 15 & \text{---} & 3 \end{smallmatrix}\right)6$ 夕陽丘高（中百舌鳥）定期戦

三	田	椋	清	高	星	清	松	伊	市	庄	大	石	泉
島	森	中	本	水	橋	野	原	井	藤	川	野	橋	田
FW							HB		TB		FB		

- 6・13 3—11 桃山学院（天高）
 6・20 15—6 池田高（天高）

●国体予選（花園Ⅱ，Ⅲ）

- 9・6 第2回戦 23—6 茨木高
 9・13 第3回戦 5—5 大商大附高
 9・19 18—8 住吉商（天高）
 9・23 18—8 桃山学院（天高）
 9・30 5—14 布施工（布施工）
 10・3 $3\left(\begin{smallmatrix} 0 & \text{---} & 10 \\ 3 & \text{---} & 12 \end{smallmatrix}\right)22$ 天理高（花園Ⅱ）定期戦
 10・11 $13\left(\begin{smallmatrix} 8 & \text{---} & 3 \\ 5 & \text{---} & 3 \end{smallmatrix}\right)6$ 北野高（花園）定期戦

●全国大会予選（花園Ⅲ）

- 10・24 第1回戦 $6\left(\begin{smallmatrix} 3 & \text{---} & 3 \\ 3 & \text{---} & 13 \end{smallmatrix}\right)16$ 近大附高

大	清	水	高	三	清	星	松	伊	市	大	庄	大	泉
山	原	上	橋	島	森	水	野	井	藤	川	橋	野	本
FW							HB		TB		FB		

昭和35年度

以下日時不明

●近畿大会予選

3 — 14 四條畷高

●国体予選

6 $\left(\begin{smallmatrix} 3 & \text{---} & 3 \\ 3 & \text{---} & 5 \end{smallmatrix} \right)$ 8 生野高

●全国大会予選

第2回戦 9 — 0 同志社香里高

第3回戦 26 — 0 城東工

第4回戦 24 $\left(\begin{smallmatrix} 10 & \text{---} & 0 \\ 14 & \text{---} & 0 \end{smallmatrix} \right)$ 0 北野高

準優勝戦 6 $\left(\begin{smallmatrix} 3 & \text{---} & 5 \\ 3 & \text{---} & 3 \end{smallmatrix} \right)$ 8 四條畷高

以下定期戦

24 $\left(\begin{smallmatrix} 8 & \text{---} & 0 \\ 16 & \text{---} & 3 \end{smallmatrix} \right)$ 3 夕陽丘高 (天高)

24 $\left(\begin{smallmatrix} 8 & \text{---} & 3 \\ 16 & \text{---} & 3 \end{smallmatrix} \right)$ 6 兵庫高 (花園)

16 $\left(\begin{smallmatrix} 11 & \text{---} & 6 \\ 5 & \text{---} & 11 \end{smallmatrix} \right)$ 17 天理高 (花園)

10・16 12 $\left(\begin{smallmatrix} 6 & \text{---} & 5 \\ 6 & \text{---} & 10 \end{smallmatrix} \right)$ 15 北野高 (花園) レフェリー中島氏

大 石 水 渡 北 星 網 棕 松 赤 今 佐 河 市 樋

山 田 上 部 畑 野 本 本 井 阪 仲 木 野 川 口

FW

HB

TB

FB

昭和36年度

●近畿大会予選 (花園Ⅱ)

1・ 43 — 0 茨木高

1・ 45 — 0 住吉商

2・5 48 — 0 農芸高

2・12 0 — 3 北野高 (準優勝戦)

6・1 36 $\left(\begin{smallmatrix} 17 & \text{---} & 0 \\ 19 & \text{---} & 0 \end{smallmatrix} \right)$ 0 夕陽丘高 (天高) 定期戦

●国体予選

第2回戦 16 — 0 同志社香里

第3回戦 16 — 3 布施工

7・1 第4回戦 15 — 6 淀川工

9・9 優勝戦 $0\left(\begin{smallmatrix} 0 & \text{---} & 8 \\ 0 & \text{---} & 10 \end{smallmatrix}\right)18$ 四條畷高 (花園Ⅱ)

9・23 8—5 天理高 (天王寺)

10・7 $16\left(\begin{smallmatrix} 11 & \text{---} & 0 \\ 5 & \text{---} & 0 \end{smallmatrix}\right)0$ 北野高 (花園) 定期戦

レフェリー 高原氏

●全国大会予選

第5回戦 11—10 都島工

準優勝戦 0—14 興国高

河	辰	水	田	渡	石	大	星	室	佐	北	網	河	市	樋
原	巳	上	中	部	田	西	野	賀	々木	畑	本	野	川	口
FW								HB		TB		FB		

昭和37年度

●近畿大会予選

2・3 75—0 布施高

2・11 56—0 扇町商

2・17 36—6 都島工

2・22 5—25 淀川工

●国体予選

8・25 36—0 城東工

9・2 34—3 商大附高

9・8 6—11 四條畷高

10・13 $37\left(\begin{smallmatrix} 8 & \text{---} & 0 \\ 29 & \text{---} & 0 \end{smallmatrix}\right)0$ 北野高 (花園) 定期戦 レフェリー 南氏

●全国大会予選

11・4 第2回戦 33—0 吹田高

11・18 第3回戦 12—3 浪速高

11・25 準優勝戦 16—3 生野高

12・1 優勝戦 $9\left(\begin{smallmatrix} 3 & \text{---} & 0 \\ 6 & \text{---} & 6 \end{smallmatrix}\right)6$ 淀川工 大阪第二代表

田	宮	河	中	大	辰	奥	室	佐	大	網	河	岡	樋
中	城	原	堺	務	西	巳	沢	賀	々木	屋	本	野	井
FW								HB		TB		FB	

開始5分HB佐々木のハイパントは風にのり淀川陣深く入り、敵FBの僅かなミスの間にTB網本とびこんでポール際にトライ。その後もキック戦法を多用、トライチャンスも度々つかんだ。守って

は弱いといわれたバックローが淀工SOを完全にマーク、乗ずるすきを与えなかった。攻守共に圧倒的な試合運びを展開するも淀工の必死の防戦にはばまれ、得点出来ず前半終了した。後半風上の淀工はパントをあげてなだれこんで来たが、逆に天高はラインアウトから、網本が再びライン沿いに強引に走ってトライ、淀工も9分天高ゴール前のオフサイドからPGを決め、以後センターライン近くで一進一退がつづいたが、天高スクラムよりボールをまわし、ウイング岡井が敵ディフェンスを突破して決定的なトライを挙げた。淀工も1トライを返すも時すでにおそく、天高は念願の全国大会に出場権を獲得したのである。

—天高新聞—

●第42回全国大会（花園）昭和38年

1・1 第1回戦 12 $\left(\begin{smallmatrix} 3 & \text{---} & 0 \\ 9 & \text{---} & 0 \end{smallmatrix}\right)$ 0 日大鶴丘高

レフェリー大森氏

天王寺はFW、バックスともに優勢。とくにバックスはタイムリ一なパント、またはシザーズなどを織りこんであざやかな攻撃を示し、10分日大25ヤードルーズからSO佐々木がうまいフェイントで抜き左へパス、CTB網本の外にはいったFB樋口がトライ。後半は左右にゆさぶってWTB岡井、13分FWラッシュから辰巳、18分にはCTB網本がトライと一方的に得点した。日大はSOのパントがまともすぎ、FBあたりの球への弱さも天王寺の好目標にされた。

—毎日新聞—

1・3 第2回戦 11 $\left(\begin{smallmatrix} 11 & \text{---} & 0 \\ 0 & \text{---} & 0 \end{smallmatrix}\right)$ 0 北海高 レフェリー土井氏

前半中央ライン付近でもたついたあと、11分北海ゴール前のルーズからなだれこんで、奥沢がポスト左下にトライ（ゴール成る）。20分にはポスト前30ヤードのPGに成功、なおも24分にも河原がトライ。前半のリードが大きく物をいって、後半も北海の反撃を許さずノートライに押えた。

—天高新聞—

1・5 準々優勝戦 0 $\left(\begin{smallmatrix} 0 & \text{---} & 8 \\ 0 & \text{---} & 12 \end{smallmatrix}\right)$ 20 天理高 レフェリー南氏

天王寺	田	宮	河	中	大	辰	奥	室	佐	井	網	河	岡	樋
	中	城	原	堀	務	西	巳	沢	賀	木	上	本	野	井
	FW							HB		TB		FB		
	天	田	後	石	小	井	森	加	中	北	藤	北	栗	犬
理	仲	川	田	池	上	田	井	田	田	本	迫	栖	伏	田

●全国大会予選

第2回戦 勝 住吉商

第3回戦 13—13 淀川工 抽選負

昭和39年度

1・12 0—17 天理高（天理）

●近畿大会予選

1・ 第1回戦 12—0 大手前高

1・ 第2回戦 0—11 四條畷高

6・6 28 $\left(\frac{8}{20}—\frac{5}{3}\right)$ 8 夕陽丘高（天高）定期戦

9・26 6—40 天理高（花園）

10・17 20 $\left(\frac{15}{5}—\frac{8}{0}\right)$ 8 北野高（花園Ⅱ）定期戦

天王寺	橋田	武務	中山	宮根	河上	松井	橋本	矢野	広瀬	野中	倉本
	FW					HB		TB		FB	
北野	尾上	南好	加原	福本	岡本	小沢	岡本	田畑	野田	福坂	長光

●全国大会予選

第1回戦 55—0 此花工

第2回戦 14—6 繊維工

第3回戦 6—6 寝屋川高 抽選負

昭和40年度

●近畿大会予選

1・24 第1回戦 5—9 四條畷高（大阪城）

6・5 28—9 夕陽丘高（天高）定期戦

10・9 6 $\left(\frac{0}{6}—\frac{14}{5}\right)$ 19 北野高（花園）定期戦

天王寺	前田	久保	辻野	長野	山根	浜田	河上	佐藤	前田	得能	出水	矢野	倉内	中山
	FW					HB		TB		FB				
北野	尾上	南崎	瀬崎	福原	羽田	小沢	宮本	小沢	米沢	賀好	但馬	松本	長坂	和田

●全国大会予選

- 第1回戦 33—3 桜塚高（大阪城）
 第2回戦 19—5 近大附高（大阪城）
 第3回戦 3—0 花園高（大阪城）
 準優勝戦 9—42 浪商高（花園）

昭和41年度

●近畿大会予選

- 1・30 17—0 府立高専（大阪城）
 2・6 22—6 大和川高（大阪城）
 2・13 30—3 大成高（大阪城）
 2・20 12—9 浪商高（花園）
 2・27 8—19 四條畷高（花園）優勝戦

●国体予選

- 4・ 43—0 阪南高（花園高）
 5・ 61—0 福島商（大阪城）
 5・ 30—3 城東工（大阪城）
 9・ 負 興国高（大阪城）
 6・ 66—0 夕陽丘高 定期戦（天高）
 9・24 6 $\left(\begin{smallmatrix} 3 & \text{—} & 8 \\ 3 & \text{—} & 5 \end{smallmatrix}\right)$ 13 北野高 定期戦（花園Ⅱ）

天王寺	前田	久保田	辻野	長野	山根	浜田	吉村	佐藤	前田	得能	光林	倉内	淡路	中村	鈴木
	FW				HB		TB							FB	
北野	吉川	全田	瀬崎	宮本	瀬島	小沢	磯部	尾上	米沢	和田	但馬	岡本	堤森	内藤	

- 10・15 0—53 天理高（天理）

●全国大会予選

- 第1回戦 40—5 清水谷高（大阪城）
 第2回戦 22—10 大和川高（大阪城）
 第3回戦 25—3 箕面学園（大阪城）
 第4回戦 17—8 大阪商（大阪城）
 準優勝戦 3—35 淀川工（花園Ⅱ）

昭和42年度

●国体予選

- 5・7 福島商（大阪城）
 5・24 城東工（大阪城）
 6・4 68—0 夕陽丘高（天高）定期戦

●天高ラグビー部創部45周年記念

- 6・23 50—5 北野高（天高）
 9・17 19—13 天理高（定）（天理）定期戦
 9・23 34—3 北野高（花園Ⅱ）定期戦
 11・11 11—36 天理高（天理）

●全国大会予選（大阪城）

- 9・24 第1回戦 80—0 大阪高（花園高）
 第2回戦 27—6 上宮高（大阪城）
 第3回戦 27—8 今宮高（天高）
 第4回戦 25—15 八尾高（大阪城）
 11・23 準優勝戦 16—6 淀川工（花園Ⅱ）
 12・2 優勝戦 16 $\left(\begin{smallmatrix} 13 \\ 3 \end{smallmatrix} \right)$ $\left(\begin{smallmatrix} 3 \\ 0 \end{smallmatrix} \right)$ 3 布施工（花園Ⅰ）

駒久辻上川佐長佐藤得三鈴前肥	原
井保野山	口藤隆野隆原能宅木田田
	FW HB TB FB

此の予選の試合の中では、対淀川工業との試合が一番のヤマで、淀工は第一の優勝候補であるのでいかにしてこれを破るかの作戦をたてた。
 —天高新聞—

天王寺は8分得能、鈴木、肥田とわたったTBパスからのトライで先制した。13分は左右のうまいゆさぶりから三宅がポスト下に飛び込み（ゴール）、22分には右中間10ヤードのルースから長野がスクラムサイドを抜いてトライ（ゴール）と一方的に得点した。布施工は10分相手のキックをチャージしたFWが足にひっかけたあと、うまくフォローしてトライを返した。後半天王寺はルーズを殆んど取って優勢をつづけたあと、23分肥田がダメ押しのトライを加えた。
 —毎日新聞—

1・1 第1回戦 12 $\begin{pmatrix} 12 & 5 \\ 0 & 26 \end{pmatrix}$ 31 目黒高 レフェリー山口氏

キビキビとよく動き、持てる力を存分に出し切った好試合。天王寺が前半風上の利を生かして一方的に攻めた。１分に前田、９分に三宅が押えたほか、２ＰＧを加え、好タックルを決めて目黒に攻撃のスキを与えなかった。ＳＯ得能のキックを軸にFWが早い集散を見せバックもサインプレーを使うなど流れにのったあざやかな攻撃を見せた。目黒は７人FWが押負け得意のＴＢ攻撃がかけられずに苦しんだが、後半ＳＥ倭文、右ＷＴＢ由田の快走を中心にバックスが疲れの出た天王寺ディフェンスを破って連続トライ。体力にまさる目黒が前半とは逆に天王寺を圧倒した。――毎日新聞――

●近畿大会予選

第1回戦 68—0 桃山高
第2回戦 57—0 和泉高
第3回戦 11—8 八尾高
第4回戦 46—0 藤井寺工
第5回戦 14—0 大工大附高
優勝戦 3—17 近大附高 定期戦
6・5 84—0 夕陽丘高(天高)
9・28 11 $\left(\frac{3}{8}—\frac{3}{6}\right)$ 9 北野高(天高) 定期戦

レフュリー十岐氏

427

9・7 3—21 天理高(天理)

10・5 10—29 天理高(定)(天理) 定期戦

●全国大会予選

第3回戦 31—0 阪南高

第4回戦 勝 啓光学園

準々優勝戦 3—16 四條畷高

昭和44年度

●近畿大会予選(大阪城,花園Ⅱ)

50—0 大鉄高

28—0 住吉商

13—5 北淀高

2・15 23—3 北野高

負 啓光学園

6・ 35—3 夕陽丘高(天高) 定期戦

●国体予選

9・6 第二回戦 11 $\left(\begin{smallmatrix} 0 & 0 \\ 11 & 13 \end{smallmatrix}\right)$ 13 北野高

9・27 3 $\left(\begin{smallmatrix} 3 & 8 \\ 0 & 15 \end{smallmatrix}\right)$ 23 北野高(北野高) 定期戦

レフェリー入江氏

天王寺	岩本	辰巳	田中	松谷	南出	相楽	大島	寺島	植松	黒田	森崎	三宅	榎谷	山本	柴垣
	FW				HB		TB			FB					
北野	田中	三谷	稲村	中井	清井	磯部	平田	岡本	重松	林(正)	木下	林(隆)	井上	平賀	三条場

10・4 5—43 天理高(天理)

●全国大会予選

第3回戦 8—3 枚方高

第4回戦 3—3 啓光学園 抽選負

昭和45年度

1・17 19—14 布施工

1・31 19—8 花園高

1・25	第1回戦	55—5	桜塚高
2・8	第2回戦	35—11	茨木高
2・15	第3回戦	42—18	北野高
2・22	第4回戦	5—11	淀川工
4・21		21—8	阿倍野高
4・25		34—5	生野高

5・3	第1回戦	20——3	桃山高
6・7	第2回戦	31——5	清水谷高
6・14	第3回戦	9——22	浪商高
5・10	33——5	布施高	
6・4	47——0	夕陽丘高（天高）	定期戦
7・27	11——17	大口高（九州）	
9・5	41——16	工芸高	
9・12	24——6	布施工	
9・13	5——27	報徳学園	
9・19	勝	八幡工	
9・26	11——9	北野高	定期戦
10・3	13——19	淀川工	
10・10	負	羽咋工	

11 · 7 0——20 四條嘅高

谷 辰 丸 谷 犬 山 寺 松 植 柴 森 村 榊 吉
川 巳 橋 口 飼 本 島 谷 松 垣 崎 田 谷 村 陽

FW HB TB FB

3・ 第2回戦 勝 膳所高(滋賀)

430

天王寺 浜川 日野 丸橋 吉岡 吉岡 西尾 中井 鬼頭 五嶋 谷中 岩崎 中崎 今勢 能原 柴野 松田 山下

FW HB TB FB

北野 笠木 松本 西本 吉本 嶋田 石井 田中 鄭桑 大脇 伊藤 北藤 足浦 竹立 川口

10・29 6—24 天理高 (天理)

●全国大会予選

11・3 58—0 成器商 (大阪城)

11・11 26—6 浪速工 (大阪城)

11・19 11—3 枚方高 (花園Ⅱ)

11・25 優勝戦 $12\left(\begin{smallmatrix} 12 & \text{---} & 10 \\ 0 & \text{---} & 10 \end{smallmatrix}\right)20$ 浪商高 (花園Ⅱ)

昭和48年度

●近畿大会予選

1・28 62—0 吹田高 (花園高)

2・4 22—6 浪速高 (大阪城)

2・11 $0\left(\begin{smallmatrix} 0 & \text{---} & 6 \\ 0 & \text{---} & 18 \end{smallmatrix}\right)24$ 近大附高 (大阪城)

●国体予選 (大阪城)

5・5 29—0 富田林高

5・13 $9\left(\begin{smallmatrix} 6 & \text{---} & 6 \\ 3 & \text{---} & 14 \end{smallmatrix}\right)20$ 枚方高

6・2 $12\left(\begin{smallmatrix} 12 & \text{---} & 0 \\ 0 & \text{---} & 10 \end{smallmatrix}\right)10$ 夕陽丘高 (天高) 定期戦

●全国大会予選

9・15 55—6 寝屋川高

9・22 15—6 東住吉工

11・4 $4\left(\begin{smallmatrix} 0 & \text{---} & 8 \\ 4 & \text{---} & 14 \end{smallmatrix}\right)22$ 枚方高

9・29 $12\left(\begin{smallmatrix} 6 & \text{---} & 10 \\ 6 & \text{---} & 14 \end{smallmatrix}\right)24$ 北野高 定期戦

浜川 丸橋 吉岡 (卓) 吉岡 西尾 堀井 三輪 高橋 能勢 山崎 木村 今村 吉岡 (則) 金田 五熊

FW HB TB FB

昭和49年度

1・12 0—20 大工大高 (天高)

●近畿大会予選 (大阪城)

1・20 第1回戦 13——0 南寝屋川高

2・2 第2回戦 6——11 四條畷高

4・20 12——4 今宮高（天高）

4・28 30——22 阿倍野高（天高）

●国体予選（大阪城）

5・4 第2回戦 不戦勝 成器商

5・11 第3回戦 18——3 東住吉工

6・9 第4回戦 20——10 住吉商

6・15 準々優勝戦 3——43 大東高

6・5 15——0 夕陽丘高（天高）定期戦 レフェリー土岐氏

9・1 36——18 天理高（定）（天理）

9・7 0——20 阪南高 天高は2軍（天高）

9・15 39——6 花園高（花園高）

9・28 28——8 関学高（関学）

10・5 59——0 京大2軍（京大宇治）

10・10 0——36 天理高（天理）

●全国大会予選

9・2 第2回戦 134——0 大阪鉄道高（大阪城）

11・4 第3回戦 20——9 北野高（大阪城）定期戦

レフェリー土岐氏

11・9 第4回戦 41——10 大手前高（大阪城）

11・17 準優勝戦 4——28 大工大高（花園Ⅱ）

川 丸 木 三 梶 兩 堀 鎌 五 福 木 吉 金 戸
北 橋 原 好 野 角 井 田 牧 熊 岡 村 岡 田 村
FW HB TB FB

昭和50年度

1・11 30——3 泉尾高（天高）

1・18 12——4 住吉高（天高）

●近畿大会予選

1・26 第2回戦 27——0 高津高（大阪城）

2・1 第3回戦 15——7 東淀川高（大阪城）

2・9 準優勝戦 12——26 科学技術学園（大阪城）

3・14 26——8 阪南高（天高）

●国体予選（大阪城）

4・20 第1回戦 24—0 西野田工

5・3 第2回戦 31—10 東淀川高

5・10 第3回戦 3—23 淀川工

●天理50周年記念招待試合

4・29 4—58 天理高（天理）

6・7 $27\left(\begin{smallmatrix} 18 & 3 \\ 9 & 4 \end{smallmatrix}\right)7$ 夕陽丘高（天高）定期戦

9・1 46—3 住吉高（天高）

9・7 29—20 天理高（天理）（定）

9・27 $13\left(\begin{smallmatrix} 4 & 10 \\ 9 & 13 \end{smallmatrix}\right)23$ 北野高（北野）定期戦

レフェリー土岐氏

●全国大会予選（大阪城）

9・14 第1回戦 46—0 布施工

9・24 第2回戦 58—10 淀川商

11・1 第3回戦 26—14 東住吉高

11・9 準々優勝 12—66 浪商高

川 魚 木 三 梶 江 金 鎌 谷 両 福 木 城 戸 北
北 野 原 好 野 口 田 田 垣 角 岡 村 下 村 口
FW HB TB FB

昭和51年度

●昭和50年度近畿大会大阪府予選戦績

1・17 第1回戦 $66\left(\begin{smallmatrix} 28 & 0 \\ 38 & 0 \end{smallmatrix}\right)0$ 夕陽丘高（大阪城）

1・25 第2回戦 $108\left(\begin{smallmatrix} 56 & 0 \\ 52 & 0 \end{smallmatrix}\right)0$ 藤井寺工（枚方高）

1・31 第3回戦 $56\left(\begin{smallmatrix} 36 & 0 \\ 20 & 0 \end{smallmatrix}\right)0$ 清水谷高（大阪城）

2・8 準優勝戦 $75\left(\begin{smallmatrix} 28 & 4 \\ 47 & 0 \end{smallmatrix}\right)4$ 堺東高（大阪城）

2・15 優勝戦 $48\left(\begin{smallmatrix} 24 & 0 \\ 24 & 0 \end{smallmatrix}\right)0$ 都島工（花園Ⅱ）

川 野 竹 堀 梶 江 黒 宇 谷 両 河 沢 城 紅 西
北 村 原 本 野 口 田 野 垣 角 瀬 田 下 野 田
FW HB TB FB

●近畿大会（関学高）

3・20 第1回戦 $40\left(\begin{smallmatrix} 20 & 4 \\ 20 & 4 \end{smallmatrix}\right)8$ 兵庫高

3・22 第2回戦 $15\left(\begin{smallmatrix} 8 & 16 \\ 7 & 14 \end{smallmatrix}\right)30$ 伏見高

桃陰ラガー50年のあしあと

〔通〕 年度	回 (卒業)	校 長	部 長 (顧問)	監 督 コ ー チ	主 将	あ し あ と	対北野 定期戦 戦 績	卒業者(同期卒の クラブ在籍者) _____は故人
								創部以前の会員 (数字は卒業回数) <u>16奥村正也</u> <u>17井上二郎</u> <u>穂田幸太郎</u> <u>18村尾喜政</u> <u>19井上成一</u> <u>21谷口豊三郎</u> <u>石田啓次郎</u> <u>22巖 栄一</u> <u>寺 戸 猛 郎</u> <u>三 好 深 平</u> <u>23糸岡健司</u> <u>西 野 綱 三</u> <u>24上田直造</u>
〔1〕 大正 11年	25	小林吉人			杉村正二郎	春創部 大正12年3月初旬 初試合, 天中0—15大阪高校		<u>杉村(野村)正二郎</u> 阿 部 幸 作 松 川 秀 男 前 川 博 村 山 仁 <u>中 田 讓 二</u>
〔2〕 12年	26	小林吉人			田 中 伊 三	大正13年1月19日第 1回 北野中学定期戦	① 大正13年 1・19 11—3	荒 賀 嘉 也 井 上 進 沢田捨次郎 谷 口 敏 夫 齋 田 芳 春 松尾善二郎 柏 本 進 <u>植 田 光 次</u> <u>足立(三島)実</u>
〔3〕 13年	27	小林吉人			平 井 宏	大正14年1月第8回 全国大会準優勝	② 大正14年 1・15 21—11	<u>平 井 宏</u> <u>谷上(山村)茂</u> 長谷川(丹下)恭治 酒井文一郎 <u>前田(竹束)孟之祐</u> 田 中 伊 三
〔4〕 14年	28	小林吉人			富 田 孝 夫	大正15年1月第9回 全国大会, 2回戦 (準優勝戦)南満工に 敗る	③ 12・28 42—0	<u>富 田 孝 夫</u> <u>長沖(杉本)彰</u> 古市弥之助 松山凌三郎 <u>筧 潔</u> <u>浜 田 豊</u> <u>森 好 男</u>

〔通〕 年 度	回 (卒業)	校 長	部 長 (顧問)	監 督 コ ー チ	主 将	あ し あ と	対北野 定期戦 戦 績	卒業生(同期卒の クラブ在籍者) は故人
								<u>藤井三郎</u> <u>宮城(永井)嗣雄</u> <u>藤野隆三</u> <u>木村三郎</u> <u>山本嘉蔵</u> <u>足立卓夫</u> <u>隈田角治</u> <u>小島 稔</u> <u>山田孝雄</u> <u>富久和太郎</u> <u>荒賀(小幡)嘉生</u> <u>谷川猪三雄</u> <u>吉野次郎</u> <u>本阪武雄</u>
〔5〕 15年	29	小林吉人			糸岡康博	大正天皇崩御のため 全国大会中止	④ 11・20 22—3	糸岡康博 橋岡鎮平 <u>林 清一</u> 上田敏夫 山本善二郎 <u>四方恒次</u>
〔6〕 昭和 2年	30	岩橋繁雄	小畑与治郎		山田信雄	1月22日火災により 校舎全焼。1月25日 西区江ノ子島，旧大 阪府庁舎に仮校舎 3月16日天王寺区北 山町，大阪女子師範 学校跡に移転 昭和3年1月第10回 全国大会準優勝	⑤ 11・19 54—0	<u>山田信雄</u> <u>小野木唯夫</u> 馬 淵 碩 <u>岡本徳蔵</u> <u>梅沢不二男</u>
〔7〕 3年	31	岩橋繁雄	小畑与治郎		斉藤権三	昭和4年1月第11回 全国大会，2回戦 （準優勝戦）同志社 中に敗る	⑥ 11・11 32—0	<u>斉藤権三</u> <u>荒賀(山東)嘉樹</u> 神阪健夫 山内安朗 御牧元義 奥田致一 日尾惇雄 井上元幸 藤野重郎 <u>山本幸之助</u> <u>島田重道</u> 今西伊三郎 八木久米一
〔8〕 4年	32	岩崎繁雄	宮道 馨		田中健三	5月1日住吉区天王 寺町（現在地）に新 校舎落成移転	⑦ 11・20 16—6	田中健三 安部奈良夫 <u>青山克己</u> 橋 正雄 (林之助)

〔通年〕 年度	回 (卒業)	校 長	部 長 (顧問)	監 督 コ ー チ	主 将	あ し あ と	対北野 定期戦 戦 績	卒業者 (同期卒の クラブ在籍者) ——は故人
								桑原好夫(道竜) 村 山 潔 福 田 清 治 川 西 徳 滉 長岡(佐々木)祐三 中 野 正 美 滝 山 巖 伊 藤 英 夫
〔9〕 5 年	33	岩 橋 繁 雄	三 島 輝 員		伊 藤 泰 運		⑧ 11・23 23— 3	伊 藤 泰 運 浜 口 隆 四 方 康 一 正 野 虎 雄 長 尾 寿 三 豊 島 喜 林 山上寿栄夫(祐徳) 太 谷 正 宣 中 川 一 三 内 山 寧 隆 久次米恵三
〔10〕 6 年	34	岩 橋 繁 雄	三 島 輝 員	小 野 木 唯 夫	北 條 誠 司	昭和7年1月第14回 全国大会, 1回戦同 志社中に敗る 天中ラグビー部誌創 刊号発刊	⑨ 11・21 19— 5	北 條 誠 司 安 藤 直 政 潮 田 (広田) 郷 三 郎 林 武 夫 寺 戸 敏 郎 伊 藤 英 夫 塩 田 克 己 野 長 瀬 正 道 石 田 繁 次 郎 沖 田 万 年 石 田 寛 米 谷 (北野) 文 夫 伊 藤 隆 一 吉 田 晃 吉 田 和 雄 斧 原 通 夫 張 間 宗
〔11〕 7 年	35	岩 橋 繁 雄	三 島 輝 員	島 田 重 道	斉 藤 正 三		⑩ 10・17 11— 8	斉 藤 正 三 川上(井上)泰男 今 井 秀 典 尾 崎 博 加 藤 清 木 村 芳 生 志 度 忠 男 荒 賀 嘉 世 島 田 富 士 郎 斧 原 保 幸 村 山 純 (蔵本武秀) (鍛田信男)

〔通年〕 年度	回 (卒業)	校 長	部 長 (顧問)	監 督 コ ー チ	主 将	あ し あ と	対北野 定期戦 戦 績	卒業者 (同期卒の クラブ在籍者) は故人
〔12〕 8 年	36	岩橋繁雄	三島輝員	伊藤泰運	酒井竜平	昭和9年1月第16回 全国大会、1回戦京 都一商に敗る (抽せん)	⑪ 11・12 6—10	酒井竜平 黒田 進 高橋信之 <u>山脇重雄(一見)</u> <u>中村文雄</u> 中野忠一 木塚長敏 虎尾芳男 <u>竹島孝之輔</u> 竹内 弘 上田(中臣)国彦 <u>鍵谷 弘</u> 石塚(小倉)正三 広瀬正己 (松元秀明) (足立重雄) (豊田児三郎)
〔13〕 9 年	37	岩橋繁雄	三島輝員	阿部幸作	伊藤素義		⑫ 11・23 10—20	伊藤素義 高田善治 村田義幸 朴斗鉦(新井邦尚) 大橋良太郎(甫清) 宮崎義男 (高安敏雄)
〔14〕 10年	38	岩橋繁雄		斧原保幸	浦生安夫	桃陰ラグークラブ誕 生 桃陰ラグー誌発刊	⑬ 12・1 6—6	浦生安夫 浜口隆三 丹後康一郎 吉田俊夫 高井正一 <u>佐原博夫</u> <u>末永新二</u> <u>坂本義夫</u> 平川信二
〔15〕 11年	39	岩橋繁雄		伊藤英夫 阪口正二	小西信二	近畿選抜大会(第1 回)準優勝	⑭ 11・22 20—0	小西信二 <u>古沢潤三</u> <u>奥井一夫</u> 武田三郎 <u>塩見茂夫</u> <u>小西秀夫</u> 石井 一 <u>都志善治</u> (入貝四郎) (田中 進)
〔16〕 12年	40	田中栄一郎			太田俊治	近畿選抜大会1回戦 敗退	⑮ 12・25 8—21	太田俊治 <u>飯田彦弥</u> 塩田(亀田)梯三 西原篤介 佐野格次 吉松嘉寿夫 井上平治郎 砂田欣也

〔通年〕 年度	回 (卒業)	校 長	部 長 (顧問)	監 督 コ ー チ	主 将	あ し あ と	対北野 定期戦 戦 績	卒業生(同期卒の クラブ在籍者) は故人
								四方緑太郎 鈴木(矢刃)昌夫 水上哲三
〔17〕 13年	41	田中栄一郎	畑中 顯三		中西 一 雄	近畿選抜大会 1 回戦 敗退	⑩ 11・27 6—8	中西 一 雄 鹿子木 聡 村上進午 遠山克二 松岡和雄 河合信一郎 村田誠一郎 吉田 碩 川野祐造 武田 基 (大倉永吉) (中川 堯) (岸田幸一)
〔18〕 14年	42	田中栄一郎	畑中 顯三 栄国 保		柴垣 志 郎	近畿選抜大会準優勝	⑪ 12・25 0—13	柴垣 志 郎 伊藤和夫 久保藤男 長沖 通 村田保男 久保田 修 平田早苗 榎並 稔 由利和久 広岡正莊 渡辺誠夫 五島春夫
〔19〕 15年	43	田中栄一郎	栄国 保	木塚長敏	松下 哲三	近畿選抜大会優勝	⑫ 11・17 3—16	松下 哲三 鎌刈松男 中西良次 小林康男 大國丈夫 宮脇祖順
〔20〕 16年	44	田中栄一郎	北川 昂		中村 俊	近畿選抜大会準優勝 昭和17年1月、第24 回全国大会(関西大 会)準優勝	⑬ 11・30 11—3	中村 俊 渡部良太郎 西村祐一 田村芳之 白江甲子夫 前田 裕 布施 弘 横田周治 多田 勤 (寺島 寛)
〔21〕 17年	45	田中栄一郎	奈良 正一	阿部 幸作 田中 健三	柴垣 復 生	第13回明治神宮大会 優勝	⑭ 12・25	柴垣 復 生 若山克己

通年 年度	回 (卒業)	校 長	部 長 (顧問)	監 督 コ ー チ	主 将	あ し あ と	対北野 定期戦 戦 績	卒業者(同期卒の クラブ在籍者) は故人
				村田義幸	若山克己 (11月より)	昭和18年1月、第25 回全国大会優勝	26—0	浅岡 隆 伊藤康夫 内海 透 佐々木 登 川本(小沢)久義 樋口秀雄 井上敏夫 (木村博一) (甲佐史郎)
[22] 18年	46	田中栄一郎			伊藤寿夫	第2次世界大戦にて 全国大会中止	㉑ 9・27 10—12	伊藤寿夫 北江(三宅)哲夫 新村郁甫 中村滋男 衣川 豊 内海 宏 西条良次 野口治郎 長谷沢純正 中田 亘 奥井清治 西原郁夫 (宇野憲治) (大野善敏)
[23] 19年	47	田中栄一郎			高瀬末雄	全部の試合なし		高瀬末雄 入貝五郎 谷沢竜一 田中 宏 篠原 弘 菅谷昌信 藤村邦光 森田耕市
[24] 20年	48	田中栄一郎				3月空襲により工作 室、食堂、倉庫焼失 8月失火により運動 部室焼失、4月1日 学制変更により4年 制となる。(48回生 は、47回生と共に昭 和20年3月卒業) 8月15日終戦。12月 25日北野中学との定 期戦復活	㉒ 12・25 3—0	島崎秀雄 古沢啓三 藤井宗夫 吉田典三 (山鳥賢一) (田中(佐野)恒平)
[25] 21年	49	田中栄一郎	坂田貞男	柴垣復生	八鳥千年	4月1日学制、5年 制に復活	㉓ 12・8	八鳥千年 伊藤栄夫 尼子太造

通年 年度	回 (卒業)	校 長	部 長 (顧問)	監 督 コ ー チ	主 将	あ し あ と	対北野 定期戦 戦 績	卒業者(同期卒の クラブ在籍者) は故人
						昭和22年1月、第26 回全国大会2回戦 (準優勝戦)福岡中に 敗る	11— 5	岡 仁 詩 門戸良太郎 北江保肇 西川義行 太田幸夫 奥井 勇 田中宏一 足立俊樹 (東野和男)
[26] 22年	50	田中栄一郎			竹 谷 武	9月1日学制改革に 伴い、中学校第2、 3学年は新制中学校 の第2、3学年とし て本校に併設される	㊤ 12・25 5—21	高 岡 昭 竹 谷 武 野 尻 庄 蔵 村 田 収 足 立 秀 夫 浜 口 詮 内 田 実 藤 崎 正 治 天 神 保 彦
[27] 23年	50 高1	田中栄一郎 10月30日より 清水治郎	坂 田 貞 男		和 田 良 二	4月1日大阪府立天 王寺高等学校と改称 4月24日男女共学実 施にともない夕陽丘 高校と交流	㊤ 12・25 8— 3	和 田 良 二 屋 慶 名 政 男 加 藤 和 男 吉 田 尚 正 橋 田 勝 高 津 郁 男
[28] 24年	2	清水治郎			片 上 逸 磨	4月29日近畿ラグビ ー選抜大会は京都大 学主催で体育連盟規 定に抵触のため中止 昭和25年1月、第29 回全国大会2回戦(準 優勝戦)秋田工に敗る	㊤ 12・25 12— 0	片 上 逸 磨 岩 田 由 雄 山 崎 一 幸
[29] 25年	3	清水治郎	田 中 進	木村芳生 西川義行	青井達也	近畿大会優勝 昭和26年1月、第30 回全国大会優勝	㊤ 12・ 3 21— 3	青 井 達 也 伊 藤 道 夫 岩 井 敏 充 岡 田 力 木 下 伸 生 北 垣 敏 郎 久 保 正 治 阪 口 幹 夫 千 崎 泰 夫 竹 尾 靖 造 藤 井 剛 松岡(北森)道貫 古 川 保 山 本 直 樹

〔通年〕 年度	回 (卒業)	校 長	部 長 (顧問)	監 督 コ ー チ	主 将	あ し あ と	対北野 定期戦 戦 績	卒業者(同期卒の クラブ在籍者) ——は故人
[30] 26年	4	清水 治郎	田 中 進	村田義幸 岡 田 力	山 崎 茂	昭和27年1月、第31 回全国大会(前年度 優勝で出場)1回戦 高松高に敗る	㊸ 12・25 3—6	山 崎 茂 岩 井 勝 木 村 克己 染 谷 八朗 永 田 親 吾 松 岡 義 仁 矢 島 義 三 渡 辺 節 夫
[31] 27年	5	後 藤 安 久	田 中 進	岡 田 力 矢 島 義 三	山 本 正 行	近畿大会優勝	㊹ 12・21 13—8	山 本 正 行 上 野 宏 樹 柴 田 俊 夫 田 中 雄 雄 永 島 和 典 真 鍋 正 稔 松 原 啓 柳 広 治 (黒野晃治)
[32] 28年	6	後 藤 安 久	田 中 進 宇 野 憲 治	宇 野 憲 治 岡 仁 詩	吉 村 弓 雄	夕陽丘高校との定期 戦始まる	㊺ 12・6 27—3	吉村(米沢)弓雄 井上 洋一 石 井 寿 雄 上 西 利 弘 下 平 清 輔 杉 田 全 弘 寺 下 允 啓 平 河 幸 太 郎 松 宮 侑 松 村 竜 雄 宮 城 康 夫
[33] 29年	7	後 藤 安 久	田 中 進 宇 野 憲 治	内 田 実	青 井 賢 次	近畿大会2回戦(準 優勝戦)敗退 国体(札幌)Bプロ ック準優勝 昭和30年1月、第34 回全国大会2回戦福 岡高に敗る	㊻ 12・27 25—0	青 井 賢 次 田 中 啓 一 奥 村 道 明 小 西 将 白 神 陽 之 助 宝 田 雄 弥 中 畑 富 士 夫 福 本 幸 弘 藤 田 忠 久 細 木 真 介 (中川利恒)
[34] 30年	8	後 藤 安 久	田 中 進 宇 野 憲 治	鹿子木 聡	川 口 治 雄	近畿大会準優勝 昭和31年1月、第35 回全国大会1回戦保 善高に敗る 昭和30年3月桃陰ラ ガー1955年春季号発 行	㊼ 12・25 14—0	川 口 治 雄 阿 部 浩 三 大 脇 成 裕 片 野 二 郎 菅 田 一 博 塚 本 光 司 長 浜 友 雄 姫 岡 理 藤 井 功

〔通年〕 年度	回 (卒業)	校 長	部 長 (顧問)	監 督 コ ー チ	主 将	あ し あ と	対北野 定期戦 戦 績	卒業者 (同期卒の クラブ在籍者) ——は故人
〔35〕 31年	9	後藤安久	田中 進 宇野憲治	鹿子木 聡	黒野 昌 祥	国体(神戸)1回戦 保善高に敗る 第36回全国大会、1 回戦北見北斗高に敗 る	㊸ 12・23 16— 5	黒野 昌 祥 植木 宏 西直樹 大金 淳 弼 森 弘 佐野 靖 夫 堀川 尚 岡賢治 松岡 治雄 山鳥 直彦 横島 徹郎 鎌倉 徹郎
〔36〕 32年	10	後藤安久	田中 進 宇野憲治	鹿子木 聡	田中 宏 二		㊹ 10・13 3— 8	田中 宏 二 内田 修 孝 辻野 孝 典 長友 啓 一 野原 孝 一 島山 耕 治 三島 忠 一 米田 恭 司
〔37〕 33年	11	後藤安久	田中 進 宇野憲治	田中 啓 一	宝田 良 三	昭和34年1月、第38 回全国大会1回戦盛 岡工高に敗る	㊺ 10・12 23— 0	宝田 良 三 井本 和 彦 阪本 紘 弘 西川 敏 治 福島 宏 治 松下 忠 男 松山 忠 郎 山本 俊 郎 和崎 嘉 彦 栗井 一 夫
〔38〕 34年	12	後藤安久	田中 進 宇野憲治	青井賢次	伊藤 和 夫		㊻ 10・11 13— 6	伊藤 和 夫 大本 洋 清水 敏 行 清水 則 行 土居 昭 功 三島 功 二 森 卓 二 泉 博 友
〔39〕 35年	13	後藤安久	田中 進 宇野憲治	青井賢次	松井淳太郎		㊼ 10・16 12—15	松井淳太郎 赤阪 昇 今 仲 耕 三 大山 隆 之 椋本 宏 江崎洋二郎
〔40〕 36年	14	後藤安久	田中 進 宇野憲治	宇野憲治 田中 啓 一	石田 恒 彦		㊽ 10・ 7 16— 0	石田 恒 彦 市川 裕 一 大森 祥 光 北畑 英 樹 星野 正 巳 水上 義 久

〔通年〕 年度	回 (卒業)	校 長	部 長 (顧問)	監 督 コ ー チ	主 将	あ し あ と	対北野 定期戦 戦 績	卒業生 (同期卒の クラブ在籍者)
								渡 部 宏
〔41〕 37年	15	後藤安久	田中 進 宇野憲治	宇野憲治 田中啓一	佐々木慎太郎	昭和38年1月、第42 回全国大会3回戦 (準々決勝戦)天理高 に敗る	③⑨ 10・13 37— 0	佐々木慎太郎 河 野 巖 樋口(村野)敬治郎 網本 邦雄 奥 沢 正勝 辰巳忠一郎 室 賀 隆 大西 民生
〔42〕 38年	16	坪井 明	田中 進 宇野憲治	宇野憲治 田中啓一	田中淳之		④⑩ 9・28 16— 8	田中淳之 河原祥夫 岡井征彦 大屋清二 近 森 茂
〔43〕 39年	17	坪井 明	田中 進 宇野憲治	宇野憲治 田中啓一	堺 徹夫		④⑪ 10・17 20— 8	堺 徹夫 井上順之助 野中克己 宮城利行 中務哲郎 橋 温 広 瀬 武 松田芳信
〔44〕 40年	18	坪井 明	田中 進 宇野憲治	宇野憲治 田中啓一	矢野嘉庸		④⑫ 10・ 9 6—19	矢野嘉庸 橋本優也 河上彰 山崎関博 湯川 恭
〔45〕 41年	19	坪井 明	田中 進 宇野憲治	宇野憲治 田中啓一	山根共行		④⑬ 9・24 6—13	山根共行 浜田昭雄 前田保裕 倉内 隆 吉村公男
〔46〕 42年	20	中畔 肇	田中 進 宇野憲治	宇野憲治 田中啓一	得能敏夫	6・23 ラグビー部 創部45周年記念祭 (於天高) 昭和43年1月、第47 回全国大会1回戦目 黒高に敗る	④⑭ 9・23 34— 3	得能敏夫 佐藤 隆 久保田裕啓 長野俊一 前田真孝 西窪常孝 辻野雅三
〔47〕 43年	21	中畔 肇	田中 進 宇野憲治	宇野憲治 田中啓一	鈴木順一		④⑮ 9・28 11— 9	鈴木順一 川口 徹 駒井康雄 原 潤一郎 上山且芳

通年 年度	回 (卒業)	校 長	部 長 (顧問)	監 督 コ ー チ	主 将	あ し あ と	対北野 定期戦 戦 績	卒業生 (同期卒の クラブ在籍者)
								植松直道 佐藤隆 肥田善雄
[48] 44年	22	竹谷 新	田中 進 宇野憲治	宇野憲治 田中啓一	吉川史彦		④⑥ 9・27 3—23	吉川史彦 相楽 等 三宅正信 田中則男 黒田道夫
[49] 45年	23	竹谷 新	田中 進 宇野憲治		柴垣元太郎		④⑦ 9・26 11— 9	柴垣元太郎 松谷宏一 辰己敬三 大島 勲 植松善行 (榎並 収)
[50] 46年	24	竹谷 新	田中 進 宇野憲治		榊谷博明	近畿大会3回戦(準 優勝戦)敗退 国体(和歌山)プロ ック3位 昭和47年1月、第51 回全国大会2回戦佐 賀工高に敗る	④⑧ 10・ 9 78— 6	榊谷博明 森崎優二 吉川邦英 山本博史 陽 俊二郎 村田 茂 犬飼英之 肥田 茂 南出 聡 吉村多佳雄 寺島 優
[51] 47年	25	竹谷 新	田中 進 宇野憲治	松下忠男	丸橋広之	6月11日ラグビー部 創部50周年記念祭 (於天高)	④⑨ 10・14 30— 4	丸橋広之 柴原康雄 中西康雄 岩崎博之 日野孝三 中川 昭 鬼頭秀樹 谷口史朗 宮井康之
[52] 48年	26	竹谷 新	田中 進 宇野憲治	久保田裕啓	山下英明		⑤⑩ 9・29 12—24	山下英明 浜川 亘 高橋淳一 西尾明正 能勢和政 今西 勉 三輪英一 吉岡卓治 吉川卓司 (木村 充)
[53] 49年	27	竹谷 新	田中 進 宇野憲治 辻野雅三	辻野雅三	五熊宏明		⑤⑪ 11・ 4 20— 9	五熊宏明 堀井和彦 牧 良二 丸橋 茂

〔通年〕 年度	回 (卒業)	校 長	部 長 (顧問)	監 督 コ ー チ	主 将	あ し あ と	対北野 定期戦 戦 績	卒業者 (同期卒の クラブ在籍者)
								吉岡 則行 松野 英明
〔54〕 50年	28	明石立身	田中 進 宇野憲治 辻野雅三	辻野雅三	木村佳嗣		② 9・27 13—26	木村 佳嗣 木原成一郎 三好 徳弘 鎌田 泰彦 金田 武志 魚野 隆平 福岡綱二郎 戸村 久豊

黄塵はるか
天王寺中学校校歌

作詞 大鐘 義孝(中22回生)
石井 清()
浅沼 徹雄()
作曲 妹尾 繁松(旧 職員)



旧校歌

- | | | |
|--|--|---|
| 1, 黄塵はるか隔てたる
ここ城南の別天地
紅萌ゆる桃陰の
学びの園の露うけて
いそしむ我等若人の
胸は希望に充つる哉 | 2, 見よ純忠の赤心を
聞け愛国の旗風を
白雲なびく生駒山
理想の空を仰ぎつつ
久遠の岸を目ざす時
我等の意気の高き哉 | 3, ああ天中の健男児
若き血汐に燃ゆる時
図南の翼拡げては
天地広しと誰かいう
いざ踏いでん我が宇宙
いざや示さん我が校風 |
|--|--|---|

黄塵はるか

- | | | |
|--|---|--|
| 1, 黄塵はるか隔てたる
ここ城南の別天地
紅萌ゆる桃陰の
学びの園の露うけて
いそしむ我等若人の
胸は希望に充つる哉 | 2, 見よ剛健の校風を
聞け前進の足音を
白雲なびく生駒山
理想の空を仰ぎつつ
久遠の岸を目ざすとき
我等の意気の高き哉 | 3, ああ天高の若人よ
若き血汐に燃ゆる時
自由の翼拡げては
天地広しと誰かいう
いざ踏み出でん我が宇宙
いじや示さん我が校風 |
|--|---|--|

大阪府立天王寺高等学校校歌

Moderato *mf*

作曲 小野十三郎(中23回生)
作曲 湯前 純親(旧 職員)

オー モ エ バ ト オ シ ト ウ ー ー イ ン ノ ハ ー

ナ サ キ カ オ ル ソ ノ ヒ ヨ リ ア カ ル

ク ー ヒ ラ ー ク ブ ン カ ノ ソ ノ オ ト ワ

ニ カ ワ ラ ー ヌ コ コ ロ ノ フ ル サ ト ア オ ー

cresc. *ff*

ゲ ワ コ ウ ド ア ア テ ン ノ ウ ー ジ

1, おもえば遠し桃陰の

花咲きかおるその日より

明るくひらく文化の園生

とわにかわらぬ心のふるさと

仰げ若人 ああ 天王寺

2, あふれてやまぬ城南の

いずみの水はあめつちに

ひろがりしみる^{まこと}真実と慧智

不朽をほこるわれらが校風

讃えよ若人 ああ 天王寺

3, まゆをあぐればなかなぞらに

むらさきはゆる生駒山

希望は高く世界の風に

校旗はためくわれらがまなびや

謳え若人 ああ 天王寺

蹴球部々歌

作詞・作曲 八木林三

序曲 野に出でよ出でよ天中の我等

暁の星 仰ぎ見よ

弾みの球を強く抱き

天超ける術残されぬ

過去 未来 暗号の雲よ

嗚呼東の空に光あり

1 天中校庭に集ふ我等

高鳴る想ひ胸に秘め

スクラム組みぬ 笛鳴りぬ

瞬く間なく球何処

追へよ 走れよ

ZIG ZAG ZIG ZAG

嗚呼戦は始まりぬ

2 天中校庭に集ふ我等

夕闇のはひ寄るまゝに

転び転びついざトライ

ああ ゴールイン成し遂げぬ

歌へよ 歌へよ

歓喜 歓喜

嗚呼 勝利の旗はひらめきぬ

—桃陰昭和7年—

勝つは体力

勝つは体力気力のしるし

天中健児の気概を見よや

雄々しき理想のリズムの声に

起てよ 奮えよ 健男児!

応援歌

1 進め健児よ 若人よ

わが精鋭のゆくところ

剛健の波渦巻けり

走れ おお 突進め

無敵 無敵 その名ぞ天中

いざ 歌わん我等が闘志

2 奮え戦士よ 若人よ

天中魂のゆくところ

正義の旗は輝けり

ゆけ おお 突崩せ

無敵 無敵 その名ぞ天中

いざ 讃えん我等が勝利

戦勝の歌

1 花が散る散る 北野(天理)のお花がよ

天中健児の太刀風によ

2 星が飛ぶ飛ぶ 北野(天理)のお空によ

さめてはかなき夢の跡よ

3 鐘が鳴る鳴る 勝利の夕によ

燃ゆる血汐の空の色よ

4 月が照る照る 天中のお空によ

挙る凱歌に雲晴れてよ

復讐の歌

あゝ幾度かの敗戦に 断腸の年送りつつ

雌伏の秋を重ねしが 時は来れり復讐の

血汐に燃ゆる天中の 我が根底の意気見ずや

北野(天理)などか憂ふべき 起てよ一千天中の

健児一度奮起せば 西客旗を捲き返し

歓呼にどよむ桃陰の 十五の勇士の此のいさを

あ　と　が　き

阿部会長のお声がかかりで、本年史の完成を目ざして編集委員会を結成したのが昭和49年11月でした。以後、数回の検討を重ね昭和50年4月に会員の皆様に製作に必要なご協力をお願いしましたところ、多数の方々より原稿・写真など貴重な資料をご提供頂き、この様な形で50年史を作製することが出来ました。会員諸兄の絶大なるご協力に深く感謝致します。

しかし50年にわたる歴史を網羅することは容易ではなく、古い時代のもので、また戦災による焼失で不明の資料もあり、これらは委員がそれぞれに奔走して収集に努め、他に「全国高等学校ラグビーフットボール大会50回の歩み」や、北野・天理・山城（旧京三中）各高校のラグビー部史・毎日新聞等を参考にさせて頂きました。

編集委員としては総力を挙げて編さんに取り組んだつもりではありますが、万一記録あるいは写真の人名などの間違いや洩れがありました場合お許しを頂くと共に、ご指摘下さればありがたいと存じております。

本年史は阿部会長の命題で「桃陰ラグー半世紀の記」としました。

文字通り半世紀にわたる桃陰ラグーの歴史と伝統を語り継ぐことが、わが母校天王寺（中）高校ラグビー部の今後の発展の一助ともなり、将来70年、100年史の編さん時には更に光輝ある歴史が書き加えられることを祈念してやみません。

昭和51年8月1日

編　集　委　員

編集委員長 村田 保男（中・42）

編集委員

阿部 幸作（中・25）	川口 治雄（高・8）
杉本 彰（中・28）	松岡 賢治（高・9）
奥田 致一（中・31）	田中 宏二（高・10）
正野 虎雄（中・33）	松下 忠男（高・11）
大橋 甫清（中・37）	伊藤 和夫（高・12）
高井 正一（中・38）	松井淳太郎（高・13）
鹿子木 聡（中・41）	水上 義久（高・14）
柴垣 志郎（中・42）	佐々木慎太郎（高・15）
浅岡 隆（中・45）	田中 淳之（高・16）
伊藤 康夫（中・45）	堺 徹夫（高・17）
宇野 憲治（中・46）	矢野 嘉庸（高・18）
八鳥 千年（中・49）	吉村 公男（高・19）
村田 収（高・1）	辻野 雅三（高・20）
片上 逸磨（高・2）	植松 直道（高・21）
岡田 力（高・3）	吉川 史彦（高・22）
永田 親吾（高・4）	柴垣元太郎（高・23）
真鍋 正稔（高・5）	寺島 優（高・24）
松村 竜雄（高・6）	丸橋 広之（高・25）
福本 幸弘（高・7）	三輪 英一（高・26）
田中 啓一（高・7）	

桃陰ラガー半世紀の記

昭和51年8月1日発行

発行人／桃陰ラガークラブ

会長・阿部幸作

発行所／桃陰ラガー半世紀の記編集委員会

大阪市東住吉区山坂町 1 丁目63（伊藤医院内）

印刷所／大阪市東成区玉津 3 丁目12番32号

大日本印刷株式会社

